

： 令和6年度地域観光資源の多言語解説整備支援事業 実施地域一覧

観光		
地域番号	都道府県	地域協議会名
024	北海道	一般社団法人大雪カムイミンタラDMO
025	宮城県	登米市
026	福島県	二本松市
027	新潟県	村上市訪日外国人等受入協議会
028	群馬県	沼田市
029	愛知県	蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会
030	滋賀県	草津市地域観光資源多言語整備協議会
031	滋賀県	滋賀県甲賀市
032	滋賀県	東近江大風保存会
033	京都府	和束町地域力推進協議会
034	兵庫県	北野異人館協会
035	和歌山県	有田川町
036	岡山県	井原線沿線観光連盟
037	熊本県	錦町多言語解説協議会
038	鹿児島県	指宿市観光・経済戦略会議

地域番号	024	協議会名	一般社団法人大雪カムイミタラDMO	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
024_001	旭川市博物館/【1階展示室】 アイヌという人々		1～250w	アプリ・QRコード
024_002	旭川市博物館/【1階展示室】 イワクテ		1～250w	アプリ・QRコード
024_003	旭川市博物館/【1階展示室】 アイヌのサケ漁		1～250w	アプリ・QRコード
024_004	旭川市博物館/【1階展示室】 アイヌの鍛冶屋		1～250w	アプリ・QRコード
024_005	旭川市博物館/【1階展示室】 竪穴住居 (13世紀頃まで使われた住居)		1～250w	アプリ・QRコード
024_006	旭川市博物館/【1階展示室】 アイヌの農耕		1～250w	アプリ・QRコード
024_007	旭川市博物館/【1階展示室】アイヌの口承文 芸		1～250w	アプリ・QRコード
024_008	旭川市博物館/【1階展示室】 交易の民・アイヌ アイヌのグローバルネットワーク 拡大するアイヌの活動圏 アイヌの交易拠点から和人の交易拠点へ		1～250w	アプリ・QRコード
024_009	旭川市博物館/【1階展示室】 元(中国の王朝)の軍隊と戦うアイヌ		1～250w	アプリ・QRコード
024_010	旭川市博物館/【1階展示室】 アイヌのリーダー像		1～250w	アプリ・QRコード
024_011	旭川市博物館/【1階展示室】 屯田兵屋		1～250w	アプリ・QRコード
024_012	旭川市博物館/【1階展示室】北方民族資料		251-500w	アプリ・QRコード
024_013	旭川市博物館/【1階展示室】知里幸恵コー ナー		1～250w	アプリ・QRコード
024_014	旭川市博物館/【1階展示室】現代に生きるア イヌ文化		1～250w	アプリ・QRコード
024_015	旭川市博物館/【地下展示室】先土器時代の くらし		1～250w	アプリ・QRコード

024_016	旭川市博物館/ 【地下展示室】縄文時代・続縄文時代のくらし	1～250w	アプリ・QRコード
024_017	旭川市博物館/【地下展示室】擦文時代のくらし	1～250w	アプリ・QRコード
024_018	旭川市博物館/【地下展示室】上川アイヌのあゆみ	1～250w	アプリ・QRコード
024_019	旭川市博物館/【地下展示室】ペニウクルのくらし	1～250w	アプリ・QRコード
024_020	旭川市博物館/【地下展示室】コタンのまつり	1～250w	アプリ・QRコード
024_021	旭川市博物館/【地下展示室】石狩場所とペニウクル	1～250w	アプリ・QRコード
024_022	旭川市博物館/【地下展示室】近文給与予定地	1～250w	アプリ・QRコード
024_023	旭川市博物館/【地下展示室】 開拓期のくらし 1 開村 開拓期のくらし 2 入植	1～250w	アプリ・QRコード
024_024	旭川市博物館/【地下展示室】発展期のくらし 今日のくらし	1～250w	アプリ・QRコード
024_025	旭川市博物館/【地下展示室】大雪山の自然	1～250w	アプリ・QRコード
024_026	旭川市博物館/【地下展示室】旭川の冬	1～250w	アプリ・QRコード
024_027	旭川市博物館/【地下展示室】上川盆地の地底を探る	1～250w	アプリ・QRコード
024_028	アイヌ文化の森「伝承のコタン」（旭川市博物館分館）/【屋外展示】植物とアイヌ民族	501-750w	アプリ・QRコード
024_029	川村カ子トアイヌ記念館/アイヌの工芸	1～250w	アプリ・QRコード
024_030	川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・藤戸竹喜と作品	1～250w	アプリ・QRコード
024_031	川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・藤戸幸夫と作品	1～250w	アプリ・QRコード
024_032	川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・砂澤ビッキと作品	1～250w	アプリ・QRコード
024_033	川村カ子トアイヌ記念館/木彫熊 その歴史	1～250w	アプリ・QRコード
024_034	川村カ子トアイヌ記念館/ 川村家について（イタキシロマ、カネトウアイヌ、シンリツ・エオリパク・アイヌ）	251-500w	アプリ・QRコード
024_035	川村カ子トアイヌ記念館/先祖供養	1～250w	アプリ・QRコード
024_036	川村カ子トアイヌ記念館/カムイ	1～250w	アプリ・QRコード

024_037	川村カ子トアイヌ記念館/チセ	1～250w	アプリ・QRコード
024_038	川村カ子トアイヌ記念館/アイヌと植物	1～250w	アプリ・QRコード
024_039	川村カ子トアイヌ記念館/入墨	1～250w	アプリ・QRコード
024_040	川村カ子トアイヌ記念館/トーテムポール	1～250w	アプリ・QRコード
024_041	川村カ子トアイヌ記念館/北海道の歴史古代～近世	1～250w	アプリ・QRコード
024_042	川村カ子トアイヌ記念館/北海道の歴史近現代史	1～250w	アプリ・QRコード
024_043	川村カ子トアイヌ記念館/アイヌと星	1～250w	アプリ・QRコード
024_044	川村カ子トアイヌ記念館/イクパスイ	1～250w	アプリ・QRコード
024_045	川村カ子トアイヌ記念館/ 人物の紹介（荒井源次郎，門野家の人々）	1～250w	アプリ・QRコード
024_046	川村カ子トアイヌ記念館/アイヌの物語	1～250w	アプリ・QRコード

024-001

Ainu

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】

アイヌという人々

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu

Ainu are an Indigenous people whose ancestral homeland includes Hokkaido and northern Honshu on the Japanese archipelago, as well as southern Sakhalin and the Kuril Islands. Traditionally, Ainu lived by hunting, gathering, and fishing. They also grew millet and other hardy grains to supplement their diet. From Hokkaido, they traded with Japan's main island, Honshu, the lower Amur River basin, and further north to areas around the Sea of Okhotsk.

The Ainu worldview is shaped by their close relationship with and dependence on nature. They believe that living creatures, natural elements, and even human-made objects are inhabited by spirit-deities, known as *kamuy*. These *kamuy* are revered and considered active participants in daily life, bestowing blessings such as meat and furs but also causing natural disasters.

In the early twentieth century, the government enacted policies to assimilate Ainu into Japanese society. People were given Japanese names, denied access to traditional hunting and fishing grounds, and discouraged from using their own language. Despite this, Ainu history, beliefs, and cultural identity survived through crafts, rituals, and a rich oral tradition of stories and epics.

From the late nineteenth century, the Ainu lifestyle changed significantly as Hokkaido became increasingly settled by Wajin (ethnic Japanese). Traditional Ainu practices such as hunting and fishing were restricted and Ainu children were educated only in Japanese. Despite this, Ainu history, beliefs, and cultural identity survived through crafts, rituals, and a rich oral tradition of stories and epics. Today, Ainu heritage is

being preserved and revitalized through education, contemporary art, music, ceremonies, and cultural exchanges with Indigenous peoples around the world.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌ

アイヌは、先住民族で、その伝統的な居住地には日本列島の北海道と本州北部、そして南樺太（サハリン）と千島列島が含まれます。伝統的にアイヌは狩猟、採集および漁獲により生活し、食生活を補うために粟などの耐寒性の穀物を栽培していました。彼らは北海道から日本の本州、アムール川下流域や更に北のオホーツク海周辺地域との交易を行っていました。

アイヌの世界観は、自然との密接な関係性と自然への依存によって形作られています。アイヌは、生き物や自然の要素、さらには人工物にも「カムイ」として知られる精霊神が宿っていると信じています。これらのカムイは崇拝の対象であり日常生活における積極的な参加者とみなされており、肉や毛皮などの恵みをもたらす一方で、自然災害ももたらすと考えられています。

20世紀初頭、政府はアイヌを日本社会に同化させるための政策を制定しました。人々は日本名を与えられ、伝統的な狩猟や漁場への立ち入りを禁じられ、母語の使用も制限されました。しかし、アイヌの歴史、信仰、文化的アイデンティティは、工芸品、儀式、物語や叙事詩の豊かな口承伝統を通じて生き延びてきました。

19世紀後半から、北海道に和人（民族的日本人）の入植が増加するにつれて、アイヌの生活様式は大きく変化しました。狩猟や漁労などの伝統的なアイヌの慣行は制限され、アイヌの子どもたちは日本語だけで教育されるようになりました。それにもかかわらず、アイヌの歴史、信仰、文化的アイデンティティは、工芸品、儀式、そして物語や叙事詩の豊かな口承伝統を通じて生き残りました。今日、アイヌの遺産は、教育、現代美術、音楽、儀式、そして世界中の先住民族との文化交流を通じて保存され、再活性化されています。

【タイトル】旭川市博物館/【1 階展示室】

イワクテ

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

***Iwakte* and the Worldview of the Ainu**

Central to the Ainu worldview is a reverence for *kamuy*, spirit-deities who are believed to take on various forms in the human realm. *Kamuy* may appear as animals, plants, mountains, elements, such as fire and water, and even human-made implements. In these forms, *kamuy* offer humans gifts such as furs, meat, and more.

Ceremonies and rituals called *iwakte* (sending back) are held to return *kamuy* to their realm and thank them for their gifts. Appreciation is expressed through prayers and with offerings such as dried salmon, alcohol, and *inaw* (prayer sticks made from shaved wood).

A collection of animal bones, ceremonial arrows, lacquer bowls, and a child's toy were discovered on Mt. Arashiyama, Asahikawa, in 1968. They are believed to have been the objects of Ainu *iwakte* ceremonies held in the twentieth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

イワクテと、アイヌの世界観

アイヌの世界観の中心には、人間界でさまざまな形をとると信じられているカムイ（精霊神）への崇敬があります。カムイは、動物、植物、山、火や水などの自然の要素、さらには人工物としても現れます。これらの形を通じて、カムイは人々に毛皮や狩りの獲物などの贈り物を与えます。

カムイを自らの世界に送り返し、その贈り物に感謝を示すため、イワクテ（送り返し）と呼ばれる儀式や祭礼が執り行われます。感謝は、干し鮭や酒、およびイナウ（祈禱の木幣—木材を削って作

られる) などの供物とともに、祈祷を通じて表現されます。

1968年、旭川の嵐山で、動物の骨、儀式用の矢、漆椀、子供の玩具が発見されました。これらは20世紀に行われたイワクテ儀式の品々であると考えられています。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】

アイヌのサケ漁

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Salmon and Subsistence

Salmon was an important food source and a valuable commodity for Ainu. Before the nineteenth century, a single Ainu household was estimated to catch between 300 and 1,000 salmon every year. Ainu in the Kamikawa Basin around Asahikawa used weirs, nets, and hooked spears to catch cherry salmon and chum salmon as the fish migrated upstream from Ishikari Bay each autumn. A large portion of the catch was preserved for trade and to ensure a steady food supply through the long Hokkaido winters.

Traditional preservation methods included air drying, smoking, and freezing. Records from the fifteenth century list preserved salmon (*satcep*) as one of the three main trade commodities from Ezo (present-day Hokkaido), alongside herring and kelp. As trade with Wajin (ethnic Japanese) on Honshu increased during the Edo period (1603–1867), salmon was also salted for shipping.

Around the mid-seventeenth century, Wajin merchants set up commercial fishing operations in Ishikari Bay to meet the growing demand for marine products in Honshu, and Ainu were forced to work at the fisheries. In the late 1860s, as the Meiji government set up initiatives to develop Hokkaido, salmon exports increased, and Japan's first cannery was established on the Ishikari River in 1877.

By the 1960s, salmon had virtually disappeared from the Ishikari River due to overfishing, water pollution, and land development. Efforts such as restocking the waterways and installing fish ladders have had a positive impact, and salmon are slowly returning to the river.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

サケと生活手段

サケはアイヌにとって重要な食料源であり、貴重な交易品でした。19世紀以前、一つのアイヌの世帯は年間300から1,000匹のサケを捕獲していたと推定されています。旭川周辺の上川地域のアイヌは、毎年秋に石狩湾から遡上してくるサクラマス、カラフトマス、シロザケを、やなや網、鉈を使って捕獲していました。漁獲の大部分は、交易のために保存され、また長い北海道の長い冬の間の安定した食料供給を確実なものとしていました。

伝統的な保存方法には、風乾、燻製、凍結がありました。15世紀の記録には、蝦夷（現在の北海道）からの主要な交易品として、ニシンと昆布とともに、保存されたサケ（サツェブ）が挙げられています。江戸時代（1603-1867）に本州の和人（民族的日本人）との交易が増加するにつれ、サケは輸送用に塩漬けされるようにもなりました。

17世紀半ば頃、本州の和人商人たちは本州における海産物の需要の高まりに応えるため、石狩湾に商業漁業施設を設立しました。そしてアイヌは漁場での労働を強いられました。1860年代後半、明治政府が北海道の開発に着手すると、サケの輸出が増加し、1877年には石狩川に日本初の缶詰工場が設立されました。

1960年代までに、乱獲、河川の汚染、および開発の結果、石狩川からサケはほぼ姿を消していました。河川への稚魚の放流や魚道の設置といった取り組みは好影響を及ぼし、サケは徐々に川に戻りつつあります。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】

アイヌの鍛冶屋

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Blacksmithing in Ainu Communities

Iron was a valuable commodity for Ainu, essential for crafting tools and utensils such as knives, fishhooks, spearheads, sewing needles, and cooking pots. Since they did not know how to make iron, they acquired iron and iron tools through trade with Japan's main island of Honshu, typically in exchange for items like preserved salmon, furs, and Chinese silk.

Evidence of a temporary blacksmith's workshop was found at the site of a Satsumon period settlement in Asahikawa, suggesting that there were blacksmiths who traveled around the area to repair iron products.

From the fifteenth century, Wajin (ethnic Japanese) blacksmiths established forges around Hokkaido. Some traveled to Ainu villages, offering their services in exchange for commodities, such as gold and bear-derived medicines. They set up temporary workshops that relied on hand bellows and portable tools to forge new wares, repair old ones, and sharpen blades. During the Edo period (1603–1867), goods made from iron were increasingly imported from Japan, leading to the decline of blacksmithing practices within Ainu communities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌコミュニティにおける鍛冶

鉄はアイヌにとって貴重な資源であり、ナイフ、釣り針、槍先、縫い針、調理鍋などの道具や用具を作るために不可欠でした。彼らは鉄の製造方法を知らなかったため、保存されたサケ、毛皮、中国の絹などのアイテムと交換に、日本の本州との交易を通じて鉄や鉄製の道具を入手していました。

旭川の擦文時代の集落跡で、一時的な鍛冶工房の痕跡が発見されました。これは、その地域を巡回して鉄製品の修理を行う鍛冶職人が存在していたことを示唆しています。

15世紀以降、和人（民族的日本人）の鍛冶職人たちは北海道各地に鍛冶場を構えました。中には金や熊由来の薬と引き換えに技術を提供し、アイヌの村々を巡る者もありました。彼らは仮設の工房を設け、手押し鞆と携帯工具に依存しながら新しい道具の鍛造、古い道具の修理、刃物の研ぎを行いました。江戸時代（1603-1867）には、日本からの鉄製品の輸入が大幅に増加し、アイヌコミュニティ内での鍛冶の実践は衰退していきました。

024-005

Ainu Homes—From Pit Dwellings to *Cise*

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 旭川市博物館/【1階展示室】竪穴住居
（13世紀頃まで使われた住居）
【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Homes—From Pit Dwellings to *Cise*

Ainu lived in pit dwellings until around the thirteenth century, when they started building houses (*cise*). Pit dwellings were dark, with the entrance as the only light source, but were well-insulated against the cold. These homes were typically square or rectangular, and dug about one meter deep. Support poles held up a thatched roof that rose several meters in the center and sloped to the ground. Inside, a central hearth provided warmth, a cooking space, and a place for smoking food.

The air inside the pit dwellings was smoky and humid, and the gradual transition to houses (*cise*) is believed to have been motivated by a desire for better living conditions. The *cise* were similar to houses on Honshu (Japan's main island), with the addition of a central hearth for warmth. Some Ainu in colder areas, such as Sakhalin, maintained pit dwellings for winter, then moved to *cise* near their fishing grounds in the warmer months.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの住居—竪穴住居からチセへ

アイヌは、彼らが住居（チセ）を建て始めた13世紀頃まで竪穴住居に住んでいました。竪穴住居は、入り口からしか光が入らず暗いものでしたが、寒さに対する断熱性に優れていました。これらの住居は通常、正方形か長方形で、深さが1メートルほど掘り下げられていました。支柱が中央部で数メートルの高さまで立ち上がり、地面まで傾斜する茅葺き屋根を支えていました。内部には中央に炉があり、暖房や調理のスペース、そして食品を燻製にする場所として使われていました。

竪穴式住居の中の空気は煙が充満しており高湿度でした。より良い居住条件を求めることが、住

居（チセ）への移行の動機になったと考えられています。チセは本州（日本の本島）の家に似ており、暖房用の中央炉が加えられていました。樺太（サハリン）などの寒冷地のアイヌの中には、冬は竪穴住居を使用し、暖かい季節には漁場近くのチセに移動する人々もいました。

【タイトル】 旭川市博物館/【1 階展示室】

アイヌの農耕

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Agriculture in Ainu Communities

Ainu life traditionally centered on hunting, fishing, and foraging, but people also cultivated crops. The climate was unsuitable for rice cultivation, so Ainu focused on hardy grains such as millet.

Each household typically maintained a small plot of land where women performed most of the farming tasks, from sowing seeds in the spring to harvesting in the fall. In addition to iron tools, they used sharpened shells as blades to harvest grain. The staple crop was millet, a cold-resistant cereal with a short growing season. Ainu families also cultivated beans and turnips, and foraged for berries and lily bulbs, which are a rich source of starch.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌコミュニティにおける農業

アイヌの生活は伝統的に狩猟、漁労、および狩猟採集を中心としていましたが、作物の栽培も行っていました。気候が稲作に適していなかったため、アイヌはヒエなどの硬い穀物を中心に栽培していました。

各世帯は通常、小さな耕作地を持ち、女性たちが春の種まきから秋の収穫まで、大半の農作業を担っていました。鉄製の道具に加え、貝殻を研いで作った刃を使って穀物の穂を刈り取っていました。主要作物は、耐寒性があり生育期間の短い粟でした。アイヌの家族は豆類、カブも栽培し、またベリー類やでんぷん質が豊富なユリ根なども採集していました。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】アイヌの口承文芸

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Oral Tradition

Ainu history, stories, and customs were passed down orally through songs and recited stories. These stories fall into three broad categories: heroic epics, mythic epics, and prose tales.

Heroic epics involving daring protagonists in dramatic situations are called *yukar*, although other names exist in different regions of Hokkaido. Performers sing these tales to their own melody and use wooden sticks for percussive emphasis. These epics can last up to several hours.

Mythic epics, known as *kamuyyukar* or *oyna*, are often told from the perspective of a *kamuy*, or spirit-deity. These stories are sung to a repetitive melody and feature refrains with onomatopoeic sounds. They can last from a few minutes to over an hour.

Everyday prose tales called *uepeker* or *tuytak* are recited in a diction similar to that of everyday conversation. Some are moral tales that center around human characters and their connection to *kamuy*.

From the late nineteenth to early twentieth century, Ainu were encouraged to learn Japanese, and education in schools was conducted exclusively in Japanese. As a result, the Ainu language became less-spoken at home, and the practice of Ainu storytelling diminished. Around the 1970s, a resurgence of interest in the Ainu language led to initiatives to revive and preserve these stories. The Ainu language was listed as an endangered language by UNESCO in 2009.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの口承伝統

アイヌの歴史、物語および習慣は歌や語り継がれる物語を通じて口承で伝えられました。これらの物語は大きく3つのカテゴリーに分類されます：英雄叙事詩、神話叙事詩、散文説話です。

勇敢な主人公が劇的な状況で活躍する英雄叙事詩は「ユカラ」と呼ばれますが、北海道の地域によって他の呼び名も存在します。演者はそれぞれの旋律で物語を歌い、木製の棒で打楽器的な強調を加えます。これらの叙事詩は数時間に及ぶこともあります。

神話叙事詩は「カムイユカラ」または「オイナ」として知られ、しばしばカムイ（精霊神）の視点から語られます。これらの物語は繰り返しの旋律で歌われ、擬音語を含むリフレインが特徴です。これらは数分から1時間以上続くこともあります。

「ウエペケレ」や「トゥイタク」と呼ばれる日常の散文説話は、日常会話に近い口調で語られます。その中には人間の登場人物とカムイとの関わりを中心とした教訓話もあります。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アイヌの人々は日本語を学ぶよう奨励され、学校での教育は日本語だけで行われるようになりました。その結果、家庭でアイヌ語が話される機会が減少し、アイヌの物語を語る習慣も衰退しました。1970年代頃、アイヌ語への関心が再び高まり、これらの物語を復活させ保存するための取り組みが始まりました。アイヌ語は2009年にユネスコによって危機言語に指定されました。

024-008

Ainu Trade Networks

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】交易の民・アイヌ

アイヌのグローバルネットワーク

拡大するアイヌの活動圏

アイヌの交易拠点から和人の交易拠点へ

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Trade Networks

Ainu established trade networks that extended south to northern Honshu and north to the Sea of Okhotsk. From around the thirteenth century, Ainu from Hokkaido moved into southern Sakhalin and the Kuril Islands for trade. They traded with communities along the lower Amur River to the west and on the Kamchatka Peninsula to the northeast, exchanging sable furs and items such as lacquerware and iron from Wajin (ethnic Japanese) merchants for silk, glass beads, and other goods.

In the fourteenth and fifteenth centuries, Wajin from Honshu set up their own trade settlements along the coast of southern Hokkaido. The Matsumae, a prominent family that governed much of Ezo (Hokkaido) during the Edo period (1603–1867), were given control over trade with Ainu and set up formal trading posts. These trading posts served as hubs for the exchange of goods such as preserved salmon, furs, and bear-derived medicines. The Matsumae's trading monopoly gradually shifted the balance of power, and Ainu became increasingly marginalized.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの交易ネットワーク

アイヌは北は北海道から南は本州北部にまで及ぶ交易ネットワークを確立しました。13世紀頃から、北海道のアイヌは交易のために樺太（サハリン）南部と千島列島へ移動しました。彼らは西の方

向にはアムール川下流域の共同体と、北東の方向にはカムチャツカ半島との交易を行い、クロテンの毛皮や和人（民族的日本人）の商人から得た漆器や鉄などの品物を、絹、ガラス玉、その他の商品と交換していました。

14世紀から15世紀にかけて、本州からの和人が北海道南部の沿岸部に独自の交易拠点を設立しました。江戸時代（1603-1867）には、蝦夷（現在の北海道）の多くの地域を統治した松前藩が正式な交易所を設置し、アイヌとの交易を管理するようになりました。これらの交易所は、保存されたサケ、毛皮、熊由来の薬などの物資の交換の拠点となりました。松前藩の交易独占は徐々に力関係を変化させ、アイヌは次第に周縁化されていきました。

024-009

Trade Wars and Territories: The Ainu-Mongol Conflict

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 旭川市博物館/【1階展示室】

元（中国の王朝）の軍隊と戦うアイヌ

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Trade Wars and Territories: The Ainu-Mongol Conflict

In the mid-thirteenth century, Ainu in Sakhalin were involved in a prolonged conflict with the Mongol-led Yuan dynasty. This struggle, which lasted nearly forty years, was the result of the growing influence of both Ainu and Mongols in the region.

Ainu from Hokkaido began migrating to Sakhalin and other areas around the Sea of Okhotsk from around the thirteenth century, gradually expanding their sphere of influence. Their trade network stretched from the lower reaches of the Amur River, along what is now the border between Russia and China, up to the Kamchatka Peninsula, over 1,000 kilometers northeast of Hokkaido.

As Ainu advanced into Sakhalin, tensions arose with the Indigenous Nivkh people over territory. This prompted Nivkh leaders to seek assistance from the Yuan dynasty, which was actively expanding its own influence over the lower Amur region and Sakhalin.

In 1264, the Yuan dynasty dispatched an armed force to support the Nivkh and fought a series of intermittent battles with Ainu groups over the next four decades. Ainu forces proved to be resilient, managing to launch multiple counterattacks on the Eurasian continent, but were eventually forced to surrender in 1308. As part of the peace agreement, Ainu in Sakhalin paid an annual tribute to the Yuan dynasty of valuable furs and pelts. Relations between Ainu and Nivkh groups shifted from adversaries to trade partners.

交易戦争と領土：アイヌ・モンゴル間の衝突

13世紀半ば、樺太（サハリン）のアイヌ諸集団は、モンゴルが率いる元朝との長期に及ぶ衝突に巻き込まれました。約40年間続いたこの抗争は、この地域におけるアイヌとモンゴル双方の影響力の拡大をもたらした結果でした。

13世紀頃から、北海道のアイヌは樺太（サハリン）やオホーツク海周辺地域に移住を始め、徐々に影響圏を拡大していきました。彼らの交易ネットワークは、現在のロシアと中国の国境に沿ったアムール川下流域から、北海道の北東1,000キロメートル以上離れたカムチャツカ半島にまで及んでいました。

アイヌがサハリンへと進出するにつれて、領土をめぐる先住民ニヴフ族との間に緊張が生じました。これによりニヴフの指導者たちは、当時アムール川下流域やサハリンへの影響力を積極的に拡大していた元王朝に支援を求めるようになりました。

1264年、元朝はニヴフを支援するために武装兵を派遣し、その後40年にわたってアイヌ集団との間で断続的な戦闘を繰り広げました。アイヌ軍は強靭さを示し、ユーラシア大陸への複数回の反撃を行うことに成功しましたが、最終的に1308年に降伏を余儀なくされました。和平協定の一環として、樺太のアイヌは貴重な毛皮を年貢として元朝に納めることになりました。アイヌとニヴフの関係は、敵対関係から交易相手へと変化していきました。

024-010

Figure of an Ainu Leader

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 旭川市博物館/【1 階展示室】

アイヌのリーダー像

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Figure of an Ainu Leader

A life-size figure of an Ainu leader wears a Russian military greatcoat over a Chinese silk Ezo-nishiki robe and carries a Japanese sword. The attire highlights the trade ties between Ainu and the Japanese, as well as the Russian Empire and Chinese dynasties.

The figure is based on a portrait of Ainu leader Tsukinoe (dates unknown) by the artist Kakizaki Hakyō (1764–1826), a member of the Matsumae, a prominent family that governed much of Ezo (present-day Hokkaido) during the Edo period (1603–1867). Kakizaki painted portraits of 12 Ainu leaders who intervened to stop the Menashi-Kunashir rebellion of 1789, which had already led to the deaths of over 70 traders and settlers from mainland Japan.

Under Matsumae rule, many Ainu were forced to work in Japanese-run commercial fisheries and were no longer allowed to trade freely. The northeastern part of Hokkaido around the Nemuro Strait was one of the last areas to come under Matsumae control, and the Ainu there rebelled against their oppression. It was the last large-scale revolt against Japanese authority, and 37 Ainu were sentenced to death for their part in the uprising.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの指導者の像

アイヌの指導者の等身大の像は、蝦夷錦（中国製の絹衣）の上にロシアの軍用外套を着用し、日本刀を携えています。この装いは、アイヌと日本人、ロシア帝国、中国王朝との交易関係を明瞭に示しています。

この像は、江戸時代（1603-1867）に蝦夷（現在の北海道）の大部分を統治していた著名な松前藩の一員である芸術家、蠣崎波響（1764-1826）によって描かれたアイヌの指導者ツキノエ（生没年不詳）の肖像画に基づいています。蠣崎は1789年のクナシリ・メナシの戦いを止めるために介入した12人のアイヌの指導者の肖像画を描きました。この戦いでは、本州からの商人や入植者70人以上がすでに命を落としていました。

松前藩の支配下で、多くのアイヌは日本人が営む商業漁業での労働を強いられ、もはや自由に交易をすることが許されませんでした。根室海峡周辺の北海道北東部は、松前藩の支配が及んだ最後の地域の一つで、そのアイヌは抑圧に対して反乱を起こしました。これは日本の権威に対する最後の大規模な反乱となり、37人のアイヌが蜂起への関与により死罪を宣告されました。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】
屯田兵屋
【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Tondenhei Settlers in Hokkaido

Farmer-soldiers known as *tondenhei* played an important role in the Wajin (ethnic Japanese) settlement of Hokkaido during the Meiji period (1868–1912). Disputes and tensions with the Russian Empire compelled the Meiji government to secure Japan's northern territories in the late nineteenth century. The *tondenhei* program was launched in 1874, and the role of these farmer-soldiers was to protect Japan's northern border and promote the development of Hokkaido.

The majority of *tondenhei* were samurai who had lost their livelihoods following social reforms implemented by the government in the early 1870s. At first, the program was open exclusively to former samurai. It included housing and land grants, tax exemptions, and other incentives provided by the government. In Asahikawa, each *tondenhei* household was given around 5 hectares (12 acres) of land to cultivate.

In exchange, the *tondenhei* were contracted to a total of 20 years of active and reserve military service. The soldiers performed military exercises and helped clear the land and build roads. In the temperate months they also worked on their farms with their families.

From 1890, eligibility restrictions were lifted, opening the program to applicants of any background. The majority of those who moved to Asahikawa were farmers. They grew crops suited to the cold climate, such as beans, wheat, and potatoes. Soon after settling in Asahikawa, they attempted to cultivate rice, a crop that generally grows in hot, humid regions. After 10 years of developing rice paddies and trial production, rice

farming eventually became established. Between 1874 and 1904, when the program ended, some 40,000 settlers arrived in Hokkaido as *tondenhei*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北海道の屯田兵

屯田兵として知られる農民兵士たちは、明治時代における和人（民族的日本人）の北海道開拓において重要な役割を果たしました。ロシア帝国との紛争や緊張関係により、明治政府は19世紀後半に日本の北方領土を確保する必要に迫られました。屯田兵制度は1874年に始まり、これらの農民兵の役割は日本の北方国境を守ることであり、北海道の発展を促進することでした。

屯田兵の大多数は、1870年代初めに政府が実施した社会改革によって生計手段を失った武士でした。最初、このプログラムは元武士だけに開放されていました。政府から住居や土地の供与、税金免除、その他の優遇措置が提供されていました。旭川では、各屯田兵の世帯に約5ヘクタール（12エーカー）の耕作地が与えられました。

その代わりに、屯田兵は現役と予備役を合わせて20年間の兵役を契約しました。兵士たちは軍事演習を行い、整地や道路建設を手伝いました。暖かい季節には彼らは家族とともに農業にも従事しました。

1890年から、適格性の制限が解除され、プログラムはあらゆる背景を持つ応募者に開放されました。旭川に移住した人々の大多数は農民でした。彼らは豆類、小麦、ジャガイモなど、寒冷地に適した作物を栽培しました。旭川に定住してすぐ、彼らは一般的に暑く湿度の高い地域で育つ作物である米の栽培を試みました。水田開発と試験的生産の10年後、稲作は最終的に定着しました。1874年からこのプログラムが終了した1904年の間に、約4万人の入植者が屯田兵として北海道にやって来ました。

【タイトル】 旭川市博物館/【1階展示室】北方民族資料

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu and the Northern Peoples

Indigenous peoples around the Sea of Okhotsk have engaged in trade and cultural exchange for many centuries. This has resulted in distinct similarities in their clothing, tools, and crafts. Ainu traded with several groups, including Nivkh of northern Sakhalin and the lower Amur River, Uilta of northern Sakhalin, and Ulch of the Amur River.

The traditional clothing of these northern peoples shared common designs suited to the arctic climate and their lifestyles. Boots and tunics made of seal skin and deer hide kept them warm, while salmon skin, with its flexible and watertight properties, made for effective rainwear in milder seasons. These garments featured decorative cuffs and hems. The spiral, thorn, and geometric patterns on the cuffs and hems of Ainu clothing resemble those on clothes worn by peoples in the Amur River basin and the Sakhalin regions.

Accessories, made of materials from across the Eurasian continent, provide further evidence of trade. Ainu exchanged animal pelts and hawk feathers for glass beads from China, Russia, and Central Asia, as well as large metal medallions from Honshu, the main island of Japan. These items were made into necklaces worn by Ainu women during ceremonies. Similar medallions have been found at sites of Nanai, an ethnic group living around the Amur River basin.

The northern peoples had similar musical traditions. The *tonkori*, a five-stringed zither used by Sakhalin Ainu, is similar to the Nivkh *tunkuroon*. The Ainu *mukkur*, a mouth harp made of bamboo, resembles metal versions from Sakhalin, Siberia, and Europe.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌと北方民族

オホーツク海周辺の先住民族は何世紀にもわたって交易と文化交流を行ってきました。その結果、彼らの衣服、道具、工芸品には明確な類似性が見られます。アイヌは北サハリンと下アムール川のニヴフ族、北サハリンのウイльта族、アムール川のウルチ族など、複数の民族と交易を行っていました。

これらの北方民族の伝統的な衣服は、北極圏の気候と彼らの生活様式に適した共通のデザインを持っていました。アザラシの皮や鹿革で作られた長靴や上着は保温性に優れ、柔軟で防水性のある鮭の皮は暖かい季節の雨具として効果的なものでした。これらの衣服は袖口と裾に装飾が施されていました。アイヌの衣服の袖口と裾に見られる渦巻き模様、棘模様、幾何学模様は、アムール川流域やサハリン地域の民族の衣服に見られる模様と類似していました。

服飾品は、ユーラシア大陸各地の素材で作られており、交易のさらなる証拠となっています。アイヌは獣皮や鷹の羽を、中国、ロシア、中央アジアのガラス玉や、中国や日本の本州の大きな金属製メダリオンと交換していました。これらは儀式の際にアイヌの女性が身につけるネックレスに加工されました。同様のメダリオンは、アムール川流域に住む少数民族ナナイの遺跡からも発見されています。

北方民族は類似した音楽の伝統を持っていました。樺太アイヌと北海道アイヌが使用する5弦の琴である「トンコリ」は、ニヴフの「トゥンクルーン」に似ています。竹で作られたアイヌのムックリ（口琴）は、サハリン、シベリア、ヨーロッパの金属製の口琴に似ています。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】知里幸恵コーナー

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Chiri Yukie

Chiri Yukie (1903–1922) was an author and translator who significantly contributed to the preservation of Ainu culture by transcribing and translating oral epics called *kamuyyukar*. Her compilation of 13 such epics, translated into Japanese, was the first book published by a person of Ainu heritage in the Ainu language.

Chiri was born in Noboribetsu, southwestern Hokkaido, in an era when discriminatory policies compelled Ainu to assimilate into Japanese culture. At the age of six, she moved to Asahikawa to live with her aunt Imekanu (1875–1961) and grandmother Monashinouku (dates unknown), both of whom were well-versed in reciting *kamuyyukar*. In this environment, she grew up bilingual in Japanese and Ainu.

In 1918, Chiri met Kindaichi Kyosuke (1882–1971), a Japanese linguist who encouraged her to write about her language and culture. Chiri recorded the various *kamuyyukar* chanted by her grandmother and aunt. These epics were told in the first person, from the point of view of various *kamuy* (spirit-deities) appearing in the forms of animals, from wolves and owls to frogs and even shellfish. Chiri transcribed the stories phonetically using Latin script and then translated them into Japanese.

After completing the first anthology of *kamuyyukar*, Chiri died of heart failure at age nineteen. Her manuscript was published the following year under the title *Ainu shin'yoshu* (Collection of Ainu Chants of Spiritual Beings). Chiri's work inspired a newfound respect for the Ainu language and culture among Japanese readers. *Ainu shin'yoshu* remains an invaluable resource for scholars of Ainu culture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

知里幸恵

知里幸恵（1903-1922）は、カムイユーカラと呼ばれる口承伝統叙事詩を書き写し翻訳することでアイヌ文化の保存に大きく貢献した作家・翻訳家でした。彼女が編纂した13編の日本語訳叙事詩は、アイヌの人物によってアイヌ語で出版された最初の本となりました。

知里幸恵は、アイヌが日本文化に同化を強いられる差別的な政策の時代に、北海道南西部の登別で生まれました。6歳の時、彼女はカムイユーカラの語り部として知られる叔母のイメカス（1875-1961）と祖母のモナシノウク（生没年不詳）と暮らすため、旭川に転居しました。このような環境で、彼女は日本語とアイヌ語のバイリンガルとして成長しました。

1918年、知里は、アイヌ語研究者の日本人言語学者、金田一京助（1882-1971）と出会い、彼から言語と文化について書くことを勧められました。知里は祖母と叔母が詠唱する様々なカムイユーカラを記録しました。これらの叙事詩は、オオカミやフクロウから、カエルや貝類に至るまで、様々なカムイ（神霊）の姿で現れる存在の一人称視点で語られていました。知里はローマ字を使って音声のままアイヌ語を書き記し、その後日本語に翻訳しました。

最初のカムイユーカラ集を完成させた後、知里は19歳で心臓病により亡くなりました。彼女の原稿は翌年『アイヌ神謡集』（アイヌの聖なる存在の詠唱集）として出版されました。知里の仕事は、日本人読者の間にアイヌ語とアイヌ文化への新たな尊敬の念を呼び起こしました。『アイヌ神謡集』は、アイヌ文化研究者にとって今なお貴重な資料となっています。

【タイトル】旭川市博物館/【1階展示室】現代に生きるアイヌ文化
 【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Contemporary Ainu Craft and Culture

Ainu culture is vibrant and adaptive. Despite decades of suppression of their language and traditional lifestyles in the late nineteenth and early twentieth centuries, Ainu have managed to preserve key aspects of their heritage. Today, they are revitalizing traditional designs and adapting them for modern uses. In 2008, the Asahikawa City Museum commissioned Ainu craftspeople and musicians to create works that highlight their cultural legacy.

A central theme in Ainu belief is the power of nature to protect, nurture, and test humanity, and this connection to nature continues to influence contemporary expression. Traditional motifs are embroidered and appliqued onto modern garments and accessories. In the accompanying video exhibits, project participants explain their creative processes, and young musicians perform an Ainu song, blending past and present.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

現代のアイヌ工芸と文化

アイヌ文化は活気に満ち、適応力を持っています。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、言語と伝統的な生活様式が数十年にわたって抑圧されてきたにもかかわらず、アイヌの人々は彼らの伝統の重要な側面を保持することに成功してきました。今日、彼らは伝統的なデザインを再活性化し、現代の用途に向けて適応させています。2008年、旭川市博物館はアイヌの工芸家、音楽家たちに、彼らの文化遺産を強調する作品の制作を依頼しました。

アイヌの信仰の中心的なテーマは、人類を守り、育み、試練を与える自然の力であり、この自然と

のつながりは現代の表現にも影響を与え続けています。伝統的な文様は、現代の衣服や装飾品に刺繍やアップリケとして施されています。付随する映像展示では、プロジェクトの参加者たちが創作過程を説明し、若い音楽家たちが過去と現在を融合させたアイヌ語の歌を演奏しています。

024-015

The First Inhabitants of the Kamikawa Basin

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 旭川市博物館/【地下展示室】先土器時代のくらし

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

The First Inhabitants of the Kamikawa Basin

Humans began to inhabit the island of Hokkaido some 30,000 years ago, during the last ice age. At that time, the sea level was around 100 meters lower than today, and Hokkaido was connected to the Eurasian continent via the island of Sakhalin. It is believed that prehistoric peoples crossed this land bridge from present-day Siberia to Hokkaido. The earliest evidence of humans in the Kamikawa Basin is in the form of stone tools from at least 20,000 years ago. Based on the dispersion of prehistoric archaeological sites, it seems early inhabitants settled mainly along the coasts before eventually moving inland, using rivers as transport and trade routes.

Many of the tools from sites around the Kamikawa Basin are made from obsidian, a dark natural glass formed by the cooling of molten lava. The volcanic glass can be chipped into sharp points and edges, ideal for spearheads and arrowheads for hunting, blades for cutting, and scrapers for preparing animal hides. The nearest obsidian source is over 80 kilometers from the Kamikawa Basin, indicating that the prehistoric peoples of the area had contact with other regions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

上川盆地の最初の住民たち

人類が北海道に住み始めたのは、最後の氷河期にあたる約3万年前のことでした。当時の海面は現在より約100メートル低く、北海道はサハリン島を通じてユーラシア大陸と地続きでした。先史時代の人々は、現在のシベリアから、この陸の橋を渡って北海道に到達したと考えられています。上川

盆地における人類の最古の痕跡は、少なくとも2万年前の石器の形で見つかっています。先史時代の考古学的な遺跡の分布から、初期の住民たちは河川を交通路や交易路として利用しながら、主に沿岸部に定住し、その後徐々に内陸部へと移動していったと考えられています。

上川盆地の遺跡から出土する道具の多くは、溶岩が冷えて固まってできた黒い天然ガラスである黒曜石で作られています。この火山ガラスは欠片を剥がすことで鋭い先端と刃を作ることができ、狩猟用の槍先や矢じり、切断用の刃物、獣皮の調製用のスクレーパーなどに適していました。黒曜石の産地は上川盆地から80キロメートル以上離れており、この地域の先史時代の人々が他の地域と接触を持っていたことを示しています。

024-016

Life in the Jomon and Epi-Jomon Periods (13,000 BCE–600 CE)

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】旭川市博物館/

【地下展示室】縄文時代・続縄文時代のくらし

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Life in the Jomon and Epi-Jomon Periods (13,000 BCE–600 CE)

Northern Japan's prehistoric peoples gradually adopted new lifestyles after their initial migration some 30,000 years ago. They shifted from roving in pursuit of large mammals to establishing settlements and engaging in hunting, fishing, and gathering. Culture and society changed as well to suit increasingly settled lifestyles.

Climatic warming fueled this transition, which made food more widely available. Forests grew on what was once tundra, providing a habitat for deer and other game; vegetation diversified to include fruit-bearing trees, such as chestnuts and walnuts; and sea levels rose, creating shallow bays for gathering clams and shore fishing.

People began using earthenware around 13,000 BCE as they gradually settled sites with plentiful food sources. The emergence of pottery marks the beginning of the Jomon period (13,000–300 BCE) and coincides with the development of settled communities. Early vessels were rudimentary and undecorated, serving a purely utilitarian function, such as cooking. Over time, designs became increasingly elaborate, often patterned with cord-markings (*jomon*). Some of the most ornate examples have been discovered at burial and ceremonial sites, suggesting people performed complex rituals as part of their beliefs concerning the spiritual world.

As settlements increased in size and number, communities engaged in trade and cultural exchange. People used the waterways of Hokkaido to navigate the island, trading furs, accessories, tools, and raw materials, such as obsidian. By the Epi-Jomon

period (300 BCE–600 CE), trade networks extended to Honshu, the main island of the Japanese archipelago. There, agrarian societies were developing alongside smelting and metalworking. Through these trade routes, communities in Hokkaido gained access to ironware and metal tools, which enabled them to more efficiently engage in their hunting, gathering, and fishing activities.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

縄文時代と続縄文時代の生活（紀元前13,000年～紀元後600年）

北日本の先史時代の人々は、約3万年前の最初の移住後に、新しい生活様式を徐々に取り入れていきました。大型哺乳類を追いかけて移動する生活から、定住地を確立し、狩猟、漁労、および採集を営む生活へと移行していきました。生活様式が確立されるにつれ、文化および社会もそれに適合するように変化しました。

気候の温暖化がこの変化を促進し、これにより食料をより広く入手できるようにしました。かつてのツンドラには森林が生え、シカなどの獲物の生息地となり、クリやクルミなどの果実のなる木々を含む植物が多様化し、海面が上昇して、貝類採集や沿岸漁業のための浅い入り江が形成されました。

人々は紀元前13,000年頃に、豊富な食料源のある場所に徐々に定住し、土器の使用を始めました。土器の出現は縄文時代（紀元前13,000年～紀元前300年）の始まりを示し、定住コミュニティの発展と一致します。初期の土器は素朴で装飾のない実用的なもので、調理などの機能に特化していました。時が経つにつれて、デザインは次第に精緻になり、縄文（紐の跡）で模様が付けられることが多くなりました。最も装飾的な土器の一部は埋葬地や祭祀跡から発見されており、精神世界に関する信念の一部として、人々が複雑な儀式を執り行ったことを示唆しています。

集落の規模と数が増えるにつれ、共同体は交易と文化交流を行うようになりました。人々は北海道の水路を航行経路として利用し、毛皮、装飾品、道具、黒曜石などの原材料を交易しました。続縄文時代（紀元前300年～紀元後600年）までには、交易網は日本列島の本州にまで広がっていました。そこでは農耕社会が精錬および金属加工とともに発展していました。これらの交易ルートを通じて、北海道の共同体は鉄器や金属製の道具を手に入れることができ、狩猟、採集、漁労活動をより効率的に行うことが可能になりました。

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】擦文時代のくらし

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Life in the Satsumon Period

The peoples of the Satsumon period (600–1200 CE) continued to hunt and gather like their ancestors, gradually becoming more involved in salmon fishing and subsistence farming. They lived in pit dwellings near rivers for access to fishing grounds. Excavations at riverside sites around the present-day city of Asahikawa have revealed evidence of weirs used for capturing migrating salmon.

Salmon, as well as being a dietary staple, was an important commodity, traded along with furs for iron and other resources from Honshu (the main island of the Japanese archipelago). Satsumon people adopted new technologies from Honshu such as iron tools, textiles, and clay cooking stoves. With ironware, they were able to till the land and grow cold-resistant grains like millet and barley to supplement their diet.

As Satsumon people traded more widely, they came into contact with Okhotsk people, who lived around the Sea of Okhotsk in Sakhalin, the Kuril Islands, and northern Hokkaido. They lived near the shore and hunted seals, whales, and other marine mammals. Over time, a shared culture emerged, and some archaeologists believe that the interaction between the Okhotsk and Satsumon peoples played a role in the formation of Ainu culture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

擦文時代の生活

擦文時代（600-1200年）の人々は、祖先たちのように狩猟と採集を続けながら、次第に鮭漁や自給自足の農業にも力を入れるようになりました。彼らは漁場へのアクセスのため川の近くの竪穴式住居に住みました。現在の旭川市周辺の河岸遺跡の発掘調査では、遡上する鮭を捕獲するための築（やな）の痕跡が発見されています。

鮭は食の主要な供給源であっただけでなく、毛皮とともに本州（日本列島の主島）の鉄やその他の資源と交換される重要な交易品でした。擦文時代の人々は、鉄器、織物、粘土製の炊事用かまどなど、本州から新しい技術を取り入れました。鉄器があることで、彼らは土地を耕し、食生活を補うためにキジヤ大麦などの耐寒性の穀物を栽培することができました。

擦文時代の人々の交易範囲が広がるにつれ、彼らはサハリン、千島列島、北海道北部のオホーツク海周辺に住んでいたオホーツク人と接触するようになりました。オホーツク人は海岸近くに住み、アザラシ、クジラ、その他の海棲哺乳類を狩猟していました。時が経つにつれて共通の文化が生まれ、一部の考古学者は、オホーツク人と擦文時代の人々との交流がアイヌ文化の形成に影響を与えたと考えています。

024-018

A History of Humans in the Kamikawa Basin

一般社団法人大雪カムイミタラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】上川アイヌのあゆみ

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

A History of Humans in the Kamikawa Basin

Humans have inhabited the Kamikawa Basin in central Hokkaido for over 20,000 years. This vast alluvial plain is ringed by mountains and divided by converging rivers, which were some of the largest salmon spawning grounds in Hokkaido. The present-day city of Asahikawa is located in the center of the Kamikawa Basin.

Evidence of former weirs, metal fishing tools, and large quantities of salmon bones have been discovered around the sites of ancient settlements in the Kamikawa Basin. Settlements were concentrated near salmon spawning grounds, indicating that there was large-scale salmon fishing in the area during the Satsumon period (600–1200 CE). Nineteenth-century Ainu settlements were also concentrated along the Ishikari and Chubetsu rivers, where salmon migrated upstream.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

上川盆地の人びとの歴史

人々は2万年以上前から北海道中央部の上川盆地に住んでいました。この広大な沖積平野は山々に囲まれ、合流する河川によって分かれており、これらの河川は北海道有数の鮭の産卵場になっていました。現在の旭川市は上川盆地の中心に位置しています。

上川盆地の古代集落跡の周辺では、かつての堰、金属製の漁具、大量のサケの骨の証拠が発見されています。集落はサケの産卵場所の近くに集中しており、擦文時代（600-1200）にこの地域で大規模なサケ漁が行われていたことを示しています。19世紀のアイヌの集落も、サケが遡上する石狩川と忠別川に沿って集中していました。

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】ペニウクルのくらし

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Traditional Life of the Peniunkur

The Peniunkur are a regional group of Hokkaido Ainu living in the Kamikawa Basin. “Peniunkur” means “people of the upper reaches of the Ishikari River” in the Ainu language. Their traditional way of life followed the seasonal rhythms of nature, and they adapted specialized tools and techniques to survive the harsh climate of the Kamikawa region.

Autumn was a particularly busy time, with salmon swimming upriver to spawn and cold-resistant grains such as millet ripening in the fields. They caught salmon using varying methods, including wooden traps and hooked spears, and then preserved the fish for trade and winter consumption. Grain was harvested and dried to be used later for making porridge and brewing alcohol.

In early spring, the Peniunkur hunted bears for their meat and fur. One approach was to locate the den of a hibernating bear and lure it out by prodding it with a long stick. As it tried to exit the den, the hunters attacked it with poison-tipped spears or arrows. The poison was a fast-acting neurotoxin derived from the roots of wolfsbane.

In the summer months, when visibility was hindered by dense vegetation, they hunted using *amaku*, bow traps. These were set up along game trails, with a poisoned arrow triggered by a thin string.

Dogs played an essential role in hunting. They helped track and trap deer and distract

bears, allowing hunters to strike. Some dogs were also trained to catch salmon in shallow waters.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ペニウクルの人々の伝統的な生活

ペニウクルは上川盆地に住む北海道アイヌの地域集団です。「ペニウクル」はアイヌ語で「石狩川上流の人々」を意味します。彼らの伝統的な生活様式は自然の季節のリズムに従い、彼らは上川地方の厳しい気候を生き抜くために特殊な道具や技術を発展させてきました。

秋は、鮭が産卵のために川を遡上し、キビなどの耐寒性の穀物が畑で実る特に忙しい時期でした。彼らは木製の罠や鉤付きの槍など、様々な方法で鮭を捕獲し、冬季の交易および食用のために保存しました。穀物は収穫して乾燥させ、後にお粥を作ったり酒を醸造したりするのに使用されました。

早春には、ペニウクルの人々は肉と毛皮を得るために熊を狩猟しました。一つの方法として、冬眠中の熊の巣穴を見つけ、長い棒で突いて外に誘い出しました。熊が巣穴から出ようとする時、猟師たちは毒を塗った槍や矢で攻撃しました。この毒はトリカブト（アコニタム）の根から作られた、即効性の神経毒でした。

夏の間は植生が密になって視界が妨げられるため、彼らはアムクと呼ばれる弓の罠を使って狩りをしました。罠は獲物の通り道に沿って設置され、細い紐に触れると毒矢が発射される仕組みでした。

犬は狩猟において重要な役割を果たしました。犬はシカの追跡や捕獲を手伝い、熊の気をそらして猟師が攻撃できるようにしました。浅瀬で鮭を捕まえるように訓練された犬もいました。

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】コタンのまつり

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Bear Sending-Back Ceremonies

Sending-back ceremonies are central to Ainu culture. They are community-wide rituals held to thank a *kamuy* (spirit-deity) for its gifts and return its spirit to the realm of spirit-deities. *Kamuy* visit the human world in various forms: as animals, plants, natural phenomena, tools, and more. Iomante, sending-back ceremonies for bears, are among the most formal rituals.

Bears are prominent symbols in Ainu mythology and are referred to as spirit-deities of the mountains (*kimunkamuy*). They sustain communities with their meat and furs, and ceremonies for bears reflect the importance the mountain *kamuy* play in the Ainu way of life.

Iomante are held for bears found as newborn cubs. To be entrusted with the care of a cub is one of the greatest honors that can be bestowed by *kamuy*. The community nurtures the cub accordingly, raising it in the home and later housing it in a pen, ensuring it is healthy and well-nourished. When the bear reaches one or two years of age, preparations begin for the sending-back ceremony.

These preparations can last several weeks and involve weaving ceremonial mats and carving ritual tools and gifts for the *kamuy*, such as decorative arrows. Alcohol is also brewed as an offering to the spirit-deity. The ceremony lasts several days and typically begins with prayers, songs, dances, and feasts. Many rituals follow, and the bear is eventually sacrificed to release the spirit of the *kamuy*. The *kamuy* is thanked with offerings and entertained with festivities through the night in the hope it will return to

the human world again.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

クマ送りの儀礼

送り儀礼はアイヌ文化の中心をなすものです。これは贈り物に対してカムイ（神霊）に感謝し、その霊を神々の世界へ送り返すために行われる共同体全体の儀式です。カムイは動物、植物、自然現象、道具など、様々な形で人間の世界を訪れます。クマの送り儀礼であるイオマンテは、アイヌの儀式の中で最も格式の高いものの一つです。

クマはアイヌの神話で重要な象徴であり、山の神（キムンカムイ）と呼ばれています。クマは肉と毛皮によって共同体の生活を支え、クマの儀式はアイヌの生活様式における山のカムイの重要性を反映しています。

イオマンテは新生児として見つかった子グマのために執り行われます。子グマの世話を任されることは、カムイから授かることのできる最も大きな名誉の一つです。共同体はそれにふさわしく子グマを育てます；最初は家の中で育て、その後は囲いの中で飼育し、健康で十分な栄養を与えられるように気を配ります。クマが1歳か2歳になると、送り儀礼の準備が始まります。

これらの準備は数週間続くことがあり、儀式用の敷物を編んだり、装飾的な矢など、カムイへの儀式用具や贈り物を彫ったりする作業が含まれます。また、神霊への供物として酒も醸造されます。数日間続く儀式は、通常は祈り、歌、踊り、宴会で始まります。それに多くの儀式が続き、最終的にカムイの魂を解放するためにクマは供犠されます。カムイは供物で感謝され、再び人間界に戻ってくることを願って、夜通し祝宴で慰められます。

【タイトル】 旭川市博物館/【地下展示室】石狩場所とペニウクル
【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

The Peniunkur in Ishikari

The Peniunkur are a regional group of Hokkaido Ainu who originally lived along the upper reaches of the Ishikari River. They were among the Ainu exploited by Wajin (ethnic Japanese) merchants in the eighteenth and nineteenth centuries. The merchants were initially trade partners with Ainu but eventually took control of trade routes and resources, even forcibly relocating the Peniunkur to work in their fisheries.

This development occurred gradually from the end of the sixteenth century, when the founder of the Matsumae family was granted control of southern Ezo (part of present-day Hokkaido) in return for his service to the samurai general Toyotomi Hideyoshi (1537–1598). While most domains under the shogunate derived their wealth from agriculture, the Matsumae's fortunes came through trade with Ainu. They established coastal trading posts and appointed their retainers to manage them. By the eighteenth century, management of the posts had been granted to the merchants who owned the ships that engaged in coastal trade. To keep up with the growing demand around the country for marine products, the merchants also set up commercial fisheries. Several of these were located in Ishikari, near the mouth of the Ishikari River.

In 1817, as the fishing industry expanded, merchants forcibly relocated the Peniunkur to work in their fisheries, far downstream from their homes. They worked long hours from early spring to autumn, net fishing for herring and salmon. When not fishing, they were assigned chores such as cutting wood, drawing water, and making deliveries. Living conditions in crowded encampments caused diseases such as smallpox to spread quickly.

In early winter, the Peniunkur returned upriver to their homes along the upper reaches of the Ishikari River, over 100 kilometers away. The long trip home was made even more difficult by the region's heavy snowfalls.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石狩のペニウクルアイヌ

ペニウクルの人々は石狩川上流沿いに元々住んでいた北海道アイヌの地域的グループです。彼らは、18世紀および19世紀に和人（民族的日本人）商人によって搾取されたアイヌの一部でした。商人は当初アイヌの交易相手でしたが、最終的に交易路と資源を支配し、ペニウクルの人々を強制的に移住させ、漁業に従事させました。

この変化は16世紀末から徐々に進行しました。この時期、松前家の初代が、征夷大將軍である豊臣秀吉（1537～1598年）から、その功勞に対する褒章として蝦夷地南部（現在の北海道の一部）の支配権を与えられました。幕府下の大半の藩が農業で富を得たのに対し、松前藩はアイヌとの交易で富を得ました。彼らは沿岸部に交易所を設置し、家臣たちにその管理を任せました。18世紀までには、交易所の管理は、沿岸交易に関わる交易船を所有する商人たちに委ねられるようになりました。全国各地での海産物需要の増加に対応するため、商人たちは商業用漁場も設置しました。これらの漁場のいくつかは、石狩川河口近くの石狩に置かれました。

1817年、漁業が拡大するにつれて商人たちは、ペニウクルの人々を彼らの住居から遠く離れた下流へと強制的に移住させ、漁業に従事させました。彼らは早春から秋まで、ニシンやサケの網漁に長時間従事しました。漁業以外の時間には、薪割り、水汲み、配達などの雑用を課されました。密集した野営地での生活環境は、天然痘などの病気を急速に蔓延させました。

初冬になると、ペニウクルの人々は100キロメートル以上離れた石狩川上流沿いの家に川を遡って戻りました。この長い帰路は、この地域の大雪により大いに困難を極めるものでした。

024-022

Modernization and the Impact of Assimilation

一般社団法人大雪カムイミンタラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】近文給与予定地

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Modernization and the Impact of Assimilation

The Meiji period (1868–1912) brought rapid modernization and sweeping land reforms to Japan, but these changes posed challenges to Ainu living in Hokkaido. Privatization of land and resources and prohibitions on hunting and fishing made it difficult to continue their traditional way of life. In 1899, the government enacted the Hokkaido Former Aborigine Protection Law. It was a program to assimilate Ainu into Japanese culture under the guise of protecting their rights.

The law stipulated that Ainu households be given around 5 hectares (12 acres) of land, but many of these plots were unsuitable for agriculture. Furthermore, if they failed to cultivate their land within a certain time, they risked having it taken away from them.

Education was another means through which the government enforced assimilation. Schools for Ainu children were established to teach Japanese language and customs, and the use of Ainu language diminished.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

近代化とアイヌ同化政策の影響

明治時代（1868-1912年）は日本に急速な近代化と大規模な土地改革をもたらしましたが、これらの変化は北海道に住むアイヌにとって困難をもたらしました。土地と資源の私有化、狩猟と漁労の制限により、アイヌは伝統的な生活様式を続けることが困難になりました。1899年、政府は北海道旧土人保護法を制定しました。これは権利保護を装いながら、アイヌを日本文化に同化さ

せるためのプログラムでした。

法律はアイヌの世帯に約5ヘクタール（12エーカー）の土地を与えると規定していましたが、これらの区画の多くは農業に適していませんでした。さらに、一定期間内に土地を耕作できなかった場合、彼らはその土地を取り上げられる危険性がありました。

教育は政府が同化を強制する手段のひとつでした。アイヌの子どもたちのための学校が設立され、日本語と日本の習慣を教えるようになり、アイヌ語の使用は減少していきました。

024-023

Asahikawa in the Pioneering Period

一般社団法人大雪カムイインタラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】

開拓期の暮らし 1 開村

開拓期の暮らし 2 入植

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Asahikawa in the Pioneering Period

In 1868, the Meiji government was established. A year later, the government renamed Ezo to Hokkaido, and began to develop this northern frontier. Officials sent to the Kamikawa Basin reported that the area would be suitable for farming, and the villages of Asahikawa, Nagayama, and Kamui were established in the Kamikawa Basin in 1890.

Farmer-soldiers known as *tondenhei* were employed by the government to clear forestland for agriculture while also protecting Japan's northern border. Initially open exclusively to former samurai, *tondenhei* later included farmers from Honshu, the main island of Japan. *Tondenhei* families arrived in Nagayama in 1891, Asahikawa in 1892, and Toma (then part of Nagayama) in 1893. The *tondenhei* and civilian farmers grew crops suited to the cold climate, such as beans, wheat, and potatoes. After some experimentation, they established rice cultivation in the area.

The village of Asahikawa gradually developed as the transportation and communications hub of northern Hokkaido. A post and telegraph office opened in 1893, and the Kamikawa Line railway opened in 1898 connecting Asahikawa and Takikawa. Asahikawa was incorporated as a town in 1900, and the following year, the Imperial Japanese Army's 7th Division moved to Asahikawa from Sapporo. Around 10,000 troops were stationed in the town, drawn from the *tondenhei* community in Hokkaido and military reserves in northern Honshu. This military presence spurred commercial and industrial development in the region, as skilled workers moved to Asahikawa to support the base with construction, food production, and other services.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

開拓期の旭川

1868年、明治政府が成立しました。翌年、政府は蝦夷を北海道と改名し、この北方の辺境地の開発を始めました。上川盆地に派遣された役人たちは、この地域が農業に適していると報告し、1890年に上川盆地に旭川、永山、神居の村々が設立されました。

屯田兵として知られる農民兵士たちは、日本の北方国境を守りながら農業のために森林を開拓する仕事を政府から与えられました。当初は元武士だけに限定されていた屯田兵は、後に日本の本州からの農民も含むようになりました。屯田兵の家族は1891年に永山、1892年に旭川、1893年に当時永山の一部であった当麻に到着しました。屯田兵と一般の農民は豆類、小麦、ジャガイモなど、寒冷地に適した作物を栽培しました。いくつかの実験の後、彼らはこの地域での稲作を確立しました。

旭川の村は北海道北部の交通・通信の拠点として徐々に発展していきました。1893年に郵便・電信局が開設され、1898年には旭川と滝川を結ぶ上川線が開通しました。1900年に旭川は町と制定され、翌年には大日本帝国陸軍の第7師団が札幌から旭川に移転しました。北海道の屯田兵コミュニティと本州北部の軍事予備兵から集められた約1万人の兵士が町に駐留しました。熟練労働者が建設、食料生産、その他のサービスで基地を支援するために旭川に移住したため、この軍事的存在が地域の商業・産業発展を促進しました。

024-024

Asahikawa in the Twentieth Century

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】発展期のくらし今日のくらし

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Asahikawa in the Twentieth Century

The town of Asahikawa grew rapidly in the early twentieth century, when the Imperial Japanese Army's 7th Division moved to the town from Sapporo in 1901. Along with some 10,000 troops, migrants from other parts of Japan arrived to work in support industries, infrastructure development, and services for the military base.

A fledgling sake industry emerged to meet the needs of the growing community, and by the 1920s, some 15 breweries were producing sake from locally grown rice. Furniture production also expanded quickly due to abundant lumber and skilled carpenters who initially arrived to support the army, making it a prominent industry. Asahikawa became a city in 1922 and flourished as the hub of northern Hokkaido with rail lines linking the city with Hokkaido's western and eastern coasts, government offices, and schools.

World War II severely impacted the city, as food, materials, and other necessities were directed towards the war effort. Successive conscriptions took men away from the farms, and even children had to tend the crops. Many residents grew their own vegetables in vacant lots and parks to supplement their rations.

The economic boom in the 1950s helped revitalize Asahikawa, with increased demand for produce, construction materials, wood pulp, and furniture for Japan's postwar reconstruction. The city is now the second largest in Hokkaido by population, after Sapporo.

20世紀の旭川

20世紀初頭、1901年に大日本帝国陸軍第七師団が札幌から移動したことで、旭川の町は急速に発展しました。約1万人の軍隊とともに、日本の他の地域からの移住者たちが到着し、軍事基地の支援産業、インフラ整備、サービス業に従事しました。

成長するコミュニティのニーズを満たすために、新興の酒造業が生まれ、1920年代までには約15の醸造所が地元で栽培された米から日本酒を生産するようになりました。家具製造業も、豊富な木材と当初は軍を支援するためにやってきた熟練大工たちによって急速に拡大し、著名な産業となりました。旭川は1922年に市となり、北海道の西海岸と東海岸を結ぶ鉄道路線、政府機関、学校を擁する北海道北部の中心地として繁栄しました。

しかし、第二次世界大戦は食料、資材、その他の必需品が戦争に向けられたため、市に深刻な影響を与えました。相次ぐ徴用で男性たちは農場から離れ、子どもたちさえも作物の世話をしなければならませんでした。多くの住民は配給を補うため、空き地や公園で自家用の野菜を栽培しました。

1950年代の経済ブームは、日本の戦後復興のための農産物、建設資材、木材パルプ、家具への需要増加により、旭川の活性化に貢献しました。現在、旭川は札幌に次ぐ北海道第二の人口を持つ都市となっています。

024-025

Plants and Animals of Daisetsuzan National Park 一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】大雪山の自然

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Plants and Animals of Daisetsuzan National Park

Daisetsuzan National Park is one of Japan's largest national parks. It encompasses the Tokachi Mountain Range, the Ishikari Mountain Range, and the Daisetsuzan Volcanic Group, and includes the highest peak in Hokkaido, Mt. Asahidake (2,291 m).

The alpine climate of Daisetsuzan supports a wide variety of plants and animals. There are over 200 alpine flower species, including Kurile cherry, Aleutian avens, and alpine violet. Many of these plant species likely migrated from North Asia, regions around the Sea of Okhotsk and the Bering Sea, and Japan's main island. Primary-growth forests of red spruce and Sakhalin fir thrive in the subalpine zone of Mt. Asahidake. This habitat supports resident and migratory birds, including the Eurasian bullfinch, red-flanked bluetail, and dark-sided flycatcher. High-elevation meadows have colonies of common sundew and cotton grass as well as cold-climate dragonflies like the Siberian skimmer.

Some flora and fauna are surviving species from the last ice age, over 20,000 years ago. Sea levels were about 100 meters lower than today, and Hokkaido was connected by a land bridge to the Eurasian continent via the island of Sakhalin. As temperatures and sea levels rose, the habitats of these species became limited to isolated areas of the mountains. Among these survivors of earlier times is a species of high-altitude butterfly, a species of wingless grasshopper, and the Japanese pika, a small mammal that resembles a rabbit.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大雪山国立公園の動植物

大雪山国立公園は日本最大級の国立公園です。十勝連峰、石狩連峰、大雪火山群を含み、北海道最高峰の旭岳（2,291m）を有しています。

大雪山の高山気候は多様な動植物を育んでいます。チシマザクラ、チングルマ、カタクリなど、200種以上の高山植物が生息しています。これらの植物種の多くは、北アジア、オホーツク海やベーリング海周辺の地域、そして日本の本州から移動してきたと考えられています。旭岳の亜高山帯には、アカエゾマツやサハリンモミの原生林が茂っています。この生息地では、ウソ、ルリビタキ、サメビタキなどの留鳥や渡り鳥が生息しています。標高の高い草地にはコモウセンゴケやワタスゲの群落があり、エゾトンボなどの寒冷地のトンボも生息しています。

2万年以上前の最後の氷河期から生き残っている動植物もいます。当時の海面は現在より約100メートル低く、北海道はサハリン島を通じてユーラシア大陸と地続きでした。気温と海面が上昇するにつれ、これらの種の生息地は山岳地帯の孤立した地域に限定されるようになりました。これらの遺存種には、高地のチョウの一種、羽のないバツタの一種、ウサギ科の小型哺乳類であるエゾナキウサギなどがいます。

【タイトル】旭川市博物館/【地下展示室】旭川の冬

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Surviving the Winter in Asahikawa

Winters are long and harsh in the Asahikawa region of central Hokkaido, with heavy snowfalls and temperatures as low as -20 degrees Celsius. Despite these conditions, many animal and plant species are adapted to survive, each with differing mechanisms and tactics.

Coniferous trees such as pine and fir have thin, needle-shaped leaves that reduce transpiration, helping them avoid losing heat and water even in cold weather. Deciduous trees native to the region include Thurber's magnolia, Japanese oak, painted maple, and Japanese walnut. They endure the cold by going dormant, shedding their leaves, and withdrawing water from their branches. This prevents water loss, conserves nutrients, and protects the buds remaining on the twigs from frost damage. Scales and furry outer casings further insulate the buds against the cold.

Some animals, such as the Yezo sika deer, rely on the bark, twigs, and buds of deciduous trees for sustenance through winter. The Ezo mountain hare also forages for twigs, camouflaged in the snow with its white winter fur.

While some species remain active through winter, others hibernate in warm dens. The Ezo chipmunk digs its den in the forest, curling up for winter on a bed of acorns and wrapping itself in fallen leaves. It fills the entrance tunnel with earth from its digging for protection from predators. While in hibernation, its metabolic rate lowers, and its body temperature lowers from around 37 to 8 degrees Celsius. Its breathing slows to one breath every twenty seconds.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旭川の冬を生き抜く

北海道中央部の旭川地方の冬は長く厳しく、大雪と氷点下20度にも及ぶ低温に見舞われます。このような条件にもかかわらず、多くの動植物はそれぞれ異なる仕組みや戦術で生き延びよう適応しています。

マツやモミなどの針葉樹は、蒸散を抑える細い針状の葉を持ち、寒冷時でも熱と水分の損失を防ぐことができます。この地域原産の落葉樹には、キタコブシ、ナラ、イタヤカエデなどがあります。これらは冬眠状態になり、葉を落とし、枝から水分を引き上げることで寒さに耐えます。これにより水分の損失を防ぎ、栄養を保持し、小枝に残った芽を霜の被害から守ります。さらに鱗片や毛羽立った外皮が芽を断熱し、寒さから保護します。

エゾシカなどの動物は、冬の間は栄養源として落葉樹の樹皮や小枝、芽を利用します。エゾユキウサギも小枝を探して食べ、冬毛の白い体毛で雪に紛れています。

冬眠する動物もいれば、冬の間も活動を続ける種もあります。エゾシマリスは森の中に巣穴を掘り、ドングリの寝床で体を丸め、落ち葉にくるまって冬を過ごします。掘った土で入口の通路を埋め、捕食者から身を守ります。冬眠中のエゾシマリスは代謝が低下し、体温は約37度から8度まで下がります。呼吸は20秒に1回のペースまで遅くなります。

024-027

Geology of Asahikawa and the Kamikawa Basin 一般社団法人大雪カムイインタラDMO

【タイトル】 旭川市博物館/【地下展示室】上川盆地の地底を探る
【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Geology of Asahikawa and the Kamikawa Basin

The Kamikawa Basin formed between the mountains of the Kamuikotan Metamorphic Belt and the Idonnappu Zone on bedrock dating from around 150 to 50 million years ago. Subsequent volcanic eruptions created the landscapes of Daisetsuzan and partially filled the basin, forming the broad plain where Asahikawa is located.

The bedrock of the Kamikawa Basin

The basin bedrock formed when an ancient oceanic plate subducted under the Eurasian plate. As the plate descended, some sediment and rocks were carried deep into the earth's crust, where intense pressure transformed them into metamorphic rocks. Other sediment and rocks accumulated at the edge of the continental plate, forming an accretionary wedge. These rock accumulations became the mountains of the Kamuikotan Metamorphic Belt and the Idonnappu Zone respectively.

Formation of Hokkaido and the Kamikawa Basin

The islands of the Japanese archipelago, including Hokkaido, started to emerge around 15 million years ago when plate movements caused part of the Asian continent to break away, and the Sea of Japan to form and expand. As the sea expanded, the breakaway islands moved eastward, and the bedrock of the basin was forced above the ocean surface. The Kamikawa Basin formed as a depression between the resulting mountains.

Volcanic activity

Between 15 and 2.6 million years ago, volcanic activity intensified, and several volcanoes formed around the basin, including Peipanyama and Asahiyaama. Large-scale eruptions followed, and pyroclastic flows partially filled the basin between 2.6 and 0.8 million years ago. Later, the Daisetsuzan Volcanic Group formed, of which Mt. Asahidake is the highest peak (2,291 m). Mt. Asahidake is still active, with its last eruption in the mid-eighteenth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旭川と上川盆地の地質

上川盆地は、約1億5千万年前から5千万年前の岩盤の上、神居古丹変成帯とイドンナップ帯の山々の間に形成されました。その後の火山噴火によって大雪山の地形が形成され、盆地の一部が埋まり、旭川のある広い平野が形成されました。

上川盆地の岩盤

盆地の岩盤は、太古の海洋プレートがユーラシアプレートの下に沈み込んだときに形成されました。プレートが下降するにつれて、堆積物や岩石の一部は地殻の奥深くに運ばれ、そこで強い圧力によって変成岩に変化しました。他の堆積物や岩石は大陸プレートの端に集積し、付加体を形成しました。これらの岩石の集積が、それぞれ神居古丹変成帯とイドンナップ帯の山々になりました。

北海道と上川盆地の形成

北海道を含む日本列島の島々は、およそ1,500万年前にプレート運動によってアジア大陸の一部が分断され、日本海が形成・拡大したことで誕生しました。海が拡大するにつれて、分断された島々は東に移動し、盆地の岩盤は海面上に押し出されました。上川盆地は、その結果できた山地の間の窪地として形成されました。

火山活動

1,500万年前から260万年前にかけて火山活動が活発化し、米飯山や旭岳など盆地周辺にいくつかの火山が形成されました。その後、大規模な噴火が続き、260万年前から80万年前にかけて火砕流が盆地を部分的に埋めていきました。後に、大雪山火山群が形成されましたが、その最高峰が旭岳（2,291m）です。旭岳は現在も活動を続けており、最後の噴火は18世紀半ばでした。

【タイトル】アイヌ文化の森「伝承のコタン」（旭川市博物館分館）
/【屋外展示】植物とアイヌ民族
【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Plants in Ainu Culture

Plants were a traditional source of food, medicine, and natural fibers for weaving and other crafts. Today, plants that played an important role in Ainu culture are grown in the area surrounding the traditional village (*kotan*) of the Ainu Cultural Forest Densho-no-Kotan as a means of passing on Ainu knowledge and practices.

Foraged plants

Many plants used in daily life were gathered from wetlands and forests, but Ainu also cultivated grains such as foxtail millet and barnyard millet.

Giant woodland lily

The giant woodland lily grows in wetlands and along riverbanks. It has broad green leaves and can reach up to 1 meter in height. The bulbs were harvested in the summer and valued for their nutritional and medicinal properties. They were crushed and soaked in water to release their starch, which was dried and used to make porridge-like dishes. The starch was also used to treat stomach pain. The remaining fiber was fermented and dried into disks to be added to soups and stews.

Crimson glory vine

The edible berries of the crimson glory vine were harvested in autumn. The vine itself is flexible and durable, making it an ideal material for rope. Ainu women typically wove items like bags and footwear from the vines.

Other edible wild plants

Ainu traditionally harvested the stems and flowers of butterbur, the leaves and stems of Siberian onion, and the bulbs of corydalis, a tuber with purple flowers, in early spring. From summer to autumn, people gathered berries and fruit, including wild grapes, strawberries, and blue honeysuckle berries, which are similar to blueberries. They also foraged for acorns and chestnuts to boil.

Crafting plants

Some plants have strong, flexible leaves, fibers, or bark useful for making items such as clothing, mats, and bags.

Broadleaf cattail

The blade-shaped leaves of the wetland plant the broadleaf cattail, grow to around 2 meters in length. The leaves were gathered in mid-summer, then rinsed and left to dry for several weeks. After soaking in water to prevent breakage, the leaves were woven with the inner fibers (bast) of the Japanese linden into mats both for everyday use and ceremonial occasions. Some ceremonial mats were interwoven with dyed strips of Manchurian elm bast to form patterns.

Manchurian elm

The bast of the Manchurian elm was an essential resource for making textiles. Ainu stripped the bark and softened the inner fibers in water, then bleached them in the sun. These fibers were then separated into fine strands and twisted into thread. The thread was used to weave cloth called *attus*. The name of the cloth also refers to the traditional straight-sleeved robe worn by Ainu. An *attus* for everyday wear did not have much decoration, but those for ceremonial wear were decorated with patterns in navy and black cotton applique.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌ文化における植物

植物は食料、薬、織物やその他の工芸品のための天然繊維の伝統的な供給源でした。今日では、「アイヌ文化の森 伝承のコタン」の周辺地域において、アイヌ文化で重要な役割を果たした植物が

栽培されており、アイヌの知識と慣習を伝承する手段となっています。

採取される植物

日常の生活で使用する植物は、湿地や森から採取されますが、アイヌもアワやヒエなどの穀物を栽培していました。

オオウバユリ

オオウバユリは湿地や川岸に生育します。幅広い緑の葉を持ち、高さは1メートルに達することがあります。球根は夏に収穫され、栄養価と薬効が高く評価されていました。これらは潰されて水に浸され、でんぷんを抽出した後、乾燥させてお粥のような料理を作るのに使われていました。このでんぷんは胃痛の治療にも使用されていました。残った繊維は発酵させて円盤状に乾燥させ、スープや煮込み料理に加えられていました。

ヤマブドウ

ヤマブドウの食用の実には秋に収穫されました。蔓は柔軟で丈夫なため、ロープを作るのに理想的な材料でした。アイヌの女性たちは通常、この蔓から袋や履物などの品を編みました。

その他の食用野生植物

アイヌは伝統的に、早春にフキの茎と花、ギョウジャニンニクの葉と茎、紫の花を咲かせるコリダリス（キケマン）の球根を収穫しました。これらは一般に食べる前に茹でられました。夏から秋にかけては、ヤマブドウ、イチゴ、ブルーベリーに似たハスカップなどの実や果物を集めました。また、クリやドングリも採取して煮て食べました。

工芸用の植物

いくつかの植物は、衣服、敷物、袋などの品物を作るのに適した、柔軟で丈夫な葉、繊維、樹皮を持っています。

ガマ

湿地性植物のガマは、刃のような形をした葉が約2メートルの長さまで成長します。これらの葉は真夏に採取され、洗って数週間乾燥されました。葉は破損を防ぐために水に浸された後、シナノキの内皮繊維（靱皮）と一緒に編まれて、日常用と儀式用の両方の敷物が作られました。儀式用の敷物の一部は、模様を作るために染色したハルニレの内皮を織り込んで作られました。

ハルニレ

ハルニレの内皮繊維は織物を作るための重要な資源でした。アイヌは樹皮をはぎ取り内皮繊維を水中で柔らかくし、次に日光で漂白しました。その後これらを細い繊維に分け、撚って糸にしました。この糸は「アットウシ」と呼ばれる布を織るのに使用されました。この布の名前は、アイヌが着用した伝統的な直線的な袖の衣服も指します。日常着用のアットウシは装飾が少なかったですが、儀式用

には紺と黒の木綿の切り布で模様が装飾されました。

【タイトル】川村カ子トアイヌ記念館/アイヌの工芸

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Crafts

Ainu crafts reflect a worldview deeply intertwined with nature. Each stitch, motif, and pattern expresses reverence for the natural world and the *kamuy* (spirit-deities) believed to inhabit it.

Traditionally, women were responsible for weaving and sewing, while men carved tools and made utensils. Some garments were made from cotton obtained through trade, but customarily they were woven from thread spun from the inner bark fibers of trees like the Manchurian elm into a durable fabric called *attus*. Garments were often decorated with intricate applique and embroidery. As the women sewed and embellished the garments, they prayed to the *kamuy* to protect the wearers. Patterns were inspired by nature and varied from family to family. Passed down from mother to daughter, the patterns evolved through marriage as brides incorporated motifs representing their new family.

Ainu men were practiced at woodcarving, fashioning items such as knife sheaths, arrow shafts, and tobacco cases, and ritual items such as prayer sticks (*inaw*) and offering sticks (*ikupasuy*). Skill at craftwork was one of the requirements of a village leader, and it was believed that using beautiful tools led to successful hunts.

In the late nineteenth century, prohibitions on hunting and fishing made it difficult to continue the traditional Ainu way of life. People began to make daily items such as tools, containers, and chopsticks as a way to earn an income. Ainu in Asahikawa gradually shifted their focus to carving wooden dolls and figures of bears which

enjoyed high demand from the tourist industry that developed soon after World War II.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの工芸

アイヌの工芸は、自然と深く結びついていた世界観を反映しています。それぞれの縫い目、文様、模様のすべてが、自然界とそこに宿ると信じられている「カムイ」（神々）への畏敬の念を表現しています。

アイヌの伝統では、織物や裁縫は女性の仕事であり、一方で男性は道具を彫り用具を作成していました。衣服の中には交易で入手した木綿で作られたものもありましたが、習慣的にはオヒョウやカラムシなどの樹皮の内側の繊維から糸を紡いで織った「アットウシ」と呼ばれる丈夫な布を作っていました。衣服には複雑な刺繍や装飾が施されることが多く、女性たちは衣服を縫い、装飾を施す際に、着用者を守るためにカムイへ祈りを捧げていました。模様は自然からインスピレーションを得て、家族ごとに異なっていました。母から娘へと受け継がれ、花嫁が新しい家族を象徴する文様を取り入れることで、模様は結婚を通じて進化していきました。

アイヌの男性は、木彫りを練習し、刀の鞘、矢、煙草入れなどの道具や、「イナウ」（祈りの木幣）や「イクパスイ」（捧酒箸）などの儀式用具を作成していました。工芸の技術は、村のリーダーの要件の一つでした。また、美しい道具を使用することが、狩りの成功につながると信じられていました。

19世紀後半に、狩猟や漁労に対する制限により、伝統的なアイヌの生活様式を続けることが困難になりました。人々は道具、容器、箸など日用品を、収入を得る方法として制作していました。第二次世界大戦後すぐに発展した観光産業の高い需要の恩恵を受け、旭川のアイヌは徐々に木製の人形や熊の彫刻制作へと重点を移していきました。

024-030

Fujito Takeki

一般社団法人大雪カムイミタラDMO

【タイトル】川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・藤戸竹喜と作品

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Fujito Takeki

The sculptor Fujito Takeki (1934–2018) was born in Bihoro in eastern Hokkaido and raised in Asahikawa. He is known for works that revere the natural world, a fundamental tenet of Ainu spirituality. He began woodcarving at age twelve under the tutelage of his father. Throughout his career, Fujito sculpted lifelike animal and human figures; each from a single piece of wood. He used various tools including chainsaws, axes, chisels, scratch awls, and fine blades.

The brown bear, the most sacred animal in Hokkaido Ainu culture, is a recurring motif in his work. The bear is considered the earthly manifestation of *kimunkamuy*, the spirit-deity of the mountains. Besides bears, Fujito carved wolves, orcas, crabs, and other animals, as well as ancestral figures. He received the Person of Regional Cultural Merits Award from the Agency for Cultural Affairs in 2016.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藤戸竹喜

彫刻家の藤戸竹喜（1934-2018）は北海道東部の美幌町で生まれ、旭川で育ちました。彼は、アイヌの精神性の基本である自然界を敬う作品で知られています。彼は、12歳の時に父親の指導のもと木彫りを始めました。彼の経歴全体を通じて、藤戸は一本の木から生き生きとした動物や人物の姿を彫り出しました。彼は、チェーンソーや斧、のみ、突き錘、細かな刃物など、様々な道具を使用しました。

北海道アイヌ文化において最も神聖な動物であるヒグマは、彼の作品に繰り返し登場するモチーフです。ヒグマは「キムンカムイ」（山の神）の地上における化身とされています。ヒグマの他にも、藤

戸は狼やシャチ、カニ、その他の動物、そして先祖の姿なども彫り出しました。2016年には文化庁より地域文化功労者として顕彰されました。

024-031

Fujito Yukio

一般社団法人大雪カムイインタラDMO

【タイトル】川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・藤戸幸夫と作品

【想定媒体】アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Fujito Yukio

Fujito Yukio (b. 1949) is an Ainu woodcarver from Asahikawa who makes traditional tools and ceremonial objects. He learned to carve wood from his father and older brother Takeki (1934–2018), and began working at the age of fifteen, making souvenirs for tourists. He uses a small blade to incise the wood and then carves out the object with chisels.

Fujito crafts a variety of tools including double-edged knives called *makiri*; hunting knives known as *tasiro*; and *ikupasuy* offering sticks. He carves the handles and wooden sheaths of the knives with intricate, textured patterns. Some of his works reflect his woodcarver's heritage, while others reflect his own style, using motifs such as snakes and waves. Fujito currently works from a studio in the town of Tsubetsu, in eastern Hokkaido.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藤戸幸夫

藤戸幸夫（1949年生まれ）は旭川市出身のアイヌの木彫り職人で、伝統的な道具や儀式用具を制作しています。彼は父親と兄から木彫りを学び、15歳の時から観光客向けの土産物作りを始めました。彼は小さな刃物で木に切り込みを入れ、のみを使って物を彫り出しています。

藤戸は「マキリ」と呼ばれる両刃の小刀、「タシロ」として知られる狩猟用ナイフ、そして「イクパスイ」（捧酒簀）など、様々な道具を制作しています。ナイフの柄や木製の鞘には、複雑で質感のある模様を彫り込んでいます。彼の作品の一部は彼の木彫り職人としての伝統を反映したものであり、

また一部は蛇や波などのモチーフを用いた彼独自のスタイルを反映しています。藤戸は現在、道東に位置する津別町のアトリエで制作活動を行っています。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/彫刻家・砂澤ビッキと作品

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Sunazawa Bikky

Asahikawa native Sunazawa Bikky (1931–1989) was a self-taught painter, sculptor, and poet, and one of the most prominent Ainu artists of the twentieth century. Known for his carvings of animals with distinct Ainu patterns, he connected with creative communities in Japan and overseas. Through these exchanges, he played a key role in raising the global profile of Ainu art.

Bikky was born Sunazawa Hisao. He adopted the name “Bikky,” meaning “frog” in the Ainu language, a nickname from his childhood, and created accessories carved with his unique take on Ainu patterns. In 1953, he spent around six years in Kamakura, a region just south of Tokyo, where he was introduced to forms of avant-garde and surrealist art that strongly informed his later abstract sculptures. His parents were passionate advocates for civil rights and the return of ancestral lands. Their activism deeply influenced his work, and in the 1970s, he joined marches for Ainu rights and designed an Ainu flag to foster cultural pride.

In 1983, Bikky spent three months in British Columbia, Canada, working with Bill Reid (1920–1998), a Haida First Nations artist. He was deeply impressed by the totem poles that he saw on the Northwest Coast, and his later works demonstrate the influence of his time with First Nations artists. The totem poles he created were carved with animals important to Ainu spirituality, such as owls, bears, and orcas. One of his early totem poles, made as a memorial to former museum director Kawamura Kaneto (1893–1977), stood outside the Kawamura Kaneto Ainu Memorial Museum until it was toppled by a typhoon in 2004. A new totem pole carved by Fujito Yukio (b. 1949) in 2023 is now displayed inside the museum, along with photographs of Bikky’s

上記解説文の仮訳（日本語訳）

砂澤ビッキ

旭川市出身の砂澤ビッキ（1931-1989）は、独学の画家、彫刻家、詩人であり、20世紀を代表するアイヌ芸術家の一人でした。独特のアイヌ模様をもつ動物の彫刻で知られ、国内外のクリエイティブなコミュニティとの交流を持ちました。これらの交流を通じて、アイヌ芸術の世界的な認知度を高めることに重要な役割を果たしました。

ビッキは砂澤恒雄として生まれました。彼は、アイヌ語で「カエル」を意味する「ビッキー」という幼少の頃のあだ名を名乗り、独自の解釈を取り入れたアイヌ文様を彫り込んだ、装飾品を制作しました。1953年、東京の南に位置する鎌倉で6年ほど過ごし、そこで後に彼の抽象彫刻を強く特徴づけた、前衛芸術やシュルレアリスム芸術に触れました。彼の両親は公民権や先祖伝来の土地の返還を熱心に提唱していました。彼らの活動は彼の作品に深い影響を与え、彼は1970年代にアイヌの権利を求めるデモに参加し、文化的誇りを育むためにアイヌの旗をデザインしました。

1983年、ビッキはカナダのブリティッシュコロンビアで、ハイダ・ファーストネーションズの芸術家であるビル・レイド（1920-1998）と共に3ヶ月を過ごしました。彼は北西海岸地域で見たトーテムポールに深い感銘を受け、その後の作品にはファーストネーションズの芸術家たちとの時間の影響が表れています。彼が制作したトーテムポールには、フクロウ、ヒグマ、シャチなど、アイヌの精神文化において重要な動物が彫られていました。彼の初期のトーテムポールの一つは、元館長の川村カ子ト（1893-1977）を追悼して制作され、川村カ子トアイヌ記念館の外に設置されていましたが、2004年の台風で倒壊しました。2023年に藤戸幸夫（1949年生まれ）によって新たに彫られたトーテムポールが現在、ビッキのオリジナル作品の写真と共に館内に展示されています。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/木彫熊 その歴史

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Bear Carving

Carved wooden bears have become synonymous with Ainu art. The figures capture the animal in dynamic poses, such as poised to catch salmon or balanced on tree logs with mouth open mid-roar. While they are skillful examples of Ainu woodcarving techniques, they are also symbolic of the hardships faced by Ainu as growing numbers of Wajin (ethnic Japanese) moved to Hokkaido in the late nineteenth and twentieth centuries.

In Ainu spirituality, bears are considered the manifestation of *kimunkamuy*, the spirit-deity of the mountains. As with all sacred animals, they were traditionally depicted only as abstract motifs to decorate offering sticks, ceremonial headdresses, and other items used for ritual purposes. It was believed that naturalistic depictions of these animals could be possessed by evil *kamuy* (spirit-deities) and cause harm. However, Ainu began carving bears for sale in the early 1900s as a means to make a living.

As Hokkaido became increasingly settled by Wajin in the nineteenth century, Ainu ancestral land was requisitioned, and Ainu were banned from hunting and fishing which they relied on to support themselves. Some people left the area to find work; others tried to make ends meet by selling handcrafted items to tourists. Woodcarvers initially sold everyday items, such as chopsticks, trays, and plates, but diversified into ornamental figures as tourism developed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

熊の彫刻

木彫りの熊はアイヌ芸術の代名詞となっています。鮭を捕まえようとする姿勢や、木の丸太の上でバランスを取りながら吠えている姿など、動的なポーズで動物が表現されています。これらの彫刻はアイヌの木彫り技術の優れた例証であると同時に、19世紀後半から20世紀にかけて和人（民族的日本人）の北海道への移住が増加する中でアイヌが直面した苦難を象徴するものでもあります。

アイヌの精神文化において、熊は「キムンカムイ」（山の神）の化身とされています。他の神聖な動物と同様に、クマは伝統的には捧酒箸、儀式用の頭飾り、その他の儀式用具を飾る抽象的なモチーフとしてのみ表現されていました。これらの動物を写実的に描写すると、邪悪な「カムイ」（神々）が宿り、害をもたらす可能性があると考えられていました。しかし、1900年代初頭、アイヌは生計を立てる手段として、販売用の熊の彫刻を作り始めました。

19世紀に和人による北海道の開拓が進むにつれ、アイヌの先祖伝来の土地は接収され、彼らが頼りにし、生活を支える狩猟や漁労が禁止されていきました。仕事を探すためにその地域を離れる人々もいれば、観光客に手工芸品を売って何とか生計を立てようとした人々もいました。木彫り職人たちは当初、箸や盆、皿などの日用品の販売をしましたが、観光業の発展とともに装飾的な置物へと制作の幅を広げていきました。

024-034

The Kawamura Family—Preserving Ainu Culture for the Future

一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/川村家について（イタキシロマ、カネトウアイヌ、シンリツ・エオリパク・アイヌ）

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

The Kawamura Family—Preserving Ainu Culture for the Future

Until the late nineteenth century, the Ainu of the Asahikawa region lived in villages along the Ishikari River. As Asahikawa developed in the early twentieth century and their land was requisitioned by the government, people living in these villages were forced to relocate multiple times. The Kawamura Kaneto Ainu Memorial Museum stands on land that was once part of a village called Cikapuni Kotan (near the center of the present-day city of Asahikawa). In 1916, Kawamura Itakishiroma (?–1943), the village head of Cikapuni Kotan, built a small museum next to his home. His mission was to preserve Ainu culture and correct common misconceptions among visiting Wajin (ethnic Japanese).

Itakishiroma's son Kaneto (1893–1977) succeeded his father as museum director in 1944. Kaneto promoted Ainu culture in Asahikawa through events including dance performances and rituals such as Iomante (sending-back ceremonies for the spirit-deities of bears). In 1964, he hosted the Hokkaido Ainu Festival in Asahikawa, a five-day festival attended by over 500 people of Ainu heritage from around Hokkaido. They participated in traditional rituals and memorial services, storytelling competitions, woodcarving contests, and a conference on Ainu culture.

Before Kaneto took over the museum, he was a railway surveyor. During his career, he worked in Hokkaido, Nagano, Sakhalin, and Korea. According to contemporaneous accounts, he was paid only half the salary of his Wajin coworkers, due to discrimination against Ainu. Despite this, he managed to save enough money to expand the museum when he became the director.

Kaneto's activism extended beyond cultural preservation. He played a significant role in asserting Ainu identity and rights by making the museum a space where traditional practices and knowledge could be maintained and shared. His work has been continued by his descendants, particularly his son, Kenichi (1952–2021), who was the third-generation director. Kenichi built a traditional Ainu house (*cise*) on the museum grounds with local volunteers, fostering cooperation between Ainu and other members of the community. He held Ainu language classes and organized exchanges with Indigenous peoples outside Japan, including those in Hawaii and other parts of the United States, Canada, and Taiwan.

Kenichi's son Haruto (b. 1999) took over as director of the museum after his father's death. He continues his father's work through demonstrations of Ainu culture, including the gathering and preparation of plants, woodcarving, and continuing the annual Asahikawa Ainu Culture Festival, established by his father in 1998.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

川村家—アイヌ文化を未来へ継承する

19世紀後半まで、旭川地域のアイヌは石狩川沿いの集落で暮らしていました。20世紀初頭に旭川が発展するにつれ、彼らの土地は政府により接収され、これらの集落に住んでいた人々は、幾度も移住を強いられました。川村カ子ト記念アイヌ民族資料館は、かつてチカプニコタン（現在の旭川市の中心部付近）と呼ばれた集落の一部だった土地に建っています。1916年、チカプニコタンの村長であった川村イタキシロマ（?-1943年）は、自宅の隣に小さな博物館を建設しました。彼の使命は、アイヌ文化を保存し、訪れる和人（民族的日本人）の間に広がる一般的な誤解を正すことでした。

イタキシロマの息子であるカ子ト（1893 -1977）は、1944年に父の後を継いで館長となりました。カ子トは舞踊の公演や「イオマンテ」（熊の神々を送る儀式）などの儀式を含むイベントを通じて、旭川でアイヌ文化の振興に努めました。1964年には旭川で北海道アイヌ民族祭を主催し、この5日間の祭りには北海道各地から500人以上のアイヌが参加しました。参加者たちは伝統的な儀式や慰霊祭、ストーリーテリングの競技会、木彫りのコンテスト、そしてアイヌ文化に関する会議に参加しました。

カ子トは博物館を引き継ぐ前は鉄道測量士でした。彼は在職中、北海道、長野、樺太、そして韓

国で働きました。当時の記録によると、アイヌに対する差別により、彼には和人の同僚の半分の給料しか支払われなかったとされています。そのような状況にもかかわらず、館長になった時には博物館を拡張するのに十分な資金を貯めていました。

カ子トの活動は文化保存にとどまりませんでした。彼は、伝統的な習慣や知識を維持し共有できる場として博物館を位置づけることで、アイヌのアイデンティティと権利を主張する上で重要な役割を果たしました。彼の活動は子孫たちによって継承され、特に三代目館長となった息子の兼一（1952-2021）によって引き継がれました。兼一は地域のボランティアとともに博物館の敷地内に伝統的なアイヌの家屋（チセ）を建て、アイヌと地域社会の他のメンバーとの協力関係を育みました。アイヌ語教室を開催し、ハワイやアメリカの他の地域、カナダ、台湾など、日本国外の先住民との交流を組織しました。

兼一の息子である晴道（1999年生まれ）は、父の死後、博物館の館長を引き継ぎました。彼は植物の採取や調理法の実演、木彫り、そして1998年に父が創設した年次の旭川アイヌ文化フェスティバルの継続など、父の活動を引き継いでいます。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/先祖供養

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Funeral Practices and Ancestor Memorials

In Ainu spirituality, everything has a *ramat*, or spirit. When plants and animals die, their *ramat* returns to the realm of *kamuy* (spirit-deities) to be born again. When people die, it is believed that their *ramat* travels to the afterlife, where it joins the spirits of their ancestors. In the afterlife, the seasons and the time of day are opposite to that of the world of the living.

Traditionally, funerals were held at home, next to the open hearth. The hearth fire was the domain of *kamuyhuci*, a source of life and the protector of the home. The deceased was dressed in white and then wrapped in a large reed mat for burial. Personal belongings of the late relative, such as their clothing, tools, tobacco pipes, and cooking utensils, were broken to release each item's *ramat* so that they could accompany the spirit of the deceased into the afterlife. Friends and family would gather at the home to share stories and make offerings to *kamuy* for the deceased to have a comfortable afterlife.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

葬儀の慣習と先祖供養

アイヌの精神文化では、すべてのものに「ラマツ」（魂）が宿ると考えられています。植物や動物が死ぬと、その「ラマツ」は「カムイ」（神々）の世界に戻り、再び生まれ変わります。人が死ぬと、その「ラマツ」は死後の世界へ旅立ち、先祖の霊と合流すると信じられています。死後の世界では、季節や時間は生者の世界とは反対になっています。

アイヌの伝統的な葬儀は、家の中の囲炉裏の傍らで執り行われました。囲炉裏の火は「カムイフチ」の領域であり、生命の源であり、家の守護者でした。故人は白装束を着せられ、大きな莫座に包まれて埋葬されました。故人の衣服や道具、煙管、調理器具などの遺品は壊されました。これは各々の「ラマツ」を解放し、故人の魂と共に死後の世界へ旅立てるようにするためでした。友人や家族は故人の家に集まり、故人にまつわる思い出を語り合い、故人が安らかな死後の世界を過ごせるよう「カムイ」に供物を捧げました。

024-036

Kamuy and the Ainu: Spiritual Harmony with Nature

一般社団法人大雪カムイミタラDMO

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/カムイ

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Kamuy and the Ainu: Spiritual Harmony with Nature

At the heart of Ainu spirituality is a deep respect for the harmony between the physical and spiritual worlds. Ainu believe that all things in the natural world have a *ramat*, or spirit, including animals, plants, natural phenomena, and even objects. Among these, some are revered as *kamuy* (spirit-deities), believed to visit the human world in temporary forms (as animals, plants, weather, and even tools), providing gifts essential for survival such as meat, furs, and materials for weaving and woodworking.

In return for these gifts, Ainu perform rituals and make offerings to maintain mutually beneficial relationships with *kamuy*. Two of the most highly revered *kamuy* are the brown bear, the spirit-deity of the mountains (*kimunkamuy*), and the Blakiston's fish owl, which protects the village (*kotankorkamuy*).

The Iomante ceremony, in which the spirit of a *kamuy* is sent back to its realm, is one of the most important rituals in Ainu culture. This multiday ceremony includes prayers, songs, dances to entertain the *kamuy*, and offerings of gratitude. The *kamuy* is honored and sent off with respect in the hope that they will return, bringing new gifts and blessings to the human world.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

カムイとアイヌ：自然との精神的な調和

アイヌの精神文化の中心には、物質界と精神界の調和に対する深い敬意があります。アイヌは、動

物、植物、自然現象、そして物に至るまで、自然界のあらゆるものに「ラマツ」（魂）が宿ると信じています。その中でも、一部は「カムイ」（神々）として崇拝され、（動物、植物、天候、そして道具などの一時的な姿で）人間界を訪れ、肉や毛皮、織物や木工の材料など、生存に不可欠な贈り物をもたらすと考えられています。

これらの贈り物への返礼として、アイヌは「カムイ」との互恵的な関係を維持するため、儀式を執り行い、供物を捧げます。最も崇拝される「カムイ」の中でも特に重要なのは、山の神（キムンカムイ）であるヒグマと、村を守護する神（コタンコロカムイ）であるシマフクロウです。

「イオマンテ」の儀式は、「カムイ」の霊をその世界へ送り返す儀式で、アイヌ文化における最も重要な儀式の一つです。この数日間にわたる儀式には、祈り、歌、「カムイ」を楽しませるための踊り、そして感謝の供物が含まれます。「カムイ」は敬意を持って送られ、新たな贈り物と祝福をもたらして人間界に戻ってくることが期待されます。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/チセ

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Cise: Ainu Homes

A typical Ainu home (*cise*) was a wooden-framed, one-room structure. The roof and walls were thatched with materials that varied by region. In the Kamikawa area, which includes the present-day city of Asahikawa, broadleaf bamboo was used for the thatching.

The interior had a dirt floor covered with dried grass and overlaid with woven reed mats for insulation. At the center of the home was a hearth for warmth, cooking, and smoking food. The hearth was considered sacred, a manifestation of *kamuyhuci*, the fire spirit-deity who protected the home and its inhabitants. Rules demonstrated respect for the hearth, such as avoiding stepping on the frame around its edge.

There were two or three windows to provide light and promote air circulation. A large window at the back of the house was reserved exclusively for *kamuy* (spirit-deities) to enter and exit. Outside this window was an altar (*nusasan*), consisting of a row of prayer sticks (*inaw*), typically supported by a wooden frame. Offerings for *kamuy* were tied to the altar.

A village typically had up to ten houses. Surrounding the houses were additional structures shared by villagers, such as storehouses, separate toilets for men and women, a waste dump for hearth ash, and drying racks for fish and other meat.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

チセ：アイヌの住居

一般的なアイヌの住居（チセ）は、木造の骨組みを持つ一室の建物でした。屋根と壁は茅葺きで、その材料は地域によって異なりました。現在の旭川市を含む上川地方では、北日本と樺太に自生する広葉竹が茅葺きの材料として使用されていました。

内部は土間で、乾燥させた草が敷かれ、その上に断熱のために編んだ莫蔭が重ねて敷かれていました。家の中心には、暖をとり、調理や食品の燻製に使用する囲炉裏がありました。囲炉裏は神聖なものとされ、家とその住人を守る火の神「カムイフチ」の化身と考えられていました。囲炉裏の周囲の枠を踏まないようにするなど、囲炉裏に対する敬意を示すための決まりがありました。

光と通気のために2、3個の窓がありました。家の裏側にある大きな窓は、「カムイ」（神々）の出入り専用とされていました。この窓の外には「ヌササン」（祭壇）があり、通常は木製の枠に支えられた「イナウ」（祈りの木幣）が並べられていました。「カムイ」への供物はこの祭壇に結び付けられました。

一つの集落には通常10軒ほどの家がありました。家々の周囲には、村人たちが共有する倉庫、男女別のトイレ、囲炉裏の灰を捨てる場所、魚やその他の肉を干すための棚など、さまざまな付属施設がありました。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/アイヌと植物

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Plants in Ainu Life

Plants were a key source of food and medicine for Ainu. They foraged for wild plants and also cultivated hardy grains such as foxtail millet and barnyard millet.

They gathered the leaves of Siberian onion (*pukusa*), butterbur, and eastern skunk cabbage to flavor soups and stews, and dug up a variety of peanut (*aha*) to boil and mix with grains. The potato-like tubers of *toma*, a species of poppy, were peeled and dried to eat later and also used to treat stomach pain and headaches.

The bulb of the giant woodland lily (*turep*) was an important source of starch and fiber through the winter months. The bulbs were harvested in the summer, then crushed and soaked in water to release their starch, which was dried and used to make porridge-like dishes. The starch was also used to treat stomach pain. The remaining fiber was fermented and dried into disks to be added to soups and stews.

From late summer through autumn, Ainu gathered wild grapes, strawberries, blue honeysuckle berries, walnuts, and other fruit and nuts. The fruit of the crimson glory vine (*hat*), a native grape, was eaten fresh, and the vines used for rope, and for weaving. The waxy berries of the Amur cork tree (*sikerpe*) were eaten fresh or dried, added to soups, or paired with bear or deer meat to add a refreshing citrus flavor. The dried berry was used to relieve stomach pain and cold symptoms.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの生活における植物

植物はアイヌにとって、栄養および薬の重要な源でした。彼らは野草を採集し、アワやヒエなどの硬い穀物も栽培しました。

スープや煮物の味付けには、「ブクサ」（ギョウジャニンニク）、フキ、ザゼンソウの葉を集め、さまざまな種類の落花生「アハ」を掘り出して茹でて穀物と混ぜて食べていました。「トマ」（ケシの一種）のイモに似た塊茎は、皮をむいて乾燥させて後で食べたり、胃痛や頭痛の治療にも使用されていました。

オオウバユリ（トウレブ）の球根は、冬の間の重要なでんぷんと繊維の供給源でした。球根は夏に収穫され、潰されて水に浸されることででんぷんが抽出されました。このでんぷんは乾燥させてお粥のような料理に使用されていました。また、このでんぷんは胃痛の治療にも使われていました。残った繊維は発酵させて円盤状に乾燥させ、スープや煮込み料理に加えられていました。

晩夏から秋にかけて、アイヌは野生のブドウ、イチゴ、ハスカップ、クルミなどの果実や木の実を採取しました。「ハッ」（ヤマブドウ）の実は、生で食べたり、その蔓はロープとして、また編むために使用されました。「シケレペ」（キハダ）のろう質の実、生で食べたり乾燥させたり、スープに入れたり、クマやシカの肉に爽やかな柑橘系の風味を加えるために組み合わせて使用されました。乾燥させた実は胃痛や風邪の症状を和らげるために使用されました。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/入墨

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Tattoos

In Ainu culture, tattoos were only for women. They were believed to protect the wearer from evil spirits, make her beautiful in the eyes of the community, indicate that she had come of age, and prepare her for the afterlife. Ainu tattooists were always women, usually grandmothers or maternal aunts. Tattooing techniques were passed down from mother to daughter.

Tattooing typically started around age twelve or thirteen, when a girl reached puberty. The tattooist used a small knife to make fine incisions along the upper lip, into which they would then rub an inky mixture typically derived from birchwood soot and mugwort. The result was a distinctive dark blue color.

Around age fifteen or sixteen an Ainu girl received a second tattoo lining her lower lip. At this stage, she was also given an embroidered headband and a beaded necklace. By around age twenty, the tattoo was completed, symbolizing her readiness for marriage. The lines around her mouth were extended toward the sides of her face, and she was presented with a more elaborate necklace for special occasions, along with metal earrings.

In 1871, the Japanese government outlawed tattoos for Ainu women as part of their measures to assimilate Ainu into Wajin (ethnic Japanese) society. According to accounts of the time, many women defied the law, as they believed they would not be able to get married or enter the afterlife without tattoos.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

入れ墨

アイヌ文化において、入れ墨は女性だけのものでした。入れ墨は邪悪な霊から身を守り、その女性を共同体の目から見て美しく、その女性が成人したことを示すとともに死後の世界に向けて準備をするものと信じられていました。アイヌの入れ墨師は常に女性で、通常は祖母か母方の叔母が務めました。入れ墨の技法は母から娘へと伝承されました。

入れ墨は通常、少女が思春期を迎える12歳か13歳頃から始められました。入れ墨師は小さな刀で上唇に細かい切り込みを入れ、そこに白樺の煤とヨモギから作られた墨を擦り込みました。その結果、特徴的な濃紺色が生まれました。

15歳か16歳頃、アイヌの少女は下唇にも入れ墨を施されました。この段階で、刺繍を施した鉢巻きとビーズの首飾りも与えられました。20歳頃までには入れ墨が完成し、それは結婚の準備ができたことを象徴していました。口の周りの線は顔の横に向かって延長され、特別な機会のためのより手の込んだ首飾りと金属の耳飾りが贈られました。

1871年、日本政府はアイヌを和人（民族的日本人）社会に同化させる政策の一環として、アイヌ女性の入れ墨を禁止しました。当時の記録によると、多くの女性たちは入れ墨がなければ結婚できず、死後の世界にも行けないと信じていたため、この法律に従うことを拒みました。

024-040

Totem Pole by Fujito Yukio

一般社団法人大雪カムイインタラDMO

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/トーテムポール

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Totem Pole by Fujito Yukio

A 6.6-meter-tall totem pole was carved by Fujito Yukio (b. 1949) in 2023. It recreates the design of an earlier totem pole carved in 1979 by Ainu artist Sunazawa Bikky (1931–1989) to commemorate the former museum director Kawamura Kaneto (1893–1977).

The original totem pole was 10 meters tall and stood outside the museum until it was toppled by a typhoon in 2004. Sunazawa Bikky designed the pole but asked other Ainu woodcarvers to help create the work so that it would be a collaborative project.

The carved motifs on both the original and the new totem poles reflect Ainu spirituality. At the top is an owl, the *kamuy* (spirit-deity) that protects the Ainu village. Below it is the symbol of the Kawamura family: a stylized orca's dorsal fin. A dugout canoe frames two key figures—a bear's head, representing the *kamuy* of the mountains, and an orca, the *kamuy* of the seas. Photographs of the original totem pole are displayed alongside Fujito's replacement.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藤戸幸夫によるトーテムポール

6.6メートルの高さのトーテムポールは、藤戸幸夫（1949年生まれ）によって2023年に制作されました。これは、元館長の川村カ子ト（1893 -1977）を追悼するために、アイヌの芸術家である砂澤ビッキ（1931-1989）が1979年に制作した以前のトーテムポールのデザインを再現したものです。

オリジナルのトーテムポールは高さ10メートルで、2004年に台風で倒壊するまで博物館の外に立っていました。砂澤ビッキはトーテムポールをデザインしましたが、共同制作となるよう、他のアイヌの木彫り職人たちに制作の協力を依頼しました。

オリジナルと新しいトーテムポールの両方に彫られたモチーフは、アイヌの精神文化を反映しています。最上部にはアイヌの村を守護する「カムイ」（神）であるフクロウが配置されています。その下には川村家の象徴である様式化されたシャチの背びれが彫られています。丸木舟には2つの重要な図像が収められており、山の「カムイ」を表すヒグマの頭部と、海の「カムイ」であるシャチが彫られています。藤戸の新作と共に、オリジナルのトーテムポールの写真も展示されています。

024-041

Hokkaido: Prehistory to the Early Modern Period 一般社団法人大雪カムイミントラDMO

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/北海道の歴史古代～近世

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Hokkaido: Prehistory to the Early Modern Period

Northern Japan's prehistoric peoples gradually adopted new lifestyles after their initial migration some 30,000 years ago. They shifted from roving in pursuit of large mammals to establishing settlements and engaging in hunting, fishing, and gathering. Culture and society changed as well to suit increasingly settled lifestyles. Around 13,000 BCE, the use of pottery marked the beginning of the Jomon period (13,000–300 BCE). Early pottery was simple and utilitarian, but over time, more intricate designs appeared.

As settlements developed and became more populous, communities began trading more extensively, using Hokkaido's waterways to exchange furs, tools, and raw materials like obsidian. By the Epi-Jomon period (300 BCE–600 CE), trade networks connected Hokkaido with Japan's main island of Honshu, where agrarian societies were engaged in metalworking. Access to iron tools and other advanced technologies from Honshu allowed Epi-Jomon communities to enhance their hunting, fishing, and farming techniques.

During the Satsumon period (600–1200 CE), salmon became a valuable trade commodity. Satsumon people adopted iron tools, textiles, and clay cooking stoves from Honshu. They also interacted with the Okhotsk people around the Sea of Okhotsk, Sakhalin, the Kuril Islands, and northern Hokkaido. These people specialized in hunting seals, whales, and other marine mammals. Over time, a shared culture emerged, and some scholars believe that the exchange between the Okhotsk and Satsumon peoples played a role in the formation of Ainu culture.

北海道：先史時代から近世まで

北日本の先史時代の人々は、約3万年前に最初に移住した後、徐々に新しい生活様式を取り入れました。彼らの生活は、大型哺乳類を追って放浪するものから、集落を築き、狩猟、漁労、採集に従事するものへと変化しました。文化や社会も、定住化したライフスタイルに合わせて変化していきました。紀元前13,000年頃、土器が使われるようになり、縄文時代（紀元前13,000年～紀元前300年）が始まりました。初期の土器はシンプルで実用的なものでしたが、時間の経過とともに、より複雑なデザインが現れるようになりました。

集落が発展し人口が増加するにつれ、共同体はより広範な交易を始め、北海道の水路を利用して毛皮、道具、黒曜石などの原材料を交換していました。エピソード縄文時代（紀元前300年～紀元後600年）までには、北海道は、農耕社会が金属加工に従事していた本州と交易網でつながっていました。本州からの鉄器や他の先進的な技術の入手により、続縄文時代の共同体は狩猟、漁労、農耕の技術を向上させることができました。

擦文時代（600年～1200年）には、サケは価値のある交易品となりました。擦文の人々は本州から鉄器、織物、土製の調理用かまどを取り入れました。また彼らは、オホーツク海、樺太、千島列島、北海道北部周辺のオホーツク人とも交流を持ちました。これらの人々はアザラシ、クジラ、およびその他の海棲哺乳類の狩猟を専門としていました。時間の経過とともに共通の文化が生まれ、一部の研究者は、オホーツク人と擦文の人々との交流がアイヌ文化の形成に役割を果たしたと考えています。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/北海道の歴史近現代史

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Hokkaido: Nineteenth Century to Now

In 1869, the Meiji government (newly established the previous year) made Ezo an official part of Japan and renamed it Hokkaido. This was a pivotal moment for Ainu, as it ushered in an era of hardship and cultural assimilation. Declared Japanese citizens, they were stripped of their ethnic identity. Their traditional hunting and fishing grounds were taken away, and their children were required to speak only Japanese in school.

For generations, Ainu had lived in harmony with the land, relying on its natural resources. However, the arrival of government-employed farmer-soldiers, known as *tondenhei*, drastically altered their way of life. The *tondenhei* were tasked with clearing forests for agriculture and defending Japan's northern border from Russian threats, but for the Ainu, they represented the confiscation of their ancestral lands and loss of their autonomy.

In 1899, the government introduced the Hokkaido Former Aborigine Protection Act, presented as a means of protecting the Ainu but effectively assimilating them into Japanese culture. Ainu were assigned Japanese names, encouraged to take up farming, and discouraged from speaking their native language. Despite these efforts, Ainu culture has endured. Throughout the twentieth century, Ainu activists protested and petitioned for the return of their lands and the repeal of the Hokkaido Former Aborigine Protection Act, which was finally abolished in 1997. Today, crafts, rituals, and oral traditions preserve Ainu history and culture for future generations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北海道：19世紀から現代まで

1869年、明治政府（前年に新しく発足）は正式に蝦夷地を日本の一部とし、北海道と改名しました。これはアイヌにとって転換点となり、苦難と文化的同化の時代の始まりとなりました。日本国民として宣言されたアイヌは、民族的アイデンティティを奪われました。伝統的な狩猟地や漁場は取り上げられ、子どもたちは学校で日本語のみを話すことを強制されました。

何世代にもわたり、アイヌは土地と調和して暮らし、その自然資源に頼って生活してきました。しかし、屯田兵として知られる政府が後援する農民兵士の到来は、彼らの生活様式を劇的に変えてしまいました。屯田兵は農地開拓のための森林伐採と、ロシアの脅威からの日本の北方国境の防衛という任務を負っていましたが、アイヌにとって彼らは先祖伝来の土地の没収と自治の喪失を意味していました。

1899年、政府は北海道旧土人保護法を制定しました。これはアイヌを保護する手段として提示されましたが、実質的には彼らを日本文化に同化させるものでした。アイヌには日本名が与えられ、農業を営むことを奨励され、母語を話すことは抑制されました。このような政策にもかかわらず、アイヌ文化は存続してきました。20世紀を通じて、アイヌの活動家たちは土地の返還と北海道旧土人保護法の廃止を求めて抗議と請願を続け、保護法は1997年についに廃止されました。今日、工芸、儀式、口承伝統は、アイヌの歴史と文化を次世代のために継承しています。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/アイヌと星

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu and the Stars

The Ainu used the stars for both navigation and storytelling. Constellations were seen as depicting mythological figures, animals, and aspects of daily life. In Asahikawa, the Ainu name for the North Star is Poronociw, meaning “great star.” The nearby Big Dipper is known as Upoponociw or “dancing stars,” whose seven bright stars are believed to represent seven girls joyfully singing and dancing in a circle. The Pleiades cluster, called Arwannociw, tells a contrasting story of seven girls portrayed as lazy, fleeing from their farming duties.

Some stars are closely tied to the joys and sorrows of Ainu life. Venus, traditionally known as Onumannociw (“evening star”), took on a new name during the eighteenth century: Suwaranociw. During the peak autumn salmon fishing season, Ainu laborers at commercial fisheries in Ishikari Bay were not allowed to rest until around 9:00 p.m., which is when Venus disappeared from the western sky in those days. This star became a symbol of the exploitation of Ainu workers by Wajin (ethnic Japanese) and their separation from loved ones. “Suwara” was the name of the Wajin site manager who oversaw the grueling labor. For Ainu, Suwaranociw serves as a somber reminder of the hardships endured by their ancestors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌと星々

アイヌは航海と物語の両方に星を利用していました。星座は神話上の人物や動物、日常生活の様相を描いていると考えられていました。旭川では、北極星のアイヌ名は「大きな星」を意味する「ポ

ロノチウ」です。近くにある北斗七星は「踊る星」を意味する「ウポポノチウ」として知られ、その7つの明るい星は、輪になって楽しく歌い踊る7人の少女を表すと信じられています。プレアデス星団は「アラワンノチウ」と呼ばれ、農作業から逃げ出した怠け者の7人の少女という対照的な物語を伝えています。

一部の星々はアイヌの生活の喜びと悲しみに密接に結びついています。金星は伝統的に「オヌマンノチウ」（宵の明星）として知られていましたが、18世紀になると「スワラノチウ」という新しい名前を持つようになりました。秋のサケ漁が最盛期を迎える季節、石狩湾の商業漁場で働くアイヌの労働者たちは、その時期には西の空から金星が消える午後9時頃までは休むことを許されませんでした。この星は和人（民族的日本人）によるアイヌ労働者の搾取と、愛する者たちとの離別の象徴となりました。「スワラ」は、過酷な労働を監督していた和人の現場管理人の名前でした。アイヌにとって、スワラノチウは先祖たちが耐え忍んだ苦難を思い起こさせる重い記憶となっています。

024-044

Ikupasuy: Offering Sticks to Commune with *Kamuy*

一般社団法人大雪カムイミンタラDMO

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/イクパスイ

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ikupasuy*: Offering Sticks to Commune with *Kamuy

In Ainu culture, the realms of humans and *kamuy* (spirit-deities) are intertwined, and *ikupasuy* serve as vital tools in maintaining this connection. *Ikupasuy* are ceremonial objects used to convey human prayers to *kamuy*.

Traditionally, *ikupasuy* are crafted from Japanese yew or willow wood. Between 30 and 40 centimeters in length and 3 to 4 centimeters wide, they have a flattened shape with rounded edges, tapering at one end. Each *ikupasuy* is adorned with carvings that represent the owner, so that the *kamuy* will recognize their prayers. The carvings range from realistic depictions to abstract designs, often featuring animals revered in Ainu culture, such as bears, orcas, otters, birds, fish, and snakes.

During rituals, Ainu men dip the tip of *ikupasuy* into alcohol and sprinkle it over wooden prayer sticks (*inaw*), which are implements that mediate between humans and *kamuy*. Through *ikupasuy*, Ainu express gratitude, seek guidance, and pray for good fortune.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

イクパスイ：カムイと交わるための捧酒箸

アイヌ文化において、人間と「カムイ」（神々）の世界は密接に結びついており、「イクパスイ」はその関係を維持する重要な道具として機能します。「イクパスイ」は人間の祈りを「カムイ」に伝える儀式用具です。

伝統的に「イクパスイ」はイチイやヤナギの木で作られます。長さ30から40センチメートル、幅3から4センチメートルで、端が丸められた平たい形をしており、一方の端は先細りになっています。それぞれの「イクパスイ」には「カムイ」が所有者の祈りを認識できるよう、所有者を表す彫刻が施されています。彫刻は写実的な描写から抽象的なデザインまで多岐にわたり、アイヌ文化で崇拝されているヒグマ、シャチ、カワウソ、鳥、魚、蛇などの動物がしばしば描かれます。

儀式の際、アイヌの男性たちは「イクパスイ」の先端を酒に浸し、人間と「カムイ」の間を仲介する道具である「イナウ」（祈りの木幣）の上に振りかけます。「イクパスイ」を通じて、アイヌは感謝を表し、導きを求め、幸運を祈ります。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/
人物の紹介（荒井源次郎，門野家の人々）
【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Activists

From the late nineteenth century onwards, Ainu suffered many hardships as they were forcibly displaced from their lands and assimilated into Japanese society. Despite this, activists found ways to fight for the language, culture, and lands of their people.

Fighting for Ainu rights

Arai Genjiro (1901–1991) was a scholar and activist from the city of Asahikawa. He was also the first Ainu to work in local government. In the 1930s, he traveled to Tokyo with Sunazawa Peramonkoro (1897–1971) and Sunazawa Toa-kanno (1893–1953), the parents of artist Sunazawa Bikky (1931–1989), to protest for the return of Ainu land. Throughout his life, Arai fought for the repeal of the Hokkaido Former Aborigines Protection Act of 1899. This act was enacted under the guise of protecting Ainu but led to land confiscation and erosion of their traditional culture. It was finally abolished in 1997.

Preserving language and culture

Textile artist Sunazawa Peramonkoro supported Ainu women by teaching them sewing and embroidery. She was revered for her knowledge of oral epics and stories, which she passed on to Ainu scholars. She and her husband Toa-kanno were featured in Arai Genjiro's book *Ainu Jinbutsu-den* (Ainu Biographies).

Monno Nanke (1881–1963) and his wife Harue (1887–1968) were among the last generation of Ainu to speak the Ainu language. Monno Nanke inherited traditional

practices and culture from his grandfather, village leader Kucinkoro (1792–1867). Kucinkoro is revered for persuading government officials in 1869 to abandon plans to relocate the Ainu of Asahikawa from their ancestral lands along the upper Ishikari River.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの活動家

19世紀後半以降、アイヌは土地から強制的に追われ、日本社会への同化を強いられる中で多くの苦難を経験しました。しかし、そのような状況下でも活動家たちは、アイヌの人々の言語、文化、土地のために闘う方法を見出していました。

アイヌの権利のために闘う

新井源次郎（1901-1991）は旭川市出身の学者であり活動家でした。彼はまた、地方自治体で働いた最初のアイヌでもありました。1930年代、彼は芸術家の砂澤ビッキ（1931-1989）の両親である砂澤ペラモンコロ（1897-1971）と砂澤トアカノ（1893-1953）と共に東京へ赴き、アイヌの土地の返還を求めて抗議活動を行いました。生涯を通じて、新井は1899年の北海道旧土人保護法の廃止を求めて闘いました。この法律はアイヌを保護するという名目で制定されましたが、土地の没収と伝統文化の衰退を招きました。この法律は最終的に1997年に廃止されました。

言語と文化を保護する

織物芸術家の砂澤ペラモンコロは、アイヌの女性たちに裁縫や刺繍を教えることで彼女たちを支援しました。彼女は口承叙事詩と物語の知識を持つ人物として尊敬され、それらをアイヌ研究者たちに伝えました。彼女と夫のトアカノは、新井源次郎の著書『アイヌ伝記』で紹介されています。

門野ナンケ（1881-1963）と妻のハルエ（1887-1968）は、アイヌ語を話す最後の世代の上川アイヌの一人でした。門野ナンケは、祖父である村長のクチンコロ（1792-1867）から伝統的慣行および文化を受け継ぎました。クチンコロは1869年、政府高官に対して、旭川のアイヌを石狩川上流の先祖伝来の土地から移住させる計画を断念するよう説得したことで尊敬されています。

【タイトル】 川村カ子トアイヌ記念館/アイヌの物語

【想定媒体】 アプリ・QRコード

できあがった英語解説文

Ainu Stories and Oral History

Ainu traditionally preserved their history and traditions through oral storytelling. Passed down through generations, these stories often reflected the deep connection between people and *kamuy* (spirit-deities).

Some were mythological interpretations of historical events. In one tale from Asahikawa, a cuckoo warns an Ainu child about an impending tsunami. The child and their mother flee together to the mountains and hide in a pine tree. By morning, though many homes have been swept away, they are safe, saved by the cuckoo, a *kamuy* in bird form. The story is believed to reference a tsunami that struck Ishikawa Bay in 1834.

Stories and epics

Ainu oral stories are classified into three broad categories: heroic epics, mythic epics, and prose tales. Heroic epics, known as *yukar*, involve daring protagonists in dramatic situations. Performers sing these tales to their own melody, using wooden blocks for percussive emphasis. Mythic epics, called *kamuyyukar* or *oyna*, are told from the perspective of *kamuy*. They are sung to repetitive melodies and often include onomatopoeic refrains. Everyday prose tales called *uepeker* or *tuytak* are recited in a conversational tone. Some serve as moral tales, focusing on humans and their relationships with *kamuy*.

Preserving culture through storytelling

The Meiji government's assimilation policies that began in 1869 discouraged Ainu language and traditions, diminishing this form of storytelling. However, efforts by Ainu scholars to record these stories in written form, such as *Ainu shin'yoshu* (Collection of Ainu Chants of Spiritual Beings) by Chiri Yukie (1903–1922), have saved many of these stories for the future.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

アイヌの物語と口承の歴史

アイヌは、伝統的に口承によって歴史と伝統を保存してきました。世代を超えて受け継がれてきたこれらの物語は、しばしば人々と「カムイ」（神々）との深いつながりを反映していました。

あるアイヌ伝説は歴史的な出来事を神話的に解釈したものでした。旭川に伝わる物語の一つでは、カッコウが津波の到来をアイヌの子供に警告します。子供と母親は共に山に逃げ、松の木に隠れます。翌朝には多くの家が流されていましたが、彼らは鳥の姿をした「カムイ」であるカッコウのおかげで無事でした。この物語は1834年に石狩湾を襲った津波に関連していると考えられています。

物語と叙事詩

アイヌの口承物語は、英雄叙事詩、神謡、散文説話の3つの大きな分類に分けられます。「ユーカラ」として知られる英雄叙事詩は、劇的な状況下での勇敢な主人公の物語です。語り手は独自の旋律で歌い、木製の拍子木で強調を付けます。「カムユーカラ」または「オイナ」と呼ばれる神謡は、「カムイ」の視点から語られます。これらは繰り返しの旋律で歌われ、しばしば擬音語の後コーラス部を含みます。「ウエペケレ」や「トゥイタク」と呼ばれる日常的な散文説話は、会話調で語られます。その中には、人間と「カムイ」との関係に焦点を当てた教訓譚もあります。

物語を通じた文化の保存

1869年に始まった明治政府の同化政策は、アイヌの言語と伝統を抑制し、このような語り継ぎの形式を衰退させました。しかし、知里幸恵（1903 -1922）による『アイヌ神謡集』（アイヌの聖なる存在の詠唱集）などのように、アイヌの研究者たちがこれらの物語を文字に記録する努力をしたことで、多くの物語が後世に残されることになりました。

地域番号	025	協議会名	登米市	
解説文番号		タイトル	ワード数	想定媒体
025-001		教育資料館（旧登米高等尋常小学校校舎）	1～250	QRコード
025-002		伝統芸能伝承館「森舞台」	250～500	QRコード
025-003		警察資料館（旧登米警察署庁舎）	1～250	QRコード
025-004		水沢県庁記念館（旧水沢県庁庁舎）	1～250	QRコード
025-005		登米懐古館	250～500	QRコード
025-006		登米の街並み	1～250	QRコード
025-007		米川の水かぶり	250～500	QRコード
025-008		隠れキリシタンの里	250～500	QRコード
025-009		はっと・油麴	1～250	QRコード
025-010		高倉勝子美術館	1～250	QRコード
025-011		春蘭亭	1～250	QRコード

025-001

Meiji Village Education Museum

登米市

【タイトル】教育資料館（旧登米高等尋常小学校校舎）

【想定媒体】QRコード

できあがった英語解説文

Meiji Village Education Museum

The Toyoma Higher Elementary School was housed in this U-shaped building from 1888 to 1973. Although the school has closed, the Meiji Village Education Museum has recreated several of its classrooms to illustrate how school life has changed along with society, showcasing everything from the history of school lunches to the different models of sewing machines that were used for teaching vocational skills. Textbook pages and homework displayed along the walls offer a glimpse into how elementary school students in past eras experienced World War II and other historical events.

The building was constructed under the supervision of Yamazoe Kisaburō (1843–1923), an architect from Echigo Province (now Niigata Prefecture). Together with his mentor, the master carpenter Matsuo Ihei, Yamazoe went to Europe to build the Japanese pavilion for the 1873 Vienna World Exposition. He remained in Europe to study Western architecture and went on to construct Western-style buildings in Japan.

A strict taskmaster and perfectionist, Yamazoe demanded that each roof tile of this building be weighed, soaked in water, and weighed again to measure how much water it would absorb before declaring it fit for use. His uncompromising attitude caused some problems: There are multiple accounts of aggravated workers removing the ladders and leaving Yamazoe stuck on the school roof to vent their frustration.

Despite the conflicts, the building was completed, and today it is a fine example of blended Western and Japanese design elements, which was characteristic of architecture in the Meiji period (1868–1912). It is now a symbol of Tome's Miyagi Meiji Village, and in 1981, it was nationally designated an Important Cultural Property.

Photography is encouraged throughout the museum and grounds.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治村教育資料館（旧登米高等尋常小学校校舎）

このU字型の建物は1888年に建てられ、当時の登米高等尋常小学校が入っていました。学校としての使用は1973年に終了しましたが、明治村教育資料館では、いくつかの教室を再現し、社会の変化とともに学校生活がどのように変わったかを示しています。学校給食の歴史から、職業技術を教えるために使われた様々な縫製機（ミシン）のモデルに至るまで展示されています。壁に掲示された教科書のページや宿題は、過去の時代の小学生たちが第二次世界大戦やその他の歴史的出来事をどのように体験したかを垣間見ることができます。

この建物は、越後（現在の新潟県）の建築家、山添喜三郎（1843–1923）の監督の下に建設されました。彼は師匠である大工の松尾伊兵衛と共に、1873年のウィーン万国博覧会の日本館を建設するためにヨーロッパに渡りました。その後、ヨーロッパに残り、西洋建築を学び、日本において西洋風の建物を建てるようになりました。

厳格な監督者で完璧主義者であった山添は、この建物の屋根瓦が使用に適するかどうかを判断するため、すべての瓦を計量し、水に浸して再度計量し、どれだけ水分を吸収するかを測定するように命じました。その妥協しない態度は問題を引き起こしました。労働者たちが不満を募らせ、梯子を取り外して山添を屋根に取り残すという事例や川に人力車ごと放り込まれるという事例があります。それにもかかわらず、建物は完成し、現在では西洋と日本のデザイン要素を融合させた明治時代（1868–1912）の建築スタイルの良い例として評価されています。現在、この建物は宮城県の明治村のシンボルとなっており、1981年には国の重要文化財に指定されました。資料館とその敷地内では、写真撮影が奨励されています。

025-002

Noh Stage in the Forest (Mori Butai)

登米市

【タイトル】 伝統芸能伝承館「森舞台」

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Noh Stage in the Forest (Mori Butai)

This performing arts center is known as Mori Butai, “the forest stage.” It was built in 1996 as a venue for Toyoma Noh, Tome’s local style of Noh theater performed by amateur actors. The internationally renowned architect Kuma Kengo designed the complex, including the Noh stage and surrounding buildings. In addition to drawing attention to the wooded surroundings, it was also designed to emphasize the space—a kind of void—between actor and audience. The complex was awarded a prize for design excellence by the Architectural Institute of Japan in 1997.

Noh was developed in the fourteenth century, and at that time, it was solely performed outdoors. However, many present-day Noh theaters are housed within large buildings, and only the stage’s roof and other design elements offer symbolic hints at the art form’s open-air origins. Kuma purposely reversed this trend by positioning the stage at the edge of a centuries-old forest. The natural setting allows for a range of theatrical experiences that vary with the changing seasons. In spring, petals from a giant weeping cherry tree scatter before the performers; in summer, the cries of cicadas blend with the sound of the Noh chants; and in autumn, the harvest moon shines over torchlit nighttime performances.

Kuma incorporated innovative design elements while respecting traditional Noh stage architecture. The pillars are made from Aomori *hiba* cypress, and the roof is covered with slate that was quarried in the Toyoma area. The large *mizugame* ceramic jars beneath the stage are usually hidden, but here they are fully exposed to the audience. They serve both as resonance devices to amplify the sound of the actors’ stamping feet and as visually striking elements of the architectural composition. Crushed black

stones replace the typical white gravel that surrounds the Noh stage, and this evokes the darkness of the forest floor.

On the backboard of the stage, a painting by the artist Senju Hiroshi depicts an ancient pine tree, composed so that its branches appear to stretch into the forest itself. On a side wall, bamboo plants rendered in cobalt blue symbolize youth and freshness. Open-air terraced seating to the side and a glassed-in, tatami-floored viewing hall in front of the stage add modern elements to the complex.

The hall is open for public viewing when there are no performances, and many people visit to appreciate the architecture or to use the venue for weddings or cosplay photoshoots (applications required). An exhibition room on the first floor displays Noh-related materials, including costumes and masks. In addition to supporting the Toyoma Noh community-theater tradition, Mori Butai also stages professional Noh productions by visiting performers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

伝統芸能伝承館 森舞台

この伝統芸能伝承館は「森舞台」として知られています。1996年に、地元の能楽スタイルである「登米能」のための劇場として建設されました。登米能は、アマチュアの俳優によって演じられる能の形式です。国際的に著名な建築家、隈研吾がこの複合施設を設計し、能舞台と周囲の建物を手掛けました。周囲の森林の景観に注目を集めると同時に、俳優と観客との心地良い空間を作り出すような設計が施されています。この複合施設は、1997年に日本建築学会からデザインの優秀さを称えて賞を受けました。

能は14世紀に発展し、その当時は屋外でのみ上演されていました。しかし、現在の能舞台は多くが大型の建物内に設けられており、舞台の屋根や他のデザイン要素が、芸術形式の屋外起源を象徴的に示すだけです。隈はこの傾向を意図的に逆転させ、舞台を何百年も続く森の端に設置しました。この自然の環境は、季節ごとに異なる舞台体験を提供します。春には大きなしだれ桜の花びらが演者の前に散り、夏にはセミの鳴き声が能の謡の音と交わり、秋には満月とかがり火の灯りが夜の公演を照らします。

隈は、伝統的な能舞台の建築を尊重しながらも革新的なデザイン要素を取り入れました。柱は青森県のヒバ材で作られており、屋根は登米で採掘されたスレートで覆われています。舞台の下にある大きな「水甕」の陶器の壺は通常隠されていますが、ここでは完全に観客に見える形で配置されています。これらは俳優の足拍子（床を踏む音）を増幅させる共鳴装置としての役割を果たし、

同時に建築的な構成の視覚的に印象的な要素ともなっています。また、能舞台の周囲に通常使われる白砂の代わりに黒い碎石が敷かれており、これが森の地面の暗さを呼び起こします。

舞台の背面板には、日本画家の千住博による古い松の木を描いた絵があり、その枝が森の中に伸びていくように構成されています。舞台の側面には、コバルトブルーで描かれた竹が若さと新鮮さを象徴しています。舞台の横にあるオープンエアのテラス席と、舞台前にあるガラス張りの畳敷きの観覧ホールは、現代的な要素を加えています。

森舞台は公演がないときには一般公開され、建築を鑑賞するために訪れる人々や、結婚式やコスプレの写真撮影を行う人々に利用されています（事前申請が必要です）。1階には、能に関連する資料や衣装、面などを展示した展示室があります。森舞台は、登米能の地域演劇の伝統を支えるだけでなく、外部のプロの能の公演も上演しています。

025-003

Meiji Village Police Museum

登米市

【タイトル】 警察資料館（旧登米警察署庁舎）

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Meiji Village Police Museum

The former Tome Police Station building, constructed in 1889, was operational for 79 years. For much of this time, rural police administration and firefighting were integrated, so the building served as both a police station and a fire station. It was restored and opened to the public as a police museum in 1987, displaying historical items from both fields of service. The building was designated a Tangible Cultural Property of Miyagi Prefecture in 1988, and the 20-meter-high fire lookout tower, dating from 1926, became a designated Cultural Property of Miyagi Prefecture in 2015.

The police station was constructed by architect Yamazoe Kisaburō (1843–1923), who was known for using a blend of Japanese and Western styles. The two-story wooden structure features clapboard siding, white-painted roof tiles, carved pillars, and a balcony above the entrance. During the restoration process, foundations of an interrogation area and detention cell dating to the Meiji period (1868–1912) were discovered, so those spaces were reconstructed. Today, these reconstructed rooms provide rare examples of architecture used for law-enforcement facilities of that period.

The exhibits offer insight into how public safety was maintained, the activities of Meiji-era criminals, and their run-ins with the law. Illustrations of local crimes, such as providing tattoos or hosting unregistered foreign guests, are displayed alongside police uniforms and sabers. In the foyer, visitors can pose for photographs on white police motorbikes or in a 1980s Nissan Skyline patrol car. There is also a small gift shop selling police-themed items.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治村警察資料館（旧登米警察署庁舎）

1889年に建設された旧登米警察署の建物は、79年間使用されていました。この期間、農村部の警察業務と消防業務が統合されていたため、この建物は警察署と消防署の両方の役割を果たしていました。1987年に修復され、警察資料館として一般公開され、警察と消防の歴史的な資料が展示されています。1988年には宮城県の有形文化財に指定され、1926年に建てられた高さ20メートルの消防監視塔（火の見櫓）は、2015年に宮城県の文化財に指定されました。

警察署は、和風と洋風を融合させた設計で知られる建築家山添喜三郎（1843–1923）によって建設されました。二階建ての木造建物は、板張りの外壁、白く塗られた屋根瓦、彫刻された柱、そして入口上にあるバルコニーが特徴です。修復過程で、明治時代（1868–1912）の取り調べ室や拘置所の基礎が発見され、これらの部屋が再建されました。現在、これらの再建された部屋は、当時の法執行施設としての建築の貴重な例を提供しています。

展示物は、公共の安全がどのように維持されていたか、明治時代の犯罪者たちの活動や法との関わりについての洞察を提供しています。刺青の提供する者や登録されていない外国人の宿泊させる者といった地域の犯罪のイラストが、警察の制服やサーベルと共に展示されています。ロビーでは、訪問者が白い警察用バイクや1980年代のニッサン・スカイラインのパトカーで写真を撮ることができます。また、警察関連のグッズを販売する小さなギフトショップもあります。

025-004

Former Mizusawa Prefectural Office

登米市

【タイトル】 水沢県庁記念館（旧水沢県庁庁舎）

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Former Mizusawa Prefectural Office

This building was established in June 1872 as the governmental office of Mizusawa Prefecture. However, it only held that role for three years. The prefecture was created in December 1871, when the Japanese prefectural system was still in flux, and Mizusawa Prefecture was dissolved just five years later.

After its short use as a prefectural office, the building served various purposes. In 1889, it became a branch office of the Ishinomaki Public Safety Court, a body that dealt with land- and property-related issues. When the building was reconstructed in 1989, it was modeled on the appearance it had in 1889. Furniture from subsequent Miyagi prefectural offices was added to represent the legal and administrative styles that later came into popular use.

The entrance is wholly Japanese in style, with an imposing gabled roof and lattice in a crisscross pattern. However, the rest of the building is a one-story wooden structure designed in the Western-inspired architectural style that characterized Meiji-era public office buildings. Informative displays, memorabilia, and old photographs offer visitors a glimpse into the building's operations over the years. A few rooms have been recreated, such as a courtroom and the bureaucratic office where citizens would submit paperwork. Unlike modern offices where visitors and clerks are positioned on the same level, the Western-style office was set high above the adjacent anteroom. Citizens submitting paperwork would stand on the ground floor in the anteroom and pass their documents up to a clerk kneeling in the window of the office above.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

水沢県庁記念館（旧水沢県庁庁舎）

この建物は、1872年6月に水沢県の政府機関として設立されましたが、その役割はわずか3年間でした。水沢県は1871年12月に設置されましたが、当時日本の県制度はまだ変動しており、わずか5年後に水沢県は廃止されました。

県庁舎としての短期間の使用後、この建物はさまざまな目的に使用されました。1889年には、土地や財産に関連する問題を取り扱う石巻治安裁判所の出張所として利用されました。1989年に建物が再建された際、当時の外観を再現する形で再建されました。その後の宮城県庁舎から移された家具も加えられ、明治時代に一般的に使用された法的および行政のスタイルを表現しています。

入口は完全に日本風のデザインで、堂々とした切妻屋根と格子状のラティスが特徴です。しかし、建物の他の部分は、明治時代の官公庁建築の特徴を持つ西洋風の建築様式で作られた一階建ての木造建物です。展示や記念品、古い写真を通じて、この建物がどのように運営されていたかが紹介されています。裁判所や市民が書類を提出する役所の事務室など、いくつかの部屋は再現されています。例えば法廷や、市民が書類を提出する官僚的な事務室などがあります。来訪者と事務員が同じ高さの位置にある現代のオフィスとは異なり、この洋風のオフィスは隣接する控え室よりも高い位置に設置されていました。書類を提出する市民は、1階にある控え室で立ちながら、上の階の事務室の窓際にひざまずく事務員に書類を渡していました。

025-005

Toyoma Nostalgia Museum (Toyoma Kaikokan)

登米市

【タイトル】 登米懐古館

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Toyoma Nostalgia Museum (Toyoma Kaikokan)

The Toyoma Nostalgia Museum houses a valuable collection of historical items, especially objects related to the warriors who governed Tome in the Edo period (1603–1867). Its collection is the enduring legacy of the industrialist and philanthropist Watanabe Masando (1892–1975).

Watanabe was the youngest of five siblings born to a farming family in Toyoma (Tome's former name). He was a skilled businessman who held many influential positions throughout his lifetime, including president of a regional development company called Tōhoku Kaihatsu (now part of Mitsubishi Materials Corporation) and president of his alma mater, Meiji University.

Watanabe donated his collection of artifacts to the town of Toyoma for the founding of this museum, which opened in 1961. He also laid down three precepts:

- 1) Sincerity is the most important thing in life
- 2) Toyoma is our home
- 3) We must never forget to approach life from the perspective of a beginner

The current museum building, opened in 2019, was designed by the renowned architect Kuma Kengo, who designed the Noh Stage in the Forest (Mori Butai) in Toyoma and the Suntory Museum of Art in Tokyo. Locally sourced materials, such as the Toyoma slate used for the roof tiles, were emphasized in the museum's construction. The modern structure also evokes elements of Toyoma's past. For example, the right angles of the building are modeled on the sharp street corners of Toyoma's layout when it was a castle town. The extended eaves offer shade and

shelter from the rain, mirroring the design features of traditional rural farmhouses, and the greenery on the roof tiles mimics the moss that thrives on thatched farmhouse roofs.

The first sight to capture visitors' attention in the entrance hall is a lavishly decorated festival cart used in Toyoma's Aki Matsuri, an autumn festival dating back to 1675. Next is a video of Kuma explaining how local craftspeople and materials are central to the museum's concept. Through the windows, the extended eaves of the roof block out the view of the sky but draw attention to the sunny garden. In contrast, the rooms of the main collection are darkened as though they are inside of a storehouse. This darkness makes the exhibited items stand out. Panel displays give context to the artifacts by tracing the history and hierarchy of the Date and Shiraishi families, who governed the region in the Edo period.

The permanent collection features rare and valuable items pertaining to Toyoma's history. Among the highlights are swords and suits of armor, such as the black-lacquered five-piece suit of iron armor that belonged to Shiraishi Munezane (1553–1599), a retainer of the Date family. The helmet of this largely blue and black ensemble is decorated with calligraphy of the character 也, meaning “to be,” rendered in flowing, elongated strokes. Among the many pieces of artwork is a painting that depicts a poem by the powerful warlord Date Masamune (1567–1636) with calligraphy by the esteemed Buddhist priest Kōgetsu Sōgan (1574–1643), and a painting by Kanō Tan'yū (1602–1674), one of the foremost painters of the Kanō school. Special exhibitions explore various aspects of the region's history, offering visitors many insights into Toyoma's past.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

登米懐古館

登米懐古館は、特に江戸時代（1603–1867）に登米を治めた武士に関連する歴史的な品々を集めた貴重なコレクションを所蔵しています。このコレクションは、実業家で慈善家である渡辺政人（1892–1975）の永続的な遺産です。

渡辺は登米の農家の家に生まれた五人兄弟の末っ子で、商才に優れ、生涯を通じて多くの影響力のある職に就きました。東北開発（現在の三菱マテリアル）という地域開発会社の社長や、母校である明治大学の理事長を務めました。

渡辺は自らの収集品を登米町（現在の登米市）に寄贈し、この博物館の設立に貢献しました。博物館は1961年に開館し、渡辺は次の教訓を遺しました：

1. 人生で一番大切なことは、誠実である
2. 登米は私達の「家」である
3. 人間は、いつも「初心」を忘れてはならない

現在の博物館の建物は、2019年に開館し、登米の「森舞台」や東京のサントリー美術館などを手掛けた著名な建築家、隈研吾によって設計されました。博物館の建設には、屋根瓦に使用された登米のスレートなど、地元の素材が強調されています。現代的な建物でありながら、登米の過去の要素を彷彿とさせるデザインも施されています。例えば、建物の入り口の直角のデザインは、かつて城下町だった登米の街並みの特徴を模しており、延長された軒先は、伝統的な農家のデザインを反映して、日差しを遮り、雨をしのげる役割を果たしています。屋根瓦の緑は、木羽葺き屋根に生える苔を模しているのです。

博物館の入口のホールで来館者の目を最初に引きつけるのは、1675年に遡る秋祭りの祭典、「登米の秋祭り」に使用される華やかな祭りの車（山車）です。次に地元の職人や素材がこの博物館のコンセプトの中心であることを説明する隈氏に関する動画が上映されます。窓からは屋根の延びた軒先が空を遮り、日差しの差し込む庭に注意を引きます。対照的に、主な展示室は土蔵の中のように暗く保たれ、展示されている品々が際立つようになっています。パネル展示では、江戸時代に地域を治めた登米伊達家や白石家の歴史と階層を追って、展示品の背景が紹介されています。

常設展示には、登米の歴史に関連する珍しい貴重な品々が展示されています。特に注目すべきは、白石宗実（1553–1599）の黒漆塗りの五点一式の鉄鎧など、武具や甲冑です。これらは伊達家の家臣であった白石宗実の所持品です。この鎧の兜には「也」という文字が流れるような筆跡で書かれています。また、多くの絵画が展示されており、強大な武将であった伊達政宗（1567–1636）の詩と、尊敬された僧侶である江月宗玩（1574–1643）の書が描かれた絵画や、狩野探幽（1602–1674）の作品が展示されています。企画展示では、地域の歴史のさまざまな側面が探求され、来館者に登米の過去について多くの洞察を提供しています。

025-006

Old Toyoma Townscape: Miyagi Meiji Village

登米市

【タイトル】 登米の街並み

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Old Toyoma Townscape: Miyagi Meiji Village

The historic townscape of central Tome, a city in northern Miyagi Prefecture, is a reminder of a time before neon signboards and the blare of automobile traffic. The area, formerly known as Toyoma, is often referred to as Miyagi Meiji Village for the many buildings that date back to the Meiji era (1868–1912). Prominent attractions include the Education Museum, the Police Museum, the Former Mizusawa Prefectural Office, the Noh Stage in the Forest (Mori Butai), the Takakura Katsuko Art Museum, and the Shunrantei café inside the Former Suzuki Family Samurai House.

The tranquil streets are a favorite shooting location for filmmakers, TV drama directors, and amateur photographers. In 2021, the area was featured as one of the settings for the NHK morning drama series *Okaeri Mone (Welcome Home, Monet)*, which ran for 120 episodes. This popular tale of a young girl returning to Tome to pursue her dream of becoming a weather forecaster introduced the city's nostalgic Meiji-era townscape to a national audience.

The Former Mizusawa Prefectural Office sells a discounted ticket to all the aforementioned attractions. Tome's historic district is easily accessible from Sendai, with shuttle buses operating hourly between Miyagi Meiji Village and Sendai Station (transit time: 1 hour 35 minutes).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

登米の街並み：みやぎの明治村

宮城県北部の登米市にある歴史的な町並みは、ネオンサインや自動車の騒音が支配する前の時代を思い起こさせます。かつて“とよま”と呼ばれていたこのエリアは、明治時代（1868–1912）の建物が数多く残っていることから、しばしば「みやぎの明治村」と呼ばれています。主要な観光地には、教育資料館、警察資料館、旧水沢県庁庁舎、伝統芸能伝承館 森舞台（Noh Stage in the Forest）、高倉勝子美術館、旧鈴木家武家屋敷内の春蘭亭カフェなどがあります。

静かな街並みは、映画製作者、テレビドラマの監督、アマチュアの写真家にとって人気の撮影場所です。2021年には、NHKの朝の連続テレビ小説『おかえりモネ』の舞台の一つとして紹介され、120話にわたって放送されました。この物語は、天気予報士を目指して遠田に戻る若い女性の物語で、全国の視聴者に明治時代の懐かしい町並みを紹介しました。

旧水沢県庁では、前述のすべての観光スポットの割引チケットを販売しています。登米市の歴史地区は仙台から簡単にアクセスでき、宮城明治村と仙台駅の間を1時間ごとにシャトルバスが運行しています（所要時間：1時間35分）。

025-007

Yonekawa no Mizukaburi Festival

登米市

【タイトル】 米川の水かぶり

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Yonekawa no Mizukaburi Festival

The Yonekawa no Mizukaburi Festival is one of Tome's most celebrated cultural events. It centers around an ancient fire-prevention ritual in which the men of the city's Itsukamachi neighborhood parade through the Yonekawa area in costumes made of straw, hollering and throwing water on buildings. This is reflected in the festival's name, which means "dousing with water." The date of the Mizukaburi Festival varies, but it is held annually in February.

Although the festival's precise origins are unknown, oral history suggests it dates to the mid-eighteenth century. Residents have carried on with the festival ever since, undeterred by war or natural disasters. In 2018, UNESCO inscribed the festival on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity.

Around 8:00 on the morning of the festival, men from Itsukamachi gather at a house known as the "inn for the gods." There, they use rice straw to make the costumes that will symbolically transform them from mere mortals into *raihōshin* ("visiting deities who bring joy"), who are thought of as incarnations of the fire god. Construction of the triangular, cape-like costumes is led by town elders who pass on their skills to the younger participants. This includes teaching them the finer details of the headdress, which varies in shape according to each family's tradition. In addition to family identity, community identity is also important. It is said that if someone who is not from Itsukamachi takes the role of a *raihōshin*, the ritual will cause fires instead of preventing them.

Once the costume pieces are constructed, the men begin by dressing in white vests, loincloths, and straw sandals. Next, they cover their faces with soot taken from the inn's cookstove, symbolically hiding their human identities and beginning their transformation into fire gods. They then wrap twisted straw ropes, known as *shimenawa*, around their waists and upper bodies before adding a straw ring or necklace, known as the *wakka*. Finally, they don large headdresses, called *atama*, made from single bundles of straw.

Around 10:00 a.m., a procession travels from the inn to the Akihasan Daigongen Shrine at Daijiji Temple. The group is led by a man at the auspicious age of 60, who carries a staff with paper streamers. He ceremoniously pours water onto the roof of the shrine. Next comes the main event. The straw-clad fire deities parade through the town shouting “*hō, hō*” while throwing water onto the roofs of buildings to protect them from fire. Two masked performers, in the roles of comical stock characters as opposed to being part of the main procession, follow along to collect donations for the festival. One character, named Hyottoko (“fire man”), rings a bell, and the other, Okame, carries buckets.

The straw of the men's costumes is thought to have a protective effect against fires. Once the water dousing begins, spectators dart through the procession to pull out the straws from the men's costumes to use as talismans for protecting their own homes over the coming year. By the time the procession has reached its destination, the men's costumes are in shreds, and they are sometimes left covered by little more than soot, underwear, and a few stray straws.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

米川の水かぶり祭り

米川の水かぶり祭りは、登米市で最も盛大に祝われる文化行事の一つです。この祭りは、古代の防火儀式に基づいており、登米市の五日町（Itsukamachi）地区の男性たちが、藁で作られた装束を身にまとい、町内を練り歩きながら建物に水をかけ、奇声を上げるというものです。祭りの名称「水かぶり」は、「水をかける」という意味を持ち、その内容を反映しています。祭りの開催日には毎年変動がありますが、毎年2月に行われます。

祭りの正確な起源は不明ですが、口伝によると18世紀中頃に始まったとされています。その後、戦争や自然災害にもかかわらず、住民たちはこの祭りを続けてきました。2018年には、ユネスコによっ

て無形文化遺産代表リストに登録されました。

祭りの朝、午前8時ごろ、五日町の男性たちは「水かぶり宿」と呼ばれる家に集まります。そこで、藁を使って装束を作り、それによって彼らは人間から火の神の化身とされる「来訪神」（raiho-shin）になります。三角形のケープのような衣装の作り方は、町の長老たちが指導し、若い参加者たちにその技術を伝授します。家ごとの伝統に合わせて、頭にかぶる装飾（「アタマ」と呼ばれる藁で作ったヘッドピース）の作り方も教えられます。また、家族のアイデンティティだけでなく、地域のアイデンティティも重要とされ、五日町以外の者が来訪神に加わると、火事が起きると信じられています。

装束が完成した後、男性たちは白いベスト、腰巻き、藁の草履を身に着け、次に、宿のかまどで取った煤を顔に塗り、人間の姿を隠し、火の神になります。その後、しめ縄という藁を編んだロープを腰や上半身に巻き、藁の輪または首飾り（「ワッカ」と呼ばれる）を加えます。最後に、藁を束ねて作られた大きな頭飾り（「アタマ」）をかぶります。

午前10時ごろ、五日町の60歳の男性が先頭の梵天を持つ役選ばれ、宿から大慈寺の秋葉山大権現に向かい、神社の屋根に水を注ぐ儀式を行います。その後、祭りの本番が始まり、藁で作られた火の神たちが町を練り歩き、「ほー、ほー」と叫びながら建物の屋根に水をかけ、火除けを祈ります。祭りの一団とは別に、2人の仮面をかぶった人物が、コミカルな役割を演じ、祭りのための寄付を集めています。1人は「火男」と呼ばれるヒョットコで鈴を鳴らし、もう1人は桶を持ったオカメです。

男性たちの装束の藁は、火除けの効果があると考えられています。水をかけ始めると、観客たちはその行列の中に駆け寄り、男性たちの衣装から藁を引き抜き、一年間自分の家を守るお守りとして使います。祭りの行列が終点に到達する頃には、男性たちの装束は観客たちに藁を抜き取られ、下着と数本の藁しか残っていないこともあります。

【タイトル】 隠れキリシタンの里

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Hidden Christian Martyrdom Site

This quiet woodland in northeast Tome surrounds Kainashizawa Sankyōzuka, a site that is part of the history of Christianity in northern Japan. Here, 120 *Kakure Kirishitan*, or “Hidden Christians,” were crucified, speared, or beheaded during the Kyōhō era (1716–1736). The martyrs were members of a community that had practiced Christianity in secret ever since the Tokugawa shogunate prohibited the faith in 1623.

Prior to its prohibition, Christianity had a strong foundation in this region. It originally spread here with the development of ironworks in the late sixteenth century. At that time, the most advanced form of iron manufacturing used European technology, and two experts in the field were invited from Bitchū (present-day Okayama Prefecture) to teach iron manufacturing to producers in local villages. The experts were two Christian brothers, Senmatsu Daihachirō and Kohachirō, who taught the villagers both their iron-manufacturing techniques and their faith. The faith spread, and in many cases, entire villages converted to Christianity together.

The powerful daimyo Date Masamune (1567–1636), who governed the Sendai domain, was initially receptive to Christianity. However, when the shogunate made practicing the religion illegal, the politically astute Masamune permitted the persecution of Christians in Sendai. Despite the risks, many Christians continued practicing in secret for several generations. However, the passage of time did not lessen the severity of the consequences. Upon being discovered, these villagers chose to die as martyrs rather than give up their faith.

At the Kainashizawa Sankyōzuka martyrdom site, a few stones mark the spot where the Christians were tortured and executed. The remote location was chosen to ensure that the screams of the dying were not heard by other villagers. A short walk farther uphill leads to a small, open flatland known as Meisō no Oka, or Meditation Hill, where the victims awaited the summons to execution. A mound on the hilltop marks the location where around 40 of the victims were laid to rest beneath a pine tree, and an unmarked stone cross is the sole ornamentation. The other victims were buried in nearby sites that were called Hōnosawa and Oinosawa, but this is the only gravesite left undisturbed.

The site's tragic past would have been entirely forgotten, if not for its mention in a document discovered over 200 years later, in 1954. Since its discovery, Kainashizawa Sankyōzuka has become a site of pilgrimage for Christians, including visitors from abroad. The nearby Yonekawa Catholic Church has held commemorative outdoor services in the clearing by the mass grave, and today, the site is a place of quiet remembrance and faith.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

隠れキリシタン殉教地

東北の登米市の静かな森林には、悲劇的な過去があります。この場所は「海無沢三経塚」（Kainashizawa Sankyōzuka）と呼ばれ、ここで120人の隠れキリシタン（Kakure Kirishitan）が、享保時代（1716年–1736年）に拷問され、十字架にかけられ槍で突かれ、あるいは首をはねられました。隠れキリシタンたちは、1623年に徳川幕府がキリスト教を禁止し、死刑にする法律を施行して以来、密かに信仰を守り続けた人々でした。

キリスト教はこの地域において、16世紀後半に鉄製造技術の発展とともに広まりました。当時、最も進んだ鉄の製造方法はヨーロッパの技術を使用しており、備中（現在の岡山県）から2人の専門家が招かれ、地元の村の鉄作りに技術を教えました。これらの専門家はキリスト教徒の兄弟、千松大八郎（Senmatsu Daihachirō）と小八郎（Kohachirō）で、彼らは鉄作りの技術だけでなく、信仰も村人たちに伝えました。結果として、信仰は広まり、いくつかの村では住民全体が一斉にキリスト教に改宗しました。

仙台藩を治めていた強力な大名、伊達政宗（1567年–1636年）は、初めキリスト教に対して寛容でした。しかし、幕府がキリスト教を禁止した後、政治的な理由から政宗は仙台におけるキリスト教徒への迫害を許可しました。それにもかかわらず、多くのキリスト教徒たちは秘密裏に信仰を続け、何世代にもわたって信仰を守り続けました。しかし、時が経つにつれ、その代償は変わることなく厳しくなり、信者たちは発覚した際には信仰を捨てることなく殉教の道を選びました。

海無沢三経塚の殉教地には、キリシタンたちが拷問され、処刑された場所を示す数個の石があります。この辺鄙な場所は、亡くなった者たちの叫び声が他の村人に聞こえないように選ばれました。さらに丘を少し登ると、「瞑想の丘（Meisō no Oka）」と呼ばれる小さな平地があり、そこで犠牲者たちは処刑の命令を待っていました。丘の頂上には約40人の犠牲者が松の木の下に埋葬された場所を示す塚があり、そこには目立つ石の十字架が唯一の装飾となっています。その他の犠牲者は「朴ノ沢」や「老ノ沢」と呼ばれる近くの場所に埋葬されていますが、ここが唯一手つかずのまま残された墓地です。

この場所の悲劇的な過去は、200年以上経った1954年に発見された文書に記載されていなければ、完全に忘れ去られていたでしょう。この場所が発見されて以来、海無沢三経塚は、外国からの訪問者も含めたキリスト教徒の巡礼地となっています。近くの米川カトリック教会は、集団墓地近くで毎年記念の屋外ミサを行い、今日ではこの地は静かな思い出と信仰の場となっています。

025-009

Local Delicacies: *Hatto* and *Abura Fu*

登米市

【タイトル】 はっと・油麩

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Local Delicacies: *Hatto* and *Abura Fu*

Hatto

Hatto is a traditional dish from the Tome region made by kneading wheat-flour dough into bite-sized, ear-shaped pieces, similar to Italy's orecchiette pasta. These morsels are served in a broth that can be made savory with ingredients such as daikon radish, burdock root, and dried shiitake mushrooms, or sweet with *zunda-an* paste made from young edamame. Popular for its firm, chewy texture, *hatto* is a common household dish in this region.

Hatto, which literally means “prohibition,” received its name as a quiet act of rebellion. During the Edo period (1603–1867), daimyo lords forced farmers to cultivate rice to pay village taxes, and the farmers themselves had to consume other grains. The farmers used those grains to develop *hatto*, but the daimyo feared that letting them indulge in it would distract them from rice cultivation. Therefore, they prohibited people from eating it, except on special occasions.

Abura-Fu

Fu, or wheat gluten, is often used in Buddhist vegetarian cuisine. It generally takes two forms: *nama-fu* (uncooked gluten) or *yaki-fu*, which is grilled for use in soups and broths. However, at the end of the Meiji period (1868–1912), a tofu shop owner in Tome invented *abura-fu*, which is gluten fried in oil. In those days, refrigeration techniques were limited, but fried gluten could be dried to keep it preserved year-round. Savory and crunchy, it is most commonly served over rice in a dish called *abura-fu don*. The dish has earned nationwide acclaim through its success in competitions focused on inexpensive regional comfort foods (“B-grade gourmet”).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地元の名物：はつとと油麩

はつと

はつとは、登米地域の伝統的な料理で、小麦粉の生地を耳の形に似た小さな一口大にのばし、スープで提供されます。スープは、ダイコン、ゴボウ、乾燥シイタケなどの具材を使った塩味のものや、若い枝豆で作ったずんだ餡を使った甘いものなどがあります。弾力があり、噛みごたえのある食感が特徴で、この地域の家庭料理として広く親しまれています。

「はつと」という名前は、かつての禁制に由来しているといわれ、江戸時代（1603–1867）に、領主は農民に米を作らせて村税を納めさせ、農民自身は他の穀物を食べなければならなかったため、農民たちはその穀物を使ってはつとを作りました。しかし、領主は農民がはつとを食べることで米作りを怠ることを懸念し、特別な機会以外は食べることを禁止しました。そのため、この料理は「禁止」という意味の名前がつけられたといわれています。

油麩

油麩は、麩（小麦グルテン）を油で揚げたもので、仏教の精進料理でよく使われます。麩には、加熱せずにそのまま使う「生麩」と、焼いてスープやお汁に入れる「焼き麩」があります。しかし、明治時代末期（1868–1912）、登米のある豆腐店の店主が油で麩を揚げる方法を考案しました。この時代、冷蔵技術が限られていたため、揚げた麩を乾燥させて一年中保存できるようにしたのです。油麩は香ばしく、サクサクとした食感が特徴で、最も一般的には油麩丼としてご飯にのせて提供されます。この料理は、地域の手軽で美味しい家庭料理として、全国的に評価されており、安価なグルメ料理を扱うコンテストで高く評価されています。

025-010

Takakura Katsuko Art Museum

登米市

【タイトル】 高倉勝子美術館

【想定媒体】 QRコード

できあがった英語解説文

Takakura Katsuko Art Museum

Toyoma-born artist Takakura Katsuko (1923–2015) is celebrated for her warm, gentle style of painting. She is especially known for her works in the Nihonga style, in which traditional Japanese painting techniques and materials are applied to modern themes. The museum showcases her versatility in works ranging from large ink wash paintings to storybook illustrations.

Takakura studied Japanese painting techniques at Joshibi University of Art and Design in Tokyo. After graduating, she moved to Hiroshima. When the atomic bomb was dropped on the city in 1945, she was living 3 kilometers from the blast epicenter. She miraculously survived, and after the war she returned to Toyoma and taught art to schoolchildren. Her career as a schoolteacher lasted many decades, and she continued to pursue painting during this time.

In her Nihonga paintings, Takakura often portrayed young girls and industrious women using warm colors and soft expressions. These large works, along with her peaceful depictions of temples and Buddhist figures, fill the main gallery space of the museum. These works are a far cry from the horrors of the Hiroshima bombing. Takakura struggled with her wartime memories, but with the encouragement of her community, she created a set of autobiographical paintings that reflect her experience of the atomic bomb. These paintings are displayed in a separate room.

Takakura wrote in an artist statement, “I grew up in the countryside, so I do not have any sophisticated, urban-style works of art... but I am touched by the richness of

humanity, and I till the soil... I let each of my paintings tell a story of the flow of eternity.”

上記解説文の仮訳（日本語訳）

高倉勝子美術館

登米生まれの画家、高倉勝子（1923–2015）は、その温かく優しい絵画スタイルで広く知られています。特に、伝統的な日本画の技法と材料を現代的なテーマに適用する「日本画」スタイルの作品で有名です。この美術館では、彼女の多才さが展示されており、大きな水墨画から絵本の挿絵に至るまで、さまざまな作品が紹介されています。

高倉は東京の女子美術大学で日本画技法を学び、卒業後は広島に移住しました。1945年、広島に原爆が投下された際、彼女は爆心地から3キロの場所に住んでいました。奇跡的に生き延びた高倉は戦後、登米に戻り、学校で子供たちに美術を教えました。彼女の教師としてのキャリアは数十年にわたり、その間も絵画を追求し続けました。

高倉の日本画では、若い女の子や働く女性を暖かい色調と優しい表情で描くことが多いです。これらの大きな作品や、寺院や仏像を平和的に描いた作品は、美術館のメインギャラリーを埋め尽くしています。これらの作品は、広島の前爆の恐ろしさとは対照的です。高倉は戦争の記憶に苦しみましたが、地域社会の支援を受けて、原爆体験を反映した自伝的な絵画セットを制作しました。これらの絵画は、別の部屋で展示されています。

高倉はアーティスト声明の中で「奥山育ちの私には、都会風な洗練された作品は一点もない。でも豊かな人情に触れ、大地を耕す。…私の絵の一枚一枚には悠久の流れを物語らせて描いてまいりました」と述べています。

025-011

Former Suzuki Family Samurai House and Shunrantei Café

登米市

【タイトル】春蘭亭

【想定媒体】QRコード

できあがった英語解説文

Former Suzuki Family Samurai House and Shunrantei Café

This restored samurai residence was home to a branch of the Suzuki warrior family. They were retainers of Shiraishi Munenao (1577–1629), who was later known as Date Munenao after becoming the first head of the governing Date family in Toyoma. When Munenao took up the position in 1604 and moved to Toyoma from nearby Mizusawa, the Suzuki family followed.

The exact age of the building is unknown. It was a residence until 1989, when it was donated to and became a designated Cultural Property of the city. After careful restoration of the building in 1990, a café called Shunrantei opened inside the building.

The residence is a fine example of rural architecture from the Edo period (1603–1867). One feature is a Toyoma-style *irori* open hearth set into the wooden floor and surrounded by polished boards. A small tatami room with a chest of drawers, a makeup mirror, and other Suzuki family memorabilia recreates the building's domestic past. True to its warrior origins, antique weapons such as a spear and *naginata* (a polearm with a curved blade) hang on the wall.

The name Shunrantei comes from *shunrancha*, a tea made from the orchids that grow in the garden each spring. The café and former warrior residence are popular as a place to relax, enjoy light refreshments, and take photos around the historic building and garden.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧鈴木家武家屋敷と春蘭亭カフェ

この復元された武家屋敷は、鈴木家の支流が住んでいた場所で、1604年に主君の白石宗直（1577-1629）と共に水沢から移住しました。この年、宗直は後に伊達宗直として知られ、登米伊達家の初代当主となりました。

建物の正確な年代は不明ですが、1989年まで住宅として使用されており、その後、市の文化財として寄贈されました。1990年に建物の慎重な修復が行われた後、内部に「春蘭亭」というカフェが開店しました。

この住宅は、江戸時代（1603-1867）の農村建築の一例として優れており、木製の床に設置された登米風の囲炉裏（いろり）や磨かれた板で囲まれた空間が特徴です。また、鈴木家の家財道具として、引き出しのある小さな置の部屋や化粧鏡、その他の家族の記念品が展示されています。武士の家柄にふさわしく、槍や薙刀（なぎなた）などの古い武器が壁に掛けられています。

「春蘭亭」という名前は、毎年春に庭で咲く蘭の花から作られる春蘭茶に由来しています。カフェと武家屋敷は、歴史的な建物や庭園を眺めながら、軽食や写真撮影を楽しめる憩いの場として人気です。

地域番号	026	協議会名	二本松市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
026-001	安達太良山/安達太良山の概要		1-250w	看板
026-002	安達太良山/安達太良山の概要		251-500w	WEB
026-003	安達太良山/安達太良山の四季		251-500w	WEB
026-004	安達太良山/薬師岳パノラマ		1-250w	WEB
026-005	安達太良山/沼ノ平火口		1-250w	WEB
026-006	安達太良山/山頂		1-250w	WEB
026-007	岳温泉/引き湯		251-500w	WEB
026-008	岳温泉/ミルキーデイ		251-500w	WEB
026-009	岳温泉/湯守文化		251-500w	WEB
026-010	岳温泉/岳温泉の歴史		251-500w	WEB
026-011	岳温泉/岳温泉まちなか散策コース		251-500w	WEB
026-012	二本松城跡/二本松城の概要		1-250w	看板
026-013	二本松城跡/二本松城の概要		251-500w	WEB
026-014	二本松城跡/二本松城の歴史		251-500w	WEB
026-015	二本松城跡/二本松城の四季		251-500w	WEB
026-016	二本松城跡/戎石銘碑		251-500w	WEB
026-017	二本松城跡/二本松少年隊		251-500w	WEB
026-018	二本松城跡/二本松城の石垣		251-500w	WEB
026-019	二本松城跡/本丸		251-500w	WEB
026-020	二本松城跡/洗心亭		251-500w	WEB

026-001

Mt. Adatara

二本松市

【タイトル】 安達太良山/安達太良山の概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Mt. Adatara

Mt. Adatara is a 1,700-meter volcanic peak known as one of Japan's "Hundred Great Mountains" for its distinctive ridgeline and the beauty of its flora. Part of a massif formed by volcanic activity between 500,000 and 200,000 years ago, it remains an active volcano today.

The most prominent flowers on Mt. Adatara's slopes are rhododendrons and azaleas. In June and July, dozens of varieties bloom in colors ranging from pale yellow to bright crimson. In October, the autumn foliage turns the mountain a deep red.

Yakushidake Panorama Park and the Trail to the Peak

The Adatara Mountain Ropeway provides a ten-minute ride halfway up the mountain to Yakushidake Panorama Park. The park offers views of the peak to the west, Mt. Kago and Mt. Tetsu to the northwest, and the city of Nihonmatsu and the Abukuma River to the east. The ropeway is only open during the "green season" from April to November. Climbing the mountain in other months is discouraged for those without winter mountaineering experience.

The 2.4-kilometer route from Yakushidake Panorama Park to the peak climbs along a gradually steepening slope. It is a moderate hike of around 75 minutes requiring no special equipment, although the wind can be strong. The peak offers sweeping views of the surrounding landscape, including Mt. Osho to the south and the Azuma Range to the north. There is also a popular trail from the peak leading north to Numanotaira Crater and Mt. Tetsu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安達太良山

安達太良山は、その特徴的な稜線と植物の美しさから日本の「百名山」の一つとして知られる標高1,700メートルの山です。50 万年から 20 万年前の火山活動によって形成された山塊の一部である安達太良山は、今日でも活火山です。

安達太良山の斜面で最も目立つ花はシャクナゲとツツジです。6月から7月にかけて、数十品種が淡黄色や鮮やかな深紅などさまざまな色の花を咲かせます。10月になると紅葉で山が真っ赤に染まります。

薬師岳パノラマパークと山頂へと続くトレイル

あだたら山ロープウェイを使えば山の中腹にある薬師岳パノラマパークまで10分で到着します。パノラマパークからは、西に山頂、北西に竈山と鉄山、東に二本松市と阿武隈川の景色を眺めることができます。ロープウェイは4月から11月までの「グリーンシーズン」のみ営業しています。それ以外の時期派、冬山経験者以外の登山は非推奨です。

薬師岳パノラマパークから山頂までの2.4キロメートルのルートは、徐々に勾配がきつくなる坂道を通ります。風が強い場合もありますが、特別な装備を必要としない75分ほどの穏やかなハイキングとなります。山頂からは、南の和尚山、北の吾妻連峰など、周囲の風景を一望できます。山頂からは北の沼ノ平火口や鉄山に向かうトレイルものびており、こちらも観光客に人気です。

026-002

Mt. Adatara

二本松市

【タイトル】 安達太良山/安達太良山の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mt. Adatara

Mt. Adatara is a 1,700-meter peak on the western edge of the city of Nihonmatsu in Fukushima Prefecture. Its distinctive profile, floral beauty, and ready accessibility have made it a symbol of the region and a popular destination for hikers during warmer months.

A Geothermal Powerhouse

Mt. Adatara is part of a group of volcanoes that also includes Mt. Minowa and Mt. Tetsu. The massif was formed by volcanic activity that began around 500,000 years ago. Mt. Adatara took its current form roughly 200,000 years ago, and remains an active volcano today. The last major eruption was in 1900.

This volcanism has given the mountain rich deposits of sulfur and numerous hot springs. Both have attracted human interest for centuries, and neighboring towns like Dake Onsen still draw hot-spring water from the heights through many kilometers of pipes.

Beloved by Poets and Naturists Alike

Mt. Adatara is the northernmost mountain to receive mention in the eighth-century *Man'yōshū*, the oldest surviving anthology of Japanese poetry. More recently, it

appeared in a celebrated 1927 verse by sculptor and poet Takamura Kotaro. Takamura's wife Chieko, an artist and feminist, was born in Nihonmatsu, and in the poem he relates her insistence that the only "real sky" is the sky above Mt. Adatara. Yakushidake Panorama Park is one of many scenic lookouts in Fukushima inviting visitors to admire this "real sky."

Mt. Adatara is not only cited as one of Japan's "Hundred Great Mountains," it was also included on a similar list of 100 mountains chosen for the beauty of their flora. Rhododendrons and azaleas are particularly prominent on its slopes, with dozens of varieties blooming in colors ranging from pale yellow to bright red.

Climbing Mt. Adatara

The most popular climbing route up Mt. Adatara begins at the Okudake Trailhead. It is a moderate half-day round trip requiring no special equipment. The first half of the route, from the trailhead to Yakushidake Panorama Park, can be replaced by a 10-minute ride on the Adatara Mountain Ropeway. The ropeway is only open during the "green season" from April to November. Climbing in other months is discouraged for those without winter mountaineering experience. Yakushidake Panorama Park has views of Mt. Kago and Mt. Tetsu to the northwest, and the city of Nihonmatsu and the Abukuma River to the east.

The second half of the route is a 2.4-kilometer climb from Yakushidake Panorama Park to the peak, taking about 75 minutes. The slope is gentle at first but steepens slightly after the Sennyodaira Fork, a landmark roughly at the halfway point. As the altitude rises, tall deciduous trees give way to spreading pines and low-lying bushes.

The rugged peak has unobstructed views of the surrounding landscape, including Mt. Osho to the south, Mt. Bandai and the Iide Range to the west, and the Azuma Range to the north. When the wind is not too strong, visitors can take another trail north to visit Numanotaira Crater and Mt. Tetsu before doubling back to return along the same route to the Okudake Trailhead.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安達太良山

安達太良山は、福島県二本松市の西端にある標高1,700メートルの山です。その独特の輪郭、花の美しさ、アクセスのしやすさからこの地域のシンボルとなったこの山は、暖かい季節にはハイカーに人気の行楽地となっています。

地熱の発生源

安達太良山は、箕輪山や鉄山も含まれる火山群の一部です。この山塊は約50万年前に始まった火山活動によって形成されました。安達太良山は約20万年前に現在の形になり、依然として活火山であり続けています。最後の大噴火は1900年に起こりました。

この火山活動により、山には豊かな硫黄の鉱床と多くの温泉がもたらされました。どちらも何世紀にもわたって人々の関心を集めており、岳温泉のような近隣の町では今でも高地から何キロメートルものパイプを通して温泉水を汲んでいます。

詩人にも自然愛好家にも愛された山

安達太良山は、現存する最古の和歌集である 8 世紀の万葉集に登場する最北の山です。より近年では、彫刻家で詩人の高村光太郎が1927 年に発表した有名な詩に登場しました。芸術家でありフェミニストでもあった高村の妻智恵子は二本松生まれで、詩の中で高村は唯一の「ほんとの空」は安達太良山の空だけだという妻の主張を語っています。薬師岳パノラマパークは、福島に数ある美しい展望台の1つで、訪問者はここでの「ほんとの空」を眺めることができます。

安達太良山は、「日本百名山」に選ばれているだけでなく、山の植物相の美しさを基準とした「花の百名山」にも選ばれています。斜面にはシャクナゲとツツジが特に目立ち、淡黄色から鮮やかな赤色までさまざまな色の数十種類が咲き誇ります。

安達太良山の登山

安達太良山の最も人気のある登山ルートは奥岳登山口から始まります。特別な装備を必要とせず、半日程度で往復できます。ルート的前半、登山口から薬師岳パノラマパークまでは、あだたら山ロープウェイを利用して10分間で移動できます。ロープウェイは4月から11月までの「グリーンシーズン」のみ営業しています。それ以外の時期は、冬山経験者以外の登山は非推奨です。薬師岳パノラマパークからは、北西に籠山と鉄山、東に二本松市と阿武隈川の景色を眺めることができます。

ルートの後半は薬師岳パノラマパークから頂上まで2.4キロメートルの登りで、所要時間は75分ほどです。坂は、最初は緩やかですが、ほぼ中間地点にある目印の仙女平分岐を過ぎると少し急になります。標高が上がるにつれて、植生は背の高い落葉樹から松や背の低い茂みに変わります。

険しい山頂からは、南に和尚山、西に磐梯山や飯豊連峰、北に吾妻連峰などの何にも遮られない風景が一望できます。風がそれほど強くない場合は、登山道に沿って北に向かい、沼ノ平火口と鉄山を訪れ、その後来たのと同じルートに沿って奥岳登山口に戻ることができます。

026-003

The Four Seasons on Mt. Adatara

二本松市

【タイトル】 安達太良山/安達太良山の四季

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Four Seasons on Mt. Adatara

Mt. Adatara shows a different face with every season. The warmth of spring rises up the mountainside gradually, bringing forth delicate new leaves and blossoms in its wake. The earliest flowers to bloom include mayflowers and a rhododendron called *urajiro yoraku*, named for the flowers' resemblance to the filigree-like hanging decorations known as *yoraku* that adorn Buddhist altars.

Summer, particularly from late June through July, is peak flower season on the mountain. Dozens of varieties of rhododendron and azalea come into bloom, with colors ranging from pale yellow to bright crimson. Varieties of the *sarasa dodan* bush with its bell-like flowers are also common. At higher altitudes, hardy dwarf cornel and starflower bushes thrive amid the rocky terrain. Summer also brings chestnut tiger butterflies, which flit through the air on warm, still days.

Autumn descends from the peak to the foothills throughout October, with deeper colors at lower elevations. Japanese white pines produce needles that grow in distinctive clusters of five. Squirrels feast on the pine cones, leaving their cores under the trees. The mountain ashes and maple trees along the Mt. Adatara trail turn a brilliant red, while the *dakekanba* birch trees on the slopes of Mt. Tetsu to the north form a carpet of gold.

In winter, Mt. Adatara's slopes are blanketed in snow. Climbing the mountain during this season without an experienced local guide is not recommended, and the Adatara Mountain Ropeway is closed all winter, but many visitors come to the ski resort and

admire the view from below.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安達太良山の四季

安達太良山は季節ごとに違う表情を見せてくれます。春の暖かさは山腹に徐々に昇っていき、繊細な新葉や花を咲かせます。最も早く咲く花には、イワナシや仏壇に飾る「瓔珞（ようらく）」という仏具に似ていることから名付けられたウラジロヨウラクと呼ばれるツツジなどがあります。

夏、特に 6 月下旬から 7 月が山の花の最盛期です。数十種類のシャクナゲやツツジが咲き、淡い黄色から鮮やかな深紅まで色とりどりです。サラサドウダンツツジの仲間である釣鐘状の花もよく見られます。標高の高い場所では、ゴゼンタチバナやツマトリソウなどの強い花が岩だらけの地形の中で咲き誇ります。夏にはアサギマダラもやって来て、暖かくて静かな日には、アサギマダラが空を飛び回るのが見られます。

秋は10月を通じて山頂から麓までを染めていき、標高の低いところがより濃い色になります。特徴的な5本の束で針が生えているゴヨウマツは松ぼっくりを作り、リスが松ぼっくりを食べ終わると、そのかじられた芯が木の下に転がっているのが見られます。安達太良山のトレイル沿いのナナカマドやカエデが鮮やかな赤色に染まり、北側の鉄山の斜面にあるダケカンバの木々が黄金の絨毯を作ります。

冬になると、安達太良山の斜面は真っ白な雪で覆われます。経験豊富な地元ガイドなしでこの時期に山に登ることはお勧めできません。また、あだたら山ロープウェイは冬の間閉鎖されていますが、スキーをしにきた多くの観光客が下からの景色を楽しみます。

026-004

Yakushidake Panorama Park

二本松市

【タイトル】 安達太良山/薬師岳パノラマ

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yakushidake Panorama Park

Yakushidake Panorama Park is near the top of the Adatara Mountain Ropeway and can be accessed without any climbing. As the name suggests, it offers views of several peaks in the Adatara massif, as well as the city of Nihonmatsu and the Abukuma River to the east.

The view of Mt. Adatara's peak rising to the west is marked with a sign that reads, "Real sky above this point." This is a reference to a celebrated poem by Takamura Kotaro, in which his artist wife Chieko, who was born in Nihonmatsu but lived with him in Tokyo, declares that the only "real sky" is the sky above Mt. Adatara.

At the east end of the park is a lookout point with views of the surrounding landscape. To the northeast rise Mt. Kago, Mt. Tetsu, and Mt. Minowa, which are all part of the same volcano cluster as Mt. Adatara. Far to the north is the city of Fukushima; to the east is the urban center of Nihonmatsu, and beyond that the Abukuma River. To the south is Mt. Osho.

An iron bell hangs by the lookout point. This is a replica of the bell that Kurogane-goya Mountain Lodge, which stands on the slopes to the northwest, uses to signal to travelers when visibility is low due to fog. Visitors to Yakushidake Panorama Park are welcome to ring the bell and hear the iconic sound for themselves.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

薬師岳パノラマパーク

薬師岳パノラマパークはあだたら山ロープウェイの頂上の近くにあり、自分で登ることなくアクセスできます。その名の通り、パノラマパークからは安達太良連峰の複数の峰が見えるのに加え、東に二本松市街と阿武隈川を望めます。

パノラマパークからは西にそびえる安達太良山の山頂が見え、「この上の空がほんとの空です」と書かれた看板が立っています。これは、高村光太郎の有名な詩に言及したものです；詩の中で、二本松で生まれ、高村と一緒に東京に移り住んだ芸術家の妻智恵子は、「ほんとの空」は安達太良山の空だけだと述べます。

パノラマパークの東端には展望台があり、周囲の景色を眺めることができます。北東には籠山、鉄山、箕輪山がそびえており、これらはすべて安達太良山と同じ火山群の一部です。はるか北には福島市があります；東には二本松市の中心部があり、その先には阿武隈川があります。南には和尚山があります。

展望台には鉄の鐘が吊るされています。これは、北西の斜面に建つくろがね小屋が、霧で視界が悪いときに旅人に知らせるために鳴らしている鐘のレプリカです。パノラマパークの訪問者は、この鐘を鳴らし、その象徴的なサウンドを実際に聞くことができます。

026-005

Numanotaira Crater

二本松市

【タイトル】 安達太良山/沼ノ平火口

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Numanotaira Crater

Numanotaira Crater is a volcanic crater northwest of Mt. Adatara's peak. The crater is around 1.2 kilometers across and 150 meters deep. Descending into the crater itself is prohibited due to the risk of volcanic activity and poisonous fumes. It was formed by repeated eruptions over thousands of years. In the most recent eruption, in 1900, a sulfur refinery was destroyed and 72 miners working on the mountain died.

From the peak of Mt. Adatara, the closest point with a view of the crater is a 15-minute walk north along a broad ridge called the "Ox's Back" (*Ushi no se*). The interior of the crater gradually comes into view along the way—a gouge in the mountainside almost completely devoid of vegetation.

A trail leads around the entire crater, but the full 7.4-kilometer circuit takes three or four hours to complete. Most visitors simply retrace their steps, with an optional detour to the peak of Mt. Tetsu and back. The Mt. Tetsu detour is an additional 30-minute walk north along the "Horse's Back" (*Uma no se*), a ridge following the crater's eastern edge that is slightly narrower than the "Ox's Back" to the south.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沼ノ平火口

沼ノ平火口は、安達太良山山頂の北西にある火山の火口です。この火口は直径約1.2キロメートル、深さは約150メートルです。火山活動や有毒ガスの危険があるため、火口への立ち入りは禁

止されています。この火口は、何千年にもわたって繰り返された噴火によって形成されました。1900年に起こった最も最近の噴火では、硫黄精製所が破壊され、山で働いていた72人の鉱山労働者が死亡しました。

最も近くで火口が見える場所は、安達太良山山頂から「牛の背」と呼ばれる広い尾根を北に歩いて15分ほどのところにあります。途中で徐々に火口の内部が見えてきます。一山腹をえぐったような、岩がむき出しになった荒涼としたこの風景には、ほとんど草木が見られません。

火口全体を周回するトレイルがありますが、全長7.4キロメートルの全周を完了するには3～4時間かかります。大抵の訪問者は来た道を戻っていきますが、鉄山の頂上まで迂回して戻ってくることも可能です。鉄山の迂回路を通るには、「馬の背」と呼ばれる、南の「牛の背」よりも若干狭く、火口の東端に続く尾根に沿って北にさらに30分歩きます。

026-006

The Peak of Mt. Adatara

二本松市

【タイトル】 安達太良山/山頂

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Peak of Mt. Adatara

Mt. Adatara's peak is a rugged, windswept plateau with a mass of rock rising from the center. Although the summit is technically 1,699.7 meters above sea level, the signage rounds the figure to 1,700. When skies are clear, there are views of Mt. Osho to the south, Mt. Bandai and the Iide Range to the west, and the Azuma Range to the north. On especially clear days, climbers may even see as far as Mt. Aizu-Komagatake at the southwest end of Fukushima Prefecture.

The rocky ground of the peak is the accumulated result of hundreds of thousands of years of volcanic activity. This makes the individual rocks found there highly diverse in color, mineral content, and composition. Some rock formations show lines indicating multiple strata of magma laid down over the millennia.

The path up the central mass of rock to the very top of the mountain is one-way, with a separate trail for the descent to the plateau. This is the most challenging part of the climb, and requires caution, but metal ladders bolted to the rock assist in making the ascent safer and easier. There is a small shrine beside the summit marker, and another shrine to the deity of the mountain nestled beneath a ridge on the way down.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安達太良山山頂

安達太良山の山頂は、風が吹きさらす険しい高原で、中央には岩の塊がそびえ立っています。山

頂の標高は厳密には海拔1,699.7メートルですが、標識ではその数字を1,700メートルに四捨五入しています。空が晴れていれば、南に和尚山、西に磐梯山や飯豊連峰、北に吾妻連峰を望むことができます。特に晴れた日には、福島県南西端の会津駒ヶ岳まで見えることもあります。

山頂の岩だらけの地面は、数十万年にわたる火山活動の結果です。そのため、そこで見つかる個々の岩石の色、鉱物含有量、組成は非常に多様です。いくつかの岩層には、数千年にわたって堆積したマグマの層複数を示す線が見られます。

中央の岩塊を山頂まで登る道は一方通行で、高原へ下るには別のトレイルがあります。ここは安達太良山登山の中で最も困難な部分であり、登山者は注意が必要ですが、岩にボルトで固定された金属製の梯子のおかげで、より安全かつ容易に登ることができます。山頂標識の横に小さな神社があり、また、下山途中の尾根の下にも山の神様を祀った神社があります。

【タイトル】 岳温泉/引き湯

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hikiyu at Dake Onsen

The hot springs at Dake Onsen are fed by *hikiyu*—water piped in from off-site rather than drawn from the ground directly below. The ultimate source is 1,500 meters above sea level on nearby Mt. Tetsu. The system of pipes and conduits that delivers this *hikiyu* extends more than 8 kilometers, making it one of the longest in Japan.

Bringing the Mountain Springs to Town

The source of Dake Onsen is a group of open-air hot springs on Mt. Tetsu with a combined flow of 1,290 liters per minute. A series of conduits combines the waters from the springs into a single flow that is then piped down the mountain. No pumps are required, as gravity does all the work. When the flow reaches the town, it is divided among multiple smaller pipes that lead to individual *onsen* bath facilities.

At their source, the hot springs range in temperature from 40°C to 90°C. The temperature of the combined flow is 52°C, and with today's pipes keeping the water at that temperature all the way to Dake Onsen, no reheating is required.

History and Engineering

In earlier centuries, inns prospered at the source of the hot springs, which was then known as Yui Onsen. After Yui Onsen was destroyed by a landslide in 1824,

Nihonmatsu domain ordered a new *onsen* town built lower down the mountain, with hot water piped in from the original source. As Nihonmatsu Castle already had a similar system that delivered fresh water from mountain rivers 14 kilometers away, domain engineers knew how to build and maintain the necessary infrastructure. This was the beginning of the *hikiyu* system that now supplies Dake Onsen.

The original *hikiyu* system used conduits made of red pine with removable lids, but these were poorly insulated and deteriorated quickly in outdoor conditions. In the early twentieth century these were abandoned in favor of wooden pipes known as *mokkan*. Each *mokkan* was a single massive pine log hollowed out using a drill obtained for this purpose from overseas. That solved the heat retention problem, but deterioration of the wood remained an issue. Starting in the 1950s, *mokkan* were gradually replaced with the more durable PVC pipes in use today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岳温泉の引き湯

岳温泉の温泉は、真下から汲み上げるのではなく、敷地外からお湯を引く「引き湯」を使用しています。もともとの水源は近くの標高1,500メートルの鉄山です。この引き湯を運ぶパイプと導管システムは8キロメートル以上に及び、これはこのような設備では日本で最も長いものの1つとなります。

山の湧き湯を街にもたらす

岳温泉の源泉は鉄山の露天温泉群で、総湧出量は毎分1,290リットルです。一連の導管が源泉からの湯を1つの流れにまとめ、パイプで山から下ろします。重力がすべての作業を行うため、ポンプは必要ありません。流れが街に到達すると、湯は複数の別々の温泉施設につながる小さなパイプに分かれます。

源泉では、湯の温度は40℃～90℃です。合流した湯の温度は 52℃ で、現代の水道管が岳温泉までその温度を保ってくれるため、追い焚きの必要はありません。

歴史と工学

過去には、源泉付近で旅館が栄え、湯日（ゆい）温泉として知られていました。1824年に湯日温泉が土砂崩れで破壊された後、二本松藩は山の下部に新しい温泉街を建設するよう命じ、元

の源泉からお湯を引き込みました。二本松城には、14 キロメートル離れた山の川から淡水を供給する同様のシステムがすでにあったため、藩の技術者は必要なインフラを構築し維持する方法を知っていました。これが現在の岳温泉の引き湯システムの始まりでした。

もとの引き湯システムでは、取り外し可能な蓋が付いたアカマツ製の導管が使用されていましたが、これは断熱性が低く、屋外環境ですぐに劣化してしまいました。20 世紀初頭、これらの導管によって代わって、木管と呼ばれる木製のパイプが使用されるようになりました。各木管は、海外からこのために調達されたドリルを使用してくり抜かれた巨大なマツの丸太でした。これで保温性の問題は解決しましたが、木材の劣化は課題として残りました。1950年代から、木管は徐々に今日使用されている耐久性の高い塩ビパイプに置き換えられました。

026-008

Kneaded Water and Milky Days at Dake Onsen

二本松市

【タイトル】 岳温泉/ミルキーデー

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kneaded Water and Milky Days at Dake Onsen

The waters at Dake Onsen are acidic, with a pH of 2.5. This is rare in Japan, where most hot springs are alkaline. The antibacterial effect of the low pH combined with the water's sulfur content means that soaking in the springs may offer relief from psoriasis, eczema, and skin inflammation.

Onsen connoisseurs believe that the water's long journey from Mt. Tetsu mixes its mineral content more evenly, making it feel "smoother" on the skin. This kind of mixing is referred to as *yumomi*, or "kneading the water," and is also practiced at other hot-spring resorts in Japan.

Milky Days

The pipes that deliver the waters of Dake Onsen from their source on Mt. Tetsu gradually become encrusted with deposits of sulfur and other minerals in the spring water. These deposits are known as *yu no hana* or "hot-spring flowers." To ensure that the flow of water remains unimpeded, the pipes are regularly cleaned by scraping off these deposits, allowing the flakes to flow down the pipes all at once. When the accumulated *yu no hana* of a week or more arrives at Dake Onsen, it turns the baths milky white for the day. Dake Onsen now promotes these events as "Milky Days."

Milky Days occur weekly in summer and about half as often in winter. The specific dates depend on when the weather permits cleaning, but they are announced online in

advance. Many visitors make a point of visiting Dake Onsen on Milky Days to enjoy the distinct texture and rich scent of the *yu no hana*. Some feel that the additional mineral content enhances the water's soothing properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岳温泉の湯もみとmilky-day

岳温泉の泉質はpH2.5の酸性です。これはアルカリ性温泉が多い日本では珍しいことです。低いpHの抗菌効果と水の硫黄分により、この温泉に浸かると乾癬や湿疹、皮膚の炎症が軽減される可能性があります。

温泉愛好家は、鉄山から長距離を運ばれてくることにより、湯のミネラル成分がより均一に混ざって肌に「まろやか」な湯心地となると考えています。このように湯がよく混ざることは湯もみと呼ばれ、日本の他の温泉地でも行われています。

milky-day

岳温泉の湯を鉄山の源泉から送り出すパイプには、温泉水中の硫黄やその他のミネラルの堆積物が徐々に付着していきます。これらの堆積物は湯の花と呼ばれています。水の流れが妨げられないように、パイプは定期的に洗浄され、内部に溜まった堆積物がすべて一度に流し出されます。1週間以上分の湯の花が岳温泉に到着すると、その日はお風呂が乳白色に変わります。現在、岳温泉ではこれを「milky-day」というイベントとして宣伝しています。

夏にはmilky-dayが毎週開催され、冬にはその頻度は約半分になります。具体的な日程は天候により清掃が可能になる日によって異なりますが、開催は事前にオンラインで発表されます。湯の花の独特の感触と芳醇な香りを求めて、あえてmilky-dayに岳温泉を訪れる人も多くいます。普段より多いミネラル分は湯の鎮静作用を高めると感じる人もいます。

026-009

The *Yumori* of Dake Onsen

二本松市

【タイトル】 岳温泉/湯守文化

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The *Yumori* of Dake Onsen

To keep the waters of Dake Onsen flowing from Mt. Tetsu, the 8 kilometers of conduits and pipes must be regularly inspected and repaired. This is the job of the *yumori*, or “guardians of the springs”: local residents who perform these duties in addition to their regular work.

A Year-Round Job

In winter, the *yumori* climb into the mountains weekly. The trek to the hot springs’ source in the snow can take several hours. This is followed by around three hours of digging through a few meters of snow to access the pipes and cleaning them, before heading back down to town.

When the weather warms and the snow melts, the *yumori* begin visiting the mountains more frequently. By summer they are there daily, except when the weather is bad. At this time of year, the work includes clearing vegetation and debris from the access trail and checking for leaks in the pipes along the way.

Unsung Heroes of Dake Onsen

In September 2011, after torrential rain on the mountain, the flow of hot-spring water to Dake Onsen stopped. A landslide on the mountain had damaged the pipes. The

yumori led an emergency repair effort, with much of the town pitching in to help. After several days of work, the flow was restored, but the yumori had to monitor and maintain the affected areas for years thereafter as the debris from the landslide settled.

There is no manual for any of this work. Younger yumori learn from more experienced colleagues on the job, then teach new recruits in turn. Yumori culture, passed on from generation to generation, has played an invisible but vital role at Dake Onsen since the town's founding.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岳温泉の湯守

鉄山から湧出する岳温泉の水を維持するには、8キロメートルにわたる導水路とパイプを定期的に点検し、修理する必要があります。これが湯守（guardians of the springs）の仕事です：湯守は、通常の仕事に加えてこれらの役割を担う地域住民です。

年間を通じた仕事

冬になると、湯守たちは毎週山に入ります。雪の中を源泉まで登るだけでも数時間かかります。そのパイプにたどり着くために約3時間かけて雪を掘り、清掃して町まで戻ります。

天気が暖くなり、雪が溶けると、湯守たちはより頻繁に山を訪れ始めます。夏までは、天気が悪くない限り、毎日山に行きます。毎年この時期の作業には、通路から植物や瓦礫を取り除き、途中で水漏れがないか確認することが含まれます。

岳温泉の縁の下の力持ち

2011年9月、山に集中豪雨が発生した後、岳温泉への温泉の供給が止まりました。山の土砂崩れでパイプが破損したためです。湯守は応急修理活動を主導し、これに町の多くの人々が協力しました。山での数日間の作業の後、お湯の供給は回復しましたが、土砂崩れの残骸は残され、湯守はその後何年もの間、被害を受けた地域を監視・保守しなければなりませんでした。

こうした作業にはマニュアルはありません。若い湯守は、経験豊富な同僚から実地で仕事を学び、学んだことをまた新入りに教えます。岳温泉では創業以来、代々受け継がれてきた湯守文化が目に見えないながらも重要な役割を果たしてきました。

026-010

The History of Dake Onsen

二本松市

【タイトル】 岳温泉/岳温泉の歴史

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The History of Dake Onsen

Dake Onsen traces its origins to a group of hot-spring inns high up on Mt. Tetsu named Yui Onsen. Hot springs with similar names appear in historical records as early as the ninth century. By the seventeenth century, Yui Onsen was a thriving entertainment district catering to travelers and locals alike.

Moving Down the Mountain

In 1824, however, Yui Onsen was buried in a deadly landslide and the site was abandoned. Two years later, the daimyo of Nihonmatsu domain ordered a new *onsen* town built in an area called Jumonji Dake at the foot of Mt. Tetsu. As there were no natural hot springs at Jumonji Dake, a system of wooden conduits and pipes was built to carry the waters of the original springs from 6 kilometers above. Today, Dake Onsen's water is piped in exactly the same way.

In 1868, Jumonji Dake burned down during the Boshin War, when an alliance led by powerful domains in western Japan overthrew the Tokugawa shogunate. In 1870, it was replaced by a new *onsen* town in nearby Fukabori, but in 1903 a fire that spread from one of the inns burned Fukabori Onsen to the ground. Finally, in 1906, the town was rebuilt at its present location under the name Dake Onsen. Its waters still come from the same springs on Mt. Tetsu, 8 kilometers away.

The Republic of NikoNiko

The next dramatic move for Dake Onsen was rhetorical: in 1982, the town declared itself an independent country, “The Republic of NikoNiko.” (*Nikoniko* is a Japanese word for cheerful smiles.) This came as part of a wave of tongue-in-cheek micronation declarations in Japan inspired by Inoue Hisashi’s 1981 satirical novel *The People of Kirikiri*, about a breakaway village in Iwate Prefecture.

For Dake Onsen, the declaration was driven by concern about the new Tohoku Shinkansen line. With no Shinkansen bullet train station planned for Nihonmatsu and many express trains to be replaced by Shinkansen services, Dake Onsen’s visitor numbers seemed likely to drop. The declaration of independence was meant to keep Dake Onsen in the public eye—and it worked. The Republic of NikoNiko made national news, so the town leaders kept the joke going.

The tourist association’s headquarters were renamed the “National Assembly Hall” and the head of the association was appointed President. The town issued passports and even a currency, the Cosmo (after Dake Onsen’s town flower, the cosmos), which respectively functioned as stamped discount cards and shopping vouchers. It was not until 2006 that the reigning President finally announced that NikoNiko was re-merging with Japan, ending more than two decades of “independence.”

Throughout Dake Onsen’s circuitous history, the determination of the people of Nihonmatsu to preserve the hot springs is a constant. In the face of every challenge, from natural hazards to economic pressure, they have found a way to keep the *onsen* alive for future generations.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岳温泉の歴史

岳温泉の起源は、鉄山の高台にある湯日（ゆい）温泉という一群の温泉旅館にあります。似た名前の温泉は、9 世紀にはすでに史料に登場しています。17世紀までに、湯日温泉は旅行者と地元の人々の両方を満足させる歓楽街として栄えました。

山を下る

しかし、1824年に湯田温泉は大規模な土砂崩れで埋もれ、跡地は放棄されました。その2年後、二本松藩主は鉄山の麓、十文字岳と呼ばれる地域に新たな温泉街の建設を命じました。十文字岳には天然温泉がなかったため、6キロメートル離れたもとの温泉からお湯を運ぶために木製の導水路とパイプのシステムが建設されました。現在、岳温泉のお湯は当時と全く同じ方法で配管されています。

1868年、西日本の有力な藩が率いる連合軍が徳川幕府を打倒した戊辰戦争で、十文字岳は焼け落ちました。1870年に近くの深堀に新しい温泉街が建てられましたが、1903年に旅館の1つから延焼した火災で深堀温泉は全焼してしまいました。最終的に、1906年に現在の場所に温泉街が再建され、岳温泉と名付けられました。岳温泉の湯は、今でも8キロメートル離れた鉄山の同じ源泉から引かれています。

ニコニコ共和国

岳温泉の次の劇的な一手は目を引くものでした：1982年、この温泉街は独立国家「ニコニコ共和国」として樹立を宣言しました。（ニコニコとは明るい笑顔を指す日本語です）これは、岩手県の独立村を描いた1981年の井上ひさしによる風刺小説『吉里吉里人』に触発された、日本での冗談混じりのミニ独立国開国ブームの一環として成立しました。

岳温泉の場合、東北新幹線が新設されることへの懸念がこの宣言の発端となりました。二本松には新幹線の駅の開設が予定されておらず、多くの急行列車が新幹線に置き換えられるため、岳温泉の訪問者数は減少する可能性が高いと考えられました。独立宣言は、世間の人々に岳温泉を忘れ去られないようにすることが目的でした。そして、それは成功でした。ニコニコ共和国は全国ニュースで報道されたため、町のリーダーたちはこの冗談を継続しました。

観光協会事務所は「国会議事堂」と改称され、協会長が大統領に就任しました。岳温泉はパスポートと通貨「コスモ」（岳温泉の町の花「コスモス」にちなんでいる）を発行し、これらはそれぞれスタンプ割引カードと買い物券の役割を果たしました。当時の大統領が、ニコニコは日本と再合併し、20年以上続いた「独立」に終止符を打つとやっと発表したのは2006年になってからのことでした。

岳温泉の長い歴史の中でも、温泉を守るという二本松の人々の決意は変わりません。自然災害から経済的なものまで、あらゆる課題に直面しながらも、彼らは温泉を将来の世代のために残し続ける方法を見つけました。

026-011

Walking Dake Onsen

二本松市

【タイトル】 岳温泉/岳温泉まちなか散策コース

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Walking Dake Onsen

Dake Onsen's recommended walking course covers the town's most picturesque and historic sites. It is a comfortable stroll along 2.3 kilometers of paved paths and takes about an hour to complete.

Print Your Own Postcards

The walking course starts at the tourist information center at the southeast end of the town's main strip, which is called "Himalaya Street." The first point of interest is the postcard-size carved printing block of a tiger outside the center. There are 12 of these blocks dotted around the town, each with a picture of a different animal in the East Asian calendar cycle. The tourist information center can provide printing kits with paper and returnable ink pads for making postcards at each of the 12 printing blocks. The animal images are by Oyama Chusaku, an artist who grew up in Nihonmatsu, and the blocks were carved by sculptor Hashimoto Kentaro.

Kagamigaike and Midorigaike Ponds

From the tourist information center, the walking course leads southeast down Sakura Slope. There is a public foot spa along the way. The slope ends at a small park with a strolling path around Kagamigaike Pond. Atop a small hill nearby is the Yuhigaoka Second Lookout Point, which has the town's best views of the Adataru massif.

South of Kagamigaike Park lies Midorigaike Pond, which is notable for its brilliant green color. This comes from the used *onsen* water that is collected here from all the inns in Dake Onsen for dilution and discharge. The round intake tower on the banks of the pond adds a picturesque touch.

Along the Natsunashi River

After the ponds, the walking course leads south along the old road to the nearby town of Motomiya. The blooming cherry trees here are now tended by volunteers from Namie, a town on the eastern coast of Fukushima. Dake Onsen hosted the people of Namie for many months when evacuation orders were issued following the 2011 Great East Japan Earthquake and nuclear accident.

The walking course turns northwest up a tree-lined road following the Natsunashi River, before taking a long, gently curving road that connects to the northwest end of Himalaya Street. Along the way is a small cemetery and memorial site preserving the original grave markers of the guests and employees who died in the 1824 landslide at Yui Onsen.

Onsen Jinja Shrine

At the top of Himalaya Street stands Onsen Jinja shrine. The shrine is a proudly syncretic institution, hosting Shinto rituals in summer and winter and a Buddhist ceremony for the hot springs in spring. It also has a statue of Daikokuten, a deity of prosperity that has been worshiped at the *onsen* town since the days when it was located on the slopes of Mt. Tetsu.

From the shrine, the walking course returns southeast down Himalaya Street, past *onsen* inns, restaurants, and confectioners, to the tourist information center where it began.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

岳温泉を歩く

岳温泉のおすすめウォーキングコースは、町の名所や史跡を巡るコースです。舗装された2.3キロメートルの小道に沿って快適に散策でき、所要時間は約1時間です。

自分のハガキを刷る

ウォーキングコースは、「ヒマラヤ大通り」と呼ばれる町のメインストリートの南東端にある観光案内所からスタートします。まず最初の見どころは、案内所の外側にあるハガキサイズの虎の彫板です。これらの彫板は街中のあちこちに12個置かれており、それぞれに干支（東アジアの暦周期）の異なる動物の絵が描かれています。観光案内所では、12の各彫板でポストカードを作成するための用紙とインクパッドが入った印刷キットを提供しています。動物の絵は二本松市で育った画家、大山忠作氏によるもので、彫板は彫刻家の橋本堅太郎氏が彫ったものです。

鏡ヶ池と緑ヶ池

観光案内所から、ウォーキングコースは南東に向かって桜坂を下ります。途中で公衆足湯があります。坂を登り切ると、鏡ヶ池を散策路が囲む小さな公園があります。近くの小高い丘の上に夕陽ヶ丘第二展望台があり、そこからは町で最も見事な安達太良連峰の景色を眺めることができます。

鏡ヶ池公園の南には、鮮やかな緑色が特徴的な緑ヶ池があります。これは、岳温泉の旅館から集められた使用済みの温泉水を希釈して排出したものです。池のほとりにある円形の取水塔によって、この池は絵画のような雰囲気醸しています。

夏無川沿い

池を後にすると、ウォーキングコースは旧道に沿って南へのびており、近くの本宮という町へ向かいます。ここに咲き誇る桜の木は現在、福島東海岸の町、浪江町の有志の方々によって手入れされています。岳温泉は、2011年の東北地方太平洋沖地震と原発事故の後に避難指示が出された際、何ヶ月にもわたって浪江町の人々を受け入れました。

ウォーキングコースは、夏無川沿いの並木道を北西に進み、その後緩やかにカーブした長い道を進むと、ヒマラヤ大通りの北西端につながります。途中には小さな墓地と記念碑があり、1824年に湯田温泉で起こった土砂崩れで亡くなった宿泊客と従業員の墓標が保存されています。

温泉神社

ヒマラヤ大通りの高い方の端には温泉神社があります。この神社は歴とした神仏習合機関であり、夏と冬には伝統的な神事祭りが、春には温泉の仏教儀式が開催されます。また、繁栄の神である大黒天像もあります；この像は、鉄山の中腹にあった頃からこの温泉街で信仰されてきました。

神社からは、ウォーキングコースはヒマラヤ大通りを南東に向かって進み、温泉旅館やレストラン、菓子屋などを通して、スタート地点の観光案内所に到着します。

026-012

Nihonmatsu Castle

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/二本松城の概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Nihonmatsu Castle

Kasumigajo Castle Park occupies the former grounds of Nihonmatsu Castle, which stood on a spur of the Adatarara massif from 1414 to 1868. The castle was home to a series of daimyo before being assigned to Niwa Mitsushige in 1643. Civic planning by Mitsushige and his descendants laid the foundations for the city of Nihonmatsu as it is today. The Niwa family governed from the castle until 1868, when it was destroyed in the Boshin War. Today, the park contains preserved and reconstructed walls, buildings, and gardens that shed light on the castle as it was in centuries past.

The highest point of the park is the *honmaru* (main compound), which was the first part of the castle to be completed. It is surrounded by stone walls, some of which date to the late sixteenth century. The *tenshudai* (keep foundation) inside the *honmaru* never housed an actual keep, but offers panoramic views of the land around Nihonmatsu. The lower levels of the park contain other features including the Senshintei tea house, which is the oldest surviving structure on the site, as well as the recreated Minowa Gate and a Japanese-style garden dating from the mid-seventeenth century.

The castle grounds are also used for seasonal community events, among them the Sakura (Cherry Blossom) Festival and the Chrysanthemum Doll Festival. Nihonmatsu Castle may no longer be standing, but the site remains central to the city's civic life.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城

霞ヶ城公園は、1414年から1868年まで安達太良連峰の支脈にそびえていた二本松城の跡地に作られました。二本松城は何人もの大名の居城となった後、1643年に丹羽光重に与えられました。光重とその子孫による都市計画によって、現在の二本松市の基礎が築かれました。丹羽家はこの城を拠点に統治しましたが、1868年に戊辰戦争で城も領地も破壊されました。現在、公園には保存および復元された石垣、建物、庭園があり、過去の城の姿を明らかにしています。

この公園で最も高いところにあるのが、城の中で最初に完成した部分、本丸です。本丸の周囲は石垣に囲まれており、その石垣の一部は16世紀後半に築かれました。本丸内の天守台には実際の天守閣があったことはないものの、ここからは二本松周辺の土地を一望できます。公園の下方には、敷地内に現存する最古の建造物である洗心亭のほか、再現された箕輪門や17世紀半ばに作られた日本庭園もあります。

城内は、桜まつりや菊人形まつりなど、季節ごとの地域行事にも利用されます。二本松城はもう存在しませんが、この場所は依然として市民生活の中心です。

026-013

Nihonmatsu Castle

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/二本松城の概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Nihonmatsu Castle

Nihonmatsu Castle stood in what is now Kasumigajo Castle Park from 1414 to 1868. The castle was occupied by a series of daimyo throughout the Warring States period (1467–1568) before being granted to Niwa Mitsushige, first daimyo of the newly established Nihonmatsu domain, in 1643. Mitsushige and his descendants ruled from the castle until 1868, when it was destroyed in the Boshin War between the Tokugawa shogunate and an alliance of powerful domains determined to overthrow it.

From Mountain Fortress to Modern City

Nihonmatsu Castle was one of many “mountain castles” built on elevated, defensible sites during the Warring States period, but during the more peaceful times of the Tokugawa shogunate (1603–1868) most daimyo moved into more convenient dwellings on lower ground. The Niwa daimyo, however, kept their residences and administrative buildings within the original castle walls. This necessitated some unconventional layout decisions, such as building on multiple levels due to a lack of flat space.

Mitsushige took a keen interest in civic planning, seeing it as key to the domain’s strength. He reorganized the settlements outside the castle walls into a town whose basic layout is still visible in Nihonmatsu today. He also ordered the construction of the Nigoda Conduit, a series of channels and pipes that brought vital water to the castle and its town from sources in the mountains some 18 kilometers away.

The Birth of Kasumigajo Castle Park

After the Boshin War, the former castle grounds served as the site for a silk mill before being renamed Kasumigajo Castle Park and planted with flowers and trees for the citizenry to enjoy. The park contains preserved and reconstructed walls, buildings, and gardens that shed light on Nihonmatsu Castle as it was in centuries past.

The highest point of the park is the *honmaru* (main compound), which was the first part of the castle to be completed. It is surrounded by stone walls, some of which date to the late sixteenth century. The *tenshudai* (keep foundation) inside the *honmaru* never housed an actual keep, but offers panoramic views of the land around Nihonmatsu. The lower levels of the park contain other features like the Senshintei tea house (the oldest surviving structure on the site), the recreated Minowa Gate, and a Japanese-style garden dating from the mid-seventeenth century.

The Heart of Nihonmatsu

The castle grounds still play an important role in civic life in Nihonmatsu, hosting events like the Chrysanthemum Festival, in which local horticulturalists display dolls covered in specially cultivated flowers. Minowa Gate is the starting point for a parade on the last night of the Lantern Festival, when towering floats covered in lanterns trundle through the streets accompanied by festival music.

Niwa Mitsushige could not have foreseen how the area would develop centuries after his time, but his planning laid the foundations for modern Nihonmatsu, with the castle site still at its center.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城

二本松城は、1414年から1868年まで現在の霞ヶ城公園の場所にありました。この城は、戦国時代（1467～1568）を通じて何人かの大名によって住まれ、1643年に新しく設立された二本

松藩の初代大名である丹羽光重に与えられました。光重とその子孫は1868年までこの城で統治しましたが、城は1868年に徳川幕府とそれを打倒することを決意した有力藩連合との間で戦われた戊辰戦争で破壊されました。

山岳要塞から近代都市へ

二本松城は、戦国時代に高台の防御しやすい場所に築かれた多くの「山城」の1つでしたが、より平和となった徳川幕府（1603～1868）の時代には、ほとんどの大名が低地の便利な家に移転しました。しかし、丹羽氏は住まいと行政施設を元の城壁の中に残しました。そのため、平らなスペースが不足し、複数の階層に建物を建てるなど、いくつかの特異なレイアウト決定が必要になりました。

丹羽光重は都市計画が藩の強さの鍵であると考え、都市計画に強い関心を持ちました。彼は城壁の外側の集落を町に再編しましたが、その基本的な配置は今日の二本松市にも見ることができます。彼はまた、約18キロメートル離れた山中の水源から城と城下町に欠かせない水をもたらす一連の水路とパイプである二合田用水路の建設も命じました。

霞ヶ城公園の誕生

戊辰戦争後、二本松城跡は製糸工場となった後、霞ヶ城公園と改名され、花や木々が植えられ市民の憩いの場となりました。公園には保存および復元された石垣や建物、庭園があり、過去の二本松城の姿を明らかにしています。

この公園で最も高いところにあるのが、城の中で最初に完成した部分、本丸です。本丸の周囲は石垣に囲まれており、その石垣の一部は16世紀後半に築されました。本丸内の天守台には実際の天守閣があったことはないものの、ここからは二本松周辺の土地を一望できます。公園の下方には、敷地内に現存する最古の建造物である洗心亭のほか、再現された箕輪門や17世紀半ばにつくられた日本庭園もあります。

二本松市の中核

二本松城跡は、地元の園芸家が特別に栽培した花で覆われた人形を展示する菊祭りの会場となるなど、今でも二本松の市民生活に重要な役割を果たしています。箕輪門は提灯祭りの最後の夜に市の各地域の人々が、祭囃子が響く中、提灯で覆われた背の高い太鼓台を市中へ送り出す「三町合同曳き廻し」の出発地点です。

丹羽光重は彼の時代から何世紀も経ってこの地域がどのように発展するかは予見できなかったでしょうが、現在の二本松の基礎は彼の都市計画によって築かれ、二本松城跡は今でもその中心にあ

ります。

026-014

The History of Nihonmatsu Castle

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/二本松城の歴史

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The History of Nihonmatsu Castle

The history of Nihonmatsu Castle reflects the history of Japan's transition to modernity. From the high ground above the city, it saw the fierce conflict of the Warring States period (1467–1568) settle into the long peace of the Tokugawa shogunate (1603–1868), which in turn was ended by the Boshin War (1868–1869) that cleared the way for the modern state.

A Mountain Fortress

The first incarnation of Nihonmatsu Castle was completed in 1414. It was built by Hatakeyama Mitsuyasu, a local daimyo whose family had been sent to the region a century earlier as provincial deputies of the Ashikaga shogunate. Mitsuyasu's castle occupied only the very top of the mountain and was protected by walls of packed earth rather than stone, prioritizing defensibility over comfort.

The Hatakeyama family resided in the castle for more than a century, but were forced out in 1586 by Date Masamune, a powerful daimyo from the north. Conflict had long been simmering between the Date and the Hatakeyama, but the death of Masamune's father during a botched kidnapping by the Hatakeyama brought matters to a head. The Hatakeyama family recognized inevitable defeat and fled, torching the castle as they went.

Modernizing the Castle

In 1590, Toyotomi Hideyoshi—by then the most powerful daimyo in Japan, well on his way to ruling the whole country—reassigned Nihonmatsu Castle to the daimyo Gamo Ujisato. Ujisato set about modernizing the castle, building the first stone walls around the *honmaru* (main compound).

After Hideyoshi's demise in 1598, Tokugawa Ieyasu established a shogunate that would rule Japan until 1868. In 1627, the shogunate reassigned Nihonmatsu Castle to the Kato family of daimyo, and they continued Ujisato's project, building the stone walls surrounding the *san-no-maru* (outer compound) lower down the slopes.

The Niwa Daimyo and Beyond

In 1643, the Tokugawa shogunate declared Nihonmatsu a domain and appointed Niwa Mitsushige as its first daimyo. Mitsushige began his tenure by remaking the town outside the castle walls along more orderly lines. The basic layout of the castle town is still preserved in today's Nihonmatsu. The Tokugawa era was largely peaceful, and Mitsushige and his descendants ruled from the castle for more than two centuries.

In 1868, an alliance led by powerful domains from western Japan took up arms against the shogunate in what was called the Boshin War. Nihonmatsu entered the war on the shogunate's side, but was helpless against the western alliance's modern weaponry and tactics. The domain was overrun and Nihonmatsu Castle was burned down for the second time.

After the shogunate's defeat, domains and daimyo were abolished under the new Meiji government. The former grounds of Nihonmatsu Castle were occupied by a silk mill and then by a public park. Until excavation and restoration efforts began in the late twentieth century, little remained of the castle but a few half-buried stone walls. Nevertheless, the history of the castle shaped the city of Nihonmatsu in ways that are still being unearthed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城の歴史

二本松城の歴史は日本の近代への変遷の歴史です。市を見晴らす高台から、この城は戦国時代（1467～1568）の激しい争いが落ち着き、徳川幕府（1603～1868）の長い平和が訪れ、やがてそれが戊辰戦争によって終結して近代国家への道を歩み出したのを見てきました。

山の要塞

二本松城の最初の姿は 1414 年に完成しました。この城は地元の大名、畠山満泰によって建てられました；畠山満泰の一族はその1世紀前に足利幕府の国代としてこの地域に派遣されていました。満泰の城は山の頂上部のみを占めており、快適さよりも防御を優先して、石ではなく固められた土の壁で守られていました。

畠山氏は1世紀以上にわたってこの城に住んでいましたが、1586年に北方の強力な大名である伊達政宗によって追放されました。伊達家と畠山家の間では長い間対立がくすぶっていましたが、政宗の父が畠山家による誘拐未遂中に死亡したことで緊張は頂点に達しました。畠山氏は敗北が避けられないと認識し、城に火を放ちながら逃亡しました。

城を近代化する

1590年、当時日本で最も強力な大名であり、全国を統治しようとしていた豊臣秀吉は、二本松城を大名の蒲生氏郷に割り当てました。氏郷は城の近代化に着手し、本丸の周囲に最初の石垣を築きました。

秀吉の死後、徳川家康は1868年まで日本を統治した幕府を設立しました。1627年、幕府は二本松城を大名加藤家に割り当てると、加藤氏は氏郷の事業を引き継いで、斜面の下方に三の丸を囲む石垣を築きました。

丹羽氏以降

1643年、徳川幕府は二本松を独立藩として宣言し、丹羽光重を初代大名に任命しました。光重は任命されると、城壁の外の町をより秩序ある区画に作り直すことに取り掛かりました。城下町の基本的な配置は、現在の二本松市に残されています。徳川の時代はおおむね平和で、光重とその子孫は2世紀以上にわたってこの城から二本松を統治しました。

1868 年、西日本の有力な藩が率いる同盟が、戊辰戦争と呼ばれる戦いを起こし、幕府に対し

て武器をとりました。二本松は幕府側として参戦しましたが、西側同盟の近代兵器と戦術の前には無力でした。二本松藩は制圧され、二本松城は再び火を放たれました。

幕府の敗北後、明治新政府によって藩と大名は廃止されました。二本松城のかつての敷地は製糸工場が占有し、その後公共公園となりました。20世紀後半に発掘と修復の取り組みが始まるまで、城の一部は半分埋もれた石垣いくつかを除いてほとんど残っていませんでした。城の歴史がどのように二本松の街を形作ったかについては、今も明らかになり続けています。

026-015

Nihonmatsu Castle through the Seasons

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/二本松城の四季

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Nihonmatsu Castle through the Seasons

Spring and Summer

Kasumigajo Castle Park is renowned for its cherry blossoms. A Sakura (Cherry Blossom) Festival is held from April to May each year, with live music and other attractions. Throughout the spring and summer other flowers bloom in their turn, including violets, wisteria, and hydrangeas. All of these were planted after the castle grounds became a public park, representing a new stage in the castle's history as a treasured part of the community.

The Lantern Festival

The Lantern Festival, held over three nights starting on the first Saturday in October, lights up the city of Nihonmatsu as the heat of summer recedes, giving way to autumn. Seven huge floats covered with lanterns and carrying festival musicians playing flute and percussion roll through the city. Each float is some 11 meters high and covered with 300 paper lanterns with real candles inside. These require constant replacement by attendants who nimbly clamber over the float to reach lanterns as their candles go out. By the end of the night, more than 1,500 candles have been used by each float.

The festival dates to 1664, when it was begun by Niwa Mitsushige. Each of the seven floats comes from a different neighborhood in Nihonmatsu. On the last night of the festival, a parade of the floats leaves from the castle's Minowa Gate.

Autumn Chrysanthemums

When the castle's foliage turns gold and red in autumn, it is illuminated by night along walking paths opened to residents and visitors. From mid-October to late November, Kasumigajo Castle Park also hosts Nihonmatsu's annual Chrysanthemum Festival. This event is renowned for its life-sized dolls and dioramas covered in or made entirely from chrysanthemums. Each year has a theme, and participating horticulturalists and teams compete to create the most elaborate and beautiful displays on that theme.

The modern Chrysanthemum Festival was founded in 1955, but chrysanthemum cultivation as a hobby originated with the samurai of Nihonmatsu Castle, who held shows to demonstrate their mastery of the art. The tradition evidently survived the fall of the castle itself, as visitors in the early twentieth century noted that the chrysanthemum shows in Nihonmatsu were "the best in the prefecture."

In winter, fallen snow blankets the park and gives it a quieter, more contemplative air. The *honmaru* offers clear views through the crisp air of Mt. Adatara and the other mountains to the west, whose slopes are also covered in deep snow.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城の四季

春と夏

霞ヶ城公園は桜の名所として知られています。毎年4月から5月にかけて桜まつりが開催され、生演奏やその他のアトラクションが行われます。春から夏にかけて、スミレ、フジ、アジサイなどの花が次々に咲きます。これらはすべて、城の敷地が公園になった後に植えられたもので、地域に愛される城の歴史の新たなステージを表しています。

提灯祭り

夏が涼しくなり、秋が訪れると、二本松は提灯祭りの明かりで輝きます。提灯で覆われ、笛や打楽器を演奏する祭り囃子を乗せた7台の巨大な太鼓台が街を駆け巡ります。各太鼓台は高さ約11メートルで、中に本物のろうそくが入った提灯300個で飾り付けられています。これらのろうそくは、火が消えると、太鼓台を機敏に乗り越える係員によって取り替えられる必要があります。夜の終わりまでに、各太鼓台で1,500本以上のろうそくが使用されます。

この祭りの起源は、丹羽光重が始めた1664年に遡ります。7台の太鼓台は、それぞれ異なる地区を代表しています。祭りの最終日の夜、太鼓台の行列が箕輪門から出発します。

秋の菊

秋に城の紅葉が金色や赤に染まると、霞ヶ城公園は住民や訪問者に開放された遊歩道に沿って夜にライトアップされます。10月中旬から11月下旬には、霞ヶ城公園で二本松恒例の菊まつりも開催されます。このイベントは、菊で覆われた、または全体が菊で作られた等身大の人形やジオラマが展示されることで有名です。毎年テーマがあり、参加する園芸家やチームは、そのテーマに沿って最も精巧で美しい展示の制作を競います。

現在の菊まつりは1955年に初めて開催されましたが、趣味としての菊栽培は二本松城の武士がその技術の熟練を示すために品評会を開催したのが始まりです。20世紀初頭の訪問者が、二本松の菊花展は「県内で一番だった」と述べていることからわかるように、この伝統は城の落城後も残っています。

冬には、降った雪が公園を覆い、より静かで瞑想的な雰囲気が漂います。本丸からは、すがすがしい空気の中、西の安達太良山をはじめとする斜面が深い雪で覆われた山々がよく見えます。

026-016

The Stone of Admonishment

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/ 戎石銘碑

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Stone of Admonishment

An 8-meter-tall stone stands on the eastern edge of Kasumigajo Castle Park, at the former site of the gate samurai passed through when entering or leaving the castle grounds. Inscribed on the stone are four lines of poetry:

Your wages and your stipend
Are the people's grease and sweat.
To oppress the people is easy,
To deceive heaven is not.

This admonishment to domain samurai to treat the people of Nihonmatsu with respect was inscribed on the stone in 1749 by order of Niwa Takahiro, fifth daimyo of the Nihonmatsu domain. Takahiro was a reform-minded ruler who had hired Confucian scholar Iwaida Sakuhi to advise him on ways to rectify and improve the domain's governance, and the stone was one of Sakuhi's suggestions. The path here at the time was lower than the street today, making the stone an even more imposing presence that loomed overhead as domain officials passed by.

The lines are excerpted from a longer poem on a similar stele erected by Meng Chang, last emperor of the Later Shu dynasty in tenth-century China. Meng's example inspired the creation of numerous steles across China over the centuries to come, as Sakuhi would have known.

Records state that the stone served its intended purpose, inspiring the domain's samurai to show greater diligence and respect for the people. However, a rumor eventually spread among the farmers of Nihonmatsu that the poem was to be read backwards as an exhortation to work people harder and take all they had. The harvest was poor in 1749, and the domain soon faced a full-blown peasant rebellion. Records state that Sakuhi went to speak with the rebels himself, explaining the true intent of the inscription so masterfully that many were brought to tears as they called an end to the rebellion.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

戒めの石

霞ヶ城公園の東端、武士が城内に出入りする際に通った門の跡地には、高さ8メートルの石が立っています。石には4行の詩が刻まれています。

爾俸爾禄
民膏民脂
下民易虐
上天難欺

二本松の民を大切にせよという藩士に対するこの戒めの言葉は、1749年に二本松藩五代藩主丹羽高寛の命により石に刻まれました。高寛は藩の統治を正し、改善する方法について助言を求めるために儒学者の岩井田昨非を雇った改革志向の統治者であり、この石は昨非の提案の一つでした。当時のこの道は今の道路よりも低い位置にあったため、ここを通り過ぎる藩の役人にとっては頭上にそびえ立つこの石は今よりさらに存在感がありました。

この詩句は、10世紀中国の後蜀王朝最後の皇帝、孟昶によって建てられた同様の石碑にある長い詩から抜粋されたものです。孟昶の示した模範は、その後何世紀にもわたって中国全土に数多くの石碑が建てられるきっかけとなったことを、昨非は知っていたのでしょう。

記録によれば、この石は本来の目的を果たし、藩の武士が人々に一層の勤勉さと敬意を示すよう促したそうです。しかし、やがて二本松の農民たちの間で、この詩を逆から読むと、人々にもっと働かせ、持てるものを全て奪い取ろうという意図が込められているという噂が広まりました。1749年の収穫は不作で、二本松藩ではやがて本格的な農民の一揆が起こりました。記録によると、昨非は自ら反乱者たちに話しに行き、碑文の真の意図を見事に説明したため、多くの人が涙を流し、反乱の終結を求めたそうです。

【タイトル】 二本松城跡/二本松少年隊

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Nihonmatsu Shonentai

Southwest of Nihonmatsu Castle's *honmaru* (main compound) stands a bronze relief depicting a group of young boys under the command of an older man preparing to battle an approaching enemy. This relief was created in 1968 by local sculptor Hashimoto Kosho as a memorial to the Shonentai, or "Boys' Brigade," many of whom died attempting to defend Nihonmatsu Castle when it came under attack in 1868 during the Boshin War.

The Boshin War was a civil war between an alliance led by powerful domains in western Japan and the Tokugawa shogunate. It began with the Battle of Toba-Fushimi in Kyoto, and the western alliance quickly swept east. As an ally of the shogunate, Nihonmatsu knew it would soon need to fight.

During the war, the shogunate began accepting military recruits as young as 15 to alleviate its troop shortage. However, Nihonmatsu domain had a longstanding custom of adding two years to the age of samurai recruits to their army. The continued application of this rule meant that, in practice, children as young as 13 signed up to defend Nihonmatsu. Due to the way ages were calculated in Japan at the time, some recruits had not yet reached their 12th birthday.

The newly formed brigade of boys between the ages of 13 and 17 was placed under the command of Kimura Jutaro, a 22-year-old expert in cannonry who had studied in Edo. The bronze relief stands on the site of the shooting range where he trained his young troops.

On the 29th day of the 7th month, 1868, the western alliance attacked Nihonmatsu. The invading army had 7,000 troops, with modern weapons and training. Nihonmatsu was defended by just 1,000 soldiers, including the 62 members of the Shonentai. Many of the boys were forced to fight without armor, and reports describe pairs of boys drawing each other's swords, as the blades were too long for each to draw his own.

The battle was over before noon. Nihonmatsu Castle was torched, and 14 members of the Shonentai were killed, along with hundreds of other defenders. Their leader Kimura did not survive the battle.

This episode was so traumatic for Nihonmatsu as a community that the Shonentai were rarely discussed publicly for decades afterwards. This silence was finally broken in 1918 at an event commemorating the 50th anniversary of the war, when a former Shonentai recruit named Mizuno Yoshiyuki distributed a self-published pamphlet about his experience. This encouraged other survivors and family members to come forward, providing testimony and documents that enabled historians to piece together the story after the fact. A multimedia exhibit in the Nihonmatsu Johokan information center and history museum presents the results of this research.

In 1996, the scene depicted in Hashimoto Kosho's relief was recreated in a group of bronze statues erected outside Minowa Gate. The statues were sculpted by Kosho's son, Hashimoto Kentaro, and are notable for the addition of a mother retailoring an adult's kimono for her son to wear into battle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松少年隊

二本松城の本丸の南西には、年上の男性の指揮の下、迫りくる敵と戦う準備をしている少年たちの一団を描いた青銅製のレリーフが立っています。このレリーフは、1868年の戊辰戦争中に二本松城が攻撃を受けた際、その多くが二本松城を守ろうとして命を落とした少年隊の追悼として、地元の彫刻家橋本高昇によって制作されました。

戊辰戦争は、西日本の有力諸藩を中心とする連合軍と徳川幕府との間で起こった内戦です。京都の鳥羽・伏見の戦いから始まり、西側同盟は瞬く間に東側に侵攻しました。幕府側の同盟である二本松は、近いうちに戦わなくてはならないことを知っていました。

戦争中、幕府は兵力不足を解消するために15歳以上の新兵を受け入れ始めました。しかし、二本松藩では古くから武士の入隊年齢に2年加算する慣例がありました。この規則が適用されたことにより、実際にはまだ13歳の子どもたちも二本松を守るために入隊することとなりました。当時の日本の年齢計算方法により、中には12回目の誕生日を迎えていない新兵もいました。

13歳から17歳の少年で構成された新設の部隊は、江戸で学んだ22歳の大砲術専門家、木村銃太郎の指揮下に置かれました。青銅のレリーフは、彼が若い兵士たちを訓練した射撃場の場所に立っています。

1868年7月29日、西日本連合軍が二本松を攻撃しました。侵略軍は最新の武器を持ち訓練を受けた7,000人の軍隊でした。二本松を防衛したのは少年隊の隊員62名を含むわずか1,000名の兵士でした。少年たちの多くは鎧を着けずに戦うことを余儀なくされ、記録によると、刀の刃が長すぎて各自が自分の刀を抜くことができなかったため、二人一組の少年が互いの剣を抜き合っていたといえます。

戦いは正午を迎える前に終わりました。二本松城には火が放たれ、少年隊の隊員14名と他の兵士数百名が死亡しました。木村は戦い中命を落としました。

このエピソードは二本松の地域社会にとって非常に衝撃的であったため、その後数十年間、少年隊について公に議論されることはほとんどありませんでした。この沈黙が破られたのは、1918年の戊辰戦争終結50周年を記念するイベントにおいて、元少年隊隊員の水野好之が自らの体験を記した自費出版の小冊子を配布したときでした。これにより、他の生存者や家族が名乗り出て証言や文書を提供するようになり、歴史家が事後的に物語をまとめることが可能になりました。にほんまつ城報館のマルチメディア展示では、この研究の成果が紹介されています。

1996年、橋本高昇のレリーフに描かれた場面が、箕輪門の外に建てられた銅像群を通じて再現されました。これらの像は高昇の息子である橋本堅太郎によって彫刻されましたが、この作品には息子に戦で着せるために大人の着物を直している母親が加えられていることが注目に値します。

026-018

The Stone Walls of Nihonmatsu Castle

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/二本松城の石垣

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Stone Walls of Nihonmatsu Castle

The long history of Nihonmatsu Castle makes it a treasure trove of stone wall technologies. The oldest surviving walls date to the 1590s and were built using the *nozurazumi* technique, in which natural, undressed stones of varying shapes and sizes are fitted together like a jigsaw puzzle. Later walls used dressed stone worked to fit more closely.

The Walls of the *Honmaru*

The stone walls of the *honmaru* (main compound) were originally built in the early seventeenth century. On the east side, only the lower halves of the original walls remained, buried in the earth until they were rediscovered in 1990. The western walls have been visible throughout the castle's history, but were rebuilt using contemporary techniques sometime after the castle fell in 1868. As a result, a project was launched in 1993 to rebuild all of the *honmaru* stone walls using traditional techniques. The work was completed in 1995.

The Two-Level Wall

The oldest stone wall in the castle is just north of the *honmaru*, below the *tenshudai* (keep foundation). It has never fallen or been rebuilt, and remains exactly as it was in the sixteenth century.

The wall is around 7.5 meters high, divided into a distinct lower and upper half. It was built around 1590 using the *nozurazumi* technique employed for the walls of the massive Azuchi Castle near the shore of Lake Biwa a decade earlier, sparking a revolution in Japanese castle design.

The Great Wall

Another of the oldest and largest surviving stone walls stands just south of the *honmaru*. This wall is 13 meters high and 21 meters long at its base. It was built in the late sixteenth century as part of Gamo Ujisato's project to modernize the castle, reinforcing its earthen construction with stone walls made using construction techniques not available to the original builders.

Minowa Gate

Minowa Gate was built by Niwa Mitsushige as part of his initial civil construction program after taking control of the castle in 1643. It was destroyed when the castle burned in 1868, but rebuilt in 1982. As the main gate of the castle, it was meant to impress.

Otemon Gate

The former site of the castle's Otemon Gate is outside Kasumigajo Park to the south. This gate stood between the castle and the Oshu Kaido highway, adding an extra degree of protection. It was long desired by the Niwa family, but the Tokugawa shogunate was reluctant to grant permission for more fortifications.

In the early nineteenth century, an ingenious advisor named Niwa Takaaki came up with a workaround. He first asked permission to build a wall instead of a gate, then requested leave to add a building on top of the wall. This ruse was successful, and Otemon Gate was completed in 1832. A section of the gate's stone wall still stands today. It is an example of *kikkozumi-kuzushi* or "turtle shell" masonry, so called

because rocks were dressed in roughly hexagonal shapes that fit together snugly in a turtle-shell pattern.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城の石垣

長い歴史を誇る二本松城は石垣技術の宝庫です。現存する最古の石垣は1590年代のもので、さまざまな形や大きさの自然石をジグソーパズルのように組み合わせる「野面積み」という技法を使って建てられました。その後の時代の石垣には、均等のレンガのような形に加工された石が使用されました。

本丸の石垣

本丸の石垣はもともと17世紀初頭に築かれたものです。東側の石垣は1990年に発見されるまで土の中に埋まっていた下部のみ残存しています。西側の石垣の多くは当初からずっと露出していましたが、1868年に城が落とされた後いつかの時点で近代的な技術を使用して積み直されました。そのため、1993年に本丸の石垣全体を伝統的な技術を使って復元する事業が始められました。この事業は1995年に完了しました。

二層の石垣

城内で最も古い石垣は、本丸のすぐ北、天守台の下にあります。一度も倒壊したり再建されたりしたことはなく、16世紀当時の姿をそのまま残しています。

この石垣の高さは約7.5メートルで、下半分と上半分にはっきりと分かれています。下半分は、野面積みという技法を使用して1590年頃に築かれました；この技法は、その10年ほど前に琵琶湖の近くの巨大な安土城の城壁に使用され、日本の城のデザインに革命を起こすきっかけとなりました。

大きな壁

現存する最古かつ最大の石垣のもう1つは、本丸のすぐ南に立っています。この石垣は高さ13メートル、底辺の長さは21メートルです。この石垣は、蒲生氏郷が手がけた、16世紀後半に土造りの構造を石垣で補強するために、当初の建築家には利用できなかった建築技術を使用して城を近代化する事業の一環として築かれたものです。

箕輪門

箕輪門は、丹羽光重が1643年に城を掌握してから最初の土木建設計画の一環として建てられました。1868年に城が燃えた際に焼失しましたが、1982年に再建されました。箕輪門は城の正門として見るものにとって印象的なものになるよう作られていました。

大手門

城の大手門の跡地は、霞ヶ城公園の南側にあります。この門は城と奥州街道の間にあり、城の防御を強化していました。丹羽家は長い間この門を作りたいと望んでいましたが、徳川幕府はさらなる防御施設建設の許可を与えるのに消極的でした。

19 世紀、丹羽貴明という老獪な家老が回避策を考え出しました。彼はまず門の代わりに城壁を建てる許可を求め、次に城壁の上に建物を追加する許可を求めました。この策略は成功し、1832年に大手門が完成しました。現在も門の石垣の一部が残っています。この石垣は、岩をほぼ六角形に切り、亀の甲羅のようにぴったりと合わせたものを組み合わせるため「亀甲積み崩し (turtle shell masonry) 」と呼ばれる石積みの一例です。

026-019

The Nihonmatsu Castle *Honmaru*

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/本丸

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Nihonmatsu Castle *Honmaru*

A Japanese castle's *honmaru* is its main compound, surrounded by walls and designed to be defended against the fiercest attack. In most castles, the *honmaru* contained a towering keep called a *tenshu* as well as other buildings used for living quarters, domain administration, and storage. When a battle went against the castle's defenders, the *honmaru* was where they gathered to mount their final defense. If the enemy breached the *honmaru*, the battle was lost.

The stone walls around the *honmaru* during the Niwa family's tenure have been excavated and restored to give a sense of what the compound was like during its heyday. Because the *honmaru* occupied the high ground for greater defensibility, today its former site doubles as a lookout point with panoramic views of the city to the east and the Adatara massif to the west.

The Missing Keep

The northern corner of Nihonmatsu Castle's *honmaru* contains a raised square area called the *tenshudai*, or "keep foundation." Historians had long assumed that the keep that stood here had been destroyed when the castle burned in 1868, but careful archaeological work eventually revealed that a building was never constructed on the site.

Why Nihonmatsu Castle had a keep foundation but no keep is unclear, but the most

likely explanation is political. By the time the lords of the castle had the funds to build a keep on top of the foundation, there was no plausible threat to defend against, and the Tokugawa shogunate saw no need to allow the domain to increase its military capabilities and enable a possible rebellion.

Defending the Gate

The only entrance to Nihonmatsu Castle's *honmaru* was the southern gate, which has now been restored to its former state. As in most castles of the time, the gate opened onto an enclosure with a hard right turn and a second gate before the *honmaru* proper. This was designed to make the gate more defensible by preventing potential attackers from charging in, and the enclosure also made a useful staging ground when defenders were preparing to charge out.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二本松城本丸

日本の城の本丸は城の主要な場所であり、城壁に囲まれ、何が起こっても守られるように設計されています。ほとんどの城では、本丸には天守と呼ばれるそびえ立つ監視塔のほか、住居、行政スペース、倉庫などとして使用される建物が置かれていました。戦の際、劣勢になった時、本丸は防御側が最後の守りを固めるために集まった場所でした。敵が本丸を突破すれば戦いは負けに終わったのです。

丹羽家時代の本丸周囲の石垣が発掘・復元されており、城が最盛期の様子を偲ばせます。本丸は防御力を高めるために高台に置かれたため、現在、その跡地は東に二本松市街、西に安達太連峰のパノラマの景色を望む展望台となっています。

天守閣の不在

二本松城の本丸の北隅には、「天守台」と呼ばれる一段高くなった広場があります。歴史家たちは長い間、ここにあった天守閣は1868年に城が火災に遭ったときに破壊されたと考えていましたが、慎重な考古学調査の結果、最終的にこの場所には天守閣が作られたことがなかったことが明らかになりました。

なぜ二本松城には天守台があったにもかかわらず天守閣がなかったのかは不明ですが、最も可能性が高い理由は政治的な背景によるものです。城主が基礎の上に天守閣を建設する資金を持つようになった頃には、防御すべき脅威は存在しなかったため、徳川幕府としては二本松城が城の軍事能力を増強して反乱の可能性を高めるような建築許可を出すことに利点を見出さなかったのです。

門を守る

二本松城の本丸への唯一の入り口は南門でした。現在は当時の姿が復元されています。当時のほとんどの城と同様に、門は右方向にある曲輪と本丸の手前の二番目の門に向かって開きました。突撃しようとする攻撃者を妨害するこの構造により、門の防御性が向上したほか、曲輪は防御側が突撃の準備をする際の便利な拠点としても機能しました。

026-020

The Senshintei Tea House

二本松市

【タイトル】 二本松城跡/洗心亭

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Senshintei Tea House

The Senshintei is a tea house in a tranquil corner of Nihonmatsu Castle's grounds just west of Minowa Gate. It has three rooms for entertaining and serving tea, a small kitchen area for preparations, and toilet and bath facilities. It is the oldest extant building on the castle grounds, dating from the seventeenth century.

From Tranquil Retreat to Fishing Cabin

Today the Senshintei stands on raised ground on the western edge of the castle park. The shoji panels on the north and east side open to reveal a traditional Japanese garden below, with paths winding past trees, ponds, and flowers that offer a variety of blooms with the seasons. At the far end of the garden is the Senshin Waterfall, which is fed directly by the Nigoda Conduit that brings water to Nihonmatsu from the mountains 18 kilometers away.

The word *senshin* literally means “heart-cleansing,” and the Senshintei and its surroundings were evidently designed as a peaceful retreat inside Nihonmatsu Castle. It may originally have been known as the Sumie no O-chaya (ink-painting tea house), one of many tea houses known to have existed on the castle grounds. In 1837, the collapsed Senshintei was relocated to the banks of the nearby Abukuma River, where it was used as a fishing cabin by the daimyo. This is why the Senshintei survived even as the rest of the castle burned down in 1868 during the Boshin War.

The Senshintei and the Former Samurai

After the war, the aging cabin was completely renovated by former domain samurai Nakazawa Agata. When the domain system was abolished by the Meiji government, the structure passed into the hands of the Aioi Company, a financial association of former samurai and merchants. Finally, in 1907, it was moved back onto the castle's old grounds by Yamada Osamu, another former samurai who was also entrusted with building the silk mill that operated on the grounds for a time. Yamada gave the Senshintei its current name, after the Senshin Waterfall nearby.

Today the Senshintei is used on occasion by local tea ceremony groups for tea preparation and other activities on weekends during events like the Chrysanthemum Festival and Sakura Festival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

茶亭「洗心亭」

洗心亭は、箕輪門のすぐ西、二本松城敷地内の静かな一角にある茶亭です。おもてなしをしたりお茶を出したりするための部屋が3つ、準備用の小さな台所、手洗いがあります。洗心亭は、17世紀に作られた、城内に現存する最古の建物です。

静かな隠れ家から釣り小屋に

現在、洗心亭は霞ヶ城公園の西端の地面が一段高くなっている場所に立っています。北側と東側の障子を開けると、眼下に伝統的な日本庭園が現れ、木々や池、季節ごとに変化する花々の間を曲がりくねった小道が続きます。庭園の一番奥には洗心の滝があり、18キロメートル離れた山々から二本松に水を運ぶ二合田用水路から直接水が流れ込んでいます。

洗心という言葉は文字通り「心を清める」という意味で、洗心亭とその周辺は明白に城の敷地内の静かな隠れ家として設計されています。元々は「墨絵の御茶屋」（すみえのおちゃや）として知られていた可能性があります；これは城内に存在していたことが知られている多くの茶室の一つです。1837年、倒壊した洗心亭は近くの阿武隈川の岸に移築され、大名の釣り小屋として使用されました。戊辰戦争により1868年に城の残りの部分が焼失したにもかかわらず、洗心亭が残ったのはこのためです。

洗心亭と元武士

戊辰戦争後、老朽化した小屋は元藩士中沢鼎によって全面的に改修されました。明治政府によって藩制が廃止されると、この建物は元武士と商人の金融結社である相生社の手に渡し、「皆宜亭」と改名されました。最終的に、1907年に同じく元武士の山田脩によって、城跡の敷地内に移転されました；山田脩は、城跡内で一時操業していた製糸工場の建設も任されていました。また、山田は庭園内の洗心滝にちなんでこの建物を今の「洗心亭」と名づけました。

現在、洗心亭は、菊まつりや桜まつりなどの行事が行われる週末には、地元の茶道団体によるお茶の提供などの活動に使用されることもあります。

地域番号	027	協議会名	村上市訪日外国人等受入協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
027-001	村上の祭/村上大祭、瀬波大祭、岩船大祭		251-500w	パンフレット
027-002	村上城跡/遺構（石垣や櫓跡など）、歴史		251-500w	パンフレット
027-003	大悲山 観音寺の即身仏「仏海上人」/大悲山 観音寺の即身仏「仏海上人」		1-250w	パンフレット
027-004	村上の鮭文化/伝統的な鮭漁、多様な料理法		251-500w	パンフレット
027-005	村上の食文化/鮭、村上牛、岩ガキ、村上茶、 日本酒、海の塩、赤かぶ		1-250w	パンフレット
027-006	村上の武家住宅/若林家住宅ほか4棟		251-500w	パンフレット
027-007	村上の町屋/村上の町屋建造物群、景観		1-250w	パンフレット
027-008	笹川流れ/景観や奇岩怪石、白砂青松		1-250w	パンフレット
027-009	瀬波温泉/瀬波温泉 開湯の歴史、噴湯公園、瀬波温泉海水浴場		1-250w	パンフレット
027-010	村上の伝統工芸/村上堆朱、羽越しな布		251-500w	パンフレット

027-001

Festivals in Murakami

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 村上の祭/村上大祭、瀬波大祭、岩船大祭

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Festivals in Murakami

Nothing brings the people of Murakami together quite like a traditional festival. These annual celebrations are both religious rites with centuries of history and occasions when families, friends, and neighbors join hands to create events expressing local pride and heritage.

Three festivals take place in the city between July and October. Each one has distinct origins and meanings, but they share a striking feature: 5-meter-high, elaborately decorated floats called *oshagiri* that are pulled through the streets by enthusiastic groups in colorful *happi* coats.

Murakami Taisai Festival

The biggest event of the year in Murakami is the Murakami Taisai. The grand celebration takes place on July 6 and 7 and is noted for the parade on the second day, in which priests from Senami Haguro Shrine carry three portable shrines (*mikoshi*) around the former castle town. They are followed by a procession of 19 two-wheeled *oshagiri* floats. Each float represents one of the merchant districts of the old castle town and is crewed by residents of its home neighborhood.

The origins of the festival can be traced back to 1633, when Senami Haguro Shrine was moved to its present site at the edge of the castle town. Hori Naoyori (1577–1639), lord of the Murakami domain, had the shrine moved from beneath his recently completed hilltop castle because he thought it inauspicious to look down on a dwelling of deities. As priests carried the deities to their new home in *mikoshi*, the townspeople followed, pulling carts they had borrowed from the castle and beating drums loaded onto them.

A reenactment of this procession is the highlight of the Murakami Taisai, with the *oshagiri* floats providing eye-catching substitutes for the drum-laden carts. All 19 floats have two stories: a lower level where children beat drums and small gongs in the shape of a deep plate, and an upper story fitted with a statue or other ornament that is considered a seat for the neighborhood's guardian deity. Most floats are followed by a group of flute players whose tunes complement the rhythmic melodies of the drums and gongs. The floats are called *oshagiri* in reference to this music, known as *shagiri*.

Many of the floats are decorated with gold leaf and carvings lacquered in red or black. On some *oshagiri*, the main ornament on the second story symbolizes the neighborhood the float represents. One example is the float of the Sakanamachi fish-trading district, which has a statue of Ebisu, the patron deity of fishermen, riding on a red fish. Others have a more general auspicious motif, such as a mythological being or a miniature reproduction of a famous religious site.

On the first day of the festival, the floats are pulled around their respective neighborhoods in a rehearsal of sorts. Early in the morning of the second day, they are moved to Senami Haguro Shrine, the departure point for the procession, which begins around 8 a.m. The procession stops for a midday break after traversing the town, and the *oshagiri* are parked along a central street in the Sakanamachi district. From 6:30 p.m., the crews pull the floats, now illuminated with traditional-style lanterns, back to their home districts, concluding the festival.

Except for the festival days, three of the floats can be viewed at the Oshagiri Kaikan museum, which provides background on the history of Murakami's festivals. The Murakami Taisai has been designated an Important Intangible Folk Cultural Property.

Senami Taisai Festival

The Senami Taisai is a festival of Senami Shrine in the seaside district of the same name, which was traditionally the main port of the Murakami castle town. The festival is conducted to pray for the prosperity of the district, especially luck at sea. *Mikoshi* and carts mounted with drums are paraded through the streets, followed by five *oshagiri* floats. Some of these are fitted with sacred ornaments in the shape of boats in reference to a mythical voyage undertaken by one of the deities honored at Senami Shrine. The festival is held on September 3 and 4.

Iwafune Taisai Festival

The people of the port town of Iwafune express their gratitude to the deities for the year's catch and harvest by celebrating the Iwafune Taisai on October 18 and 19. Groups composed mostly of young men pull nine *oshagiri* floats through the town's narrow streets. Toward the end of the festival, each group stops its float momentarily to address the deities by performing a spirited song to the beat of a drum. These songs, known as *kiyari*, were inspired by the rhythmic chants of fishermen hauling in their catch and embody the maritime spirit of Iwafune.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

村上の祭

伝統的なお祭りほど、村上の人々をひとつにするものはない。何世紀もの歴史を持つ宗教的な儀式であると同時に、家族、友人、隣人たちが手を携えて地元の誇りと伝統を表現する光景を作り上げる場でもある。

市内では7月から10月にかけて3つの祭りが行われる。それぞれに異なる起源と意味があるが、印象的な特徴が共通している：高さ5メートルほど、精巧に装飾された「おしゃぎり」と呼ばれる山車が、色とりどりのハッピを着た熱狂的なグループによって通りを引き回されるのだ。

村上大祭

村上大祭は村上の一年で最大のイベントである。7月6日と7日に行われる盛大な祭典は、2日目に西奈彌羽黒神社の神職が3基の神輿を担いで旧城下町を練り歩くのがメインプログラムだ。神輿の後を追うように、19台の二輪の「おしゃぎり」と呼ばれる山車が練り歩く。それぞれの山車は旧城下町の伝統的な商人町を代表するもので、町の住民によって運行される。

祭りの起源は、西奈彌羽黒神社が城下町の端の現在の場所に移させられた1633年に遡る。村上藩主の堀直奇（1577-1639）が、完成したばかりの山城の上から神々の住まいを見下ろすのは縁起が悪いとして移した。神職が神輿を担いで新しい神社に向かうと、町衆が城から借りた荷車を引き、車に乗せた太鼓を打ち鳴らしながら続いた。

この行列の再現が村上大祭のハイライトであり、太鼓を積んだ荷車の代わりにおしゃぎりが目を引く。19台の山車はすべて2階建て。下層は子供たちが太鼓を叩いたり、深皿の形をした小さな鉦を叩いたりするのに使われ、上層には町の守り神を象徴する像やその他の飾りが取り付けられる。多くの山車には笛吹きが付き、太鼓や鉦のリズミカルな旋律を引き立てる。「しゃぎり」と呼ばれるこの囃子にちなんで、山車は「おしゃぎり」と呼ばれる。

多くの山車は金箔や赤や黒の漆塗りの彫刻で飾られている。また、2階部分の飾りが山車の町を象徴しているものもある。その一例が肴町の山車で、漁師の守護神である恵比寿の像が赤い魚に乗っている。また、神話上の存在や有名な宗教的な場所のミニチュアなど、より一般的な縁起の良いモチーフを使ったものもある。

祭りの初日には、各町内を曳き廻すりハーサルのような光景が見られる。2日目の早朝、山車は瀬波羽黒神社に移動され、午前8時頃に出発する。市街を巡行した後、昼の休憩をはさんで肴町地区の中央にある通りに駐車される。午後6時半から、提灯に照らされた山車を曳き手たちがそれぞれの地区へ引き返し、祭りは終了する。

祭りの日以外には、村上大祭の歴史を紹介するおしゃぎり会館で3台の山車を見ることができる。村上大祭は重要無形民俗文化財に指定されている。

瀬波大祭

瀬波大祭は、伝統的に村上城下町の主要港であった同名の海浜地区にある西奈彌神社の祭りである。瀬波地区の繁栄や海での幸運を祈願する祭りである。神輿や太鼓を載せた屋台が通りを練り歩き、その後5台のおしゃぎりが続く。西奈彌神社に祀られている神々の一柱が神話に出てくる航海にちなんで、船の形をした神飾りが付けられている山車もある。祭りは9月3日と4日に行われる。

岩船大祭

10月18日と19日に行われる岩船大祭は、岩船という港町の人々がその年の漁や収穫を神々に感謝する祭りである。若者を中心とした一団が9台のおしゃぎりを引き、町の狭い通りを練り歩く。祭りの終盤になると、各グループが山車を一時停止させ、太鼓のビートに合わせて勇壮な歌を披露して神々に語りかける。「木遣」と呼ばれるこの唄は、漁師たちが漁獲物を引き揚げるときのリズムカルな唄にヒントを得たもので、岩船の海洋精神を体現している。

027-002

Murakami Castle Site

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 村上城跡/遺構（石垣や櫓跡など）、歴史

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Murakami Castle Site

All that remains of Murakami Castle are stone ramparts, remnants of large gates, and the foundation stones of watchtowers on the forested summit of the 135-meter hill called Mt. Gagyū just east of central Murakami. The castle towered over the town for nearly 250 years during the Edo period (1603–1867) when daimyo lords governed the Murakami domain, yet it was never tested in battle.

Mt. Gagyū was first fortified in the early 1500s when conflicts between rival families drove a local warrior group to establish an outpost on the hill's eastern slope. The fortifications were composed mainly of dry moats and earthen walls, and made good use of the site's steep slopes as a defensive position.

Those early fortifications were abandoned in the early 1600s when the Tokugawa family unified the country and established a shogunate based in Edo (now Tokyo). The shogunate installed trusted retainers to serve as daimyo lords of domains such as Murakami that were situated in strategic locations. The castle town expanded as successive daimyo built residences for the samurai in their service to the west of Mt. Gagyū. A new castle was built on the western edge of the hill, with high ramparts, stone walls, and a three-story wooden turret that stood on the hill's flattened peak. Construction took more than 50 years.

The daimyo resided in a compound at the foot of the mountain near the entrance to the castle grounds, occasionally sending samurai to patrol the hilltop. The Edo period was a time of relative peace, and the castle was important mainly as a source of prestige for the daimyo. This is reflected in some surviving sections of the ramparts. Large stones were painstakingly cut and stacked together in a process that achieved a perfectly smooth surface but added no defensive advantage.

A fire caused by lightning destroyed the turret in 1667, but the rest of the castle

endured for another two centuries. During the Boshin War (1868–69), fought between forces loyal to the shogunate and those who supported a return to imperial rule, the Murakami samurai set fire to the daimyo's compound to prevent it from falling into the hands of the advancing enemy. However, no combat took place at the castle, which was dismantled in 1875, as the new government embarked on the modernization of the country with Emperor Meiji (1852–1912) as its figurehead.

The hilltop site of Murakami Castle can be reached in about 15 minutes by hiking up a slope with nine sharp turns. The site commands a view of the former castle town, the Miomote River, and the Sea of Japan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

村上城跡

村上市中心部のすぐ東、標高135メートルの臥牛山の山頂付近には石垣や大きな門の跡、物見櫓の礎石が林立している。大名が村上藩を支配した江戸時代（1603年～1867年）、250年近くにわたって村上の町にそびえ立っていた堂々たる城郭の跡である。しかし、戦いで試されることはなかった。

臥牛山が最初に要塞化されたのは1500年代前半のことで、武家の対立が地元の武士団を丘の東斜面に城を築かせた。この山城は主に空堀や土塁で構成され、急斜面をうまく利用した防御的なものだった。

初期の要塞は、徳川家が天下を統一し江戸に幕府を開いた1600年代初頭に放棄された。徳川は信頼できる家臣を派遣し、村上を含む要衝の地を統治させた。歴代の派遣大名は臥牛山の西に家臣の屋敷を構え、隣接する城下町を拡張した。山の西端には、高い石垣と城壁、扁平な山頂にそびえ立った木造3階建ての櫓を備えた城を築かせた。完成までに50年以上の歳月を要した。

大名たちは山麓の屋敷、城の敷地の入り口に近い場所で居住し、家来たちが時折山頂を見回る程度だった。江戸時代は太平の世であったため、城は主に大名の威信の源泉として重要であった。このことは現存する石垣のいくつかの部分に反映されている。その表面は完璧に平滑であり、防御的な利点よりもむしろ視覚的な面白さを加えるために、大きな石が丹念に切り出され、積み重ねられた。

落雷による火災で櫓は1667年に焼失したが、城の他の部分は2世紀にわたって存続した。戊辰戦争（1868～69年）では、幕府軍と新政府軍の間で争われ、村上藩士は敵の進攻を防ぐために大名屋敷に火を放った。しかし、この城では戦闘は行われなかった。明治天皇（1852-1912）

を元首とする新政府が近代化に乗り出した後、1875年に解体された。

村上城跡は、急カーブが9回ある坂道を登って15分ほどで到着する。山頂からはかつての城下町や三面川、日本海が一望できる。

027-003

Daihizan Kannonji Temple and Bukkai Shonin

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 大悲山 観音寺の即身仏「仏海上人」/大悲山 観音寺
の即身仏「仏海上人」

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Daihizan Kannonji Temple and Bukkai Shonin

Daihizan Kannonji Temple in central Murakami is the final resting place of Bukkai Shonin, Japan's last Buddhist mummy or *sokushinbutsu*.

Bukkai Shonin was born as Kondo Shojiro in 1828. He devoted himself to ascetic practice from the age of 16, when he became an apprentice at a Shingon temple on Mt. Yudono in Yamagata Prefecture, north of Murakami. Mt. Yudono is a center of a branch of the esoteric Shingon faith that espouses the practice of aspiring to Buddhahood in this life without the need to wait for rebirth. A devotee who aspired to becoming a *sokushinbutsu* would be able to retain their physical form while awaiting the arrival of the bodhisattva Miroku (Maitreya), who in Shingon doctrine is prophesied to bring about an enlightened world in the distant future.

Becoming a Buddha on earth included a process of self-mummification, which could take up to a decade to complete. Prospective *sokushinbutsu* would adopt an extremely strict diet to rid themselves of tissue prone to decomposition. They ate no grains or sources of fat and sustained themselves instead on wild plants, leaves, bark, and roots. In order to minimize the amount of fluid in their bodies, they drank only a poisonous tea made from lacquer sap that slowly coated their internal organs, acting as a preservative.

When they felt the time had come, the ascetics would be enclosed in a small stone casket. Sitting in the lotus position, they would enter a deep meditative state until their breathing stopped and their heart ceased to beat.

Bukkai took this final step in 1903, asking his followers to extract his body three years later. However, they were prevented from doing so by a law enacted in 1868 that made it illegal to disinter corpses. The law was part of a policy intended to discourage the *sokushinbutsu* practice. The mummy remained underground until 1961, when it

was exhumed by a group of researchers.

The body of Bukkai Shonin, as well as the casket he was buried in, can be viewed at Daihizan Kannonji.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大悲山観音寺と仏海上人

村上市の中心部にある大悲山観音寺は、日本最後の仏教ミイラ、即身仏である仏海上人の終焉の地である。

仏海上人は1828年に近藤庄次郎として生まれた。16歳のときから修行に励み、村上の北に位置する山形県の湯殿山にある真言宗の寺院に弟子入りした。湯殿山は真言密教の一派の中心地であり、現世成仏を目指す修行を信奉している。真言宗の教義では、遠い未来に悟りの世界をもたらすと予言されている弥勒菩薩の到来を待つ間、信者は自分の肉体を保持したまま仏になることができる。

現世での成仏は、10年もかかるとされる自己ミイラ化によって達成される。即身成仏を志す者は、腐敗しやすい組織を取り除くため、穀物や脂肪源を一切摂らないという極めて厳しい食生活を送る。代わりに野生の植物、葉、樹皮、根を食べ、体内の水分を最小限に抑えるために漆の樹液から作られた毒茶だけを飲む。漆は徐々に内臓をコーティングし、防腐剤の役割を果たした。

修行者たちは時が来たと感じると、小さな石の棺に身を包んだ。蓮華座に座り、呼吸が止まり心臓の鼓動が止まるまで深い瞑想状態に入る。

仏海上人は1903年にこの最後の一步を踏み出し、3年後に弟子たちに遺体を取り出すよう求めた。しかし、即身仏の修行を阻止する政策の一環として定められた1868年の「墳墓発掘禁止令」が死体の発掘を違法としたため、彼らは仏海上人を発掘できなかった。ミイラは1961年に研究者グループによって掘り出されるまで地中にあった。

仏海上人の遺体と納められた棺は、大悲山観音寺で見ることができる。

【タイトル】村上の鮭文化/伝統的な鮭漁、多様な料理法

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Salmon and Murakami

Anyone exploring Murakami is bound to come across salmon in one form or another. The fish appears in colorful imagery along the streets, and numerous restaurants serve a wide variety of salmon dishes. Even more conspicuous are the rows of large salmon hung out to dry under the eaves of houses and shops throughout the city, reminders of a culinary-cultural heritage that goes back centuries.

The foremost of fish

Salmon teeth found in the remains of prehistoric dwellings suggest that the fish has been part of the local diet for more than four thousand years. Records show that salmon from Echigo Province (present-day Niigata Prefecture) was presented to the court in Kyoto in the tenth century. In the seventeenth century, taxes levied on salmon fishermen were an important source of income for the Murakami domain. However, Murakami's special relationship with salmon can be traced to one particularly perceptive samurai who lived in the mid-1700s.

Chum salmon (*Oncorhynchus keta*), best known for its large orange roe, is the predominant salmon species in the seas off Murakami. Chum salmon are born in rivers, then migrate to the Sea of Okhotsk, the North Pacific, and the Bering Sea where they mature for around four years before returning to their home grounds to spawn once before they die. In Murakami, salmon migrate up the Miomote River between October and December each year. The first person to understand this cycle was Aoto Buheiji (1713–1788), who established the world's first salmon hatchery in Murakami.

Buheiji, as he was known, was charged with managing the waterways of the Murakami domain, whose tax revenue from salmon fishing had almost completely dried up in the early 1700s due to decades of overfishing. Armed with the insight that

protecting spawning fish, eggs, and fry in the river would ensure a stable population of adult salmon returning in the autumn and winter, he had a narrow waterway dug next to the main branch of the Miomote River. Returning salmon were directed to spawn in the canal, where their eggs could be kept safe until hatching in spring, and fishing was restricted to the main river.

Buheiji's efforts allowed salmon stocks to recover and the Murakami domain to prosper. Salmon assumed a starring role in local culinary culture, a position it retains to this day.

A dried delicacy

The people of Murakami eat salmon on seasonal and celebratory occasions as well as in daily life. Among the more than 100 ways that salmon is prepared in the city, *shiobiki* and *sakabitashi* are two of the most prominent. Both involve hanging the fish out to dry in the cold winter air.

Salmon caught late in the year are cleaned, layered with salt, and left to sit for about a week. The fish are then washed and suspended by their tails so they will not look like they are hanging from a noose. Similarly, their bellies are not cut completely open, which might evoke *seppuku*, the ritual disembowelment committed by disgraced samurai.

For *shiobiki*, the fish are taken down after being aged like this for around two weeks. Grilled *shiobiki* salmon is lean with a smooth texture and gently savory flavor. For *sakabitashi*, the drying process takes six to twelve months, resulting in meat with a concentrated flavor and jerky-like texture. *Sakabitashi* salmon is eaten in thin slices sprinkled with sake or mirin. Other popular recipes include fermented salmon organs, reflecting the commitment to let no part of the fish go to waste, and salmon wrapped in tender kombu kelp and boiled in soy sauce, sake, and sugar.

Learn more

Displays at the Iyoboya Kaikan salmon museum in central Murakami explain the ecology of salmon and its place in local culture. Visitors can also observe live salmon and other fish, some of which are in the waterway dug by Aoto Buheiji, which remains in use as a hatchery today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

村上の鮭文化

村上を散策していると、何らかの形で鮭に出会うことが必ずある。街角には色とりどりの鮭の絵が描かれ、数多くのレストランが様々な鮭料理を提供している。さらに目立つのは、街中の民家や商店の軒下に干された大きな鮭の列で、何世紀も前から続く食文化の伝統を象徴している。

魚の最たるもの

先史時代の住居跡から鮭の歯が発見されたことから、鮭は4,000年以上も前からこの地域の食生活の一部であったことがうかがえる。10世紀には越後国（現在の新潟県）の鮭が京都の朝廷に献上されたという記録がある。17世紀には鮭漁師に課される税金が村上藩の重要な収入源となっていた。しかし、村上と鮭の特別な関係は、1700年代半ばに生きた、ある鋭敏な武士にさかのぼることができる。

シロザケ (*Oncorhynchus keta*) は、その大きなオレンジ色の卵でよく知られており、村上沖のサケの主流種である。シロザケは川で生まれ、オホーツク海、北太平洋、ベーリング海を4年ほど回遊して成熟し、死ぬ前に一度だけ産卵のために故郷に戻る。村上では、サケは毎年10月から12月にかけて三面川を遡上する。こうした事実を理解していたからこそ、青砥武平治（1713-1788）は村上に世界初のサケの孵化場を設立できたのである。

武平治は村上藩の水路管理を任されていた役人で、数十年にわたる乱獲により、1700年代初頭にはサケ漁による税収がほとんど途絶えていた。川で産卵する魚や卵、稚魚を保護すれば、秋から冬にかけて戻ってくるサケの成魚の数を安定させることができるという洞察力を武器に、彼は三面川の本流の横に細い水路を掘らせた。遡上するサケはこの水路で産卵し、卵は春にふ化するまで安全に保管され、漁は本川に制限された。

武平治の努力によって鮭の資源は回復し、村上藩は繁栄した。鮭は地元の食文化の主役となり、今日に至っている。

干物の美味

村上の人々は季節の行事や祝い事、日常生活で鮭を食べる。村上には100種類以上の鮭の調理法があるが、「塩引き」と「酒びたし」はその代表的なものだ。どちらも冬の寒風に干す。

年の後半に獲れた鮭は、まずきれいに洗って塩を塗り、1週間ほど寝かせる。その後、魚は洗われ、首吊りにされているように見えないように尾で吊るされる。また、切腹を連想させないよう、腹は完全に切り開かない。塩引き鮭は、このように2週間ほど熟成させる。塩引きの焼き鮭は赤身が多く、滑らかな舌触りと優しい香ばしさがある。

酒びたしは6～12ヶ月間乾燥させて保存し、身はジャーキー状になり、旨味が凝縮される。酒びたしは薄切りにして酒やみりんをかけて食べる。そのほか、魚の内臓を無駄にしないというこだわりから、鮭の内臓を発酵させたものや、鮭を柔らかい昆布で巻いて醤油、酒、砂糖で煮たものなども人気がある。

もっと詳しく

村上市中心部にある鮭の博物館「イヨボヤ会館」では、鮭の生態や地域文化における位置づけについて展示されている。生きた鮭や他の魚も見ることができ、青砥武平治が掘った、現在も孵化場として使われている水路も見学できる。

027-005

Food Culture in Murakami

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 村上の食文化/鮭、村上牛、岩ガキ、村上茶、日本酒、海の塩、赤かぶ

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Food Culture in Murakami

The diverse geography of Murakami is reflected in the ingredients of the local cuisine. Salmon comes from the Miomote River as well as the Sea of Japan, which is also a source of rock oysters. Inland are foothills where tea fields flourish and lush plains between the sea and the Asahi mountain range where beef cattle and rice for sake thrive.

Beef

Murakami beef is a brand of wagyu noted for its fine marbling and tenderness. Meat designated as Murakami beef must come from cattle raised in Murakami or in the neighboring municipality of Tainai and be graded 4 or 5 on Japan's five-tier quality grading scale. There are 16 farms in the area with a total of around 700 head of cattle, which are fed high-quality rice straw and hay. Murakami beef can be enjoyed in dishes such as *sukiyaki*, *shabu-shabu*, and *yakiniku* barbecue.

Sake

There are two sake breweries in Murakami: Taiyo, producer of Taiyozakari, and Miyao, which produces Shimeharitsuru. Both breweries make their sake with Niigata-grown rice and pristine groundwater that flows from the Asahi mountains, shedding most of its calcium and magnesium content on the way. This soft water results in dry (*karakuchi*), crisp, and clear sake.

Tea

Tea tends to grow best in a moderately hot and humid climate. However, Murakami has had a vibrant tea industry since the 1620s, when one of the local daimyo lord's retainers is thought to have introduced the plant to the area. Despite snowfall and sub-zero temperatures in winter, tea growers in Murakami have found that a little snow can actually be beneficial, as it helps keep the plants warm in winter and is said to reduce astringency. Tea plants do not survive in very cold areas, however. Murakami is the northernmost place in Japan where tea is grown on a commercial scale.

Salt and oysters

Salmon is not Murakami's only marine delicacy. Rock oysters and natural salt are sourced from Sasagawa Nagare, an 11-kilometer stretch of coastline north of the town. The oysters are in season in summer, after growing plump during winter and spring as they feed on the ample nutrients provided by mountain streams emptying into the cold sea. Mineral-rich salt is boiled down from seawater in small factories along the coast and is available year-round.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

村上の食文化

村上の多様な地理は郷土料理の食材にも反映されている。鮭は三面川と日本海で漁獲され、日本海は岩牡蠣の産地でもある。海と朝日連峰に挟まれた緑豊かな平野部では肉牛が飼育され、酒米が栽培され、山麓には茶畑が広がっている。

牛肉

村上牛は、きめ細かな霜降りと柔らかさで知られるブランド和牛である。村上市、または隣接する胎内市で飼育され、牛肉の5段階品質評価で4、5等級に格付けされた牛の肉だけが村上牛に指定される。この地域には16の牧場があり、約700頭の牛が良質な稲わらと乾草を与えられている。村上牛はすき焼き、しゃぶしゃぶ、焼肉などで味わうことができる。

日本酒

村上には2つの酒蔵がある。「大洋盛」を醸す大洋酒造と、「ㄆ張鶴」を醸す宮尾酒造だ。両蔵元とも、新潟県産の酒米と、朝日連峰から流れ出る清らかな地下水で酒を造っている。この軟水により、辛口でキレのあるクリアな酒が生まれる。

茶

お茶は適度な高温多湿の気候で最もよく育つ傾向がある。しかし、村上は1620年代から活気のある茶産業を擁しており、その背景には、地元の大名家臣の一人がこの地にお茶を持ち込んだと考えられている。村上のお茶の生産者は、冬に雪が降って氷点下になるにもかかわらず、少しの雪は実は有益であることに気づいた。冬に雪が積もると木が暖くなり、渋みが抑えられるからだ。しかしこれ以上寒いと、木は生き残ることができない。村上は商業規模でお茶が栽培されている日本最北の地なのだ。

塩と牡蠣

村上の海の幸は鮭だけではない。天然塩と岩牡蠣は、市街地の北に広がる11キロの海岸線、笹川流れで採れる。牡蠣は冬から春にかけて、冷たい海に注ぐ溪流の豊富な栄養分を食べてふっくらと育ち、夏に旬を迎える。ミネラル豊富な塩は海岸沿いの小さな工場で海水を煮詰めて作られ、一年中手に入る。

【タイトル】 村上の武家住宅/若林家住宅ほか4棟

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Samurai Houses

Well over a thousand samurai lived in the castle town of Murakami in the late seventeenth century. Although their population later decreased, districts reserved for samurai residences made up a significant portion of the town throughout the Edo period (1603–1867), and a handful of such properties still remain in Murakami today.

In modern terms, samurai homes were a form of company housing. They were built by the domain for its employees, many of whom were warriors only in name. During the relatively peaceful Edo period, mid-ranking samurai were often tasked with administrative work such as record-keeping and the supervision of local industries, which many combined with subsistence farming or fishing. Most samurai of this status led comfortable lives, especially in comparison to ordinary townspeople, but were hardly wealthy.

Five houses built for mid-ranking samurai have been preserved in Murakami. The oldest and most notable is the **Wakabayashi House**, which was constructed in the late eighteenth century. It is located some distance from the castle site, on the outer rim of what in Edo-period Murakami was the samurai district, and was inhabited by a family whose head commanded a troop of foot soldiers.

The thatched-roof house is in the *magariya* (“bent house”) style, built in an L-shape with clearly demarcated living and reception areas. Entrance to the house is through the earthen-floored area (*doma*) by the living room, which centers on an *irori* hearth. A fire was kept going in the hearth at all times to keep the house warm and dry. Next to the *irori* is a ladder leading to the attic, which was mainly used for storage. Beyond the living space are the family’s sleeping rooms and a room used to receive guests of lower rank than the head of the household.

The other side of the house was for the exclusive use of important guests, mainly

higher-ranking officials. Such visitors would enter via the veranda, which leads to a pair of rooms with tatami-mat floors. The inner chamber, where the host would entertain guests, has an alcove (*tokonoma*) to display decorative objects, sliding paper panels (*fusuma*) to let in light, and a view of the adjacent garden.

Such reception rooms indicate the importance of hierarchy and formalities in samurai society and are also found in the other four houses. Those buildings are all rectangular and are smaller than the Wakabayashi House, as they were provided to somewhat lower-ranking samurai.

Three of the houses are in Maizuru Park. The **Fujii House** dates to 1850 and was the home of a mid-level samurai whose official duties included overseeing construction work in the castle town. Nearby, the smaller **Takaoka** and **Iwama Houses** exemplify more modest samurai dwellings, being nearly devoid of ornamental details. Just south of the park is the **Narita House**, with architectural characteristics that suggest it may be the most recent of the five houses.

The Wakabayashi House is a nationally designated Important Cultural Property, while the other four structures have been registered as cultural properties by the city of Murakami.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

武家住宅

17世紀後半、村上之城下町には1,000人を超える武士が住んでいた。その後、武士の人口は減少したが、江戸時代（1603年～1867年）を通して、武家屋敷が町のかかなりの部分を占めていた。現在でも村上にはわずかながら武家屋敷が残っている。

現代風に言えば、武家屋敷は社宅の一種である。藩は、その多くは名ばかりの「武士」だった「従業員」のために建てたものだ。比較的に平和な江戸時代、中級の武士は記録管理や地場産業の監督といった行政的な仕事を任されるのが普通で、多くの武士は自給自足の農業や漁業と組み合わせていた。このような身分の武士のほとんどは、特に一般の町民と比べると快適な生活を送っていたが、決して裕福ではなかった。

村上には中級武士のために建てられた5つの家が保存されている。その中で最も古く、注目に値するのが、18世紀後半に建てられた**若林家住宅**である。城跡から少し離れた場所、江戸時代には武家地の外縁部に位置し、足輕を指揮する当主が住んでいた。

茅葺き屋根の家は曲家（まがりや）式で、L字型をしており、居住スペースと応接スペースがはっきりと分かれている。居住者は囲炉裏を中心とした居間の脇の土間から入る。囲炉裏には常に火が焚かれ、家の中を暖かく乾燥させていた。囲炉裏の横には主に物置として使われていた屋根裏部屋へと続く梯子がある。居住スペースの向こうには家族の寝室と、世帯主よりも身分の低い客を迎えるための部屋がある。

家の反対側は、重要な客人（主に上級武士）専用だった。そのような来客は縁側から入り、畳敷きの2つの部屋に通じている。主人が客人をもてなす奥の間には、装飾品を飾る床の間があり、光を取り入れる襖があり、隣接する庭を眺めることができる。

こうした応接室は武家社会における上下関係や格式の重要性を物語っており、他の4つの家にも見られる。これらの建物はいずれも長方形で、若林家よりも小さく、やや身分の低い武士に提供されたものである。

そのうちの3軒がまいづる公園に建っている。**旧藤井家住宅**は1850年に建てられたもので、城下町の工事を監督する中級役人の住まいだった。その近くにある、より小さな**旧嵩岡家住宅**と**旧岩間家住宅**は、より質素な武家屋敷の典型で、装飾的な細部はほとんどない。公園のすぐ南には**旧成田家住宅**があり、その建築的特徴から、5つの家屋の中で最も新しいものと思われる。

若林家住宅は国の重要文化財に指定され、他の4棟は村上市の文化財に登録されている。

【タイトル】 村上の町屋/村上の町屋建造物群、景観

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Machiya Houses

Traditional *machiya* town houses can be seen here and there along the streets of central Murakami, where merchants and artisans have lived and worked since the Edo period (1603–1867). Many of the houses remain in use as shops and private residences, and some are open to visitors throughout the year.

Prolonged properties

The typical *machiya* is a long two-story building with a narrow front that faces the street. This configuration came about because property taxes in the Edo period were based on the width of street frontage. Immediately beyond the front door is a shop area divided into an earthen-floored entrance and a space with a raised floor where the shopkeeper would sit. A narrow earthen-floored passage leads from the shop through the house, past the living quarters, and to a yard in the back.

In the style of *machiya* common in Murakami, the first room beyond the shop is the living room, where the family would gather for meals around the *irori* hearth. This room would also contain the family's Shinto and Buddhist altars, as well as a staircase up to the attic in some homes. Toward the back are the sleeping rooms, bathroom, and storerooms.

Machiya were usually built right next to each other and thus do not have windows on the sides. Instead, they often have high ceilings with skylights to let in natural light, which was a strategy to reduce the need for illumination that could increase the risk of fire.

Visiting machiya

Most *machiya* in Murakami line the central Machiya Street, where an association of local shop owners and residents has been working to preserve traditional houses and restore them to their original appearance since 2004. More than 50 of the buildings are opened to the public in spring, when dolls associated with the annual Hinamatsuri (Doll Festival) are on display, and in autumn, when visitors can view decorative folding screens (*byobu*).

Houses including a salmon shop, a confectionery, and a sake store can be visited year-round. Also nearby is Kurobei Dori, a narrow street lined with traditional-style black fences that goes past several temples.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

町屋

村上市中心部の通りには、江戸時代（1603-1867）から商人や職人が住み、働いてきた伝統的な町家が点在している。現在も多くの町家が店舗や個人住宅として使用されており、一部は年間を通して見学が可能だ。

長続きの物件

典型的な町家は2階建ての長い建物で、前面が狭く、通りに面している。これは江戸時代の固定資産税が間口の広さによって決められていたことに由来する。建物の前部分には土間の玄関と店主が座る高床スペースに分かれた店舗スペースがある。狭い土間の通路は店から家の中を通り、居間を抜けて裏庭へと続いている。

村上でよく見られる町家のスタイルで、店の向こうの最初の部屋は居間で、囲炉裏を囲んで家族が集まって食事をした。この部屋には神棚や仏壇が置かれ、多くの家では屋根裏部屋への階段もある。奥には寝室、浴室、物置がある。

町家は通常、隣り合って建てられているため、側面に窓はない。その代わりに、自然光を取り入れ、火災のリスクがある火を使った照明の必要性を減らすために、天窓のある高い天井が特徴であることが多い。

町家めぐり

村上のほとんどの町家は中心部の町家通りに面して並んでいる。2004年以来、地元の商店主や住民で構成される町家保存会が、伝統的な家屋を保存し、元の姿に戻す活動を行っている。50軒以上の町家は、春には雛人形が飾られ、秋には屏風が飾られ、これらの時期に一般公開されている。

鮭店や菓子店、酒店など一年中見学できる町屋もある。また、近くには「黒塀通り」があり、伝統的なスタイルの黒塀が立ち並び、いくつかの寺院を通り抜ける。

027-008

Sasagawa Nagare

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 笹川流れ/景観や奇岩怪石、白砂青松

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Sasagawa Nagare

Sasagawa Nagare is an eleven-kilometer stretch of coastline north of central Murakami that is popular among swimmers in summer. The area's clear water and white beaches are in sharp contrast with its rugged natural beauty. This is a landscape of countless coves and inlets fed by mountain streams and brooks, sheer cliffs rising from the sea, and spiky rocks shaped by the waves. In many places, the outcrops are covered with squat pines and bushes bent into strange shapes by the incessant ocean winds.

Driving along the coastline on the winding National Road 345 is a good way to get an overview of the scenery. Another option is to board a 40-minute sightseeing cruise from Kuwagawa Port, where boats depart nine times daily between April and October, when the seas are comparatively calm. (Note that cruises are sometimes canceled due to strong winds.)

Winter brings frequent storms and raging waves, and the coves are sometimes filled with a froth of sea foam. The phenomenon occurs when cold seawater that contains a high concentration of organic matter, such as plankton or dissolved algae, crashes violently against the rocks.

On the culinary front, Sasagawa Nagare is noted for the rock oysters that thrive along its coast. During winter and spring, the oysters grow plump as they feed on nutrient-rich water released into the sea by streams and brooks. Another local product is natural salt, which is boiled down from seawater in small factories. The traditional process can be observed at a salt workshop on the shore.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

笹川流れ

笹川流れは村上市の中心部から北に11キロにわたって続く海岸線で、夏には海水浴客で賑わう。澄んだ水と白い砂浜が、荒々しい自然美と対照をなしている。溪流や小川が流れ込む無数の入り江、海からそそり立つ断崖絶壁、波によって形作られたトゲトゲした岩が織り成す風景だ。絶え間なく吹きつける海風によって奇妙な形に曲げられた松などの植物が、露頭を覆っている場所も多い。

海岸線に沿って続く曲がりくねった国道345号線をドライブするのはこの風景の概要を知る良い方法だ。また、比較的海が穏やかな4月から10月にかけては、桑川港から1日9便、約40分の遊覧船に乗ることもできる（強風のため欠航する場合もあるので注意）。

冬は暴風雨と荒波が頻発し、プランクトンや溶けた藻類などの有機物を多く含む冷たい海水が岩に激しくぶつかることによって起こる現象で、入り江がクリーム色の「波の花」で満たされることもある。

食の面では、笹川流れは岩牡蠣の名産地として知られている。岩牡蠣は冬から春にかけて、小川が海に放出する栄養豊富な水を食べて、海岸沿いでふつくと育つ。もうひとつの特産品は海水を小さな工場で煮詰めて作られる天然塩だ。塩の工房ではその伝統的な製法を見学することができる。

027-009

Senami Onsen

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 瀬波温泉/瀬波温泉
開湯の歴史、噴湯公園、瀬波温泉海水浴場
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Senami Onsen

The Senami Onsen spa resort area on the Sea of Japan, just west of central Murakami, combines hot-spring bathing with expansive ocean views and vibrant beach life in summer. Many of the 12 spa hotels and inns in the area face the sea, while the rest are located around a street lined with shops and restaurants.

A side road leads up from the main street to Funto Park, a lookout point where a thick column of steam rises into the air as 95-degree (Celsius) water flows to the surface from deep underground. Hot-spring water from this well is distributed to the bathing facilities across Senami Onsen.

Hot water rich in calcium chloride and iron has been bubbling up from the ground at what is now Funto Park since 1904, when prospectors drilling for oil in the area hit a hot spring instead. The discovery led to the opening of Senami Onsen, which became famous for its picturesque seaside location.

Many of the spas in Senami Onsen welcome daytime bathers, and the hot-spring water can be enjoyed for free at three foot baths (*ashiyu*) across the area. A popular local snack you can cook yourself is *onsen tamago*, or “hot-spring eggs.” Eggs can be purchased at the information center along the main street, then boiled in a purpose-built container in Funto Park.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瀬波温泉

日本海に面した瀬波温泉は村上市中心部の西に位置し、温泉と広大なオーシャンビュー、そして夏には賑やかなビーチシーンを併せ持つ。瀬波温泉には12軒の温泉ホテルや旅館があり、その多くが海に面している。その他のホテルや旅館はショップやレストランが立ち並ぶ通りの周辺にある。

このメインストリートから脇道を登っていくと、地下深くから（摂氏）95度の湯が地表に流れ込み、太い湯けむりが立ち昇る展望台、噴湯公園がある。この井戸から湧き出た湯が瀬波温泉各地の入浴施設に配湯されている。

現在の噴湯公園では、1904年に石油を掘削していた探鉱者たちが温泉を発見して以来、塩化カルシウムや鉄分を豊富に含んだ湯が地中から湧き出ている。この発見が開湯につながり、瀬波温泉が風光明媚な海辺の温泉地として有名になった。

瀬波温泉の温泉宿の多くは日帰り入浴を受け入れており、温泉は瀬波温泉一帯にある3つの足湯で無料で楽しむこともできる。瀬波温泉で人気のおやつは温泉卵。メインストリート沿いのインフォメーションセンターで卵を購入し、噴湯公園にある専用の容器で自分でゆでることができる。

027-010

Traditional Crafts

村上市訪日外国人等受入協議会

【タイトル】 村上の伝統工芸/村上堆朱、羽越しな布

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Traditional Crafts

The two traditional craft products distinctive to Murakami represent markedly contrasting facets of local history.

Murakami carved lacquerware (*kibori tsuishu*) is noted for its intricate detailing and deep red hues. It is a reminder of the city's history as a castle town where artisans worked under the patronage of the daimyo lord. During the Edo period (1603–1867), Murakami samurai learned wood carving techniques while stationed in Edo (present-day Tokyo), then brought that knowledge back to Murakami, an area noted for its production of natural *urushi* lacquer. The result was a community of specialized artisans who worked in turn to create decorative items such as plates, vases, and furniture for high-ranking samurai, priests, and wealthy merchants.

A woodturner would first shape a piece of highly durable bigleaf magnolia (*honoki*) or horse-chestnut (*tochi*) wood on a lathe and then pass it to a carver, who would shape it further and often engrave it with ornamental patterns. A lacquer artist would then apply several layers of *urushi* to the piece, then transform the natural luster of the lacquer into a matte finish with a mixture of charcoal, whetstone powder, and water applied with a horse-hair brush. The carver would then add additional detail to the engravings, and the item would be finished with a single layer of transparent *urushi*. This painstaking process, still practiced by today's artisans, results in long-lasting products that regain the characteristic luster of *urushi* little by little as the matte surface wears out.

Although Murakami carved lacquerware has its origins in decorative items, local artisans now use the same techniques when making cups, chopsticks, soup bowls, and other items for daily use.

Uetsu bast cloth (*shinafu*), on the other hand, emerged under circumstances far

removed from the elegance of samurai society. Since prehistoric times, people in remote villages throughout the Uetsu region (what is now northern Niigata, Yamagata, and southern Akita Prefectures) have been making cloth out of the bast (inner bark fibers) of linden trees. The bast would be removed from the trees during the rainy season in June and early July. It would then be boiled in lye and soaked in rice bran to soften the fibers, then dried in the autumn air before being drawn out into thread and woven into fabric.

Bast cloth was traditionally used to make clothing and coarse bags in which people carried nuts and berries back from the forest. Nowadays, artisans are turning the material into a wide variety of stylish accessories, including pencil and business card cases, wallets, and hats.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

伝統工芸

村上的特徴的な2つの伝統工芸品は、対照的な郷土の歴史を表している。

緻密な細工と深紅の色合いが特徴の**村上木彫堆朱**は、藩主の庇護を受けながら職人たちが働いていた城下町・村上の歴史を思い出させる。江戸時代（1603年～1867年）、村上藩士たちは江戸で学んだ木彫りの技術を天然漆の産地である本藩に伝えた。その結果、専門職人が段階を踏んで、上級武士や僧侶、豪商のために皿や花器、調度品などの装飾品を制作する伝統が生まれた。

木地師はまず、耐久性の高い朴の木や栃の木を成形し、彫師へと渡す。彫師はさらに成形し、装飾的な文様を彫り込むこともある。その後、漆職人が何層にも漆を塗り重ねる。そして、木炭、砥石の粉、水を混ぜたものに浸した馬毛のブラシで、漆の自然な光沢を艶消しに磨き上げる。その後、彫師はさらに細部を彫り、品物は透明な漆を一枚塗って仕上がる。この手間のかかる工程は現在でも職人たちに受け継がれ、長持ちする、艶消しの表面が摩耗するにつれて漆特有の光沢が少しずつ戻る製品になる。

村上木彫堆朱は装飾品に端を発するが、現在ではコップや箸、汁椀など日常使いの器にもその技術が地元の職人たちによって生かされている。

一方、**羽越しな布**は、武家社会の優雅さとはかけ離れた環境で生まれた。有史以前から羽越地方（現在の新潟県北部、山形県、秋田県南部）の辺境の村々では、シナノキの靱皮（樹皮の内側の繊維）から布を作っていた。村人たちは6月から7月初旬の梅雨の時期にシナノキの木から

繊維を取り出した。その後、灰汁で煮て米ぬかに浸して繊維を柔らかくし、秋の空気の中で乾燥させた後、手で糸を引き出して布に織り上げる。

しな布は伝統的に衣服や、人々が森から木の実やベリーを持ち帰るための粗い袋に使われていた。現在では、職人たちがこの素材をペンケースや名刺入れ、財布、帽子など、さまざまなおしゃれな小物に仕立てている。

地域番号	028	協議会名	沼田市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
028-001	沼田とは/沼田とは		251～500	WEB
028-002	迦葉山龍華院 弥勒寺/迦葉山龍華院 弥勒寺		251～500	WEB
028-003	迦葉山龍華院 弥勒寺/天狗信仰		251～500	WEB
028-004	たんばら ラベンダーパーク/たんばら ラベンダーパーク		1～250	WEB
028-005	玉原高原/玉原高原		1～250	WEB
028-006	旧生方家住宅/旧生方家住宅		251～500	WEB
028-007	沼田公園/沼田公園		501～750	WEB
028-008	旧沼田貯蓄銀行		1～250	WEB
028-009	旧土岐家住宅洋館		1～250	WEB
028-010	旧日本基督教団 沼田教会記念会堂		1～250	WEB
028-011	旧久米家住宅洋館		1～250	WEB
028-012	街なか天狗プラザ/街なか天狗プラザ		1～250	WEB
028-013	吹割溪谷/吹割溪谷		1～250	WEB
028-014	大蛇みこし/大蛇みこし		251～500	WEB
028-015	老神温泉/老神温泉		1～250	WEB
028-016	南郷の曲屋（旧鈴木家住宅）/南郷の曲屋 （旧鈴木家住宅）		251～500	WEB
028-017	南郷の曲屋（旧鈴木家住宅）/体験メニュー		251～500	WEB
028-018	沼田のフルーツ/沼田のフルーツ		1～250	WEB

028-001

Welcome to Numata

沼田市

【タイトル】 沼田とは/沼田とは

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Welcome to Numata

Numata is a city rich in history and nature. It is located in the mountainous northern part of Gunma Prefecture and can be reached in approximately two hours by train from Tokyo.

Numata started as a medieval castle town built on a river terrace formed by three waterways. The strategically located Numata Castle changed hands several times during the sixteenth century when rival families fought for control of the stronghold. Its importance waned during the relatively peaceful Edo period (1603–1867), when the town prospered through farming, forestry, and, from the latter half of the nineteenth century, sericulture. Some places to explore the history of Numata are **Numata Park**, the site of the former castle; **Kashozan Mirokuji**, a mountainside temple dedicated to the guardian deities of the area; and the **Taisho Roman area** in the center of town, where historic structures tell the story of Numata's golden years in the early twentieth century.

Outside of central Numata, places such as the **Tambara Highlands, Fukiware Canyon**, and an abundance of **fruit farms** allow visitors to experience the municipality's natural attractions. In winter, when the slopes of Tambara Ski Park are open, the northern Tambara area is a popular destination for snow sports. In summer, the hiking trails in the highlands provide an escape from the heat, and the ski resort is covered with purple flowers as it transforms into the picturesque **Tambara Lavender Park**. Many hikers also seek out Fukiware Canyon, walking along the forested shores of the Katashina River while admiring waterfalls and swirling rapids. The canyon is considered especially beautiful in autumn when seasonal foliage paints the shores in

shades of red, orange, and yellow. Autumn is also apple season in Numata: visitors can pick apples at dozens of orchards throughout the area and purchase products like jam and juice.

Annual events such as the **Numata Festival** in August and the **Daija Matsuri** (Great Snake Festival) in May showcase the city's history, folklore, and community spirit. Traditional customs and crafts can be experienced year-round at the **Magariya House**, an eighteenth-century farmhouse where visitors can make soba noodles from scratch, cook dumplings over a wood-burning stove, design their own straw sandals, and take part in other hands-on activities highlighting aspects of rural life.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沼田へようこそ

沼田市は自然豊かで歴史のある街である。東京から電車で約2時間、群馬県北部の山間部に位置する。

沼田は3つの川沿いに形成された河岸段丘に築かれた中世の城下町から発展した。戦略的な位置にあった沼田城は、16世紀には武家が城の支配権をめぐる争い、何度も城主が入れ替わった。比較的平和な江戸時代（1603-1867）にはその重要性は薄れ、町は農業、林業、そして19世紀後半からは養蚕で栄えた。沼田城の跡地である**沼田公園**や、この地域の守護神を祀る山腹の寺である**迦葉山弥勒寺**、20世紀初頭の沼田の黄金期を物語る歴史的建造物が立ち並ぶ町の中心部にある**大正ロマンエリア**などで、沼田の歴史に触れることができる。

中心部以外では、**玉原高原**、**吹割溪谷**、数多くの**果樹園**などがあり、沼田市の自然の魅力を体験することができる。北部の玉原はたんばらスキーパークのゲレンデがオープンする冬にスノースポーツの人気スポットである。夏には高原のハイキングコースが涼しく、スキー場は紫色の花に覆われ、絵のように美しい**たんばらラベンダーパーク**に変身する。また、多くのハイカーは吹割溪谷を訪れ、滝や渦巻く急流を眺めながら片品川の森に囲まれた岸边を歩く。溪谷が特に美しいとされるのは秋で、紅葉が岸边を赤、オレンジ、黄色に染める。沼田の秋はリンゴの季節でもある。この地域一帯にある何十もの果樹園でリンゴ狩りができ、ジャムやジュースなどの製品を購入することができる。

8月の「**沼田まつり**」や5月の「**大蛇まつり**」の年中行事では沼田市の歴史や民俗、コミュニティ精神が体験できる。18世紀に建てられた農家を改装した「**南郷の曲屋**」では年中、そば打ち、釜戸でのおやき作り、草履づくりなど、農村の暮らしにスポットを当てた体験型アクティビティに参加することができる。

028-002

Kashozan Mirokuji Temple

沼田市

【タイトル】 迦葉山龍華院
弥勒寺/迦葉山龍華院 弥勒寺
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kashozan Mirokuji Temple

Kashozan Mirokuji is a large temple complex set on Mt. Kasho, around 16 kilometers north of central Numata. The Soto Zen temple's unostentatious structures stand amid a dense forest interspersed with giant cryptomeria trees.

A stirring past

Kashozan Mirokuji was established in 848 as the guardian temple of Kozuke Province (present-day Gunma Prefecture). According to legend, the widely traveled Buddhist priest Ennin (794–864), who founded the temple, was inspired in his work by Mahakasyapa, a disciple of the historical Buddha. Mahakasyapa is known as Maha Kasho in Japanese, and Ennin thus named the mountain Kasho.

Acting on behalf of the court-appointed governor of Kozuke, Ennin founded Kashozan Mirokuji as a temple of Tendai, the school of Buddhism favored by the court at the time. The temple was converted to Soto Zen in the fifteenth century by a priest named Tenson, who figures prominently in local lore.

Tenson is believed to have meditated on top of Oshodai, a 60-meter-tall rock formation that towers over the temple grounds. He was assisted by a disciple named Chuho, whose superhuman abilities are said to have included climbing impossibly steep cliffs and never needing rest during his work expanding Kashozan Mirokuji and preaching Buddhism to the local people. According to the story, immediately after

Tenson's death, Chuho revealed himself to be an incarnation of Maha Kasho. He then promised to relieve the suffering of all those who pray at Kashozan Mirokuji and bring them joy. He then ascended to heaven, leaving behind only a long-nosed mask.

Guardians of the grounds

The legend of Chuho inspired the belief that he was a *tengu*, a part-bird mythical being. *Tengu* are considered to be powerful guardians of remote mountains and forests and are typically depicted with wings and either a long nose or a beak. At Kashozan Mirokuji, two *tengu* statues—one with a protruding nose, the other resembling a crow—stand guard in the temple's Chuhodo Hall, where Chuho is enshrined as a guardian deity. The ornate inner sanctum of this hall is located at the top of a steep multi-level altar. It is opened for viewing once every decade.

Today, Kashozan Mirokuji can be reached by car, but in the past, worshipers were asked to respect the sacred grounds by leaving their horses outside the precincts and continuing to the temple on foot. Devotees are said to have dismounted by the ancient and hollow cryptomeria tree that stands just out of sight from the temple buildings. This *umakakure* ("horse-hiding") tree can be reached via steps from the parking lot.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

迦葉山弥勒寺

迦葉山弥勒寺は、沼田市中心部から北へ約16キロ、迦葉山にある大きな寺院である。曹洞宗のこの寺は杉の巨木が点在する鬱蒼とした森の中に、控えめな佇まいで建っている。

心揺さぶる過去

迦葉山弥勒寺は848年に上野国（現在の群馬県）の鎮守護国寺として創建された。創建者で諸国を遍歴した僧・円仁（794～864年）が、釈迦の弟子である摩訶迦葉の名前に由来してこの山を「迦葉山」と名付けたという伝承がある。

当時の上野国の領主に頼まれ、円仁は迦葉山弥勒寺を当時の朝廷と結びつきがあった天台宗の寺院として創建した。寺は15世紀に、地元の伝承に大きな役割を果たす天巽という僧によって曹

洞宗に改宗された。

天巽は寺の敷地内にそびえ立つ高さ60メートルの岩、和尚台の上で坐禅をしたと言われている。彼を補佐したのは中峯という弟子で、その超人的な能力はあり得ないほど険しい崖を登り、地元の人々に仏教の教えを広め、寺院の建物を整備するための仕事を疲れもせずに続けたと言われている。天巽の死の直後、中峯は自分が摩訶迦葉の化身であることを明かしたという。そして、「迦葉山を信仰する人々の苦しみを除き、楽しみを与える」と伝え、鼻の長い仮面を残して昇天した。

境内の守り神

中峯の偉業から、彼は天狗であると信じられるようになり、寺は天狗信仰と結びつけられるようになった。人里離れた山や森を守る強力な守護神とされる天狗は、一般的に長い鼻かくちばしと羽を持つ姿で描かれる。迦葉山弥勒寺では鼻の突き出た天狗像とカラスに似た天狗像の2体が、守護神として中峯が祀られている中峯堂に立っている。このお堂の華麗な奥座は急勾配の多段祭壇になっている。最奥は10年に一度だけ開帳される。

現在の迦葉山弥勒寺へは車で行くことができるが、かつて境内は馬の乗り入れが禁じられ、その外に馬を置き、歩きながら寺に入るよう求められた。馬は入り口近くの空洞のある杉の古木にて下馬した。木が大きくて、寺から馬が隠れて見えないことから「馬隠れ杉」といわれた。今は駐車場から階段で下りることで見に行くことができる。

028-003

Tengu and Kashozan Mirokuji Temple

沼田市

【タイトル】 迦葉山龍華院

弥勒寺/天狗信仰

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tengu and Kashozan Mirokuji Temple

Tengu are a central and conspicuous part of worship at Kashozan Mirokuji and are the guardian deities at this temple. A pair of fierce-looking *tengu* statues stand guard in Chuhodo Hall. Hand-painted papier-mâché masks depicting these legendary long-nosed creatures can be borrowed from the temple. It is customary for people to borrow a mask on their first visit to the temple and place it on the Shinto or Buddhist altar in their home for protection from evil. The borrowed mask is to be returned the following year, along with a new mask purchased from one of the shops at the foot of the mountain.

Belief in *tengu* as guardians has been an integral part of local religious practice for centuries. In what is now Gunma Prefecture, *tengu* were strongly associated with silk farming, a major industry in the area from the mid-nineteenth century into the early twentieth century. *Tengu* were believed to protect silkworms from disease and the elements, and farmers would hang a *tengu* mask on the wall of the room used for silk farming to watch over the larvae.

The tradition at Kashozan Mirokuji of borrowing and returning *tengu* masks is also thought to date to the late nineteenth century and may have begun in part as a means of supporting local farmers, many of whom crafted masks during the winter to supplement their income. The temple's association with these auspicious objects eventually led temple visitors to dedicate ever larger and more elaborate specimens, culminating in the 1939 donation of what remains one of the largest *tengu* masks in Japan.

The giant mask measures 6.5 meters across and has a 2.8-meter-long nose. It was dedicated by members of the local chamber of commerce who prayed for the safety of those sent to fight in World War II. Its back side is covered with paper slips bearing the prayers and wishes of approximately 50,000 devotees who contributed to the donation. The massive mask is displayed in Chuhodo Hall next to a slightly smaller one from 1971, donated as a token of prayers for traffic safety. Annual traffic fatalities in Japan peaked at 16,765 in 1970, leading to intensive efforts by the government and civil society to improve road safety.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

天狗と迦葉山弥勒寺

迦葉山弥勒寺の守り神である天狗はこの寺の信仰の中心であり、目立つ存在である。獰猛な天狗の像が見守る中峯堂では、この伝説の長い鼻の存在を描いた手描きの面を借りることができる。初めて参拝する際にはこのお面を借りて、自宅の神棚や仏壇に飾り、魔除けとするのが習わしだ。借りた面は翌年、山のふもとで買った新しい面と一緒に返すことになっている。

天狗を守護神とする信仰は、何世紀にもわたって地元の宗教に不可欠な要素であった。現在の群馬県では、天狗信仰は19世紀半ばから20世紀初頭にかけてこの地域の主要産業であった養蚕と特に強い関係があった。天狗は蚕を守ると信じられており、蚕が疫病等にかからないための魔除けとして農家たちは天狗面を蚕の部屋の壁に飾っていた。

迦葉山弥勒寺の天狗面の貸し借りの伝統も19世紀後半に始まったと考えられており、農家の冬の産業として始まった可能性もある。この縁起物と寺の結びつきは、やがて信者たちに、より大きく精巧な面を奉納するようにさせ、1939年には日本最大級の天狗面が奉納されるに至った。

この巨大な面は丈6.5メートル、鼻の長さ2.8メートルで、地元の商工会有志が第二次世界大戦に駆り出された人々の安全を祈願して奉納したものだ。その裏側は寄贈に協力した約5万人の信者の祈りと願いが書かれた紙で覆われている。もう一体の面は1971年に交通事故防止を祈願して寄贈された。二体並んで、中峯堂に展示されている。日本の年間交通事故死者数は1970年の16,765人をピークに、交通安全向上のために政府と市民社会が集中的に取り組むようになった。

028-004

Tambara Lavender Park and Ski Park

沼田市

【タイトル】 たんばら
ラベンダーパーク/たんばら ラベンダーパーク
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tambara Lavender Park and Ski Park

During the summer months, the higher altitudes of the Tambara Highlands offer respite from the heat. The focal point of the area is Tambara Ski Park, a ski resort located around 1,300 meters above sea level. In summer, the slopes are transformed into Tambara Lavender Park, where some 50,000 lavender plants bloom and fill the air with a sweet scent in July and August.

Tambara's cool and generally dry summer climate is ideal for lavender and encourages strong growth and vividly colored flowers. The combination of early- and late-blooming species planted in the park ensures the slopes remain colorful throughout most of the season. As the last of the lavender fades at the end of August, the deep red burning bush (kochia) takes over.

Visitors can ride a chairlift to the upper section of the park, where most of the lavender fields are, and walk or take the lift back down. A number of products scented or flavored with lavender made from plants grown in the park are sold in shops on the premises, including soap, honey, mosquito repellent, and essential oils made in the park. Lavender-colored soft-serve ice cream is a popular treat, available on its own or mixed with a swirl of vanilla.

In winter, attention shifts to the Tambara Ski Park. This snow sports destination is noted for its mostly beginner-friendly slopes and long season, which often extends from November to early May. Snowshoeing and sledding are also popular activities during this time.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

たんばらラベンダーパークとスキーパーク

夏の間、標高の高い玉原高原は避暑地として人気。その中心となるのが標高1,300メートル付近にあるスキー場、たんばらスキーパークだ。夏は7月から8月にかけて、約5万株のラベンダーが咲き誇り、甘い香りに包まれるたんばらラベンダーパークに変身する。

玉原の夏の気候は涼しく、比較的に乾燥しているため、ラベンダーの木は色鮮やかな花を咲かせながら力強く成長する。早咲きの種や遅咲きの種が混在しているため、ゲレンデはほぼシーズンを通して色とりどりの花を咲かせ続ける。ラベンダーが色あせる8月末には、深紅の植物「コキア」が咲き誇る。

チェアリフトでラベンダー畑の大部分を占める公園の上部に行き、徒歩かりフトで下ることができる。園内の売店では石鹼、蜂蜜、蚊よけグッズ、園内で作られたエッセンシャルオイルなど、園内で栽培された植物から作られたラベンダーの香りや風味の製品が数多く販売されている。ラベンダー色のソフトクリームは人気のスイーツで、そのままでも、バニラと混ぜてミックスとしても食べられる。

冬には、たんばらスキーパークが中心となる。ほとんどが初心者向けのゲレンデであることと、11月から5月頭までの長いシーズンで知られるスノースポーツの目的地である。スノーシューやそり遊びもこの時期の人気アクティビティだ。

028-005

Tambara Highlands

沼田市

【タイトル】 玉原高原/玉原高原

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tambara Highlands

At the northern end of the Numata municipal limits, a plateau of volcanic origin rises to 1,600 meters above sea level in the foothills of Mt. Hotaka (2,158 m). This is the Tambara Highlands.

Wilderness enthusiasts flock to the area throughout the year. From May to late October, hikers come to explore the grass- and tree-covered Tambara Wetlands. Elevated boardwalks crisscross a diverse marshland habitat of hundreds of plant and animal species.

Flora and fauna

Notable wetland plants include *mizubasho* (swamp lantern; *Lysichiton camtschatcensis*), whose white lily-like flowers bloom immediately after the snow melts, usually from late April through May; *hiogi-ayame* (bristle-pointed iris; *Iris setosa*), whose purple blooms appear in June and July; and *tamuraso* (*Serratula coronata*), an herb with reddish-purple, densely clustered flowers similar to those of the red clover, which bloom from August to September. Among the animal denizens of the area are the forest tree frog (*moriao-gaeru*), which lays its eggs in white foam sacks that can be seen sticking to tree branches from May to June; and the Japanese black salamander (*kuro-sanshouo*), a mostly nocturnal amphibian that grows to a length of 13–15 centimeters.

The routes

The wetlands are a short walk from the nearest parking lot and can be circled in about an hour at an average pace. No hiking equipment is required.

A longer and more challenging path starts from the parking lot and continues uphill into the forest. This trail is steep in places, can be quite muddy after rain, and takes around three hours to complete. It does, however, come with the reward of experiencing the serenity of Tambara's ancient beech forest, which was logged in the first half of the twentieth century but has recovered well since being left to grow untouched since the 1940s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

玉原高原

沼田市の北端に位置する玉原高原は武尊山（標高2,158メートル）のふもとに広がる、最高標高1,600メートルの火山性台地である。

この地域は一年を通して大自然を愛する人たちを魅了している。5月から10月下旬まで、ハイカーが草や樹々に覆われた玉原湿原を探検しにやってくる。木道の遊歩道が、数百種の動植物の生息地となっているこの多様な湿原の生態系を横断している。

動植物

注目すべき湿地植物には、雪解け直後、通常4月下旬から5月にかけて白いユリのような花を咲かせるミズバショウ、紫色の花を6月から7月にかけて咲かせるヒオウギアヤメ、そしてアカツメクサに似た赤紫色の花が密集して咲くタムラソウで、8月から9月まで咲く。湿地に登場する動物では、5月から6月にかけて木の枝に付着する白い泡の袋に卵を産み付けるモリアオガエルや、体長13～15cmで主に夜行性の両生類であるクロサンショウウオがいる。

ハイキングコース

最寄りの駐車場から湿原までは徒歩で簡単に行くことができ、平均的なペースで1時間ほどで一周できる。ハイキング装備は必要ない。

二つ目のコースは駐車場から、森の中へ続く上り坂で始まり、ところどころ急な坂道があり、雨の後はかなりぬかるみ、約3時間かかる。しかしその分、20世紀前半に伐採されたが、1940年代以降は手つかずのまま放置されていたため、見事に回復した玉原のブナ林の静けさを味わうことができる。

028-006

Former Ubukata House

沼田市

【タイトル】旧生方家住宅/旧生方家住宅

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Former Ubukata House

The Former Ubukata House was the home of a wealthy merchant family that operated a pharmacy in the castle town of Numata. The family was also the designated supplier of medicines to the daimyo lord of the Numata domain throughout the Edo period (1603–1867). Their traditional wooden house is thought to date from the late seventeenth century and was originally located in the center of the town. It was relocated to Numata Park in 1973 for preservation.

The single-story house is now open to the public as a museum. Its thick earthen walls are plastered, and its gabled roof is covered with wood shingles held down by stones. The front side of the building has shutters that slide upwards, opening the space for use as a shop. The shop area consists of two raised-floor tatami-mat rooms, the one on the left for ordinary patrons and the more ornate room on the right for high-ranking samurai customers; and an earthen-floor area where customers would stand while interacting with the shopkeeper. The protruding eaves in front of the shop entrance protected customers from the elements.

The small door to the left of the shop was used by residents of the house. It opens onto an earthen-floor corridor that extends through the building, past a living area with a wooden floor and a sunken hearth (*irori*), and to a kitchen in the back. On the right side of the house are four tatami-mat rooms where family members slept. Servants were accommodated in two small rooms above the shop, which were accessed by a ladder.

Pharmacist's tools, spoons and bowls, medicine drawers, and other historical artifacts are on display inside the house. It is considered the oldest extant merchant's house in eastern Japan and has been designated an Important Cultural Property. Across from the main house is a small museum dedicated to the life of Ubukata Sei (1894–1978), a politician and the 26th head of the family. He studied pharmacy in the United States and was an enthusiast of such arts as literature, painting, and theater. His wife, Tatsue (1904–2000), was a noted poet whose achievements are detailed at the Ubukata Memorial Museum in central Numata.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧生方家住宅

旧生方家住宅は城下町沼田で薬種商を営み、江戸時代（1603～1867年）を通して沼田藩主の御用達であった豪商の家である。同家の伝統的な木造家屋は17世紀後半に建てられたと考えられており、当初は町の中心部にあった。1973年に保存のため沼田公園に移築された。

現在は博物館として公開されている平屋建ての家は、厚い漆喰塗りの土壁と、石で押さえた木板で覆われた屋根が特徴だ。家は妻入りで、上にスライドする雨戸が付いているため、前側を店舗として使うことができる。店舗部分は左側が一般客用、右側が身分の高い武家客用の高床式畳敷きの部屋と、客が店主と接するための土間とで構成されている。店の入り口の前には突き出たひさしがあり、来客を風雨から守っていた。

店の左側にある小さな扉はこの家の住人が使うものだった。土間の廊下が建物内を通り、板の間と囲炉裏のある居間、奥の台所へと続いている。家の右側には4つの畳の部屋があり、家族が寝泊まりした。使用人は店の上にある2つの小部屋に寝泊まりし、はしごで上がることができた。

建物内には薬師道具、匙や椀、薬百味ダンスなどの歴史的遺物が展示されてある。この建物は現存する町屋としては東日本最古のものとされ、重要文化財に指定されている。母屋の向かいには政治家で26代当主の生方誠（1894-1978）の生涯を紹介する小さな資料館がある。妻のたつゑ（1904-2000）は著名な詩人であり、その業績は沼田市中心部にある生方記念文庫で詳しく紹介されている。

【タイトル】 沼田公園/沼田公園

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Numata Park and Castle Site

Numata Park is a large, hilly green space overlooking the Usune and Tone Rivers. The park grounds include the site of Numata Castle, a sixteenth-century fortress that was converted into the administrative center of the Numata domain during the Edo period (1603–1867). Only isolated parts of the castle’s fortifications remain. The park is popular for the wide variety of flowers that bloom between April and October, for its views over the Tone River valley toward Mt. Hotaka and the Tanigawa mountain range, and for historical structures such as the Ubukata House, a seventeenth-century merchant’s house relocated from the center of town and now open to the public as a museum.

A short-lived stronghold

The first structures on the site that would become Numata Park were built by the Numata family, which controlled the area around the present-day city of Numata for several centuries until the late 1500s. In 1532, the family established a fortress high above the two rivers, a strategic location but one that had remained largely uninhabited due to a lack of fresh water. This stronghold functioned as a lookout from which the Numata family could keep an eye on traffic on the nearby rivers as well as monitor the roads north over the mountains to Echigo Province (present-day Niigata Prefecture) and Aizu (in today’s Fukushima Prefecture).

Several families vied for control of Numata in the late 1500s. The area was eventually seized by the Sanada family, who initiated a number of extensive construction projects

to develop their domain under the leadership of Sanada Nobuyuki (1566–1658). The family had canals dug to bring fresh water to the highland, which made it possible to establish a town there. In 1597, the Sanada family finished building a large castle on the site of the Numata family's modest fortress, incorporating two moats, stone walls, gates, several watchtowers, and a five-story keep. Samurai residences were built between the castle and the rest of the town, which was expanded to the east and south.

However, the grand Numata Castle was demolished in 1682 after the ruling Tokugawa shogunate dispossessed the Sanada family for misgovernance. Afterwards, the Numata domain was governed by many different daimyo and eventually passed into the hands of the Toki family. They built a residence in the outskirts of the castle, but did not rebuild the fortifications because their tenure was during a time of peace.

From fort to park

The Toki family governed Numata until the Meiji Restoration in 1868, which put an end to the long period of warrior rule. The family moved to Tokyo and their residence was abandoned, and the site of the former castle remained unused until 1916. It was purchased by Kume Taminosuke (1861–1931), a wealthy Numata-born businessman whose family had served the Toki family prior to the Meiji Restoration. Kume had the grounds turned into a park, which he donated to the local government in 1926.

Due to the turbulent history of the site, very little of the sixteenth-century castle remains in the park today. Among the surviving structures are a short section of the inner moat, some ramparts, and the foundations of the westernmost watchtower. Instead of a lookout, this stone base now supports a 400-year-old cherry tree whose blooms are said to mark the arrival of spring in Numata. A reproduction of the Numata Castle bell hangs in the park's belfry and is rung at six o'clock every morning and evening. The original, cast in 1634, is on display at the Numata City History Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沼田公園と城跡

沼田公園は臼根川と利根川を見下ろす、起伏に富んだ広大な緑地である。この公園は江戸時代（1603年～1867年）に沼田藩の行政の中心地となった沼田城の跡地であり、公園内には城郭の一部が残る。4月から10月にかけて咲き誇るさまざまな花々や、利根川流域から武尊山や谷川連峰を望む眺望、市街地から移築されて、現在は博物館として公開されている17世紀の商家「旧生方家住宅」などの歴史的建造物が人気だ。

短命に終わった要塞

沼田公園となる場所に最初に建造物を建てたのは、数世紀をかけて1500年代後半まで現在の沼田市周辺を支配していた沼田家である。1532年、彼らは二つの川を見下ろす要塞を築いた。この場所は戦略上重要な場所であったが、淡水が乏しかったため、ほとんど人が住んでいなかった。城は沼田家が近隣の河川の交通を監視し、越後国（現在の新潟県）や会津（現在の福島県）へと続く山越えの道を監視するための見張り台として機能した。

1500年代後半には、いくつかの一族が沼田の支配権をめぐる争った。最終的にこの地域は真田家の支配下に置かれ、真田信之（1566-1658）の指導の下、領地を開発するために多くの大規模な建設プロジェクトが開始された。真田一族は河岸段丘に真水を引くための水路を掘らせ、段丘に町を作ることを可能にした。1597年、真田氏は沼田氏のささやかな城の跡地に、二重の堀、石垣、門、いくつかの櫓、五層の天守閣を備えた大きな城を築き終えた。城と町の間には武家地が整備され、町は東と南に拡張された。

しかし1682年、徳川幕府が真田家を失政により追放したため、壮大な沼田城は取り壊された。沼田藩は真田氏以後も多くの藩主を擁したが、やがて土岐氏の手に移った。土岐氏は城の外郭を屋敷に改造したが、平時の統治であったため、城郭の再建には手をつけなかった。

城から公園へ

土岐家は、1868年の明治維新で武家支配が終わるまで、沼田藩主であり続けた。その後、土岐氏は東京に移り、屋敷は廃城となった。1916年、沼田出身の実業家で明治維新以前からその家族が土岐家に仕えていた久米民之助（1861-1931）が城跡を買い取った。久米は敷地を公園として整備させ、1926年に自治体に寄贈した。

激動の歴史のため、16世紀の城の遺構は現在、公園内でほとんど見ることはできない。現存する遺構は、内堀の短い部分や石垣の一部、そして最西端の櫓の基礎部分である。現在は見張り台の代わりに、推定樹齢400年の桜の木が立っていて、この桜の花が咲くと沼田に春が訪れると言われている。公園の鐘楼には沼田城の鐘の複製が吊るされ、毎朝夕6時に鳴らされている。オリジナルは1634年に鋳造されたもので、沼田市歴史資料館に展示されている。

028-008

Old Numata Savings Bank

沼田市

【タイトル】旧沼田貯蓄銀行

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Old Numata Savings Bank

This former bank building constructed in 1908 exemplifies the way Western ideas and architectural styles were often combined with home-grown traditions in early twentieth-century Japan. The two-story structure has imported elements such as sash windows and an arched doorway covered by a portico, while the tile roof, lime-plastered walls, and earthen-floor entrance area are distinctively Japanese.

The ceilings inside are papered with gilded and embossed Japanese paper that was modeled on European gilt leather (*kinkara-kawakami*). In contrast, the ceiling of the portico is adorned with plaster relief pictures (*kote-e*), which were often used to decorate both temple buildings and the homes and storehouses of rich merchants during the Meiji era (1868–1912). This eclectic mixture of styles and techniques was achieved by architects and artisans whose familiarity with Western buildings was limited to photographs and blueprints.

The building was used as a bank until 1934, after which it was converted for office use. Gunma Prefecture designated the structure a cultural property in 1984. In 2016, it was extensively renovated to restore its original appearance, and the building was moved around 250 meters south from its initial location to facilitate preservation.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧沼田貯蓄銀行

1908年に建てられたこの旧銀行の建物は、20世紀初頭の日本において、西洋の思想や建築様式がしばしば自国の伝統と組み合わせられたことを例証している。2階建ての建物は上げ下げ窓やアーチ型の玄関がポーチで覆われるなど、海外から取り入れた要素を特徴とする一方で、瓦屋根、漆喰の壁、土間の玄関部分は日本独特のものである。

内部の天井にはヨーロッパの金唐革を模した金唐革紙が貼られている。対照的に、ポルティコの天井は、明治時代（1868年～1912年）に寺院建築や豪商の邸宅や蔵の装飾によく使われた漆喰の浮き彫り・鍍絵で飾られている。このように様々な様式や技法が混在しているのは、写真や設計図でしか西洋建築に精通していなかった建築家や職人たちの手によるものである。

この建物は1934年まで銀行として使用され、その後オフィス用に転用された。1984年に群馬県が文化財に指定。2016年、当初の姿を復元するために大規模な改修が行われ、保存を容易にするために当初の位置から約250メートル南へ移動された。

028-009

Former Toki House

沼田市

【タイトル】旧土岐家住宅洋館

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Toki House

This two-story villa in the style of German *Jugendstil* was built in 1924 in Shibuya, Tokyo, by viscount Toki Akira (1892–1979). His father, Toki Yorioki (1848–1911), was the last daimyo lord of the Numata domain.

Toki Akira was born in Tokyo, where his family had moved following the Meiji Restoration in 1868. He had a passion for bread and studied zymology, the science of fermentation, at university. After he married, he worked in the wine business with his wife's family. While pursuing further studies in Germany in 1923, his Tokyo home was destroyed in the Great Kanto Earthquake, a disaster that devastated much of the capital and killed more than 100,000 people.

After returning to Tokyo, Akira decided to construct a new residence in Shibuya. He had the exterior designed in the decorative *Jugendstil* which was prominent in Germany in the early twentieth century. *Jugendstil* is notable for forms and lines inspired by natural curves, particularly those of flowers and plants. In the Toki House, the influence of this style is evident in details such as the reliefs of fruit baskets above the arched windows and the gently curved dormers high on the roof.

The interior is a combination of Western and Japanese styles. The spacious reception room on the first floor and Toki Akira's study on the second floor have wooden floors, chairs, and ornate curtains. In contrast, other rooms, including the viscount's private quarters, have tatami-mat floors, tokonoma alcoves, and sliding paper panels. Decorative glass windows on some of the sliding doors provide an eclectic touch.

The Toki family donated the house to the city of Numata in 1991, and it was relocated to Numata Park in the same year. The building has stood on its current site since 2020.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧土岐家住宅洋館

ドイツ・ユーゲントシュティール様式のこの2階建ての家は、沼田藩最後の藩主であった土岐頼知（1848-1911）を父に持つ子爵・土岐章（1892-1979）によって、1924年に東京・渋谷に建てられた。

土岐章は、1868年の明治維新後、一家が移り住んだ東京で生まれた。パンが大好きで、大学では発酵学を学んだ。結婚後は妻の実家でワイン事業に携わる。1923年、ドイツに留学中、東京の自宅が10万人以上の犠牲者を出し、首都に大きな被害をもたらした関東大震災で倒壊した。

東京に戻った章は渋谷に新しい邸宅を建てることにした。外観は、20世紀初頭にドイツで影響力を持った、自然の、特に花や植物の曲線からインスピレーションを得た形や線を好むという特徴がある装飾的なユーゲントシュティール様式でデザインされた。土岐家住宅洋館ではアーチ型の窓の上に施されたフルーツバスケットのレリーフや、屋根の高い位置にある緩やかなカーブを描く屋根窓などのディテールに、この様式の影響が見て取れる。

インテリアは西洋と日本の様式が融合している。1階の広々とした応接室と2階の土岐章の書斎は木製の床、椅子、装飾的なカーテンで飾られた一方、子爵の私室を含む部屋は畳敷き、床の間、障子で飾られている。襖の一部には装飾的なガラス窓があり、折衷的な雰囲気醸し出している。

1991年に土岐家から沼田市に寄贈され、同年沼田公園に移築された。建物は2020年から現在の場所に建っている。

028-010

Former Numata Church Memorial Hall

沼田市

【タイトル】 旧日本基督教団
沼田教会記念会堂
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Former Numata Church Memorial Hall

This simple clapboard building with sash windows was built in Numata in 1914 for the Protestant Church of Christ in Japan. Its construction was financed and encouraged by the Hoshino family, particularly the brothers Hoshino Takeshi (1878–1913) and Mitsuta (1860–1932), and their sister Ai (1884–1972). Their father had moved from Numata, a center of silk farming at the time, to become a silk trader in the port city of Yokohama, then one of the most cosmopolitan places in the country. He had converted to Christianity, and his children received a Christian education as well as instruction in English.

Mitsuta became a pastor while Ai went to the United States to study, earning a master's degree in education from Columbia University. She dedicated herself to advancing women's education, serving for 30 years as president of what is now Tsuda University, one of the oldest and most prominent women's colleges in Japan.

The building was used as a church until 1988, when it was converted into an art museum. It was renovated and moved to its present location in 2020.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧日本基督教団沼田教会記念会堂

上げ下げ窓のあるシンプルな下見板張りのこの建物は1914年、沼田市にプロテスタントの旧日本基督教団のために建てられた。建設には星野家、特に星野健（1878-1913）と兄の光多

（1860-1932）、妹のあい（1884-1972）が資金を提供し、後押しした。二人の父は当時養蚕の中心地だった沼田から、当時国内でも有数の国際都市だった港町・横浜に移り住み、絹織物の商人となっていた。彼はキリスト教に改宗し、子供たちはキリスト教の教育を受けるとともに、英語の教育も受けた。

光多は牧師になり、あいはアメリカに留学してコロンビア大学で教育学の修士号を取得した。彼女は女子教育の発展に尽力し、日本で最も古く著名な女子大学のひとつである現在の津田塾大学の学長を30年近く務めた。

この建物は1988年まで教会として使われていたが、その後美術館に改築された。2020年に改修され、現在の場所に移築された。

028-011

Former Kume House

沼田市

【タイトル】旧久米家住宅洋館

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Kume House

This Western-style house was built around 1910 on the Shibuya, Tokyo estate of Kume Taminosuke (1861–1931), a wealthy Numata-born businessman. The building was used to entertain guests and was connected by corridors to a Japanese-style reception wing as well as to the Kume family residence.

The single-story house was one of the first reinforced-concrete structures in Japan. Its stylized façade is said to have been inspired by the Vienna Secession movement, and combines straight lines with decorative elements, including exaggerated eaves and metal corbels painted turquoise. The reception room is adorned with chandeliers, a marble fireplace, and *kinkara-kawakami* wallpaper, a type of gilded and embossed Japanese paper that was modeled on European gilt leather.

The opulence of the house reflected the high standing of its owner. Kume Taminosuke was born into a samurai family who served the daimyo lord of the Numata domain, and he studied civil engineering in Tokyo and went on to become a successful entrepreneur. His construction, rail, and tobacco businesses made him extraordinarily wealthy. He also found success in politics, serving four terms in the lower house of the Diet. In his hometown, Kume had the site of Numata Castle turned into a park, which he later donated to the local government.

In 1922, Kume sold his vast Tokyo estate, which was later divided into several small lots with different owners. The Western-style house remained on its original site until 2023, when it was moved to Numata for preservation. On that occasion, the building

was restored to its 1910 appearance, preserving as much of the original materials as possible. The furniture and interiors, including the wallpaper around the fireplace, were reproduced based on photographs and other documents.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧久米家住宅洋館

この洋館は沼田出身の実業家、久米民之助（1861-1931）の敷地内に1910年頃に建てられた。建物は賓客をもてなすためのもので、隣接する和風の応接室や久米家の住宅と廊下でつながっていた。

平屋建てのこの邸宅は日本で最初期の鉄筋コンクリート建築だった。セセッション様式にインスパイアされたと言われるファサードは直線的なラインと、ターコイズブルーに塗られた誇張された庇や金属製のコーベルなどの装飾的な要素が組み合わされている。応接室はシャンデリア、大理石の暖炉、ヨーロッパの金唐革を模した金唐革紙の壁紙で飾られている。

邸宅の豪華さは、その所有者の地位の高さを反映していた。沼田藩主に仕える武士の家に生まれた久米民之助は東京で土木工学を学び、実業家として成功した。建設業、鉄道業、たばこ業で巨万の富を築き、政界でも成功を収め、衆議院議員を4期務めた。久米は故郷の沼田城跡を公園として整備し、後に地元に寄贈した。

久米は1922年に東京の邸宅を売却した。その後何度か所有者が変わるとともに、広大な敷地は分譲された。洋館は2023年まで元の場所にあったが、保存のため沼田に移築された。この際、建物は可能な限りオリジナルの材料を使用して1910年当時の姿に復元された。暖炉周りの壁紙など、家具や内装は写真や資料をもとに再現された。

028-012

Tengu Plaza and Giant Mask

沼田市

【タイトル】 街なか天狗プラザ/街なか天狗プラザ

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Tengu Plaza and Giant Mask

Tengu Plaza in central Numata can be an intimidating place to happen upon at night, with its giant, long-nosed, red-faced being staring at passersby from a perch inside a small building with floor-to-ceiling glass panels. But there is no need to fear: this *tengu* is a guardian deity of the area, and the massive mask displayed at Tengu Plaza is a central feature of the annual Numata Festival, a spirited celebration of local heritage held over three days in August.

The mask weighs 150 kilograms, is 4.3 meters long, and has a 2.9-meter nose. During the festival, some 300 women parade it through the streets of central Numata along with another *tengu* mask stored at Kashozan Mirokuji Temple.

Tengu Plaza offers free parking for those wanting to get a close look at the giant *tengu* mask. Public bathrooms are available next to the parking lot, and there is a small grocery shop for picking up local produce and products such as jam, honey, and pickles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

街なか天狗プラザと巨大な面

沼田市の中心部にある天狗プラザは、夜になると少し怖目な雰囲気にも包まれる。床から天井までガラス張りの小さな建物の中に、巨大な長い鼻と赤い顔をした天狗が鎮座し、通行人を見つめているからだ。しかし、恐れる必要はない。天狗はこの地域の守護神であり、天狗プラザに飾られる巨大

な面は、毎年8月に3日間にわたって開催される地元の伝統行事「沼田まつり」の中心的存在である。

天狗面は重さ150キロ、丈4.3メートル、鼻の高さ2.9メートル。迦葉山弥勒寺に保管されている天狗面とともに、祭りの期間中、約300人の女性たちによって担がれ、沼田市中心部の通りを練り歩く。

天狗プラザでは巨大な天狗のお面を間近で見たい人のために無料の駐車場を用意している。駐車場の隣には公衆トイレがあり、小さな食料品店もあるので、地元の農産物やジャム、蜂蜜、漬物などの製品を手に入れることができる。

028-013

Fukiware Canyon

沼田市

【タイトル】 吹割溪谷/吹割溪谷

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Fukiware Canyon

Steep walls of exposed rock rise high above the swirling water on either side of the Katashina River at Fukiware Canyon, around 30 minutes northeast of central Numata by car. The deep gorge has several waterfalls, including Fukiware Falls, a cluster of intertwined cataracts up to 7 meters high that plunge through cracks in the rock caused by the flow of the river over millennia. The effects of erosion can also be seen elsewhere around the falls. For example, in several giant potholes formed by pebbles caught in circular currents wearing away at the rock, and along the sheer cliffs, one of which has eroded into a shape resembling a Noh mask. Paved walking paths run along the river and there is access to the rocky banks in some places.

Fukiware Canyon is most dramatic from mid-April through early May, when meltwater from the nearby mountains fills the river to the brim and water rages over the falls, past fresh greenery and blooming wildflowers on the riverbanks. The canyon also shines in autumn, when vibrant seasonal foliage contrasts with the dark rocks and white water. After the long rains that often linger in Numata in late October and November, red and orange maple leaves collect underneath some of the waterfalls, occasionally forming a colorful carpet. Winter brings a serene, snow-covered landscape. The riverside walking paths are closed during the winter, and the view is best taken in from the Rokkakudo, a gazebo high above the river that is partially obscured by vegetation in warmer seasons.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

吹割溪谷

沼田市中心部から北東へ車で30分ほど行ったところにある吹割溪谷は、片品川の両岸にそびえ立つ岩肌がむき出しになった険しい溪谷である。この深い溪谷には吹割の滝をはじめとするいくつかの滝がある。吹割の滝は高さ7メートルもある滝で、数千年にわたる川の流れによってできた岩の割れ目に落ち込んでいる。滝の周辺には岩を削る円流に小石が巻き込まれてできた巨大な甑穴がいくつかあり、切り立った崖沿いには、自然が作り出した能面のような崖もある。川沿いの舗装された遊歩道で溪谷を散策することができ、ところどころにある岩の岸辺を歩くこともできる。

吹割溪谷が最もドラマチックに見えるのは4月中旬から5月上旬にかけての時期で、付近の山々からの雪解け水が川を満たし、水が滝を越えて、川岸の新緑や咲き誇る山野草を通り過ぎる。溪谷は秋にも輝き、季節の鮮やかな紅葉が暗い岩と水のコントラストを際立たせる。10月下旬から11月にかけて沼田に降る長雨の後、赤やオレンジのモミジの葉が滝の下に集まり、色とりどりの絨毯を敷き詰めることもある。冬には雪に覆われた静かな風景を見ることができる。この時期、川沿いの遊歩道は閉鎖されるため、冬の景色は六角堂から眺めるのがベストだ。六角堂は川から高い位置にある見晴らし台で、暖かい季節には植物に覆われてあまり見えない。

028-014

Daija Matsuri

沼田市

【タイトル】 大蛇みこし/大蛇みこし

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Daija Matsuri

Elaborate serpent-shaped floats are paraded through the hot-spring town of Oigami Onsen every May during the annual Daija Matsuri. This “Great Snake Festival” is a celebration inspired by an ancient myth involving the deity of the nearby Mt. Akagi.

In the legend, the deity took the shape of a giant serpent and was locked in a fierce battle with the centipede deity of Mt. Nantai, a prominent peak to the northeast of Mt. Akagi in what is now Nikko National Park. One of the centipede’s arrows wounded the serpent. As the serpent retreated, it pulled out the arrow and stuck it into the ground. Hot water gushed from the hole made by the arrow, healing the serpent and allowing it to drive the centipede back.

The snake deity is enshrined at Akagi Shrine in Oigami Onsen, which was built on the site where the serpent is said to have been rejuvenated. The Daija Matsuri is a festival of the shrine and is celebrated with a parade through the town, during which participants carry a 25-meter-long handcrafted serpent from one hot-spring inn to the other to pray for the deity’s protection. The serpent has detailed scales and fearsome features that bring the myth to life, as do the three smaller likenesses (each about 20 meters long) that accompany it and are carried by children.

Historically, worshipers carried traditional *mikoshi* (portable shrines) during the Daija Festival. However, they were heavy and impossible to carry to inns that stood along the Katashina River rather than in the streets of the town. The snake-shaped *mikoshi* were thought to be easier to maneuver, and they have been part of the festival since the

1950s.

In 2001, the people of Oigami Onsen built an even larger serpent to honor the deity. This 108-meter-long, 2-ton specimen is made of polyurethane, wood, and tarps and has a carbon-fiber head. It is on permanent display in a storehouse in central Oigami Onsen but is brought out once every 12 years, when the Daija Matsuri is held in the year of the snake according to the traditional East Asian zodiac calendar. Around 200 people are required to carry the snake, and it was certified as “the world’s longest festival snake” by Guinness World Records in 2013.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大蛇まつり

毎年5月に開催される「大蛇まつり」では、大蛇の形をした精巧な神輿が老神温泉の街を練り歩く。この祭りは赤城山の祭神にまつわる古代の神話に触発されたものだ。

伝説では、大蛇の姿をしたこの神は、赤城山の北東に位置する、今の日光国立公園にある男体山のムカデ神と激しい戦いを繰り広げていた。ムカデの矢が大蛇を傷つけ、大蛇は後退しながら矢を引き抜き、地面に突き刺した。矢が刺さった穴から湯が湧き出し、大蛇は癒されてムカデを追い返すことができた。

蛇の神は老神温泉の赤城神社に祀られているが、この神社は蛇が蘇った場所に建てられたという伝説がある。大蛇まつりはこの神社を中心に町内を練り歩くもので、参加者は長さ25メートルの手作りの大蛇の神輿を担ぎ、温泉宿から温泉宿へと神の守護を祈願する。神輿は神話に命を吹き込むような細かいところや恐ろしい特徴を持っており、メインの神輿に付随して子供たちが担ぐ（長さ20メートルほど）の3つの小さな蛇の神輿も同様である。

従来、大蛇まつりでは普通の神輿を担いで練り歩いたが、重くて、街道沿いではなく片品川沿いの旅館まで担ぐのは難しかった。そこで、蛇のような形をした神輿が登場し、1950年代から祭りに取り入れられるようになった。

2001年、老神温泉の人々は大蛇を祭るためにさらに大きな大蛇神輿を作った。長さ108メートル、重さ2トンのこの神輿はポリウレタン、木材、防水シートでできており、カーボンファイバー製の頭部を備えている。12年に一度、東アジアの伝統的な干支暦である巳年に行われる大蛇まつりに、常設展示されている老神温泉の中心部にある建物から運び出される。担ぎ手は約200人で、2013年

には「世界最長の祭り蛇」としてギネス世界記録に認定された。

028-015

Oigami Onsen

沼田市

【タイトル】 老神温泉/老神温泉

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Oigami Onsen

Oigami Onsen is a small hot-spring village on the Katashina River east of central Numata, with 13 spa hotels and inns among the steep hills on both sides of the river. These facilities offer a traditional hot-spring resort experience with bathing in various communal tubs and meals incorporating local ingredients such as freshwater fish and seasonal vegetables.

According to legend, people have been bathing at Oigami Onsen for more than a thousand years, and the discovery of the hot springs is attributed to the deity of the nearby Mt. Akagi. In the story, the deity takes the form of a snake to fight off its rival, the deity of Mt. Nantai, another mountain to the northeast. After the snake deity is wounded by an arrow fired by its opponent, it rips out the arrow and sticks it into the ground. Hot water gushes forth, healing the snake's wounds instantly and empowering it to drive away its adversary. Oigami Onsen is said to stand on the site where the snake-deity was rejuvenated, and the deity is enshrined at Akagi Shrine above the village.

The landscape of the village and the surrounding valley can be taken in from the Nairaku Bridge, a bright red suspension bridge over the Katashina River.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

老神温泉

老神温泉は沼田市中心部の東、片品川沿いにある小さな温泉郷で、川の兩岸の急峻な丘陵地に計13軒の温泉ホテルや旅館が建ち並んでいる。これらの施設では個々に趣向を凝らした浴槽での入浴や、川魚や季節の野菜など地元の食材を使った食事など、伝統的な温泉リゾートを体験することができる。

伝説によると、老神温泉では1000年以上前から人々が入浴しており、温泉の発見は近くの赤城山の神によるものとされている。赤城山の神は、北東にある男体山の神を退治するために蛇の姿になるが、相手の放った矢に当たって傷を負う。蛇神は矢を引き抜き、地面に突き刺す。湯が湧き出ると、蛇神はたちまち傷を癒し、敵を追い払う力を得る。老神温泉は蛇神が蘇った場所にあると言われ、神は町の上にある赤城神社に祀られている。

片品川にかかる真っ赤な吊り橋、内楽橋からは集落と周辺の溪谷の風景を眺めることができる。

028-016

Magariya House in Nango

沼田市

【タイトル】 南郷の曲屋（旧鈴木家住宅） / 南郷の曲屋（旧鈴木家住宅）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Magariya House in Nango

The Magariya House is a large thatched-roof farmhouse in the small riverside village of Nango, a 30-minute drive east from central Numata. The house was built in 1785 and was the home of the wealthy Suzuki family. The head of the family was the village headman, a hereditary position held by the Suzuki family, who were also prominent landowners. Until the end of the Edo period (1603–1867), officials dispatched by the local daimyo lord to collect taxes in the area would stay at the house while carrying out their duties.

The obligation to host government officials is thought to have influenced the layout of the house. The L-shaped building is in the style of a *magariya* (“bent house”), which is common for farmhouses in cold regions throughout northern Japan. A stable wing for horses and an earthen-floor work area are attached to the side of the main living area, allowing the people of the house to care for and protect their horses during the harsh winters. Out of the ordinary for a farmhouse, however, are the two well-appointed tatami-mat rooms on the opposite side of the house from the stable. These rooms were used to accommodate samurai officials. Higher-ranking guests stayed in the inner chamber, which has a raised floor (*jodan no ma*) and a decorative tokonoma alcove, while their attendants were accommodated in the outer room.

The sunken hearth (*irori*) in the corner of the work area closest to the living room is a central element of the house. A fire was kept going in the hearth at all times to keep the building warm and dry. The smoke from the hearth would rise up through the rooms and ceiling, which blackened the walls but protected the wooden structure and thatched roof from rot and insects. Meals were also prepared on the hearth, over which

a pot or kettle could be suspended from a hook.

In addition to the main building, the premises of the Magariya House include a waterwheel and four *kura* storehouses with fire-resistant earthen walls. One *kura* was used to hold family heirlooms, important documents, and other valuables, while another stored grains and farming tools. The smallest of the four is the *misokura*, where the family made and kept miso paste and pickles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

南郷の曲屋

「曲屋」は、沼田市中心部から東へ車で30分ほど行ったところにある、川沿いの小さな集落・南郷にある大きな茅葺き屋根の農家である。この家は1785年に建てられ、裕福な鈴木家の邸宅であった。鈴木家の当主は庄屋を世襲する大地主だった。江戸時代（1603～1867年）には、大名から派遣された役人たちがこの家に泊まって職務を遂行した。

この家の間取りは、役人の接待の義務が影響していると考えられている。L字型の建物は、北日本の寒冷地の農家によく見られる曲家の様式である。メインの居住スペースの脇には馬を飼うための馬屋と土間の作業場が併設され、厳しい冬でも馬の世話ができるようになっている。しかし、農家としては異例なのは、馬小屋の反対側にある2つの畳敷きの部屋である。これらの部屋は武士の役人が宿泊するのに使われた。身分の高い客は床の間と上段の間がある内間の部屋に泊まり、従者は外側の部屋に泊まった。

居間に最も近い仕事場の隅にある囲炉裏は、家の中心的な要素である。囲炉裏には常に火が置かれ、建物を暖かく乾燥させていた。囲炉裏の煙は部屋や天井を伝って立ち上り、壁を黒くするが、木造建築や茅葺き屋根を腐敗や虫から守った。食事も囲炉裏の上で調理され、鍋ややかんはフックに吊るされていた。

母屋のほか、曲家の敷地内には水車や耐火土壁の蔵が4棟ある。ひとつは家宝や重要書類などの貴重品を保管する蔵、他は穀物や農具を保管する蔵である。4つの蔵のうち最も小さいのが味噌蔵で、味噌や漬物を作って保管していた。

【タイトル】 南郷の曲屋（旧鈴木家住宅）/体験メニュー

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Activities at the Magariya House

Making soba or udon noodles, crafting a pair of straw sandals, and soaking your feet in hot spring water are only a few of the things you can do at the Magariya House in Nango. The program is varied, and hands-on classes range from workshops on skills vital for traditional village life to internationally inspired options such as baking pizza in the stone oven on the property.

Cooking

One of the surest ways of getting acquainted with local food culture is to prepare from scratch a dish that has been eaten in the area for centuries the traditional way, by cooking over a traditional cookstove. The mountainous land around the village of Nango was not well suited to rice farming, and wheat and buckwheat were the mainstays of the local diet. At the Magariya House, visitors can try their hand at making udon (wheat) and soba (buckwheat) noodles by rolling out dough, shaping and cutting the noodles, and boiling them in a pot on the cookstove (*kamado*). The noodles are then served with freshly deep-fried tempura and an assortment of small dishes made mainly with local ingredients. Other food-focused experiences rooted in local culinary culture include making *oyaki*, wheat dumplings filled with pickled vegetables or sweet red bean paste and roasted over the open hearth; *suiton*, a hearty soup with wheat dumplings, vegetables, and pork; and *konnyaku* (konjac), a firm, gelatinous food made from the konjac yam that is another staple ingredient in the area.

Crafts

Fashioning a pair of *zori* sandals out of straw gives visitors a feel for a skill once essential in villages like Nango, as this simple form of outdoor footwear was worn by ordinary people in rural Japan for centuries. Seasonal experiences are also available, including decorating *furin* wind chimes, whose ring sounds refreshing in the heat of summer.

Visitors can take a break from exploring the Magariya House by dipping their feet in the foot bath next to the main building. Anyone who has paid the entrance fee to the house can enjoy the bath. Other activities at the Magariya House generally cost between ¥500 and ¥1,000 per person and must be reserved in advance.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

南郷の曲屋の体験メニュー

そば打ちやうどん打ち、ぞうり作り、温泉に足を浸すなどは、南郷にある「曲屋」で提供されているアクティビティのほんの一部に過ぎない。伝統的な村の暮らしに欠かせない技術を伝授するワークショップから、敷地内にある石窯でピザを焼くなど、国際色豊かなオプションまで、体験型のワークショップが用意されている。

食

この地域で何世紀にもわたって食べられてきた料理を、伝統的な方法で一からかまどで調理することは、地元の食文化に親しむ最も確実な方法のひとつです。南郷周辺の山地は稲作に適していなかったため、小麦や蕎麦がこの地域の食生活の2つの柱となっていた。曲屋ではうどん・そば打ち体験ができる。生地をのばし、麺を切り、釜戸の鍋でゆでる。揚げたての天ぷらや、地元の食材を中心とした小皿料理の数々と一緒にいただく。このほか、漬物やあんこが入った小麦団子「おやき」を囲炉裏で焼いたり、小麦団子や野菜、豚肉が入った具だくさんの汁物「すいとん」を作ったり、こんにゃく芋から作られる固めのゼラチン状の食品で、この地域の定番食材でもある「こんにゃく」を作ったりするなど、地元の食文化に根ざした体験ができる。

工芸品

日本の農村で何世紀にもわたって庶民が履いていたシンプルな外履き・草履をわらで作ることで南郷のような村で不可欠な技術を体感することができる。夏の風物詩である風鈴の飾り付けなど、季

節ごとの体験もできる。

母屋横には足湯があり、曲屋散策の休憩に利用できる。入館料を払えば誰でも利用できる。その他のアクティビティは通常1人500円から1,000円で、事前予約が必要。

【タイトル】 沼田のフルーツ/沼田のフルーツ

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Fruits in Numata

Anyone exploring parts of Numata outside of the city center is bound to come across colorful roadside signs advertising pick-your-own fruit farms and orchards. Fruit-growing is a major industry in the area, but fruit from Numata is rarely sold outside of the municipality. Of the approximately 100 farms in Numata, most sustain themselves through direct sales and pick-your-own fees.

Numata is noted for its apples. Large-scale cultivation began in the 1980s, when apple trees were found to thrive in Numata's climate, benefiting especially from the ample sunlight and the significant variation between daytime and nighttime temperatures. The efforts of farmers, with some help from a local agricultural research center, have resulted in a number of Numata-born apple cultivars. These and several dozen other varieties ripen between September and December. In addition to simply picking and eating them, Numata apples can be enjoyed as jam, juice, and apple cider.

Other fruits grown in Numata include cherries and blueberries, which come into season in June and July, respectively, and prunes and plums, available from July to September. Grapes can be picked from August to October, persimmons in October and November, and strawberries between November and June.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沼田のフルーツ

沼田市の中心部以外を散策していると、道端に色とりどりの果物狩り農園や果樹園の看板が立っているのに出くわすだろう。果物の栽培はこの地域の主要産業だが、沼田市内に約100軒ある農園のほとんどが、直売と摘み取り料で経営しているため、沼田産の果物が市外に出回することはほとんどない。

沼田は特にリンゴの産地として知られる。1980年代から大規模に栽培されるようになった。リンゴの木は、日照時間が長く、日中と夜間の気温差が大きいこの地域の気候に適していることがわかった。農家の努力と地元の農業研究所の協力により、沼田生まれのリンゴ品種が数多く誕生した。これらの品種をはじめ、数十品種が9月から12月にかけて熟す。収穫して食べるだけでなく、ジャムやジュース、シードルとしても楽しめる。

そのほか、6月にサクランボ、7月にブルーベリー、7月から9月にかけてプルーンやブラムが出回る。ブドウは8月から10月、柿は10月から11月、イチゴは11月から6月にかけて収穫できる。

地域番号	029	協議会名	蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
029-001	八百富神社/八百富神社・および境内内神社 (宇賀神社・大国神社・千歳神社・八大龍神社・宝物)		751～	パンフレット
029-002	蒲郡クラシックホテル(旧蒲郡ホテル)/本館 (旧蒲郡ホテル本館)		751～	パンフレット
029-003	蒲郡クラシックホテル(旧蒲郡ホテル)/六角堂 (旧蒲郡ホテル聚美堂)		1～250	パンフレット
029-004	蒲郡クラシックホテル(旧蒲郡ホテル)/料亭 竹島(旧常磐館梅別館)		1～250	パンフレット
029-005	蒲郡クラシックホテル(旧蒲郡ホテル)/鶯宿亭 (旧常磐館別館茶室)		1～250	パンフレット
029-006	海辺の文学記念館/海辺の文学記念館		751～	パンフレット
029-007	蒲郡の食文化/蒲郡の食文化		751～	パンフレット
029-008	ホテル竹島/ホテル竹島		501～750	パンフレット
029-009	竹島クラフトセンター/三河木綿と機織り体験		1～250	パンフレット
029-010	藤原俊成/藤原俊成、竹島園地、俊成苑		251～500	パンフレット
029-011	蒲郡について/蒲郡について		251～500	パンフレット
029-012	蒲郡市竹島水族館/蒲郡市竹島水族館		1～250	パンフレット

029-001

Yaotomi Shrine

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 八百富神社/八百富神社・および境内内神社（宇賀神社・大国神社・千歳神社・八大龍神社・宝物）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Yaotomi Shrine

Yaotomi Shrine is a Shinto sanctuary on grounds that cover the entirety of the island of Takeshima, just off the coast of Gamagori. A 387-meter-long footbridge connects the mainland with Takeshima, where the main shrine and several sub-shrines stand amid verdant plant life. The history of Yaotomi Shrine goes back to the twelfth century, but the island is thought to have been considered sacred for far longer than that. The shrine and the island can be explored on a walking path that traverses the grounds and circles back along the rocky shore to the bridge.

A storied past

Yaotomi Shrine was founded by the courtier and poet Fujiwara no Shunzei (1114–1204) in 1181 when he was serving as governor of Mikawa Province (today, the eastern part of Aichi Prefecture). Although little is known about the early history of the shrine, one story goes that Shunzei was familiar with the similar sanctuary on the small island of Chikubushima in Lake Biwa, near the then-capital of Kyoto.

The shrine on Chikubushima was dedicated to Benzaiten, a deity associated with water and considered the protector of arts and culture. Shunzei was inspired to establish a branch of that shrine on Takeshima, and Yaotomi Shrine also came to enshrine the same deity. The name Takeshima, “bamboo island,” is thought to derive from the same story, as Shunzei is believed to have brought a pair of bamboo plants with him from Lake Biwa and planted them on the island.

The scenery of Takeshima has inspired many notable figures who came after Fujiwara no Shunzei and placed their faith in the mystical powers of the island. In 1600, Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the founder of the shogunate that ruled the

country for two and a half centuries, stopped by Takeshima to pray for luck on the battlefield. In the early twentieth century, many renowned authors, including Nobel Prize winner Kawabata Yasunari (1899–1972), visited the island while staying at the seaside Tokiwakan inn.

A selection of shrines

In addition to the main Benzaiten shrine, the grounds of Yaotomi Shrine include four sub-shrines. Uga Shrine honors the deity of commerce and food, with many devotees praying there for luck in business. Daikoku Shrine is dedicated to the deity of prosperity, who is considered a patron to merchants, farmers, and cooks. Chitose Shrine enshrines Fujiwara no Shunzei as a deity in his own right.

The last of the four is Hachidairyu Shrine, which enshrines a deity of the sea and is noteworthy for being considered the original shrine on the island. Takeshima is thought to have been worshiped as an abode of sea-related deities long before the arrival of Shunzei. This shrine, like the main Yaotomi Shrine, is also distinctive for facing north. South is generally considered the most auspicious direction for Shinto shrines to face, but the opposite arrangement may have been adopted on Takeshima so that the deities could watch over the mainland, where people live.

Grand greenery (Takeshima Island / Natural Monument)

Because Takeshima has been considered a sacred place for so long, no new trees or other plants have been introduced in centuries, and its original vegetation has been preserved. The island is almost entirely forested in warm-temperate evergreens, which contrasts starkly with the pine groves and meticulously maintained lawns across the bridge on the mainland.

Noteworthy species among the more than 230 varieties of plants on Takeshima include the *tabunoki* (*Machilus thunbergii*), a broad-leaved bay tree that can reach a height of 30 meters and towers above the rest of the forest, and the *yabunikkei* (Japanese cinnamon; *Cinnamomum yabunikkei*), whose dark-green leaves are fragrant and glossy, with three distinctive veins. The dense undergrowth is composed of several species of ferns, vines, and shrubs. *Kinokunisuge* (*Carex matsumurae*) sedge, a grass-like plant with spiky seed heads, grows under the trees. *Kinokunisuge* is more common in subtropical areas, and Takeshima is the northernmost spot on the Pacific coast of Japan where it grows.

The shrine grounds can be explored on a paved walking path that begins at the footbridge and ascends to the main shrine building. From there, it leads across the island, past the sub-shrines, and down to the oceanfront. The promenade then follows the shoreline back to the bridge. A leisurely walk around the island takes approximately 30 minutes.

A festival of floats

One of the most popular times to visit Takeshima is during the annual Yaotomi Shrine Grand Festival, which takes place on the third Saturday and Sunday in October. Highlights of the program include a dance celebrating the Seven Lucky Gods of Japanese mythology, one of whom is the deity of Daikoku Shrine on Takeshima, and a parade on the mainland with floats representing the 18 neighborhoods of Yaotomi Shrine's traditional parish.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

八百富神社

八百富神社は、蒲郡市の沖合に浮かぶ竹島に鎮座する神社である。全長387メートルの歩道橋が本土と竹島を結んでおり、緑豊かな植生の中に本殿などいくつかの神社が建っている。八百富神社の歴史は12世紀まで遡るが、島はそれよりも遥か昔から神聖視されていたと考えられている。神社と島は境内を横切り、海沿いの岩場に沿って橋まで戻る散策路で探索できる。

由緒ある過去

八百富神社は、藤原俊成（1114-1204）が三河国（現在の愛知県東部）国司を務めていた1181年に創建した。この神社の初期の歴史については確実なことが多く知られていないが、社伝によると、俊成は京都近郊の琵琶湖の小島、竹生島にある同じような神社に親しみを覚えた。

竹生島の神社は、水にまつわる神、ひいては芸術や文化の守護神とされている弁財天を祀った。俊成は竹島にその分霊を勧請したため、八百富神社の祭神も弁財天である。俊成が琵琶湖から一對の竹を持ち帰り、島に植えたと考えられている。竹島という地名も、この伝承に由来すると考えられている。

藤原俊成の後に登場した多くの著名人も竹島の風景に感銘を受け、島の神秘的な力を信じてきた。2世紀半の間、日本を支配した幕府の創始者である徳川家康（1543-1616）は、戦場での

幸運を祈願するために1600年に竹島に立ち寄った。20世紀初頭には、ノーベル賞受賞者の川端康成（1899-1972）を含む多くの著名な作家が、海辺の旅館「常磐館」に滞在しながら島を訪れた。

いくつかの神社

八百富神社の境内には本殿の弁財天のほか、4つの神社がある。「宇賀神社」は商業や食物の神を祀っており、商売繁盛を祈願する信者が多い。「大黒神社」は繁栄の神を祀っており、商人、農民、料理人の守護神とされている。「千歳神社」は藤原俊成を祭神としている。

最後の「八大龍神社」は海の神様を祀っており、竹島の元祖の神社としても知られている。竹島は俊成が来島するはるか以前から、海にまつわる神々の住まいとして信仰されていたと考えられている。この神社もまた、八百富神社本殿と同様、北を向いているのが特徴だ。一般的に神社は南向きが最も縁起が良いとされているが、竹島では人々が暮らす本土を見守るために、逆の配置が採用されたのかもしれない。

壮大な緑（竹島：天然記念物）

竹島は昔から神聖な場所とされているため、何世紀もの間、新しい樹木や他の植物が持ち込まれることがなく、本来の植生が保たれている。島全体が常緑の暖帯林に覆われており、本土の松林や橋の向こうの丹念に手入れされた芝生とは対照的だ。

230 種を超える竹島の植物の中で特筆すべき種は、高さ 30 メートルに達し、森の他の部分より高くそびえ立つ広葉樹のタブノキ（*Machilus thunbergii*）や、濃い緑色の葉に香りがあり、光沢があり、3 本の特徴的な葉脈があるヤブニツケイ（*Cinnamomum yabunikkei*）などである。数種類のシダ、つる植物、低木が密生した下草を構成している。木々の下には、キノクニスゲ（*Carex matsumurae*）という、とがった種子の頭を持つ草のような植物も生息している。キノクニスゲは亜熱帯地域に多く、日本の太平洋岸では竹島以北に生育していない。

神社の境内は歩道橋から始まる舗装された遊歩道を通して本殿まで行くことができる。そこから島を横切り、他の神社を通り過ぎ、海辺へと下っていく。遊歩道は海岸線に沿って橋まで戻る。のんびりと島を一周するのに30分ほどかかる。

山車の祭り

竹島を訪れるのに最も人気のある時期のひとつが、10月の第3土曜日と日曜日に行われる八百富神社の例大祭である。竹島の大黒神社の神を含む、日本神話や昔話に登場する七福神を祝う舞が行われ、八百富神社の18の氏子地区を代表する山車が本土を練り歩くなど。

【タイトル】 蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル）/本館（旧蒲郡ホテル本館）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Gamagori Classic Hotel

The castle-like Gamagori Classic Hotel makes a dramatic sight on a hill overlooking the island of Takeshima and Mikawa Bay. The facility was established in 1934 and has a storied history. It opened as one of the country's first government-designated hotels for international tourists and soon counted an American all-star baseball team featuring Babe Ruth among its guests. The building's distinctive architecture and furnishings have been maintained largely as they were when the hotel opened, save for the addition of modern conveniences, and provide a glimpse of life and tastes in that era. The hotel is a registered Tangible Cultural Property, as are the three annex buildings on the landscaped grounds.

A passion project

What is now the Gamagori Classic Hotel was established by Taki Nobushiro (1868–1938), a Nagoya-based businessman who made his fortune in the textile trade. The Taki family had a holiday home in Gamagori, and Nobushiro loved the landscape of Mikawa Bay. He resolved to turn Gamagori into a tourist destination, and in 1912, he opened an inn called Tokiwakan on the coast opposite Takeshima.

Taki invited famous literary figures, including Kawabata Yasunari (1899–1972), Tanizaki Junichiro (1886–1965), and Shiga Naoya (1883–1971) to stay at the Tokiwakan and write about Gamagori. Mentions in these authors' works helped spread the word about the place, and this initial success strengthened Taki's commitment to developing the Takeshima area. In the early 1930s, he financed the construction of a permanent bridge to Takeshima and built a Western-style hotel on the hill above the Tokiwakan.

Taki's decision was supported by the national government, which sought to attract

international visitors to Japan as a means of correcting the country's negative trade balance. Public financing was available for constructing Western-style hotels to accommodate foreign tourists, and Taki successfully lobbied for a portion of these funds. When his hotel opened in 1934 as the Gamagori Hotel, it was immediately designated an "international tourist hotel," which was a prerequisite for hosting guests from overseas.

Guests of honor

Only months after its opening, the Gamagori Hotel accommodated perhaps the most renowned group of international visitors in its history. In November 1934, the American Major League All-Stars baseball team used the hotel as its base for exhibition games in nearby Nagoya and Shizuoka. The team was led by the legendary Babe Ruth (1895–1948) and also included greats such as Lou Gehrig (1903–1941) and Jimmie Foxx (1907–1967). The Americans played 18 games, mainly against Japanese all-star teams, during a month-long tour of the country that attracted widespread attention and fostered goodwill between the United States and Japan at a time when political relations were strained.

Baseball diplomacy, however, could not stop the two countries from going to war, and the Japanese army requisitioned the Gamagori Hotel for use as a hospital during World War II. After the war was over, the U.S. military followed suit, turning the hotel and its surroundings into a recreational facility known as the Takeshima Rest Center. Until 1952, discharged military personnel rested and recuperated there before their journey back across the Pacific.

The hotel was renovated and reopened after the end of the U.S. Occupation, and in 1957, it hosted Emperor Showa (1901–1989) and Empress Kojun (1903–2000). Another renovation was completed in 2012, at which time it was renamed Gamagori Classic Hotel.

Views from the past

The main building was designed to appeal to visitors from abroad and incorporates elements of traditional Japanese temple and castle architecture, such as decorative gables, sweeping eaves, and tower-like extensions. The rooms and restaurants look out over the grounds toward Takeshima and Mikawa Bay and retain many of their original design features. These include Art Deco furnishings such as chandeliers and a flower-

themed elevator dial in the lobby, marble windowsills, and bronze detailing. In particular, the Royal Suite room and the hotel's main dining room evoke the atmosphere of the 1930s.

The main building is a registered Tangible Cultural Property, as are the three annex buildings. Two of these, The Cove and Oshukutei, were built in 1916 as part of the Tokiwakan inn, which was demolished in 1982. The third is the Rokkakudo, a six-sided structure from 1936 that was originally a waiting room for the Oshukutei teahouse.

The Gamagori Classic Hotel is one of the nine members of the Japan Classic Hotels Association. Member hotels were established prior to World War II and have been designated for preservation due to their cultural and/or architectural significance.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒲郡クラシックホテル

竹島と三河湾を見下ろす高台に、お城のような佇まいの蒲郡クラシックホテルがある。1934年創業のこのホテルは、国内初の「国際観光ホテル」（外国人観光客向け政令指定ホテル）として開業し、すぐにベーブ・ルースを擁するアメリカのオールスター野球チームを宿泊させたという由緒ある歴史を持つ。建築的に特徴的な建物や調度品は、近代的な設備を加えた以外は、その多くが開業当時のまま維持されており、当時の生活や嗜好を垣間見ることができる。ホテルの本館と敷地内にある3棟の別館とともに国の登録有形文化財になっている。

情熱のプロジェクト

現在蒲郡クラシックホテルとして知られるホテルは、織物商で財を成した名古屋の実業家、滝信四郎（1868-1938）によって設立された。滝家は蒲郡に別荘を持っており、信四郎は三河湾の風景が気に入っていた。蒲郡をより有名な観光地にすることを決意した彼は、1912年、竹島の対岸に旅館「常盤館」を開業した。

滝は川端康成（1899-1972）、谷崎潤一郎（1886-1965）、志賀直哉（1883-1971）ら著名な文学者を常盤館に招き、蒲郡について執筆を依頼した。これらの作家の作品に紹介されたことで蒲郡は広く知られるようになり、この成功によって、滝は竹島地域の開発への決意を固めた。彼は1930年代初めに竹島への恒久的な橋の建設に資金を提供し、常盤館の上の丘に西洋式ホテルを建設した。

滝の決断は政府によって支持された。政府は日本の貿易収支のマイナスを是正する手段として外国人観光客を日本に呼び込もうとした。外国人観光客を受け入れるための西洋式ホテル建設に公的資金が提供されることになり、滝はその資金の一部を得るための陳情に成功した。1934年に「蒲郡ホテル」として開業すると、すぐに海外からの客を受け入れるための条件である「国際観光ホテル」指定を受けた。

名誉あるゲストたち

蒲郡ホテルは開業からわずか数ヶ月で、おそらくその歴史の中で最も有名な海外からの訪問者たちを宿泊させた。1934年11月、アメリカ大リーグのオールスターズ野球チームが、名古屋と静岡で行われたエキシビジョンゲームの拠点としてこのホテルを利用したのだ。伝説的なベーブ・ルース（1895-1948）を筆頭に、ルー・ゲーリッグ（1903-1941）、ジミー・フォックス（1907-1967）といった名選手も参加した。アメリカ人選手たちは主に日本のオールスターチームと1ヶ月間の遠征中に18試合を行い、大きな注目を集め、政治的関係が緊張していた当時の日米間に親善をもたらした。

しかし、野球外交は日米の戦争を止めることはできず、日本軍は第二次世界大戦中、蒲郡ホテルを病院として使用するために接収した。戦後、米軍はホテルとその周辺をレクリエーション施設にした。竹島レストセンターとして知られるこの施設は1952年まで使用され、除隊した軍人が太平洋を横断する前に休息し、回復する機会を提供した。

アメリカの占領が終わるとホテルは再開・改装され、1957年には昭和天皇（1901-1989）と香淳皇后（1903-2000）をお迎えした。さらに2012年には改装が完了し、蒲郡クラシックホテルとしてリニューアルオープンした。

過去への眺め

本館は海外からの観光客にアピールするために設計され、飾り破風、突き出た軒、塔のような部分など、日本の伝統的な寺院建築や城郭建築の特徴が取り入れられている。客室やレストランからは竹島や三河湾を見渡すことができ、当時の面影を色濃く残している。ロビーにあるシャンデリアや花をモチーフにしたエレベーターの指針盤、大理石の窓枠、ブロンズの装飾など、アール・デコ調の調度品もオリジナルだ。特にロイヤルスイートルームとホテルのメインダイニングルームは、1930年代の雰囲気を出している。

本館は3つの別館とともに登録有形文化財になっている。別館の2つ、「THE COVE」と「鶯宿亭」は1916年に旅館「常磐館」（1982年に取り壊された）の一部として建てられたものである。また、1936年に建てられた「六角堂」もあり、元々は「鶯宿亭」の待合室だった。

蒲郡クラシックホテルは日本クラシックホテルの会に加盟する9つのホテルのうちのひとつである。この会は、第二次世界大戦以前に設立され、文化的および／または建築的な重要性から保存指定を受けているホテルの協会である。

029-003

Rokkakudo at Gamagori Classic Hotel

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル）/六角堂（旧蒲郡ホテル聚美堂）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Rokkakudo at Gamagori Classic Hotel

The Rokkakudo (lit, “hexagonal hall”) was built in 1936 as an annex to the Gamagori Hotel, which had opened two years prior. The single-story wooden building was originally used as a waiting room and souvenir shop for guests participating in tea gatherings in the nearby Oshukutei teahouse.

Rokkakudo was designed to evoke a hall of a Buddhist temple and has an ornate roof covered with blue-glazed tiles. The roof’s six triangular sections curve gently toward the apex, where the whole is crowned with a decorative element in the shape of a wish-granting jewel (*hoju*). A stylized pine tree motif adorns the base of the roof, some decorative tiles, and the building’s nail covers. This symbol was the logo of the Tokiwakan, a historic inn that stood on the hotel grounds until 1982.

Rokkakudo was renovated and reopened as a steakhouse in 1987, with counter seating in a half circle in front of a teppanyaki griddle. The building is located by the path between the hotel’s main gate and main entrance. It is a registered Tangible Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒲郡クラシックホテル 六角堂

六角形の六角堂は、その2年前に開業した蒲郡ホテルの別館として1936年に建てられた。木造平屋建てのこの建物は当初、近くの茶室「鶯宿亭」の茶会に参加する客の待合室や土産物屋として使われていた。

六角堂は仏堂をイメージして設計され、瑠璃瓦で覆われた豪華な屋根を持つ。屋根は緩やかなカ

ーブを描く三角形で構成され、願い事を叶える宝珠をかたどった装飾が屋根の頂点にある。松葉をかたどったシンボルマークは、屋根の基部、一部の装飾瓦、建物の釘隠にあしらわれている。このシンボルマークは、1982年までホテルの敷地内にあった歴史ある旅館「常磐館」のロゴマークだった。

六角堂は1987年に改装され、鉄板の前に半円形のカウンター席を設けたステーキハウスとして再オープンした。建物はホテルのメインゲートと正面玄関の間の道路に面している。国の登録有形文化財である。

029-004

The Cove

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル） / 料亭竹島（旧常磐館梅別館）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Cove

This single-story wooden structure was built in 1916 as an annex to the Tokiwakan inn, a predecessor of the Gamagori Classic Hotel. Guests of the seaside inn had the option of staying in this building, which is situated on a hill overlooking the coast, just north of where the main building of the Tokiwakan was located.

The guest rooms were built in the *sukiya-shoin* style, which incorporates elements of teahouse architecture into the Zen-inspired *shoin* style found in traditional Japanese-style rooms in both homes and inns. *Sukiya-shoin* style is characterized by exposed, unpainted timbers and earthen walls in muted colors, as well as tokonoma alcoves to display decorative objects, sliding fusuma paper panels to let in light, and tatami-mat floors.

The building is a registered Tangible Cultural Property. In recent years it housed the Ryotei Takeshima restaurant, and guests have been able to stay the night in it since 2025.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

THE COVE

この木造平屋建ての建物は1916年に遡り、蒲郡クラシックホテルの前身である旅館「常磐館」の別館として建てられた。海辺の旅館の宿泊客は、常磐館の本館があった場所のすぐ北、海岸を見下ろす高台にあるこの建物に泊まることができた。

客室は数寄屋風書院造りで、禅の影響を受けた書院造りに茶室建築の要素を取り入れたものだ。数寄屋風書院造りの特徴は、目に見える無塗装の木材や淡い色調の土壁、装飾品を飾る床の

間、光を取り入れる襖、畳敷きの床などである。

建物は登録有形文化財で、近年は「料亭竹島」として使われてきたが、2025年から宿泊施設「THE COVE」になっている。

029-005

Oshukutei

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル） / 鶯宿亭（旧常磐館別館茶室）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Oshukutei

This former teahouse dates to 1916. For decades, it was used mainly to host tea gatherings for guests of the Tokiwakan inn and the Gamagori Hotel (now the Gamagori Classic Hotel). Guests would wait in the six-sided Rokkakudo building nearby before joining a tea gathering in the Oshukutei, which is divided into a small tea room (*chashitsu*) and a larger waiting room. The larger room could also be used for overnight stays and has a large window looking out toward Mikawa Bay.

The waiting room is in the *sukiya-shoin* style, in which aspects of teahouse architecture, such as unfinished log surfaces and rustic-style clay-plastered walls, are combined with the orthodox elements of Japanese-style rooms, including a decorative tokonoma alcove, sliding paper screens, and tatami flooring. The much smaller and more austere tea room is distinguished by its low door through which guests would crawl when entering from the garden. This design obliged samurai to remove their swords to attend a tea gathering and has remained a feature of teahouse architecture into the present.

The Oshukutei is a registered Tangible Cultural Property. Guests have been able to stay the night in the building since 2025.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鶯宿亭

1916年に建てられたこの茶室は、常磐館の旅館や蒲郡ホテル（現・蒲郡クラシックホテル）の宿泊客をもてなすために数十年間使われていた。小さな茶室と、宿泊にも使えるより大きな待合室に分かれており、待合室の大きな窓から三河湾を眺めることができる。ここでの茶会に参加する前に、

客は近くの六角堂で待っていた。

待合室は数奇屋風書院造りで、丸太の表面や土塗りの壁といった茶室建築の様式と、床の間や障子、畳といった和室のオーソドックスな要素が組み合わされている。より小さく、より厳かな茶室は、庭から入るときに這うように入る低い扉が特徴的だ。このデザインは、もともと武士が茶会に出席する際に刀を抜かざるをえないという意図のもので、現在に至るまで茶室建築の特徴として残っている。

鶯宿亭は登録有形文化財である。2025年から宿泊施設になっている。

【タイトル】 海辺の文学記念館/海辺の文学記念館

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Seaside Literary Memorial Museum

Exhibits at the Seaside Literary Memorial Museum explain how Gamagori became a popular holiday resort for noted writers in the early twentieth century. The story revolves around the Tokiwakan inn, which opened in 1912 on the beachfront site currently occupied by the museum, and the inn's founder, Taki Nobushiro (1868–1938), a Nagoya businessman who played a key role in turning Gamagori into a tourist destination. On display at the museum are artifacts and documents from the Tokiwakan and the Gamagori Hotel (now the Gamagori Classic Hotel), a reproduction of a room at the Tokiwakan, and panels detailing the lives and works of authors who stayed at the inn, including Nobel Prize winner Kawabata Yasunari (1899–1972), Tanizaki Junichiro (1886–1965), and Shiga Naoya (1883–1971).

Leisure and literature

The association between Gamagori and some of the most famous literary figures in the country came about through the efforts of wealthy textile trader Taki Nobushiro. Taki established the Tokiwakan inn on the coast of Mikawa Bay opposite the island of Takeshima. It was the site of his family's holiday home and a place he had loved since childhood.

Gamagori was already well-known regionally as a travel destination, but Taki wanted to advertise the area to a nationwide audience. He came up with the idea of inviting high-profile authors to stay at the Tokiwakan, with the condition that they would then write about Gamagori, Takeshima, and the inn in their works. This strategy proved successful. Following the opening of the Tokiwakan, writers including Kawabata, Tanizaki, Shiga, Kikuchi Kan (1888–1948), Yamamoto Yuzo (1887–1974), and Inoue Yasushi (1907–1991) stayed at the inn and wrote about the Takeshima area

in numerous novels, short stories, and poems.

Some of these works include Kawabata's short story *Roba ni noru tsuma* (Wife Riding a Donkey), which centers on a horse-riding ring built next to the Tokiwakan to entertain guests, and Tanizaki's *Sasameyuki* (*The Makioka Sisters*), in which one of the titular siblings visits Gamagori and stays at the Tokiwakan after an unsatisfying encounter with a prospective groom.

The museum

The Tokiwakan was dismantled in 1982, but its legacy and atmosphere live on at the Seaside Literary Memorial Museum, which opened in 1997 on the site of the inn. The structure is a reproduction of a single-story wooden building from 1910 that was used as a clinic in central Gamagori.

Inside, explanatory panels tell the stories of the writers who stayed at the Tokiwakan and highlight their works that feature the inn and the surrounding area. Attached to the museum building is a reproduction of a room at the Tokiwakan, decorated to look as it did when Tanizaki Junichiro stayed there in August 1927. The tatami-mat room has shoji panels that open to reveal a view of Takeshima directly across the water.

Also on display at the museum are artifacts of the Gamagori Hotel and its annexes, including ornate wooden carvings that once decorated the exterior of the six-sided Rokkakudo building near the hotel entrance. Another section of the museum has special exhibitions on Gamagori, Takeshima, and the history of the Tokiwakan and the Gamagori Hotel.

The museum's "Time Letters" program encourages visitors to write down a message or memory related to their time in Gamagori and have the letter mailed to an address of their choice (in Japan) on a date between two months to ten years after visiting the museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

海辺の文学記念館

海辺の文学記念館では、蒲郡が20世紀初頭に著名な作家たちの保養地として人気を集めるようになった経緯が展示されている。1912年に現在記念館がある海辺に開業した旅館「常磐館」と、

その創業者で蒲郡を観光地として発展させるのに重要な役割を果たした名古屋の実業家、滝信四郎（1868-1938）を中心に物語が展開する。館内には常磐館と蒲郡ホテル（現・蒲郡クラシックホテル）にまつわる遺品や資料、常磐館の客室の再現、ノーベル賞作家の川端康成（1899-1972）、谷崎潤一郎（1886-1965）、志賀直哉（1883-1971）など、常磐館に滞在した作家たちの生涯や作品を紹介するパネルなどが展示されている。

レジャーと文学

蒲郡と日本を代表する文人たちとの交流は、滝信四郎の努力によってもたらされた。裕福な織物商であった彼は、実家の別荘地であり、幼い頃から愛していた三河湾に浮かぶ竹島の対岸に旅館「常磐館」を構えた。

当時、蒲郡はすでに旅行先としてよく知られていたが、滝はこの地を全国に宣伝したいと考えた。そこで彼は、著名な作家を常磐館に招待し、彼らが蒲郡や竹島、そして常磐館のことを作品に書くことを条件に、常磐館に宿泊してもらうことを思いついた。この作戦は成功し、常磐館のオープンから、川端、谷崎、志賀、菊池寛（1888-1948）、山本有三（1887-1974）、井上靖（1907-1991）などの作家が旅館を訪れ、数多くの小説、短編小説、詩などで竹島を取り上げた。

川端の短編『驢馬に乗る妻』は、常磐館に隣接して客をもてなすために作られた乗馬場を中心とした作品である。一方、谷崎の『ささめ雪』では、中心的な登場人物の姉妹の一人が蒲郡を訪れ、花婿候補との満足のいかない出会いの後、常磐館に滞在する場面が描かれている。

記念館

常磐館は1982年に解体されたが、その名残と雰囲気は、1997年に旅館の跡地にオープンした海辺の文学記念館に受け継がれている。この記念館は、1910年に蒲郡の中心部に建てられた、もともとは診療所として使われていた木造平屋建ての建物を竹島海岸に模倣・復元された建造物に入っている。

館内には常磐館に滞在した作家たちのエピソードや、常磐館やその周辺を題材にした作品を紹介する解説パネルが展示されている。1927年8月に谷崎潤一郎が宿泊した当時の様子を再現した常磐館の部屋もある。畳の部屋には障子があり、障子を開けると対岸の竹島が見える。

また、蒲郡ホテルとその別館にまつわる品々も展示されている。その中には、ホテルの入り口近くにある六角堂の外観をかつて飾った豪華な木彫りなどもある。また、蒲郡、竹島、常磐館と蒲郡ホテルの歴史にまつわるテーマを取り上げた特別展も開催されている。

記念館の「時手紙」は、蒲郡で過ごした思い出やメッセージを書くと、来館から2ヶ月～10年後の

好きな日に、希望の住所（日本国内）に郵送してもらえるというもの。

【タイトル】 蒲郡の食文化/蒲郡の食文化

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Food Culture in Gamagori

The coastal location and natural environment of Gamagori have fostered a vibrant culinary culture. The city is on the coast of the sheltered and shallow Mikawa Bay, the source of a diverse array of seafood and the home of the only deep-sea fishing fleet in the region. On land, a crescent-shaped range of low mountains borders the city on three sides, contributing to a mild and sunny climate considered ideal for growing fruit such as mandarin oranges and strawberries. The Gamagori area is also a major producer of Mikawa beef, a well-regarded local brand of wagyu. Dishes made with locally sourced ingredients are served at a wide range of restaurants in the Takeshima area, including those on the premises of the Gamagori Classic Hotel and Hotel Takeshima.

Bounty of the sea

The calm waters and sandy shores of Mikawa Bay provide a favorable habitat for the *asari* (Japanese littleneck) clam, a roughly 4-centimeter-long burrowing bivalve that figures prominently in the food culture of Gamagori. In late spring and early summer, large crowds descend on the Takeshima shore to dig for these clams. Although they are fairly common throughout the country, nowhere are the clams found in greater numbers than in Mikawa Bay, the source of approximately 48 percent of all *asari* caught in Japan. *Asari* are often used as an ingredient in miso soup, but in Gamagori, they are paired with thick udon noodles, wakame seaweed, and a seafood broth in a popular dish called Gamagori Udon.

On the other hand, deeper waters beyond the bay are the source of many less familiar types of seafood eaten in Gamagori. The city's four-vessel deep-sea fishing fleet, the only one of its kind in Aichi Prefecture, provides a steady supply of fish such

as *mehikari* (bigeyed greeneye), named for its striking green eyes and treasured for its soft white flesh, and *nigisu* (deep-sea smelt), which has a thin, elongated body and blueish flesh with a short window of freshness, and is thus rarely eaten outside of areas where it is fished. Two other deep-sea species considered delicacies are *akaza-ebi*, a prawn-like small lobster that grows up to 25 centimeters long and has soft, mildly sweet flesh with a softer texture than the more common *Ise-ebi* (Japanese spiny lobster), and *takaashi-gani* (Japanese spider crab), the largest crustacean on Earth, which can have a leg span of up to 3.8 meters. Deep-sea fish can generally be ordered at restaurants around Gamagori as sashimi, grilled, or deep-fried, but catches are relatively small, and not all species are available at all times.

Brand-name beef

Mikawa beef is a brand of wagyu noted for its tenderness. It is produced in the part of Aichi Prefecture that includes Gamagori. Although the brand originated in 1990, raising cattle for beef has a long history in the area. Meat designated as Mikawa beef must come from cattle raised on one of nearly 60 certified farms in Mikawa and be graded 4 or 5 on Japan's five-tier quality grading scale. Mikawa beef is commonly eaten as steak or thinly sliced in sukiyaki and shabu-shabu.

Fun with fruit

Fruit farming in Gamagori benefits from the area's comparatively warm climate and ample sunshine. Warm ocean winds blow in from the south year-round, part of a climate that nourishes fruit such as *mikan* mandarins, strawberries, grapes, and melons. Gamagori is noted particularly for the *mikan* grown in the hills around the city, including Gamagori Orange Park, where mandarins can be picked to eat right away or take home from October to December. Strawberries are available at the Orange Park from January to May, melons from June to late September, and grapes from late June to mid-September.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒲郡の食文化

沿岸に位置し、恵まれた自然環境のもと、蒲郡市は活気ある食文化を育んできた。市は遠浅の三河湾に面し、多様な魚介類が水揚げされるほか、この地域では唯一の深海漁業も盛んである。

また、三日月形の低山が三方を囲み、温暖で日照に恵まれた気候は、みかんやいちごなどの果物の栽培に適している。さらに、蒲郡周辺はブランド和牛「みかわ牛」の産地でもある。蒲郡クラシックホテルやホテル竹島の館内レストランをはじめ、竹島エリアにはさまざまなレストランがあり、地元の食材を使った料理を味わうことができる。

海の幸

三河湾の穏やかな海と砂浜は、蒲郡の食文化に欠かせない体長4センチほどのアサリの生息地である。晩春から初夏にかけて、このアサリを掘るために大勢の人が竹島の海岸に押し寄せる。アサリは全国的にかなり一般的な貝だが、三河湾ほど多くのアサリが獲れる場所は少なく、日本で漁獲されるアサリの約48%がここで獲れるのだ。あさは味噌汁の具として使われることが多いが、蒲郡では太めの麺であるうどん、ワカメ、魚介類のだし汁と一緒に「ガマゴリうどん」と呼ばれるポピュラーな料理で食べることができる。

一方、湾の向こうの深海では、蒲郡ではよく食べるが一般にあまり馴染みのない種類の魚介類が獲れる。愛知県で唯一の4隻の深海漁船団が、緑色の目が印象的で白身の柔らかさが珍重されるメヒカリや、細長い体と青みがかった身が特徴で鮮度落ちが早く、漁場以外ではめったに食べられないギスなどを安定供給している。また、アカザエビとタカアシガニも珍味とされている。アカザエビは体長25センチほどの小さめのロブスターで、一般的なイセエビに比べ、身がやわらかく、やさしい甘みがある。タカアシガニもやさしい甘みを持ち、そして鋏脚を広げると3.8メートルまで達することがある世界一大きなカニである。深海魚は蒲郡市内の飲食店で刺身、塩焼き、フライなどで注文できるが、漁獲量が比較的少なく、種類によってはいつでも手に入るとは限らない。

ブランド牛

蒲郡市を含む愛知県の地域は、特にその柔らかさで知られるブランド和牛「みかわ牛」の産地である。このブランドが確立されたのは1990年のことだが、この地域で和牛を飼育する歴史は古い。三河にある60に近い認定牧場で飼育された牛のうち、日本の5段階肉質等級で4または5の等級に格付けされたものだけがみかわ牛と認定される。みかわ牛はステーキやすき焼き、しゃぶしゃぶなどの料理で食べられている。

果物の楽しみ

蒲郡の果樹栽培は、比較的温暖な気候と豊富な日照量の恩恵を受けている。一年中、南の海から暖かい風が吹き込み、みかん、いちご、ぶどう、メロンなどの果物に栄養を与えている。市街地周辺の丘などに栽培されているみかんが特に有名で、「蒲郡オレンジパーク」では10月から12月にかけてみかん狩りができる。またオレンジパークでは1月から5月までいちご、6月から9月下旬までメロン、6月下旬から9月中旬までぶどうが収穫できる。

【タイトル】 ホテル竹島/ホテル竹島

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Hotel Takeshima

Hotel Takeshima is a spa resort overlooking the island of Takeshima and Mikawa Bay. All guest rooms have ocean views, as do the hotel's indoor and open-air hot-spring baths. Guests can choose from nine types of rooms, including tatami-mat rooms in which futon mattresses are laid out at night, Western-style rooms with beds, and combinations of the two styles. On the culinary front, Hotel Takeshima is noted for its commitment to serving the local cuisine of Gamagori at its restaurants, including deep-sea fish and Mikawa beef.

Location

Hotel Takeshima is a short walk from the oceanfront and the footbridge to Takeshima. Directly outside the hotel are the Shunzeien garden and the Takeshima Craft Center, a facility focused on the history of the area's textile industry and Mikawa cotton, a type of striped weave associated with Gamagori. Due east and uphill from Hotel Takeshima is the Gamagori Classic Hotel and its landscaped grounds dotted with historic structures.

Hot springs

For many guests, the main draw at Hotel Takeshima is the hot-spring baths. The hotel is located in the center of Gamagori Onsen, a cluster of hot springs that is one of four resorts of its kind in the vicinity. The other three are Miya Onsen to the east of Gamagori, Katahara Onsen in the foothills of Mt. Sangane, and Nishiura Onsen on the tip of the Nishiura Peninsula, southwest of the Takeshima area.

Several of the rooms at Hotel Takeshima have private open-air baths, and all

guests are welcome to use the shared bathing facilities. These encompass a spacious indoor tub with water that is clear, virtually odorless, and alkaline, set in front of a picture window looking out over Takeshima and Mikawa Bay, and an open-air version with an equally picturesque view and water with a low (and perfectly safe) concentration of natural radon. The water in both tubs is suitable for bathers with sensitive skin, with properties that make the skin feel smooth and silky after bathing.

Dining

Local ingredients have pride of place at Hotel Takeshima's two restaurants: the traditional Japanese restaurant Tokiwa and the French-style Rivage. Seafood dishes include the deep-sea catch that Gamagori is famous for, including sashimi, grilled and simmered fish dishes, *akaza-ebi* lobster, and soft and mellow *mehikari* (bigeyed greeneye). Mikawa beef, a local brand of wagyu, is offered as shabu-shabu and steak, and local fruit and vegetables also feature prominently on the menu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ホテル竹島

ホテル竹島は竹島と三河湾を望む温泉宿でリゾートホテル。客室は全室オーシャンビューで、温泉は内湯と露天風呂がある。夜は布団を敷く畳の部屋、ベッドのある洋室、2つのスタイルを組み合わせた部屋など、9つのタイプから選ぶことができる。レストランでは、蒲郡の料理として有名な深海魚やみかわ牛を使った料理が味わえる。

ロケーション

ホテル竹島は竹島への歩道橋がかかる海沿いから歩いてすぐの場所にある。ホテルのすぐ外には俊成苑や、蒲郡の織物産業や三河木綿について学ぶことができる竹島クラフトセンターがある。ホテル竹島から東へ坂を上ると蒲郡クラシックホテルがあり、その敷地内には歴史的建造物が点在している。

温泉

ホテル竹島の最大の魅力は温泉である、という人も多いだろう。近隣にある4つの温泉地のひとつを構成している蒲郡温泉の中心に位置している。他の3つは、蒲郡の東にある三谷温泉、三ヶ根山のふもとにある形原温泉、そして竹島エリアの南西、西浦半島の先端にある西浦温泉だ。

ホテル竹島のいくつかの客室にはプライベート露天風呂がついているほか、宿泊客は誰でも共同浴場を利用することができる。竹島と三河湾を見渡す大きな窓の前にある、無色透明、無臭、アルカリ性単純泉の広々とした内湯と、同じように絵になる眺めの、天然ラドンの濃度が低い（安全性が高い）露天風呂がある。どちらの浴槽のお湯も敏感肌の入浴者にも適しており、その特性により、入浴後は肌がスムーズになり、少しスベスベになる。

レストラン

ホテル竹島の2つのレストラン、伝統的な和食レストラン「日本料理 常磐」とフレンチスタイルの「レストランリヴァージュ」では、地元の食材が自慢だ。刺身、焼き物、煮物など、蒲郡の名産である深海の幸を使った料理が多く、アカザエビやまろやかなメヒカリなどが提供されている。地元のブランド和牛であるみかわ牛はしゃぶしゃぶやステーキで楽しめるほか、地元の果物や野菜もよくメニューに登場する。

【タイトル】 竹島クラフトセンター/三河木綿と機織り体験

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Mikawa Cotton and the Takeshima Craft Center

Gamagori's association with cotton is said to go back to antiquity, and the cotton fabric and garment industry was the lifeblood of the area for centuries. This history is on display at the Takeshima Craft Center, where traditional textile-making techniques can also be experienced.

According to ancient chronicles, the cotton plant was introduced to Japan in the eighth century when a ship carrying a traveler from the Indian subcontinent washed ashore in what is now the municipality of Nishio, just west of Gamagori. The cotton seeds carried by this visitor are said to have provided the impetus for the first attempts to grow the plant in Japan. Domestic cotton cultivation did not take off until the sixteenth century, but when it did, the Mikawa area (the eastern half of today's Aichi Prefecture, including Gamagori) quickly established itself as a major producer.

The local cotton industry flourished from the seventeenth century when cotton garments became affordable enough to be widely worn by ordinary people. Mikawa cotton and the distinctive striped pattern used by local textile-makers garnered acclaim during the Meiji era (1868–1912). In Gamagori, the height of textile production came during the years immediately following World War II, when factories and workshops in and around the city turned out textiles and garments at a rapid pace to meet nationwide demand for affordable fabric.

Although the textile industry is no longer a significant economic factor in Mikawa, the heritage and traditional process of cotton production remain a source of local pride. This legacy can be explored at the Takeshima Craft Center, where instructors offer a step-by-step class in making a cotton drink coaster with Mikawa techniques. Participants learn how to separate cotton fiber from seed cotton, how to turn the cotton into thread, and how to weave their coaster on a traditional hand-operated loom.

The Takeshima Craft Center is located in the Shunzeien garden near Hotel Takeshima and the bridge to the island of Takeshima.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

三河木綿と竹島クラフトセンター

蒲郡と木綿との関わりは古代にまで遡るといわれ、織物産業は何世紀にもわたってこの地域の生命線だった。竹島クラフトセンターでは伝統的な織物技術を体験しながら、その歴史を学ぶことができる。

古記録によると、綿花が日本に伝来したのは8世紀のこと。インド亜大陸からの旅人を乗せた船が、現在の西尾市（蒲郡のすぐ西）に漂着した。この旅人が運んできた綿花の種が、日本で初めて綿花栽培を試みるきっかけになったと言われている。国内での綿花栽培が本格化したのは16世紀に入ってからだが、三河地方（現在の愛知県の東半分、蒲郡市を含む）はすぐに一大産地としての地位を確立した。

蒲郡の木綿産業は、木綿の衣服が手ごろな価格で庶民に普及した17世紀以降に盛んになった。明治時代（1868年～1912年）には三河木綿と地元の織物職人による独特の縞模様が高い評価を得たが、蒲郡で織物生産の頂点に達したのは第二次世界大戦後の数年間で、手ごろな価格の織物を求める全国的な需要に応えるため、市内外の工場や工房が猛烈な勢いで織物や衣料品を生産した。

繊維産業はもはや三河の重要な経済的存在ではないが、木綿生産の伝統と伝統的な工程は地元の誇りの源泉であり続けている。竹島クラフトセンターではインストラクターが三河の技法を使ったコースター作りを段階的に教えてくれる。参加者は種綿から綿繊維を分離する方法、綿を糸にする方法、そして伝統的な手織り機でコースターを織る方法を学ぶ。

竹島クラフトセンターはホテル竹島と竹島に渡る橋の近くにある俊成苑に位置する。

029-010

Fujiwara no Shunzei and Shunzeien

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 藤原俊成/藤原俊成、竹島園地、俊成苑

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Fujiwara no Shunzei and Shunzeien

A statue of the courtier and poet Fujiwara no Shunzei (1114–1204) watches over the waterfront garden of Shunzeien and the island of Takeshima in the distance. The prominent location of the monument reflects his importance in the early history of Gamagori and the Takeshima area. Shunzei is considered the founder of Gamagori and was also responsible for establishing Yaotomi Shrine on Takeshima.

What is now the city of Gamagori was historically part of Mikawa Province, which corresponds to the eastern half of today's Aichi Prefecture. Shunzei was born into an influential aristocratic family that held a number of hereditary administrative posts. He governed Mikawa from 1145 to 1149, during which time he was instrumental in developing the settlement that became Gamagori.

According to legend, Shunzei was enamored by the landscape of Takeshima, which he thought resembled a sacred island in Lake Biwa near Kyoto that he had often visited. This association inspired Shunzei to establish a shrine on Takeshima to Benzaiten, a deity of the arts who was also worshiped on the island in Lake Biwa. Benzaiten is still honored on Takeshima, as is Shunzei, who is now enshrined as a deity at the Chitose sub-shrine.

Shunzei's achievements as a poet are commemorated in the Shunzeien garden, where signs display selections from his considerable oeuvre of *waka* poetry. Many of Shunzei's older relatives were notable poets, and he began writing his own poetry at a young age. He became a well-regarded practitioner of *waka*, a poetic form in which each poem has 31 syllables grouped into five units of 5-7-5-7-7. Later in life, he was commissioned to compile a court anthology of poetry, one of the highest honors for a poet.

Shunzei completed his anthology, the twenty-volume *Senzai wakashu* (Collection

of a Thousand Years), in 1188. He lived until the age of 90 and saw his son, Fujiwara no Teika (1162–1241), grow up to become a celebrated poet in his own right. Teika eventually surpassed his father in artistic influence and is traditionally considered one of the greatest masters of *waka*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藤原俊成と俊成苑

水辺の俊成苑と遠くに見える竹島を見守るのは、公家であり歌人でもあった藤原俊成（1114-1204）の像だ。像の目立った配置は蒲郡と竹島エリアの初期の歴史における彼の重要性を反映している：俊成は蒲郡の開拓者とされ、竹島に八百富神社を建立した者でもある。

現在の蒲郡市は、歴史的には現在の愛知県の東半分に対応する三河国に属していた。多くの官職を持つ有力公家に生まれた俊成は、1145年から1149年まで三河を国司として治め、その間に蒲郡となる集落の開発に貢献した。

伝承によると俊成は竹島の風景に魅了され、京都に近い琵琶湖に浮かぶ、よく訪れたことのある神聖な島に似ていると思ったという。この連想から、俊成は竹島に芸術の神様であり、琵琶湖の島でも祀られた弁財天を祀る神社を建てることを思いついた。弁財天は現在も竹島に祀られており、千歳神社では俊成自身が祭神として祀られている。

歌人としての俊成の功績は俊成苑で讃えられ、看板には俊成が生涯に詠んだ和歌が掲げられている。俊成の年長の親戚には著名な歌人が多く、彼は若い頃から自分で歌を詠み始めた。31音を5-7-5-7-7の5行にまとめた「和歌」を詠み、和歌の名手として知られるようになった。後年、歌人として最高の栄誉のひとつである勅撰和歌集の編纂を任された。

俊成は1188年、全20巻からなる『千載和歌集』を完成させた。彼は90歳まで生き、息子の藤原定家（1162-1241）が歌人として名声を得るまで成長するのを見届けた。定家はやがて芸術的影響力で父を凌駕し、伝統的に和歌の最も偉大な巨匠の一人とみなされている。

029-011

Welcome to Gamagori

蒲郡市竹島エリア多言語解説協議会

【タイトル】 蒲郡について/蒲郡について

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Welcome to Gamagori

The seaside city of Gamagori in central Aichi Prefecture is a leisure destination noted for its scenery. Its location on Mikawa Bay is approximately 45 minutes by train from Nagoya. Among the most famous sights in the area is **Takeshima**, a small island connected to the mainland by a 387-meter footbridge. The bridge leads to the torii gate of the twelfth-century **Yaotomi Shrine**, whose forested grounds cover the entirety of the island. Surrounding the mainland end of the bridge is a resort area with two prominent hotels, hot-spring baths, an aquarium, a park, museums, a long beachside promenade, and restaurants and cafés serving local specialties such as seafood from Mikawa Bay. The Takeshima area is part of Mikawa-wan Quasi-National Park.

The reputation of Gamagori and Takeshima as places for relaxation and sightseeing dates back to the early twentieth century, when the Nagoya-based businessman Taki Nobushiro (1868–1938) built an inn on the coast near Takeshima. Famous authors, including Tanizaki Junichiro (1886–1965) and Nobel Prize winner Kawabata Yasunari (1899–1972), came to stay at Taki’s inn, the Tokiwakan, where they enjoyed the calm waters, beaches, and hot springs of Gamagori. Their example and writings have inspired many to spend their vacations in the Takeshima area.

The Tokiwakan has been replaced by a museum focused on the aforementioned literary figures, but guests who would like to sense the heritage of the area on an overnight stay can reserve a room at the historic **Gamagori Classic Hotel**. Located on a hill overlooking Takeshima and Mikawa Bay, the hotel opened in 1934 as the Gamagori Hotel, and its castle-inspired main building and three annexes on the grounds have been designated for preservation. The other distinguished hotel near Takeshima is the seafront **Hotel Takeshima**, which is noted for its ocean views and hot-spring baths.

Next to the Hotel Takeshima is the **Takeshima Aquarium**. It highlights the sea

life in Mikawa Bay and beyond, with a particular focus on deep-sea fish. Gamagori is the home port of the only deep-sea fishing fleet in Aichi Prefecture, and fish from depths as low as 700 meters figure prominently in the city's cuisine, which also incorporates local ingredients such as seafood from shallower waters, high-quality beef, and fruit.

Shunzeien is a small park near the footbridge to Takeshima that commemorates courtier and poet Fujiwara no Shunzei (1114–1204). Shunzei established Yaotomi Shrine on Takeshima as well as the settlement that would become Gamagori while serving as governor of the area. Near a statue of Shunzei in the park is the **Takeshima Craft Center**, where one can learn about the long history of textile and garment production in Gamagori and try out traditional textile-making techniques.

Just beyond Takeshima is the larger, uninhabited island of **Mikawa Oshima**, where temporary restaurants and shops open in summer to cater to beach-goers. Mikawa Oshima is accessible by boat from a pier next to the Takeshima Aquarium. There are also several other beaches on the outskirts of Gamagori and on the Nishiura Peninsula to the west.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒲郡について

愛知県中部に位置する蒲郡市は風光明媚な観光地である。三河湾に面し、名古屋から電車で45分ほどのところにある。その中でも特に有名な名所が**竹島**という小さな島である。竹島は本土と387メートルの歩道橋で結ばれており、12世紀に建てられた**八百富神社**の鳥居へと続いている。竹島全体が八百富神社の森の覆われた境内になっている。橋の本土側周辺は2つの有名ホテル、温泉、水族館、公園、博物館、長い海辺の遊歩道、三河湾の海の幸などの特産品を提供するレストランやカフェで構成されるリゾート地となっている。また、竹島エリアは自然豊かな三河湾国定公園の一部である。

蒲郡と竹島が憩いの場、観光の場として広く知られるようになったのは、名古屋の実業家、滝信四郎（1868-1938）が竹島近くの海岸に旅館を建てた20世紀初頭にさかのぼる。蒲郡の穏やかな海、浜辺、温泉に魅せられ、谷崎潤一郎（1886-1965）やノーベル賞作家の川端康成（1899-1972）をはじめとする有名な作家たちが、滝の旅館「常磐館」に滞在するようになった。彼らの模範や著作はそれ以来、多くの人々に竹島で休暇を過ごすインスピレーションを与えている。

常磐館は前述の文人に焦点を当てた記念館に取って代わられたが、宿泊でこの地域の歴史を感

じたい人は、由緒ある**蒲郡クラシックホテル**の部屋を予約することができる。竹島と三河湾を見下ろす高台にあるこのホテルは1934年に蒲郡ホテルとして開業し、城をイメージした本館と敷地内の3つの別館が保存指定されている。竹島近辺のもうひとつの瀟洒なホテルは、オーシャンビューと温泉で知られる海辺の**ホテル竹島**だ。

ホテル竹島に隣接する**蒲郡市竹島水族館**は三河湾とその周辺の海の生き物を、特に深海魚を中心に紹介している。蒲郡は愛知県で唯一の深海漁業船団の母港であり、深いところでは水深700メートルの深海で獲れる魚は、蒲郡のローカル料理にもよく登場するほか、浅瀬で獲れる魚介類、上質な牛肉、果物などの食材も味わえる。

竹島への歩道橋の近くにある小さな公園「**俊成苑**」は、公家で歌人の藤原俊成（1114-1204）を記念するものだ。俊成は地域の国司を務めながら、竹島に八百富神社を創建し、後に蒲郡となる集落の開発を始めた人物である。公園内の俊成像の近くには**竹島クラフトセンター**があり、蒲郡の織物生産の長い歴史を学び、伝統的な織物技術を体験することができる。

竹島のすぐ先には大きな無人島、**三河大島**があり、夏には臨時のレストランや売店がオープンし、海水浴客で賑わう。三河大島は竹島水族館に隣接する栈橋から船でアクセスできる。また、蒲郡の郊外や西に位置する西浦半島にもいくつかのビーチがある。

【タイトル】 蒲郡市竹島水族館/蒲郡市竹島水族館

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Takeshima Aquarium

Innovative and interactive displays at the Takeshima Aquarium provide insight into the rich sea life of Mikawa Bay as well as the deep waters farther out in the Pacific Ocean. In a departure from standard explanatory panels, the hand-written information boards in the aquarium present details about the fish and crustaceans on display in the format of elementary school grade cards and profiles. Other boards include imagined “comments” from the sea creatures themselves, making the creatures more relatable, especially for children.

The design of habitats for the aquarium’s sea life is equally creative. One display is composed of colorful cinder blocks arranged to look like an apartment building, complete with names and addresses. The deep-sea fish inhabiting this tank are comfortable in the confined spaces of the blocks, which resemble conditions near the ocean floor.

Many of the deep-sea creatures on display are rare, and many were caught inadvertently in the nets of local fishermen working on the four deep-sea fishing vessels that operate out of Gamagori. There are around 140 different species of deep-sea wildlife in the Takeshima Aquarium, including sharks, sea bream, and lobsters.

Another important theme at the aquarium is a focus on local seafood. Stickers on some of the tanks denote sea life that is good to eat, while photographs and videos are used to demonstrate culinary preparations of specific fish.

One corner of the aquarium has shallow open tanks where gently petting the sea life is allowed. In addition to fish and crustaceans, the aquarium is home to otters, capybaras, and turtles. There is also a sea lion performance three times a day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒲郡市竹島水族館

蒲郡市竹島水族館では三河湾や太平洋の深海に生息する豊かな海の生物について、クリエイティブでインタラクティブな展示で紹介している。一般的な説明パネルとは異なり、水族館内の手書きの案内板には、展示されている魚や甲殻類などの詳細が小学校の成績表や履歴書のような形式で紹介されている。また、海の生き物たち自身の「コメント」を想像させるようなものもあり、特に子供たちにとっては親しみやすいものとなっている。

この水族館では海の生き物の生息環境をデザインする際にも同様のアプローチをとっている。ある展示は、カラフルなシンダーブロックをアパートのように並べ、名前と住所を記したものだ。この水槽に生息する深海魚は海底付近の状況に似ているため、ブロックの限られたスペースが快適なのだ。

展示されている深海生物の多くは希少なもので、蒲郡から出漁している4隻の遠洋漁船で働く地元の漁師の網にうっかりかかってしまったものも多い。竹島水族館にはサメ、タイ、エビなど約140種類の深海生物がいる。

この水族館のもうひとつの重要なテーマは地元の魚介類に焦点を当てていることだ。水槽の一部には食べておいしい海の生き物を示すステッカーが貼られ、写真やビデオを使って、特定の魚を食材として調理する方法が紹介されている。

水族館の一角には浅いオープン水槽があり、来場者は海の生き物を優しく撫でることができる。魚や甲殻類だけでなく、カワウソやカピバラ、カメなども飼育されている。アシカのパフォーマンスも1日3回ある。

地域番号	030	協議会名	草津市地域観光資源多言語整備協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
030-001	草津市立水生植物公園みずの森/ 公園について		251～500	WEB
030-002	草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（ロータス館）		251～500	WEB
030-003	草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（屋外）		251～500	WEB
030-004	草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（屋外）		251～500	パンフレット
030-005	草津市立水生植物公園みずの森/ 琵琶湖ハス群落とハスいっぱいプロジェクト		1～250	パンフレット
030-006	草津市立水生植物公園みずの森/ みずの森、四季の楽しみ		1～250	パンフレット
030-007	草津市立水生植物公園みずの森/ みずの森物販案内		1～250	パンフレット

030-001

Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori: An Overview

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】 草津市立水生植物公園みずの森/ 公園について

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori: An Overview

A world of lotuses and water lilies

Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori opened in 1996. It sits on the southeastern shore of Lake Biwa on a small peninsula it shares with the Lake Biwa Museum, a natural history museum that opened at the same time. The botanical garden's principal feature is one of Japan's largest collections of lotus plants (*hasu*) and water lilies (*suiren*). This focus derives from the presence of a 13-hectare lotus patch that flourished in the lake next to the facility until 2016, when it mysteriously vanished.

Mizunomori, as the garden is commonly known, attracts over 100,000 visitors per year. It is busiest in June and July, when the lotuses and water lilies are in flower, though there are aquatic plants to see all year round. The botanical garden has 150 varieties of water lilies, both temperate and tropical, and 100 varieties of lotus, an iconic flower in Japan. A visit to Mizunomori presents a great opportunity to get to know this flower, which occupies a significant place in Japanese culture.

The facility consists of one large building, the Lotus Pavilion, and the surrounding ponds and gardens. The pavilion houses several attractions: a theater that shows a 15-minute video on lotuses and water lilies; exhibits on the lotus's significance in science and culture; a greenhouse where tropical water lilies bloom year-round; an outdoor terrace with a small lotus pond attached; and a cafeteria with panoramic views over the garden and lake.

The outdoor section of the museum features multiple gardens. Seasonal flowers are displayed in the Community Square outside the Lotus Pavilion. The Teaching Garden has two long tanks full of lotus flowers. Hanakage Pond is a water lily pond inspired by the garden of Impressionist painter Claude Monet (1840–1926) at Giverny in France. The Wetland Garden highlights Japanese irises and autumnal grasses, while the Volunteer Garden, which is cultivated by volunteer amateur gardeners, is closer to a typical English garden.

Visitors should plan on spending at least one to one-and-a-half hours to see everything at Mizunomori. Access is either by car or by bus from the west exit of JR Kusatsu Station.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

草津市立水生植物公園みずの森：概要

ハスとスイレンの世界

草津市立水生植物公園みずの森は1996年に開園しました。この公園は、琵琶湖の南東岸にあり、同時期に開館した自然史博物館である琵琶湖博物館と小さな半島を共有しています。この植物園の見どころは日本最大級のハスとスイレンのコレクションです。これは、2016年に謎の消失を遂げるまで、施設の隣の湖で繁茂していた13ヘクタールのハス群生地由来しています。

一般にみずの森と呼ばれるこの庭園には年間10万人以上の来園者が訪れます。ハスとスイレンが開花する6月と7月が最も混雑しますが、年間を通して水生植物が見られます。この植物園には、温帯性と熱帯性の150種類のスイレンと、日本の象徴的な花であるハスが100種類あります。みずの森への訪問は、日本文化において重要な位置を占めるこの花をよく知る絶好の機会です。

施設は、大きな建物であるロータス館と、その周囲の池や庭園からなります。ロータス館にはいくつかのアトラクションがあります；ハスとスイレンに関する15分間のビデオを上映する映像ホール）や、科学と文化におけるハスの重要性に関する展示、一年中熱帯スイレンが咲く温室、小さなハス池が付属する屋外テラス、そして庭園と湖を一望できるカフェテリアです。

施設の屋外部分には複数の庭園があります。ロータス館の外にあるコミュニティ広場では季節の花が展示されています。教材園にはハスの花で満たされた2つの長い水槽があります。花影の池は、フランスのジヴェルニーにある印象派画家クロード・モネ（1840 -1926）の庭園にインスピレーション

を受けたスイレンの池です。湿生花園では日本のアヤメと秋の草花が見どころとなっており、一方、有志の園芸愛好家によって栽培されているボランティアガーデンは、典型的なイギリス式庭園に近いものとなっています。

みずの森のすべてを見るには少なくとも1時間から1時間半ほどの時間を見込んでください。アクセスは車か、JR草津駅西口からバスを利用します。

030-002

The Lotus Pavilion and Atrium Greenhouse

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（ロータス館）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

The Lotus Pavilion and Atrium Greenhouse

Recreating a tropical environment

The Atrium greenhouse features four ponds where roughly 30 varieties of tropical water lilies (*Nymphaea*) are on display at any given time. Since tropical water lilies cannot survive Japan's winters, they are kept in a greenhouse, where the temperature is maintained at no less than 20 degrees Celsius and the water at a year-round 28 degrees Celsius.

A slope around the ponds enables observation of the water lilies first from above and then at eye level from the opposite side. Notice that the water lilies' leaves lie flat on the water and have a V-shaped cleft where the stem attaches. The flowers, which bloom in vibrant colors and have pointed petals, float on the water's surface.

Immediately outside the greenhouse is a terrace that overlooks a small pond with some 100 pots of lotus plants (*Nelumbo*). Compared to the water lily, the lotus has bigger, more rounded leaves that sit above the water, as does the flower, which blooms around 1.5 meters above the surface. The flowers, which are white, pink, yellow, or pink and white, are paler than the lily flowers.

Back at the greenhouse, look for the three sacred trees of Buddhism: the ashoka tree (*Saraca asoca*), under which the Buddha was born; the bodhi tree (*Ficus religiosa*), under which he achieved enlightenment; and the sal tree (*Shorea robusta*), under which he died. (Incidentally, the Buddha is frequently represented sitting on a lotus

pedestal. In Buddhism, the lotus symbolizes spiritual purity, as it blooms clean and white though its roots are in the mud at the bottom of the pond, while its short four-day lifespan also evokes the transience of human existence.)

Though the garden mainly features aquatic plants, the greenhouse contains a small cactus corner. The golden barrel cactus (*Echinocactus grusonii*) here is over 50 years old. The oversized star-shaped flower of the carrion plant (*Stapelia gigantea*) appears in June and gives off the smell of rotting flesh. Another eccentric-looking plant is the turquoise jade vine (*Strongylodon macrobotrys*), native to the Philippines. It produces chains of green-blue claw-shaped flowers in March and April.

A small aquarium at Mizunomori reproduces the shallow-water ecosystem of Lake Biwa. It contains shining pondweed (*Potamogeton dentatus*), an endangered submerged perennial plant now extinct in Lake Biwa, and *nejiremo* (*Vallisneria asiatica* var. *biwaensis*), a waterweed with ribbon-like spiraling leaves that is threatened by eutrophication and invasive plant species.

The lotus in culture and science

Two exhibition rooms adjoining the Atrium greenhouse focus on the historical importance of the lotus as a religious and decorative motif, with examples ranging from ancient Egyptian sculptures to a Tiffany lamp from the early twentieth century. A large model of a lotus shows all the details of the plant, down to the roots.

In the break room by the front door of the Lotus Pavilion is a Yamasaki Kazura (*Epipremnum amplissimum*), native to the Philippines and one of only two examples of the plant to flower in Japan. This one blooms in April and May, producing an unusual-looking flower that resembles a ripe banana.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ロータス館とアトリウム（温室）

熱帯の環境を再現

アトリウム温室には4つの池があり、常時約30種の熱帯スイレン (*Nymphaea*) が展示されています。熱帯スイレンは日本の冬を越せないため、気温が20度以上、水温が年間を通して28度に保たれた温室で栽培されています。

池の周りの傾斜により、最初は上から、そして反対側からは目線の高さからスイレンを観察することができます。スイレンの葉は水面に平らに浮かび、茎が付く部分にV字型の切れ込みがあることに注目してください。鮮やかな色に咲き尖った花弁を持つ花は、水面に浮かんでいます。

温室のすぐ外には、約100鉢のハス (*Nelumbo*) が植えられた小さな池を見下ろすテラスがあります。スイレンと比べると、ハスの葉はより大きく丸みを帯びており、水面より上に出ています。花も同様で、水面から約1.5メートルの高さで咲きます。白、ピンク、黄色、またはピンクと白の花は、スイレンの花よりも淡い色をしています。

温室に戻って、仏教の三大聖樹を見つけましょう：それぞれの下で、ブッダが生まれたアショカの木 (*Saraca asoca*)、悟りを開いた菩提樹 (*Ficus religiosa*)、そして入滅した場所のサウの木 (*Shorea robusta*) です。(ちなみに、仏陀はしばしばハスの台座に座っている姿で表現されます。仏教において、ハスは泥の中から清浄な白い花を咲かせることから精神的な清らかさを象徴し、また4日間という短い寿命が人間の存在の儚さを想起させます。)

この庭園は水生植物を主な見どころとしていますが、温室には小さなサボテンコーナーもあります。ここにあるキンシャチ (*Echinocactus grusonii*) は樹齢50歳以上です。スタペリア・ギガンテア (*Stapelia gigantea*) の大きな星型の花は6月に咲き、腐肉のような臭いを放ちます。注目に値する他の奇抜な外見の植物として、フィリピン原産のヒスイカズラ (*Strongylodon macrobotrys*) があります。この植物は、3月と4月に緑がかった青色の爪のような形の花を連なって咲かせます。

みずの森の小さなアクアリウムでは、琵琶湖の浅い部分の生態系が再現されています。ここには、琵琶湖ではもう絶滅してしまった絶滅危惧種の沈水性多年草であるガシャモク (*Potamogeton dentatus*) や、富栄養化や外来植物種の影響で危機に瀕している、螺旋状のリボンのような葉を持つネジレモ (*Vallisneria asiatica* var. *biwaensis*) が展示されています。

文化と科学におけるハス

アトリウム (温室) に隣接する2つの展示室では、古代エジプトの彫刻から20世紀初頭のティファニーランプまでの例を用いて、宗教的および装飾的モチーフとしてのハスの歴史的な重要性に焦点を当てています。ハスの大きな模型では、根に至るまで植物のあらゆる細部が示されています。

ロータス館の正面玄関脇の休憩室には、フィリピン原産のヤマサキカズラ (*Epipremnum amplissimum*) がありますが、これは日本で開花したわずか2例のうちの1つです。ヤマサキカズラ

は4月と5月に開花し、熟したバナナに似た珍しい形の花を咲かせます。

030-003

Exploring the Grounds: Part 1

Community Square, Teaching Garden, Hanakage Pond

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】 草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（屋外）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Exploring the Grounds: Part 1

Community Square, Teaching Garden, Hanakage Pond

Community Square

A tour of the Mizunomori grounds usually starts at the Community Square in front of the Lotus Pavilion. Seasonal flowers adorn the square in pots and hanging baskets. These flowers range from delphiniums in May to cascade chrysanthemums (*kengaigiku*) in November to “ice tulips,” grown from refrigerated bulbs, in December. During summer, lotus flowers in pots are arranged around the fountain. Dedicated areas feature pygmy water lilies (*Nymphaea tetragona*) and tropical water lilies, placed so you can smell the flowers. Summer visitors may get to see a Wanvisa water lily, a two-colored flower, yellow on one side and red on the other.

Teaching Garden

The Teaching Garden features lotus plants arranged in two artificial raised ponds about 20 meters long and 2 meters wide. The lotuses are planted in March and bloom in July. Among them is the Oga Lotus, a crimson flower that paleobotanist Dr. Ichiro Oga (1883–1965) created by germinating a 2,000-year-old seed he found in 1951 in Chiba, near Tokyo. With the lotuses growing to a convenient head height, this garden is particularly popular with photographers, who arrive early since the flowers start to close in the afternoon.

Hanakage Pond

This water lily pond is the showpiece exhibit at Mizunomori. Taking inspiration from the Giverny garden of French Impressionist painter Claude Monet (1840–1926), Hanakage Pond combines water lilies and other aquatic plants with picturesque bridges of stone and wood as a backdrop. The pond has 50 varieties of both temperate and tropical water lilies, blooming at any given time between June and September. Most striking of these is the giant South American water lily (*Victoria cruziana*). Its lily pads, with their distinctive upturned rims and thorny undersides, grow up to 1.5 meters wide (in August, young children are invited to try sitting or standing on the pads). Other plants in the pond include papyrus, which was used by the ancient Egyptians to make paper, and water canna.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

園内の探索：パート1

コミュニティ広場、教材園、花影の池

コミュニティ広場

みずの森の園内ツアーは、通常ロータス館前のコミュニティ広場から始まります。季節の花々が鉢植えやハンギングバスケットで広場を彩ります。これらの花は、5月のデルフィニウムから、11月の懸崖菊、そして12月には冷蔵球根から育てられた「アイスチューリップ」まで多岐にわたります。夏の間は、噴水の周りにハスの鉢植えが配置されます。また、ヒツジグサ（*Nymphaea tetragona*）と熱帯スイレンを目玉とするエリアもあり、これらは花の香りを楽しむことができるよう配置されています。夏の訪問者は、片側が黄色で反対側が赤い二色の花をつけるワンビサを見ることができるかもしれません。

教材園

教材園では、長さ約20メートル、幅2メートルの人工的な高床の池2つにハスが配置されています。ハスは3月に植えられ、7月に開花します。その中には、古植物学者の大賀一郎博士（1883-1965）が1951年に東京に近い千葉で発見した2,000年前の種子を発芽させて作り出した深紅の花、大賀ハスも含まれています。ハスが人の背丈ほどの高さまで育つため、この庭園は写真家に特に人気があります；午後には花が閉じ始めることから写真を撮る人々は早朝に訪れます。

花影の池

このスイレンの池は、みずの森の目玉展示です。フランスの印象派画家クロード・モネ（1840 - 1926）のジヴェルニーの庭園からインスピレーションを得た花影の池は、スイレンや他の水生植物に、絵のように美しい石橋や木橋を背景として組み合わせています。この池には温帯性と熱帯性の両方のスイレンが50種類あり、6月から9月の間、いつでも開花を見ることができます。中でも最も

印象的なのはパラグアイオニバス（*Victoria cruziana*）です。その葉は、特徴的な上向きの縁とトゲのある裏面を持ち、幅1.5メートルにまで成長します（8月には、子どもたちがその葉の上に座ったり立ったりすることができます）。池にはほかにも、古代エジプト人が紙を作るのに使用したパピルスや水生カンナなどの植物も植えられています

030-004

Exploring the Grounds: Part 2

Lawn Square, Volunteer Garden, Wetland Garden, Hydrangea Garden

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】 草津市立水生植物公園みずの森/ 施設のご紹介（屋外）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Exploring the Grounds: Part 2

Lawn Square, Volunteer Garden, Wetland Garden, Hydrangea Garden

Lawn Square

The lawn just behind the water lily pond adjoins Lake Biwa. This part of the lake was the site of the 13-hectare lotus patch that originally inspired the creation of Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori. In 2016, the lotus plants failed to regenerate. There is still a fine view across the lake to Mt. Mikami, a 432-meter-high mountain known as “Omi Fuji,” because its conical shape is reminiscent of Mt. Fuji. (Omi is the old provincial name for Shiga Prefecture.)

Between the path and the lake is a cluster of evergreens. These include common Japanese trees such as the momi fir (*Abies firma*), longleaf pine (*Pinus palustris*), dawn redwood (*Metasequoia glyptostroboides*), and Japanese nutmeg yew (*Torreya nucifera*). A raft where freshwater pearls were once cultivated is visible beyond the trees.

Volunteer Garden

The Volunteer Garden, as the name suggests, is the work of around 30 volunteers who have an interest in plants and flowers. This garden provides a hands-on opportunity for them to learn the basics of gardening and improve their skills. The plants are selected through collaborative discussions and bring to mind a typical English garden.

Wetland Garden

Japanese irises (*hanashobu*) are the highlight of the Wetland Garden. During the Edo period (1603–1868), members of the samurai class cultivated irises competitively. As a result, there are different cultivars from different Edo-period domains around Japan. Here you can see irises from Ise (present-day Mie and Wakayama Prefectures), Edo (present-day Tokyo), and Higo (present-day Kumamoto Prefecture). Note also the aerial roots of the bald cypress (*Taxodium distichum*) around the iris beds. The roots protrude from the soil to escape excessive dampness and “breathe” above ground.

One flower that has long played a role in Japanese arts and crafts is the *aobana* (*Commelina communis* var. *hortensis*). Literally “blue flower” in Japanese, it is a variety of the daylily cultivated only in the vicinity of Kusatsu. *Aobana*-derived blue dye is used for the underpainting in *yuzen* and *shiborizome* dyeing. It was also the primary source of blue for ukiyo-e woodblock prints until the early nineteenth century, when synthetic Prussian Blue dye imported from Germany rendered it obsolete.

Other plants to seek out in the Wetland Garden include the purple Chinese ground orchid, known as *shiran* in Japan (*Bletilla striata* var. *striata*), and seven varieties of Japanese silvergrass, which turn to subtle shades of silver in the autumn. Another classic autumn bloom is the daisy-like yellow flower of the ground-hugging leopard plant, known as *tsuwabuki* in Japan (*Farfugium japonicum*), which is often found near ponds in Japanese gardens.

Hydrangea Garden

One of the most popular flowering shrubs in Japan, the hydrangea (*ajisai*) is found in temple gardens, public parks, and private gardens throughout the country. Blooming in the rainy season in June, hydrangeas like damp, shady environments, which is why this garden is planted on a hillside sheltered by dawn redwood trees.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

園内の探索：パート2

芝生広場、ボランティアガーデン、湿生花園、アジサイ園

芝生広場

スイレンの池のすぐ後ろにあるこの芝生は琵琶湖に隣接しています。湖のこの部分は、もともと草津市立水生植物公園みずの森の創設のきっかけとなった13ヘクタールのハスの群生地がありました。2016年、このハスの群生地は再生しなくなりました。湖越しに見える三上山の景色は素晴らしいままです；三上山は標高432メートルの山で、その円錐形が富士山を思わせることから「近江富士」というニックネームで呼ばれています。（近江は滋賀県の古い名称です。）

通路と湖の間には常緑樹の茂みがあります。これらには、モミ（*Abies firma*）、ダイオウマツ（*Pinus palustris*）、メタセコイア（*Metasequoia glyptostroboides*）、カヤ（*Torreya nucifera*）など、日本でよく見られる木々が含まれています。木々の向こうには、かつて淡水真珠が養殖されていた筏を見ることができます。

ボランティアガーデン

ボランティアガーデンは、その名の通り、植物や花に興味を持つ約30名のボランティアによって作られています。この庭園は、彼らが園芸の基礎を学び、技術を向上させる実践の場となっています。植えられる植物は共同での話し合いを通じて選ばれ、典型的なイギリス式庭園を思わせます。

湿生花園

湿生花園の目玉はハナショウブです。江戸時代（1603 -1868）には、武士階級の人々が競ってアヤメを栽培していました。その結果、日本各地の江戸時代の藩によって異なる品種が生まれました。ここでは、伊勢（現在の三重県と和歌山県）、江戸（現在の東京）、肥後（現在の熊本県）のハナショウブを見ることができます。また、ハナショウブの花壇周辺にあるラクウショウ（*Taxodium distichum*）の気根にも注目してください。これらの根は過度の湿気を避けるために土から突き出し、地上で「呼吸」しています。

日本の芸術や工芸で長く重要な役割を果たしてきた興味深い花の一つに、アオバナ（*Commelina communis* var. *hortensis*）があります。文字通り「青い花」として知られるこの植物は、草津周辺でのみ栽培されるデイルリーの一種です。アオバナから抽出された青色染料は、友禅や絞り染めの下塗りに使用されます。また、アオバナは、19世紀初頭にドイツから合成ブルシアンブルー染料が輸入されて廃れるまで、浮世絵版画の主要な青色顔料の源でもありました。

湿生花園で探してみるべき他の植物には、紫色の中国原産のシラン（*Bletilla striata* var. *striata*）や、秋に微妙な銀色の色調に変わる7種のススキがあります。日本庭園の池の近くでよく見られ、デージーに似た黄色い花を咲かせる地を這うツワブキ（*Farguesia japonicum*）は、日本の典型的な秋の花の一つです。

アジサイ園

日本で最も人気のある花木の一つであるアジサイは、全国の寺院の庭園や公共の公園、個人の

庭に見られます。6月の梅雨の時期に花を咲かせるアジサイは、湿った日陰の環境を好むため、ここではメタセコイアの木々に守られた丘の斜面に植えられています。

030-005

The lost lotus patch lives on

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】 草津市立水生植物公園みずの森/ 琵琶湖ハス群落とハスいっぱいプロジェクト
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Origin of Mizunomori

The lost lotus patch lives on

Until 2016, a roughly 13-hectare patch of lotuses appeared like clockwork every summer in Lake Biwa immediately adjacent to Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori. This lotus patch was the inspiration for the 1996 creation of the botanical garden, and for the first two decades of Mizunomori's existence, visitors would come to see both the natural lotuses on the lake and the cultivated lotuses in the garden. Unfortunately, that all changed in 2016 when, for the first time in half a century, the lotus patch failed to regenerate, possibly due to changes in the immediate environment. The disappearance of the lotus patch resulted in a dramatic drop in visitors for several years.

The response to this unforeseen event was the launch of the Hasu Ippai (Lots of Lotus) Project in 2017. One hundred lotus flowers are planted in 90-liter pots in April every year. This involves cutting the last 30 centimeters off the root of an existing lotus plant, washing, disinfecting, and then replanting it. Local volunteers, as well as children from nearby kindergartens and elementary schools, help the Mizunomori staff. The flowers from the project can be seen in June and July around the fountain in the Community Square and in the lotus pond just outside the main Atrium greenhouse. Those around the fountain are labeled with the names of the people who transplanted them, so that they can see for themselves that their particular lotus flowered successfully. The Hasu Ippai Project is Mizunomori's way of keeping alive the memory of the Lake Biwa lotus patch.

みずの森の始まり

失われたハスの群生地は生き続ける

2016年まで、草津市立水生植物公園みずの森に隣接する琵琶湖の一部には、毎年夏になるときっかりとおよそ13ヘクタールのハスの群生地が出現していました。このハスの群生地は1996年の植物園創設のきっかけとなり、みずの森が存在した最初の20年間、来場者は湖の自生のハスと庭園で栽培されたハスの両方を見に来ていました。しかし残念ながら、2016年にすべてが変わりました。半世紀で初めて、ハスの群生地が再生しなかったのです；これはおそらく周辺環境の変化が原因だと考えられています。ハスの群生地の消失により、数年間、庭園への来場者数は劇的に減少しました。

この予期せぬ出来事に対する対応は、2017年に「ハスいっぱいプロジェクト」を立ち上げることでした。毎年4月に、100本のハスの花が90リットルの鉢に植えられます。これは、既存のハス植物の根の先端30センチメートルを切り取り、洗浄し、消毒してから再植栽するという作業を伴います。地元のボランティアや近隣の幼稚園児や小学生がみずの森のスタッフを手伝います。このプロジェクトの花は、6月と7月にコミュニティ広場の噴水周辺と、メインのアトリウム温室のすぐ外にあるハスの池で見ることができます。噴水周辺のものには、移植した人の名前がラベル付けされており、自分が植えたハスが無事に開花したことを確認できるようになっています。「ハスいっぱいプロジェクト」は、琵琶湖のハス群生地の記憶を生かし続けるためのみずの森の取り組みなのです。

030-006

Flowers for All Seasons

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】 草津市立水生植物公園みずの森/ みずの森、四季の楽しみ

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Flowers for All Seasons

Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori gets most of its annual visitors in June and July, when the lotuses and water lilies are in bloom, but efforts are made to ensure that there is something to see throughout the year. Here is a guide to the highlights of the different seasons.

Autumn

Seven autumnal silvergrasses (September)

Maple trees with fall foliage (October)

Kengaigiku cascade chrysanthemums (November)

Winter

“Ice tulips” (December)

Poinsettias (December)

Fifty varieties of Christmas rose (February to March)

Spring

Cherry trees in bloom (mid-March)

Jade vines in bloom (March)

Tulips (April)

Summer

Hydrangeas (June)

Lotuses, water lilies, and Japanese irises (June and July)

All year

Water lilies in the Atrium greenhouse

上記解説文の仮訳（日本語訳）

年間を通じて咲く花々

草津市立水生植物公園みずの森では、年間来場者の大半がハスとスイレンが咲く6月と7月に訪れますが、一年を通して見どころがあるよう工夫されています。以下は、季節ごとの見どころの簡単なガイドです。

秋

七種の秋のススキ（9月）

カエデの紅葉（10月）

懸崖菊（11月）

冬

冷蔵球根から育てた「アイス」チューリップ（12月）

ポインセチア（12月）

50種類のクリスマスローズ（2月から3月）

春

桜の開花（3月中旬）

ヒスイカズラ（3月）

チューリップ（4月）

夏

アジサイ（6月）

ハス、スイレン、ハナショウブ（6月と7月）

通年

アトリウム（温室）のスイレン

030-007

Cafeteria and Gift Shop

草津市地域観光資源多言語整備協議会

【タイトル】草津市立水生植物公園みずの森/ みずの森物販案内

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Cafeteria and Gift Shop

Lotus with everything!

After an hour or more exploring Kusatsu Aquatic Botanical Garden Mizunomori, many visitors will be ready for a rest. The cafeteria has an outdoor terrace and magnificent views of Hanakage Pond and Lake Biwa. The best-selling item on the menu is green soft-serve ice cream made with powdered lotus leaves. For those seeking more substantial fare, there are green-tinged udon noodles made with the same lotus leaf powder, and a curry dish topped with lotus root chips. The tableware also features aquatic plants, with some dishes presented on green plates modeled after the lily pads of the giant South American water lily (*Victoria cruziana*) in the pond outside.

For visitors interested in lotus-themed souvenirs, the gift shop at the entrance of the cafeteria sells lotus noodles (*hasu-men*) and lotus tea. There is also a selection of jewelry featuring resin-encased lotus petals, the work of an artisan based in Kusatsu.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

カフェテリアと売店

ハスづくし！

草津市立水生植物公園みずの森を1時間以上探索したら、来場者の多くはゆっくり休憩したくなるでしょう。カフェテリアには、屋外テラスがあり、花影の池と琵琶湖の素晴らしい景色を楽しめます。一番人気の商品は、ハスの葉の粉末を使った緑色のソフトクリームです。もっとしっかり食べたい人には、同じハスの葉の粉末を使った緑がかったうどんや、ハスの根のチップスをトッピングにしたカレー料理があります。食器もまた水生植物をテーマにしており、いくつかの料理は外の池にあるパラグアイオ

ニバス(*Victoria cruziana*)の葉をモデルにした緑色の皿に盛り付けられています。

ハスをテーマにしたお土産に関心がある来場者のために、カフェテリア入口にある売店ではハス麺やハス茶を販売しています。また、草津市在住の職人が作った、樹脂に封入されたハスの花びらをあしらったジュエリーも取り揃えています。

地域番号	031	協議会名	滋賀県甲賀市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
031-001	甲賀の里 忍術村		250	パンフレット
031-002	油日神社		250	パンフレット
031-003	甲賀三霊山		500	パンフレット
031-004	水口岡山城跡		250	パンフレット
031-005	和田城跡		250	パンフレット
031-006	甲賀市くすり学習館		250	パンフレット
031-007	甲賀流リアル忍者館		500	パンフレット
031-008	信楽の狸の置物		250	パンフレット
031-009	甲賀市のマスコットキャラクター		250	パンフレット
031-010	甲賀市：忍者とは		250	パンフレット
031-011	甲賀市：甲賀流忍者の歴史		500	パンフレット
031-012	甲賀流リアル忍者館： 忍者とは		250	パンフレット
031-013	忍術全般		250	パンフレット
031-014	観光情報センター		250	パンフレット
031-015	甲賀流忍者調査団展示について		250	パンフレット
031-016	甲賀流リアル忍者館：甲賀流忍者の歴史		500	パンフレット
031-017	甲賀流リアル忍者館での体験		250	パンフレット
031-018	忍具		250	パンフレット
031-019	お土産売り場について		250	パンフレット
031-020	甲賀流忍者調査団・団長の磯田道史氏について		250	看板
031-021	忍書		250	看板
031-022	江戸時代の甲賀流忍者		500	看板
031-023	忍者体験：ARアトラクションについて		500	看板
031-024	忍者体験：忍者ジャンプと手裏剣投げ		250	看板
031-025	忍具		500	看板
031-026	プロジェクションマッピング		500	看板
031-027	忍者アートルーム		250	看板
031-028	甲賀流忍者の歴史		751～	WEB
031-029	和田城跡（和田砦跡）		500	WEB
031-030	信楽高原鐵道		250	パンフレット
031-031	甲賀市くすり学習館		500	WEB

031-001

Koka Ninja Village

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀の里 忍術村

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Koka Ninja Village

The Koka Ninja Village recreates the atmosphere of a traditional country ninja settlement. The attractions are suitable for all ages, and visitors can take part in hands-on activities based on ninja skills.

The village structures are authentic and historically significant. Some have been moved here from other parts of Koka. The Koka Ninjutsu Museum, housed in a reconstructed building with a thatched roof, displays a variety of ninja artifacts described in a well-known compilation of knowledge about *ninjutsu* (ninja arts) from both Koka and Iga (in adjacent Mie Prefecture) called the *Bansenshukai*. The book was created in 1676 by a member of the Fujibayashi ninja family and is considered to be an authoritative text.

The ancestral home of the Fujibayashi family was moved to the Ninja Village, where it is known as the Karakuri Yashiki (trick house). It has such features as a revolving door, hidden stairs, and an escape route beneath one of the open hearths.

In the Shuriken Dojo, visitors can learn to throw a *shuriken* (throwing star) at targets or tackle the extensive obstacle course, which includes wall climbing and crossing over water using ninja tools.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀の里 忍術村

甲賀の里忍術村は伝統的な田舎の忍者の集落の雰囲気再現しています。アトラクションは年齢を問わず楽しめ、忍術の体験もできます。

忍術村の一部の建造物は甲賀市の他の地域から移築され、歴史的にも重要なものです。茅葺

き屋根の建物を移築した甲賀忍術博物館には、忍術伝書「万川集海」に登場する忍者の武具が展示されています。1676年、忍者の家系に生まれた藤林氏によって編纂されました。

藤林家の先祖代々の屋敷は忍者村に移築され、「からくり屋敷」として知られています。回転する扉、隠し階段、囲炉裏の下の抜け穴などが特徴です。

手裏剣道場では、的をめがけて手裏剣を投げる手裏剣投げに挑戦したり、壁を登ったり、忍者の道具を使って水の上を渡ったりする広大な障害物コースに挑戦することができます。

031-002

Aburahi Shrine

滋賀県甲賀市

【タイトル】 油日神社

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Aburahi Shrine

Surrounded by cypress and cedar trees, this shrine at the foot of Mt. Aburahi was once a gathering place for the Koka samurai (who later became ninja) to exchange information and discuss tactics. The buildings include a roofed corridor, which was used for meetings. The shrine was also a center of prayer and ritual for the people of Koka.

The shrine is dedicated to Aburahi Daimyoin, the deity believed to dwell on Mt. Aburahi. Aburahi means “lamp” or “light.” According to local legend, the deity emitted a great light when descending from the heavens to the top of the mountain. It is also said that Aburahi Shrine was founded by Prince Shotoku (574–622), an influential figure celebrated for his many contributions to Japanese culture. In later centuries, Shotoku was worshipped as a deity.

Official records mention Aburahi Shrine as early as 877. The current buildings, however, were constructed in 1493 and were funded by contributions from local samurai. In addition to the corridor, the shrine buildings include a main hall, a hall of worship, and a tower gate, all of which are designated Important Cultural Properties. Anyone is welcome to look around the shrine, but visitors are asked to remove their shoes before entering the buildings, including the corridor. Pets, with the exception of service dogs, are not permitted on the premises.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

油日神社

油日神社は、木々に囲まれています、油日岳のふもとにあり、かつては甲賀の忍者といわれる侍

たちがここに集まり、情報交換や戦術の話し合いを行っていました。神社には、忍者たちが会合に使用していた屋根付きの回廊が含まれています。また、この神社は甲賀の人々にとっての精神的な中心地でもありました。

主祭神は油日岳の神である「油日大明神」です。「油日」とは「灯火」や「光」を意味し、地元の伝説によれば、山頂に降臨した際に大きな光を放ったと言われています。油日神社は、日本文化に多大な貢献をした人物として称えられている聖徳太子（574-672）によって創建されたと伝えられています。後世、甲賀の侍たちは聖徳太子を軍神として崇めていました。

油日神社に関する国史の正式な書面の記録は877年にまで遡りますが、現在の建物は1493年に地元の侍たちの寄付によって建てられました。神社には、回廊の他に本殿、拝殿、楼門があり、国の重要文化財に指定されています。誰でも神社を見学することができますが、建物内（回廊を含む）に入る際は靴を脱ぐようお願いします。盲導犬を除き、ペットの立入はご遠慮願います。

031-003

The Three Sacred Mountains

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀三霊山

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Three Sacred Mountains

Mt. Hando, Mt. Koshin, and Mt. Iwao are collectively known as the three sacred mountains of Koka. It is said that ninja practiced their skills here, where secluded areas and diverse terrain offered an ideal environment for training.

The mountains are revered for their spiritual significance and their connection with *yamabushi*—practitioners of Shugendo mountain asceticism. This form of asceticism blends elements of various religious traditions, including Shinto, Buddhism, Taoism and Confucianism, while emphasizing a reverence for mountains and nature.

Several hiking trails run through the mountains and offer opportunities to appreciate the beauty of the area. Directions to the trailheads and detailed maps can be obtained at the Tourism Information Center at the Kokaryu Real Ninjakan.

Mt. Hando rises to a height of 664 meters and is the highest of the three sacred mountains in Koka. Hando Shrine, situated near the summit, was first built in the Nara Period (710–784). It later burned down, and the current building dates from 1650. The main hall has a thatched roof and is a designated Important Cultural Property. Rhododendrons cover the shrine’s grounds and bloom in April and May.

The story goes that the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582) climbed Mt. Hando and surveyed the surrounding countryside during his time in Koka.

Mt. Koshin is connected to the southeastern ridge of Mt. Hando and is home to Kotoku Temple. According to legend, the revered Buddhist priest Saicho (767–822) founded the temple here more than 1,200 years ago. The main hall was completely destroyed in a 2013 wildfire and has been rebuilt. The viewing platform near the

summit allows visitors to appreciate the mountain's beauty, which is especially striking when the foliage turns a vibrant red in autumn.

Mt. Iwao features sheer cliffs and is dotted with Buddhist carvings and unusually shaped rock formations, such as O-uma Rock, which is named for its resemblance to a horse (*uma*). The peak is also known for its magnificent cherry trees and is a popular location for picnics in April. At the foot of the mountain is Iwao Pond, with an ancient cedar tree growing near the edge. According to legend, when the Buddhist priest Saicho planted his chopsticks in the ground here, they magically grew into the majestic tree.

Tips for Trekking: Inquire with the Tourism Information Center about the conditions of the routes, and dress appropriately for the weather. Seasoned trekkers in Japan typically wear long sleeves and trousers year-round for protection against insects. It is always wise to make sure someone is aware of your destination. When out on the trails, it is customary to greet people coming from the opposite direction with a friendly “Konnichi wa!” (Hello!). Please help to protect the environment by leaving nothing behind.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀三霊山

飯道山、庚申山、そして岩尾山は、甲賀の三霊山として知られています。ここでは、忍者たちが技を磨いたとされており、人里から離れた立地や変化に富んだ地形が修行に最適な環境を提供していました。

山々は、その霊的な意義と修験道の山伏たちとのつながりから崇拝されました。この形式の苦行は、神道、仏教、道教、儒教など、さまざまな宗教（しゅうきょう）伝統（でんとう）様々な宗教の要素を融合させ、山や自然に対する敬意を強調するものです。

三霊山にはいくつかのハイキングコースがあり、地域の美しさを徒歩で楽しむことができます。トレイルの入口への道順や詳細な地図を得るために、甲賀流リアル忍者館の観光案内所に立ち寄ることをお勧めします。

飯道山は、甲賀三霊山の中で最も高い山で、その標高は664メートル。山頂近くには飯道神社があり、その歴史は奈良時代（710-784）にまで遡ります。本殿は茅葺き屋根が特徴で、重要文化財に指定されています。4月から5月にかけて、神社の敷地にはシャクナゲが咲き誇ります。強

力な戦国大名、織田信長（1534–1582）が甲賀滞在中に飯道山に登り、周囲の風景を見渡したと言われています。

庚申山は飯道山の南東の尾根に連なり、広徳寺を擁します。伝説によると、この寺は1200年以上前に最澄大師（767–822）が開山したと伝わっています。本堂は2013年の山火事で全焼し、再建されました。山頂付近には展望台があり、特に秋には紅葉で鮮やかに彩られ、美しい景色が楽しめます。

岩尾山は険しい崖が特徴であり、仏教の彫刻や馬のような形をした「大馬岩」など、珍しい形をした岩が点在しています。また、山頂は桜の木々で知られており、3月や4月にはお花見スポットとして人気があります。山のふもとには岩尾池があり、その縁には杉の古木が生えています。伝説によると、最澄がこの地に箸を植えたところ、不思議なことに箸が成長し、立派な杉の木になったと言われています。

トレッキングのヒント

観光案内所に路線の状況を問い合わせ、天候に適した服装を選びましょう。日本では、経験豊富なトレkkerは虫除けのために年間を通じて長袖や長ズボンを着用しています。また、誰かに自分の行き先を知らせておく心安心です。すれ違う人々に「こんにちは！」と挨拶するのが習慣です。環境保護のため、ゴミは持ち帰るようにしましょう。

031-004

Minakuchi Okayama Castle Ruins

滋賀県甲賀市

【タイトル】 水口岡山城跡

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Minakuchi Okayama Castle Ruins

The castle was built in 1585 on the orders of warlord Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), and one of his retainers was installed there. With its high stone walls and tiled roofs, it was the first structure of its kind in the area, and the local people are said to have been awed by its scale.

The construction of the castle marked a major turning point in the history of the Koka ninja. The castle represented a change from the existing system of cooperative self-government by the local community to a system of regional rule by a unified government.

In 1600, after Tokugawa Ieyasu (1543–1616) seized power in a country-wide power struggle, Minakuchi Okayama Castle was attacked, causing the resident lord to flee. Ruling authority over Koka changed again after Ieyasu became shogun. The castle was later abandoned and dismantled.

A second, much smaller fortification, Minakuchi Castle, was built in 1634 at the foot of the mountain where Minakuchi Okayama Castle had stood. Its purpose was to provide overnight lodging for the third shogun Tokugawa Iemitsu (1604–1651), on a visit to the area. It is said that stones from the old castle were used in the new structure.

Only a small portion of Minakuchi Okayama Castle's stone walls remain, but the outline of the structure is still visible on the mountainside. The entire area has been turned into a park, and visitors can enjoy a panorama of the city from the summit. The castle site has been designated a National Historical site and is a 15-minute walk from Minaguchi Station.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

水口岡山城跡

この城は、中央政府の確立に尽力した戦国大名、豊臣秀吉（1537-1598）の命により1585年に建設されました。水口岡山城の建設は、甲賀流忍者の歴史において大きな転換点となり、統治の仕組みは地元の有力家族による協力的な自治集団から、統一組織による地域支配型へと変化しました。高い石垣と瓦葺きの屋根を持つこの城は、地域で初の構造物であり、その規模に忍者たちは驚いたと言われています。

1600年、水口岡山城は攻撃を受け焼き払われたため、城主は城を放棄して逃げざるを得ませんでした。その直後、徳川家康（1543-1616）が権力を握り、初代徳川将軍となりました。

その後、1634年に、より小さな要塞、水口城が、水口岡山城があった山の麓に建設されました。家康の孫である徳川家光（1604-1651）のための一夜の宿泊所として建てられたものです。古城の石が新しい構造に使用されたと言われています。

水口岡山城の石垣の一部しか残っていませんが、その構造の輪郭は今でも山の中腹に見ることができます。一帯は公園として整備され、山頂からは市街地の全景が楽しめます。城跡は国の史跡に指定されており、水口駅から徒歩15分でアクセスできます。

031-005

Site of the Wada Fort

滋賀県甲賀市

【タイトル】 和田城跡

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Site of the Wada Fort

During the Sengoku period (1467–1568), the ninja of the Koka area built forts to protect their families and defend their villages. Around 180 of these sites have been identified in the region's rugged mountains and valleys.

The forts have sometimes been called castles, but they were simple compounds consisting of earthen walls surrounded by moats. Most of the sites identified are on what is now private land, with little evidence remaining of the former structures that stood on them. However, it is possible to visit the site of the Wada Fort, which enables visitors to gain an understanding of the role such forts played in the lives of the ninja.

The Koka area was unusual for the time, because the power of the local daimyo was weak here, unlike in most other parts of the country. Instead, the local community formed groups that were based on blood and territorial ties, and practiced autonomous local governance. This strategy of local rule and collective self-defense was crucial in maintaining stability and preventing the rise of a single, dominant power. The well-secured, hard-to-attack forts reveal the defensive skills of the people of Koka, including the ninja.

The Wada Fort was constructed on a hill at the end of a valley. The main enclosure formed a square, and each side measured 50 meters. It was surrounded by earthen walls, some of which are believed to have reached up to 7 meters in height.

Seven forts once stood in the valley, where any suspicious movement would trigger an attack from a fort.

As the site of the Wada Fort is somewhat difficult to find, visitors are encouraged to stop by the Tourism Information Center at the Kokaryu Real Ninjakan for directions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和田砦跡（和田城跡）

戦国時代（1467–1615年）、甲賀地方の忍者たちは家族を守り、村を防衛するために砦を築きました。この地域の険しい山々や谷には、約180の砦跡が確認されています。

砦は城と呼ばれることもありますが、空堀に囲まれた土塁壁からなる単純な構造でした。ほとんどの砦跡は私有地にあり、実際の構造物はほとんど残っていません。しかし、和田砦跡を訪れることで、それが忍者の生活において果たした役割を理解することができます。

甲賀地域は当時としては珍しく、他の多くの地域とは異なり、地元大名の権力が弱かったのが特徴。その代わりに、地元の共同体が血縁や地縁に基づく集団を形成し、自律的な地域統治を行っていました。堅固で攻撃が困難な砦は、甲賀流忍者の防御スキルを示しています。

和田砦は和田谷の最も奥にある丘の上に建てられました。主要な囲いは一辺が50メートルの正方形を形成し、土塁で囲まれていました。周囲は土塁で囲まれており、中には高さ7メートルに達するものもあったと考えられています。

谷にはかつて7つの砦があり、不審な動きがあるとどこかの砦から攻撃が始まり、侵入者を罠にかける仕組みがありました。

和田砦跡は少々見つけにくい場所にあるため、甲賀流リアル忍者館の観光案内所に立ち寄り、道順を尋ねることをお勧めします。

031-006

Koka Medicine Museum

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀市くすり学習館

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Koka Medicine Museum

Utilizing medicinal herbs has a long history in the Koka area in present-day Shiga Prefecture. Knowledge of these plants was important for the ninja, who combined them to create various medicines. Visit the Koka Medicine Museum to learn about the use of herbs by the ninja and the history of Koka's connection with medicinal lore.

The museum's permanent exhibition showcases tools for making medicines and advertisements for medicines from the Edo period (1603–1867) to the Showa era (1926–1989), tracing the history of medicine production and sales in Koka. Interactive displays explore medicinal herbs and offer a comprehensive look at the development of Koka's medicine-related industry, which continues today.

The ninja made *shinobi-gusuri* (lit., “ninja medicine”) from herbs, drawing on their accumulated knowledge. In 1676, a member of the Fujibayashi ninja family created the *Bansenshukai*, a compilation of knowledge about *ninjutsu* (ninja arts) from both Koka and Iga (in adjacent Mie Prefecture). The volume mentions various ninja medicines, some of which were used to ease common ailments ninja might suffer when traveling on missions. They also made substances to sicken or weaken enemies, or silence dogs whose barking might reveal their presence.

For a small fee, visitors to the Koka Medicine Museum can try their hand at creating a simple dish that is similar to what the ninja might have eaten when they needed to boost their energy. The workshop is suitable for all ages. Advanced bookings are required, so please contact the Tourism Information Center at the Kokaryu Real Ninjakan or the Koka Medicine Museum for more information.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀市くすり学習館

薬草の利用は、現在の滋賀県に位置する甲賀地域で長い歴史があります。これらの植物に関する知識は忍者にとって重要であり、彼らはこれらを組み合わせて様々な薬を作りました。甲賀市くすり学習館を訪れると、忍者がどのように薬草を使用したか、また甲賀と薬の歴史について学ぶことができます。

学習館の常設展示では、江戸時代（1603-1868年）から昭和（1926-1989）にかけての初期の薬品器具や薬の看板、広告が展示され、薬の製造と販売の歴史を辿ることができます。また、薬草をテーマにした体験型の展示もあり、現在も続く甲賀の薬業の発展を総合的に知ることができます。

忍者たちは薬草から忍薬を作り、薬理学の知識を活かしました。1676年、忍者の家系の一員である藤林氏が「万川集海」という甲賀（滋賀県）と伊賀（三重県）の忍術を集めた書物を編纂しました。この書物には、忍者が任務中やスキルを磨くために遠方で使用した様々な忍薬が記載されています。忍者たちは、敵を病気にさせたり弱らせたりする薬や、忍者の存在を知らせないために犬を倒す薬も作っていました。

甲賀市くすり学習館では、少額の参加費で、忍者がエネルギーを高めるために食べたと言われる簡単な一品を作る体験ができます。この体験はすべての年齢層に適しており、事前予約が必要です。詳細については、甲賀流リアル忍者館の観光案内所や、甲賀市くすり学習館にお問い合わせください。

031-007

Kokaryu Real Ninjakan

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流リアル忍者館

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Kokaryu Real Ninjakan

Kokaryu refers to the ninja of Koka in Omi Province (present-day Koka, Shiga Prefecture). Historically, the adjacent areas of Koka and Iga (in present-day Mie Prefecture) were the traditional heartland of ninja activity in medieval and early modern times.

Pop culture, media, and art forms like manga and film have introduced ninja to the world as black-clad assassins with near-superhuman abilities, but these portrayals are often inaccurate. In recent years, however, researchers and historians have pieced together an authentic picture of the Koka ninja. The Kokaryu Real Ninjakan communicates this rich heritage while also serving as a gateway for Koka tourism.

The main role of the ninja was to collect information for persons who served as their patrons without drawing attention to themselves. *Ninjutsu*—the art of the ninja—centered on stealth and survival tactics, requiring physical endurance, mental agility, and strategic thinking.

The Kokaryu Real Ninjakan features interactive displays and exhibits that provide insights into *ninjutsu* and showcase the knowledge and skills that defined the ninja. Visitors can tap into their “inner ninja” through hands-on activities suitable for all ages.

A comprehensive timeline highlights key developments in the history of the Koka ninja and the important roles they played in supporting some of Japan’s leading historical figures. Other displays explore the ninja’s legacy in the area, including their expertise in building forts and their extensive knowledge of medicinal herbs.

The Kokaryu Real Ninjakan also serves as a center of ninja-related research. The facility displays historical documents that have provided information about the true nature of the ninja. Staff can provide guidance on other ninja-related attractions in the

region, and rental bicycles are available for exploring further afield. The souvenir shop offers a wide range of ninja-related merchandise and specialty products from around the Koka area.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流リアル忍者館

甲賀流とは、近江国甲賀（現在の滋賀県甲賀市）の忍者を指します。歴史的に、甲賀と伊賀（三重県）の隣接する地域は、封建時代の忍者活動の中心地でした。

ポップカルチャーやメディア、漫画や映画などの芸術作品によって、忍者は黒装束をまとった超人的な暗殺者として世界に紹介されていますが、これらの描写は正確ではないことが多くあります。近年、研究者や歴史家は甲賀流忍者の本当の姿を再現しようと努力しています。甲賀流リアル忍者館は、この豊かな遺産を伝えると同時に、甲賀観光のゲートウェイとしての役割も果たしています。

忍者の主な役割は、依頼者のために情報を集めることであり、彼らは様々なスキルを駆使して目立たないように行動しました。忍術、すなわち忍者の技術は、隠密行動や生存戦術に重点を置いており、身体的な耐久力、精神的な機敏さ、戦略的思考が求められました。

甲賀流リアル忍者館では、忍術に関する洞察を提供するインタラクティブな展示や鑑賞物があり、忍者を定義する知識やスキルが紹介されています。訪問者は、年齢を問わず、ハンズオンのアクティビティを通じて内なる忍者に触れることができます。

包括的な時系列での展示は、甲賀流忍者の歴史における重要な発展と、彼らが日本の主要な歴史的人物を支える上で果たした重要な役割を強調しています。他の展示では、砦の建築における忍者の専門知識や薬草と薬理学に関する広範な知識など、地域における忍者の遺産が探求されています。

甲賀流リアル忍者館は、忍者研究の拠点でもあり、忍者が実際にどのような人物であったかを探るための情報を提供する歴史的文書が展示されています。スタッフは、地域の他の忍者関連の観光スポットの案内や、レンタサイクルの貸し出しも行っています。土産物店では、忍者関連の商品や甲賀地域の特産品が豊富に取り揃えられています。

031-008

Tanuki Figures of Shigaraki

滋賀県甲賀市

【タイトル】 信楽の狸の置物

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Tanuki Figures of Shigaraki

Over the centuries, Shigaraki ware has become prized for its high quality. Shigaraki is known as one of Japan's Six Ancient Kilns—areas with pottery-making traditions dating back over 800 years.

In 2004, the town was merged with four other municipalities to form the city of Koka. Along with ninja motifs, visitors to Koka will see many ornamental figures of *tanuki* (Japanese raccoon dogs). In the early 1950s, a Shigaraki potter named Fujiwara Tetsuzo made the first of these *tanuki* figures, which were part of the welcome for Emperor Showa (1901–1989) during his official visit to the town. The figures have since become one of Japan's signature products. The best-known version is a *tanuki* figure called *hassou-engi*, who wears a hat and holds a sake flask, but in Koka you will also see *tanuki* as ninja in disguise.

Shigaraki's *tanuki*, with their cheerful expressions, have become popular as symbols of good luck. As the word *tanuki* also suggests the meaning of “to surpass others,” many business owners place a *tanuki* at the entrance to their store or restaurant to encourage prosperity.

Shigaraki ware also includes jars, tea ceremony utensils and, more recently, tableware, flowerpots, ceramic tiles, and decorative ornaments.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

信楽の狸の置物

信楽は、日本の六古窯の一つとして知られており、800年以上前から陶器づくりが行われてきた歴史ある地域です。

2004年に町は他の4つの自治体と合併して甲賀市となりました。甲賀市を訪れると、忍者のモチーフと並んで、たくさんの狸の置物を見ることができます。信楽の陶工、藤原鋳造が1950年代初頭に最初の狸像を作り、昭和天皇をこの狸像でお出迎えして以来、狸の置物は日本を代表する名産品となりました。最もよく知られているバージョンは、帽子をかぶり、酒瓶を持った「八相縁起」と呼ばれる狸の姿ですが、甲賀市では変装した姿も見られます。

信楽の福狸は、日本中で幸運の象徴として人気があります。「他を抜く」という意味の「たぬき」という言葉にちなみ、多くのビジネスオーナーが商売繁盛を願って、自店やレストランの入り口に狸を置いています。

何世紀にもわたり、信楽焼はその高い品質で評価されてきました。信楽焼には壺、食器、茶道具、そして近年では花瓶や陶磁器タイル、その他の装飾用の置物も含まれています。

031-009

Koka City's Mascots

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀市のマスコットキャラクター

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Koka City's Mascots

Many towns and cities in Japan have mascot figures that serve as ambassadors for local tourism. Koka City has two—Ninjaemon and Ponpoko. Ninjaemon is shaped like a plump rice grain, as the character was inspired by locally grown black rice. He is dressed in black ninja clothing and holds a *shuriken* (throwing star). Ponpoko is a young *tanuki* (Japanese raccoon dog) and promotes the town of Shigaraki, which became part of Koka in 2004.

Shigaraki has long been known as a pottery-making town, and Ponpoko reflects the pottery heritage—the ceramic *tanuki* figures produced there are popular symbols of good luck and prosperity. The Chinese character for *raku* (the feeling of ease or happiness) is written on the mascot's belly in the hope that everyone will enjoy their visit.

Images of Ninjaemon and Ponpoko can be found throughout Koka. The friendly costumed characters also make appearances at local events.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀市のマスコットキャラクター

日本の多くの町や都市には、公式の大使として愛されるマスコットがいます。甲賀市には「にんじゃえもん」と「ぼんぼこちゃん」という2つのマスコットがいます。にんじゃえもんは、地元産の黒米をイメージしてふっくらとした米粒のような形をしています。黒い忍者装束を身にまとい、手には手裏剣を持っています。ぼんぼこちゃんは、信楽町をPRする狸です。

信楽は古くから焼き物の産地として知られ、たぬきの像は幸運と繁栄のシンボルとして人気があります。信楽は2004年に甲賀市の一部となり、この焼き物の伝統がぼんぼこちゃんに反映されています。ぼんぼこちゃんのおなかには「楽」の字が書かれており、訪れる人々が楽しい時間を過ごせるよう願いが込められています。

甲賀市のあちこちに「にんじゃえもん」と「ぼんぼこちゃん」の絵が飾られ、地元のイベントでは、親しみやすいキャラクターとして実際に会えることもあります。

031-010

What Are Ninja?

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀市：忍者とは

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

What Are Ninja?

There were two types of ninja: *innin*, who hid in darkness and engaged in combat and infiltration, and *yonin*, who disguised themselves as priests, merchants, street performers, and the like while engaging with their targets to gather information. *Yonin* would stay in an area for an extended time, becoming friendly with local residents to achieve their purpose. They employed a range of stealth and survival tactics that required physical endurance, mental agility, and strategic thinking.

The Koka area was unusual for the time, because the power of the local daimyo was weak here, unlike in most other parts of the country. Instead, the local community organized itself into groups that were based on blood and territorial ties. These groups practiced autonomous governance and collective self-defense to maintain stability and prevent the rise of a dominant power. The Koka ninja served these groups, using their expertise to investigate enemy movements, assess weaknesses, launch surprise attacks, and provide strategic advice. Their role was crucial, and their activities often determined the outcome of battles and the fate of their patrons.

The role of the Koka ninja evolved over time. During the Sengoku period (1467–1568), a time marked by widespread armed conflict, they were involved primarily in combat, intelligence gathering and strategic planning. During the relatively peaceful Edo period (1603–1867), some of the Koka ninja took positions in central or local government, where they served as escorts, guards, and sentinels for coastal defense.

Discover the world of the ninja and learn about their skills, tools, and importance in history during your visit to Koka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍者とは

忍者には二種類がありました：闇に紛れて戦闘や潜入を行う「隠忍」と、僧侶や商人、大道芸人などに変装してターゲットと交わり、情報を収集する「陽忍」がいました。陽忍は、長期にわたってその地域に滞在し、地域住民と親しくなりながら目的を達成しました。彼らは、肉体的持久力、精神的敏捷性、戦略的思考を必要とする、さまざまなステルス戦術やサバイバル戦術を駆使しました。

甲賀地域は当時としては珍しく、他の多くの地域とは異なり、地元大名の権力が弱かったのが特徴です。その代わりに、地元の共同体が血縁や地縁に基づいてグループを組織し、自律的な統治と集団的な自衛を実践することで安定を維持し、支配的な権力の台頭を防いでいました。甲賀流忍者は、俸禄と引き換えにその専門知識を駆使して敵の動きを調査し、弱点を見極め、奇襲を仕掛けたり、戦略的な助言を与えました。彼らの功績は非常に重要で、その活動がしばしば戦いの結果や主君の運命を左右することがありました。

甲賀忍者の役割は時代とともに進化しました。広範な武力紛争があった戦国時代（1467年～1568年）には、主に戦闘、情報収集、戦略立案に従事していました。比較的平和な江戸時代（1603年～1867年）には、一部の甲賀忍者が中央や地方の政府で職を得て、護衛や警護、沿岸防衛の見張り役などを務めました。

甲賀市を訪れる際は、忍者の世界を発見し、忍者の技術、道具、彼らが歴史に果たした役割についてを学んでください。

031-011

History of the Koka Ninja

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀市：甲賀流忍者の歴史

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

History of the Koka Ninja

The Koka ninja demonstrated fortitude and patience, dedicating themselves to their missions without seeking personal glory. They were connected to some of the country's most famous historical figures but kept a low profile.

Origin Legend

The true origins of the Koka ninja are unknown, but one legend connects them to Prince Shotoku (574–622), an influential figure celebrated for his many contributions to Japanese culture. He reportedly had a servant from Koka named Otomono Sabito, who possessed great skill as a spy and earned the name *shinobi* (sleuth).

Sengoku Period (1467–1568)

The power of the local daimyo was weak in the Koka area at this time, unlike in most other parts of the country. The Koka area was unusual for its time, because it did not come under the authority of a warrior-class ruler as in most other parts of the country. Instead, the local community formed groups that were based on blood and territorial ties, and practiced autonomous local governance.

Eventually, these groups began to cooperate across the entire Koka district, leading to the establishment of a self-governing organization known as the Koka Gunchuso. This organization and its collective defense strategy were crucial in maintaining stability and preventing the rise of a single, dominant ruling figure. Warlords from other regions hired Koka ninja as mercenaries, relying on their intelligence-gathering skills to win battles.

First Significant Battle (1487)

The shogun Ashikaga Yoshihisa (1465–1489) launched an army against the Rokkaku domain of Omi Province (present-day Shiga Prefecture) in 1487. The Koka ninja rallied around the Rokkaku family and used surprise tactics to repel the shogun's army. Twenty-one of them launched a particularly daring night raid, injuring Yoshihisa. These attacks brought widespread attention to the Koka ninja, and the ninja families who participated in the conflict were revered.

Close Ties with Influential Figures

The Koka ninja were loyal to the warlord Oda Nobunaga (1534–1582), who was instrumental in establishing conditions that led to the unification of Japan. When one of his retainers, Tokugawa Ieyasu (1543–1616), was prevented from returning to his base in Okazaki (Aichi Prefecture), the ninja offered Ieyasu sanctuary as he passed through Koka, strengthening their relationship with the Tokugawa family. The Koka ninja repeatedly came to Ieyasu's aid throughout various other battles until he eventually became shogun.

Edo Period (1603–1867)

Tokugawa Ieyasu unified Japan and became shogun, establishing his capital in Edo in 1603 and ushering in a period of peace. Agricultural advancements increased productivity, and improved transportation networks led to the growth of nationally unified markets. These changes, along with the expansion of commerce, contributed to economic and social development throughout Japan. Some of the Koka ninja took positions in central or local government, where they served as escorts, guards, and sentinels for coastal defense.

Learn more about the exploits of the Koka ninja at the Kokaryu Real Ninjakan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀市：甲賀流忍者の歴史

甲賀流忍者は不屈の精神と忍耐力を発揮し、個人的な栄光を求めることなく任務に専念しました。地味な存在でありながら、歴史上の有名人も深い縁があります。

起源にまつわる伝承

甲賀流忍者の起源は不明ですが、日本文化に多大な貢献をした聖徳太子（574-622）に関連する伝説があります。聖徳太子には、スパイとして優れた手腕を発揮し、shinobi 』と呼ばれた大伴細人という甲賀出身の使用人がいたと伝えられています。

戦国時代（1467-1568）

甲賀地域は当時としては珍しく、他の多くの地域とは異なり、地元大名の権力が弱かったのが特徴です。代わりに、地域社会は血縁と地縁に基づく『同名中』というグループを形成し、自律的な地域統治を行っていました。

やがて、これらのグループは甲賀全域で協力し合い、『甲賀郡中惣』と呼ばれる自治組織を設立するに至りました。この組織と集団的防衛戦略は、安定を維持し、一人の支配的な人物の台頭を防ぐ上で極めて重要でした。他地域の武将が甲賀流忍者を傭兵として雇い、その情報収集能力を頼りに戦いに勝利しました。

最初の重要な戦い（1487年）

将軍足利義尚（1465-1489）は1487年、軍を率いて、近江国（現在の滋賀県）の六角氏に侵攻しました。甲賀流忍者は六角一族を中心に結集し、奇襲戦術で足利軍を撃退しました。そのうちの21人が特に大胆な夜襲をかけ、義尚に怪我を負わせました。これらの攻撃により、甲賀は全国的に注目されるようになり、この戦いに参加した忍者一家は崇敬されるようになりました。

有力者との緊密な関係

甲賀忍者は、日本統一への道を切り開いた戦国大名、織田信長（1534-1582）に忠誠を誓いました。信長の家臣であった徳川家康（1543-1616）が、岡崎（現在の愛知県）への帰還を阻まれた際、甲賀を通過する家康に避難所を提供し、徳川家との関係を深めました。その後も甲賀忍者は、家康が将軍になるまでの様々な戦いでたびたび援助を行いました。

江戸時代（1603-1868）

1603年、徳川家康が天下統一を果たし、江戸幕府が開かれ、平和な時代が到来を告げました。農業技術の進歩により生産性が向上し、交通網の整備が全国的な市場の発展を促しました。これらの変化に加え、商業の拡大が経済や社会の発展を後押ししました。一部の甲賀忍者が中央や地方の政府で職を得て、護衛や警護、沿岸防衛の見張り役などを務めました。

甲賀流忍者の活躍については、甲賀流リアル忍者館で詳しく知ることができます。

031-012

What Are Ninja?

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流リアル忍者館： 忍者とは

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

What Are Ninja?

The role of the Koka ninja evolved over time. During the Sengoku period (1467–1568), a time marked by intense warfare, they were involved primarily in combat, intelligence gathering, and strategic planning. In the relatively peaceful Edo period (1603–1867), they served mostly as guards and bodyguards.

There were two types of ninja: *innin*, who hid in darkness and engaged in combat and infiltration, and *yonin*, who disguised themselves as priests, merchants, street performers, and the like while engaging with their targets to gather information. *Yonin* would stay in an area for an extended time, becoming friendly with local residents to achieve their purpose. They employed a range of stealth and survival tactics that required physical endurance and agility, mental acuity, and strategic thinking.

The Koka ninja served various patrons, using their expertise to investigate enemy movements, assess weaknesses, launch surprise attacks, and provide strategic advice. Their role was crucial, and their activities often determined the outcome of battles and the fate of their patrons.

Discover the world of the ninja and learn about their skills, tools, and importance in history during your visit to Koka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流リアル忍者館： 忍者とは

甲賀忍者の役割は時代とともに進化しました。広範な武力紛争があった戦国時代（1467年～1568年）には、主に戦闘、情報収集、戦略立案に従事していました。比較的平和な江戸時代（1603年～1867年）には、主に護衛や警護の役割を担っていました。

忍者には、闇に紛れて戦闘や潜入を行う「隠忍」と、僧侶や商人、大道芸人などに変装してターゲットと交わり、情報を収集する「陽忍」がいました。陽忍は、長期にわたってその地域に滞在し、地域住民と親しくなりながら目的を達成しました。彼らは、肉体的持久力、精神的敏捷性、戦略的思考を必要とする、さまざまなステルス戦術やサバイバル戦術を駆使しました。

甲賀流忍者はさまざまな大名に仕え、俸禄と引き換えにその専門知識を駆使して敵の動きを調査し、弱点を見極め、奇襲を仕掛けたり、戦略的な助言を与えました。彼らの功績は非常に重要で、その活動がしばしば戦いの結果や主君の運命を左右することがありました。

甲賀市を訪れる際は、忍者の世界を発見し、忍者の技術、道具、彼らが歴史に果たした役割についてを学んでください。

031-013

Ninjutsu—Ninja Arts

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍術全般

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Ninjutsu—Ninja Arts

The main role of the ninja was to gather intelligence for their patrons. They used a range of skills to carry out their activities without drawing attention to themselves.

Ninjutsu (the art of the ninja) centered on stealth and survival tactics that required physical endurance, mental agility, and strategic thinking. The ninja developed techniques for climbing walls, jumping through the branches of trees, and crossing bodies of water quickly and silently. Ninja also incorporated practices and knowledge from *yamabushi*—mountain ascetics who sharpened their mental faculties and were skilled in using fire and medicinal herbs and navigating the terrain.

The ninja were also masters of disguise, routinely changing their appearance. They impersonated priests, merchants, street performers, and the like, and they were adept at engaging people in conversation to extract valuable information. But above all, ninja showed fortitude and patience, and selfless dedication to their missions.

Learn more about *ninjutsu* at the Kokaryu Real Ninjakan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍術全般

忍者の主な役割は、依頼主のために情報を収集することでした。彼らはさまざまな技術を駆使して、人目を引かずに活動を行いました。

忍術（忍者の技）は、隠密行動と生存戦略に重きを置き、身体的な持久力、精神的な敏捷性、そして戦略的な思考を必要としました。彼らは壁を登ったり、木々を飛び越えたり、水域を素早く静かに渡る技術を発展させました。また、忍者は山伏修行僧から火の使い方、薬草の知識、地形の把握など、精神修行の技術を取り入れました。

忍者は変装の達人であり、群衆に紛れるために日常的にその姿を変えました。彼らは僧侶、山伏、商人、大道芸人、侍などになりすまし、人々と会話を交わしながら貴重な情報を引き出し、それを自分たちの利益に利用しました。しかし何よりも、忍者は強い忍耐力を示し、個人的な欲望を捨てて任務に身を捧げました。甲賀流リアル忍者館では、忍術についてさらに学び、実際に体験することができます。

031-014

Tourism Information

滋賀県甲賀市

【タイトル】観光情報センター

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Tourism Information

Delve further into ninja culture at sites around Koka where ninja were active. You can visit the centuries-old shrine where ninja gathered for tactical meetings and prayed for success in their missions; follow a hiking trail up to one of the three sacred mountains where ninja are said to have trained; or learn more about the ninja's skills in making herbal medicine at the Koka Museum of Medicine. Staff can provide guidance on these and other ninja-related attractions in the area, as well as information on bicycle rental for those wishing to explore further afield.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

観光情報センター

甲賀の各地には忍者文化を体感できるスポットが多くあります。戦略的な会合を行い、任務の成功を祈願したと言われる神社や、忍者が修行したとされる三霊山へのハイキングコース、そして甲賀市くすり学習館で忍者が薬草学のスキルを磨いた歴史について学べる場所などを訪れることができます。

スタッフがこれらやその他の甲賀地方の忍者に関連する観光スポットについて案内し、遠方を探索したい方には自転車のレンタルもご利用いただけます。

031-015

The Kokaryu Ninja Research Team Exhibition

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流忍者調査団展示について

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Kokaryu Ninja Research Team Exhibition

Pop culture, media, and art forms like manga and film have introduced ninja to the world and shaped their popular image, but these portrayals of ninja are often historically inaccurate.

This exhibition introduces the activities and findings of the Kokaryu Ninja Research Team, also known as the Ninja Finders. The researchers have discovered a number of documents about *ninjutsu* (ninja arts) and other aspects of ninja culture that were produced in the first half of the Edo period (1603–1867). These documents were safeguarded and passed down by the descendants of ninja families, allowing the Kokaryu Ninja Research Team to form a detailed picture of the Koka ninja and their lives. The documents are replicas, as the originals are too fragile for public display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流忍者調査団展示について

この展示では、「甲賀流忍者調査団 忍者ファインダーズ」として知られる甲賀流忍者調査団の活動と発見、および甲賀流忍者の歴史に関する調査を紹介しています。劇、映画、テレビ、書籍、漫画などを通じて忍者が世界に紹介され、人気のイメージが形成されてきましたが、これらの忍者像は歴史的には正確でないことが多くあります。

幸いなことに、江戸時代前半（1603～1868年）に作成された忍術やその他の忍者文化に関する資料がいくつか発見されています。これらの資料は忍者の家系の子孫によって大切に保管され、伝えられてきたため、甲賀流忍者調査団は甲賀流忍者の詳細な姿を描くことができました。これらの資料は非常に脆いため一般公開はされていませんが、展示ではその内容について学ぶことができます。

031-016

History of the Koka Ninja

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流リアル忍者館：甲賀流忍者の歴史

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

History of the Koka Ninja

The Koka ninja demonstrated fortitude and patience, dedicating themselves to their missions without seeking personal glory. Despite their low profile, they were connected to some of Japan's most famous historical figures.

During the Sengoku period (1467–1568), warlords from other regions hired Koka ninja as mercenaries and relied on ninja intelligence-gathering skills to achieve their ambitions.

First Significant Battle (1487)

In 1487, shogun Ashikaga Yoshihisa (1465–1489) launched an invasion against the Rokkaku domain of Omi Province (in present-day Shiga Prefecture). The Koka ninja rallied around the Rokkaku family, with some using surprise tactics to repel the shogun's army. Others launched a daring night raid, in which the shogun was injured. These attacks brought the Koka ninja to wide attention, and the ninja families who participated in the battle were revered.

Close Ties with Influential Figures

The Koka ninja were loyal to warlord Oda Nobunaga (1534–1582), who was instrumental in the unification of Japan. In June 1582, Nobunaga was unexpectedly attacked by his own general Akechi Mitsuhide (1528–1582) and died at Honnoji Temple in Kyoto.

Mitsuhide's forces then tried to prevent Tokugawa Ieyasu (1543–1616), another of Nobunaga's supporters, from returning to his base in Okazaki (Aichi Prefecture). It is

said that the ninja offered Ieyasu sanctuary when he passed through Koka, thus strengthening their relationship with the Tokugawa family.

Nobunaga's death was avenged two weeks later when Mitsuhide was defeated. The Koka ninja repeatedly came to Ieyasu's aid throughout various other battles until he eventually became shogun.

Siege of Fushimi Castle (1600)

The siege of Fushimi Castle was a small but historically significant battle leading up to the more famous Battle of Sekigahara later in the year that brought an end to fighting among the warlords who were ruling local domains around the country. Tokugawa Ieyasu (1543–1616) had assigned Torii Mototada (1539–1600) to protect the castle. Torii was headquartered there with his household when it was placed under siege by a massive force under Ishida Mitsunari (1563–1600), a general who bitterly opposed Ieyasu's bid to rule the country.

Torii held out for 10 days, but ultimately the castle fell. Torii and his family all perished, but a group of about 100 ninja fought for the Tokugawa side, defending the castle alongside Torii and his forces. While many died during the siege, they are remembered as heroes whose sacrifice paved the way for the later success of Ieyasu's efforts toward the unification of Japan. After Ieyasu became shogun in 1603, he invited the descendants of the Koka ninja who died in the siege to defend the castle at Edo (modern-day Tokyo).

The Edo Period (1603–1867)

Tokugawa Ieyasu unified Japan and became the first Tokugawa shogun in 1603, ushering in a period of peace. Some of the ninja took positions in central or local government or became engaged as escorts, guards, and sentinels for coastal defense.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流忍者の歴史

不屈の精神と忍耐力を発揮し、個人的な栄光を求めることなく任務に専念した甲賀流忍者。目立たない存在でありながら、歴史上の有名人も深い縁があります。

戦国時代（1467-1615）、他地域の武将は甲賀流忍者を傭兵として雇い、その情報収集能

力を頼りに戦いに勝利しました。

最初の重要な戦い（1487年）

1487年、将軍足利義尚（1465年～1489年）は近江国（現在の滋賀県）にある六角氏の領地に侵攻しました。甲賀忍者たちは六角家を支援し、一部は奇襲戦術を用いて将軍の軍を撃退しました。また、別の者たちは大胆な夜襲を行い、将軍に傷を負わせました。これらの攻撃により甲賀忍者は広く注目を集め、戦いに参加した忍者の家々は崇拜されるようになりました。

変革者との密接な関係

甲賀流忍者は戦国武将の織田信長（1534-1582）に忠誠を誓いました。天正10年（1582）6月、信長は家臣の明智光秀（1528-1582）に襲撃され、京都本能寺で戦死しました。

光秀の軍勢は、同じく信長の家臣である徳川家康（1543-1616）が岡崎（愛知県）の拠点に戻るのを阻止しようとしていました。家康が甲賀を通過する際、忍者は家康を保護する旨を申し出て、徳川家との関係を強化したと言われています。その2週間後に光秀が討たれたことで仇は討たれ、家康が将軍になる道が開かれました。

伏見城の戦い（1600年）

伏見城の戦いは、日本の戦国時代を終わらせた有名な関ヶ原の戦いにつながる、小さいながらも歴史的に重要な戦いでした。この戦いは、全国の各地を支配していた大名たちの抗争を終結させるきっかけとなりました。徳川家康（1543年～1616年）は城を守るために鳥居元忠（1529年～1600年）を配置しました。鳥居は家族とともに伏見城を本拠地とし、家康の国の統治を激しく反対する将軍石田三成（1563年～1600年）の大軍によって包囲されました。

鳥居は10日間持ちこたえましたが、最終的に城は陥落し、彼とその家族は全滅しました。しかし、約100名の忍者が徳川側として戦い、鳥居の軍とともに城を守りました。多くの忍者が籠城戦で命を落としましたが、彼らの犠牲は、後の家康の日本統一への成功を後押しした英雄として記憶されています。1603年に家康が将軍になると、彼は包囲戦で命を落とした甲賀忍者の子孫を招き、江戸（現在の東京）防衛の部隊に加えることを招請しました。

江戸時代（1603-1868）

1603年、徳川家康が天下統一を果たし、初代将軍に就任し、平和な時代の到来を告げます。甲賀に残り、農民として生計を立てたり、地方政府の役職に就いたりする忍者もいれば、甲賀を離れる忍者もいました。

彼らは他藩に職を求め、護衛、警備、海岸防衛などの任務に就きました。やがて甲賀に戻る者もいました。

031-017

Experiences at the Kokaryu Real Ninjakan

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流リアル忍者館での体験

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Experiences at the Kokaryu Real Ninjakan

The Kokaryu Real Ninjakan offers hands-on activities based on skills for which the ninja were renowned. *Shuriken* (throwing stars), among the most famous ninja tools, were easy to carry and made no noise when used. The ninja were also admired for their physical skills, including jumping, and visitors can try *shuriken* and ninja jumping experiences.

Visitors can take pictures at the AR (augmented reality) photo spots designed to make the ninja skills of *katon no jutsu* (fire release techniques) and *suiton no jutsu* (water escape techniques) come to life.

For additional fun, ninja costumes can be rented for a small fee at the Kokaryu Real Ninjakan. Rental bicycles are available for those wishing to explore further afield in Koka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流リアル忍者館での体験

忍者のアクティビティに挑戦して、観光を満喫しましょう。忍者の代表的な忍具の一つである手裏剣は、持ち運びが簡単で使用時に音を立てません。また、忍者は跳躍力にも優れていました。甲賀流リアル忍者館で手裏剣や忍者跳躍の体験を通じて、自分のスキルを試してみてください。

AR（拡張現実）フォトスポットでは、火遁の術や水遁の術など、忍術に基づいた写真を撮ることができます。

さらに楽しみたい方は、甲賀流リアル忍者館で現代風にアレンジされた忍者衣装をレンタルし、忍者の雰囲気味わうことができます。甲賀市内を散策したい人には、レンタサイクルも用意されています。

031-018

Ninja Tools

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍具

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Ninja Tools

The Koka ninja used a range of original tools, known collectively as *ninki* or *ningu*, when undertaking their missions. Many of these were adapted from items such as farm implements and other everyday materials, allowing the ninja to carry them without arousing suspicion. The tools, which included not only weapons but also equipment for climbing, signaling, and distracting, helped the ninja outsmart their adversaries. The Kokaryu Real Ninjakan features a collection of authentic *ningu* that showcase the creativity and ingenuity of the Koka ninja.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍具

甲賀忍者は任務を遂行する際、忍器または忍具と総称されるさまざまな独自の道具を使用していました。これらの多くは、農具や日常品などから改造されており、忍者が持ち歩いても怪しまれないように工夫されていました。これらの道具には、武器だけでなく、登攀用具、合図を送るための器具、注意を逸らすための装置などが含まれており、忍者はこれらを駆使して敵を出し抜いていました。甲賀流リアル忍者館では、甲賀忍者の創造性と工夫を示す本物の忍具のコレクションが展示されています。

031-019

Gift Shop (Kokaryu Real Ninjakan)

滋賀県甲賀市

【タイトル】 お土産売り場について

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Gift Shop (Kokaryu Real Ninjakan)

The gift shop at the Kokaryu Real Ninjakan has a variety of ninja-themed goods, such as sweets, snacks, and stationery, as well as specialty products from Koka. Complete your visit with a souvenir or gift for family and friends.

Shiga Prefecture was one of the first places in Japan to cultivate tea, starting in the early ninth century when a Buddhist priest brought back tea seeds from China. The Koka area now produces around 90 percent of the prefecture's tea. The gift shop carries a range of locally grown teas, along with tea flavored confectionery.

Koka's climate is also ideal for rice cultivation, and there are a number of sake breweries in the area. The gift shop has a variety of locally brewed sakes, and the staff will be happy to assist in making a selection.

The town of Shigaraki, which has a pottery-making tradition dating back over 800 years, is part of the Koka municipal area. The local clay and availability of abundant firewood make it ideal for the production of pottery, and Shigaraki ware is prized throughout Japan. A selection of pottery is available at the gift shop, including the famous statues of *tanuki* (Japanese racoon dogs). These statues are a signature product of Shigaraki and a popular symbol of good luck.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

お土産売り場について

訪問の締めくくりにお土産を手に入れたり、家族や友人へのプレゼントを探したり。甲賀流リアル忍者館のお土産売り場では、忍者をテーマにしたお菓子や文房具、甲賀の特産品など、さまざまな商品が揃っています。

滋賀県は、9世紀初頭に僧侶が中国から茶の種を持ち帰ったのが始まりで、日本で最初にお茶を栽培した地のひとつとして知られている。現在、甲賀地方は滋賀県の茶生産の約90%を占めています。お土産売り場では、地元産のお茶やお茶風味のお菓子を取り揃えています。

また、甲賀の気候は米の生産にも適しているため、地域内には多くの酒造が存在します。さまざまな地元の酒が販売されており、スタッフが最適な選択をお手伝いいたします。

陶芸の伝統が800年以上にわたって続く信楽も甲賀地域に位置しています。信楽の粘土と豊富な薪は陶芸に理想的であり、今日、信楽焼は日本全国や世界中で高く評価されています。お土産売り場は、信楽の代表的な製品であり、幸運の象徴として人気のあるたぬきの置物など、陶器の品々を取り揃えています。

031-020

Kokaryu Ninja Research Team

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流忍者調査団・団長の磯田道史氏について

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Kokaryu Ninja Research Team

Pop culture, media, and art forms like manga and film have introduced ninja to the world and shaped their popular image, but these portrayals are often inaccurate. The Kokaryu Ninja Research Team, also known as the Ninja Finders, has used historical documents and interviews with descendants of local ninja families to piece together a truer picture. This exhibition room introduces the activities and findings of the team, which is led by Professor Isoda Michifumi of the International Research Center for Japanese Studies. While research is ongoing, the team hopes the exhibition will serve as a hub for sharing this collective knowledge and helping people gain insight into the Koka ninja.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀流忍者調査団・団長の磯田道史氏について

展示室では、「甲賀流忍者調査団 忍者ファインダーズ」として知られる甲賀流忍者調査団の活動と発見、および甲賀流忍者の歴史に関する調査を紹介しています。チームリーダーは、国際日本文化研究センターに所属する磯田道史教授です。

演劇、映画、テレビ、書籍、漫画などを通じて忍者が世界に紹介され、人気のイメージが形成されてきましたが、これらの忍者像はしばしば正確ではありません。甲賀流忍者研究チームは、歴史的な文書や地元の忍者家系の子孫へのインタビューを用いて、甲賀流忍者の真実の姿を解明しています。調査は現在も進行中であり、チームはこの展示が甲賀流忍者に関心を持つすべての人々に知識を共有する拠点となることを期待しています。

【タイトル】 忍書

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Historical Documents About Ninja

Due to the secretive nature of their activities, the Koka ninja left behind few records. Fortunately, researchers have discovered a number of documents about *ninjutsu* (ninja arts) and other aspects of ninja culture that were produced in the first half of the Edo period (1603–1867). These materials had been safeguarded and passed down by the descendants of ninja families, allowing researchers to piece together and preserve this knowledge for future generations.

Please note that the documents are replicas due to the fragile state of the original materials.

- The *Bansenshukai* is a compilation of knowledge about *ninjutsu* (ninja arts) from both Koka and Iga (in adjacent Mie Prefecture). It was compiled in 1676 by a descendant of the Fujibayashi ninja family and is the most comprehensive known record of *ninjutsu*. The book is a designated Important Cultural Property.
- The *Ninjutsu Ogiden*, passed down through the Mochizuki family, explains the origins of *ninjutsu* and is written in classical Chinese. It includes the legend of Aburahi Daimyōjin, the deity enshrined at Aburahi Shrine, where the Koka ninja gathered for tactical meetings.
- The historical records of the Watanabe family, a prominent ninja family in the Owari domain (present-day Aichi Prefecture) during the Edo period, contain details of the techniques and strategies favored by the Koka ninja.
- A copy of the *Kanrin seiyo* was discovered in Koka in 2021. The document is believed to date from 1748. However, in 1676, a member of the Fujibayashi ninja family mentions the *Kanrin seiyo* in his preface to the more famous *Bansenshukai*, stating that he had included some of its content in his text. This suggests the original *Kanrin seiyo* predates the *Bansenshukai*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍書

その活動の秘密性から、甲賀流忍者が残した記録はほとんどありません。しかし、研究者は、江戸時代前期（1603～1868年）に作成された忍術（忍者の技）や忍者文化に関するいくつかの文書を発見しました。これらの資料は、忍者家系の子孫によって大切に保管され、後世に伝えられてきたものです。研究者たちは、知識をまとめ、後世に残すことを目標としています。

なお、これらの資料は非常に脆弱な状態にあるため、一般公開はされていません。

・万川集海：甲賀と伊賀（三重県）の知識を忍者の訓練に使用した書物で、忍者家系の子孫である藤林氏によって1676年に編纂されました。市指定文化財であり、現存する最も包括的な忍術の記録として知られています。

・忍術應義傳：望月家に伝わるこの書物は、忍術の起源と心構えを説明しており、古典中国語で書かれています。甲賀流忍者が戦略会議を開いた油日（あぶらひ）神社に祀られている神、油日大明神（あぶらひ だいましょうじん）の由来に関する物語も含まれています。

・江戸時代、尾張藩（現在の愛知県）で密偵として活動していた著名な忍者家系である渡辺家の歴史記録には、甲賀流忍者が好んで使用した技術や戦略の詳細が含まれています。

・間林清陽：最近、2021年に甲賀で発見された1748年にさかのぼるとされる文書の写しです。1676年、藤林氏はより有名な『万川集海』の序文で『間林清陽』に言及し、その内容の一部を自著に含めたと述べています。これは、オリジナルの『間林清陽』が『万川集海』よりも古いことを示唆しており、甲賀で発見された文書が手書きの写しであることを示しています。

031-022

Koka Ninja in the Edo Period

滋賀県甲賀市

【タイトル】江戸時代の甲賀流忍者

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Koka Ninja in the Edo Period

Tokugawa Ieyasu unified Japan and established the Edo shogunate in 1603, ushering in a period of peace that lasted more than 260 years.

The Shimabara Rebellion

The Shimabara Rebellion of 1637–1638 was the last major battle in which Koka ninja played a role. Christianity, which had entered Japan in the sixteenth century, was suppressed by the shogunate. The anti-Christian policies of the shogunate prompted Amakusa Shiro (1621–1638), a young Japanese Christian, to lead an uprising in present-day Nagasaki and Kumamoto Prefectures. Shiro and his forces established their stronghold in Hara Castle, an abandoned structure in the southern part of Nagasaki Prefecture.

Ten Koka ninja were among the forces sent to stop the rebellion in 1638, and their task was to collect information from within Hara Castle. They successfully infiltrated the castle and sabotaged the rebels' food supply; however, confused by the unfamiliar local dialect, they were caught by the rebels before they could escape.

The Koka *Koshi*

Following the unification of the country under the Tokugawa shogunate in 1603, the ninja faced a general decline in demand for their services, with some families even experiencing poverty.

In 1789, a group called the *Koka Koshi* (Koka veteran warriors) journeyed to Edo, presenting the *Bansenshukai* (a compilation of detailed ninja knowledge) to the

shogunate with the aim of proving their heritage and professionalism. For their efforts, they received silver to take back to the other ninja families in Koka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

江戸時代の甲賀流忍者

1603年に徳川家康が天下統一を果たし、江戸幕府が開かれ、平和な時代が到来しました。

島原の乱

1637年から1638年にかけて起こった島原の乱は、甲賀忍者が関与した最後の大きな戦いでした。16世紀に日本に伝来したキリスト教は、幕府によって弾圧されていました。この反キリスト教政策に対し、若き日本人キリシタンである天草四郎（1621-1638）が、現在の長崎県や熊本県で反乱を起こしました。四郎とその軍勢は、長崎県南部にある放棄された城である原城を拠点としました。

1638年、反乱を阻止するために派遣された部隊の中に10人の甲賀流忍者がおり、彼らの任務は原城内から情報を収集することでした。彼らは城に潜入し、反乱軍の食糧供給を妨害することに成功しましたが、聞き慣れない九州弁に困惑し、逃げる前に敵の罠にかかってしまいました。

甲賀古士

1603年の徳川幕府による天下統一後、需要の減少に直面し、貧困にあえぐ家もありました。

そして1789年、甲賀古士は江戸に旅立ち、幕府に自分たちの血統と職業意識を証明する目的で「万川集海」（忍者の知識を詳しくまとめたもの）を献上しました。その努力の甲斐あって、古士たちは甲賀の家族のために持ち帰るための銀を受け取ることができました。

031-023

Instructions for Ninja Activities—AR attractions

How to Take Ninja Photos

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍者体験：ARアトラクションについて

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Instructions for Ninja Activities—AR attractions

How to Take Ninja Photos

Picture yourself as a ninja! Take commemorative photos with your friends and family using our AR (augmented reality) app.

Turn on “location services” on your phone, then follow the instructions below. iPhone users may get a “webcam error” message. If this happens, go to “Settings → Privacy → Safari → Allow only while using this app.”

Please note that some devices may not be compatible with this attraction.
Directions:

1. Scan the QR code on the signboard. Tap to open the camera app on your phone. Follow the prompts on the screen and select “allow.”
2. Frame the photo so that the Δ, □, and O marks on the signboard are showing in the picture. The symbols differ depending on the location.

Note that if location services are enabled but the AR screen does not appear, or if the AR screen appears enlarged, your device is not compatible with this attraction.

3. Take the photo. Pressing the shutter button quickly makes it easier to get the perfect shot.
4. Tap “save” to download the photo to your phone.
5. Check to see if the photo is saved in your camera roll.

Fire Release Techniques (*Katon no jutsu*)

Koka ninja were skilled at handling gunpowder, and they used smoke screens and loud explosions to facilitate their escape from their enemies. You can take a photo in which it looks as though you are emitting fire from your hands or mouth, or even controlling the fire!

Water Escape Techniques (*Suiton no jutsu*)

Water escape techniques involved using water to deceive the enemy. These included hiding underwater or throwing heavy stones or other objects into water to distract the enemy while the ninja made their getaway. Capture your daring water escape in a photo!

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍者体験：ARアトラクションについて

忍者写真の撮り方

忍者になりきって写真を撮りましょう！AR（拡張現実）アプリを使って、家族や友人と一緒に記念写真を撮影できます。

QRコードをスキャンし、スマートフォンに写真撮影画面を表示します。画面の指示に従って「許可」を選択します。

写真の枠に看板の△、□、○マークを収めます。場所によってマークは異なります。

写真を撮影します。シャッターボタンをすばやく押すと、ショットが撮りやすくなります。

「保存」をタップして、写真をスマートフォンにダウンロードします。

カメラロールに写真が保存されているか確認してください。

火遁の術

甲賀流忍者は火薬の扱いに長けており、煙幕や爆発音を利用して敵を驚かせ、その隙に逃げる技術を持っていました。手や口から火を放出したり、火を自在に操っているように見える写真を撮影できます！

水遁の術

水遁の術とは、水を使って敵を欺く技術です。水中に隠れることや、重い石や他の物体を投げて敵の注意をそらし、忍者が逃げるための時間を稼ぐ方法が含まれます。大胆な水遁の様子を写真に収めましょう！

031-024

Instructions for Ninja Activities—Ninja Jumping and Shuriken Throwing

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍者体験：忍者ジャンプと手裏剣投げ

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Instructions for Ninja Activities—Ninja Jumping and *Shuriken* Throwing

Ninja Jumping

The ninja were known for their physical agility, including their ability to jump over walls or through the branches of trees during their missions. How do you measure up? Test your abilities and see how high you can jump.

Instructions: Pick up a magnetic *shuriken* (ninja throwing star). Check your surroundings to ensure it is safe, then jump with all your strength and stick the star as high up on the board as you can. Measure how high up the star has stuck to see how you did. If the star is too high to reach, use the stick to retrieve it.

Shuriken Throwing

Shuriken (throwing stars) are among the best-known ninja tools. They were easy to carry around and did not create noise when used. Try your hand at throwing some.

Safety Guidelines

- Do not throw the stars at people.
- Show respect for other participants.
- Focus on the task and do your best to hit the target.
- Return the throwing stars to their original place when you are finished.

How to Grip *Shuriken*

For short distances, pinch between the pad of your thumb and the side of your index finger.
For long distances, hook your index finger around the blade for stability.

How to Throw Shuriken

Vertical (regular) throw: Start with a bent elbow and straighten your arm as you throw, releasing the star.

Horizontal throw: Bend your arm at a 90-degree angle and place it across your stomach.
Throw the star by swinging your elbow outward.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍者体験：忍者ジャンプと手裏剣投げ

忍者ジャンプ

忍者は、任務中に壁を飛び越えたり、木々を飛び回ったりする身体能力で知られていました。あなたの能力はどのくらいでしょうか？ジャンプ力を試してみましょう。

手順

磁石付きの手裏剣（忍者の投擲星）を手に取ります。周囲の安全を確認し、全力でジャンプして、できるだけ高い位置に手裏剣を貼り付けます。手裏剣がどの高さに張り付いたかを測定して、結果を確認します。手裏剣が高すぎて手が届かない場合は、スティックを使って取り戻します。

手裏剣投げ

手裏剣は、最もよく知られている忍者の道具の一つ。持ち運びが容易で、使用時に音が出ません。手裏剣を投げることに挑戦してみましょう。

安全ガイドライン

- ・手裏剣を人に向けて投げないでください。
- ・参加者同士でお互いに敬意を持ちましょう。
- ・忍者の精神を存分に発揮し、ターゲットに向かって手裏剣を全力で投げましょう。
- ・終了後は手裏剣を元の場所に返してください。

手裏剣の投げ方

垂直（通常）の投げ方：肘を曲げて構え、腕を伸ばしながら手裏剣を放ちます。

水平投げ：腕を90度に曲げ、腹部に置きます。肘を外側に振りながら手裏剣を投げます。

手裏剣の握り方

短距離：親指のパッドと人差し指の側面をつまみます。

長距離：安定性を増すために、人差し指を刃の周りにかけて握り、投げる距離を伸ばします。

031-025

Ninja Tools

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍具

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ninja Tools

Digging implements (*kunai*)

The ninja wedged *kunai* into gaps between stones to help them climb walls. The trowel-like iron tools were also used for digging holes or stuck into the ground to secure ropes, which were tied to the loops on the handles. *Kunai* are 45 to 60 centimeters long.

Gimlets (*tsubogiri*)

Tsubogiri are made of iron with an oak wood handle and are 18 centimeters long. They come in two styles, small (iron part, 4.5 cm; handle, 13.5 cm) and large (iron part, 6 cm; handle, 12 cm). The ninja used them to make holes in doors so they could reach in and unlock them.

Foot spikes (*makibishi*)

Makibishi are objects made of interlocked pieces of iron or bamboo, with 6-centimeter spikes. The ninja would scatter the *makibishi* on the floor when entering a house. Since people did not wear shoes indoors, this was an effective way of slowing down pursuers while the ninja made their escape. They have holes in the spikes and can be strung together. Ninja would also attach the *makibishi* to a rope, dragging them behind to trip up enemies.

Grappling hooks (*kaginawa*)

Kaginawa is a grappling hook with two or more spikes fastened to an iron ring and attached to a hemp rope around 4 or 5 meters long. The ninja threw the hooks up to help them climb stone walls and reach other high places, as well as to descend. They also used the hooks to restrain people after capture or to secure doors to prevent others from entering.

Medicine cases (*inro*)

An *inro* is a series of small boxes set in a case covered with lacquered wood or washi paper. The boxes are secured with string passed through holes on either side, which can be attached to a kimono sash to make the *inro* easier to carry. The ninja used *inro* to carry herbal medicines, including one to ease stomach pain, while on important missions.

Writing implements (*sekihitsu*)

The ninja carried this portable writing set with them on missions so they could record important information. They stored a fine brush inside the handle and kept ink and cotton in the container.

Cloth (*tenugui*)

This length of cloth was colored with sappanwood dye and used by the ninja in various ways: around the neck or as a headband to absorb sweat; to cover their faces; to extend the length of their kimono belts; or to help pull themselves up when climbing.

Five-colored rice (*goshikimai*)

Preparation: The ninja would dye rice using edible pigments to produce blue, yellow, red and black grains, along with white. Working in groups of four or five, the ninja would drop the colored rice as a way of leaving directions for their comrades who were following behind. The ninja would also leave rice at points along roads to help them find their way back home, and they would use the rice to create codes that they had devised in advance. A specific meaning would be assigned to each color; for example, blue rice could mean “turn right,” red rice “turn left,” and so on.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍具

くない

忍者は、石の隙間にくないを押し込んで壁を登る際に使用しました。くないは穴を掘るためにも使用され、また、くないの柄にある輪に縄を結び、地面に刺して固定することもできました。くないは鉄製で、長さは45から60センチメートルです。

坪錐

つぼぎりは鉄製で、柄はオーク材で作られており、長さは18センチ。小型（鉄部分、4.5cm; 柄、13.5cm）と大型（鉄部分、6cm; 柄、12cm）の2サイズがありました。忍者はこれを使って、ドアに穴を開けて手を差し込み、鍵を開錠することができました。

撒菱

撒菱は鉄または竹製で、6センチの竹片を十字に結びつけて作られました。忍者は家に入る際に撒菱を床に撒いていました。室内では靴を履かないため、忍者が逃げる間に追手を遅らせるのに効果的でした。また、撒菱を縄に結びつけて引きずり、敵をつまづかせることもできました。

鉤縄

鉄製の鉤を鉄の輪で束ね、約4～5メートルの麻縄に結びつけて打鉤を作りました。忍者は、石壁を登ったり、高所に到達したりするためにこの鉤を投げました。また、捕獲後に人を拘束したり、他の人が入るのを防ぐために扉を固定したりするためにも使用しました。

印籠

印籠の外装は漆塗りの木材や和紙で作られており、内部には2～5つの小さな仕切りがありました。持ち運びのために、両側に2つの穴が開けられ、紐が通されています。忍者は、重要な任務の際に胃痛を和らげる薬草などを印籠に入れて持ち運びました。

石筆

細い銅製の中空の柄に、蓋付きの墨容器が取り付けられていました。忍者は柄の中に細い筆を収納し、墨と綿を容器に保管していました。彼らは、任務中に重要な情報を記録するため、この携帯用の石筆を持ち運んでいました。

手拭

この布は蘇芳染めで色付けされました。忍者はこれを様々な方法で使用しました：首に巻いたり、汗を吸収するために頭に巻いたり、顔を覆ったり、着物の帯の長さを延ばしたり、登る際に自分を引き上げるために使用したりしました。

五色米

準備：食用の顔料を使用して米を青、黄、赤、黒、そして白に染めました。忍者は4～5人の小さなグループで協力して活動しました。彼らは、後続く仲間のために道しるべとして五色米を落としました。米は、忍者が家に帰る道を見つけるための目印として、また、あらかじめメンバーと共有されたコードを作成するために使われました。たとえば、青い米は「右折」を、赤い米は「左折」を意味する、といった具体的な意味が各色に割り当てられました。

031-026

Projection Mapping

滋賀県甲賀市

【タイトル】 プロジェクションマッピング

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Projection Mapping

This project mapping display is a visual representation of the story of the Koka ninja, inspired by some of the motifs and events that defined their history.

1. The Crest of the Rokkaku Clan

The Rokkaku were an influential family who oversaw the area that is the present-day city of Koka, in the southern part of ancient Omi Province (present-day Shiga Prefecture). In 1487, the shogun Ashikaga Yoshihisa (1465–1489) attacked Omi, intending to crush the Rokkaku, who had defied his orders. However, some families among the Koka ninja joined forces with the Rokkaku, using their skills in night raids and surprise attacks to successfully repel the shogun's army. News of this great achievement spread, bringing the prowess of the Koka ninja to wide attention for the first time.

2. Ninja Families of Koka

Members of some of the Koka families that participated in the rebellion against Yoshihisa went on to develop the Koka *ninjutsu* (ninja arts). Fifty-three families of Koka are the origins of the Koka ninja, and 21 of those were especially revered for their daring exploits in the 1487 battle.

Over time, the Koka ninja became very knowledgeable in various fields, including science, astronomy, and herbal medicine. During the Sengoku period (1467–1568), the power of the daimyo was weak in Koka, so the local community formed groups based on blood and territorial ties, and practiced autonomous local governance. In the later years of the Sengoku period, these groups established a self-governing organization called the Koka Gunchuso, where all matters concerning the district were decided by majority vote

3. Crest of Oda Nobunaga

The Koka ninja were loyal to warlord Oda Nobunaga (1534–1582), who was instrumental in the unification of Japan. In what became known as the Honnoji Incident in June 1582, Nobunaga was unexpectedly betrayed by his general Akechi Mitsuhide (1528–1582) and died at Honnoji Temple in Kyoto.

4. The Crest of Tokugawa Ieyasu

Tokugawa Ieyasu (1543–1616) was also among Nobunaga's retainers. Following Nobunaga's death, Mitsuhide's forces tried to prevent Ieyasu from returning to his base in Okazaki (part of present-day Aichi Prefecture). The Tarao family, one of the Koka families, offered Ieyasu sanctuary when he passed through Koka, leading to a strong relationship between the Tokugawa family and the Koka ninja. Nobunaga's death was avenged two weeks later when Mitsuhide was defeated, paving the way for Ieyasu to eventually become shogun and unify Japan.

5. Legacy of the Koka Ninja

The *sasayuri* (bamboo lily), the official flower of Koka, once flourished in the area. Today, citizens are making efforts to bring it back. Much like a flower blooming in the shadows, the Koka ninja did not seek the spotlight but instead focused on protecting their way of life, using their skills and logic to navigate the challenges of changing times. As the turbulent Sengoku period drew to a close and the country was unified under the Tokugawa shogunate, the demand for the services of ninja declined. However, the ninja's extensive knowledge of medicinal herbs laid the groundwork for the establishment of numerous pharmaceutical companies in the Koka region, and these continue to thrive today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

プロジェクトマッピング

このプロジェクトマッピングの展示は、甲賀流忍者の歴史を決定づけたいくつかのモチーフや出来事に着想を得て、甲賀流忍者の物語を視覚的に表現したものです。

1) 六角の家紋

六角家は、古代近江国（現在の甲賀市）の南部を支配していた有力な一族です。1487年、将軍足利義尚（1465-1489）は、命令に従わなかった六角家を打ち破るために近江を攻撃しました。しかし、甲賀五十三家が六角家と力を合わせ、夜襲や奇襲を駆使して将軍の軍を撃退し

ました。この大勝利のニュースは日本中に広まり、初めて甲賀流忍者の卓越した能力が全国的に知られることとなりました。

2) 甲賀二十一家

反乱時に活動していた甲賀五十三家の中で、二十一家が特に顕著な業績を挙げ、甲賀忍術の中心的な実践者となりました。

時を経て、甲賀流忍者は科学、天文学、薬学などさまざまな分野において非常に高い知識を持つようになりました。戦国時代（1467年～1568年）、甲賀では大名の権力が弱かったため、地元の共同体が血縁や地縁に基づくグループを形成し、自律的な地域統治を行っていました。戦国時代の後期には、これらのグループが「甲賀郡中惣」と呼ばれる自治組織を設立し、地域に関するすべての事項を多数決で決定していました。

3) 織田信長の家紋

甲賀流忍者は、日本の地域統一の条件を整えるのに重要な役割を果たした戦国大名、織田信長（1534–1582）に忠誠を尽くしました。1582年6月、いわゆる「本能寺の変」で、信長は家臣である明智光秀（1528–1582）の裏切りを受け、京都の本能寺で死去しました。

4) 徳川家康の家紋

徳川家康（1543–1616）は、信長のもう一人の家臣でした。信長の死後、明智光秀の軍勢は、家康が岡崎（現在の愛知県）にある拠点に戻るのを妨害しようしました。その際、五十一の甲賀家の一つである多羅尾家が甲賀を通過する家康に避難所を提供し、徳川家と甲賀流忍者との強力な関係を築きました。信長の死の二週間後、明智光秀が敗北したことで、家康が將軍となり、日本の統一を果たす道が開かれました。

5) 甲賀流忍者

甲賀市の市花であるササユリは、かつてこの地域で盛んに咲いていましたが、現在、市民はその再生に取り組んでいます。影で咲く花のように、甲賀流忍者は目立つことを求めず、変化する時代の挑戦を乗り越えるために自らの技術と論理を駆使して生き抜くことに焦点を当てていました。日本が統一され戦国時代が終わりに近づくと、忍術の需要が減少し、甲賀流忍者は次第に公の場から姿を消しました。しかし、彼らの薬学に関する広範な知識のおかげで、多くの製薬会社が甲賀地域に設立され、今日まで繁栄し続けています。

031-027

Ninja Art Room

滋賀県甲賀市

【タイトル】 忍者アートルーム

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ninja Art Room

This exhibit showcases works from Yamanami Kobo, an art studio in Koka. Collaborating artists have created unique interpretations of ninja. The exhibition was intended to be temporary but proved so popular it is now permanent.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

忍者アートルーム

このコレクションは、地元の住民が忍者を独自に解釈し創作した作品を支援している、甲賀市のやまなみ工房の作品を展示しています。当初は一時的な展示の予定でしたが、非常に人気が高いため、現在は常設展示として楽しむことができます。この忍者とアートの融合をお楽しみください！

031-028

History of the Koka Ninja

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀流忍者の歴史

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

History of the Koka Ninja

Origin Legend

The origins of the Koka ninja are unknown, but one legend connects them to Prince Shotoku (574–672), an influential figure celebrated for his many contributions to Japanese culture. He reportedly had a servant from Koka named Otomono Sabito, who was highly skilled as a spy. However, the first mention of ninja in written texts does not appear until the fourteenth century.

Sengoku Period (1467–1568)

Local autonomy developed in the Koka area because the daimyo had little power over the area—an unusual situation at the time. The community formed groups based on blood and territorial ties and set up a self-governing organization known as the Koka Gunchuso. This self-regulation, along with the collective defense strategy of the region, was crucial in maintaining stability and preventing the rise of a single dominant power.

Warlords from other regions hired Koka ninja mercenaries and relied on their intelligence-gathering skills to fulfill their strategic ambitions.

First Significant Battle (1487)

In 1487, shogun Ashikaga Yoshihisa (1465–1489) launched an invasion of the Rokkaku domain of Omi Province (present-day Shiga Prefecture). The Koka ninja rallied around the Rokkaku family, and some ninja used surprise tactics to repel the

shogunate's army. Twenty-one of them launched a particularly daring night raid, injuring Yoshihisa. These attacks brought members of the Koka clan to wide attention, and the ninja families who had participated in the battle were revered.

Trusted Supporters of Tokugawa Ieyasu (1562)

In 1560, Tokugawa Ieyasu (1543–1616) gained his independence from the Imagawa family, to whom he was tied by marriage. After allying himself with the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582), Ieyasu asked the Koka ninja for their support in attacking the well-fortified Kamigo Castle (Aichi Prefecture) in 1562. Around 200 of the Koka ninja helped to infiltrate the castle, killing Udonō Nagateru (unknown–1562), the lord of the castle and part of the Imagawa family. Nagateru's two sons were taken hostage, and Ieyasu exchanged them for the safe return of his wife and child, who were being held by the Imagawa clan. Ieyasu is believed to have written to the Koka ninja to thank them for their part in this successful outcome.

Assisting in Ieyasu's Escape (1582)

On June 2, 1582, Nobunaga was unexpectedly attacked by his retainer Akechi Mitsuhide (1528–1582) and died at Honnoji Temple in Kyoto. Mitsuhide's forces tried to prevent Ieyasu from returning to his base in Okazaki (Aichi Prefecture), and the ninja offered Ieyasu sanctuary when he passed through Koka, thereby strengthening their relationship with the Tokugawa family. Nobunaga's death was avenged two weeks later when Mitsuhide was defeated, paving the way for Ieyasu to eventually become shogun in 1603 and unify Japan.

Toyotomi Hideyoshi Punishes the Ninja (1585)

Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) was another of Nobunaga's retainers who rose to a position of power. In 1585, he ordered the Koka ninja to build a levee as part of a flooding attack strategy. The levee collapsed, causing a flood. The ninja involved in building the levee were blamed and stripped of their land. Some remained in Koka to make their living as farmers, while others left the region in search of other work.

Siege of Fushimi Castle (1600)

The siege of Fushimi Castle was a small but historically significant battle leading up to

the Battle of Sekigahara, which ended the turbulent Sengoku period. Torii Mototada, one of Tokugawa Ieyasu's retainers, entered the castle to defend it. For 10 days, he and his household were under siege by military commander Ishida Mitsunari (1563–1600) and his forces. A group of ninja known as the Koka 100 participated in the battle at Fushimi Castle on Ieyasu's side. Their efforts allowed Ieyasu to concentrate on more strategic battles. After Ieyasu became shogun of Japan in 1603, he invited the surviving members of the original Koka 100 to serve in the defense of Edo (modern-day Tokyo).

Edo Period (1603–1868)

Tokugawa Ieyasu unified Japan and began the Edo shogunate in 1603, ushering in a period of peace that lasted more than 260 years. The ninja faced a general decline in demand for their services, and some families experienced poverty.

The Shimabara Rebellion

The Shimabara Rebellion of 1637–38 was the last major battle in which Koka ninja played a role. Amakusa Shiro (1621–1638), a young Japanese Christian, led an uprising against the shogunate at Hara Castle, Shimabara (present-day Nagasaki and Kumamoto Prefectures) for its anti-Christian policies. Ten Koka ninja were among the troops sent to stop the rebellion, and their task was to collect information from within the castle. They successfully infiltrated the castle and sabotaged the rebels' food supply. However, confused by the unfamiliar local dialect, they got caught in the rebels' trap.

The Koka Koshi

Following the unification of the country under the Tokugawa shogunate in 1603, the ninja faced a general decline in demand for their services, with some families even experiencing poverty.

In 1789, a group called the Koka *Koshi* (Koka veteran warriors) journeyed to Edo, presenting the *Bansenshukai* (a compilation of detailed ninja knowledge) to the shogunate with the aim of proving their heritage and professionalism. For their efforts, they received silver to take back to the other ninja families in Koka.

甲賀流忍者の歴史

起源にまつわる伝承

甲賀流忍者の起源は不明ですが、日本文化に多大な貢献をした聖徳太子（574-672）に関連する伝説があります。聖徳太子にはスパイとして優れた手腕を発揮した大伴細人（おおとものほそひと）という甲賀出身の使用人がいたと伝えられています。しかし、忍者について初めて文献に登場するのは14世紀のことです。

戦国時代（1467-1615）

甲賀地域では、大名の権力がほとんど及ばないという当時としては珍しい状況の中で、地域自治が発展しました。地元の家々は、血縁や領地のつながりに基づいて集団を形成し、甲賀郡中惣と呼ばれる自治組織を立ち上げました。この自主規制と地域の集団防衛戦略は、安定を維持し、一強の台頭を防ぐ上で極めて重要でした。

戦国時代、他地域の武将は甲賀流忍者を雇い、その情報収集能力を頼りに戦いに勝利していました。

最初の重要な戦い（1487年）

将軍足利義尚（1465-1489）は1487年、軍を率いて甲賀の六角氏に侵攻しました。甲賀流忍者は六角氏を中心に結集し、53人の忍者が奇襲戦術で幕府軍を撃退しました。そのうちの21人が特に大胆な夜襲をかけ、義尚を負傷させました。これらの攻撃により、甲賀の忍者軍団は全国的に注目されるようになり、戦いに参加した忍者一族は崇敬されるようになりました。

徳川家康に信頼された忍者たち（1562年）

1560年、徳川家康（1543-1616）は姻戚関係にあった今川家から独立しました。織田信長（1534-1582）と同盟を結んだ家康は、1562年、堅固な上郷城（愛知県）を攻撃するため、甲賀流忍者に協力を要請しました。

約200人の甲賀流忍者が上郷城に潜入し、城主で今川家の鶴殿長照を殺害しました。家康は今川氏に捕らわれていた妻子の無事な帰還と引き換えに、長照の二人の息子を人質に取りました。家康は甲賀流忍者たちに、この成功の一翼を担ったことを感謝する手紙を書いたとされています。

家康脱出における活躍（1582年）

天正10年（1582）6月2日、信長は家臣の明智光秀（1528-1582）に襲撃され、京都本能寺滞在中に死去しました。

光秀の軍勢は家康が岡崎（愛知県）の拠点に戻るのを阻止しようとしていたため、忍者は家康が甲賀を通過する際、家康を保護する旨を申し出て、徳川家との関係を強化しました。

2週間後に光秀が敗れたことで信長の仇は討たれ、1603年に家康が将軍となって日本が統一される道が開かれました。

忍者を処罰した豊臣秀吉（1585年）

豊臣秀吉（1537-1598）も信長の家臣の一人で、権力の座に上り詰めました。1585年、彼は甲賀流忍者に水攻めの一環として堤防の築造を命じましたが、堤防の一つが決壊し、作戦は失敗に終わりました。忍者たちは叱責され、甲賀忍者たちの領地を没収しました。甲賀に残って農民として生計を立てる者もいれば、他の仕事を求めてこの地を離れる者もいた。

伏見城の戦い（1600年）

伏見城の戦いは、日本の戦国時代を終わらせた関ヶ原の戦いにつながる、小さいながらも歴史的に重要な戦でした。家康の家臣であった鳥居元忠は伏見城に住んでいましたが、10日間、石田三成（1563-1600）とその軍勢に包囲されました。甲賀百人衆と呼ばれる忍者集団が伏見城の戦いに家康側として参加し、彼らの活躍により、家康はより戦略的な戦いに集中することができました。1603年、家康が征夷大将軍となった後、家康は江戸を守るため、生き残った甲賀百人衆を招請しました。

江戸時代（1603-1868）

1603年、徳川家康は日本を統一し、江戸幕府を開き、260年以上続く平和の時代が到来しました。忍者の需要は全般的に減少し、貧困に直面する家もありました。

島原の乱

1637-38年の島原の乱は、甲賀流忍者が活躍した最後の大きな戦いです。若きキリスト教徒の天草四郎（1621-1638）は、島原（現在の長崎県）の原城で幕府に対する反乱を起こしました。

反乱を阻止するために派遣された部隊の中に甲賀流忍者10人がおり、彼らの任務は城内から情報を収集することでした。彼らは城内に潜入し、反乱軍の食糧供給を妨害することに成功しましたが、聞き慣れない九州の方言に戸惑い、敵の罠にかかりました。

甲賀古士

天下統一後、身分を失った忍者たちは、自分たちの伝統を守ろうと「甲賀古士」を名乗りました。彼らは17世紀後半に何度も幕府に武士の身分を請願したが、叶うことはありませんでした。

そして1789年、甲賀古士は江戸に旅立ち、幕府に自分たちの血統と職業意識を証明する目的で「万川集海」（忍者の知識を詳しくまとめたもの）を献上しました。その努力の甲斐あって、古士たちは甲賀の家族のために持ち帰るための銭や銀を受け取れました。

甲賀士五十人

甲賀に残って農民として生計を立てたり、官職に就いたりした忍者もいれば、甲賀を離れた忍者

もいました。彼らは護衛、警備、海岸防衛などの仕事に就いたが、一部は甲賀に戻り、伏見城攻防戦での活躍が家康に認められて甲賀士五十人を結成しました。

1637年、甲賀士五十人は江戸に移り、幕府を守る砲術隊として活躍しました。1849年、甲賀流忍者の子孫たちが伏見城攻防戦250周年を記念して集まり、先祖を称えました。

甲賀流忍者は次第に表舞台から姿を消していましたが、その子孫たちは今も自分たちの伝統を大切に、甲賀の故郷に愛着を持っています。

031-029

Site of the Wada Fort

滋賀県甲賀市

【タイトル】 和田城跡（和田砦跡）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Site of the Wada Fort

During the Sengoku period (1467–1568), the ninja of the Koka region of Shiga Prefecture built forts to protect their families and defend their villages. Around 180 of these sites have been identified in the rugged mountains and valleys of the area. These forts typically were simple compounds surrounded by earthen walls and moats.

In the 1980s, researchers started to survey the area to locate the forts, helping to expand knowledge on the way the ninja protected their communities. They pieced together information that had been handed down through folklore, examined and measured earthworks, and created maps of the terrain. Most of the sites identified are on private land, and little remains of the structures. However, it is possible to visit the site of the Wada Fort, which offers insight into the role such forts played in the lives of the ninja. Visitors are encouraged to stop by the Tourism Information Center at the Kokaryu Real Ninjakan for directions, as the site is hard to find.

During the Sengoku period, the daimyo had little power over Koka, which was unusual at the time. The area was governed by local groups based on blood and territorial ties, and they adhered to an autonomous structure of regional governance. In the later years of the Sengoku period, these local groups established the Koka Gunchuso. This self-governing organization, along with the collective defense strategy of the region, was crucial in maintaining stability and preventing the rise of a single dominant power.

The ninja forts were built at places that allowed intruders to be monitored. The Wada

Fort was constructed on a hill at the end of a valley and offered a panorama of the surrounding area. Each side of the square main enclosure measured 50 meters and was surrounded by earthen walls, some of which are believed to have reached up to 7 meters in height.

The valley once had seven forts, all at good vantage points. Intruders entering the valley were under constant surveillance, and any suspicious movement would trigger an attack.

The Wada family lived in the area during the Sengoku period and built the forts in the valley. They were retainers of the Rokkaku family, who oversaw southern Omi Province (present-day Koka). Wada Koremasa (1536–1571), one of the most prominent family members, supported the influential warlord Oda Nobunaga (1534–1582) and played a major role in convincing other Koka ninja to do the same. Nobunaga was instrumental in restoring a stable government and establishing conditions under which the unification of Japan eventually became possible.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和田城跡（和田砦跡）

戦国時代（1467–1615）、滋賀県甲賀地域の忍者たちは、家族を守り、村を防衛するために砦を築きました。この地域の険しい山々や谷に約180か所の砦の跡が確認されています。これらの砦は通常、土塁で囲まれた土塁と乾燥した堀を備えた簡素な構造をしていました。

1980年代、研究者たちはこの地域の砦を特定するための調査を開始しました、忍者がどのようにして自らの共同体を守っていたかに関する知識を広める一助となりました。彼らは伝説として伝わってきた情報を組み合わせ、土塁を調査し測量を行い、地形の地図を作成しました。ほとんどの砦跡は私有地にあり、実際の構造物としてはほとんど残っていません。それでも、和田砦跡を訪れることで、忍者たちの生活において砦が果たした役割をある程度理解することができます。ただし、この場所は見つけにくいので、訪れる際には甲賀流リアル忍者館の観光案内所で道案内を受けることをお勧めします。

戦国時代、甲賀では大名の権力がほとんど及ばず、当時としては珍しいことでした。地域に権力を持つ領主はおらず、地元の武士と忍者家系が協力して地域を治めていました。有力な地元の忍者家系は、「同名中」と呼ばれる血縁や領土的なつながりに基づくグループを形成し、自律的な地

域統治の仕組みに従っていました。戦国時代の後期には、これらの同名中が「甲賀郡中惣」を設立し、この自己統治組織と地域の集団防衛戦略が安定を維持し、強力な支配者の台頭を防ぐのに重要な役割を果たしました。

忍者が作った砦は、侵入者を監視できるような山頂や谷の最も奥の有利な地点に建てられました。和田砦は、和田谷の最も奥にある丘の上に建設され、周辺地域を見渡すことができました。主郭の各辺は50メートルで、土塁に囲まれ、その一部は高さ7メートルに達していたとされています。

谷にはかつて7つの砦があり、すべてが有利な地点に位置していました。和田谷に侵入した者は常に監視され、怪しい動きがあれば攻撃が開始され、侵入者は閉じ込められることとなりました。

和田家は戦国時代に和田地域に住んでおり、谷に砦を築きました。彼らは、近江南部（現在の甲賀地域）を支配していた六角家の家臣でした。和田家の中でも特に著名な和田惟政（1536–1571）は、足利将軍家（1336–1573）と深く関わりを持っていました。1565年、彼は暗殺された将軍足利義輝の弟である足利義昭を救出し、和田の自邸に匿いました。その後、和田は有力な戦国大名織田信長（1534–1582）を支持し、他の甲賀流忍者たちを説得して信長を支援するよう促しました。信長は安定した政府を復活させ、日本の地域統一の条件を整える上で重要な役割を果たしました。

031-030

Shigaraki Kogen Railway

滋賀県甲賀市

【タイトル】 信楽高原鐵道

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Shigaraki Kogen Railway

This small railway offers visitors a chance to ride on a ninja-themed train while taking in views of the surrounding countryside. The Shigaraki Kogen Railway runs between the stations of Kibukawa and Shigaraki, which is the gateway to the major pottery-producing area of Shigaraki. The six stations on the single-track line are served by a one-carriage train that completes its journey in 24 minutes. Parts of the carriage are wrapped in dynamic images of ninja on the outside, while ninja motifs also decorate the carriage interior, adding to the fun of the trip.

As you ride, watch out for figures of *tanuki* (Japanese raccoon dogs) dressed as ninja lined up on the platform at the stations. The comical ceramic figures are a symbol of good luck and are one of the signature products of Shigaraki.

Please note that the ninja-themed train on the Shigaraki Kogen Railway runs on an irregular schedule and that the ninja decorations on the train and at stations may change periodically.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

信楽高原鐵道

この小さな鉄道では、忍者列車に乗りながら美しい田園風景を楽しむことができます。信楽高原鐵道は、貴生川駅と信楽駅の間を結び、信楽の主要な陶器生産地域への玄関口となっています。この単線の6つの駅は、1両編成の列車が24分で走りきります。車両の一部は、外側がダイナミックな忍者のイメージでラッピングされ、車内にも忍者モチーフが装飾されており、旅の楽しみを一層引き立てます。

旅の途中で、駅のプラットフォームに並んでいる忍者姿のたぬきの陶器製の像に注目してみてください

さい。これらのコミカルな像は幸運の象徴であり、信楽を代表する製品の一つです。

なお、信楽高原鉄道の忍者列車は不定期に運行されており、列車や駅での装飾デザインは定期的に変更されることがあります。

031-031

Koka Medicine Museum

滋賀県甲賀市

【タイトル】 甲賀市くすり学習館

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Koka Medicine Museum

Medicinal herbs have been an important part of the Koka area's history. The ninja possessed detailed knowledge of such plants and were proficient at combining them to create medicines. Visit the Koka Medicine Museum to learn about the ninja's use of herbs and the history of Koka's connection to medicine.

The museum's permanent exhibition showcases tools for making medicines and advertisements for medicines from the Edo period (1603–1867) to the Showa era (1926–1989), tracing the history of medicine sales and production in Koka. Interactive displays explore medicinal herbs and offer a comprehensive look at the development of Koka's medicine-related industry up to the present.

The ninja made *shinobi-gusuri* (lit., “ninja medicine”) from herbs, drawing on their skills in herbal medicine. In 1676, a member of the Fujibayashi ninja family created the *Bansenshukai*, a compilation of *ninjutsu* (ninja arts) from the Koka (Shiga Prefecture) and Iga (Mie Prefecture) areas. The volume describes various medicines, some of which were meant to ease common ailments when ninja were traveling on missions. They also made substances to sicken or weaken enemies or silence dogs whose barking might give away their presence on missions.

For a small fee, visitors to the Koka Medicine Museum can try their hand at creating a simple dish similar to what ninja might have eaten when they needed a boost of energy. The workshop is suitable for all ages. Advanced bookings are required, so please contact the Tourism Information Center at the Kokaryu Real Ninjakan or Koka

Medicine Museum for more information.

Another interesting display in the museum is detailed information outlining the close links between ninja and *yamabushi* (practitioners of Shugendo mountain asceticism). Both ninja and *yamabushi* trained in the mountains of the Koka area and were very knowledgeable about the environment.

In the early Edo period, *yamabushi* from the Koka area made medicines and offered them to temples. Later, some of these ascetics became traveling medicine salesmen. When they distributed medicines to households, they operated on a “use first, pay later” business model. Moreover, they would pick up unused medicine at a later time and charge only for the portion of medication that had been used.

One of the primary skills of the ninja was obtaining information about the weak points of enemies, so impersonating a traveling medicine salesman was an ideal cover for them. Disguised and carrying medicine, a ninja could gain access to a household and collect information about an enemy’s lifestyle, habits, and health, all of which could be used to the ninja’s advantage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

甲賀市くすり学習館

甲賀地域は、薬草の栽培に長い歴史を持っています。これらの薬草に関する知識は忍者にとって重要であり、彼らはこれらを組み合わせて様々な薬を作り出しました。甲賀市くすり学習館を訪れ、忍者が薬草をどのように使用したか、そして甲賀市と医薬の歴史について学びましょう。

常設展示には、薬学に関する道具や江戸時代（1603–1868）の薬の広告が展示され、薬の販売の歴史をたどることができます。また、薬草に関するインタラクティブな展示もあり、現在までの甲賀の製薬業界の発展を包括的に紹介しています。

忍者は薬草を利用して「忍薬」を作り、薬学の知識を活かしました。1676年、忍者家系の一員である藤林保武は、伊賀（現在の三重県）と甲賀の忍者の知識を集めた『万川集海』を編纂しました。この書物には、様々な忍薬の例が記されています。その中には、忍者が任務に赴く際や、僻地で修行を行う際に、よく使われた薬も含まれていました。また、任務を遂行するために作られた

忍薬もありました。これらの薬は、敵を病気にしたり弱らせたり、あるいは忍者の存在を気付かれないように犬を倒させたりするために使用されました。

甲賀くすり学習館では、少ない料金で、忍者がエネルギーを補給するために食べていたような簡単な薬草を使った忍者食を作る体験ができます。このワークショップは全ての年齢層に適しており、事前予約が必要ですので、詳細については甲賀流リアル忍者館の観光案内所にお問い合わせください。

また、学習館の興味深い展示の一つとして、忍者と山伏（修験道の山岳修行者）との密接な関係についての詳細な情報が紹介されています。忍者と山伏は、甲賀の山々で修行を行い、環境について非常に詳しい知識を持っていました。

江戸時代初期、この地域の山伏は薬を作り、それを寺院に提供しました。後に、彼らの一部は行商人となり、家庭に薬を配布しました。その際のビジネスモデルは、まず薬を使い、その後に支払いを行う方式でした。さらに、未使用の薬は後に山伏が回収し、使用された分だけの料金を請求しました。

忍者の主要な技能の一つは、敵の弱点についての情報を収集することでした。そのため、行商人に扮することは彼らにとって理想的な隠れ蓑でした。山伏に変装し、薬を持ち歩くことで、忍者は家庭に入り込み、敵の生活習慣、健康状態などについての情報を収集し、それを自分たちの利点として利用しました。

031-032

Japan Heritage

滋賀県甲賀市

【タイトル】 日本遺産

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Japan Heritage

Japan Heritage is a designation of the Agency for Cultural Affairs. It recognizes stories that convey the culture and traditions of Japan through the historical attractions and unique features of certain local areas.

Japan Heritage recognition supports communities' efforts to develop and use local cultural properties essential to local stories. A locale's cultural heritage covers both tangible properties, such as structures or works of art, and intangible properties, including performing arts and craft techniques. These properties may be locally or nationally recognized, and they are integral to conveying the culture and traditions of an area.

In 2017, Iga City (Mie Prefecture) and Koka City (Shiga Prefecture) were jointly recognized as Japan Heritage Sites for their rich history of ninja culture and stories. Today, people around the world are fascinated by ninja, but the popular portrayal of ninja as black-clad assassins with near-superhuman abilities is inaccurate. Visitors to Koka can explore the history of ninja, including the sites of medieval castles and forts, the shrine where ninja gathered for tactical meetings, and facilities dedicated to preserving and passing on knowledge integral to the ninja story.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本遺産

日本遺産は文化庁によって指定され、日本の文化や伝統を伝える地域の歴史的遺産や独自の特徴を持つ地域を認定するものです。

日本遺産の目的は、地域の文化財を活用し、その物語を地域住民が主体的に発展させていく

ことにあります。地域の文化遺産は、建築物や美術作品などの有形財産、そして芸能や工芸技術などの無形財産を含みます。これらの財産は、地域や国に認定されたものであり、その地域の文化や伝統を伝える上で重要な役割を果たしています。

2017年、伊賀市（三重県）と甲賀市（滋賀県）は、豊かな忍者文化と物語が評価され、日本遺産に共同で認定されました。世界中の人々が忍者に魅了されていますが、忍者は黒装束をまとった超人的な暗殺者として世界に紹介されていますが、こうした描写は多くの場合正確ではありません。甲賀を訪れることで、中世の城や砦の跡、戦術会議が行われた神社、そして忍者の物語の一部を保存し、伝えるための施設など、忍者の歴史を探究することができます。

地域番号	032	協議会名	東近江大風保存会		
解説文番号		タイトル		ワード数	想定媒体
032-001		世界風博物館 東近江大風会館		501-750	看板
032-002		東近江大風の特徴		251-500	看板
032-003		中野神社		1-250	ウェブ
032-004		太郎坊宮		1-250	ウェブ

032-001

World Kite Museum
Higashiomi Oodako Hall

東近江大凧保存会

【タイトル】世界凧博物館 東近江大凧会館
【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

World Kite Museum

Higashiomi Oodako Hall

The History of Higashiomi Oodako

Making and flying of giant kites (*oodako*) has a long tradition in Higashiomi, in Shiga Prefecture. The city's location on the eastern shores of Lake Biwa makes it ideal for kite flying due to its large open plains and the strong northwest winds that blow in from the lake.

Since the early eighteenth century, local people have been making kites to use during Children's Day festivities in May, when families celebrate the healthy growth and happiness of children. The kites were small at first, but construction techniques were developed that allowed larger ones to be made. This progress inspired the local villages of Shibahara, Kanaya, and Nakano to begin an annual competition to build the biggest kite that could be flown.

By the mid-nineteenth century, the residents of the three villages were making the Higashiomi *oodako* of today. Many of the kites, made using bamboo frames with washi paper coverings, measure approximately 100 tatami, a common Japanese standard of measurement (1 tatami mat is 1.65 square meters), but some are as much as 200 tatami mats in size. The largest kite ever made and flown was constructed in 1882 and measured approximately 240 tatami (approximately 396 square meters).

Celebrating craftsmanship

In 1953, the Yokaichi Oodako Preservation Society (now the Higashiomi Oodako Preservation Society) was formed by the residents of Shibahara, Kanaya, and Nakano to help safeguard Higashiomi's kite making heritage.

Residents have refined their skills and techniques for making these giant kites. Each *oodako* is constructed with bamboo poles bound together to form a grid. A technique allowing for easy removal of the vertical poles is employed so that the kite can be rolled up *nagamaki* (lit., long wrapping) for transport or storage. Another technique is *kirinuki* (lit., cut-outs), in which openings are cut in strategic parts of the washi to improve the kite's aerodynamic balance.

A festival known as the Higashiomi Oodako Matsuri was begun in 1984 for local people to enjoy kite making and kite flying, as well as to ensure the skills of giant kite making are passed on to the next generation. The festival was held annually on the fourth Sunday of May until 2015.

In 1993, the custom of giant kite flying in Omi-Yokaichi (now Higashiomi) was designated a national Intangible Folk Cultural Property.

Exploring exhibits

The World Kite Museum, or Higashiomi Oodako Hall, was built in 1991 as part of the work of the Higashiomi Oodako Preservation Society to safeguard the area's heritage of kite making.

Evidence of this rich culture is on display in the museum's main hall. The main exhibit is a previously flown 100-tatami *oodako* that hangs from the wall, offering an opportunity to see its details up close. There are also several mock-up kites from the past and sketches of the designs used over the years, demonstrating the evolution of the community's kite-making skills. A short film in English introduces the Higashiomi Oodako festival.

The second floor displays kites of various designs and sizes that were constructed in Japan and other countries along with more than 600 related exhibits.

The annex next to the museum is where *oodako* are sometimes constructed. When an *oodako* is under construction there, it is laid out on the floor upside down, with the bamboo poles and messages of good luck pasted on the back of the paper visible. The fully extended kite shows vividly the huge scale, time, and know-how that go into its

creation; it is the culmination of cooperative effort that holds special meaning to the people of Higashiomi.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

世界凧博物館 東近江大凧会館

東近江大凧の歴史

滋賀県東近江市では、大凧を作り、揚げる伝統が長い歴史を持っています。東近江市は琵琶湖の東岸に位置しており、広大な平野と湖から吹く強い北西風のおかげで、凧揚げに適した場所として知られています。

18世紀初頭から、地元の人々は5月の「こどもの日」のお祝いで使うために凧を作り始めました。この祭りは子どもたちの健やかな成長と幸福を祝うものです。初めは小さな凧が作られていましたが、やがてより大きな凧を作る技術が発展しました。この制作技術の発展により、地元の芝原村、金谷村、中野村は、飛ばすことのできる最も大きな凧を作ることを毎年競うようになり、凧作りに競争の要素が加わりました。

19世紀中頃には、これらの村の住民たちは今日の東近江大凧を作るようになりました。竹の骨組みに和紙を貼り付けて作られるこれらの大凧の多くは、約100畳（1畳は1.65平方メートル）に相当する大きさですが、中には200畳ものサイズに達するものもありました。最大の大凧は1882年に作られ、約240畳（約396平方メートル）の大きさでした。

技術を称える

1953年、東近江の大凧作りの伝統を守るため、芝原村、金谷村、中野村の住民たちによって「八日市大凧保存会」（現在の「東近江大凧保存会」）が結成されました。

地元の人々は大凧作りの技術と技法をさらに磨き上げてきました。大凧は、竹の棒を格子状に組み合わせた骨組みで構築されます。縦方向の竹を取り外し可能にする技法が用いられており、この方法により大凧は「長巻き」（文字通り「長く巻く」の意）という形で巻き取って輸送や保管がしやすくなっています。また、「切り抜き」という工法も用いられています。これは和紙の特定部分を切り抜いて凧の空力バランスを向上させるものです。

1984年には、「東近江大凧まつり」という祭りが始まりました。この祭りは、地元の人々が大凧作りや凧揚げを楽しむだけでなく、大凧作りの技術を次世代に伝えることを目的としています。この祭りは2015年まで毎年5月の第4日曜日に開催されていました。

さらに、1993年には、近江八日市（現在の東近江）での大凧揚げの伝統が国の「重要無形民俗文化財」に指定されました。

展示を巡る

「世界凧博物館東近江大凧会館」は、凧作りの伝統を守り伝えるために東近江大凧保存会の活動の一環として1991年に建設されました。館内のメインホールでは、この豊かな文化を物語る展示が行われています。主な展示物はかつて揚げられた100畳敷の大凧で、壁に掛けられているので近くでその細部をじっくりと見ることができます。また、過去の凧の模型や、時代とともに変遷してきたデザインのスケッチも展示されており、地域の凧作りの技術の発展が分かるようになっています。また、英語版の東近江大凧まつりの短編映像も上映されています。

2階には、日本の凧と世界の凧が展示されており、600点以上のさまざまなデザインとサイズの凧が見られます。

博物館に隣接する別館では、大凧が製作されることもあります。製作中の大凧は、裏返しの状態で床に広げられ、竹骨や和紙の裏側に貼られた「幸運のメッセージ」を見ることができます。完成した凧は、その巨大なスケールと、製作にかかる膨大な時間と技術を鮮やかに示しています。この大凧は、東近江の人々にとって特別な意味を持つ、協力の結晶といえる作品です。

032-002

World Kite Museum

The Distinctive Features of Higashiomi Oodako

東近江大凾保存会

【タイトル】 東近江大凾の特徴

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

World Kite Museum

The Distinctive Features of Higashiomi Oodako

On average, it takes around 600 people to make a single giant kite (*oodako*). Barring setbacks, the process takes about one month. Completed kites are about 13 meters long and 12 meters wide, with some weighing as much as 700 kilograms. The kites require around 360 sheets of paper, 50 bamboo poles, and about 20 liters of glue.

Higashiomi residents are proud of the *oodako* they design, build, and fly. The work of building each kite helps to create lasting friendships and to unite communities. Construction methods are passed down from generation to generation, and the kites have three defining features.

Hanjimon

A *hanjimon* (judging character) is a unique puzzle or word play that was popular during the eighteenth century. In Higashiomi, the Higashiomi Oodako Preservation Society decides the *hanjimon* to be placed in each kite's artwork. The character consists of a sketch of an animal and one Japanese kanji, and usually reflects the social mood or celebrations of the year. It is revealed during a ceremony on the first day of the kite's construction.

Kirinuki

To reduce wind resistance, the kite makers use a technique called *kirinuki* (lit. cutout). During construction, holes are cut strategically in parts of the washi paper to enhance the kite's aerodynamic balance without adversely affecting the artwork. This method ensures the kite is stable and can fly effectively.

Nagamaki

The technique called *nagamaki* (lit., long wrapping) allows the kite to be easily carried, transported, and stored. Typical kite frames are made by crossing bamboo poles in a horizontal and vertical lattice, but Higashiomi *oodako* are made so that the vertical bamboo poles can be removed easily, allowing the kite to be rolled up like a carpet. It normally takes about twenty people to transport the rolled-up kite to a truck by laying it on a bamboo ladder.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

世界凧博物館

東近江大凧の特徴

1枚の大凧を作るには、平均して約600人の手が必要です。大きな問題なく進めば、製作には約1か月かかります。完成した大凧は長さ約13メートル、幅約12メートルにもなり、重さが700キログラムに達するものもあります。大凧には、約360枚の和紙、50本の竹、約20リットルの糊が使われます。

東近江の住民たちは、自分たちが設計し、作り、揚げる大凧を誇りに思っています。大凧の製作は、長く続く友情を育み、地域社会を一つにする役割を果たしています。製作方法が世代から世代へと受け継がれてきた東近江大凧には3つの特徴があります。

判じもん

判じもんとは、18世紀に人気があった独特な謎かけや言葉遊びです。東近江では、東近江大凧保存会が各大凧の絵柄に使われる「判じもん」を決定します。判じもんは、動物の絵と1つの漢字から成り立っており、その年の社会情勢やお祝い事を反映することが一般的です。判じもんは、大凧の製作初日に行われる式典でお披露目されます。

切り抜き

風の抵抗を減らすため、大凧の製作では「切り抜き」と呼ばれる技法が使われます。製作中に、和紙の特定部分に戦略的に穴を開けることで、凧の空力バランスを向上させ、絵柄に影響を与えることなく、安定した飛行を可能にします。

長巻き

「長巻き」と呼ばれる技法は、凧を簡単に運搬、移動、保管できるようにするためのものです。通常の凧の骨組みは竹を縦横に交差させて作られますが、東近江の大凧は縦方向の竹の棒が簡単に取り外せるように作られており、カーペットのように巻いて収納できます。運搬時には、水平に組まれた竹のはしごを使って約20人がかりでトラックまで凧を運びます。

032-003

Nakano Shrine

東近江大凧保存会

【タイトル】 中野神社

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Nakano Shrine

Nakano Shrine was built in 799 in the village of Nakano (now Higashinakano). When kite making began in the area in the early eighteenth century, it became a site for the collaborative work on the kites due to its familiarity in the local community and the ample space inside the grounds.

By the mid-nineteenth century, the shrine became known as the birthplace of the Higashiomi *oodako* (giant kite). The giant kites, which measure approximately 100 tatami, a common Japanese unit of measurement (1 tatami mat is 1.65 square meters), were constructed on the shrine grounds and then transported and to an open field called Okinogahara to be flown. The kites gained wide renown and the village of Nakano came to be known as the home of the best kite-makers in the area.

Higashiomi Oodako Hall was built in 1991 to accommodate the construction of the giant kites. Kite making near the shrine ceased, but people in Higashiomi still visit the shrine to pray for the success of their kites.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

中野神社

中野神社は、799年に中野村（現在の東中野）に建立されました。18世紀初頭にこの地域で大凧作りが始まると、地元の人々に親しまれた場所であり、敷地内の広い空間があったことから、協力して大凧を製作する場となりました。

19世紀中頃には、この神社は「東近江大風の発祥地」として知られるようになりました。約100畳（1畳は1.65平方メートル）の大風は、神社の敷地内で製作され、沖野ヶ原と呼ばれる広場へ運ばれて揚げられました。これら的大風は広く知られるようになり、中野村は地域で最も優れた風職人の里として名を馳せるようになりました。

1991年には、巨大な大風の製作を行うために「東近江大風会館」が建設されました。それに伴い、神社近くでの風作りは途絶えましたが、現在でも東近江の人々は、自分たちの大風の成功を祈願するために中野神社を訪れています。

032-004

Tarobogu Shrine

東近江大鳳保存会

【タイトル】 太郎坊宮

【想定媒体】 ウェブ

できあがった英語解説文

Tarobogu Shrine

Tarobogu Shrine is located about halfway between the base and the summit of Mt. Akagami, a mountain west of Higashiomi that is considered sacred and believed to be inhabited by deities. The shrine dates from around 600 CE and because of its lofty perch is often called “the shrine in the sky.” Within the shrine grounds today are about 150 wooden torii gates and several buildings that are dedicated to the deities enshrined there, which include the god of victory.

On foot, the shrine can be reached by a flight of 742 stone steps. The grounds command an impressive view of the rural landscape, the city of Higashiomi, and the Suzuka Mountains in the distance. Before the urbanization of the area, the site also afforded excellent views of Okinogahara, the field where the *oodako* (giant kites) were flown. Depictions of Mt. Akagami, Tarobogu Shrine, and *oodako* in flight over Okinogahara can be seen in many *hanga* wood-block prints dating from the early eighteenth century, demonstrating the long history of kite flying culture in Higashiomi.

Today, many people visit the shrine to pray for victory, happiness, protection against disaster, good luck, or success in business.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太郎坊宮

太郎坊宮は、東近江の西に位置する赤神山の中腹にあり、山頂と麓の間に鎮座する神社です。この山は神聖な場所とされ、神々が宿ると信じられています。神社の創建は600年頃とされ、その高所にあることから「天空の宮」とも呼ばれています。現在、境内には約150基の木製鳥居が立ち並び、勝運の神をはじめとする神々を祀る複数の建物があります。

徒歩で参拝する場合、742段の石段を登って境内に到達します。そこからは、田園風景や東近江市街、さらに遠くには鈴鹿山脈を望む壮大な景色が広がります。都市化される以前は、東近江大凧が揚げられる沖野ヶ原の広場も一望できました。赤神山や太郎坊宮、そして沖野ヶ原で舞い上がる大凧を描いた版画は18世紀初頭から数多く制作されており、東近江の凧揚げ文化の長い歴史を物語っています。

現在も多くの人々が勝利祈願、幸福、災難除け、開運、商売繁盛を願って太郎坊宮を訪れています。

地域番号	033	協議会名	和束町地域力推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
033-001	宇治茶生産の景観/京都府景観資産や日本遺産に認定を受けている茶畑景観（4か所）		501～750	WEB
033-002	宇治茶生産の景観/京都府景観資産や日本遺産に認定を受けている茶畑景観（4か所）		251～500	パンフレット
033-003	和束茶/茶栽培の歴史		501～750	WEB
033-004	和束茶/茶栽培の歴史		251～500	パンフレット
033-005	和束町製茶体験工場/茶刈りから製茶するまでの工程		251～500	WEB
033-006	和束町製茶体験工場/茶刈りから製茶するまでの工程		251～500	パンフレット
033-007	和束茶カフェ交流ステーション和束の郷/お茶の直売所（お茶、スイーツ等） 野菜や手工芸品等の販売		251～500	WEB
033-008	和束茶カフェ交流ステーション和束の郷/お茶の直売所（お茶、スイーツ等） 野菜や手工芸品等の販売		1～250	パンフレット
033-009	和束町観光案内所とグリーンスローモビリティ/茶畑周遊観光		251～500	WEB
033-010	和束町観光案内所とグリーンスローモビリティ/茶畑周遊観光		1～250	パンフレット
033-011	湯船森林公園/マウンテンバイクランド、親水公園、なごみの湖		1～250	パンフレット
033-012	京都和束荘/町宿泊施設		1～250	WEB
033-013	京都和束荘/町宿泊施設		1～250	パンフレット
033-014	体験コンテンツ/抹茶アート体験、お茶の飲み比べ、お茶摘み体験、農泊体験等		501～750	WEB
033-015	体験コンテンツ/抹茶アート体験、お茶の飲み比べ、お茶摘み体験、農泊体験等		251～500	パンフレット
033-016	和束天満宮/本殿（重要文化財）2棟（京都府指定文化財）		251～500	WEB
033-017	和束天満宮/本殿（重要文化財）2棟（京都府指定文化財）		1～250	パンフレット
033-018	安積親王陵墓/聖武天皇の皇子の古墳		1～250	パンフレット

033-019	弥勒磨崖仏/石造物（相楽東部広域連合指定文化財）	1～250	パンフレット
033-020	八坂大杉/樹齢1300年以上の大木、パワースポット	1～250	パンフレット
033-021	正法寺/京都府指定文化財 仏殿/表門	251～500	WEB
033-022	正法寺/京都府指定文化財 仏殿/表門	1～250	パンフレット
033-023	子安地藏/石造物（相楽東部広域連合指定文化財）	1～250	パンフレット

033-001

The Landscape of Tea Production

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 宇治茶生産の景観/京都府景観資産や日本遺産に認定を受けている茶畑景観（4か所）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Landscape of Tea Production

The green hills of Wazuka are covered with row upon row of neatly manicured tea plants—a testament to the town’s long history of tea cultivation. The town’s traditional tea farms create a distinctive landscape: Tea plants line the natural contours of hills and mountainsides, tall poles scattered throughout the fields are topped with fans that circulate air and prevent frost damage, and lengths of dark shade cloth are spread out to protect the leaves from direct sunlight. The landscape bustles with activity as the farmers work the fields from season to season, picking, pruning, and tending the plants.

As of 2020, approximately 412 hectares (1,018 acres) of land in Wazuka are being used for tea cultivation, producing approximately 1,100 tons of rough tea leaves per year. Of the many tea plantations that blanket the hills around the town, four areas are particularly well-known for their landscapes, each offering a unique visual experience.

Ishitera Tea Plantation

The best-known cultivation area is Ishitera in southwestern Wazuka, where the verdant tea-covered hills reach toward the sky. When Kyoto Prefecture established the Scenic Asset designation to promote and protect landscapes representative of an area’s unique culture, Ishitera became the first location to receive the title.

In late March, the cherry trees that border the Ishitera Tea Plantation brighten the scenery with layers of soft pink. The best time to view the area in a fully green state is in spring, before the farmers start covering their first-flush harvest with shade cloths. In summer, the harvesting of various types of tea at different times creates a patchwork effect in the fields: some plants are covered with cloth, while others are trimmed or awaiting picking. Autumn brings a few warm colors to the trees and shrubs on the

paths between the fields, while winter snows can transform the rows into long, tidy white mounds.

Visitors who wish to enjoy a delicious meal or tea-themed sweet while taking in the sights may do so at the Dan Dan Café by the viewing point.

Access: Walk 10–15 minutes from the Wazuka Takahashi bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

Shirasu and Erihara Tea Plantations

The Shirasu and Erihara tea plantations face each other on opposing slopes, framing the view of the forests and mountains beyond. These plantations are cultivated on rather steep inclines, so they are laid out to make the best use of the sparse soil available. The tea plantations are surrounded by rice fields and plants that flower through the seasons, and the area is a popular stop on walking tours and hiking trails.

Access: Walk approximately 15 minutes down the road from the Ishitera Tea Plantation, or walk approximately 18 minutes from the Shirasuguchi bus stop. When viewing the scenery, please be careful not to obstruct work vehicles.

Kamatsuka Tea Plantation

The rolling hills of the Kamatsuka Tea Plantation unfold in a scenic vista that can be seen easily from the main road that runs east to west through Wazuka. Because Kamatsuka is clearly visible from the Wazuka Town Tourist Information Center, police box and post office, both residents and visitors can easily observe the changing seasons and the annual cycle of farm work. The plantation can also be seen at a distance from the viewing points atop the Tomb of Prince Asaka, the Tenku Café, and Shohoji Temple.

Access: To view the fields up close, walk approximately 8 minutes from the Nakawazuka bus stop. Parking is available for cars and bicycles at the Wazuka Town Tourist Information Center.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

茶生産の風景

和束町の緑の丘陵には、きれいに手入れされた茶の木が果てしなく並んでおり、町の広大な茶栽培産業の証である美しい景観を作り出しています。町の伝統的な茶園の特徴がいたるところに見受けられます：茶の木は丘や山腹の自然な輪郭に沿って並び、畑のあちこちに点在する背の高いポールの上に取り付けられた扇風機が、空気を循環させて霜による被害を防ぎ、長く黒い寒冷紗が葉を太陽から守る天蓋の役割を果たしています。農家の人たちが季節ごとに畑で働き、茶葉を摘み、剪定し、世話をするので、風景は活気に満ちています。

2020年現在、和束町では約412ヘクタール（1,018エーカー）の土地が茶の栽培に利用されており、年間約1,100トンの荒茶が生産されています。町全体に広がる多くの茶畑のうち、4つのエリアは特にその風景で知られており、それぞれが訪問者にユニークな視覚体験を提供しています。

石寺茶畑

最も知られている栽培地域は和束町南西部の石寺で、青々とした茶畑に覆われた丘が空に向かって伸びるような素晴らしい景色を楽しめます。京都府が地域固有の文化と歴史を代表する景観を活用し保護するために景観資産が制定されたとき、石寺は最初に指定されました。

3月下旬、石寺茶畑の周囲に並ぶ桜並木が、淡いピンク色の層で景色を明るくします。このエリアが緑一色の状態で見られるベストシーズンは春、最初の収穫の準備で農家が寒冷紗で茶の木を覆う前の季節です。夏には、さまざまな種類のお茶が異なった時期に収穫されるため、一部のお茶の木は寒冷紗で覆われ、一部は刈り取られ、一部は摘み取りを待つ葉で繁るなど、畑がパッチワークのようになります。秋には畑の間の小道の木や低木が暖かな色に少し染まり、冬には粉雪が積もって畑は丸くふわふわした雪の整った列に変わります。

茶畑を見ながらおいしい食事やお茶をテーマにしたスイーツを楽しみたい訪問者は、展望台のそばにある「dan dan cafe」で食事できます。

アクセス: 「和束高橋」バス停から徒歩 10～15 分。車と自転車の駐車場があります。

白栖・撰原の茶畑

白栖茶畑と撰原茶畑は、反対側の斜面に向かい合って位置し、向こうの山々と森の景色を囲んでいます。かなり急な斜面で栽培されているため、山の尾根のまばらな土壌を最大限活用した畑の配置になっています。茶畑の周囲には田んぼや季節の花々が咲き乱れ、ハイキングトレイルや散策コースのスポットとして人気です。

アクセス：石寺茶畑から道を進んで約15分、又は「白栖口」バス停から徒歩約18分。見学する場合は、農作業車の邪魔にならないように注意してください。

釜塚茶畑

釜塚茶畑のなだらかな丘陵は、和束を東西に走る主要道路からよく見える美しい景色の中に広がっています。釜塚は、和束町観光案内所、交番、郵便局などからもはっきりと見え、住民や観光客の両方が季節の移り変わりや農作業の年間サイクルを観察することができます。また、安積親王墓、天空カフェ、正法寺の頂上にある展望台からも遠くに茶畑を見ることができます。

アクセス：畑を間近で見るには、「中和束」バス停から徒歩約8分。和束町観光案内所には車と自転車の駐車場があります。

033-002

The Landscape of Tea Production

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 宇治茶生産の景観/京都府景観資産や日本遺産に認定を受けている茶畑景観（4か所）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Landscape of Tea Production

The hills of Wazuka are covered in rows of neatly manicured tea plants—vast green tapestries created by the town’s tea-growing industry. The town’s traditional tea farms create a distinctive landscape: Tea plants line the natural contours of hills and mountainsides, fans mounted on tall poles throughout the fields circulate air and prevent frost damage, and lengths of dark shade cloth protect the leaves from direct sun. The landscape bustles with activity as the farmers work the fields from season to season, picking, pruning, and tending the plants.

Of the town’s many tea plantations, four areas are known for having particularly beautiful landscapes, each with its own charm and scenic allure.

Ishitera Tea Plantation

Ishitera is the best known of the tea cultivation areas and the first-ever Scenic Asset designated by Kyoto Prefecture. The marked viewing point offers a panoramic view of the carefully cultivated fields, and the Dan Dan Café beside it offers meals and tea-themed sweets to visitors who wish to take in the sights while enjoying a bite to eat.

Each season creates its own distinctive charm in Ishitera. In spring, blooming cherry trees add splashes of pink; in summer, the fields become a patchwork of textures as tea harvesting progresses. In autumn, the evergreen rows of tea glow against bright fall colors, and in winter, snow accumulates on the tea plants in long, rounded mounds that curve through the fields.

Access

Walk 10–15 minutes from the Wazuka Takahashi bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

Shirasu and Erihara Tea Plantations

The Shirasu and Erihara tea plantations face each other on opposing slopes, and the fields are laid out to make the best use of the sparse soil. The tea fields are surrounded by rice paddies and plants that flower through the seasons, making the fields a popular walking tour stop and hiking trail view.

Access

Walk approximately 15 minutes down the road from the Ishitera Tea Plantation, or walk approximately 18 minutes from the Shirasuguchi bus stop.

Kamatsuka Tea Plantation

The rolling hills of the Kamatsuka Tea Plantation unfold in a scenic vista that can be seen easily from the main road that runs east to west through Wazuka. Kamatsuka is clearly visible from the Wazuka Town Tourist Information Center, police box and post office, allowing both residents and visitors to follow the changing seasons and the annual cycle of farm work at a tea plantation.

Access

Walk approximately 8 minutes from the Nakawazuka bus stop.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

茶生産の風景

和束町の丘陵地帯は、手入れの行き届いた茶の木で覆われ、町の広大な茶栽培産業を象徴する印象的な緑のタペストリーを作り上げています。町の伝統的な茶畑の特徴はいたるところに見られます。茶の木は丘や山腹の自然な輪郭に沿って並び、畑全体にある背の高い扇風機は空気を循環させて霜による被害を防ぎ、長く暗い寒冷紗は葉を太陽から守る天蓋の役割を果たしています。農家の人たちが季節ごとに畑で働き、植物を摘み、剪定し、世話をするので、風景は活気に満ちています。

町内にある多くの茶畑のうち、特に4つの地域は美しい景観で知られており、それぞれに独自の魅力と景観の魅力があります。

石寺茶畑

石寺は茶栽培地域の中で最もよく知られており、京都府によって指定された初めての景観資産です。展望台からは丁寧に耕された茶畑を一望でき、その横にある「dan dan cafe」では、食事やお茶をテーマにしたスイーツが提供され、食事を楽しみながら景色を眺められます。

石寺には四季折々の魅力があります。春は桜がピンク色に染まり、夏は茶摘みで田んぼがパッチワークのようになり、秋は紅葉が赤みを帯びた背景をつくり、冬は粉雪が茶畑を丸みのある形に変えます。

アクセス

「和束高橋」バス停から徒歩10～15分。車と自転車の駐車場があります。

白栖・撰原の茶畑

白栖茶畑と撰原の茶畑は、斜面を向かい合わせに広がっており、山の尾根のまばらな土壌を最大限に活用した茶畑になっています。周囲には田んぼや季節の花々が点在し、散策コースやハイキングトレイルのスポットとして人気です。

アクセス

石寺茶畑から道を進んで約15分、又は「白栖口」バス停から徒歩約18分。

釜塚茶畑

和束町を東西に走る幹線道路から望める釜塚茶畑のなだらかな丘陵は、風光明媚な景観の中に広がっています。釜塚は和束町観光案内所、交番、郵便局などからもよく見え、住民や観光客も茶畑の季節の移り変わりや年間の農作業サイクルを観察することができます。

アクセス

「中和束」バス停から徒歩約8分。

【タイトル】和束茶/茶栽培の歴史

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Wazuka Tea

The town of Wazuka in southeastern Kyoto Prefecture is a *chagenkyo*, or “ancestral homeland of tea.” For centuries, Wazuka farmers have made use of favorable environmental conditions and fertile soil to grow aromatic tea. Traditions and agricultural methods inherited over generations are combined with modern ingenuity to produce tea that is renowned worldwide for its exceptionally high quality.

The History of Tea Cultivation in Wazuka

Tea cultivation in Wazuka is thought to have started in the early thirteenth century, shortly after tea seeds were brought to Kyoto from China by the influential Zen master Eisai (1141–1215). According to legend, Eisai gave seeds to Myoe (1173–1232), the head priest of Kosanji Temple, who gifted seeds in turn to the priest Jishin of Kaijusenji Temple. Jishin cultivated these seeds at the base of Mt. Jubuzan in Wazuka. Records from the late sixteenth century reference a tea field planted in the Harayama area of Wazuka that was used for private tea production. Though the cultivation methods used were still quite rudimentary, Wazuka’s reputation for tea can be dated back to this point.

Wazuka’s history as a center of tea production becomes clearer in the Edo period (1603–1867). In 1734, Wazuka tea was listed on a shogunate document ranking high-quality regional products. Some years later, a method was popularized for making *sencha*, a type of whole-leaf tea processed by steaming and drying while rolling instead of pan heating and air-drying in the then-traditional manner. The number of farmers specializing in *sencha* rose as this method spread, and the tea industry in Wazuka expanded even further. Sales records indicate that by the late nineteenth century, Wazuka tea was even being shipped to international ports like Yokohama and Kobe for sale abroad.

Tea produced in Wazuka was often labeled as “Uji tea” because of its location near the larger and better-known tea-producing region of Uji. Today, approximately 49 percent of the “Uji tea” grown in Kyoto Prefecture is actually produced in Wazuka. For centuries, the town’s economy and community have revolved around the many tea plantations that cover the surrounding hills.

Growing Conditions in Wazuka

The geography and environmental conditions in Wazuka make the town ideal for cultivating tea. Crisp, cool air passes over the gentle hills and dense forests, and the flow of the Wazuka River provides nourishing water and generates mists that form when the temperature changes between night and day. These mists shield the tea plants from overexposure to the sun, keeping the leaves soft and preventing loss of flavor. The steep slopes of the tea fields help assure that the soil retains adequate moisture and has good drainage. It is this rich environment that made Wazuka so valued as a *shoen* (agricultural estate) in centuries past, when it was administered by powerful entities such as Kofukuji Temple in Nara, Kitano Tenmangu Shrine in Kyoto, and the imperial household.

Today, approximately 412 hectares (1,018 acres) of land in Wazuka are used for tea cultivation, producing some 1,100 tons of unrefined tea (*aracha*) per year. Around 200 farmers harvest the tea leaves, which are sent to 100 processing facilities.

Characteristics of Wazuka Tea

Wazuka is known for primarily producing *sencha*, a type of tea cultivated in direct sunlight until it is shaded just before the first or second harvest period when the leaves are tender and rich with nutrients. The quality of tea is evaluated based on four criteria: shape, color, aroma, and flavor. Compared to tea produced in other regions, Wazuka tea is said to possess a fresh fragrance, and the taste balances notes of both sweetness and umami. When the leaves are lightly steamed, the finished drink brews to a light golden green.

In recent years, Wazuka farmers have begun producing large amounts of *tencha*, the type of tea that becomes matcha powder when ground. *Tencha* is well-suited for use in foods where a green-tea element is desired. The next time you have matcha ice cream, bottled tea, a matcha frappe, or a matcha-flavored sweet, you may be enjoying the high-quality tea produced in the scenic fields of Wazuka.

和束茶

京都府南東部の和束町は、茶源郷（英語：ancestral homeland of tea）です。何世紀にもわたり和束の農家は、恵まれた環境条件と肥沃な土壌を活用して香り高いお茶を栽培してきました。何世代にも受け継がれてきた伝統と農法は、現代の創意工夫と相まって、この地域では今もなお並外れた品質の高さで世界的に有名なお茶を生産するために使われています。

和束の茶栽培の歴史

和束での茶栽培は、影響力を持つ禅僧栄西（1141～1215）が中国から京都に茶の種を持ち込んだ直後の十三世紀前期に始まったと考えられています。伝説によると、栄西は高山寺の住職明恵（1173～1232）に種を与え、明恵は海住山寺の僧慈心に種を贈りました。慈心は和束町の鷲峰山（じゅうぶざん）の麓でこの種を栽培しました。16世紀後半の記録には、和束町原山地区に自家用の茶畑が作られたことが記されています。栽培方法はまだかなり原始的でしたが、この頃から和束のお茶の評判が高まり始めたと言えます。

和束が茶生産の中心地であった歴史は、江戸時代（1603～1868年）に明らかになります。1734年、幕府が出した地方の高級土産品のランキングに、和束のお茶が載っています。その後、従来の釜で炒って自然乾燥させる方法ではなく、煎茶という、蒸して揉みながら乾燥させる製法が普及し、煎茶を専門とする農家の数が増え、和束の茶業はさらに拡大しました。販売記録によると、和束茶は海外で販売するために横浜や神戸などの国際港に出荷されていました。

和束で生産されたお茶は、より大きく有名なお茶の生産地である宇治に近いことから、多くは「宇治茶」と呼ばれていました。今日、「宇治茶」として京都府で栽培されるお茶の約49%は、実際には和束で生産されています。何世紀にもわたってこの町の経済とコミュニティは、緑豊かな起伏のある丘陵地帯を覆う多くの茶畑を中心に回ってきました。

和束の栽培条件

和束の地理と環境条件は、この町がお茶の栽培に理想的な場所である理由の一つです。さわやかで冷たい空気がなだらかな丘と深い森を通り、和束川の流れが栄養のある水を与え、夜と昼の気温差が霧の発生を促進します。この霧は、茶の木が太陽に過度にさらされることを防ぎ、葉を柔らかく保ち、風味の低下を防ぎます。茶畑の急斜面は、土壌が適切な水分を保持し、排水性が良いことをもたらします。この豊かな環境のおかげで和束は数世紀前には、奈良の興福寺、京都の北野天満宮、皇室などの権力者によって管理された荘園農業地として非常に高く評価されてきました。

現在、和束の約 412 ヘクタール（1,018 エーカー）の土地が茶の栽培に使用されており、年間

約 1,100 トンの荒茶が生産されています。約 200 人の農家が茶葉を収穫し、100 カ所の加工施設に送られます。

和束茶の特徴

和束は主に煎茶を生産していることで知られています。煎茶は、葉が柔らかく栄養分が豊富な一番茶または二番茶で収穫される早い時期の、直射日光の下で栽培されるお茶です。お茶の品質は、形、色、香り、味の4つの基準に基づいて評価されます。和束茶は他の地域で生産されるお茶に比べて、爽やかな香りがあり、甘みと旨みがバランスよく感じられると言われています。葉を軽く蒸すと淡い黄金色のお茶に仕上がります。

近年、和束の農家は、挽くと抹茶になるてん茶を大量に生産し始めました。てん茶は、緑茶の要素が求められる料理に適しています。抹茶アイスクリーム、ボトル入りのお茶、抹茶フラッペ、抹茶風味のお菓子を次に食べるときは、和束の美しい畑で生産された高品質のお茶を楽しんでいるかもしれません。

033-004

Wazuka Tea

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 和束茶/茶栽培の歴史

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Wazuka Tea

The History of Tea Cultivation in Wazuka

Cultivation of tea (*Camellia sinensis*) in Wazuka may have started in the early thirteenth century. According to legend, some of the first tea seeds brought to Kyoto from China by the influential Zen master Eisai (1141–1215) wound up in the hands of Jishin, a priest at Kaijusenji Temple, who cultivated them at Mt. Jubuzan in Wazuka. Historical records from the late sixteenth century can be found that reference the planting of a private tea field in Harayama, at the foot of that mountain. Though cultivation methods used at the time were still quite rudimentary, Wazuka’s reputation as a source of tea began to grow.

Wazuka tea was listed in shogunate documents ranking high-quality regional products as early as 1734. A few years later, a new method for making *sencha* was developed; instead of pan heating and air-drying, the whole leaves were steamed, then dried by kneading and rolling. *Sencha* production became widespread among local farmers, and the tea industry in Wazuka expanded even further. In the nineteenth century, Wazuka tea was being sold domestically as well as shipped abroad via international ports like Yokohama and Kobe.

Tea produced in Wazuka was often labeled as “Uji tea” because of its location near the larger and better-known tea-producing region of Uji. Today, approximately 49 percent of the “Uji tea” grown in Kyoto Prefecture is actually grown in Wazuka.

Growing Conditions in Wazuka

The geography and environmental conditions in Wazuka make the town ideal for cultivating tea. The flow of the Wazuka River encourages the formation of mist in the valley, which helps shield the tea plants from overexposure to the sun and keeps the leaves tender and flavorful. Naturally poor drainage caused by weathered mudstone in the soil is overcome by cultivating the tea on steep slopes, which promotes good

drainage and water retention.

Approximately 412 hectares (1,018 acres) of land in Wazuka is currently being used for tea cultivation. Over 5,600 tons of tea harvested by some 200 farmers is processed in more than 100 facilities to produce 1,100 tons of unrefined tea (*aracha*) per year.

Characteristics of Wazuka Tea

Wazuka farmers produce a variety of teas, but the town is primarily known for *sencha*, a type of tea cultivated in direct sunlight until shortly before it is harvested early in the spring, when the leaves are tender and rich in nutrients. Wazuka *sencha* is said to possess a fresh fragrance, and the taste balances notes of both sweetness and umami. When the leaves are lightly steamed, the finished brew has a pale golden-green color.

In recent years, Wazuka farmers have begun producing large amounts of *tencha*, the type of tea that becomes matcha powder when ground. *Tencha* is well-suited for use in foods where a green-tea element is desired. The next time you have matcha ice cream, bottled tea, a matcha frappe, or a matcha-flavored sweet, you may be enjoying the high-quality tea produced in the scenic fields of Wazuka.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束茶

和束の茶栽培の歴史

和束での茶（学名：Camellia sinensis）栽培は、十三世紀前期に始まったと考えられています。伝説によると、影響力を持つ禅僧栄西（1141～1215 年）が中国から京都に持ち込んだ最初の茶の種の一部が、海住山寺の僧侶慈心に渡り、和束の鷲峰山（じゅうぶざん）で栽培されました。16 世紀後半の記録には、山のふもとにある原山に個人用の茶畑が作られたことが記されています。当時の栽培方法はまだかなり原始的でしたが、お茶の産地としての和束の評判は高まり始めました。

和束茶は、1734年には既に、地方の高級土産品として政府の資料に掲載されています。数年後、煎茶の製法が釜で炒って自然乾燥させる方法から、蒸して揉みながら乾燥させる製法が開発されました。ことで、煎茶を専門とする和束農家が増え、和束の茶業はさらに拡大しました。19世紀には、和束茶は国内で販売されるだけでなく、横浜や神戸などの国際港を経由して海外に出荷されていました。

和束で生産されたお茶は、より大きく有名なお茶の生産地である宇治に近いことから、多くは「宇治

茶」と呼ばれています。今日、京都府で生産される宇治茶の49%は実際に和束で栽培されています。

和束の栽培条件状況

和束の地形と環境条件は、この町がお茶の栽培に最適な理由になっています。和束川の流れは谷間に霧を発生させ、茶の木が日光に過度にさらされることを防ぎ、葉を柔らかく風味豊かに保ちます。本来、土壌中の風化した泥岩は排水性に乏しいのですが、急斜面で茶を栽培することによってそれを克服し、排水性と保水性が保たれています。

現在、和束町では約 412 ヘクタール（1,018 エーカー）の土地が茶栽培に使用されています。約 200 人の農家が収穫した約5,600トンの茶葉は100 を超える施設で加工され、年間約 1,100 トンの荒茶を収穫されます。

和束茶の特徴

和束町の農家は、さまざまなお茶を生産していますが、この地域は主に煎茶の生産で知られています。煎茶は、葉が柔らかく栄養分が豊富な春の 1 回目または 2 回目に収穫される、直前まで直射日光の下で栽培したお茶です。和束煎茶はさわやかな香りが特徴で、甘みと旨みがバランスよく調和した味と言われています。茶葉を軽く蒸すと、出来上がったお茶は淡い黄金色の緑になります。

近年、和束の農家は、挽くと抹茶パウダーになるタイプのお茶であるてん茶を大量に生産し始めました。てん茶は、緑茶の要素が必要な食品に適しています。抹茶アイスクリーム、ボトル入りのお茶、抹茶フラッペ、抹茶風味のお菓子を次に食べるときは、和束の美しい畑で生産された高品質のお茶を楽しんでいるかもしれません。

033-005

Wazuka Tea Processing Facility

和束町地域力推進協議会

【タイトル】和束町製茶体験工場/茶刈りから製茶するまでの工程

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Wazuka Tea Processing Facility

After Wazuka farmers gather the season's tea harvest, they bring the fresh green leaves to processing facilities, where they are transformed into the tea enjoyed by consumers worldwide. The same leaves can be used to produce different types of tea—green tea, oolong tea, and black tea, for example—depending on how they are processed. In Wazuka, the tea leaves are primarily processed as *sencha*, the most popular type of green tea consumed domestically. This once involved time-consuming and labor-intensive hand rolling, but the majority of farmers now rely on machines for processing.

Though the process varies slightly depending on the producer and the type of tea, the Wazuka Tea Processing Facility uses machines to carry out the following steps:

Steaming

Freshly picked tea leaves are transferred from a receptacle onto a conveyor belt that moves them into the steamer (*mushiki*). This process must be performed quickly to deactivate enzymes and preserve the antioxidants that make green tea such a healthy drink. Inside the machine, the leaves are spun and steamed at a high temperature and then immediately cooled by fans. The leaves can be steamed for varying lengths of time and spun at various speeds. This process is the most important for determining the flavor, aroma, and color of the final product.

Rolling

Four machines are used to replace the traditional hand-rolling process. From the steamer, the leaves are put into the rough rolling machine (*sojuki*) and tossed by long metal teeth to remove excess moisture. In the next rolling machine, the “leaf-crushing” *junenki*, a large weight applies pressure to the leaves as a brush continuously gathers

them in a circular motion, breaking down the cellular membrane and evening out the color. Next, moisture is further removed in the *chujuki* machine, where heat is applied evenly in a closed cylinder. The final rolling machine, the *seijuki*, rolls the tea in one direction over curved bamboo surfaces using large paddles as “hands” to create the characteristic needle-like shape of dried Japanese tea leaves.

Drying

The tea leaves are further dried in a drying machine (*kansoki*) immediately after rolling in order to preserve their shape. Trays containing shallow layers of rolled leaves are inserted into the machine, which uses heat and air to complete the drying process. This step reduces the moisture content of the freshly picked tea leaves to less than 5 percent, which helps preserve the tea for several months.

Access

Walk approximately 5 minutes from the Wazukayama-no-Ie bus stop. Turn right at the large intersection with the Lawson convenience store, and the tea processing facility is on the left beside the Wazukacha Café. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町製茶工場

和束の農家は、お茶を収穫した後、新鮮な緑の葉を加工施設に持ち込み、世界中の消費者が楽しむお茶に変身させます。同じ葉から、加工方法に応じて、緑茶、ウーロン茶、紅茶など、さまざまな種類のお茶を生産できます。和束では、茶葉は主に日本で最も人気がある緑茶の煎茶として加工されています。これは、かつて時間と労力を要する手揉みで加工されましたが、現在ではほとんどの農家がさまざまな機械を使用しています。

工程は生産者やお茶の種類によって若干異なりますが、和束町製茶工場では機械を使用して以下の工程を行っています。

蒸し

摘みたての茶葉を容器からベルトコンベアに注がれ、蒸し器に運びます。この工程は、酵素を不活性化し、お茶を健康に良い飲み物にする抗酸化物質を維持するために、素早く行う必要があります。機械の中で、茶葉は回転して高温で蒸され、その後すぐにファンで冷却されます。茶葉はさまざまな時間蒸され、さまざまな速度で回転されます。この工程は、最終的な茶製品の風味、香り、色を決定する上で最も重要な工程です。

揉み

伝統的な手揉み工程の代わりに、4 台の機械が使用されています。蒸し器から茶葉は粗揉機に入れられ、長い金属製の「歯(刃)」で茶葉を攪拌して乾燥されます。次の揉捻機では円を描くように動かすブラシが茶葉を回しながら大きな錘で茶葉に圧力をかけ、細胞膜を破壊し、色を均一化します。次に、密閉された円筒内で熱を均一に加える中揉機でさらに水分を取り除きます。最後の精揉機では、大きな櫞のような「手」を使って湾曲した竹の表面で一方向に茶葉を転がし、乾燥した日本茶の葉の特徴である細長い形を作ります。

乾燥

揉んだ後、茶葉は形を保つためにすぐに乾燥機でさらに乾燥させます。茶葉はトレイに薄く並べられ、機械に挿入され、熱と空気を使用して乾燥プロセスが完了します。これにより、摘みたての茶葉の水分含有量が5%未満にまで低下し、お茶を数か月間保存することができます。

アクセス

バス停「和束山の家」から徒歩約5分。ローソンのある大きな交差点を右折し、左手にある和束茶カフェの横が目的地です。車・自転車の駐車スペースもあります。

033-006

Wazuka Tea Processing Facility

和束町地域力推進協議会

【タイトル】和束町製茶体験工場/茶刈りから製茶するまでの工程

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Wazuka Tea Processing Facility

After farmers gather the season's tea harvest, they take the freshly picked green leaves to processing facilities where they can be made into the types of tea that consumers around the world are familiar with. The same leaves can be used to make green tea, oolong tea, black tea, and other types, depending on how they are processed. In Wazuka, tea is primarily processed as *sencha*, the most popular type of green tea consumed domestically. Farmers used to process their tea independently on their own property, but various machines were invented to simplify and speed up operations. Eventually, facilities where access to the machinery could be shared were established, greatly streamlining the once labor-intensive method of hand rolling.

Wazuka was one of the first major tea-producing regions to mechanize in the early 1900s. Many of the machines still in use today are decades old and no longer manufactured for sale. This makes them both valuable and difficult to replace, and proper maintenance is crucial to prevent them from breaking down.

The Wazuka Tea Processing Facility is primarily used to process leaves for submission in domestic tea competitions.

Tea Steamer (*Mushiki*)

A conveyor belt carries freshly picked tea leaves into the steamer to deactivate enzymes and preserve antioxidants. Inside the machine, the leaves are spun and steamed at a high temperature and then promptly cooled by fans. Depending on the desired tenderness and flavor, the leaves can be steamed for varying lengths of time and spun at various speeds.

Rough Rolling Machine (*Sojuki*)

The steamed leaves are put into this machine and tossed to dry them. The long metal “teeth” help move the tea leaves to avoid clumping.

First Rolling Machine (*Junenki*)

This machine applies pressure without heat, “crushing” the leaves with a weight while a large brush gathers them in a circular motion. This breaks down the leaves’ cellular membrane and evens out their color.

Second Rolling Machine (*Chujuki*)

This round of rolling uses heat to evenly dry the leaves as they are rolled in a closed metal cylinder.

Final Rolling Machine (*Seijuki*)

Once the other machines have removed as much moisture as possible, the final rolling machine rolls the tea in one direction over curved bamboo surfaces using large paddles as “hands” to create the characteristic needle-like shape of dried Japanese tea leaves.

Drying Machine (*Kansoki*)

After the rolling is complete, the tea leaves are promptly dried further to preserve their shape. The leaves are arranged in a thin layer on trays that are inserted into the drying machine, which uses heat and air to finish the process. With this, the moisture content of the freshly picked tea leaves is reduced to less than 5 percent, which will help keep the tea fresh for several months.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町製茶工場

農家は、季節のお茶を収穫した後、摘み取ったばかりの新鮮な葉を世界中の人々に親しまれているお茶に加工します。同じ葉から、緑茶、ウーロン茶、紅茶など、加工方法に応じてさまざまな種類を作ることができます。和束では、お茶は主に煎茶として加工されます。煎茶は、日本で最も人気のある緑茶の種類です。かつては農家が自家農園で茶葉を揉む作業を行っていましたが、作業を簡素化・迅速化するためにさまざまな機械が発明されました。やがて、機械を共有できる施設ができて、かつては労働集約的だった手揉みの作業が大幅に効率化されました。

和束は、1900年代初頭に機械化された最初の主要な茶生産地域の1つでした。現在も使用されている機械の多くは数十年前のもので、もはや製造販売されていません。そのため、機械は貴重であると同時に交換が難しく、故障を防ぐために適切なメンテナンスが不可欠です。

和束町製茶工場は、主に国内の茶のコンテストに出品する茶葉の加工に使用されています。

蒸し機

摘みたての茶葉をベルトコンベアで蒸し機に運び、酵素を不活性化して健康的な抗酸化物質を保ちます。機械の中では、茶葉を回転させて高温で蒸し、ファンですぐに冷却します。希望する柔らかさと風味に応じて、茶葉をさまざまな長さで蒸し、さまざまな速度で回転させることができます。

粗揉機

蒸した茶葉をこの機械に入れ、乾かすために振ります。機械の長い金属製の「歯」（刃）は、茶葉が固まらないように動かすのに役立ちます。

揉捻機

この機械は、熱を加えずに大きなブラシで円を描くように動かしながら圧力をかけて茶葉を「押しつぶし」ます。これにより茶葉の細胞膜が破壊され、お茶の色を均一化します。

中揉機

この揉捻工程では、密閉された金属製の円筒で茶葉を揉みながら熱で均一に乾燥させます。

精揉機

他の機械で水分をできる限り取り除いた後、最終揉捻機は大きな櫛のような「手」を使って湾曲した竹の表面で茶葉を一方向に揉み、乾燥した日本茶葉の特徴である細長い形状を作ります。

乾燥機

揉捻が完了したら、さらに茶葉はすぐに乾燥させて形状を保ちます。茶葉はトレイの上に薄く並べられ、乾燥機に挿入されます。乾燥機は熱と空気を使って工程を完了します。これにより、摘みたての茶葉の水分含有量が 5 パーセント未満に減り、今後数か月間茶葉を保存できるようになります。

033-007

Wazukacha Café and Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 和束茶カフェ交流ステーション和束の郷/お茶の直売所
（お茶、スイーツ等）野菜や手工芸品等の販売
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Wazukacha Café and Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

The Wazukacha Café and Wazuka no Sato Cultural Exchange Station are conveniently located spots where visitors can shop, sample various teas, and purchase tea-flavored foods. The two adjacent facilities offer locally grown produce and handmade crafts as well as various dishes and sweets. Knowledgeable staff are on hand to help visitors select the best tea to suit their tastes and needs.

Wazukacha Café

This combined café and shop stocks approximately 300 varieties of carefully selected teas from over 30 tea producers based in Wazuka. The products are color-coded to help shoppers identify the various types of tea, which include Wazuka-style *sencha* (whole-leaf green tea), *kabusecha* (green tea made from a plant that has been moderately shaded to produce a milder taste), *gyokuro* (an even finer green tea grown in heavy shade), *kukicha* (a tea blended with stems and twigs), *genmaicha* (brown-rice tea), *hojicha* (roasted green tea), and *wakocha* (Japanese black tea). The walls display useful signs in both English and Japanese that describe the characteristics and flavors of the teas and how best to brew them. The shop also sells various craft items and implements for tea brewing.

The Wazukacha Café serves meals and sweet snacks, and visitors can order tea-flavored soft-serve ice creams and drinks to go. The café's specialty is green-tea soba noodles served with *hojicha*-flavored rice and a small, tea-simmered side dish; sweet options include tea-flavored *zenzai* (red-bean soup), tea-flavored *dango* (skewered sweets made with glutinous rice flour), pudding, and more.

Reservations for the nearby Tenku Café, a hilltop teahouse with a view of the

surrounding tea fields, can be arranged at the Wazukacha Café. Bicycle rentals, tea tastings, tea-brewing classes, and matcha art experiences can also be booked here.

Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

Wazuka no Sato is a farmers' market and community gathering place that opened in 2021 to provide a space for residents and tourists to interact. The facility hosts seasonal events, showcases locally made crafts and cuisine, and gives visitors the chance to try classic regional foods. Along with useful cooking staples such as rice, vegetables, tofu, sauces, eggs, *konnyaku*, miso paste, and dashi broth, the market features baked goods, handmade traditional Japanese sweets, bottled tea, snacks such as green-tea-flavored potato chips, and various handicrafts and souvenirs.

Two large tables at the back of the building provide a place to sit and relax. Visitors can order food, drink complimentary cups of tea, and browse photo albums featuring seasonal images of Wazuka. The permanent menu is limited to soft-serve ice cream and simple snacks, but more substantial plate lunches are offered on Tuesdays, and *tamagokake gohan* (a popular snack of white rice topped with fresh raw egg) can be ordered on weekends.

Access

From the Wazukayama-no-Ie bus stop, walk approximately 5 minutes. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束茶カフェと交流ステーション和束の郷

和束茶カフェと「交流ステーション和束の郷」は、お茶の試飲やお茶を使った食品の購入、ショッピングができる便利な場所です。隣接する 2つの施設では、オーガニックの農産物や手作り工芸品のほか、さまざまな料理やお菓子を販売しています。知識豊富なスタッフが、来訪者の好みやニーズに合った最高のお茶選びをお手伝いしてくれます。

和束茶カフェ

カフェとショップが一体となったこの施設には、和束に拠点を置く 30 を超える茶農家から厳選された約 300 種類のお茶が揃っています。商品は色分けされており、和束式煎茶（ホールリーフの緑茶）、かぶせ茶（薄日陰で育てた茶から作られ、まろやかな味の緑茶）、玉露（濃い日陰で育

てたさらに上質な緑茶）、茎茶（茎と小枝を混ぜて作ったお茶）、玄米茶（玄米を加えたお茶）、ほうじ茶（焙じた緑茶）、和紅茶（日本式の紅茶）など、さまざまな種類のお茶を識別できます。壁沿いにはお茶の特徴や風味、最適な淹れ方などを説明した英語と日本語の看板が掲げられています。店内ではお茶を淹れるためのさまざまな工芸品やグッズも販売しています。

和東茶カフェでは、食事や甘い軽食を提供しており、お茶風味のソフトクリームや飲み物のテイクアウトもできます。カフェの名物は、ほうじ茶ご飯とお茶で煮込んだ小鉢を添えた抹茶そばのセットで、甘味は小豆のスープ、お茶風味の団子、プリンなどです。

和東茶カフェでは、周囲の茶畑を眺められる丘の上の茶室・天空カフェの予約や、自転車のレンタル、お茶の試飲、お茶の淹れ方、抹茶アートの体験も予約できます。

交流ステーション和東の郷

和東の郷は、2021年にオープンした農産物直売所とコミュニティの集いの場で、住民と観光客の交流の場を提供しています。施設では季節ごとのイベントを開催し、地元の人々が作った工芸品や料理を展示し、訪問者においしい地元の食べ物を提供しています。市場では、米、野菜、豆腐、ソース、卵、こんにゃく、味噌、だしなどの調理に便利な食材のほか、焼き菓子、手作りの和菓子、ペットボトルのお茶、抹茶味のポテトチップスなどのスナックや、さまざまな工芸品やお土産が販売されています。

建物の後ろには2つの大きなテーブルがあり、座ってくつろぐことができます。食事を注文したり、無料のお茶を飲んだり、和東の季節の写真を掲載した写真アルバムを閲覧したりできます。メニューは基本的にソフトクリームと簡単な軽食ですが、火曜日にはボリュームのある日替わり定食、週末には卵かけご飯（白米に生卵をのせた料理）を提供しています。

アクセス

「和東山の家」バス停から徒歩約5分。車と自転車の駐車場があります。

033-008

Wazukacha Café and Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 和束茶カフェ交流ステーション和束の郷/お茶の直売所
（お茶、スイーツ等）野菜や手工芸品等の販売
【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Wazukacha Café and Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

Wazukacha Café

This facility is a combination café and shop that stocks carefully selected teas from over 30 tea producers based in Wazuka. Signs in English and Japanese describe the characteristics and flavors of the teas and how best to brew them, and knowledgeable staff are on hand to assist and give advice. The shop also sells craft items and utensils for tea brewing.

Visitors to the café can enjoy a meal of green-tea soba noodles or try traditional sweets; drinks and ice cream can be ordered to go. Wazukacha Café staff also handle reservations for the nearby Tenku Café hilltop teahouse, rental bicycles, and tea workshops.

Wazuka no Sato Cultural Exchange Station

Wazuka no Sato is a farmers' market and community gathering place for hosting various seasonal events, supporting local farmers and craftsmen, and introducing visitors to regional foods. Alongside cooking staples and produce, the market sells baked goods, handmade sweets, bottled tea, green-tea-flavored potato chips, and various handicrafts. Indoor and outdoor seating provides visitors space to relax, drink tea, and order food, as well as to browse photo albums featuring Wazuka throughout the seasons. Most of the time, only soft-serve ice cream and simple snacks are available, but more substantial plate lunches are offered on Tuesdays, and a popular snack of rice topped with fresh raw egg can be ordered on weekends.

Access

From the Wazukayama-no-Ie bus stop, walk approximately 5 minutes. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束茶カフェと交流ステーション和束の郷

和束茶カフェ

この施設は、和束に拠点を置く30以上の茶生産者から厳選されたお茶を取り揃えたカフェとショップを組み合わせた施設です。英語と日本語の看板にはお茶の特徴や風味、淹れ方が記載されており、知識豊富なスタッフが手伝いやアドバイスをしてくれます。ショップでは、工芸品やお茶の淹れ方に関するグッズも販売しています。

カフェでは、抹茶そばや伝統的なスイーツを楽しめるほか、飲み物やアイスクリームの持ち帰り注文ができます。和束茶カフェのスタッフは、近くの丘の上の茶室の天空カフェ、レンタル自転車、お茶のワークショップの予約も行っています。

交流ステーション和束の郷

和束の郷は、さまざまな季節のイベントを開催し、地元の農家や職人を支援し、訪問者においしい地元の食べ物を紹介する、農産物直売所とコミュニティの集まりの場です。市場では、主食や農産物のほか、焼き菓子、手作り菓子、ペットボトルのお茶、抹茶味のポテトチップス、各種工芸品などが販売されています。

屋内と屋外の席では、くつろいだり、お茶を飲んだり、食事を注文したりできるほか、四季折々の和束の写真集を閲覧できます。メニューはソフトクリームや簡単な軽食が中心ですが、火曜日にはボリューム満点の日替わり定食、週末には卵かけご飯も提供しています。

アクセス

「和束山の家」バス停から徒歩約5分。車と自転車の駐車場があります。

033-009

Wazuka Town Tourist Information Center and Green Slow Mobility Tour

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 和束町観光案内所とグリーンスローモビリティ/茶畑周遊
観光

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Wazuka Town Tourist Information Center and Green Slow Mobility Tour

Wazuka Town Tourist Information Center

The Wazuka Town Tourist Information Center is an ideal first stop for visitors to obtain maps, pamphlets, and advice that may prove helpful when exploring Wazuka. The center is conveniently located on the town's main road and offers a scenic view of the Kamatsuka Tea Plantation in the hills behind the facility. Inside, there are display racks full of information about sightseeing spots, experience workshops, restaurants, events, and more. Information is primarily in Japanese, but some sources are available in English, Chinese, and Korean. Staff are present at the counter to answer visitors' questions. (Language assistance is available via machine translation apps.)

Bicycle rentals are available for those interested in getting a more intimate view of Wazuka's green, tea-covered hills. Bikes can be rented between 9:00 a.m. and 4:30 p.m.; the cost is ¥1,100.

The center has a small shop that sells locally grown green tea and tea products. Some of the goods, including the tote bag and *tenugui* cloth, are exclusive to the Wazuka Town Tourist Information Center.

"Guchamo" Green Slow Mobility Tour

The Wazuka Town Tourist Information Center is the starting point for one of Wazuka's environmentally friendly tourism initiatives: the Green Slow Mobility Tour. This tour takes visitors to the famous Ishitera Tea Plantation area and back in an eco-friendly vehicle driven by a knowledgeable guide who will explain the history of Wazuka, the characteristics of Wazuka tea, and the work involved in cultivating the plants throughout the year. Tour guests can visit local shops that are off the beaten

path, depending on the course. The electric utility vehicle—nicknamed Guchamo for the first syllables of the Japanese words for “green,” “tea,” and “mobility”—carries tour guests along the narrow roads that wind through the tea fields, providing a close-up look at the tea plants and scenic views of ancient burial mounds and the surrounding landscape.

Reservations may be made by phone (Japanese only) in advance or on the day if there is availability. Tours last approximately 70 minutes and run from March through November on Saturdays, Sundays, and holidays. Four time slots are available each day: 9:40 a.m. to 10:55 a.m., 11:10 a.m. to 12:25 p.m., 1:30 p.m. to 2:45 p.m., and 3:00 p.m. to 4:10 p.m. The Green Slow Mobility Tour costs ¥1,000 for adults and ¥500 for children (elementary school or younger). Visitors who come to Wazuka via Nara Kotsu bus receive a discount, so please present proof of boarding before payment. After the tour is finished, each visitor receives a small participation gift. As there are only two Guchamo vehicles, the tour can take a maximum of seven guests on Sundays and four on Saturdays and holidays.

Access

From the Nakawazuka or Wazuka Kawahara bus stop, walk approximately 2 minutes toward the green signboard. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町観光案内所とグリーンスローモビリティツアー

和束町観光案内所

和束町観光案内所は、和束町を散策する際に役立つ地図やパンフレット、アドバイスなどを求める観光客にとって最初の立ち寄り先として最適です。町の主要道路沿いの便利な場所にあり、施設の裏手の丘には農作業で忙しい釜塚茶畑の美しい景色を眺めることができます。館内には、観光スポット、体験ワークショップ、レストラン、イベントなどの情報が満載のマガジンラックがあります。情報は主に日本語ですが、一部に英語、中国語、韓国語の情報が提供されています。カウンターにはスタッフが常駐しており、訪問者の質問に答えてくれます。（機械翻訳アプリによる言語サポートも利用できます。）

車や公共交通機関に頼らずに和束町を観光したい人には、自転車のレンタルが利用できます。レンタルサイクルは午前9時から午後4時30分までで、料金は1,100円です。

センターには、地元産のお茶や緑茶製品を販売する小さなショップもあります。トートバッグや手ぬぐいなど、一部に和束町観光案内所限定の商品もあります。

“グーチャモ”グリーンスローモビリティツアー

和束町観光案内所は、和束町の環境に優しい観光への取り組みの1つであるグリーンスローモビリティツアーの出発点です。このツアーでは環境に優しい車両に乗って、有名な石寺茶畑まで往復します。運転は知識豊富なガイドが担当し、和束町の歴史、和束茶の特徴、年間を通じて茶の栽培に携わる作業について説明します。ツアー参加者は、コースに応じて、地元のお店を訪れる機会も得られます。「グリーン」「茶」「モビリティ」の頭文字をとって「グーチャモ」と名付けられたこの電気自動車は、茶畑を通る狭い道にツアー参加者を運び、参加者は間近に見える茶畑や古墳や周りの美しい景色を楽しめます。

予約は電話（日本語のみ）で事前に、または空きがあれば当日参加もできます。ツアーの所要時間は約70分で、3月から11月にかけての土曜、日曜、祝日に開催されます。1日4回、9:40～10:55、11:10～12:25、13:30～14:45、15:00～16:10の時間帯があります。グリーンスローモビリティツアーの料金は、大人1,000円、子ども（小学生以下）500円です。奈良交通バスで和束町にお越しの方には割引がありますので、支払い時に乗車証明書を提示してください。ツアー終了後には小さな参加賞がもらえます。グーチャモは2台しかなく、日曜日の定員は1～7名で、土曜日と祝日の定員は1～4名です。

アクセス

「中和束」または「和束河原」バス停から緑の看板方面へ徒歩約2分。車・自転車の方は駐車場をご利用ください。

033-010

Wazuka Town Tourist Information Center and Green Slow Mobility Tour

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 和束町観光案内所とグリーンスローモビリティ/茶畑周遊
観光

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Wazuka Town Tourist Information Center and Green Slow Mobility Tour

Wazuka Town Tourist Information Center

The Wazuka Town Tourist Information Center is a convenient first stop for visitors to obtain maps, tourism pamphlets, rental cycles, advice about local restaurants, and more. Staff are available at the counter to assist visitors in Japanese or other languages via translation app.

Rental Cycles

Visitors interested in getting a more intimate view of Wazuka's green, tea-covered hills can rent a bicycle at the center. Rental is available between 9:00 a.m. and 4:30 p.m. and costs ¥1,100 for the day.

“Guchamo” Green Slow Mobility Tour

The Wazuka Town Tourist Information Center is the starting point for the Green Slow Mobility Tour, which takes visitors to the scenic tea plantations of Ishitera and back in an eco-friendly electric vehicle. The knowledgeable driver will explain the history of Wazuka and the tea cultivation process while giving visitors a close-up view of the plantations.

Tour availability: Saturdays, Sundays, and holidays (March through November)

Times: 9:40 a.m. to 10:55 a.m., 11:10 a.m. to 12:25 p.m., 1:30 p.m. to 2:45 p.m.,
3:00 p.m. to 4:10 p.m.

Group size: 1–4 people (Saturdays and holidays), 1–7 people (Sundays)

Cost: ¥1,000 for adults and ¥500 for children elementary school-aged or younger
(or ¥300 yen for adults and ¥150 for children with Nara Kotsu bus boarding
certificates)

Access

Walk approximately 2 minutes from the Nakawazuka or Wazuka Kawahara bus stop toward the green signboard. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町観光案内所とグリーンスローモビリティツアー

和束町観光案内所

和束町観光案内所は、地図、観光パンフレット、レンタルサイクル、地元のレストランに関するアドバイスなどを求める観光客にとって、最初の立ち寄り先として最適です。カウンターにはスタッフがおり、日本語または翻訳アプリを介して他の言語で観光客をサポートします。

レンタルサイクル

車を運転したり公共交通機関のスケジュールに頼ったりせずに和束町を観光したい観光客は、和束町観光案内所で自転車をレンタルできます。レンタルサイクルは午前 9 時から午後 4 時 30 分まで利用可能で、1 日 1,100 円です。

“グーチャモ”グリーンスローモビリティツアー

和束町観光案内所は、グリーンスローモビリティツアーの出発点です。このツアーでは、環境に優しい電気自動車です。石寺の美しい茶畑までのルートを往復します。茶畑の様子を間近で見学しながら、知識豊富な運手が和束町の歴史やお茶の栽培などを解説します。

ツアー開催日：土曜、日曜、祝日（3月から11月）

時間：9:40～10:55、11:10～12:25、13:30～14:45、15:00～16:10

グループ人数：1～4人（土曜日・祝日）、1～7人（日曜日）

料金：大人1,000円、小学生以下500円（奈良交通バス乗車証明書をお持ちの方は大人300円、子供150円）

アクセス

「中和束」または「和束河原」バス停から緑色の看板に向かって徒歩約2分。車・自転車の駐車場あり。

033-011

Yubune Forest Park

和束町地域力推進協議会

【タイトル】湯船森林公園/マウンテンバイクランド、親水公園、なごみの湖

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Yubune Forest Park

Yubune Forest Park is a popular location for both residents and visitors to enjoy picnicking, mountain biking, autumn mushroom picking, and other outdoor activities. Entry to the park costs ¥500 for adults and ¥200 for small children.

The shallow river running through the park is ideal for cooling off during the summer months and is safe for wading. The aroma of meat and vegetables grilling on sizzling coals fills the designated barbeque area, where families and friends gather to share a meal and socialize. Visitors can reserve barbeque spots and rent grilling equipment at the small office by the parking lot.

Yubune Forest Park includes Yubune MTB Land, which offers a series of mountain biking trails well suited to both beginners and experienced riders. The courses are so well-regarded that Yubune MTB Land was chosen to host the mountain biking event in the 2027 World Masters Games.

While enjoying Yubune Forest Park, please respect the rules made to keep the park clean and enjoyable for everyone. Do not pitch tents, light unauthorized fires, loiter in the park after 5:00 p.m., or leave any trash behind when you depart. Please note the park is only open on Saturdays, Sundays, and public holidays. Visiting requires making a reservation, which can be arranged by contacting staff at the Wazuka Town Rural Development Promotion Division.

Access

Yubune Forest Park is not serviced by bus. The parking lot is open from 9:00 a.m. to 5:00 p.m. and costs ¥500.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

湯船森林公園

湯船森林公園は、ピクニック、釣り、マウンテンバイク、秋のキノコ狩りなどのアウトドア アクティビティが楽しめる住民や観光客に人気のスポットです。公園の入場料は大人 500 円、幼児 200 円です。

公園を流れる浅い川は、夏の間涼むのに安全で理想的な場所です。指定されたバーベキュー エリアでは、炭火の上で焼ける肉や野菜の香りが漂い、家族や友人が集まって食事を楽しみ、交流を深めています。駐車場のそばにある小さなオフィスでは、バーベキュー スポットの予約やグリル器具のレンタルができます。

湯船森林公園内には初心者から経験豊富なライダーまで楽しめる、マウンテンバイクコースの湯船 MTB ランドもあります。このコースはプロのライダーに高く評価されており、2027年にワールド マスターズ ゲームズのマウンテンバイク競技の会場でもあります。

湯船森林公園を楽しむ際は公園を清潔に保ち、誰もが楽しめるように定められたルールを守ってください。テントを張ったり、許可なく火を焚いたり、午後 5 時以降に公園内でうろついたり、出発時にゴミを残したりしないでください。公園は土曜、日曜、祝日のみ開園しておりますので、ご了承ください。訪問するには予約が必要で、和束町役場農村振興課までお問い合わせください。

アクセス

湯船森林公園にはバスは運行していません。駐車場は午前 9 時から午後 5 時まで営業しており、料金は 500 円です。

033-012

Wazukaso Inn

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 京都和束荘/町宿泊施設

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Wazukaso Inn

The Wazukaso Inn is set amid scenic tea fields and is one of the few overnight accommodations available in Wazuka. The central location allows guests to explore the town at a leisurely pace without needing to return to a distant hotel at the end of the day.

Guests at the inn can savor aspects of tea that engage all their senses. The course meals utilize tea flavors in a variety of ways, the rooms contain tea-leaf incense burners, and the communal baths are infused with aromatic tea scents. The inn affords striking views of the lush tea fields that surround the property, and staff helpfully explain tea characteristics and brewing techniques. A popular highlight of the inn is the distinctive star-filled sky on clear nights, made possible by the expansive landscape and the lack of big-city light pollution. The changing seasons enhance the views from the inn, including cherry blossoms and fall colors on the mountainside.

The main building has four rooms: two with Japanese-style futons and two with Western-style beds. The annex has three rooms for larger groups. Booking well in advance is recommended to ensure availability on desired dates.

The inn can be reserved for course lunches and dinners, banquets, events, barbeques, and activities such as sports training and youth camps. Please make reservations at least three business days in advance for dining.

Access

Walk approximately 10 minutes from the Wazukayama-no-Ie bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束荘

美しい緑の茶畑に囲まれた和束荘は、和束町で利用できる数少ない宿泊施設の 1 つです。町の中心部に位置しているため、一日の終わりに遠くのホテルに戻る心配をすることなく、ゆっくりと町を散策できます。

和束荘の宿泊者は、五感を刺激しながらお茶を楽しむことができます。コース料理ではさまざまな方法でお茶の風味を生かし、客室では茶葉の香炉が備えられ、共同浴場にはお茶の香りが漂っています。和束荘からは敷地を取り囲む緑豊かな茶畑の素晴らしい景色を眺めることができ、スタッフがお茶の特徴や淹れ方について親切に説明してくれます。この宿泊のハイライトの一つは、広い風景と大都市の光害に邪魔されずに見える、素晴らしい星空の景色です。季節の移り変わりによって山腹の桜や紅葉など、さまざまな景色も楽しめます。

本館には布団付きの和室が2室、ベッド付きの洋室が2室の計4室があります。別館には大人数で宿泊できる部屋が3室あります。希望の日に宿泊できるよう、早めに予約することをお勧めします。宿泊以外にも、コースランチやディナー、宴会、イベント、バーベキュー、スポーツトレーニングやユースキャンプなどのアクティビティにも利用できます。食事は3営業日前までに予約ください。

アクセス

「和束山の家」バス停から徒歩約10分。車・自転車の駐車場あり。

033-013

Wazukaso Inn

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 京都和束荘/町宿泊施設

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Wazukaso Inn

The Wazukaso Inn is set amid scenic tea fields and offers comfortable Japanese- and Western-style rooms with a variety of tea-based amenities that engage all of the senses.

The hotel offers guests an experience befitting Wazuka's reputation as a *chagenkyo* ("ancestral homeland of tea"). The course meals are made with various tea ingredients, the rooms contain tea-leaf incense burners, and the communal baths are infused with aromatic tea scents. The dining room and lounge afford sweeping views of the surrounding tea-covered hills, and staff provide helpful explanations of tea characteristics and brewing techniques. The open landscape and lack of big-city light pollution make it possible to view star-filled skies when the weather is clear.

This inn is one of the few overnight accommodations in Wazuka, allowing guests to explore the town at a leisurely pace without having to return to a distant hotel at the end of the day. The main building has four rooms: two with Japanese-style futons and two with Western-style beds. The annex has three rooms for larger groups. Booking well in advance is recommended to ensure availability on desired dates.

The Wazukaso Inn can be reserved for course lunches and dinners, banquets, events, barbecues, and activities such as sports training and youth camps. Please make reservations at least three business days in advance for dining.

Access

Walk approximately 10 minutes from the Wazukayama-no-Ie bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束荘

和束荘は美しい茶畑に囲まれ、五感を刺激するさまざまなお茶のアメニティを備えた快適な和室と洋室を提供しています。

この宿は、茶源郷（英訳：「お茶のふるさと」）として知られている和束町の評判にふさわしい経験を宿泊者に提供しています。コース料理はさまざまなお茶を材料に作られ、部屋には茶葉の香炉があり、共同浴場にはお茶の香りが漂っています。和束荘のダイニングルームとラウンジからは、周囲を茶畑に覆われた丘の壮大な景色を眺めることができ、スタッフがお茶の特徴や淹れ方について丁寧に説明してくれます。大都市の光害に遮られることなく見られる、素晴らしい星空の景色は、宿泊のハイライトになります。

この宿は和束町で数少ない宿泊施設の一つであり、一日の終わりに遠くのホテルに戻ることなく、ゆっくりと町を散策することができます。本館には和室が2室、洋室が2室の計4室、別館には大人数で泊まれる3室の客室があります。希望の日に宿泊できるよう、早めに予約することをおすすめします。

和束荘は、コースランチやディナー、宴会、イベント、バーベキュー、スポーツトレーニングやユースキャンプなどのアクティビティにも利用できます。食事は3営業日前までに予約ください。

アクセス

「和束山の家」バス停から徒歩約10分。車・自転車の駐車場あり。

033-014

Tea Culture Experiences in Wazuka

和束町地域力推進協議会

【タイトル】体験コンテンツ/抹茶アート体験、お茶の飲み比べ、お茶摘み体験、農泊体験等

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Tea Culture Experiences in Wazuka

One of the highlights of a trip to Wazuka, a town renowned for its scenic tea plantations, is the chance to enjoy tea-based learning experiences offered by skilled local residents. Tea-plantation workers, guides, tea practitioners, and other community members work together to offer a wide variety of tours and courses that allow participants to immerse themselves directly in the town's tea culture.

Tea-Field Walking Tour

Time: 40–90 mins.

Enjoy the scenic views of the tea fields in Ishitera and Shirasu while a knowledgeable guide explains the history and practice of tea production in Wazuka. A range of courses are available depending on the desired length of time and specific interests. Please specify any requests when inquiring about availability.

Tea Steeping Class

Time: 1 hr.

This class is recommended for visitors who are interested in bringing tea home as a souvenir but are unsure how to best prepare it. An instructor details the proper way to steep *sencha* tea to bring out the best aroma and balance the flavors.

Tea-Leaf-Picking Experience

Time: 40 mins.

This fun and educational experience—one of the most popular in Wazuka—takes participants into the tea fields to learn how to harvest fresh green tea leaves by hand. The course is only offered in May, June, and October when the tea is ready for harvest. Visitors gain firsthand experience and knowledge of the hard work involved in traditional tea production.

***Chakabuki* Tea Tasting Game**

Time: 2 hrs.

Those with a sophisticated palate may enjoy *chakabuki*, a game in which players compete to correctly guess the type of tea they are drinking. This game is said to have begun during the Song dynasty (960–1279) in China, when players would try to identify the regional origin of tea leaves and the water used for steeping them. In Wazuka, players presented with five rounds of tea attempt to identify each one by taste, aroma, and color.

***Nomikurabe* Tea Tasting**

Time: 30 mins.

The *nomikurabe* experience allows participants to sample and compare three different types of tea. It is a brief and enjoyable introduction to the many types of tea available in Wazuka.

***Sado* Tea Gathering**

Time: 1 hr.

In this course, participants will gather in a tea room or other indoor space to experience a tea gathering (or “tea ceremony”), learn how to prepare a bowl of matcha, and listen to an instructor speak about the various customs involved in the practice.

Matcha Art Experience

Time: 1 hr.

While listening to the fascinating history of Wazuka tea production and enjoying a delicious sweet, participants draw freehand or use stencils to create artistic designs on the surface of their drink using concentrated green tea.

Matcha Whisking Class

Time: 1 hr.

Under the instruction of an expert, participants learn to make delicious matcha—a skill they can continue to use long after their trip to Wazuka.

Green Tea *Dango*-Making Class

Time: 1 hr.

The distinctive flavors of Japanese tea are often enjoyed in *dango*, a type of sweet made from rice flour and served on skewers. In this class, participants will learn how

to make *dango* flavored with *sencha*, *hojicha*, and *matcha*.

Tea-Soap-Making Class

Time: 1 hr.

Participants make their own bar of natural soap with green tea; the soap may be taken home as a souvenir. The materials involved are suitable for handling by all ages.

Making Reservations

To book one of these experiences or classes, please contact the Wazuka Town Activation Center (Wazuka-cho Kasseika Center) by email at info@chagenkyo.com. All classes and experiences are conducted in Japanese, so please bring an interpreter if needed. Prices vary but usually begin at ¥1,650 per person. A minimum of 10 people is required for a booking, but fewer than 10 may be negotiated if costs can be met. Please inquire about available dates at least a month in advance.

Access

The meeting place will be in front of the Wazukacha Café. From the Wazukayama-no-Ie bus stop, walk approximately 5 minutes. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町のお茶文化体験

美しい茶畑で有名な和束町への旅のハイライトの一つは、知識豊富な地元住民が提供するお茶に関する学習体験を楽しめることです。茶畑で働く人々、ガイド、茶道家、その他の地域住民が協力して、参加者が町のお茶文化に直接触れられるさまざまなツアーやコースを提供しています。

茶畑ウォーキング

所要時間：40 分～1 時間半

知識豊富なガイドが和束町のお茶生産の歴史と農作業の流れを説明しながら、石寺と白栖の茶畑の美しい景色を楽しめます。希望する時間と特定の関心に応じて、さまざまなコースが用意されています。内容に関してご希望がございましたら、お問い合わせの際にお知らせください。

美味しいお茶の淹れ方教室

所要時間：1 時間

この教室は、お茶をお土産として持ち帰りたいがどのように淹れればよいかわからない、という旅行者におすすめです。講師から、香りを引き出す最適なお湯の温度から味のバランスをとるために茶葉をどのくらい浸しておくべきかで、煎茶の正しい淹れ方を学びます。

お茶摘み体験

時間：40分

これは和束町で最も人気が高い、楽しく学べる体験です。参加者は茶畑に行き、新鮮な緑茶の葉を手で摘む方法を学びます。このコースは、お茶の収穫時期である5月と6月と10月のみ開催されますが、スケジュールが合えば訪問者が伝統的なお茶作りの苦労を直接体験し、知識を得るのに役立つ、楽しく学べる機会になります。

茶香服（茶試飲ゲーム）

時間：2時間

洗練された味覚を持っている人には、飲んでいるお茶の種類を正しく推測するゲームの茶香服に参加して楽しむこともできます。このゲームは中国の宋王朝（960～1279年）に始まったと言われており、当時は茶葉の産地や茶葉を淹れるのに使った水の種類を判別するものでした。和束町では5種類のお茶を味見して、味、香り、色で判別します。

お茶の3種飲み比べ

時間：30分

飲み比べ体験では、3種類のお茶を試飲して比較します。和束町で手に入るさまざまな種類のお茶を、短時間で楽しく知ることができます。

茶道体験

時間：1時間

この体験では、参加者は茶室または他の屋内スペースに集まり、茶会（英訳：tea gathering またはtea ceremony）を体験し、抹茶の点て方を学び、講師から茶道の細やかな作法について話を聞きます。

抹茶アート体験

時間：1時間

和束町のお茶生産の興味深い歴史を聞き、美味しいお菓子を楽しみながら、参加者はフリーハンドまたはステンシルを使用して、濃縮された抹茶を使って飲み物の表面に芸術的なデザインを描きます。

抹茶点て教室

時間：1時間

専門家の指導の下、参加者はおいしい抹茶の点て方を学びます。このスキルは、和束を訪れた後

も長く役立ちます。

茶だんご作り体験

時間：1時間

日本茶の独特の風味は、米粉で作られ串に刺して提供される甘い団子的一种でよく楽しまれています。この教室では、参加者は煎茶、ほうじ茶、抹茶で味付けされた団子の作り方を学びます。

お茶石鹼作り

時間：1時間

参加者は、緑茶を使用して天然石鹼を自分で作り、お土産として持ち帰ることができます。使用する材料は、あらゆる年齢の人が扱えて安全です。

予約

体験や教室の予約は、和束町活性化センター（英語：Wazuka Town Activation Center）までメール（info@chagenkyo.com）でご連絡ください。教室や体験はすべて日本語で行われますので、必要な場合は通訳を同伴してください。料金はさまざまですが、通常は1人あたり最低1,650円（税抜）から始まります。予約には最低10名が必要ですが、費用が折り合えば10名未満でも対応可能です。予約可能な日程については、少なくとも1か月前までにお問い合わせください。

アクセス

集合場所は和束茶カフェ前です。「和束山の家」バス停から徒歩約5分。車と自転車用の駐車場があります。

033-015

Tea Culture Experiences in Wazuka

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 体験コンテンツ/抹茶アート体験、お茶の飲み比べ、お茶摘み体験、農泊体験等

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Tea Culture Experiences in Wazuka

Visitors to Wazuka have the opportunity to enjoy tea-related learning experiences guided by knowledgeable members of the community. Tea-farm workers, guides, tea practitioners, and other local residents work together to offer tours, classes, and other experiences that allow participants to immerse themselves in the town's tea culture. Though similar tea experiences may be offered across Japan, tea cultivation has been the lifeblood of Wazuka for centuries, making it a fitting place to learn directly from people involved in planting, harvesting, processing, selling, and working with tea.

The Wazuka Town Activation Center (Wazuka-cho Kasseika Center) offers the following experiences: Tea-Field Walking Tour, Tea Steeping Class, Tea-Leaf-Picking Experience, Tea Tasting, Tea-Tasting Game (*Chakabuki*), *Sado* Tea Gathering (also known as Tea Ceremony), Matcha Art Experience, Matcha Whisking Class, Green Tea Dango-Making Class, and Tea-Soap-Making Class. Some of these classes teach skills that participants can use when preparing tea after returning home, allowing them to enjoy Wazuka tea long after their visit.

The experiences last 40 minutes to an hour, and prices usually begin at a minimum of ¥1,650 per person. Please note that some experiences are only offered in certain seasons. For detailed explanations of the specific experiences, check the official Iitoko Wazuka Chagenkyo website.

To make a booking, contact the Wazuka Town Activation Center by email at info@chagenkyo.com. All experiences are conducted in Japanese, so please bring an interpreter if needed. A minimum of 10 people is generally required for a booking, but smaller groups may be accommodated if costs are met. Please inquire about availability at least a month in advance of your planned visit.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束町の茶文化体験(パンフレット)

和束町を訪れると知識豊富な地域の人々の案内で、お茶に関する楽しい学習体験を楽しむことができます。茶農家、ガイド、茶道家、その他の地元住民が協力して、参加者が町の茶文化に浸れるツアー、クラス、その他の体験を提供しています。日本全国で同じように一般的なお茶体験が提供されているかもしれませんが、お茶の栽培が数世紀にわたって生活を支えた和束町は、お茶の植え付けから収穫、加工、販売まで、お茶に携わる人々から直接学ぶのにふさわしい場所です。

和束町活性化センター（英語：Wazuka Town Activation Center）では、茶畑ウォーキング、美味しいお茶の淹れ方体験、お茶摘み体験、3種のお茶の飲み比べ、お茶の試飲ゲーム（茶香服）、茶道体験、抹茶アート体験、抹茶の点て方体験、茶だんご作り体験、お茶石鹸づくりなどの体験ができます。これらの体験のいくつかでは、帰国後にお茶を点てるときに使える技術を学べるので、和束町を訪れたあとも長く楽しむことができます。

ほとんどの体験の料金は、1人1,650円からで、所要時間は40分から1時間です。季節限定の体験もありますのでご注意ください。体験内容の詳細については、いいとこ和束茶源郷の公式ウェブサイトをご覧ください。

ご予約は、和束町活性化センターまでメールでお問い合わせください

（info@chagenkyo.com）。体験はすべて日本語で行われますので、必要な場合は通訳を同伴してください。通常、予約には最低10名が必要ですが、費用が合えば少人数のグループでも対応できます。訪問予定日の少なくとも1か月前までに空き状況をお問い合わせください。

033-016

Wazuka Tenmangu Shrine

和束町地域力推進協議会

【タイトル】和束天満宮/本殿（重要文化財）2棟（京都府指定文化財）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Wazuka Tenmangu Shrine

Wazuka Tenmangu Shrine has been an important site of worship for over a thousand years. It is the largest Shinto shrine in Wazuka and is dedicated to Tenjin, the deity of scholarship. Every autumn, the shrine hosts a lively festival to give thanks for a good harvest.

History

Though the exact founding date of Wazuka Tenmangu is unknown, one legend says it was founded in the late tenth century when Emperor Enyu (959–991) enshrined a painting of Sugawara no Michizane (845–903), the man who was posthumously deified as Tenjin. Michizane was an accomplished academic, poet, and high-ranking statesman who was exiled by his political rivals. After his death, natural disasters and other misfortunes led to the belief that the disgraced statesman had become a vengeful spirit. Eventually, however, he was thought to have been pacified when his achievements in life were honored by his deification.

Some scholars believe Wazuka Tenmangu exemplifies how culture and religion from influential cities spread to countryside areas via agricultural estates (*shoen*). In the tenth century, Wazuka was a *shoen* of Kofukuji Temple in Nara, and a shrine was founded for that temple's guardian deity, Kasuga Myojin. In the twelfth century, Wazuka became a *shoen* of Kitano Tenmangu, the head Tenjin shrine in Kyoto, which would have promoted Tenjin worship instead; this may have led to the founding of Wazuka Tenmangu.

Shrine Grounds

The main sanctuary was constructed in 1348 in the *nagare-zukuri* architectural style,

which is characterized by an asymmetrical gabled roof. It is a designated National Important Cultural Property. Statues of oxen, sacred messengers of the deity Tenjin, are placed around the sanctuary.

Large votive tablets—the oldest dating to 1856—are hung in the prayer hall in front of the main sanctuary. The sanctuary is flanked by four small subsidiary shrines. Three are dedicated to commonly worshiped deities, but Goryo Shrine, to the immediate right of the sanctuary, enshrines a figure unique to Tenjin worship: an elderly priest named Watarai no Haruhiko, who remained loyal to Sugawara no Michizane despite his exile.

On the south side of the grounds is a small shrine dedicated to Ebisu, a deity of prosperity and commerce. On the other side of the vermilion bridge are Umemiya Shrine, Kumano Shrine, and Kasuga Shrine, the latter a designated Cultural Property of Kyoto Prefecture. The presence of subsidiary shrines on the grounds is a tradition that allows pilgrims to pray to many popular deities all in one place.

Autumn Festival

The Wazuka Tenmangu *reisai* (annual festival) is held on the second Saturday and Sunday in October. Beginning at 2:00 p.m., the chief priest conducts a ritual to give thanks for a bountiful harvest. One large *mikoshi* (portable shrine) carried by adult men and two smaller ones carried by children are taken around the area to honor the deities and ritually show them their domain. The shrine grounds are filled with various food stalls, and residents and visitors alike gather to eat and celebrate.

Access

Walk approximately 2 minutes from the Higashi Wazuka bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和東天満宮

和東天満宮は、千年以上にわたって町の信仰の場となってきました。学問の神であり天神様が祀られた和東町最大の神社です。毎年秋には豊作の感謝を祝いする祭りが賑やかに行われます。

歴史

正確な創建年は不明ですが、一説によると、10世紀後半に円融天皇（959～991年）が、死後に神格化して天神になった菅原道真公（845～903年）の絵を奉納した際に創建されました。道真公は優れた学者、歌人、高位の政治家でしたが、政敵によって追放されました。道真公の死後、自然災害やその他の不幸が起きたことにより、この不名誉な政治家が怨霊になったと信じられました。やがて道真公の生前の功績が讃えられ、天神として祀ると彼の魂も鎮められたと考えられています。

一部の学者は、和束天満宮は、有力都市の文化と宗教が荘園を通じて田舎地方に広まった例であると考えられています。10世紀、和束は奈良の興福寺の荘園であり、同寺の守護神である春日明神のために神社が創建されました。12世紀、和束は京都の天神総本宮である北野天満宮の荘園となり、代わりに天神信仰が促進され、これが和束天満宮の創建につながった可能性があります。

境内

本殿は1348年に建てられ、非対称のバランスのとれた切妻屋根が特徴的な流造建築様式で、国の重要文化財に指定されています。天神の神使である牛の像が、社殿の周囲に配置されています。

複数の大きな絵馬が本殿前の拝殿に掛けられており、最も古いものは1856年に作られたものです。本殿の両側には四つの小さな末社が並んでいます。そのうち三つは一般的に知られる神々が祀られています。本殿のすぐ右にある御霊神社には天神信仰特有の人物が祀られています。それは、流刑になっても菅原道真公に忠誠を誓い続けた年老いた祀官、度会春彦です。

参道の南側には、繁栄と商売の神である恵比寿を祀った小さな神社があります。朱色の橋を渡ると、梅宮神社、熊野神社、京都府指定文化財の春日神社があり、境内に末社があることで、参拝者は1か所で多くの有名な神々に祈ることができます。

秋祭り

和束天満宮例祭は10月の第2土曜と日曜に行われます。午後2時から宮司が和束地方の豊作の感謝を伝える神事を行います。成人男性が担ぐ大きな神輿1基と子どもが担ぐ小さな神輿2基が、儀式的に神々を敬い、信仰深い地域を神々に見せるために巡回します。この祭りでは境内にさまざまな屋台が並び、住民や観光客が集まって食事を楽しみながらお祝いします。

アクセス

「東和束」バス停から徒歩約2分。車・自転車の駐車場あり。

033-017

Wazuka Tenmangu Shrine

和束町地域力推進協議会

【タイトル】和束天満宮/本殿（重要文化財）2棟（京都府指定文化財）

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Wazuka Tenmangu Shrine

Wazuka Tenmangu is a Shinto shrine dedicated to Tenjin, the deity of scholarship. Tenjin is the deified spirit of Sugawara no Michizane (845–903), an accomplished poet, academic, and statesman who was exiled by his political rivals. A series of disasters after his death led to the belief that Michizane had become a vengeful spirit. Eventually, that spirit was thought to have been pacified by being elevated to the status of a deity, and several thousand shrines dedicated to Tenjin have been founded since.

The history of Wazuka Tenmangu may have begun in the twelfth century, when Wazuka was administered as an agricultural estate of Kitano Tenmangu, the head Tenjin shrine in Kyoto. The current main sanctuary, constructed in 1348, is decorated with statues of oxen, the sacred messengers of Tenjin. The sanctuary is a nationally designated Important Cultural Property.

Subsidiary shrines on the grounds allow visitors to pray to many commonly revered deities in one place. The main sanctuary is flanked by such shrines on both sides, with Goryo Shrine being the most relevant to Tenjin worship; Watarai no Haruhiko, an elderly priest who remained loyal to Sugawara no Michizane despite his exile, is enshrined within. On the southern and northern sides of the pilgrimage path, there are also small shrines dedicated to gods of prosperity and commerce, sake brewing, and the safety of the nation.

Access

Walk 2 minutes from the Higashi Wazuka bus stop. Parking is available for cars and bicycles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和束天満宮（パンフレット）

和束天満宮は、学問の神である天神を祀る神社です。天神とは、政敵によって追放された優れた歌人、学者、政治家である菅原道真（845～903年）を神格化したものです。彼の死後、一連の災難が起こり、道真は怨霊になったと信じられるようになりました。しかし最終的には神として崇拝することで鎮められたと考えられ、それ以来、天神を祀る数千の神社が創建されました。

和束天満宮の歴史は、和束が天神の本宮である北野天満宮の荘園として管理されていた12世紀から始まった可能性があります。現在の本殿は1348年に建立され、天神の使者である牛の像が飾られています。この社殿は国の重要文化財に指定されています。

境内には末社があり、参拝者は一箇所で一般的に知られる多くの神々を祈ることができます。本殿の両側にある末社の中で天神信仰に最も関係があるのは御霊神社です。この神社には、流刑にも関わらず菅原道真に忠誠を尽くした老祀官、度会春彦が祀られています。また、参道の南側と北側には、繁栄と商業、酒造り、国家安泰の神を祀る小さな末社もあります。

アクセス

東和束バス停から徒歩2分。車と自転車の駐車場があります。

033-018

Tomb of Prince Asaka

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 安積親王陵墓/聖武天皇の皇子の古墳

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Tomb of Prince Asaka

Prince Asaka (728–744) was the second son of Emperor Shomu, the 45th emperor of Japan. It is said that the prince enjoyed hunting in Wazuka and often visited the region when traveling between the capital and his father's palace. When Prince Asaka passed away suddenly at the age of 17, his burial mound was erected in Wazuka, and a temple was founded to pray for his repose. The prince was memorialized by his retainer, the poet statesman Otomo no Yakamochi (718–785), with several poems expressing his grief. One of these mentions Wazuka by name:

Having not yet imagined my prince ruling in the heavens,
I once laid my eyes with such indifference
Upon the forested hills of Wazuka

In the late nineteenth century, residents in central Wazuka unearthed flat stones, a stone wall, and fragments of earthenware at a hillside being converted for agricultural use. Though the area has not been fully excavated, it was identified as a burial mound (*kofun*) for a prominent figure. The Imperial Household Agency designated the site the Tomb of Prince Asaka and erected a small stone torii gate, a fence, and a signboard on the hilltop. In Wazuka, the tomb is commonly referred to as Taikoyama (Mt. Taiko).

Access

Walk approximately 5 minutes from the Wazukayama-no-Ie bus stop. Turn right at the large intersection, take the first right, and follow the sign to the stone path through the fields. Parking is available at the Wazukacha Café.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

安積親王墓

安積親王（728-744）は、日本の第 45 代天皇である聖武天皇の次男でした。皇子は和束で狩猟を楽しみ、都と父の宮を行き来する際にこの地域をよく訪れたと言われています。安積親王は 17 歳で急に亡くなられた後、和束町に安積親王の墓が築かれ、その冥福を祈るお寺が建立されました。公卿で歌人でもある忠臣の犬養家持（718～785）が悲哀をテーマにした数首の歌を残して彼を追悼しました。その中の一首に和束の名前が記されています。

わが大君 天知らさむと 思はねば おほにぞ見ける 和豆香山

19 世紀後半、中和束の住民が土地を農地に変えるために掘削したところ、この場所で平らな石や石垣、土器の破片が発掘されました。地域はまだ完全に発掘されていないが、著名人の墓（古墳）であることが判明しています。宮内庁はこの場所を安積親王の墓と定め、丘の頂上に小さな石の鳥居や柵、看板を建てました。和束町では一般的にこの古墳を太鼓山と呼んでいます。

アクセス

和束山の家バス停から徒歩約 5 分。大きな交差点を右折し、最初の角を右折して、標識に従って畑を通る石畳の道を進みます。和束茶カフェには駐車場があります。

033-019

Miroku Magaibutsu

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 弥勒磨崖仏/石造物（相楽東部広域連合指定文化財）

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Miroku Magaibutsu

A majestic 3.3-meter-high depiction of the bodhisattva Miroku (Maitreya) is carved into the granite rock face along the verdant banks of the Wazuka River. Miroku is the Buddha of the Future, prophesized to one day lead humanity into a new age of enlightenment. The low-relief carving was done on a 6.1-meter-tall rock visible from the main road leading in and out of Wazuka, and it represents an ancient tradition of spreading Buddhist imagery beyond temple halls to make it accessible to the common people.

This *magaibutsu*, a Buddhist figure carved into a rock face or cliffside, was created in 1300, according to an inscription etched into the stone to the right of the deity's midsection. The rest of the inscription lists the names of those to whom the image was dedicated; it also exhibits a rarely used Buddhist dating system that reflects the number of years since the death of the historical Buddha, Siddhartha Gautama. The Wazuka Miroku Magaibutsu and nearby Koyasu Jizo are among the very few extant examples of this system of dating stone sculptures in Japan.

Despite the age of the carving and exposure to the elements, the depiction of Miroku remains remarkably clear. The deity's hands are carved to form symbolic gestures (*mudra*) meant to dispel fear and offer blessings to those who behold it.

Access

From the Wazuka Nagai bus stop, cross the adjacent bridge, turn left, and follow the riverside path for approximately 5 minutes. Please be careful not to enter private fields.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

弥勒摩崖仏

高さ 3.3 メートルの堂々とした弥勒菩薩の彫刻が、和束川の緑豊かな川岸沿いの花崗岩の岩壁を飾っています。弥勒菩薩は未来の仏陀の姿であり、いつの日か人類を新しい悟りの時代へと導くと予言されています。この浅浮き彫りの彫刻は、和束を出入りする主要道路から見える高さ 6.1 メートルの岩に施されており、仏教を寺院の堂外に広め庶民にも親しんでもらうという古くからの伝統を表しています。

この磨崖仏（岩壁や崖の側面に彫られた仏像）は、仏像の胴体の右側に刻まれた碑文によると 1300 年に制作されたものです。碑文の残りの部分には、この像に祈願した人々の名前が刻まれています。また、仏陀と呼ばれる歴史上の人物ゴータマ・シッダールタの死後何年経ったかを示す、珍しい仏教の年代表記も記されています。和束弥勒磨崖仏と近くの子安地藏像は、この年代表記をした日本で現存する数少ない石像の例になっています。

彫刻は古く、風雨にさらされているにもかかわらず、弥勒の描写は驚くほど鮮明です。摩崖仏の手は恐れを払い、見る人に祝福を与えることを意図した象徴的なジェスチャー（印）を形づくるように彫刻されています。

アクセス

和束長井バス停から隣接する橋を渡り、左折して川沿いの小道を約5分進みます。私有地に入らないようにご注意ください。

033-020

Great Cedar Tree of Yasaka Jinja Shrine

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 八坂大杉/樹齢1300年以上の大木、パワースポット

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Great Cedar Tree of Yasaka Jinja Shrine

This unusually large cedar tree dominates the shrine grounds at 25 meters in height and 12.8 meters in circumference (as of a 1984 survey). According to legend, the tree is 1,300 years old; scientists, however, estimate its true age at closer to 600 years. The tree's presence is somewhat of a mystery—it is the town's only Kitayama cedar, a regional variety of *Cryptomeria japonica* that grows in northern Kyoto and is difficult to cultivate in relatively warm places like Wazuka. At some point in the past, the main trunk collapsed, but over time, eight large branches fused together to form the current tree. The cedar continues to thrive despite having endured repeated lightning strikes over the years. It is a designated Natural Monument of Kyoto Prefecture.

The tree itself is considered sacred, and two small Shinto shrines are situated in front of it: a Yasaka Jinja Shrine on the right and a Hachimangu Shrine on the left. The first enshrines Gozu Tenno, a bull-headed guardian deity; the second venerates Hachiman, a deity associated with protection of the country. On July 7, Wazuka residents celebrate the Gion-san festival (officially called Gion Matsuri), in which a ritual is held before the Yasaka Shrine to express gratitude and pay respects to the deity. The custom of the day is to eat sweets called *hanamochi manju*, steamed red-bean sweets topped with rice grains that have been dyed a variety of bright colors.

Access

Walk approximately 12 minutes from the Wazuka Chugakko bus stop, following the path across the Iwaibashi Bridge and up the slope.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

八坂神社の大杉

この並外れて大きな杉の木は、なんと高さ 25 メートル、幹の周囲は 12.8 メートルで神社の境内にそびえ立っています（1984 年調査）。伝説によるとこの木は樹齢 1,300 年とされていますが、科学者は実際の樹齢を 600 年近くと推定しています。この木の存在は謎に包まれています。この町で唯一の北山杉（*Cryptomeria japonica* の地域変種）であり、北山杉は京都北部に生育する地域種で、和束のような比較的温暖な地域では栽培が難しいのです。過去のある時点で幹が倒れましたが、時が経つにつれて 8 本の大きな枝が融合して現在の姿になりました。この杉は長年にわたり度重なる落雷にも耐えながらも、今もなお元気に生い茂っています。京都府の天然記念物に指定されています。

杉の前には、右側に八坂神社、左側に八幡宮の小さな神社が2つあります。牛頭天王（牛の頭を持つ守護神）と八幡神（国家鎮護の神）を祀っています。7月7日には、和束の住民が祇園さん（正式名称は祇園祭）を祝い、八坂神社の神棚の前で感謝や敬意を表す儀式が行われます。この日の習慣は花餅饅頭と呼ばれる、蒸した小豆団子の上にさまざまな鮮やかな色に染めたるちの米粒を乗せたお菓子を食することです。

アクセス

和束中学校バス停から祝橋を渡り、坂道を上って約12分歩きます。

033-021

Shohoji Temple

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 正法寺/京都府指定文化財 仏殿/表門

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shohoji Temple

Shohoji Temple stands at the base of verdant Mt. Buppoji and enshrines Amida Buddha, the Buddha of Infinite Light and Life. In autumn, maple trees throughout the grounds of this Zen Buddhist temple turn vivid shades of red, particularly around the entrance.

History

Temple legend states that Shohoji was founded in 744 near the tomb of Prince Asaka (728–744) to memorialize the young prince. The founder, Gyoki (668–749), was a prominent monk who travelled the country spreading Buddhism and supporting public works projects. Though the temple was once a large mountaintop complex, it fell into disrepair during a period of civil unrest in the early fourteenth century.

In the mid-seventeenth century, Shohoji was reconstructed on a smaller scale at the foot of the mountain by the Tamura family, then lords of Bukkoji Castle. At their request, the head priest of Eigenji Temple, Nyosetsu Mongan (1601–1671), revived Shohoji as an Eigenji school temple, part of the Rinzaï sect of Zen Buddhism. One of the temple's important sponsors was Tokugawa Masako (Tofukumon'in, 1607–1678), who had been granted Wazuka estate lands upon her marriage to Emperor Go-Mizuno'o.

Temple Grounds

The main gate and the Buddha Hall are designated Tangible Cultural Properties of Kyoto Prefecture. The gate was originally donated by Tokugawa Masako from the Kyoto Sento Imperial Palace; the Buddha Hall can be dated to the mid-seventeenth century reconstruction. Inside the Buddha Hall is a seated statue of Amida Buddha that was likely made in the Edo period (1603–1867).

To the right of the Buddha Hall is a small hall for the worship of a deity important to the Koshin folk religion, which combines Taoism, Shinto, Buddhism, and other traditions. Next to the Koshin Hall is a relatively new set of twelve round-faced statues of the bodhisattva Jizo, each one posed with a different Chinese zodiac animal. Up a small flight of stairs is a Jizo Hall containing another statue of Jizo, who is venerated as a guardian of travelers and children.

The main hall is generally closed to the public, but those who wish to enter may inquire with temple staff. A statue of Sei Kannon, the bodhisattva of compassion, is enshrined within. Tokugawa Masako is said to have prayed to this statue in her palace quarters before it was given to Shohoji.

Seasonal Beauty

The path to the temple is lined with lush maple trees thought to have been donated by Eigenji, the head temple in Shiga Prefecture known for its fall scenery. Here, the leaves turn brilliant shades of red and orange in autumn, and a large ginkgo tree adds touches of bright yellow. In other seasons, small patches of flowers bloom throughout the precincts, including azalea, iris, and sal trees (*Shorea robusta*).

Access

Walk approximately 8 minutes from the Wazukayama-no-Ie bus stop, taking a left at the large intersection.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

正法寺

正法寺は、仏法寺山の緑豊かな麓に位置していて、無限の光と命を持つ阿弥陀仏が祀られています。秋には、この禅寺の境内、特に入口付近は、紅葉の木々で鮮やかな赤色に染まります。

歴史

お寺の伝説によると正法寺は、744 年に安積親王（728～744 年）の古墳の近くに若き王の冥福を祈るために創建されました。創建者の行基（668～749 年）は仏教を広め、公共事業を支援するために全国を旅したことで知られる著名な僧侶でした。この寺はかつて山頂にある大きな寺院でしたが、14 世紀初頭の内乱の時期に荒廃しました。

17 世紀半ば、正法寺は仏光寺城主田村家によって山麓に規模を小さくして再建されました。田

村家の要請により、永源寺の住職如雪文巖（1601-1671）が臨済宗永源寺派として正法寺を再興しました。この寺の重要な後援者の1人は、後水尾天皇との結婚により和束荘地を与えられた徳川和子（東福門院、1607-1678）でした。

寺の境内

表門と仏殿は京都府の有形文化財に指定されています。門はもともと京都仙洞御所から徳川和子が寄進したもので、仏殿は17世紀半ばの再建の時から建物です。仏殿の中には、江戸時代（1603～1867年）に作られたと思われる阿弥陀如来の坐像があります。

仏殿の右側には、道教、神道、仏教、その他の伝統を組み合わせた民間信仰である庚申にとって重要な神を祀る小さな堂があります。庚申堂の横には、十二支の動物をそれぞれ1つずつ抱えた、比較的新しい丸い顔の地藏菩薩像12体があります。小さな階段を上ると、旅人や子供の守り神として崇拜されることが多い地藏像を祀る地藏堂があります。

本堂は通常は非公開ですが、入りたい人は寺の職員に尋ねることができます。中には慈悲の菩薩である聖観音像が祀られています。この像は、徳川和子が正法寺に寄進する前に自分の殿室で崇拝していたと言われています。

四季折々の美しさ

寺への参道には、紅葉の名所としても知られる滋賀県の総本山永源寺から寄進されたとされる、青々とした紅葉の木々が植えられています。秋には紅葉が赤やオレンジに色づき、大きなイチョウの木が鮮やかな黄色の彩りを添えます。境内にはツツジ、アヤメ、沙羅など、季節の花々が咲き誇ります。

アクセス

和束山の家バス停から大きな交差点を左折し、徒歩約8分。

033-022

Shohoji Temple

和束町地域力推進協議会

【タイトル】 正法寺/京都府指定文化財 仏殿/表門

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Shohoji Temple

Shohoji, a Zen Buddhist temple at the base of Mt. Buppoji, is a popular autumn foliage viewing spot. In November, maple trees on the grounds turn vivid shades of orange and red, particularly around the entrance. At various times of year, azalea, iris, sal trees (*Shorea robusta*), and other plants add color to the tree-covered hill.

According to legend, Shohoji was founded in 744 and dedicated to the repose of Prince Asaka (728–744) after he was buried nearby. The current temple was built in the mid-seventeenth century by the Tamura family, who were the lords of Bukkoji Castle, and supported by the empress Tokugawa Masako (Tofukumon'in, 1607–1678), who was granted Wazuka estate lands upon her marriage to Emperor Go-Mizuno'o.

The temple grounds contain two Tangible Cultural Properties designated by Kyoto Prefecture: the main gate, which was relocated from the Kyoto Sento Imperial Palace, and the Buddha Hall, which enshrines a statue of Amida Buddha, the Buddha of Infinite Life and Light. There are also small halls for worshipping a Koshin folk deity and the bodhisattva Jizo, a guardian of travelers and children. Between them are twelve round-faced Jizo statues, each posed with a Chinese zodiac animal.

The main hall houses a statue of Sei Kannon, the bodhisattva of compassion, donated by Tokugawa Masako. Visitors who wish to enter the main hall and venerate the statue should inquire with temple staff.

Access

From the Wazukayama-no-Ie bus stop, turn left at the large intersection and walk approximately 8 minutes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

正法寺

正法寺は仏法寺山の麓にある禅寺で、秋の紅葉の名所として人気があります。特に入り口付近では、境内のカエデの木々が緑と赤の鮮やかな色合いになります。一年を通じてさまざまな時期にツツジ、アヤメ、沙羅双樹（学名：Shorea robusta）などの植物が木々に覆われた丘に彩りを添えます。

伝説によると、正法寺は近くに埋葬された安積親王（728～744 年）の冥福を祈るために744 年に創建されました。現在の寺は、17世紀半ばに後水尾天皇との結婚で和束荘を与えられた徳川和子皇后（東福門院、1607～1678 年）の支援を受け、仏光寺城主であった田村家によって建立されました。

境内には2つの京都府指定有形文化財である、京都仙洞御所から移築された山門と阿弥陀如来像を安置する仏殿があります。また、庚申の神や旅人や子供の守り神である地蔵菩薩を祀る小さなお堂もあり、そのお堂の間には十二支の動物を抱いた丸顔の地蔵像が12体あります。

本堂には徳川和子が寄進した聖観音像が安置されています。本堂に入って拝観したい場合は、寺の職員に問い合わせてください。

アクセス

和束山の家バス停から大きな交差点を左折し、徒歩約8分。

033-023

Koyasu Jizo

和束町地域力推進協議会

【タイトル】子安地蔵/石造物（相楽東部広域連合指定文化財）

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Koyasu Jizo

The Jizo statue behind the hillside tea field in the Erihara Pass has long been venerated in Wazuka for bestowing blessings of safe travels and easy childbirth. Jizo (Ksitigarbha) is a bodhisattva associated with the protection of travelers and children, and Koyasu Jizo is a form of the deity thought to watch over women in childbirth. An inscription on the lower right and left sides of the halo names the priest Jikkei and dates the statue to 1267, “more than 2,000 years after the passing of the Buddha.” Another example of this rare practice of dating statuary by counting years from the death of the historical Buddha, Siddhartha Gautama, can be found on the Miroku Magaibutsu carving nearby. The stone altar around the Koyasu Jizo was installed at a later date; many smaller Jizo statues are lined up beside it.

The road in front of the Koyasu Jizo was once part of a route that connected Yamashiro and Omi Provinces (modern-day Kyoto and Shiga Prefectures), and many travelers likely prayed to the statue on their journey. People from the surrounding area made pilgrimages to worship here as well, having heard tales of the efficacy of praying to Koyasu Jizo.

During the Jizo-bon Memorial Service on August 24, a small ritual is performed in front of the statue.

Access

Walk approximately 20 minutes from the Wazukanagai bus stop. Look for a water tank surrounded by a green fence and a silver signpost in Japanese to know where to turn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

子安地蔵（パンフレット）

撰原峠の丘陵の茶畑の裏には、和束町で古くから旅の安全と安産の御利益があると信じられている地蔵像が祀られています。地蔵菩薩は旅人や子どもの守り神として信仰が深く、子安地蔵は安産に特に関係のある菩薩尊です。光背の右下と左下には「実慶僧」の銘と、1267 年「釈迦如来滅後 二千余歳」の作と記されています。歴史上の人物であるシッダールタ・ゴータマの入滅から数えて彫像の年代を算定する珍しい表示例は、近くにある弥勒磨崖仏像にも見られます。子安地蔵の周囲にある石の祭壇は後から設置されたもので、その横には小さな地蔵が並んでいます。

子安地蔵の前の道はかつて山城国と近江国（現在の京都府と滋賀県）を結ぶ道の一部で、旅の途中で多くの旅人がこの子安地蔵に祈願したのでしょう。子安地蔵のご利益を聞きつけた近隣の人々も参拝に訪れました。

8月24日の地蔵盆には地蔵の前で小さな儀式が行われます。

アクセス

和束長井バス停から徒歩約20分。緑の柵に囲まれている水槽と銀色の日本語の道標が目印です。

地域番号	034	協議会名	北野異人館協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
034-001	北野異人館の概要		250-500w	Web
034-002	風見鶏の館の概要		250-500w	Web
034-003	旧トーマスの住民が再び訪問のきっかけはドラマにある		1-250w	Web
034-004	ラインの館の概要		1-250w	Web
034-005	伝統的建造物群保存地区の説明		1-250w	Web
034-006	うろこの家・展望ギャラリーの概要		250-500w	Web
034-007	山手八番館の概要		1-250w	Web
034-008	北野外国人倶楽部の概要		1-250w	Web
034-009	坂の上の異人館の概要		1-250w	Web
034-010	英国館の概要		250-500w	Web
034-011	洋館長屋の概要		1-250w	Web
034-012	ベンの子の概要		1-250w	Web
034-013	神戸トリックアート不思議な領事館の概要		1-250w	Web

034-001

History of Kobe Kitano Ijinkan-gai

北野異人館協議会

【タイトル】 北野異人館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

History of Kobe Kitano Ijinkan-gai

Japan maintained a policy of national seclusion during the Edo period (1603–1867), with strict prohibitions on trade, travel, and contact with most foreign countries. This policy remained in effect for over 200 years, ending in 1858 with the signing of the Ansei Treaties between Japan and five Western powers. In 1868, Kobe became one of several ports to be opened to foreign trade.

Plans at the time called for the establishment on the Kobe coast of a foreign settlement where non-Japanese were expected to live and work. Due to the turmoil at the end of the Edo period, however, the settlement was not completed by the agreed deadline. The government then decided to allow foreigners to live alongside Japanese citizens in the surrounding neighborhoods between the Ikuta and Uji rivers. Many foreigners were drawn to the Yamate area, where Kobe's Kitano-cho/Yamamoto-dori district was eventually located. It was an appealing rural hillside to the north of the foreign settlement, with a gentle slope that provided a view of the port and the sea. Beginning in the 1880s, the district developed into a unique foreign residential area that became known as Kitano Ijinkan-gai. *Ijin* is a word for “foreigner,” *kan* means “house,” and *gai* means “district.”

By the mid-twentieth century, Kitano Ijinkan-gai had grown to contain more than 200 Western-style and Japanese-style buildings. The district became known as a place where Japanese and foreigners could live together harmoniously. The foreign influence also brought technological advances and lifestyle changes: Kobe's Ijinkan-gai was the first place in Japan to be influenced by meat-based cuisine, Western-style clothing, and golf.

The homes of foreigners were called *ijinkan* (“foreigner houses”). Thanks to the presence of skilled non-Japanese architects such as the German Georg de Lalande and the Englishman A. N. Hansell, the designs of many Western-style houses and other buildings in Kobe were of a very high quality. At the same time, there was great hybridization as Japanese design and construction techniques were combined with Western ones. The carpenters, plasterers, stonemasons, and roofers were usually Japanese, but they developed a progressive “internationalized” skill set. A “Kobe Ijinkan Style” soon emerged, with common features such as verandas, bay windows, brick chimneys, and painted clapboard or plaster exterior walls. The buildings were often connected to a Japanese-style wing that was more comfortable for Japanese employees.

Many of these Western-style buildings have disappeared due to damage caused by World War II, postwar development, and the ravages of time. But thanks to successful preservation efforts that began around 1960, approximately 30 such buildings constructed in the nineteenth and early twentieth centuries remain standing today. This is in marked contrast to other former treaty ports in Japan such as Yokohama or Nagasaki, where little remains of formerly vibrant foreign settlements. For these and other reasons, the numerous Western-style houses of Kitano Ijinkan-gai are precious physical documents of an important era in Japanese and international history and culture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

神戸北野異人館街の歴史

江戸時代（1603～1867）の間、日本は鎖国政策を維持し、ほとんどの外国との貿易、渡航、接触を厳しく禁止していました。この政策は200年以上続き、1858年に日本と5つの西洋列強との間で安政条約が締結されることで終わりを迎えました。1868年、神戸は外国貿易に開放された数港の一つとなりました。

当時の計画では、神戸の海岸に外国人が居住し働くことを想定した外国人居留地を設立することが予定されていました。しかし、江戸時代末期の混乱により、居留地は期限までに完成しませんでした。そこで政府は、生田川と宇治川の間周辺地域において、外国人が日本人市民と共に居住することを許可することにしました。多くの外国人は、後に北野町山本通地区となる山手地域に

魅力を感じました。そこは外国人居留地の北に位置する魅力的な田舎の丘陵地で、なだらかな斜面からは港と海の景色が見えました。1880年代から、ここはユニークな外国人居住区として発展し、北野異人館街として知られるようになりました。「異人」は「外国人」を意味する言葉で、「館」は「家」を、「街」は「地区」を意味します。

20世紀半ばまでに、北野異人館街は200以上の洋風建築と和風建築を擁するまでに成長しました。この地区は日本人と外国人が調和して共に暮らせる場所として知られるようになりました。外国の影響は、技術的進歩とライフスタイルの変化をもたらしました：神戸の異人館街は、肉食文化、洋装、そしてゴルフの影響を日本で最初に受けた場所でした。

外国人の家は「異人館」と呼ばれ、ドイツ人のゲオルク・デ・ランデやイギリス人のA.N.ハンセルなどの優れた非日本人建築家の存在により、神戸の多くの家屋や他の洋風建築のデザインは非常に品質が高いものでした。同時に、日本のデザインと建築技術が西洋のものと組み合わせられ、多大な融合が起こりました。大工、左官、石工、屋根葺き職人は通常日本人でしたが、彼らは進歩的な「国際化された」技能を備えるようになりました。やがて、ベランダ、出窓、レンガの煙突、塗装された木製の下見板張りや漆喰の外壁などの共通の特徴を持つ「神戸異人館様式」が現れました。こうした建物は多くの場合、日本人の従業員にとってより快適な和風の翼部と接続されていました。

これらの洋風建築の多くは、第二次世界大戦による被害、戦後の開発、そして時の経過による劣化のために消滅しました。しかし、1960年ごろに始まった保存活動が成功したおかげで、19世紀から20世紀初頭に建設されたそのような建物の約30棟が今日も残っています。このことは、かつては活気に満ちていた外国人居留地の痕跡がほとんど残っていない横浜や長崎などの他の旧開港地とは顕著な対照をなしています。そうした理由などにより、北野異人館街の数多くの洋風住宅は、日本の、そして国際的な歴史文化の重要な一時代を物語る貴重な物的証拠となっています。

034-002

Weathercock House

北野異人館協議会

【タイトル】 風見鶏の館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Weathercock House

Weathercock House (a.k.a. the Former Thomas Residence) is an iconic Kobe building, and its namesake weathercock is a beloved symbol of the city's Ijinkan-gai district. The elegant and imposing structure was built around 1909 for the successful German trader Gottfried Thomas. The house is made of wood but is unique among Kobe *ijinkan* houses in having exterior walls clad in brick and a half-basement clad in granite. It was designed by the German architect Georg de Lalande (1872–1914), who worked on many important public and private buildings in Japan, China, and Korea during the first decades of the twentieth century.

The interior of Weathercock House shows a sophisticated sensibility that is dignified but also playful. It incorporates traditional German design features such as heavy beams and dark woodwork. Stained glass, brass doorknobs, light fixtures, and cabinet hinges and hardware incorporate decorative elements characteristic of the *Jugendstil* (German Art Nouveau) movement. The house is surrounded by an elaborate wooden fence with a tall trellised gateway bearing the name “Rhenania”—the Latinized name for the Rhineland—in Germanic script, a reference to Thomas's home region of Koblenz, on the Rhine River. The house itself appears raised on a stone base formed by the walls of the half-basement. In addition to brick, some exterior walls are clad in painted wood with decorative details, as well as half-timbering on plaster. The striking three-story tower at the front corner of the house has a painted iron weathercock at its pinnacle that can be seen from a distance. The complex hipped roof is covered with slate in a diamond pattern.

The dramatic granite porch opens into a vestibule, and then to a high-ceilinged central

hall with a large wooden staircase. The spacious living and dining rooms are connected by a wide opening with wooden sliding doors, giving the ground floor a feeling of great openness. One corner of the living room has a more private raised nook with a railing. The dining room features a built-in wooden sideboard with *Jugendstil* ornamental brass hinges. The sideboard, wooden wall paneling, and doorframes are all topped by a crenellated motif intended to evoke Stolzenfels Castle in Koblenz. A study with a sunny octagonal bay is tucked next to the entry porch. This allowed the owner to see who was approaching. The floor here is raised as well, and it has a railing with *Jugendstil*-derived painted panels. The ground floor also contains an elegantly appointed drawing room and a spacious veranda.

The second floor was devoted to private family space and is more subdued in decoration. It contains a large main bedroom and a children's room, a guest room, and a breakfast nook, as well as a glassed-in veranda. All of these rooms open onto the second-floor hall, which was originally used as a billiard room and retains the dual hanging light fixtures installed for that purpose. A small observation room only accessible from the attic occupies the top level of the tower.

When the First World War broke out in 1914, the Thomas family was in Germany on vacation and was unable to return to Kobe. The house was sold, and in later years it became a laboratory and then a Chinese school. In January 1978, Weathercock House was designated an Important Cultural Property and was purchased by the city of Kobe. Though damaged by the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake, it was subsequently restored. Seismic reinforcement work on the house began in 2023.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

風見鶏の館

風見鶏の館（旧トーマス邸としても知られる）は、神戸を代表する建物で、その名前の由来となった風見鶏は異人館街のシンボルとして親しまれています。この優美で威厳のある建物は、1909年にドイツ人貿易商のゴットフリード・トーマスのために建てられました。木造建築ではありますが、神戸の異人館の中でも特徴的な、外壁をレンガで覆い、半地下部分を御影石で装飾した珍しい建物です。この建物は、20世紀の最初の数十年間に日本、中国、韓国で多くの重要な公共建築や私邸を手がけたドイツ人建築家ゲオルク・デ・ラランデ（1872-1914）によって設計されました。

風見鶏の館の内部は洗練された感性を示しており、威厳がありながらも遊び心も感じられます。この建物には太い梁や濃い色の木工など、伝統的なドイツのデザイン要素が取り入れられています。ステンドグラス、真鍮のドアノブ、照明器具、装飾的な戸棚の蝶番や金具にはユーゲントシュティール（ドイツ・アールヌーヴォー）運動の特徴的な装飾要素が組み込まれています。家は精巧な木製の塀に囲まれており、高い格子状の門にはトーマスの出身地であるライン川沿いのコブレンツを指す「Rhenania」というラテン語名がドイツ文字で書かれています。家そのものは、半地下の壁によって形成された石造りの基礎の上に建てられています。レンガに加えて、一部の外壁は装飾的な細部を持つ塗装された木材で覆われており、また漆喰の上に半木骨構造も見られます。家の前面の角にある印象的な3階建ての塔の頂点には、遠くからも見える塗装された鉄製の風見鶏があります。複雑な寄棟屋根はダイヤモンド模様のスレートで覆われています。

印象的な花崗岩の玄関ポーチは前室へと続き、そこから天井の高い中央ホールと大きな木製の階段へとつながっています。広々としたリビングとダイニングルームは、木製の引き戸のある大きな開口部で繋がっており、1階に大きな開放感を与えています。リビングルームの一角には、床が一段高くなっているこじんまりした手すり付きの区画があります。ダイニングルームには、ユーゲントシュティールの装飾的な真鍮の蝶番が付いた造り付けの木製サイドボードがあります。サイドボード、木製の壁パネル、ドア枠はすべて、コブレンツのシュトルツェンフェルス城を思わせる城壁風の装飾で上部が飾られています。日当たりの良い八角形の出窓のある書斎は、入口ポーチの隣に配置されています。これにより、家の主人が誰が近づいてくるかを見ることができるようになっていました。この床も高くなっており、ユーゲントシュティールの影響がみられる塗装されたパネルの手すりがあります。1階には他に、優雅に設えられた応接室と広々としたベランダもあります。

2階は家族の私的空間に充てられており、装飾はより控えめです。広い主寝室と子供部屋、客室、朝食用の小部屋、ガラス張りのベランダがあります。これらの部屋はすべて2階のホールに面しています；このホールは元々ビリヤードルームとして使用されており、その目的のために設置された2つの吊り下げ式照明器具が残されています。塔の最上階には、屋根裏部屋からのみアクセス可能な小さな展望室があります。

1914年に第一次世界大戦が勃発した際、トーマス家はドイツで休暇中であり、神戸に戻ることができませんでした。家は売却され、後年には研究所や中国人学校として使用されました。1978年1月、風見鶏の館は重要文化財に指定され、神戸市によって購入されました。1995年の阪神・淡路大震災で被害を受けましたが、その後修復されました。2023年には耐震補強工事が開始されました。

【タイトル】旧トーマスの住民が再び訪問のきっかけはドラマにある

【想定媒体】Web

できあがった英語解説文

How a TV Drama Saved Weathercock House

The television drama *Kazamidori* (“Weathercock”), set in Kobe’s Kitano Ijinkan-gai district in the early twentieth century, sparked a revival of interest in the area when it aired in the late 1970s. *Kazamidori* was inspired by the former Thomas Residence, built around 1909 and popularly known as “Weathercock House” because of the unique weathercock atop its tower. The story begins in the Taisho era (1912–1926), and centers on a heroine whose German husband operated a bakery in Kobe. Although neither the actual Thomas Residence nor the Thomas family is depicted in the drama, it vividly captured the atmosphere of life in Kobe’s international district.

The popular show was produced by the national TV network NHK and ran in the morning six days a week from October 1977 until April 1978, with over 150 15-minute episodes. It quickly captured the public’s imagination, prompting people to learn more about Kobe’s *ijinkan* (“foreigner houses”) in general and to visit them in person. This noticeable upsurge in interest and tourism was a major impetus for the city of Kobe’s decision, in 1979, to create the Kitano-cho/Yamamoto-dori Preservation District for Groups of Traditional Buildings, and for the subsequent restoration and opening of historical structures there.

In a surprising twist of fate, Else Karbeau (formerly Thomas), who was then living in Germany but had lived in Weathercock House as a child, heard about *Kazamidori* and the interest in the house and was inspired to help with its preservation. She visited Kobe in 1979, bringing with her many photos and documents of the house in its original condition. These served as invaluable records for the experts overseeing its restoration. Thanks to *Kazamidori*, the weathercock itself soon became a symbol of

Kobe's unique culture and history, appearing on everything from municipal signage to fire hydrants.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

テレビドラマが風見鶏の館を救った経緯

「風見鶏」というタイトルのテレビドラマは、20世紀初頭の神戸北野異人館街を舞台にしており、1970年代後半に放映された際、この地域への関心が急増しました。風見鶏は、1909年頃に建てられ、塔の上にユニークな風見鶏があることから「風見鶏の館」として親しまれている旧トーマス邸に着想を得ていました。物語は大正時代（1912～1926）に始まり、神戸でパン屋を営むドイツ人と結婚したヒロインを中心に展開しました。実際のトーマス邸やトーマス一家はドラマには描かれていませんが、神戸の国際通りにおける生活の雰囲気鮮やかに捉えていました。

この人気ドラマは日本のテレビ局のNHKによって制作され、1977年10月から1978年4月まで、週6日、毎朝15分間のエピソードが150回以上放映されました。このドラマはすぐに大衆の想像力を捉え、人々に神戸の異人館について一般的にもっと知りたい、そこに実際に訪れたいと思わせました。この顕著な関心と観光意欲の高まりは、1979年に神戸市が北野町・山本通り重要伝統的建造物群保存地区を創設し、その後そこにある歴史的建造物を修復し公開するという決定を下す上で、大きな要因となりました。

意外な経緯を経て、子ども時代に風見鶏の館で暮らしており、当時ドイツに住んでいたエルゼ・カルボー（旧姓トーマス）は、このドラマと家への関心について耳にし、その保存に協力する意思を示しました。彼女は家の元の状態を示す多くの写真や文書を携えて1979年に神戸を訪れました。これらの資料は、修復を監督する専門家にとって貴重な記録となりました。ドラマ「風見鶏」のおかげで、風見鶏はやがて神戸のユニークな文化と歴史の象徴となり、市の標識から消火栓に至るまで、あらゆる場所に登場するようになりました。

034-004

Rhine House

北野異人館協議会

【タイトル】 ラインの館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Rhine House

Rhine House is a meticulously preserved two-story wooden home built in 1915 for J. R. Drewell. It consists of a main house and a service wing attached in an L configuration, and is considered an outstanding example of the Kobe *ijinkan* style of Western houses. Rhine House now serves as an information center for the Kitano Ijinkan-gai district and the preservation efforts underway on the district's historical buildings. Notable design features of the house include a south-facing porch with paired square columns and a glass-enclosed veranda above; bay windows with decorative details on the eastern and western sides; and wooden louvered door and window shutters. A roof of gray-glazed Japanese tile sits above a Western-style wooden dentiled cornice, and the external walls are sided with thick wooden clapboards highlighted by an ornamental engraved line. Most of these features had become characteristic of Western-style houses in Kobe as early as the 1880s, and they continued to be popular decades later.

The city of Kobe designated Rhine House a Traditional Historic Building in 1980 and an Important Building for the Formation of Landscapes in 2016. Beginning in 2017, the house was entirely dismantled and reassembled to perform earthquake-resistant structural upgrades, and all walls, floors, ceilings, fittings, and decorative moldings were restored to their original state. The house was reopened in 2019. The first floor of the main house originally included a drawing room, a living room, and a dining room, while the second floor contained bedrooms. The second floor is now devoted to informative exhibits about the history of the house and the foreign settlements in Kobe, including the Kitano-cho/Yamamoto-dori Preservation District. The displays also describe the repair of damage incurred in the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake, as well as the more recent dismantling and rebuilding process.

The city of Kobe purchased the house in 1978, and the name “Rhine House” was chosen after receiving public input. The last non-Japanese resident of the house was a German named Oberlein, who lived there until 1968. The name “Rhine” was both an acknowledgement of his native Germany and a pun derived from the strongly linear aspect of the exterior siding, as “Rhine” and “line” are pronounced identically in Japanese. Rhine House is the only *ijinkan* in Kobe where admission is free of charge.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ラインの館

ラインの館は、1915年にJ. R. ドレウエルのために建てられた、細心の注意を払って保存されている2階建ての木造住宅です。主屋と付属棟がL字型に接続されており、神戸の異人館様式の洋風住宅の優れた例と考えられています。現在ラインの館は北野異人館地域とそこにある歴史的建造物の保存活動のための情報センターとして機能しています。この家の注目すべきデザインの特徴には、対になった角柱のある南向きのポーチとその上のガラス張りのベランダ、東西の側面にある装飾的な詳細が施された出窓、木製のルーバー式のドアと窓のシャッターなどがあります。西洋風の本製の歯型装飾のある軒蛇腹の上に、灰色の釉薬をかけた日本瓦の屋根が乗っており、外壁は厚い木製の下見板で作られていて、装飾的な彫り込み線が施されています。これらの特徴の多くは、1880年代という早い時期から神戸の洋風住宅の特徴となり、数十年後まで人気が続きました。

神戸市は、ラインの館を1980年に伝統的建造物に、2016年に景観形成重要建築物に指定しました。2017年から、この家は完全に解体され再組み立てされ、耐震構造の改良が加えられました。また、すべての壁、床、天井、備品、装飾的な成形物が元の状態に復元されました。家は2019年に再び開館しました。主屋の1階には元々応接室、居間、食堂が含まれていましたが、2階は寝室でした。現在、2階は家の歴史と神戸の外国人居留地（北野町・山本通り重要伝統的建造物群保存地区を含む）についての情報展示に充てられています。展示には、1995年の阪神・淡路大震災で受けた被害の修復や、最近の解体・再建プロセスについての説明も含まれています。

神戸市は1978年にこの家を購入し、「ラインの館」という名前は市民の意見を取り入れて選ばれました。この家の最後の非日本人居住者は、1968年まで住んでいたオーバーラインというドイツ人でした。「ライン」という名前は、彼の母国ドイツへの敬意を表すとともに、外装の下見板の強い直線的な特徴から来る言葉遊びでもありました；「Rhine」と「Line（線）」は日本語では同じ発音になります。ラインの館は、神戸の異人館の中で唯一入場料が無料の施設です。

034-005

The Preservation District for Groups of Traditional Buildings

北野異人館協議会

【タイトル】 伝統的建造物群保存地区の説明

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

The Preservation District for Groups of Traditional Buildings

Rhine House serves as an information center for the history of the Kitano Ijinkan-gai district and the preservation efforts underway on the many historical buildings there. For more than 200 years during the Edo period (1603–1867), Japan maintained a policy of national seclusion under which trade, travel, and contact with most foreign countries were prohibited. This policy ended in 1858 with the signing of the Ansei Treaties, and in 1868 Kobe became one of several ports opened to foreign trade. However, the completion of the agreed-upon foreign settlement was delayed, and many Western-style residences (*ijinkan*) for foreigners were built in the surrounding neighborhoods of the city. The Yamate area, where the Kitano-cho/Yamamoto-dori district was eventually located, was an attractive rural hillside to the north of the foreign settlement with views of the port and the sea. It developed into a unique foreign residential area in the 1880s, and by the mid-twentieth century it contained more than 200 Western- and Japanese-style buildings.

Many of these Western-style buildings have been lost over the years due to damage from World War II, postwar development, and age, but over 30 such buildings constructed in the nineteenth and early twentieth centuries remain standing today. Most of these are former residences for foreign consuls or trading company officials. In December 1979, the city of Kobe declared the Kitano-cho/Yamamoto-dori district a Preservation District for Groups of Traditional Buildings, in accordance with the Kobe City Urban Landscape Ordinance. This regulation is designed to preserve culturally significant buildings as groups rather than individually, including streetscape aspects such as gates and walls and environmental features such as gardens, hedges, and trees.

The Kitano-cho/Yamamoto-dori Preservation District contains 34 Western-style buildings and seven Japanese-style buildings designated for protection, and preservation activities are ongoing. The district extends some 750 meters from east to west and 400 meters from north to south. Although most of the Western-style houses were severely damaged in the Great Hanshin-Awaji Earthquake of January 1995, all have been restored and reopened to the public. These successful preservation efforts are the result of close mutual cooperation between the Kobe municipal government and local residents, businesspeople, and architectural historians.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

重要伝統的建造物群保存地区

ラインの館は、北野異人館街地域の歴史とそこにある多くの歴史的建造物の保存活動に関する情報センターとして機能しています。江戸時代（1603～1867）の200年以上にわたり、日本は鎖国政策を維持し、ほとんどの外国との貿易、旅行、接触を禁止していました。この政策は1858年の安政条約の締結により終わり、1868年に神戸は外国貿易に開放された数港の一つとなりました。しかしながら、予定されていた外国人居留地の完成は遅れ、外国人のための洋館（異人館）が市内の周辺地域に多く建設されました。後に北野町山手通り地域が位置することとなった山手地域は、外国人居留地の北に位置する魅力的な田舎の丘陵地で、港と海の景色を望むことができました。1880年代にはユニークな外国人居住区として発展し、20世紀半ばまでに200以上の洋風建築と和風建築を擁するまでに成長しました。

これらの洋館の多くは、第二次世界大戦での被害や戦後の開発、そして老朽化により失われてきましたが、19世紀から20世紀初頭に建てられた建物のうち、30棟以上が現在も残されています。これらのほとんどは、かつて外国領事や貿易会社の役員の住居でした。1979年12月、神戸市は神戸市都市景観条例に基づき、北野町・山本通り地区を重要伝統的建造物群保存地区に指定しました。この条例は、文化的に重要な建物を個々に保存するのではなく、グループとして保存することを目的としています。これには、門や塀などの街並みの要素や、庭園、生け垣、樹木などの環境的特徴も含まれます。

北野町・山本通り重要伝統的建造物群保存地区には、保護指定を受けた34棟の洋風建築と7棟の和風建築が含まれており、保存活動が継続的に行われています。この地区は東西約750メートル、南北約400メートルに及びます。これらの洋風住宅のほとんどは1995年1月の阪神・淡路大震災で深刻な被害を受けましたが、すべてが修復され、再び一般公開されています。

こうした保存活動の成功は、神戸市役所と地元住民、事業者、専門家との緊密な相互協力の結果です。

【タイトル】うろこの家・展望ギャラリーの概要

【想定媒体】Web

できあがった英語解説文

Uroko House and Observation Gallery

Uroko House is one of the best-known *ijinkan* (“foreigner houses”) in Kobe, and has become emblematic of Kobe’s *ijinkan* architecture as a whole. Primarily of two-story wood construction, it features a cylindrical, castle-like three-story tower that has made the house a prominent local landmark. The name of the house derives from the thousands of scalloped slate tiles covering the exterior, which resemble fish scales, or *uroko*. This technique is traditional in parts of Germany but was totally unfamiliar in Japan during the late Meiji era (1868–1912), when the house was built. Due to this distinctive design, it became a nationally designated Tangible Cultural Property in 1998 and was named by Hyogo Prefecture as one of its “100 best modern houses” in 2009. It was lived in until 1968, and in 1977 it became the first *ijinkan* opened to the public. The house now serves as a museum with historical exhibits that change periodically.

The entryway is located at the base of the centrally placed tower. A central hall containing the staircase opens onto a spacious parlor to the left. This room is stylishly appointed with large stained-glass windows flanking a fireplace. Beyond it is the dining room, now furnished with museum-quality antiques that aim to recreate the atmosphere of the original residence. Antique sideboards and glass cabinets display an impressive collection of European ceramics and serviceware. A small watercolor by the early modernist painter Marc Chagall adorns one wall. The ground floor also has utility and reception rooms, as well as a service wing with a kitchen. The second-floor library opens onto the generous sunroom, which has a semicircular sitting nook formed by the tower. The windows have delicate triangular tracery, and they provide excellent views of the city and port of Kobe. There is also a parlor and two bedrooms; the smaller of these has been outfitted with antique sports equipment, as if for a young

man of the early twentieth century. A short interior balcony connects the bedrooms and provides a view all the way to the downstairs entry. An intriguing seventeenth-century suit of Japanese armor is displayed inside a former closet. To the rear of the second story is the servants' room, located above the ground-floor kitchen.

Next door to Uroko House is the three-story Observation Gallery, which opened in 1982. A modern concrete structure, it has a tower and "fish-scale" tiles modeled after those of the house itself. On the second-floor walls are paintings by the nineteenth-century Barbizon school painter Troyon, and others by Matisse, Denis, Utrillo, Dubuffet, and other popular European painters of the early and mid-twentieth century. The other floors are devoted to changing exhibitions by contemporary artists. A wide picture window on the third floor provides the most expansive view of any Kitano *ijinkan*, encompassing Kobe, the port of Osaka, and Awaji Island. Uroko House and the Observation Gallery are operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

うろこの家と展望ギャラリー

うろこの家は、神戸で最もよく知られている異人館（外国人の家）の一つであり、神戸の異人館建築全体を象徴するものとなっています。基本的には2階建ての木造構造ですが、円筒形の城のような3階建ての塔があり、これがこの家を地域の著名なランドマークにしています。家の名前は、外装を覆う何千もの魚の鱗（うろこ）に似た貝殻状のスレート瓦に由来しています。この技法はドイツの一部の地域では伝統的なものですが、明治時代（1868-1912）後期にこの家が建てられた当時の日本では全く馴染みのないものでした。この独特なデザインにより、この家は1998年に国の有形文化財に指定され、2009年には兵庫県の「近代住宅100選」の一つに選ばれました。1968年まで人が住んでおり、1977年に一般公開された最初の異人館となりました。この建物は現在、定期的に内容を入れ替えて歴史的な展示を行う資料館として利用されています。

入り口は中央に配置された塔の基部にあります。階段のある中央ホールから左側に広々とした応接間が開かれています。この部屋には暖炉を挟んで大きなステンドグラスの窓が設えられています。その先には食堂があり、現在は元の邸宅の雰囲気再現することを目指した博物館級の骨董品が置かれています。アンティークのサイドボードやガラスキャビネットには、ヨーロッパの陶磁器や食器の見事なコレクションが展示されています。壁の一つには初期のモダニズム画家マルク・シャガールの小さな水彩画が飾られています。1階にはさらに実用的な部屋や応接室、そしてキッチンのある使用人用の翼部があります。2階の図書室は広々としたサンルームに続いており、そこには塔によって形成された半円形の小さな座り込みスペースがあります。繊細な三角形のトレーサリーが施された窓

からは、神戸市とその港の素晴らしい眺めが望めます。他にも応接室と2つの寝室があります。より小さい方の寝室は、20世紀初頭の若い男性の部屋であるかのように、アンティークのスポーツ用品が設置されています。2つの寝室をつなぐ短い室内バルコニーがあり、そこから1階の玄関まで見渡すことができます。元々クローゼットだった場所には、興味深い17世紀の日本の甲冑が展示されています。2階の後ろ側には、1階のキッチンの上に位置する使用人の部屋があります。

うろこの家の隣には、1982年に開館した3階建ての展望ギャラリーがあります。現代的なコンクリート構造のこのギャラリーは、うろこの家自体をモデルにした塔と魚鱗状のタイルを備えています。2階の壁には、19世紀のバルビゾン派の画家トロワイヨンの絵画や、マティス、ドニ、ユトリロ、デュビュッフェ、その他20世紀前半から中頃の人気ヨーロッパ画家たちの作品が飾られています。他の階は現代アーティストによる企画展示に充てられています。3階の大きな絵窓からは、神戸市のいずれの異人館よりも広大な眺望が得られ、神戸市街、大阪港、淡路島を見渡すことができます。うろこの家と展望ギャラリーは、うろこグループによって運営されています。

【タイトル】 山手八番館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Yamate Hachiban-kan

Yamate Hachiban-kan (“Yamate House No. 8”) is a two-story wooden Western-style house built in the late Meiji era (1868–1912). It is constructed in an unusual Tudor-revival style, with an assertive stone-arch entryway on the ground level and three wide, half-timbered bay windows spanning the facade above. The interior is arranged like a home museum with European, Asian, and African artworks, some of which can be considered rarities. Visitors enter into a central hall with a handsome staircase straight ahead. On one side are rooms devoted to a display of European art, including sculptures by Rodin and Bourdelle, as well as an unusual bronze figure by Renoir. Printed works by Rembrandt, Durer, Hogarth, Alma-Tadema, and other notable artists are also on view. Fine antique tables, chairs, and other furnishings fill the rooms throughout.

A separate small gallery on the ground floor contains a large collection of carved ebony Makonde statues from East Africa, of the type that inspired Picasso and other modern artists in the early twentieth century. On the second floor, the elegant stairway is framed with open arches and columns. Sets of Buddhist sculptures from Gandhara in northern Afghanistan and others from Thailand are featured in second-floor gallery rooms with subdued lighting. A pair of life-size Buddhist Nio guardian statues in lacquered wood completes this part of the collection. A smaller room on this floor contains several types of African carved wood statues. The bay windows at the front of the house provide an excellent view of the city below and the port in the distance. A further attraction of the collection is a pair of “Saturn’s chairs” believed to grant wishes if a woman sits on the right and a man on the left. Yamate Hachiban-kan is operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山手八番館

山手八番館（山手の8番目の家）は、明治時代（1868～1912）後期に建てられた2階建ての洋風木造住宅です。珍しいチューダー様式を模したスタイルで建てられたこの家は、1階に目を引く石造りのアーチ型入口があり、2階の正面には3つの幅広い半木骨構造の出窓が並んでいます。内部はホームミュージアムのように配置されており、ヨーロッパ、アジア、アフリカの美術品が展示されています；その中には貴重品と考えられるものもあります。典型的な中央ホールに入ると、正面に美しい階段があります。片側の部屋はヨーロッパ美術の展示に充てられています。ここにはロダンとブールデルの彫刻、そしてルノワールの珍しい青銅像が置かれています。また、レンブラント、デューラー、ホガース、アルマ・タデマ、その他の著名な芸術家による版画作品も展示されています。美しいアンティークのテーブル、椅子、その他の調度品が館内の部屋のいたるところに置かれています。

1階の別の小さなギャラリーには、20世紀初頭にピカソや他のモダンアーティストにインスピレーションを与えた種類の、東アフリカ産のマコンデ族による大量の彫刻された黒檀の像のコレクションがあります。2階では、優雅な階段が開放的なアーチと柱で縁取られています。北アフガニスタンのガンダーラ地方や、タイからの仏教彫刻のセットが、2階のギャラリールームで薄暗い照明のもと展示されています。このコレクションの極め付けは漆塗りの木製の等身大仁王像一対です。また、この階の小さな部屋には、いくつかの種類のアフリカの木彫り像が収められています。家の正面にある出窓からは、下の街や遠くの港の素晴らしい眺めを楽しむことができます。コレクションのさらなる魅力的な作品は、一対の「サターンの椅子」です；女性なら右側の椅子に、男性なら左側の椅子に座ると願いが叶うとされています。山手八番館は、うろこグループによって運営されています。

034-008

The Kitano Foreigners' Club

北野異人館協議会

【タイトル】 北野外国人倶楽部の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

The Kitano Foreigners' Club

The Kitano Foreigners' Club is a two-story wooden building built in the late Meiji era (1868–1912), now renovated to suggest the atmosphere of a club for foreign residents during that period. The stone lion statue at the entrance led to it being called “Lion House Building No. 3.” The building has a gable roof with decorative half-timbering and exterior walls of dark textured stucco. A gated path leads to a sheltered entryway that opens onto a foyer with a handsome wooden staircase. The foyer leads to a green-walled dining room and red-walled saloon. The focal point of the dining room is its massive dining table, set for eight people. The museum-quality furnishings include a large oak fireplace that dates to the seventeenth century, decorated with carved *fleur-de-lis*, a symbol of the Bourbon dynasty of France. Carved Renaissance-style oak sideboards complete the dining room ensemble. The adjoining library/saloon is outfitted as a photography studio for the use of visitors. Ball gowns and tiaras are available for those who are in the mood to dress up.

On the second floor are a pair of elegantly appointed guest bedrooms and a small music room that holds a variety of historical musical instruments and Renaissance-era musical scores for Gregorian chant. A low-ceilinged servant's room is part of the small service wing. Some remaining details such as exposed wooden framing indicate that this was originally designed in a Japanese style, which was typical of rooms for Japanese servants at the time. It is reached from the second-floor hallway by a short descending flight of stairs. A longer rear service staircase leads to the ground-floor kitchen below. This room is historically recreated to suggest the firewood and charcoal era of the late nineteenth to early twentieth century, with a capacious fireplace, an iron cookstove, antique copper pots and ladles, and other cooking apparatus.

北野外国人倶楽部

北野外国人倶楽部は、明治時代末期に建てられた2階建ての木造建築で、当時の外国人居住者向けクラブの雰囲気を感じられるように改装されています。入口にある石造りのライオン像から、「ライオンハウス3号館」と呼ばれていました。建物は切妻屋根で、装飾的な半木骨構造と暗い色のざらざらした漆喰の外壁が特徴です。門のある小道は、玄関ホールに続く屋根付きの入り口へと向かいます。玄関ホールには美しい木製の階段があります。玄関ホールは緑の壁の食堂と赤い壁のサロンに続いています。食堂の中心となっているのは、8人用にセットされた巨大なダイニングテーブルです。博物館級の調度品には、17世紀にさかのぼるフランスのブルボン王朝の象徴である百合の紋章（フルール・ド・リス）が彫刻された大きなオーク材の暖炉が含まれています。食堂の調度品にはルネサンス様式の彫刻が施されたオーク材のサイドボードが備えられています。隣接する図書室・サロンは、来館者が利用できる写真スタジオとして設えられていて、ドレスアップを楽しみたい方のためにボールガウンやティアラも用意されています。

2階には優雅に設えられた2つのゲストルームと様々な歴史的楽器やグレゴリオ聖歌のためのルネサンス時代の楽譜が展示されている小さな音楽室があります。元々和風だった天井の低い使用人部屋は、小さなサービスウイングの一部です。露出した木組みなどの残された細部から、当時の日本人使用人向けの部屋として一般的だった和風の設計だったことがわかります。この部屋には2階の廊下から短い下り階段を通してアクセスできます。より長い裏側のサービス用階段は、1階のキッチンにつながっています。薪と炭の時代だった当時を再現するため、この部屋には大きな暖炉、鉄製の調理用ストーブ、アンティークの銅製鍋やお玉、その他の調理器具が置かれています。

【タイトル】 坂の上の異人館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Hilltop House

Hilltop House was built in the late Meiji era (1868–1912), though the exact date is unknown. The plan and original design were Western-style, but at one point Chinese features were added; this makes it unique among the *ijinkan* (“foreigner houses”) in Kobe. The front exterior walls are clad in “fish-scale” (*uroko*) style slate tiles similar to those of the nearby Uroko House. The rear walls are of textured plaster, and the windows have elaborate, unusually shaped surrounding frames and white-painted louvered wooden shutters. A simple Chinese-style garden has been built next to the house. Its round “moon gate” is flanked by stone *komainu* guardian-dog statues, believed to guard against negative energy and bring good fortune.

The interior uses fine Chinese antiques to express a luxurious contemporary taste. Stunning Chinese artworks and ceramics dating from the Ming dynasty (1368–1615) to the Qing dynasty (1616–1911) are combined here with traditional Chinese rosewood furniture and contemporary pieces. The dark-gray granite floors lend a coolness and updated traditional Asian sensibility to the interior. On the ground floor, a rosewood and mother-of-pearl salon set is complemented by an ink wash painting by Wang Chengxi, a leading twentieth-century Chinese painter. The nearby dining set and sideboards are of rosewood as well. The stairwell has a delicately etched glass window, and the staircase itself has unusually tall balustrade newel posts. The second floor contains a living room with rosewood antiques and a bedroom that can be reached via an arched doorway; the bed is a traditional Chinese canopied type. A sunroom veranda provides a sense of privacy. Hilltop House is operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

坂の上の異人館

坂の上の異人館は、正確な日付は不明ですが、明治時代（1868～1912）後期に建てられました。設計と元のデザインは洋風でしたが、ある時期中国風の特徴が加えられました；これにより、神戸の異人館（「外国人の家」）の中でユニークな存在となっています。正面の外壁は、近くのうろこの家と同様、うろこ様式のスレート瓦で覆われています。後ろの壁はざらざらした漆喰塗で、窓には精巧で珍しい形の枠が付けられ、白く塗装された木製のルーバー式シャッターが付いています。家の隣には簡素な中国風の庭園が造られています。その円形の「月門」の両側には、邪気を祓い幸運をもたらすとされる石造りの狛犬像が置かれています。

内装は、豪華な現代的な趣味を表現するために上質な中国のアンティークを使用しています。明朝（1368-1615）から清朝（1616-1911）にかけての見事な中国の芸術作品や陶磁器が、伝統的な中国の紫檀家具や現代的な家具と組み合わせられています。濃い灰色の花崗岩の床が、涼しさと更新された伝統的なアジアの感性を内部に与えています。1階には、紫檀と螺鈿のサロンセットと、20世紀の中国を代表する画家、王成喜の水墨画が飾られています。近くのダイニングセットとサイドボードも紫檀製です。階段室には繊細にエッチングされたガラス窓があり、階段には非常に背の高い手すりの支柱がついています。2階には紫檀のアンティーク家具を備えたリビングルームがあり、アーチ型の入口を通して寝室に入るようになっており、寝室のベッドは伝統的な中国の天蓋付きベッドです。日光浴用のベランダはプライバシーを守ってくれます。坂の上の異人館は、うろこグループによって運営されています。

【タイトル】 英国館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

English House

English House was built in 1909 using plans drawn by an unidentified British architect. It has been transformed into an entertaining presentation of a classic British Victorian-era residence with a Sherlock Holmes theme, though the house itself remains very much in its original state. The structure is considered a prime example of the British Colonial style found in numerous variations throughout Asia. A hallmark feature of this style is the veranda; here, the ground-floor veranda is glass-enclosed to make a sunroom, connected to the garden by stone steps. On the second floor the veranda is open, with fluted round columns and a balustrade. The impressive entry porch has four square wooden columns on carved stone bases. The wide double doors of the entry are augmented by a fanlight transom above and flanking sidelight windows.

The exterior walls are of textured plaster, with chocolate-brown wooden trim and louvered wooden window shutters. The interior is light and airy, with high ceilings to help keep the living spaces cool in summer. Four fireplaces with mantelpieces on the ground floor and three on the second floor provided ample warmth during the winter. The ground floor once served as a clinic, and a small medicine window and shelf are still present. The house has been furnished with antiques from the seventeenth through the late nineteenth centuries. Fabric designed by William Morris, English initiator of the late nineteenth-century Arts and Crafts movement, is used for upholstery and curtains throughout the house. The floors are covered with tartan-pattern carpets.

In keeping with the Sherlock Holmes theme, furniture and household items are set throughout the house in arrangements inspired by Sir Arthur Conan Doyle's stories. These include a half-empty wine bottle and glasses, which figure in the short story

“The Adventure of the Abbey Grange,” placed in the ground-floor parlor. The second floor is conceived as a Sherlock Holmes museum, with historical memorabilia and related items on display. It includes a detailed reconstruction of Holmes’s cluttered Baker Street room as depicted in “The Adventure of the Musgrave Ritual.” The second-floor dining room features creatively reinterpreted traditional English table settings, and a small table in the bedroom is set for afternoon tea.

Outside, at the rear of the house, an unusual sloping wooden bridge connects the main house to a Japanese-style outbuilding, and a reconstructed tile-roofed well is visible. An English rose garden with an arched trellis, called the Queen’s Garden, leads to the Proposal Garden and the Alice Garden. A bronze statue of Sherlock Holmes and a tile wall with signage and benches imitating Baker Street Station in London complete the ensemble. Inverness capes and Deerstalker hats are available free of charge for guests to wear during their visit. The house is operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

英国館

英国館は1909年に、名前の分からないイギリスの建築家によって描かれた設計図を使用して建てられた家です。この家は、現在でもほぼ元の状態を保っているものの、シャーロック・ホームズをテーマにしたヴィクトリア朝時代の典型的なイギリスの邸宅を楽しく再現した展示施設として生まれ変わっています。建物は、アジア全域で様々なバリエーションが見られるイギリス植民地様式の代表的な例と考えられています。この様式の特徴的な要素はベランダです；ここから、一階のベランダはガラスで囲まれてサンルームとなっており、石段で庭とつながっています。2階のベランダは開放的で、溝のある丸柱と手すりがあります。見事な入口のポーチには、彫刻された石の台座の上に4本の四角い木製の柱があります。幅広の両開きの入口ドアの上には扇形の採光窓があり、両側には側窓があります。

外壁はざらざらした漆喰塗で、チョコレート色の木製の装飾とルーバー式の木製窓シャッターが付いています。内部は明るく風通しが良く、高い天井は夏の居住空間を涼しく保つのに役立ちます。1階に4つ、2階に3つあるマントルピース付きの暖炉は、冬の間十分な暖かさを提供していました。1階はかつて診療所として使用されていたため、小さな薬用窓と棚がまだ残っています。この家は17世紀から19世紀後期のアンティーク家具で飾られています。19世紀後期のアーツ・アンド・クラフツ運動の先駆者であるイギリスのデザイナー、ウィリアム・モリスのファブリックが、家中の椅子張りやカーテンに使用されています。床はタータンチェック柄のカーペットで覆われています。

シャーロック・ホームズのテーマに合わせて、サー・アーサー・コナン・ドイルの物語にインスピレーションを受けた家具や家庭用品が家中に配置されています。例えば、1階の応接間には「修道院屋敷」に登場する半分空のワインボトルとグラスが置かれています。2階はシャーロック・ホームズ博物館として構想され、歴史的な記念品や関連アイテムが展示されています。「マスグレーブ家の儀式」に描かれているように、ホームズの住むベーカー街のごちゃごちゃした部屋が詳細に再現されています。2階のダイニングルームには、創造的に再解釈された伝統的なイギリスのテーブルセッティングがあり、寝室の小さなテーブルにはアフタヌーンティーのセットが置かれています。

外部では、家の裏側に風変わりな傾斜した木製の橋があって、メインハウスと日本風の離れをつないでおり、また、再建された瓦屋根の井戸が見えます。クイーンズガーデンと呼ばれる格子のアーチのあるイングリッシュローズガーデンは、プロポーザルガーデンとアリスガーデンへと続いています。シャーロック・ホームズの銅像と、ロンドンのベーカー街駅を模した看板とベンチのあるタイル壁が、この一連の展示を完成させています。インバネスケープとディアストーリーカー帽子が、訪問中に無料で着用できるよう用意されています。この家はうろこグループによって運営されています。

034-011

Yokan Nagaya / French House

北野異人館協議会

【タイトル】 洋館長屋の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Yokan Nagaya / French House

The Yokan Nagaya, now also known as “French House,” was built in 1908 as a rental apartment house for foreigners. Seen from the street, it takes the form of a pair of connected two-story wings. These are clad in wooden clapboard siding painted white with dark-green trim. Small windows with louvered shutters help provide privacy on the street side. The foundation and entry stairs are of granite, and the roof is of traditional gray-glazed Japanese tile. The ground floor of the building has been transformed into a suite of late nineteenth-century French-style domestic interiors, with rich lavender- and gold-painted walls. A collection of Art Nouveau and other antique furnishings is displayed in historically appropriate living and dining room arrangements. One highlight is the collection of Art Nouveau glassware, which includes fine pieces by Gallé, Lalique, and the Daum brothers.

The second floor has been artistically transformed with installations that are both lighthearted and memorable. One room is furnished to suggest a bedroom in the Montmartre district of Paris. Another room features a life-sized statue of a portly, balding middle-aged man seated alone at a table set for breakfast, as a flock of painted penguins incongruously flies past the window outside. A room filled with all manner of roses is nearby. Yet another room with white walls and a white floor has been cleverly transformed by painting all of the furnishings and artworks white, but outlining and detailing them in black. Paintings by Picasso, Matisse, Leonardo, and others are amusingly reproduced in this stark color scheme. There is a room devoted to soap, and a stairway landing and staircase is given a surrealist treatment by covering the walls and windows with images and objects derived from artworks by Magritte. The building is now operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

洋館長屋 / フランス館

現在は「フランス館」としても知られる洋館長屋は、1908年に外国人向けの賃貸アパートとして建てられました。通りから見ると、2階建ての2つの翼部が連結した形をしています。外壁は白く塗られた木製の下見板張りで、濃い緑色の装飾が施されています。通り側にはルーバー式シャッター付きの小さな窓があり、プライバシーの確保に役立っています。基礎と入口の階段は花崗岩製で、屋根は伝統的な灰色の釉薬をかけた日本瓦です。建物の1階は19世紀後期のフランス風の家庭内装にしつらえられており、豊かなラベンダー色と金色に塗られた壁が特徴です。アールヌーヴォーやその他のアンティーク家具のコレクションが、歴史的に適切な居間や食堂の配置で展示されています。展示の目玉は、アールヌーヴォーのガラス製品のコレクションです。これには、エミール・ガレ、ルネ・ラリック、ドーム兄弟による優れた作品が含まれています。

2階は遊び心のある印象深い展示によって芸術的に作り変えられています。一室はパリのモンマルトル地区の寝室を思わせる家具で整えられています。別の部屋では、太り気味で頭の薄い中年男性の等身大の像が朝食のテーブルに一人座っており、窓の外では不釣り合いにもペンギンの群れが飛んでいく様子が描かれています。近くにはあらゆる種類のバラで満たされた部屋があります。さらに別の部屋は白い壁と白い床に、すべての家具とアート作品が白く塗られ、黒い輪郭線と細部で巧みに表現されています。ピカソ、マティス、レオナルド、その他の画家たちの絵画が、このはっきりとした白黒の配色で面白く再現されています。石鯨に特化した部屋もあり、また、階段の踊り場と階段は、マグリットの芸術作品にもとづいたイメージやオブジェで壁や窓を覆われ、シュールレアリスム的な装飾が施されています。この建物は現在、うろこグループによって運営されています。

034-012

Ben's House

北野異人館協議会

【タイトル】 ベンの家の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Ben's House

The name of this house derives from a legend that it was once the residence of English aristocrat and adventurer Ben Allison. The two-story wooden structure dates from the late Meiji era (1868–1912). The exterior is almost completely preserved in its original style, with walls of textured plaster and dark brown wooden trim, including a fine dentiled cornice. The windows have strikingly patterned painted shutters and window boxes, with geometrically patterned window panes. The roof is a gray-glazed Japanese type, as was typical at the time, and the entrance portico has a unique pointed roof. The building itself is designated a Cultural Property of Kobe City, as is the street-side boundary wall, which still retains its original red bricks, imported from Germany at the time the house was built.

In 2019, the interior was completely transformed into an idiosyncratic and imaginative natural-history display inspired by Ben Allison's collection, in the manner of a European "cabinet of curiosities." Ben's House is not a conventional museum, but rather an artistic adventure. Original interior details like arched inner doorways and fine paneling were retained, and artful installations of natural specimens of many types were arranged in rooms painted in striking colors. Although the contents of the exhibition are subject to change, the red-walled ground floor currently houses an impressive taxidermy collection, including a polar bear, an American bison, and a snow wolf. A large array of antlered skulls occupies one wall, while wooden shelves lining another wall display dozens of books, specimens, and other curiosities.

A blue-walled butterfly room is the focal point of the second floor. Individually framed butterfly specimens cover the walls, while others are mounted in small glass

cases displayed on built-in shelves. An adjoining gray-walled room features a collection of wall-mounted African masks, as well as dozens of tall glass jars containing an imaginative selection of shells and other natural specimens along with pencils, papers, rulers, silverware, playing cards, and other sundry items. Ben's House is operated by the Uroko Group.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ベンの家

この建物の名前は、かつてイギリスの貴族で冒険家のベン・アリソンが住んでいたという言い伝えに由来しています。この2階建ての木造建築は明治時代末期（1868年-1912年）のものです。

家の外装はほぼ完全に当時のままの状態で保たれており、精巧な歯型装飾のある軒蛇腹も含め、外壁はざらざらした漆喰塗りで、濃い茶色の木製の装飾が施されています。窓には目を引くパターンの塗装されたシャッターと窓台があり、幾何学模様のガラス窓になっています。屋根は当時典型的だった灰色の釉薬をかけた日本瓦で、入口のポーチには、独特の尖った屋根があります。この建物自体が神戸市の文化財に指定されており、通り沿いの境界壁も同様に指定されています；この境界壁には、建設当時にドイツから輸入された当時のままの赤レンガが今も残されています。

2019年、内部はベン・アリソンのコレクションに着想を得た独特で想像力豊かな自然史展示に完全に变身しました；この展示にはヨーロッパの「キャビネット・オブ・キュリオシティーズ（珍品陳列室）」の様式が取り入れられています。ベンの家は従来のような博物館ではなく、芸術的な冒険の場となっています。アーチ型の内部ドアや精巧な壁板張りといった元々の内装の細部は保持されつつ、様々な種類の自然標本の芸術的なインスタレーションが、鮮やかな色で塗られた部屋に配置されました。展示内容は変更される可能性があります。現在、赤い壁の1階にはホッキョクグマ、アメリカバイソン、スノーウルフなどを含む見事な剥製コレクションがあります。一面の壁には角のある頭蓋骨が並べられ、別の壁に沿って設置された木製の棚には、数十冊の本、標本、その他の珍品が陳列されています。

2階の中心となるのは青い壁の蝶の部屋です。個別に額装された蝶の標本が壁を覆い、その他の標本は造り付けの棚に置かれた小さなガラスケースに収められています。隣接する灰色の壁の部屋には、壁に掛けられたアフリカのマスクのコレクションがあります。また、何十もの背の高いガラス瓶には、想像力豊かに選ばれた貝殻やその他の自然標本とともに、鉛筆、紙、定規、銀食器、トランプ、その他様々な品々が入っています。ベンの家は従来のものである博物館ではなく、インスピレーションに富んだ芸術的冒険です。この家はうろこグループによって運営されています。

034-013

The Kobe Mysterious Consulate of Trick Art

北野異人館協議会

【タイトル】 神戸トリックアート不思議な領事館の概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

The Kobe Mysterious Consulate of Trick Art

The Kobe Mysterious Consulate of Trick Art is a fascinating and amusing permanent exhibition space that highlights the art of illusion. The two-story Western-style house it occupies was built in the early twentieth century as the residence of a Mr. Hilton and his family; after World War II, it was used as the Panamanian Consulate. The exterior features white plaster walls with dark-green wooden trim. Large fanlight windows on the ground floor and matching window details above, along with a generous entryway and open porch, lend the house an air of upscale dignity. The house has an attached Japanese-style wing with traditional balconies and windows, and a separate service building.

Inside, the immersive exhibition is spread over both floors and divided into six sequential sections: “Kobe Original Series,” “Adventure World,” “The Illusion World,” “Brain Training,” “Masterpieces,” and “The Maze.” Several large trompe-l’oeil tableaux are designed to be physically entered by visitors, who then appear to be crushed by a giant Kobe steak, riding a surfboard, attacked by a shark, or trapped inside an overturned wine glass by a giant vampire. Each display includes helpful advice for taking humorous trick photos. Visitors are also invited to interact with room-sized optical illusions that play with one’s sense of scale, perspective, reflection, or gravity. A number of intriguing optical puzzles provide additional challenges. The Mysterious Consulate of Trick Art is superbly designed and curated by creators with a whimsical sense of humor. It is an entertaining experience for people of all ages, including families with children, couples, or groups of friends. The exhibition space is operated by the Uroko Group.

神戸トリックアート不思議な領事館

神戸トリックアート不思議な領事館は、錯覚の芸術をテーマにした魅力的で面白い常設展示スペースです。この2階建ての洋風住宅は20世紀初頭にヒルトン氏とその家族の邸宅として建てられ、第二次世界大戦後はパナマ領事館として使用されました。外観は白い漆喰の壁に濃い緑色の木製の装飾が特徴です。1階の大きな扇形の窓とそれにマッチした窓の上の細部、さらに広々とした玄関口と開放的なポーチが、この家に高級感のある品格を与えています。この家には伝統的な縁側と窓を持つ和風の翼部が付属しており、別棟の使用人用の建物もあります。

内部では、没入型の展示が両階にわたって広がっており、「神戸オリジナルシリーズ」、「アドベンチャーワールド」、「錯覚の世界」、「脳トレーニング」、「傑作」、「迷路」の6つの連続するセクションに分かれています。いくつかの大きなトロンプ・ルイユ（だまし絵）の情景は、訪問者が実際に中に入れるようにデザインされており、中に入ると巨大な神戸牛に押しつぶされたり、サーフボードに乗ったり、サメに襲われたり、巨大な吸血鬼によってひっくり返されたワイングラスの中に閉じ込められたりしているように見えます。各展示には、面白いトリック写真を撮影するためのアドバイスが添えられています。また、スケールや遠近法、反射、重力などを駆使した部屋サイズの錯視を体験することもできます。さらに、いくつかの興味深い錯視パズルにもチャレンジできます。神戸トリックアート不思議な領事館は、ユーモアのセンスを持ったクリエイターによって見事にデザインされ、キュレーションされており、子ども連れの家族、カップル、友人グループなど、あらゆる年齢の訪問者にとって楽しい体験を提供しています。この施設はうろこグループによって運営されています。

地域番号	035	協議会名	有田川町	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
035-001	あらぎ島/あらぎ島		250～500	アプリ
035-002	しみず温泉/しみず温泉		1～250	WEB
035-003	体験交流工房わらし 紀州手漉き和紙 保田紙/体験交流工房わらし 紀州手漉き和紙 保田紙		250～500	WEB
035-004	赤玉/わさびずし		1～250	WEB
035-005	笠松左太夫頌徳碑/笠松左太夫頌徳碑		1～250	アプリ
035-006	上湯用水路/上湯用水路		1～250	アプリ
035-007	蔵王権現社/蔵王権現社		1～250	アプリ
035-008	金毘羅権現社/金毘羅権現社		1～250	アプリ
035-009	西原観音堂/西原観音堂		1～250	アプリ
035-010	松葉観音堂/松葉観音堂		1～250	アプリ
035-011	笠松家住宅/笠松家住宅		1～250	アプリ
035-012	地域社会における神社・仏寺 /蔵王権現社 金毘羅権現社 西原観音堂 松葉観音堂		1～250	WEB

035-001

Aragijima Rice Terraces

有田川町

【タイトル】 あらぎ島/あらぎ島

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Aragijima Rice Terraces

At a tight bend in the Arida River, fifty-odd rice paddies have been cut into the hillside. These are the Aragijima Rice Terraces, which provide precious arable land amid the mountainous terrain of central Wakayama Prefecture. In recognition of the site's cultural significance and natural beauty, the government designated the Aragijima Rice Terraces and surrounding districts an Important Cultural Landscape in 2013.

Cultural Landscapes are invaluable examples of how the environment of a particular region shapes the livelihoods, history, and culture of its residents, who in turn shape the region's topography. The designation provides the area with financial support for preservation, research, and education under the Law for the Protection of Cultural Properties.

Life-Giving Water Source

The terraces date from 1655, when rice was not only a food staple but also a form of currency for paying taxes. A forward-thinking village headman named Kasamatsu Satayū (1598–1673) saw the connection between rice production and prosperity, and he developed more rice paddies to enrich his community.

As part of his efforts, Satayū personally funded the construction of the 3.2-kilometer-long Uwayu Irrigation Canal. Building the canal took both technical knowledge and extensive labor, but it provided a source of fresh water for rice cultivation in Aragijima and other low-lying areas. The original, clay-lined canal required frequent monitoring and maintenance. It was reinforced with concrete following a flood in 1953, and it is

still in use today.

Fresh water from the canal also supported the development of the handmade paper (*washi*) industry, which brought more wealth to the area. The region's thick, durable paper, known as "Yasudagami," is made from the fibers of *kōzo* mulberry trees. At Aragijima, farmers began to grow *kōzo* on the embankments between rice paddies. Yasudagami was once made mainly into umbrellas and fans, but it is now also used to make cards, envelopes, and various other products.

In Harmony with Nature

The Aragijima Rice Terraces are an important habitat for water-loving plants and animals that were once common in mountain villages, such as the Japanese fire-bellied newt, a near-threatened species in Wakayama Prefecture. From simple waterweeds to birds of prey, Aridagawa's rice paddies teem with life. This is becoming increasingly important as more terraced rice fields are abandoned due to depopulation and rural restructuring.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

あらぎ島

有田川が大きくカーブしたところに、50枚あまりの田んぼが切り立った土手にある。これが、和歌山県中部の山間地で農民たちに貴重な耕地を提供しているあらぎ島の棚田だ。その文化的意義と自然の美しさが認められ、政府は2013年、あらぎ島の棚田とその周辺地域を重要文化的景観に指定した。

文化的景観とは、人と自然が協力して発展してきた地域のことで、特定の環境の中で人々の生活や生業がどのように発展してきたかを示す貴重な例である。指定されると文化財保護法に基づく保護と、保存、研究、教育のための財政的支援を受けられる。

生命の水を育む源

この地は、米が主食であっただけでなく、税金を納めるための通貨でもあった1655年に作られた。笠松佐太夫（1598-1673）という先見の明のある庄屋が、米の生産が村の繁栄につながると考え、地域を豊かにするために水田を開発した。

開発努力のひとつとして、佐太夫は私財を投じて、全長3.2キロの用水路を建設した。この用水路の建設は技術的に難しく、労力もかかったが、あらぎ島やその他の低地での米作のための新鮮な水が得られるようになった。当初の用水路は粘土で作られていたため、頻繁に管理と補強が必要だった。1953年の大洪水の後にコンクリートで補強され、用水路は現在も使用されている。

運河から供給される新鮮な水のおかげで、手漉き和紙産業も発展し、この地域はさらに豊かになった。保田紙として知られる、厚くて丈夫な紙は、楮（こうぞ）の繊維から作られる。あらぎ島では、農家が田んぼと田んぼの間の土手で楮を栽培するようになった。保田紙は主に傘や扇子の材料として使われていたが、現在ではカードや封筒などさまざまな製品にも使われている。

自然との調和

あらぎ島の棚田は、かつて山村では一般的だった水辺の植物や動物にとって重要な生息地となっている。和歌山では絶滅危惧種に指定されているアカハライモリなどである。単なる水草から、食物連鎖を通じて猛禽類に至るまで、有田川町の田んぼは生命に満ち溢れ、地域の人口をはるかに上回る生命を維持している。過疎化や農村再編により山間部の水田が減少する中、その重要性はますます高まっている。

035-002

Shimizu Onsen

有田川町

【タイトル】 しみず温泉/しみず温泉

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Shimizu Onsen

Shimizu Onsen is a sodium hydrogen carbonate spring with alkaline waters that are believed to lift away dead, dry skin cells and cleanse the pores, promoting smooth skin. Its history is closely tied to the development of the surrounding community.

Although Shimizu's residents had known of the spring's existence for many decades, a bathing facility was not built to enjoy it until the 1980s. At the time, Shimizu's population had shrunk to just a few thousand from a peak of 11,377 in 1960. In order to create jobs and attract visitors to the area, a public foundation was established to build bathing and lodging facilities at Shimizu Onsen.

In 2024, a brand-new bathing facility opened next door to the original Shimizu Onsen. It has modern amenities, such as a mist sauna and cypress wood relaxation lounge. In keeping with the hot spring's original purpose of supporting the community, the current facility was largely designed and built by local experts, and high-quality lumber from Aridagawa was used throughout the building.

Another new feature of Shimizu Onsen is a cold water bath (*mizuburo*) that uses pure spring water. Most hot springs are 25 degrees Celsius or hotter at the source and require the addition of cold water to be used as a *mizuburo*. This has the downside of diluting the beneficial mineral content. Since Shimizu's waters naturally range from 17 to 23 degrees, the *mizuburo* is instead filled with undiluted, mineral-rich water.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

しみず温泉

しみず温泉は炭酸水素ナトリウム泉で、アルカリ性の泉質は古くなった角質を取り除き、毛穴をきれいにして肌をなめらかにするとされている。その歴史は、周辺地域の発展と密接に結びついている。

清水の住民は何十年も前からこの泉質の存在を知っていたが、入浴施設が作られたのは1980年代になってからである。当時、清水の人口は1960年の11,377人をピークに数千人にまで減少していた。雇用を創出し、観光客を呼び込むために、しみず温泉に公的財団が設立され、入浴施設と宿泊施設が建設された。

2024年には、元のしみず温泉に隣接して新しい入浴施設がオープンした。ミストサウナや檜の休憩室など、近代的な設備が整っている。地域を支えるという温泉の本来の目的に沿って、新施設の設計・施工の大部分は地元の専門家によって行われ、館内には有田川産の良質な木材が建物全体に使用されている。

しみず温泉のもうひとつの目新しい特徴は、純粋な源泉を使った水風呂だ。ほとんどの温泉は源泉の温度が25度以上あり、水風呂として使うには冷水を加える必要がある。そのため、せっかくのミネラル成分が薄まってしまうという欠点がある。清水の泉温は17度から23度であるため、水風呂にはミネラルを豊富に含んだ原水が満たされている。

035-003

Yasudagami Paper

有田川町

【タイトル】体験交流工房わらし 紀州手漉き和紙 保田紙
/体験交流工房わらし 紀州手漉き和紙 保田紙

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Yasudagami Paper

Yasudagami is a variety of handmade Japanese paper (*washi*) characterized by its durability and its pure white color. It has been produced in Aridagawa's historic Shimizu district for around 360 years. Yasudagami is sometimes referred to as “Kishū handmade paper” after the former Kishū domain (now Wakayama Prefecture).

History of Yasudagami

Three of the most valuable commodities in early modern Japan were rice, salt, and paper. When Tokugawa Yorinobu (1602–1671) became daimyo of Kishū in 1619, he learned that the domain produced rice and salt but not paper. To remedy this, Yorinobu ordered the village headman Kasamatsu Satayū (1598–1673) to establish papermaking workshops in Aridagawa. Satayū attempted to learn the craft by traveling to other domains, but he was turned away by artisans who wanted to protect their trade secrets. Satayū then conceived a clever plan: he sent three handsome young men to settle in the papermaking district of Yoshino, in present-day Nara Prefecture. The men were gradually accepted into the community and eventually married local women, all of whom were paper artisans. The men then returned to Aridagawa with their brides, whose knowledge helped Aridagawa establish its own paper industry. At its peak, there were as many as 400 households producing paper for umbrellas, fans, documents, and other common items.

Making Yasudagami

The making of Yasudagami is a long and difficult process that requires refined skill and experience. Even today, most of the work is done by hand. The paper's primary

ingredient is the bark of the *kōzo* mulberry varietal, which is harvested in January. The bark is stripped, washed, and left to cure in the winter wind, after which it is boiled, picked clean, and then submerged in water and beaten to soften and separate the fibers. The fibers are then soaked together with *neri*, a viscous substance extracted from the roots of the sunset hibiscus, which acts as a binder. Different amounts of binder are used to match the humidity and temperature; the ratio is determined wholly through experience and intuition. A wooden frame with a screen is dipped into the slurry and shaken until an even layer of pulp forms. The resulting sheets are then pressed to remove excess water and painstakingly brushed onto wooden drying boards. If brushed too firmly, the sheets will tear; if not brushed firmly enough, the sheets will fail to adhere to the boards and shrink when they are dried in the sun.

Yasudagami Today

In the 1900s, competition from mass-produced paper and Western-style canvas umbrellas dramatically reduced the market for Japanese paper, and production of Yasudagami nearly died out. A devastating 1953 flood destroyed many of the remaining paper workshops. In 1979, the surviving papermakers banded together to create an organization to pass on their skills and generate interest in the craft. Their vision led to the Warashi Hands-On Activity Center, a fully operational paper workshop where visitors can try making *washi* themselves.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

保田紙

保田紙は、白くて破れにくいのが特徴の手漉き和紙の一種である。約360年前から歴史ある有田川の清水地区で生産されてきた。旧紀州藩（現在の和歌山県）にちなんで紀州手漉き和紙と呼ばれることもある。

保田紙の歴史

近世の日本では、米、塩、紙の3つが最も重宝されていた。1619年に徳川頼宣（1602-1671）が紀州藩主になったとき、彼の領地には米と塩はあったが、紙が生産されていないことを知った。これを改善するため、頼宣は庄屋であった笠松佐太夫（1598-1673）に命じて有田川に紙漉き場を作らせた。佐太夫は他藩の紙漉き場を訪ねて技術を学ぼうとしたが、職人たちが自らの企業秘密を守ろうとしたため、門前払いを食らった。そこで佐太夫は一計を案じ、3人の美男子を現在の奈良にある吉野の紙漉き地区に移住させた。彼らは徐々に地域に受け入れられ、やがて地元の紙

漉き職人の女性と結婚した。そして男たちは、自分たちの製紙業を確立するための知識を携えて、花嫁とともに有田川町に戻った。最盛期には、傘や扇子、書類などの紙を作る家が400軒もあったという。

保田紙の製法

保田紙の製造は、熟練した技術と経験を必要とする、時間と手間のかかる工程である。現在でも、ほとんどの作業は手作業で行われている。主な原料は、1月に収穫される楮（こうぞ）の樹皮である。樹皮は剥ぎ取られ、洗浄され、冬の風にさらされ、煮沸され、きれいに取り除かれた後、水で叩かれて柔らかくなり、繊維が分離される。その後、繊維をネリ（トロロアオイの根から抽出した粘性のある物質）と一緒に水に入れられる。湿度や気温に合わせて異なる量の糊が使用されるが、その比率は完全に経験と感覚によって決定される。木枠に張った和紙をスラリーの中にくぐらせ、パルプが均一に広がるまで揺する。その後、余分な水分を除去するためにプレスし、丹念に木製の乾燥板にブラシで刷り込む。ブラッシングが強すぎると紙が破れてしまい、ブラシが不十分だと紙が板にしっかりと接着せず、天日干ししたときに縮んでしまう。

保田紙の現在

保田紙は、大量生産紙との競争、洋傘の流行の普及により、和紙の市場は激減し、保田紙の生産はほぼ消滅した。1953年の大洪水により、残っていた紙漉き場の多くが壊滅的な被害を受けた。1979年、残された紙漉き職人たちは、その技術を伝承し、和紙工芸への関心を促進するための機関を設立した。その構想は、「体験交流工房わらし」の運営に繋がり、現在では、一般客が和紙漉きを体験できる本格的な紙工房となっている。

035-004

Wasabizushi

有田川町

【タイトル】赤玉/わさびずし

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Wasabizushi

Many people are familiar with wasabi as a small mound of green paste served together with sushi. In *wasabizushi*, a style of sushi unique to Aridagawa, wasabi is the star ingredient. Portions of vinegared rice are topped with fish or vegetables and wrapped in salt-pickled wasabi leaves that give each bite of sushi a mild spiciness. Alternatively, the sushi is topped only with a mix of grated wasabi root and flowers for a more intense flavor.

Wasabizushi is a form of the “quick sushi” (*hayazushi*) traditionally made in the Shimizu district of Aridagawa. *Hayazushi* is prepared by adding fish to vinegared rice and wrapping it in thick leaves, such as Japanese banana or the bamboo-like *ase*. The wrapping makes the sushi portable, and the leaves’ natural antibacterial properties keep the fish from spoiling. As a result, *hayazushi* became a popular item to bring on rice-planting workdays and to festivals and other social gatherings.

Wasabizushi was developed by a local chef who sought to create a specialty dish to represent Aridagawa’s agriculture. Inspired by the wasabi that grows wild in Aridagawa, he topped vinegared rice with a variety of produce from Wakayama Prefecture—such as Mazuma wasabi, sweetfish, stewed mountain vegetables, and *sanshō* pepper—and wrapped it in edible wasabi leaves. Many restaurants now offer this modern version, which has become a culinary symbol of Aridagawa.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

わさびずし

わさびは、寿司と一緒に供される少量の緑色のペーストとして、多くの人に馴染みがある。有田川独自の寿司スタイルである「わさび寿司」では、わさびが主役だ。酢飯の上に魚や野菜をのせ、塩漬けたわさびの葉で包むことで、一口ごとにまろやかな辛みを感じることができる。わさびの根と花を混ぜただけのものをトッピングすることもあり、より風味が強くなる。

わさび寿司は、清水地域で伝統的に作られてきた「はやずし」がもとになっている。酢飯の上に魚をのせ、丈夫な葉（例えば、芭蕉の葉や、竹のようなアセの葉）で包む。包むことで持ち運びが容易になり、葉の天然の抗菌作用で魚の腐敗を防ぐことができる。その結果、田植えや祭り、その他の社交の場に持っていく人気商品となった。

わさびずしは、有田川町の農業を代表する名物料理を作ろうと、地元の料理人が考案した。有田川町に自生する山葵にインスピレーションを得て、酢飯に、真妻わさび、鮎、山菜煮、山椒など和歌山の食材を寿司ネタとして使い、わさびの葉で包んだ。今では多くのレストラン、現代風にアレンジされたこの料理が提供され、有田川町の食のシンボルとなっている。

035-005

Kasamatsu Satayū Memorial

有田川町

【タイトル】 笠松左太夫頌徳碑/笠松左太夫頌徳碑

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Kasamatsu Satayū Memorial

This monument honors Kasamatsu Satayū (1598–1673), a forward-thinking village headman who contributed to rice cultivation and papermaking in Aridagawa.

In 1619, shogun Tokugawa Ieyasu's son Yorinobu (1602–1671) was appointed to govern the Kishū domain (now Wakayama Prefecture). Under Yorinobu, Satayū became the first headman of what is now Aridagawa's historic Shimizu district. Rice was an important staple crop for the region, but the district's mountainous terrain limited where it could be grown. With his own funds, Satayū planned and built the roughly 3-kilometer-long Uwayu Irrigation Canal. This facilitated the development of many new rice paddies, including the Aragijima Rice Terraces.

Yorinobu ordered Satayū to establish *washi* (handmade Japanese paper) workshops in Kishū domain, but Satayū had no knowledge of the craft. He traveled to Yoshino, a famous papermaking district in what is now Nara Prefecture, to learn the trade, but the artisans there refused to share their methods with him. Satayū arrived at a clever solution: he sent three handsome young men to Yoshino, where they eventually married local papermakers. The men returned to Shimizu (known then as Yamayasuda) with their brides, whose papermaking skills were adapted to regional conditions. Local papermakers then created a new variety of *washi* referred to as Yasudagami. The craft is still practiced today.

Satayū's contributions continue to benefit Shimizu and its surrounding communities. In 1927, the residents of Aridagawa chose to honor their local hero with this

monument, funding its construction and painstakingly transporting the 1-metric ton stone from a nearby valley.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

笠松左太夫頌徳碑

この碑は、有田川町の米作りや紙漉きの発展に貢献した先駆者である庄屋、笠松佐太夫（1598-1673）を顕彰するものである。

1619年、将軍・徳川家康は紀州藩（現在の和歌山県）の藩主に息子の頼宣を任命した。頼宣のもとで、佐太夫は現在の有田川町にある歴史的な清水地域の初代庄屋となった。この地域の山間部では、重要な主食である米を栽培できる平地が限られていた。佐太夫は私財を投じて全長約3キロの上湯用水路を計画・建設した。これによりあらぎ島の棚田など多くの新田を開発した。

佐太夫は、頼宣から紀州藩に和紙工房を設けるようも命じられたが、和紙作りの知識を持っていなかった。佐太夫は、技術を習得するために吉野（現在の奈良県）に赴いたが、自分たちの貴重な技術を守ろうとする職人たちに追い返された。佐太夫は巧妙な解決策を考えた。3人の美男子を吉野に送り、地元の紙漉き職人と結婚させたのだ。3人の青年たちは花嫁を連れて清水（当時は山保田と呼ばれていた）に戻り、そこで技術を地域の環境に適応させ、保田紙と呼ばれる新しい種類の和紙を作り始めた。この技は今日でも行われている。

佐太夫の貢献は、清水とその周辺地域に今もなお恩恵を与え続けている。1927年、有田川町民はこの記念碑をもって英雄の栄誉を称えることを決め、建設資金を調達し、近くの谷から1トンの石を苦労して運んだのである。

035-006

Uwayu Irrigation Canal

有田川町

【タイトル】 上湯用水路/上湯用水路

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Uwayu Irrigation Canal

The Uwayu Irrigation Canal was built in the mid-1600s to supply water to what is now the town of Aridagawa. The 3.2-kilometer-long canal enabled the development of new rice paddies, such as the Aragijima Rice Terraces, as well as the region's paper industry.

The project was funded by the village headman Kasamatsu Satayū (1598–1673), who sought to alleviate poverty by increasing local rice yields. Cutting through the mountainous terrain was a considerable undertaking at a time before modern surveying tools and excavation machinery. Surviving records show that the canal was completed in 1655.

The canal was originally an earthwork channel with clay walls that had to be frequently monitored for weak spots and reinforced each spring. Local residents collectively managed this key infrastructure for about 300 years. The clay was replaced with more durable concrete following a devastating flood in 1953.

The Uwayu Irrigation Canal is still in use today and runs along its original course, providing irrigation water for roughly 13.5 hectares of farmland. In recognition of its significant place in Aridagawa's history and culture, the canal was included as part of the Important Cultural Landscape Aragijima Rice Terraces and Rural Mountain Village Landscape of Mita/Shimizu designation in 2013.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

上湯用水路

上湯用水路は、現在の有田川町に水を供給するために1600年半ばに建設された。全長3.2キロの用水路は、風光明媚なあらぎ島の棚田のような新しい水田や製紙業が発展を可能にした。

この事業は、笠松佐太夫（1598-1673）という先見の明のある庄屋資金提供したもので、彼は地元の米の収穫量を増やすことで貧困を緩和しようとした。近代的な測量器具も掘削機械もない山間部を切り開かなければならなかったため、労力は相当なものだった。現存する記録によると、水路は1655年に完成した。

元々、この水路は土で作られたもので毎年春になると、頻繁に弱い部分がないかを点検し、補強しなければならなかった。地元住民は約300年間、この重要なインフラを集団で管理した。1953年の壊滅的な洪水の後、土はより弾力性のあるコンクリートに取り替えられた。

上湯用水路は現在も使用されており、元のコースに沿って約13.5ヘクタールの農地に灌漑用水を供給している。この用水路は、有田川町の歴史と文化の中で重要な役割を果たしていることが評価され、2013年に選定された重要文化的景観「蘭島及び三田・清水の農山村景観」に含まれている。

035-007

Zaō Gongensha Shrine

有田川町

【タイトル】 蔵王権現社/蔵王権現社

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Zaō Gongensha Shrine

Zaō Gongensha Shrine is one of the oldest shrines in the Aridagawa region. It enshrines Zaō Gongen, the deity for which the shrine is named.

Zaō Gongen is the principal deity of Shugendō, a blend of Buddhism and mountain worship that spread throughout Japan during the Heian period (794–1185). The deity is said to have appeared before the founder of Shugendō, En no Gyōja (634–701), while he was training on Mt. Yoshino. Zaō Gongen is a rare example of a deity in the Buddhist pantheon with uniquely Japanese origins. In Aridagawa, the deity is affectionately called “Zō-san.”

Although the earliest records for Aridagawa’s Zaō Gongensha date back to the late 1700s, it is believed to be even older. The current structure dates from 1826, but the copper roofing is more recent. Despite long exposure to the elements at the top of the mountain, some of the original paint remains on the reliefs carved into the shrine’s woodwork.

Many people visit Zaō Gongensha to pray for the return of lost items. Local residents warn that if an item is subsequently found, visitors will have bad luck unless they return to the shrine and offer thanks.

The shrine’s main festival is held in early April. Worshippers climb the mountain on foot, bringing with them a large, two-tiered *kagami mochi* (“mirror mochi”) rice cake

to offer to the shrine. Afterward, smaller rice cakes are tossed from a platform to an eager crowd for good luck.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蔵王権現社

蔵王権現社はこの有田川の地域で最も古い神社のひとつである。その名の由来とされる蔵王権現を祀っている。

蔵王権現は、平安時代（794-1185）に日本中に広まった仏教と山岳信仰の融合である修験道の本尊である。修験道の開祖である役行者（えんのぎょうじゃ）が吉野山で修行中に感得したと伝えられている。このように、蔵王権現は仏教の神としては珍しく、日本独自の起源を持つ神である。有田川町では親しみを込めて「ぞうさん」と呼ばれている。

有田川町の蔵王権現社に関する最古の記録は1700年後半だが、もっと古いと考えられている。現在の建物は1826年に建てられたものだが、銅屋根に葺き替えられたのはもっと最近のことだ。山の頂上で長い間風雨にさらされてきたにもかかわらず、神社の木工細工の装飾はまだオリジナルの塗装を残している。

蔵王権現社には、失せ物の返還を祈願するために多くの人々が訪れる。地元の人々は、落とし物が見つかった場合、神社に戻ってお礼を言わないと縁起が悪いと忠告している。

主な祭りは4月初旬に行われる。参拝者は神社に奉納する大きな鏡餅を持って徒歩で山を登る。その後、縁起物として多くの参拝者に壇上から餅が投げられる。

035-008

Konpira Gongensha Shrine

有田川町

【タイトル】金毘羅権現社/金毘羅権現社

【想定媒体】アプリ

できあがった英語解説文

Konpira Gongensha Shrine

Konpira Gongensha Shrine is a historic shrine with connections to Aridagawa's lumber industry and local residents who served in the Japanese navy. The shrine was first established at this site in 1823. It enshrines Konpira Gongen, the deity for which the shrine is named.

Konpira Gongen is revered in both Buddhism and Shugendō, a blend of Buddhism and mountain worship that spread throughout Japan during the Heian period (794–1185). As a god of water and seafaring, Konpira Gongen is the divine protector of Mt. Zōzu, a key landmark for ships navigating the Seto Inland Sea.

Konpira Gongen has also been venerated by loggers in Aridagawa's lumber industry. Prior to the 1940s, log drives were the standard way to transport timber downstream. Each log drive was a dangerous undertaking in which loggers could drown or be crushed to death in a log jam. Loggers used to visit Konpira Gongensha before a log drive to pray for safety.

Enlisted sailors from Aridagawa would also pray at the shrine before their deployment. On the eve of a sailor's departure, it was customary for their loved ones to walk up and down the approach to the shrine 100 times, offering 100 prayers to Konpira Gongen for the sailor's safe return.

The main festival day at Konpira Gongensha is the tenth day of the tenth month on the

traditional lunisolar calendar, which now generally falls in November. On the weekend closest to that date, a mochi-throwing event is held in which small rice cakes are tossed to a jostling crowd for good luck.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

金毘羅権現社

金毘羅権現は、有田川町の木材産業と地元住民の日本海軍への奉仕とゆかりの深い由緒ある神社である。1823年にこの地に創建された。金刀比羅権現を祀っている。

金毘羅権現は、仏教と修験道（平安時代（794～1185年）に日本各地に広まった仏教と山岳信仰の融合）の両方から崇敬されている神である。水と航海の神である金毘羅権現は、瀬戸内海を航行する船乗りにとって重要なランドマークである象頭山の守護神である。

金刀比羅宮は、有田川の林業で働く人々からも崇敬を集めてきた。1940年代以前は、木材流送が一般的だった。危険を伴う作業で、作業員は溺れたり、木材が詰まって押しつぶされて命を落としたりすることもあった。樵（きこり）たちは、丸太運びの前にこの神社で安全を祈願していた。

有田川の船員たちも出征前にこの神社で祈りを捧げた。出征の前夜には、彼らの親族や恋人が神社の参道を100回歩き、金毘羅権現に100回祈りを捧げ、彼らの無事を祈る習慣があった。

金毘羅権現社での主な祭礼日は、旧暦の10月10日で、現在は一般的に11月にあたる。その日に近い週末には縁起物の餅まきが行われ、餅を投げ合って賑わう。

035-009

Nishihara Kannondō Hall Temple

有田川町

【タイトル】 西原観音堂/西原観音堂

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Nishihara Kannondō Hall Temple

Nishihara Kannondō Hall is a Buddhist temple with a long history in Aridagawa.

The temple honors Kannon, the bodhisattva of compassion. Its principal image is a statue of the Thousand-Armed Kannon, a manifestation of the deity who reaches out to all in need. The statue is displayed only on festival days. One of the support beams inside the structure is decorated with a carving of Kannon traveling in a boat, a particularly rare depiction of the deity.

According to local legend, the Kannon statue has a miraculous origin. There was once a very large cedar tree in the Nishihara district of Aridagawa. One day, locals noticed a bright light shining at the top of the tree. Upon further investigation, they discovered it to be a statue of Kannon. They brought the statue down and enshrined it at Nishihara Gokurakuji Temple, where it remained until the temple's main hall burned down. The statue survived the flames; the present Nishihara Kannondō was built in 1723 to enshrine it.

Behind the temple is a collection of religious stonework, including Buddhist images and five-tiered *gorintō* memorials. These artifacts were moved here from other temples when their original sites were marked for modern development. The oldest monument has an inscription from 1432.

The main festival at Nishihara Kannondō is the third day of the third month on the traditional lunisolar calendar, which now generally falls in April. A mochi-throwing event is held, with a crowd of people competing to catch small rice cakes thrown from

a platform for good luck.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西原観音堂

西原観音堂は、有田川町にある長い歴史を持つ仏教寺院である。

慈悲の観音菩薩を本尊としている。本尊は千手観音像で、困っているすべての人に手を差し伸べるという観音様の意思を表している。千手観音像は、祭礼の日に公開される。内部には、支柱の梁の一本に舟に乗った観音様の彫刻が施されており、これは観音様としては特に珍しい描写である。

地元の伝説によると、この観音像には奇跡的な由来があるという。かつて有田川町の西原地区にとっても大きな杉の木があった。ある日、地元の人たちがその杉の木のてっぺんに明るい光が差し込んでいるのに気づいた。調べてみると、それは観音像であることがわかり、西原極楽寺に安置された。観音像は本堂が焼失するまでそこに安置された。観音像は炎を免れ、1723年に現在の西原観音堂が建てられ、その像が安置された。

寺の裏手には、仏像や五輪塔を含む宗教的な石造物のコレクションがある。これらの遺物は、元々あった場所が開発されることになり、他の寺院からここに移された。最も古いものには1432年の銘がある。

西原観音堂の主な祭りは、旧暦の3月3日で、現在は一般的に4月にあたる。餅まきが行われ、大勢の人々が台から投げられた餅を縁起物として取り合う。

035-010

Matsuba Kannondō Hall Temple

有田川町

【タイトル】 松葉観音堂/松葉観音堂

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Matsuba Kannondō Hall Temple

Matsuba Kannondō Hall is a Buddhist temple founded by the descendants of Kasamatsu Satayū (1598–1673), the village headman who built the Aragijima Rice Terraces and founded Aridagawa’s papermaking industry.

Satayū wanted to build a temple dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion, in the Kotoge district of Aridagawa to replace a religious site that had been destroyed years before. However, because he had used all his personal wealth in development projects to enrich the community, he was not able to accomplish the goal in his lifetime. In 1777, Satayū’s great-great-grandson fulfilled his wish, building Matsuba Kannondō to enshrine a statue of Kannon.

In early spring, the temple hosts the Hatsuuma Eshiki Festival. Hatsuuma takes place on the first day of the horse in the second month of the lunisolar calendar, which now generally falls in March. It is traditionally a day to pray to the Shinto deity Inari for a bountiful harvest. Locally, it is also considered an auspicious day to pray to Kannon for protection against misfortune. Hatsuuma Eshiki festivities have been held at Matsuba Kannondō since 1778.

Preparations for the festival begin three days before, with the making of large, two-tiered rice cake called *kagami mochi* (“mirror mochi”). On the festival day, a procession slowly marches up the temple’s hilly approach from Kotoge, carrying the *kagami mochi* as well as a decorated pole and temple banner. After the mochi is offered to Kannon, participants jostle to catch smaller rice cakes for good luck in the

region's largest mochi-throwing event.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松葉観音堂

松葉観音堂は、あらぎ島の棚田を築き、有田川町の製紙業を興した、庄屋、笠松佐太夫（1598-1673）の子孫によって創建された仏教寺院である。

佐太夫は、有田川町の小峠地区に、数年前に破壊された観音堂の代わりに観音菩薩を祀る寺を建てようとした。しかし、佐太夫は地域を豊かにするための開発事業に私財のすべてを投じていたため、存命中にその夢を実現することはできなかった。1777年、佐太夫の曾孫がその願いを叶え、観音像を安置する松葉観音堂を建立した。

初春には「初午会式」が行われる。初午は、旧暦の2月1日の午の日に行われる行事で、現在は3月に行われることが多い。この日は、豊作祈願をするために、稻荷神に祈りを捧げる伝統的な日である。地元では、観音様に災難除けを祈る吉日ともされている。松葉観音堂では1778年から初午会式が行われている。

祭りの3日前から準備を始め、鏡餅と呼ばれる大きな円形の餅を作る。祭り当日は、小峠から鏡餅と餅花竿、幟を持った行列がゆっくりと寺まで練り歩く。鏡餅を観音様にお供えした後、地域最大の餅まきが行われ、縁起ものの小さい餅を取ろうと参加者が賑わう。

035-011

Former Kasamatsu Residence

有田川町

【タイトル】 笠松家住宅/笠松家住宅

【想定媒体】 アプリ

できあがった英語解説文

Former Kasamatsu Residence

This late nineteenth-century *kominka* (traditional country residence) belonged to relatives of the village headman Kasamatsu Satayū (1598–1673), whose development projects continue to underpin life in Aridagawa.

When this residence was built, the surrounding village consisted of around 20 farming and papermaking households. The Kasamatsu family's respected position is evident in the large size and advantageous location of the property. The plot receives plenty of sunlight for growing vegetables and is sheltered from the wind by the surrounding mountains. It also has a freshwater stream and easy access to the rice paddies at Aragijima.

The residence's main house, storehouse, and rowhouse are typical structures found in homes from that time. The main house has a steeply slanted thatched roof that is designed to prevent snow accumulation in winter. The most unusual feature of the house is an innovative plumbing system that diverts the nearby freshwater stream into the kitchen area and out into a fishpond. Fresh water flows through the system continuously, carrying food waste and wash water out to feed the fish.

Today, the Kasamatsu residence is rented out to visitors who wish to experience traditional country life in Aridagawa. While modern conveniences like indoor plumbing have been added to the property, the main house retains its typical *kominka* features, including a packed-earth entryway, carved wooden transoms, and tatami-floored rooms.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧笠松家住宅

この古民家は、19世紀後半に建てられたもので、庄屋、笠松佐太夫（1598-1673）の親族のものであった。彼の革新的な開発事業は有田川町の生活を今もなお支え続けている。

この邸宅が建てられた当時、周辺の村は20軒ほどの農家と製紙業を営む家々で構成されていた。笠松家が尊敬を集めていたことは、敷地の広さと立地の良さにも表れている。敷地は日当たりがよく、野菜を育てるのに適しており、周囲の山が風を遮ってくれる。敷地内には小川が流れ、あらぎ島の田んぼへのアクセスも良い。

建物は母屋、土蔵、長屋があり、当時の住宅の一般的な建築様式である。母屋は藁葺き屋根で、冬に雪が積もらないように設計されている。この家の最も珍しい特徴は、近くの小川を家に向かって迂回させ、台所から養魚池に流す画期的な配管システムである。新鮮な水が絶え間なく流れ込み、食べ物の廃棄物や皿洗いの水が魚の餌となる。

現在、笠松邸は有田川町の伝統的な田舎暮らしを体験できる貸し宿泊施設となっている。室内に水道を引き込むなど近代的な設備が追加された一方で、母屋は、土間続きの玄関、木彫りの欄間、畳敷きの部屋など、典型的な古民家の特徴を保っている。

035-012

Small Countryside Temples and Shrines in Aridagawa

有田川町

【タイトル】 地域社会における神社・仏寺/蔵王権現社 金毘羅権現社 西原観音堂/松葉観音堂

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Small Countryside Temples and Shrines in Aridagawa

Visitors to Japan are likely to be familiar with large urban temples and shrines. The lavish golden pagoda of Kinkakuji in Kyoto or the bustling approach to Sensōji in Tokyo may come to mind. Although religious sites in remote mountain communities like Aridagawa are not nearly so sprawling or grand, they still play a role in everyday life and customs.

Aridagawa's temples and shrines usually consist of one small structure that enshrines a deity. The doors are typically closed out of respect for the deity but may be opened during festivals. The sites are usually unstaffed. Instead, local residents manage and maintain the sacred grounds and buildings, some of which have been in use for more than 500 years.

Many religious sites in Japan are also noteworthy for their natural beauty. This is true of Aridagawa's temples and shrines, many of which are tucked into shady groves or perched high on mountaintops. The approaches tend to be unmarked and inconspicuous, but visitors who seek them out will be rewarded with a unique blend of cultural and natural scenery.

These solitary sites are liveliest during their annual festivals. In Aridagawa, many temples and shrines host mochi-throwing events for good luck. Small rice cakes are tossed from a platform to a crowd of people below, who compete to catch the auspicious treats.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地域社会における神社・仏寺

日本を訪れる観光客の多くは、都会的で大きな寺社仏閣を思い浮かべるだろう。京都の金閣寺の豪華絢爛な黄金の塔や、東京の浅草寺の賑やかな参道などだ。有田川町のような人里離れた山間部の寺や神社は、それほど広大でも壮大でもないが、それでも日常生活や習慣の中で重要な役割を果たしている。

有田川町の寺や神社は通常、神を祀る小さな建造物1つで構成されている。扉は通常、神への敬意から閉ざされたままだが、祭事の際には開けられることもある。通常、人は常駐していない。その代わり、地元の住民が境内や建物の管理・維持に当たっており、中には少なくとも500年以上使われているものもある。

日本の多くの宗教施設は、自然の美しさを誇る場所でもある。有田川の寺社の多くも木陰や山頂にひっそりと佇む。その入り口は無名の目立たない場所にありがちだが、それらを探し求める観光客は、文化と自然が融合したユニークな風景を目にすることができるだろう。

このような孤独になりがちな場所は、年に一度のお祭りのときに最も賑やかになる。有田川町の多くの寺社では、縁起を担いで餅まきが行われる。小さな餅が壇上から下に集まった人々に投げられ、人々は縁起の良い餅を取ろうと競い合う。

地域番号	036	協議会名	井原線沿線観光連盟	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
036-001	与一記念弓道場		500～750	WEB
036-002	井原駅と井原デニムストア		250～500	WEB
036-003	戦国列車と井原の戦国時代		500～750	WEB
036-004	井原市立平櫛田中美術館		1～250	WEB
036-005	山成酒造		1～250	WEB
036-006	美星町（中世夢が原、美星吉備高原神楽民俗伝承館、星尾神社）		500～750	WEB
036-007	矢掛町矢掛宿		500～750	WEB
036-008	矢掛の山城		250～500	WEB
036-009	吉備真備公園		1～250	WEB

036-001

Yoichi Commemorative Kyūdōjō

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 与一記念弓道場

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yoichi Commemorative Kyūdōjō

The Feat That Inspired an Archery Culture

Nasu no Yoichi (1169–1232) earned his place in history with a single arrow at the Battle of Yashima (1185). Yoichi and the rest of the Minamoto army had pursued the enemy Taira across the strait between Honshu and Shikoku. However, the Taira were confident in their navy and the distance they could maintain on the water. The Minamoto were still on the beach when a woman among the Taira taunted their pursuers by hoisting a small folding fan and challenging the Minamoto to shoot it down. Yoichi rode his horse into the waves, took aim, let fly, and made history by toppling the fan with a single arrow. He was rewarded for his bravery with an appointment as military governor of five provinces, including land in part of the present city of Ibara.

Several historical sites in Ibara are connected to Nasu no Yoichi, such as geographical names that include references to archery, and a commemorative gravestone for Yoichi prepared by one of his descendants. Eishōji Temple was originally a Nasu family temple, and the Sodegami Inari shrine on the temple premises enshrines the sleeve which Yoichi ripped off when making his legendary shot.

Yoichi's archery feat still inspires people in Ibara, especially those who practice *kyūdō*, a martial art based on ancient military archery. Throughout the city of roughly 37,000 residents, there are several archery ranges, or *kyūdōjō*. Ibara is also home to one of the largest *kyūdō* competitions in western Japan, the Nasu no Yoichi Memorial West Japan Kyūdō Tournament, which held its fiftieth annual meet in 2024 and uses fan-

shaped targets in some events. That competition is held at a center dedicated both to *kyūdō* and to Yoichi himself: the Ibara City Yoichi Commemorative Kyūdōjō.

Carrying on the *Kyūdō* Tradition

For the archery lovers in Ibara, Yoichi has become an important symbol. The main hall and range of the Yoichi Commemorative Kyūdōjō opened in March 1989, and it represents Ibara's dedication to maintaining its connection to Yoichi and to promoting the practice of *kyūdō*.

The main hall stands at the top of a wooded hill inside the Ibara Sports Park, where there are three archery ranges ascending the hillside. The first one is a 28-meter range with space for six archers to shoot at once, and it was the first public *kyūdōjō* built in Ibara, completed in 1972. The second is a long-range course of 60 meters. The third and topmost—attached directly to the main commemorative hall—is a 28-meter range with space for 12 archers to shoot simultaneously.

The Yoichi Commemorative Kyūdōjō has prominent references to its namesake, with many plaques and posters depicting Yoichi's famous shot. It also has ties to the local denim industry, with an Ibara denim curtain hanging above the range and staff wearing *kyūdōgi* (*kyūdō* uniforms) made from Ibara denim.

The Kyūdōjō hosts competitions almost every month, practice sessions several days a week, and regular seasonal events. It is also notable for providing experiential workshops for first-time archers, which *kyūdō* practitioners conduct as a way to promote their passion for this art.

Understanding *Kyūdō*

The martial art of *kyūdō* differs greatly from the sport or hunting technique of archery. It is a rigorous practice regimenting every movement taken while in the *kyūdōjō*. The goal is not simply to accurately shoot an arrow and hit the target, but rather it is to smoothly follow a prescribed pattern of movements: stance, breath, aim, and release.

The Yoichi Commemorative Kyūdōjō offers a class for beginners to try their hand at *kyūdō*. After a demonstration of *kyūdōjō* etiquette and shooting manner, participants receive individual instruction as they learn to hold the bow and shoot at targets. Most *kyūdōjō* require thorough training in the basics before allowing students to shoot arrows, but here, beginners have a rare chance to do so without any previous experience. Reservations and a small fee are required, and the instruction is in Japanese, but physical demonstrations and guidance are usually sufficient for participants who do not speak the language. The workshop is open to everyone from single archers to large groups.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

与一記念弓道場

弓術文化に影響を与えた偉業

那須与一（1169-1232）は、屋島の戦い(1185)で一本の矢を放ち、その名を歴史に刻んだ。与一と源氏の軍は、本州と四国の間の海峡を越えて敵の平家軍を追った。しかし、平家は海軍と彼らが海上で保つことができる距離感に自信を持っていた。平家方の女性が小さな扇子を掲げ、追っ手の源氏方にそれを撃ち落としてみろと挑発した際、源氏は未だ浜辺に居た。与一は波間に馬を乗り入れ、狙いを定めて矢を放ち、一矢で扇を射って歴史に名を残した。彼はその武勇に報いられ、現在の井原市の一部を含む5つの地域の地頭に任命された。

井原市には、弓にちなんだ地名や、与一の子孫が作った記念墓碑など、那須与一ゆかりの史跡がいくつかある。永祥寺はもともと那須家の菩提寺で、境内にある袖神稲荷神社には、与一が伝説の弓射をした際に破った袖が祀られている。

与一の弓の偉業は、井原市の人々、特に古代の弓術に基づく武道である弓道に励む人々に、今でも熱気を与えている。人口およそ37,000人のこの街に、弓道場は複数ある。また、井原市は、西日本最大級の弓道大会である那須与一を偲ぶ西日本弓道大会の開催地で、2024年には50回目となる年次大会が開催され、一部の催しでは扇の形をした的が使用されている。その大会は、弓道と与一自身の記念館である「井原市与一記念弓道場」で開催された。

弓道の伝統を受け継ぐ

井原の弓道愛好家にとって、与一は重要なシンボルである。1989年3月にオープンした与一記念弓道場の本館と射場は、与一とのつながりを維持し、弓道の発展に努める井原の姿勢を体現する場所である。

本館は井原運動公園内の樹木が茂った丘の上にあり、丘の中腹には3つの弓道場がある。一つ目の射場は1972年に完成した井原で最初の公営弓道場であり、射距離28メートルで、一度に6人が射ることができる。二つ目は遠的用の射場で、射距離は60メートルある。一番上にある3つ目の射場は、記念館に直結した射距離28メートルの射場で、12人が同時に射ることができる。

与一記念弓道場には、与一の有名な弓射を描いた額や壁紙など、与一に関連する目を引く作品がある。また、地元のデニム産業との縁として、射撃場の上には井原デニムの暖簾がかかり、会員は井原デニムの弓道着を着用している。

弓道場では競技会がほぼ毎月と練習会が週に数日、また定期的に季節ごとのイベントも開催されている。また、弓道経験者が弓道の感動を伝えるために行っている、初めて弓道に触れる人向けの体験教室も注目されている。

弓道を理解する

武道である弓道は、狩猟技術でありスポーツであるアーチェリーとは大きく異なる。弓道場で行われる規則立った所作の全てが、厳格な鍛錬である。その目的は単に正確に矢を射て的に当てることだけではなく、構え、呼吸、狙い、射という定まった動作の型をスムーズに行うことにもある。

与一記念弓道場では、初心者向けの弓道体験教室を開催している。弓道場での作法や射法のデモンストレーションの後、参加者は個別に指導を受けながら、弓の構え方や的に向けた矢の射ち方を学んでいく。ほとんどの弓道場では、矢を射る前に基本をしっかりと基礎を学ぶ必要があるが、ここでは経験のない初心者でも矢を射る貴重な機会を得られる。予約と少額の参加料が必要で、指導は日本語で行われるが、日本語を話せない参加者でも身体を使つての実演と指導で基本的には十分である。このワークショップは、一人から大人数のグループまで、参加できる。

036-002

Ibara Station and the Ibara Denim Store

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 井原駅と井原デニムストア

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Ibara Station and the Ibara Denim Store

A Denim Destination: Ibara Station

Ibara Station brings travelers into immediate contact with Ibara's cultural icons of archery and denim.

The station building opened in November 1999, and its design pays homage to Nasu no Yoichi's famous twelfth-century archery feat of shooting a fan that was hoisted from a boat. When viewed from the stone plaza in front of the station, the building's sweeping curve of steel resembles the asymmetric curve of a Japanese bow, and a towering glass cone stands just off-center like an arrow poised against the string. On the opposite end of the plaza there is a seemingly unrelated statue: a tall pedestal topped by a fan-shaped stone with a large round hole. This evokes the fan of legend shot by Yoichi, and when standing on the far side of the statue and looking back toward the station, the opening in the fan frames the tip of the glass tower, emphasizing the arrow-like shape as it seems to fly into the distance.

Inside the station there is a cafe, a tourist services desk with souvenirs and bicycle rentals, and perhaps most striking, the Ibara Denim Store.

Denim Before It Was Denim

The Ibara area became a thriving center for cotton cultivation, weaving, and indigo dyeing during the Edo period (1603–1867). In the rapid industrialization that took place in the Meiji period (1868–1912), handlooms were increasingly replaced by

large-scale mechanized looms. Many different types of cloth were made by the factories in Ibara, but a thickly woven textile called Bitchū-kokura was particularly well known for its use in school uniforms and work clothes.

One style of Bitchū-kokura, called *urajiro*, had white backing and a dyed surface. It was often dyed with indigo and was made using the same 3 × 1 twill weave as denim cloth from the West. There are records of at least one textile company in Ibara selling a product labeled “blue denim” by 1930, but when American denim was reintroduced to Japan after World War II, many Ibara weavers were already skilled in the basic techniques to produce this fabric. By around 1970, about 75 percent of Japan’s domestic denim jeans were made in Ibara.

Ibara Denim Today

In Ibara today, there are roughly 20 companies involved in producing denim fabric, and many more local workshops, handmade goods stores, and tailors turning that fabric into jeans, bags, shirts, and more. There are decorations and signs around town that attest to denim’s importance in the local economy, but the Ibara Denim Store is the first stop for many visitors to the city. It offers services beyond off-the-rack sales such as personalization, made-to-order denim suits, and size alterations.

In addition to the prominent space the Ibara Denim Store occupies within the station building, there is also a small Denim Museum on the second floor detailing the history of denim in Ibara, and a workshop on the first floor called the “Garage” where visitors can try out part of the process of making products out of denim.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

井原駅と井原デニムストア

デニムの地：井原駅

井原駅に着くと、旅行者は早速井原の文化である弓とデニムに触れることができる。

1999年11月に開業した駅舎は、12世紀の那須与一が舟の上に揚げられた扇に的中させた有名な弓射に敬意を表したデザインをしている。駅前の石造りの広場から見ると、鉄骨の曲線が弓の

非対称なカーブと似たものとなっており、隆起したガラスの円錐形が、弦にかけられた矢のように中心から僅かにずれて位置している。広場の反対側には、背の高い台座の上で大きな丸い穴の開いた扇形の石が乗っているという一見何の関係もなさそうな像がある。これは、与一が放った伝説の射を連想させるもので、像の反対側遠方に立って駅の方を振り返ると、扇の開口部がガラス塔の先端を縁取り、遠くへ飛んでいく矢のような形を強調している。

駅構内にはカフェ、土産物やレンタサイクルを扱う観光サービスデスクがあるが、最も目を引くのは井原デニム店だろう。

デニムがデニムとなるより前

井原地方は江戸時代（1603～1867年）、綿花栽培、織物、藍染めの中心地として栄え、急速な工業化が起こった明治時代（1868～1912年）には、手織り機は次々と大規模な機械化織機に切り替えられた。井原の工場ではさまざまな種類の布が作られていたが、「備中小倉」と呼ばれる厚手の織物は、特に学生服や作業着への利用でよく知られた。

備中小倉のうち裏白（うらじろ）と呼ばれるものは、裏が白く、表面が染められている。藍で染められることが多く、西洋のデニム布と同じ3×1の綾織で作られていた。1930年までに井原で少なくとも1つの織物会社が「ブルーデニム」と表示された製品を販売していた記録があるが、第二次世界大戦後にアメリカンデニムが日本に再導入されたときには、井原の織工の多くはすでにこの生地を生産する基本的な技術を有していた。1970年頃には、日本の国産デニムジーンズの約75%が井原で作られるようになっていた。

井原デニムの現在

現在、井原にはデニム生地生産に関わる会社がおよそ20社ほどあり、さらに多くの地元の工房やハンドメイド雑貨店、仕立て屋がその生地をジーンズやバッグ、シャツなどに利用している。街のあちこちに、デニムが地域経済において重要であることを示す飾りや看板があるが、井原デニムストアは、この街を訪れる多くの人々にとって最初の立ち寄り先である。このお店ではオーダーメイドのデニムスーツやサイズ直しなど、既製品の販売にとどまらないサービスを提供している。

井原デニム店は駅ビルの中でもひととき目立つ場所にあるが、2階には井原のデニムの歴史を紹介する小さなデニム博物館があり、1階にはデニムを使った製品作りの一部を体験できるスタジオ「ガレージ」がある。

036-003

The Sengoku Train

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 戦国列車と井原の戦国時代

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Sengoku Train

The Sengoku Train: A Tribute to Ibara History

A trip into the samurai past of Ibara typically begins with a ride on the Ibara Railway. It operates only one line, the Ibara Line, which stretches from Kannabe in Hiroshima Prefecture to Sōja in Okayama Prefecture. Although paper tickets are available at staffed stations, passengers usually must pay in cash as they exit the “one-man car” trains. Several of these one- and two-car trains have unusual decorations and designs that make this line a popular one for train enthusiasts. One of the more striking designs is the history-themed Sengoku Train.

The Sengoku Train is a single-car train decked out in a Sengoku period (1467–1568) theme. Decorations include silhouettes of bows and arrows and the family crests of warriors who governed or invaded this area during a time of fierce rivalries among local warlords. There are also hanging straps adorned with models of samurai helmets emblazoned with the crests of cities and towns along the railway. Riding this route is like having a guided tour, because there are signs in both Japanese and English with historical facts about the area’s important figures, famous battlegrounds, and mountain castles.

The Sengoku Train runs several times a day on an irregular schedule, which can be checked on the Ibara Railway website (Japanese only).

Power in the Sengoku Period

The Sengoku (Warring States) period earned its name from the series of bloody upheavals that resulted when the central government was no longer able to control local warlords, whose familial disputes and attempts to expand their holdings quickly turned violent. It was also a period of popular uprisings, and of both technological development and high-culture accomplishments.

In this period, both military power and regional trade were highly dependent on roads. Primary among these were the *shichidō*, or seven highways, that connected the many provinces of Japan. As one of the *shichidō*, the Old San'yō Road (a precursor to and slightly different route from the modern San'yō Expressway) along the Seto Inland Sea area was a major route connecting western Honshu with the capital city of Kyoto. A portion of this road ran through Ibara along the Oda River. The looming mountains made this an advantageous place for warlords to exert influence over use of the road and river. The ability to project power here led to regular conflict, and many different armies invaded this territory even before the Sengoku period.

The desire to monitor and control traffic along the road led to building strategic fortifications called *yamajiro*, or mountain castles. Rather than towering, thick-walled castles with ornate structures, these *yamajiro* were simple wooden watchtowers and barracks that held supplies and armaments. The routes to these structures were often blocked with earthen mounds and moats built amongst steep terrain. Because the surrounding mountain terrain provided the primary defense, in a sense it was the mountains themselves that were the “castles.” Warlords used these bases to project power over the road and river and to set up defenses when under siege.

Takakoshi Castle was one of the more prominent *yamajiro* in Ibara. It once stood atop the mountain of the same name to the north of the Old San'yō Road, and although the wooden structures are gone, a commemorative park with a view of the city remains in its place.

Hōjō Sōun: The First Sengoku Daimyo

Takakoshi Castle is known for its links to Ise Shinkurō Moritoki (1432–1519), who was posthumously known as Hōjō Sōun. He was born into the Bitchū Ise family, and although his birthplace is unknown, the fact that his family controlled Takakoshi

Castle makes Ibara a possible location. Sōun later became a pivotal daimyo lord of the Sengoku period when he conquered Izu Province. His descendants continued his conquest by taking control of many parts of the Kantō region, but the family was eventually defeated in 1590 during Toyotomi Hideyoshi's (1537–1598) campaign to unite the country under his control.

Sōun's conquest of Izu is sometimes considered the true beginning of the Sengoku period, as his aggressive acquisition of new domains inspired the ambitions of other daimyo of his time. Although he did not control territory in Ibara later in his life, Sōun's outsized mark on history makes him a favorite local figure. The Sōun no Sato Ebara Station is named after him, and he has a central position in the Sengoku Train livery: it is Sōun's face that is depicted in the center of the badge at the front of the car.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

戦国列車

戦国列車：井原の歴史へのトリビュート

井原のサムライの時代を訪ねる旅は、井原鉄道に乗ることから始まる。井原鉄道は広島県の神鍋から岡山県の総社までを走る井原線一路線のみを運行している。有人駅では紙の切符が販売されているが、通常、乗客は「ワンマンカー」の列車を降りる際に現金で支払いをしなければならない。いくつかの1-2両編成の列車には、珍しい装飾やデザインが施されており、この路線は鉄道ファンに人気がある。中でも目を引くのが、歴史をテーマにした「戦国電車」だ。

戦国列車は、戦国時代（1467年～1568年）をテーマにした1両編成の列車だ。弓矢のシルエットや、地域の武将同士で熾烈な群雄割拠の時代にこの地を統治、あるいは侵攻した武将の家紋などが飾られている。また、沿線の市町村の紋が入った武士の兜の模型で装飾された吊り革もある。戦国列車に乗ることはさながらガイドツアーのようなもので、この地域の重要人物や有名な古戦場、山城についての歴史的事実が書かれた日本語と英語の解説がある。

戦国列車は1日数便、不定期で運行されており、井原鉄道のホームページで確認できる（日本語表記のみ）。

戦国時代の権力

戦国時代とは、中央の政府が地方武将達を統御できなくなったために相次いだ血なまぐさい動乱からその名がついており、地方武将達のお家騒動や領土拡大の試みはたちまち戦闘へと発展した。

この時代はまた、民衆の反乱の時代でもあり、技術の発展と高度な文化が成熟した時代でもあった。

この時代、軍事力も地域交易も街道に大きく依存していた。特に重要な街道が、日本の多くの地方を結ぶ七道であった。七道のひとつ、瀬戸内海沿いの旧山陽道（少しルートは異なるものの現代の山陽自動車道の前身）は、本州西部と京都を結ぶ主要ルートであった。この街道の一部は、小田川に沿って井原を通っていた。山が迫っているため、井原は武将が街道や川の利用について影響力を行使するのに有利な場所であった。この地において影響力を誇示するための争いは絶えず、戦国時代以前から、さまざまな勢力がこの地域に侵攻してきた。

街道沿いの交通を監視・管理するため、山城と呼ばれる戦略的要塞が築かれた。これらの山城は、豪華な構造を持つ厚い壁のそびえ立つ城ではなく、物資や武器が保管されていた簡素な木造の物見櫓や兵舎であった。これらの建造物へのルートは、険しい地形に築かれた土塁や堀で塞がれていることが多かった。周囲の山の地形が守りの要となるため、いわば山そのものが「城」であった。戦国武将はこれらの拠点で、街道や河川に対する力の誇示や、攻撃を受けたときの防衛に利用した。

高越城は井原でも有数の山城であった。かつては旧山陽道の北にある同名の山の上にあり、木造建築はなくなったが、市街を一望できる記念公園が残っている。

北条早雲：最初の戦国大名

高越城は、死後に北条早雲と（1432-1519）として知られた伊勢新九郎盛時ゆかりの城として知られている。出生地は不明だが彼は備中伊勢家に生まれであり、同族は高越城を支配していたことから、井原で生まれた可能性がある。早雲は後に伊豆国を征服して戦国時代における極めて重要な大名となる。彼の子孫は関東地方の多くの地域を支配し征服を続けたが、一族は最終的には1590年、豊臣秀吉（1537-1598）の天下統一のための侵攻に敗北した。

早雲の伊豆征伐は、戦国時代の真の始まりと見なされることがあり、彼の新領土獲得への積極性は、同時代の他の大名の野心に影響を与えた。その後半生において彼が井原の地を統治することはなかったが、歴史に大きな足跡を残したことから、地元の人々に愛される人物となっている。早雲の里 荏原の駅名は彼にちなんだものであり、彼は戦国列車の車体カラーリングの中心的な位置を占めている。車両前面のバッジの中央に描かれているのは早雲の顔である。

036-004

Hirakushi Denchū Art Museum

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 井原市立平櫛田中美術館

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hirakushi Denchū Art Museum

Sculptor Hirakushi Denchū (1872–1979) created emotionally compelling works in a wide range of styles. Born in Ibara but adopted at the age of 10 into a family in nearby Fukuyama, Hiroshima Prefecture, he moved to Tokyo in 1897 where he struggled for years to find success. Acclaim from Okakura Tenshin (1863–1913) and other influential art instructors proved crucial to bringing attention to his work. Denchū felt great admiration for Okakura, and even decades after Okakura's death, Denchū created many masterpieces modeled on Okakura's likeness. In 1944, Denchū was appointed an Imperial Household Artist, and in 1970, the city of Ibara built this museum to display his achievements. It is in the heart of town not far from Ibara Station, and when he visited, Denchū planted the camphor tree that stands in front of the building.

The museum's collection showcases a wide range of Denchū's artistic themes. Some pieces appear to depict figures from Buddhism, such as a demon spitting out a human in the fearsome work *Tenshō*, while others focus on more intimate themes. His work *Ane Musume* shows Denchū's daughter kneeling, hands cupped to her ears, listening to a neighbor's distant radio because her family was too poor to own one.

One of Denchū's masterpieces is *Kagamijishi*, an imposing statue of Kabuki actor Onoe Kikugorō VI (1885–1949) in costume for the play of the same name as the statue. The statue itself usually stands in the lobby of the National Theatre of Japan in Tokyo, but prototypes and unfinished models of *Kagamijishi* are kept on display here.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

井原市立平櫛田中美術館

彫刻家・平櫛田中（1872-1979）は、幅広い作風で情感豊かな作品を創造した。井原に生まれ、10歳で広島県福山近郊の家庭の養子となり、1897年に上京したが、東京では成功を掴むまで何年も苦労を重ねた。岡倉天心（1863-1913）をはじめとする有力な美術指導者たちからの称賛が、彼の作品が注目されるきっかけとなった。田中は天心に強い憧れを抱いており、天心の死後数十年経っても、田中は天心をモデルにした傑作を数多く制作した。1944年、田中は皇室技芸員に任命され、1970年には、井原市によって田中の業績を展示するためにこの美術館が建設された。美術館は井原駅からそれほど離れていない町の中心部にあり、田中が訪れた際には、建物の前にあるクスノキを植えたという。

美術館の収蔵品には、田中の芸術テーマが幅広く展示されている。鬼が人間を吐き出すという恐ろしい作品『転生』のように仏教観に基づいて人物を描いた作品もあれば、より身近なテーマにフォーカスした作品もある。彼の作品『姉娘』は、貧しくて家庭でラジオを所有することもできないことから、田中の娘が両手を耳に当ててひざまずき、近所のラジオに耳を傾けているところを表している。

田中の代表作のひとつに、歌舞伎俳優の六代目尾上菊五郎（1885-1949）の堂々たる『鏡獅子』像がある。『鏡獅子』は普段は東京の国立劇場のロビーに置かれているが、鏡獅子像の試作品や未完成作はここに展示されている。

036-005

Yamanari Sake Brewery (Yamanari Shuzō)

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 山成酒造

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yamanari Sake Brewery (Yamanari Shuzō)

Yamanari Shuzō is Ibara's sole sake brewery still in operation. Its nineteenth-century buildings are positioned directly between rice fields and cherry trees along the Oda River. With advance reservation and a small fee, it is possible to tour the premises and see how they retain traditional methods of brewing sake.

At Yamanari, brewing and bottling tasks are still done by hand using vintage equipment. For instance, the old-fashioned, pot-style boiler for steaming rice is becoming increasingly rare. The brewery also utilizes its natural surroundings to reduce both energy use and waste in brewing. For example, the finished sake matures in an unrefrigerated space with doors left open to the nighttime mountain breeze. Yamanari also works with local farmers to ensure that as much of its brewing rice as possible is grown in Ibara. In 2021, the brewery began cooperating directly with a local farmer to grow tall stalks of Omachi, a popular variety of Okayama brewing rice, and one of the three varieties (in addition to Akebono and Yamada Nishiki) that Yamanari prefers.

The Yamanari family has run this brewery since its founding in 1804, and the family lives onsite. The Meiji-era residence built next to the brewery in 1882 has hosted many noteworthy guests and can be toured upon request.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山成酒造

山成酒造は井原市で現在も操業している唯一の酒造である。その19世紀築の建物は、田んぼと小田川沿いの桜並木の間にある。事前予約と少額の料金を支払えば、敷地内を見学することができ、伝統的な手法の酒造りを見学することができる。

山成酒造では、醸造や瓶詰めの作業は、年代物の設備を使って今でも手作業で行われている。例えば、米を蒸すために用いられている昔ながらのポット式ボイラーは、今ではほとんど見かけなくなっている。また、醸造におけるエネルギー使用と廃棄物の両方を削減するため、酒造では自然環境を活用している。たとえば出来上がった酒を、夜の山風が吹き込む非冷蔵の空間で熟成させるなどの工夫が施されている。山成酒造はまた、地元の農家と協力し、酒造好適米のできる限り多くを井原で栽培したもの用いている。2021年、山成酒造は地元の農家と直接提携し、岡山県産酒造好適米の人気品種であり、山成酒造が好む3品種のひとつである雄町を栽培し始めた（あとの二種はあけぼのと山田錦）。

1804年の創業以来、山成家はこの酒造を経営しており、一家は敷地内に住んでいる。1882年に蔵の隣に建てられた明治時代の邸宅は、多くの著名な賓客を迎えたことがある場所で、要望があれば見学にも応じている。

036-006

History Under the Stars: Ibara's Bisei Area

井原線沿線観光連盟

【タイトル】美星町（中世夢が原、美星吉備高原神楽民俗伝承館、星尾神社）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

History Under the Stars: Ibara's Bisei Area

The mountainous Bisei district is about twenty minutes by car from central Ibara. In addition to recreating part of Ibara's samurai-era history, it also preserves a local theater tradition and views of the night sky.

Medieval Yumegahara (Chūsei Yumegahara)

Chūsei Yumegahara is a history and culture park built to recreate a medieval village. The buildings and layout were based as closely as possible on archaeological evidence and painted scrolls depicting this time period. The village was constructed with period-appropriate materials and techniques. For example, a close look at exposed wooden beams and pillars reveals a herringbone pattern left by shaping them with a hand-held adze blade. This authenticity has attracted film production companies who use the village as a location for period dramas, as well as hobby photographers and cosplayers.

Chūsei Yumegahara's village square has a market with a variety of recreated shops, including one shop with actual items for sale and a swordsmith workshop where forging demonstrations are given once a week, April through November. Throughout the park, the different floor plans of the farmhouses show how people arranged their living and working spaces. For example, a house modeled on that of a higher-ranked warrior farmer is a large home with an attached stable for horses and a place to store weapons to help defend the village in times of conflict.

A mountain castle watchtower has been recreated atop the hill. Defenders climbed up the steep ladder-like stairs to watch for approaching bandits or rival armies, while

below, a fortified building with storage for food, water, and arms served as a base for warriors to prepare for attacks.

Bitchū Kagura Dance

The Bisei Kibikōgen Kagura Folk Art Preservation Hall stands outside Chūsei Yumegahara's main entrance and stages live performances of Bitchū Kagura. This is a local style of kagura: sacred rituals, dances, and plays that may be used for entertaining deities or offering prayers. Kagura can range from austere to extravagant, with many styles using vibrant costumes and masks to portray myths of deities and monsters. The Bitchū style belongs to the latter category, with many of its dances depicting heroic battles against larger-than-life foes. The colorful snake statues in front of the hall are based on the costumes for one such monster: Yamata no Orochi, a legendary eight-headed serpent that is portrayed on stage by multiple actors. Nonetheless, Bitchū Kagura is considered a somewhat restrained style, for those who uphold Bitchū Kagura choose to retain local traditions instead of pushing for more dramatic flair.

The hall contains a museum of costumes, masks, and props used in the local Bitchū Kagura tradition, as well as a theater space. The stage, considered a sacred space, is a small dais with tatami mats festooned with a twisted-straw *shimenawa* and an ornate paper decoration hanging overhead with auspicious cut-out shapes. Floor seating starts at the edge of the stage, placing audience members up close to the masked dance and sword-swinging action.

Messages to the Stars

The name Bisei means “beautiful stars.” Aside from the clean mountain air, dark sky initiatives to install special streetlights have ensured low light pollution. It makes for such excellent stargazing conditions that there is both a public observatory and a JAXA (Japan Aerospace Exploration Agency) space debris monitoring station. In 2021, Bisei was named Asia's first Dark Sky Community. However, this focus on stars is nothing new.

A local legend says that farmers saw a shooting star above Bisei split into three parts and fall to earth. People tracked where the pieces landed and built simple shrines,

called *hokora*, dedicated to the fallen stars at those sites. In 1324, one of these three was moved and rebuilt into a full-size shrine: Hoshio Jinja.

This shrine, often silent by day, has used its stellar connections in a popular variation on the annual star-related Tanabata Festival. For Tanabata, people across the country write wishes on strips of colorful paper, called *tanzaku*, then hang them on bamboo branches. In 1989, the head priest of Hoshio Jinja held a public event to convey those wishes to the heavens through prayer and the ritual burning of local *tanzaku* in a sacred fire. The August 7 ritual now draws both *tanzaku* and visitors from around the country in the hope that Hoshio Jinja's starry connections will help make their dreams come true.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

星空の下歴史：井原市美星地区

美星地区は、井原の中心部から車で20分ほどの山間部に位置する。この地域では、井原の侍の時代の一端が再現されているほか、伝統園芸と夜景の両方が保持されている。

中世夢ヶ原

中世夢ヶ原は、中世の村を再現した歴史文化公園である。建物や間取りは、考古学的資料やこの時代を描いた絵巻物をできるだけ忠実に再現している。村は、この時代にふさわしい材料と技法で造られている。たとえば、むき出しになった木の梁や柱をよく見ると、手持ちの斧の刃で形を整えた杉綾模様が残っている。このリアルさが、時代劇のロケ地として利用する映画制作会社や、趣味の写真家、コスプレイヤーを惹きつけている。

中世夢ヶ原の村の広場には、実際に商品を販売しているお店一軒や、4月から11月にかけて週に一度の鍛冶の実演が行われる刀鍛冶を含む、様々な店舗が再現された市場がある。園内のあちこちにある農家ごとに異なる間取りは、人々が生活空間と作業空間をどのように配置していたかを示している。例えば、上級の農民武士をモデルにした家は、馬を飼うための馬小屋と、紛争時に村を守るための武器などを備えた大きな家となっている。

丘の上には山城の物見櫓が再現されている。守備兵は梯子のような急な階段を登って山賊や敵軍の接近を監視し、その下には食料、水、武器を貯蔵する要塞があり、武士たちが攻撃に備える拠点となっていた。

備中神楽

美星吉備高原神楽民俗伝承館は、中世夢ヶ原の正門の外にあり、備中神楽を上演する施設である。備中神楽はこの地方に伝わるスタイルの神楽で、神々をもてなし、祈りを捧げるための神聖な儀式であり舞であり劇である。神楽には儼かなものから豪華なものまであり、神や物怪の登場する神話を鮮やかな衣装と仮面で表現する形式が多い。備中流は後者のカテゴリーに属し、その舞の多くは、巨大な敵との英雄的な戦いを表現している。ホールの前にカラフルな蛇の像は、そのような怪物である 八岐大蛇（伝説上の八つの頭を持つ大蛇で、舞台では複数の役者によって演じられる）の衣装をモチーフにしている。とはいえ、備中神楽はやや控えめなスタイルと考えられており、備中神楽を愛好する人々は、より劇的な派手さを求めるのではなく、地元の伝統を守ることを好む。

伝承館には、地元の備中神楽で使用される衣装、仮面、小道具の博物館があり、劇場スペースもある。神聖な空間とされる舞台は小さなひな壇で、畳が敷かれ、撚り藁の注連縄が張られ、頭上には縁起の良い切り絵が施された華やかな紙飾りが吊るされている。床席は舞台の端から始まり、観客は面を付けての舞や剣を振り回すアクションを間近に鑑賞することができる。

星へのメッセージ

美星という地名は「美しい星」を意味する。山間の澄んだ空気はもちろんのこと、特殊な街灯を設置するダークスカイ保存の取り組みにより、光害が少ない。そのため、公開天文台やJAXA（宇宙航空研究開発機構）のスペースデブリ観測所があるほど星空観測に適した環境である。2021年には美星町がアジア初のダークスカイ・コミュニティに認定された。しかし、この星への関心は今に始まったことではない。

地元の伝説によると、農民たちは美星の上空で流れ星が3つに分裂し、地上に落下するのを目撃したという。人々はその破片がどこに落ちたかを追跡し、落ちた星を祀る簡単な祠をその場所に建てた。1324年、この3つのうちの1つが移され、星尾神社という大きな神社とされた。

この神社は、昼間は静寂に包まれているが、毎年恒例の星にまつわる七夕の祭りでは、その星とのつながりから人気を博している。七夕には、全国の人々が短冊と呼ばれる色のついた紙切れに願い事を書き、笹に吊るす。1989年、星尾神社の宮司が、祈祷と神聖な火で短冊を燃やす儀式を通して、その願いを天に届ける公開の神事を執り行った。今では8月7日の神事には、星尾神社の星とのご縁を信仰し、願いを叶えるための助けを得ようと、全国から短冊と参拝者が集まる。

036-007

Yakage's Historical District and Daimyo Hospitality

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 矢掛町矢掛宿

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yakage's Historical District and Daimyo Hospitality

Located along a major road and a river, the town of Yakage has long been a stopping place for travelers. The heart of the town lies along a straight, 800-meter stretch of the Old San'yō Road connecting western Honshu with the old capital cities in western Japan, and later with other routes that connected to the new capital of the shogun in Edo. This area was lined with 200 narrow *machiya* townhouses, thriving businesses, and lodgings for important travelers such as daimyo lords and their attendants.

Yakage as a Post Town

Yakage became a post town (*shukuba*) in the Edo period (1603–1867). It served the daimyo traveling to Edo for the shogunate's *sankin kōtai* system of alternate attendance, which required regional lords to stay in the capital every other year. These trips were massive undertakings that took weeks of travel with hundreds of retainers, and they required careful planning in order to make stops at post towns with adequate facilities to lodge both the daimyo and his entourage.

A post town offered a *honjin*, a house or business designated as an inn for a daimyo and some of his closest retainers, and *wakihonjin*, auxiliary inns to host lords of lower status and less-elevated members of a daimyo's entourage. Lesser inns and residences would host the remaining retainers, of whom there could be hundreds.

Yakage's historic district is unique for having both a *honjin* and a *wakihonjin* with well-preserved original structures. In 1969, both sites became nationally designated Important Cultural Properties.

The Yakage *Honjin* and *Wakihonjin*

The Yakage *honjin* was on the premises of a sake brewery owned by the Ishii family. The extensive grounds are still owned by the family and are open to the public. Some of the displays include expensive gifts to the hosts given by traveling daimyo and records of the *honjin*'s operations. These records are as historically valuable as the buildings because they provide concrete details of the names of important officials and the dates of their stays, as well as menus served, retinue sizes, and amounts of money spent.

The architecture of the *honjin* includes special security features such as spike-topped walls and cleverly located steps to trip up assassins creeping in the dark. There are remnants of luxury as well, such as beautifully carved *ranma* transoms with patterns of squirrels and grapes, and *fusuma* sliding doors with gold detailing.

Located about 350 meters east from the *honjin* is Yakage's remaining *wakihonjin*. This estate was owned by the Takakusa family of wealthy merchants, and the extent of the facilities, which included five tea rooms, secured warehouses, an inner garden, and other spaces in which to relax, made it worthy of hosting important members of a daimyo's retinue.

The estate is still owned by descendants of the original Takakusa family, and it is a private home, but parts of the grounds are open for viewing on weekends. The current buildings are a mix of styles and eras, with most dating from the late eighteenth to the mid-nineteenth centuries.

A Mix of Past and Present

The *honjin* and *wakihonjin* stand at roughly opposite ends of the Yakage historic district, where Yakage's ongoing historical preservation and beautification efforts are on display.

The buildings along the main street feature architecture from the seventeenth to the

twentieth centuries, and the mix of styles reflects changing tastes. For example, there are two common patterns in the roofs. Some buildings have gables over the front entrance, which is a style called *tsumairi*. Others use a *hirairi* style, with the gables to the sides of the building. Many places tend to use one style or the other, making the mix in Yakage unusual.

Despite the variation, raised stone foundations and outside wood paneling create a sense of stylistic unity. The town has enacted building codes requiring municipal approval for renovations and additions so that the changes contribute to the historical feel of the street. Telephone lines have been buried for much of the street's length, and road surfaces have been made to look like cobblestones. Most building entrances align with the street, and many have small signs explaining their history.

Several of the older structures along this street have been recently renovated as part of the beautification efforts, and some of the historical buildings now house hotels, restaurants, and gift shops. While the building exteriors preserve the original historical architecture, many of the interiors reflect modern tastes in comfort and design.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

矢掛の歴史地区と大名のもてなし

主要街道と川沿いに位置する矢掛町は、古くから旅人が立ち寄る場所であった。西日本と、別の街道を使えば将軍のいる江戸の新都にも出ることができる古都を含む本州西部を結ぶ旧山陽道の直線約800メートルの区間に、町の中心部がある。この一帯には、200軒もの狭い町家が立ち並び、商売も盛んで、大名やそのお供といった重要な旅人のための施設もあった。

宿場町としての矢掛

矢掛町は江戸時代（1603～1867）に宿場町となった。幕府の参勤交代制度により、地方の大名が隔年で江戸に滞在することになり、そのために江戸に出向く大名たちの宿場町となった。このような旅は、何百人もの家来を引き連れて何週間もかけて移動する大仕事であり、大名とその側近をもてなすのに十分な町家を備えた宿場町に立ち寄るには、綿密な計画が必要だった。

宿場町には、大名とその近臣を泊める「本陣」と、より身分の低い大名や家臣を泊める「脇本陣」があった。それ以下の旅館や屋敷は、残りの家来をもてなすもので、その数は数百にのぼることもあった。

矢掛町の歴史地区は、本陣と脇本陣の両方が保存状態の良いオリジナル建造物であるという点で特別な場所である。1969年、両所は国の重要文化財に指定された。

矢掛の本陣と脇本陣

矢掛の本陣は、石井家が所有する酒蔵の敷地内にあった。広大な敷地は現在も石井家が所有しており、一般公開されている。展示物の中には、旅路の大名が宿主に贈った高価な贈り物や、本陣の営業記録などがある。これらの記録は、重要な役人の名前や彼らが滞在した日付、提供されたメニュー、従者の人数、使われた金額など、具体的な詳細がわかるため、建物と同様に歴史的に価値のあるものである。

本陣の建築には、棘のある塀や巧妙に配置された段差など、暗夜に忍び寄る刺客を欺くための特別な防犯のための特徴がある。リスやブドウの模様が美しく彫られた欄間や、金の装飾が施された襖など、豪華さがわかる名残もある。

本陣から東に350メートルほど行ったところに、矢掛の脇本陣が残っている。この屋敷は豪商・高草家の所有で、5つの茶室やセキュリティ万全な蔵、中庭など、くつろげる空間などが充実しており、大名行列の要人をもてなすにふさわしいものだった。

屋敷は現在も高草家の子孫が所有しており、個人宅であるが、週末には敷地の一部が公開されている。現在の建物は様々な様式や時代のものが混在しており、そのほとんどが18世紀後半から19世紀半ばに建てられたものである。

過去と現在の混合

本陣と脇本陣は矢掛町歴史地区のほぼ対極に位置しており、この地区では矢掛町が現在進めている歴史保存と美化の営みが確認できる。

メインストリート沿いの建物は、17世紀から20世紀にかけての建築様式を特徴としており、様々な様式が混在していることは、流行の変化を反映している。例えば、屋根には2つの共通したパターンがある。ある建物は玄関の上に切妻があり、これは妻入と呼ばれる様式である。他に、切妻を建物の側面に配した平入りと呼ばれる様式を採用したものもある。どちらか一方の様式を採用する地域は多いが、矢掛町のように混在している例は珍しい。

ばらつきこそあるものの、石造りの土台や外壁の板張りは様式的な統一感を生み出している。町は、改築や増築に自治体の承認を必要とする建築基準を制定しており、その変更は通りの歴史的な雰囲気貢献する。電話線は通りの大部分に埋設され、路面は石畳のようにになっている。ほとんどの建物の入り口は通りに面しており、その多くには歴史を説明する小さな看板がある。

この通り沿いの古い建物の多くは、美化活動の一環として近年改修され、歴史的建造物の中には現在、ホテル、レストラン、ギフトショップが入っているものもある。建物の外観はオリジナルの歴史的建築様式を保っているが、内装の多くには快適さとデザインに現代的なセンスが反映されている。

036-008

Yakage's *Yamajiro* (Mountain Castles)

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 矢掛の山城

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Yakage's *Yamajiro* (Mountain Castles)

Long before Yakage became an Edo-period (1603–1867) post town, this area was an important stretch of the Old San'yō Road. The road connected ancient capitals such as Kyoto with western Japan, extending as far as the island of Kyushu. During the fifteenth and sixteenth centuries, as rival warlords fought to expand or defend their territory, keeping watch over major highways like the Old San'yō Road was crucial. Not only was the Yakage area a strategic location for surveillance, but it also had mountain terrain ideal for *yamajiro*.

Yamajiro were medieval fortifications built to utilize the mountainous terrain for defense, along with watchtowers and buildings to keep weapons and soldiers ready. Unlike later castles that were built with more permanent, elaborate structures for defense, *yamajiro* were simple wooden structures with extensive storehouses for supplies in case of a siege.

One of the most prominent *yamajiro* in the area was Sarugake Castle, built in 1205 by Shō Ienaga. His family was granted this area as a reward for meritorious service in battle, and his allied forces in faraway Musashi Province (present-day Tokyo and parts of the surrounding prefectures) wanted to keep this high-traffic area under observation. It was for this purpose that Sarugake Castle was constructed. It stood on a mountain next to the Oda River, and it had a close view of the Old San'yō Road on the opposite bank. Although steep terrain was a key defensive condition for many *yamajiro*, this mountain is so steep that even today there are sections traversable only by rope. Warriors in armor carrying heavy weapons would have found it a struggle to reach the castle, much less fight once they arrived. The Shō family successfully defended

Sarugake Castle through fifteen generations until 1571. Four years later, Mōri Motokiyo (1551–1597), who was from one of the most powerful warrior families of western Japan, took possession of the castle.

Motokiyo needed a headquarters that was not only defensible under siege but prepared for other kinds of warfare as well. He moved the local Mōri forces to Mt. Chausu, a more easily traversable mountain with a clear view of the town, road, and river below. In 1584, the construction of Chausuyama Castle was complete, and in 1587, it became the base from which Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) deployed Motokiyo to Kyushu to subjugate rival forces there.

The Mōri family, despite their control over much of western Honshu, ended up on the losing side of the decisive Battle of Sekigahara in 1600, and the Yakage area was among the territory they lost. In the relatively peaceful Edo period that followed, the shogunate limited the number of castles allowed to stand, and Yakage's castles and other *yamajiro* across the country were abandoned or torn down. Today, at the site where Sarugake Castle once stood, the mountain still presents a challenging climb, and remnants of the castle's stone foundation can be observed along the way. The site of Chausuyama Castle is a quiet park with a view overlooking the town of Yakage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

矢掛の山城

矢掛町が江戸時代（1603～1867）に宿場町となるずっと以前から、この地域は旧山陽道の重要な往来だった。この街道は、京都などの古都と西日本を結び、九州まで延びていた。15世紀から16世紀にかけて、敵対する武将たちが領土の拡大や防衛のために戦う中、旧山陽道のような主要な幹線道路を監視することは非常に重要だった。矢掛地域は監視のための戦略的な場所であっただけでなく、山城に理想的な山の地形を持っていた。

山城とは、中世に築かれた城郭のことで、山の地形を利用して防御のために築かれ、武器や兵を備えておくための物見櫓や建物があつた。防御のためにより恒久的で精巧な構造で建てられた後世の城とは異なり、山城はシンプルな木造建築で、籠城に備えて物資を貯蔵するための大規模な倉庫があつた。

この地域で最も著名な山城のひとつが、1205年に庄家長によって築かれた猿掛城である。彼のー

族は武功の褒美としてこの地を与えられたが、遠く離れた武蔵国（現在の東京都とその周辺の県の一部）の友軍は、往来の多いこの地域を監視下に置いておくことを望んだ。そのため、猿掛城が築かれた。小田川沿いの山の上にこの城はあり、対岸の旧山陽道が間近に見渡せた。険しい地形は多くの山城にとって重要な防御条件であったが、この山は非常に険しく、現在でもロープでしか登れない箇所がある。重い武器を携えた甲冑姿の武士たちには、城にたどり着くことは困難であったろう。1571年まで、庄氏15代に渡って猿掛城を守り抜いた。その4年後にあたる1575年、西日本屈指の大名家に属する毛利元清（1551-1597）がこの城を手に入れた。

籠城戦に耐えられるだけでなく、他の戦術にも対応できる本拠地を元清は必要とした。彼は地域の毛利勢をより踏破が容易で、眼下に町や道路、川を見渡すことができる茶臼山に移した。1584年、茶臼山城が完成し、1587年にはその城が豊臣秀吉（1537-1598）が敵対勢力を制圧するため元清を九州に派遣する際の拠点となった。

毛利家は、本州西部の大部分を支配していたにもかかわらず1600年の関ヶ原の戦いでは敗軍の側に属しており、矢掛地域は彼らが失った領土のひとつとなった。その後の比較的平和な江戸時代、幕府は城の数を制限し、矢掛の城をはじめとする全国の山城は廃城となったり、取り壊されたりした。今日、猿掛城跡は、依然として登りごたえのある山であり、その道中では城の石積みの跡を見ることができる。茶臼山城跡は、矢掛町を見下ろす静かな公園になっている。

036-009

Kibi no Makibi Park

井原線沿線観光連盟

【タイトル】 吉備真備公園

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kibi no Makibi Park

Kibi no Makibi (695–775) was an influential statesman credited with bringing many elements of Chinese culture to Japan, such as improved methods of astronomy, the divination practices of yin-yang cosmology (*onmyōdō*), and the game of Go.

Born to a powerful local family, Makibi showed academic prowess from an early age. He entered imperial service as a court official, and in 717, he was sent to Tang (part of present-day China) as a member of a group of scholar envoys. This was one of the 19 missions Japan sent to China between 607 and 838 to study a broad range of topics. Makibi spent 17 years there and would later rise to one of the highest positions in the Japanese court.

Kibi no Makibi Park was established at a site thought to be associated with Makibi's family, and it commemorates his many deeds. There is a towering statue of the man himself, an open space with a circle of monuments depicting mystical and astrological symbols, a massive stone Go table, and a sundial in memory of his scientific astronomical work.

Kibi Daijingū Shrine stands at the entrance to the park. It is a small shrine dedicated to Makibi, where his reputation as a scholar draws local students and parents who write prayers for academic success on *ema* votive tablets illustrated with Makibi's image.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

吉備真備公園

吉備真備（695-775）は、天文学の改良、陰陽道の占術、囲碁など、中国文化の多くの要素を日本にもたらしたとされる影響力のある政治家である。

地方の豪族に生まれ、吉備真備は幼い頃から学問の才能を発揮した。宮廷官吏として朝廷に入り、717年には遣唐使として唐に派遣された。これは、607年から838年にかけて日本が中国に派遣した19の使節団のひとつで、幅広い分野の研究を目的としていた。吉備真備はそこで17年間を過ごし、後に日本の宮廷で最高の地位に就くことになる。

吉備真備公園は、真備の一族ゆかりの地とされる場所に設けられており、彼の数々の功績を称えている。そびえ立つ吉備真備の像、神秘的で占星術的なシンボルを描いたモニュメントが円形に並び、広場、巨大な石の囲碁台、彼の科学的・天文学的研究を称えた日時計などがある。

公園の入り口には吉備大神宮がある。吉備真備を祀る小さな神社で、彼の学者としての名声に惹かれた地元の学生や父兄が、吉備真備の姿が描かれた絵馬に学業成就を祈願している。

地域番号	037	協議会名	錦町多言語解説協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
037-001	ミュージアムのコンセプト		1-250w	WEBページ
037-002	人吉海軍航空基地の歴史		251-500w	WEBページ
037-003	なぜ山の中に海軍航空基地が建設されたのか？		1-250w	WEBページ
037-004	【初期】少年兵の教育施設として		1-250w	WEBページ
037-005	【中期】特攻隊の訓練施設として		1-250w	WEBページ
037-006	【後期】本土決戦に備える兵站施設として		1-250w	WEBページ

037-001

Why We Are Here

錦町多言語解説協議会

【タイトル】ミュージアムのコンセプト

【想定媒体】WEBページ

できあがった英語解説文

Why We Are Here

The Nishiki Secret Base Museum was established to show how major conflicts between nations affect all of society, even small communities like this one, far from the front lines of combat. The museum tells the story of how the people and the landscape of this peaceful rural area of central Kyushu were transformed into a military installation for the defense of Japan in the final, desperate years of World War II. We hope that the museum and its exhibits will stimulate discussion on the ravages of war, the importance of peace, and the role of governments and citizens in preventing future conflicts.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ミュージアムの願い

にしき ひみつ基地ミュージアムは、国家間の大規模な紛争が、戦闘の最前線から遠く離れたこのような小さなコミュニティを含め、社会全体にどのような影響を与えるかを示すために開設されました。このミュージアムは、第二次世界大戦末期の絶望的な時期に、九州中部のこの平和な田園地帯の人々と風景が、どのようにして日本防衛のための軍事施設に変えられていったのかという物語を伝えています。私たちは、このミュージアムとその展示が戦争の惨禍と平和の重要性、そして将来の紛争を防ぐための政府と国民の役割についての議論を促進することを願っています。

037-002

The History of Hitoyoshi Naval Air Base

錦町多言語解説協議会

【タイトル】 人吉海軍航空基地の歴史

【想定媒体】 WEBページ

できあがった英語解説文

The History of Hitoyoshi Naval Air Base

Prior to World War II, the area around this museum was a sparsely inhabited plain tucked in the hills of southern Kyushu, covered in pine forests and fields of wildflowers, disturbed only by birdsong. It was said to be the site of a battle centuries earlier, but no traces remain. It was an isolated slice of rural Japan until everything changed in the autumn of 1943.

The war between Japan and the Allied forces had been raging for almost two years. Japan's early advances in the Pacific had been halted in battles at Midway and the Solomon Islands the year before. Japanese forces were in slow retreat, with units evacuated from Guadalcanal, and the British beginning to retake territory in Burma. American submarines were taking an ever more deadly toll on Japanese shipping.

Most Japanese were unaware of the seriousness of these setbacks, but the country's military leaders started making plans for Japan's homeland defense. In November 1943, construction began here on an airfield to serve as a relay and supply base for other naval bases in southern Kyushu.

Military Operations Begin

Hitoyoshi Naval Air Base opened in February 1944 with a 1,500-meter-long runway and buildings for headquarters, training facilities, and barracks. For a year it fulfilled its mandate, including the housing and training of more than 6,000 teenage soldiers, some as young as 16. The advancing Allied forces still seemed far away, and photos in the exhibit show an enthusiastic group of trainees making mochi rice cakes and

conducting military reviews.

By March 1945, however, the situation on the home front had deteriorated. The firebombing of Tokyo by U.S. aircraft on March 10 killed over 100,000 residents in a single night and left 1 million homeless. Meanwhile, outnumbered Japanese forces were furiously defending the southern island of Iwo Jima from a landing by U.S. Marines. The war came home to Hitoyoshi Base on March 18, when 14 American planes attacked the facility, damaging the airfield, destroying buildings, and killing 13, including 4 civilians.

Going Underground

By April, defense of the homeland had become the entire focus of Japan's military strategy. Okinawa was slowly being overrun by Allied forces, and Hitoyoshi Base, like many places around Japan, was once again hit by U.S. bombers. The base was converted to a training site for kamikaze pilots flying the Type 93 trainers known as Akatombo (Red Dragonfly). Large underground tunnels were dug out of the volcanic rock for use as air raid shelters, barracks, and torpedo factories. In June, as conditions worsened, air training ceased and the remaining airmen, along with local civilians, underwent training in hand-to-hand combat in anticipation of a final battle on the Japanese mainland against invading forces.

That invasion never came, however. The atomic bombings of Hiroshima on August 6 and Nagasaki on August 9 were quickly followed by the Showa emperor's broadcast capitulating to Allied demands on August 15. The war was over.

The Return to Peace

Many military documents from Hitoyoshi Base, as well as uniforms and other materials, were burned soon after the war's end. According to the testimony of former servicemen stationed there, enlisted men were demobilized immediately, while others remained for several months for processing. Approximately 700 Occupation forces were stationed in the Hitoyoshi area as of November 1945. Over the years after the Occupation, some of the buildings were converted to other uses, ranging from schools to cattle sheds, while the underground tunnels were often used as storehouses by local residents.

Managing the Memories

In 2015, 70 years after the end of the war, a local historian found documents that shed light on the base's role. They describe the base facilities, including the huge tunnel system and the runway (now the straight stretch of road leading to the museum). The town of Nishiki opened the Secret Base Museum in 2018, providing guidance to the tunnels and other remnants of the base, including a partially restored military gate 2 kilometers north of the museum and the ruins of a pine oil production workshop.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

人吉海軍航空基地の歴史

第二次世界大戦前、このミュージアムの周囲は、松林と花畑に覆われ、鳥のさえずりだけが聞こえる、九州南部の丘陵にひっそりと佇む人家のまばらな平地でした。この地域は数百年前に戦いの場となったと言われていわれていますが、そうした出来事の痕跡は見当たりません。1943年の秋にすべてが変わるまで、この場所はずっと辺鄙な日本の田舎でした。

日本と連合軍との戦争は、ほぼ2年間にわたって激しく続いていました。日本の太平洋における初期の快進撃は、前年のミッドウェー海戦とソロモン諸島の戦いによって勢いが失われていました。日本軍はゆっくりと後退しており、ガダルカナル島に配備された部隊が撤退し、またイギリス軍がビルマの領土を奪還し始めていました。さらに、アメリカの潜水艦は日本の船舶にこれまで以上に致命的な被害を与えていました。

ほとんどの日本人はこうした事態の深刻さを知りませんでした。日本の軍指導者たちは日本の本土防衛のための計画を立て始めました。そして1943年11月、この場所で、九州南部の他の海軍基地への中継および補給基地として機能する飛行場の建設が始まりました。

作戦の開始

長さ1,500メートルの滑走路と本部、訓練施設、兵舎の建物を備えた人吉海軍航空基地は1944年2月に運用が開始しました。その後1年間は、この基地は下は16歳の10代の兵士6,000人以上を収容し訓練を行うといった基地の役割を果たすことができました。この頃は進軍する連合軍はまだ迫ってきてはおらず、展示されている写真には熱意あふれる訓練生の一団が餅つきや観兵式などを行う様子が写っています。

しかし、1945年3月までに国内戦線の状況は悪化しました。3月10日の米軍機による東京大空

襲では、一夜にして10万人以上の住民が命を奪われ、100万人が家を失いました。南の硫黄島では、日本軍が兵力で負けつつも島を米海兵隊の上陸から必死に守っていました。3月18日、戦闘の波は人吉基地にも訪れました；14機の米軍機が施設を攻撃し、飛行場に損害を与え、建物を破壊し、地元の村民4人を含む13人が亡くなりました。

地下潜伏

4月には、本土防衛が日本の軍事戦略の焦点となりました。沖縄は連合軍によって徐々に制圧され、日本各地の多くの場所と同様に人吉基地も再び米軍爆撃機の攻撃を受けました。基地は、「赤とんぼ」として知られる九三式中間練習機を操縦する特攻隊員の訓練場に変更されました。火山岩には大きな地下トンネルが掘られ、防空壕、兵舎、魚雷工場として使用されました。6月に状況が悪化すると、航空訓練は中止され、残った航空兵は地元の民間人とともに、日本本土での侵略軍との最終決戦に備えて白兵戦の訓練を受けました。

しかし、その侵略は起こりませんでした。8月6日に広島、8月9日に長崎に原爆が投下され、そのすぐ後の8月15日に連合国の要求に屈した旨を伝える昭和天皇の発表が放送されました。戦争が終わったのです。

平和への回帰

人吉基地の多くの軍事文書や軍服、その他の資料は、終戦直後に焼却されました。そこに駐留していた元軍人の証言によると、入隊者はすぐに復員しましたが、処理のために数か月間残留していた人員もいたそうです。1945年11月の時点で、人吉地区には約700人の占領軍が駐留していました。占領後、基地の建物の一部は学校から牛小屋に至るまで様々な用途に転用され、地下トンネルはしばしば地元住民によって倉庫として使用されました。

思い出の管理

戦後70年を迎えた2015年、地元の郷土史家が、基地の役割を明らかにする文書を発見しました。それらは、巨大なトンネルや滑走路（現在はミュージアムに続く真っ直ぐな道路となっています）を含む基地施設について説明しています。錦町は2018年、トンネルなど現存する基地の遺構を案内するひみつ基地ミュージアムを開館しました；遺構には、ミュージアムの2キロ北にある部分的に修復された軍門や松油生産工場の廃墟などが含まれています。

【タイトル】なぜ山の中に海軍航空基地が建設されたのか？

【想定媒体】WEBページ

できあがった英語解説文

Why Build a Naval Base Here?

Building a naval base in the center of Kyushu, far from any port, may seem impractical, but there were compelling reasons for choosing this location. The area was secluded, yet had open spaces shielded by the surrounding hills. The ground surface of volcanic rock provided a solid foundation for constructing a runway, and the site's consistent headwinds benefited takeoffs and landings.

A Strategic Advantage

Hitoyoshi Naval Air Base's central location relative to the coastal naval bases around Kyushu made it an ideal hub for communications, a crucial supply depot for fuel and other necessities, and a potential site for weapons manufacture. Its distance from the sea also provided a strategic advantage: it was beyond the firing range of the largest guns on the newest U.S. battleships, which typically had a maximum range of 30 to 40 kilometers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

なぜここに海軍基地を建設したの？

どの港からも遠く離れた九州の中心部に海軍基地を建設するのは実際的ではないように思えるかもしれませんが、この場所を選ぶ上ではいくつかの納得できる理由がありました。この地域は辺鄙でありながら、周囲の丘に守られた広々とした空間を備えていました。また、火山岩の地表は滑走路建設のための強固な基礎となった上、離着陸時には常に向かい風が得られる地形でした。

戦略的な利点

九州周辺の沿岸海軍基地に対して中心的な位置にあった人吉海軍航空基地は、通信の理想的な拠点、燃料やその他の必需品の重要な補給基地、そして潜在的な兵器製造場所でした。海から距離があることも戦略的利点をもたらしました：基地は、通常最大射程が30～40キロメートルである米国の最新戦艦に搭載された一番大きな大砲が届かない場所にあったのです。

037-004

The Early Months: Training Young Airmen

錦町多言語解説協議会

【タイトル】【初期】少年兵の教育施設として

【想定媒体】WEBページ

できあがった英語解説文

The Early Months: Training Young Airmen

The Hitoyoshi Naval Air Corps was established when the base launched operations in February 1944. More than 6,000 teenage soldiers, some as young as 16, enlisted with the hope of becoming pilots. Due to a critical lack of planes and fuel, however, the training regimen was redirected to aircraft maintenance, disappointing many of the trainees. The few who received flight training were given lessons on the Type 93 biplane Akatombo (Red Dragonfly), a full-scale replica of which is displayed in the museum foyer.

Back-breaking Biofuel Production

Museum exhibits include the uniforms, records, and illustrated diaries of some of the trainees who served here. As Allied attacks on Japan intensified, and planes became increasingly scarce, the young men at Hitoyoshi found themselves with little to do that was flight related. Many were ordered to assist in producing oil from large pine roots, a laborious process that required shredding the wood before distillation. This pine-oil fuel, while incompatible with existing plane engines, was intended for use in the Kikka, an experimental jet aircraft that flew for only 12 minutes on August 7, 1945, just days before the war ended.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

初期の数か月間: 若い飛行士の訓練

人吉海軍航空隊は、基地が運用を開始したときに設立されました。下は16歳の10代の兵士6,000名以上が、パイロットになることを夢見て入隊しました。しかし、利用可能な航空機と燃料が

決定的に不足していたため、訓練計画は航空機のメンテナンスに変更され、多くの訓練生を失望させました。少数の飛行訓練を受けたものたちは、ミュージアムの玄関に実物大レプリカが展示されている九三式複葉機「赤とんぼ」で訓練を受けました。

大変だったバイオ燃料生産

ミュージアムの展示品には、ここで勤務した訓練生の制服や記録、絵日記などが含まれています。連合軍による日本への攻撃が激化し、飛行機がますます不足する中、人吉の若者たちは飛行機に関連した仕事に従事することはほとんどありませんでした。多くは、大きな松の根から油を生産するのを手伝うよう命じられました；これは、蒸留前に木材を細断しなければならないという大変な仕事でした。この松油は既存の飛行機のエンジンには使えなかったものの、開発中のジェット機「橘花」に使われる予定でした；橘花は戦争が終結するわずか数日前の1945年8月7日、12分間のみ飛行しました。

037-005

The Kamikaze Defense

錦町多言語解説協議会

【タイトル】【中期】特攻隊の訓練施設として

【想定媒体】WEBページ

できあがった英語解説文

The Kamikaze Defense

By the time Allied forces invaded Okinawa in April 1945, Japan's military leaders had few resources left. Japan no longer had access to natural resources from overseas, and constant air attacks had brought most domestic manufacture of weapons and other critical materials to a halt. Combat-trained airmen were scarce, as most had been killed or were missing in action. In October 1944, military leaders had ordered the formation of the Kamikaze (Divine Wind) Special Attack Force in an attempt to turn the tide during the Battle of Leyte Gulf. The aim was to demoralize Allied naval forces with endless waves of indefensible suicide attacks.

In May 1945, Hitoyoshi Naval Air Base became a center for training kamikaze pilots to defend Okinawa. Airmen from other bases were brought here for dive-bombing lessons on the Type 93 biplane before returning to their home bases for their final missions. The kamikaze strikes, launched from numerous locations, were devastating: 30 U.S. Navy ships were sunk, 400 damaged, and some 10,000 sailors killed or wounded. The toll on Japanese airmen and aircraft, however, was equally catastrophic, and the 4,000 airmen and 2,600 aircraft sacrificed were irreplaceable. Even some of the biplane trainers, like the one at the museum entrance, were eventually employed in kamikaze attacks. Their lack of speed was made up for by their wood and cloth construction, which helped them avoid radar detection. Museum exhibits include photographs, poems, and tokens given to the pilots to comfort them on their final flights.

神風に頼った防衛

1945年4月に連合国軍が沖縄に侵攻する頃には、日本の軍指導者たちにはほとんど手が残されていませんでした。日本はもはや海外からの天然資源を手に入らず、絶え間ない空襲により武器やその他の重要物資の国内製造のほとんどが停止しました。戦闘訓練を受けた航空兵は、ほとんどが戦死したか行方不明となっていたため、不足していました。1944年10月、軍指導者らはレイテ湾の戦いで、戦況を変えるために神風特攻隊の編成を命令しました。その目的は、防御不可能な自爆攻撃を際限なく続けて連合国海軍の士気を低下させることでした。

1945年5月、人吉海軍航空基地は沖縄を守るための神風特攻隊員を訓練する拠点となりました。他の基地からの航空隊員は、特攻という最終任務のために本拠地に戻る前に、九三式複葉機で急降下爆撃の訓練を受けるためにここに連れてこられました。多くの拠点から行われた神風特攻は、敵に壊滅的な被害をもたらしました：米海軍の艦船30隻が沈没、400隻が損傷、約1万人の船員が死傷しました。しかし、日本の空軍人と航空機の犠牲も同様に壊滅的であり、犠牲となった4,000人の航空兵と2,600機の航空機はかけがえのないものでした。最終的には、ミュージアムの入り口にあるような複葉機練習機でさえ神風特攻に採用されました。こうした練習機は速度が遅かったものの、これらが木と布で作られていたことはレーダーによる探知を避けるのに役立ちました。ミュージアムの展示品には、写真や詩、そして最後の飛行の際にパイロットに「自分はひとりぼっちではない」と安心させるために与えられた記念品などが含まれています。

【タイトル】【後期】本土決戦に備える兵站施設として

【想定媒体】WEBページ

できあがった英語解説文

The Final Days: Defending the Homeland

Operation Olympic was the code name for the Allied plan to invade southern Kyushu, scheduled for November 1945. Planners told U.S. President Truman to anticipate anywhere from a quarter of a million to a million casualties for the total invasion, with at least an equal number of Japanese expected to lose their lives. Japan's response to the invasion plans was Ketsugo (Operation Decisive), a plan to meet the invaders with massive ground and air forces, including civilians. All healthy males between ages 15 and 60 and females between 17 and 40 were expected to join in the defense of the homeland.

Preparing for a Fight to the Death

Japanese leaders gave the defense of Kyushu the highest priority, so military units and civilians living near Hitoyoshi Naval Air Base were included in their plans. In February, education at area schools was halted so that students and teachers could join the war effort. On June 1, training at the base was halted, and the group of trainees was converted into a ground combat unit. Some received training in digging camouflaged foxholes, from which they were to emerge with explosives to engage passing tanks in suicide attacks. Many civilians were trained to fight with sharpened bamboo spears. It would have been impossible to avoid the fighting, as the target area of the invasion front for Operation Olympic was only 20 kilometers south of the base.

The Tragic End

On August 6, 1945, the United States dropped an atomic bomb on Hiroshima, causing an estimated 140,000 deaths. Three days later, on August 9, another atomic bomb was

dropped on Nagasaki, resulting in over 70,000 deaths. The war concluded with the Showa emperor's surrender declaration on August 15.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

最後の日々：祖国を守る

オリンピック作戦とは、1945年11月に予定されていた九州南部侵攻という連合国軍の計画のコードネームでした。計画立案者らはトルーマン米大統領に対し、この侵攻全体によって連合国軍側に25万人から100万人の死傷者が発生し、さらに少なくとも同数の日本人犠牲者が出ることを予期するよう伝えました。この侵攻計画に、日本は民間人を含む大規模な陸空軍で侵攻者を迎え撃つ「決号作戦」で対応しようとしていました。15歳から60歳までの健康な男性と17歳から40歳までの女性は全員、祖国の防衛に参加するよう期待されました。

玉砕の準備

日本の指導者たちは九州の防衛を最優先としたため、人吉海軍航空基地の近くに住む軍部隊や民間人も防衛計画に含まれていました。2月には、生徒と教師が戦争遂行に協力できるよう、地域の学校での教育が停止されました。6月1日、基地での訓練は中止され、訓練生のグループは地上戦闘部隊に転換されました。中にはカモフラージュを施した塹壕を掘る訓練を受けた者もいました；彼らはそこから爆発物を持って出てきて、通り過ぎる戦車に自爆攻撃を仕掛けることになっていました。多くの民間人は、尖らせた竹槍で戦うよう訓練を受けていました。オリンピック作戦の侵攻戦線の目標は基地からわずか20キロ南にあったため、戦闘を避けることは不可能だと考えられていました。

悲劇的な最期

1945年8月6日、米国は広島に原子爆弾を投下し、これにより推定14万人が亡くなりました。その3日後の8月9日、長崎に再び原子爆弾が投下され、7万人以上が死亡しました。8月15日、昭和天皇の降伏宣言により戦争は終結しました。

地域番号	038	協議会名	指宿市観光・経済戦略会議	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
038- 001	知林ヶ島/知林ヶ島		1～250	アプリ QRコード
038- 002	指宿神社/指宿神社		1～250	アプリ QRコード
038- 003	砂むし温泉/砂むし温泉		1～250	アプリ QRコード
038- 004	指宿 温泉の歴史/殿様の湯		251～500	アプリ QRコード
038- 005	橋牟礼川遺跡/橋牟礼川遺跡		1～250	アプリ QRコード
038- 006	指宿の食文化① 魚/指宿の魚類		251～500	アプリ QRコード
038- 007	指宿の食文化② サツマイモ/指宿のサツマイモ		1～250	アプリ QRコード
038- 008	指宿の食文化③ その他		1～250	アプリ QRコード
038- 009	長崎鼻/長崎鼻		1～250	アプリ QRコード
038- 010	鰻温泉/鰻温泉		1～250	アプリ QRコード
038- 011	指宿の伝説①/浦島太郎、山幸彦・海幸彦		251～500	アプリ QRコード
038- 012	指宿の伝説②/開聞岳と金峰山		1～250	アプリ QRコード
038- 013	山川港/山川港		251～500	アプリ QRコード
038- 014	指宿の歴史/宮ヶ浜		1～250	アプリ QRコード
038- 015	指宿の地形/-		251～500	アプリ QRコード
038- 016	西郷隆盛と指宿/西郷隆盛と指宿		1～250	アプリ QRコード

038- 017	牧間神社/牧間神社	1～250	アプリ QRコード
038- 018	第二次世界大戦関連の施設/第二次世界大戦関連の施設	251～500	アプリ QRコード
038- 019	製塩/製塩	251～500	アプリ QRコード
038- 020	トカラ馬/トカラ馬	1～250	アプリ QRコード
038- 021	池田湖/池田湖	1～250	アプリ QRコード

038-001

Walk the Chiririn Lovers' Road to Chiringashima Island

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 知林ヶ島/知林ヶ島

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Walk the Chiririn Lovers' Road to Chiringashima Island

The small, uninhabited island of Chiringashima is a symbol of love. For much of the year, it is separated from the Satsuma Peninsula by 800 meters of water. But under the right conditions, a sandbar emerges from the sea, creating a narrow but walkable isthmus that connects the island to the peninsula. This sandbar is called the Chiririn Road.

Kagoshima Bay is a deep, bowl-like caldera that drops off steeply from the shoreline, and Chiringashima is located at its mouth, where the water is relatively shallow. From March to October, the Kuroshio Current flows in and out of the bay, depositing sand between Chiringashima and the mainland. In the winter months, when the Kuroshio Current weakens, the prevailing north winds push the sand back out to sea, the sandbar disappears, and the island and shore are separated once again.

The island's romantic associations come partly from the seashells that can be found along the sandbar. When the shells of two similarly sized blunt cockles (*Lunulicardia retusa*) are put together, they form a heart shape, and according to local legend, anyone who finds a pair of matching shells will find love. During the warmer months, busy beachcombers can be seen walking the Chiririn Road, looking for their two perfect halves.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ちりりんロードを歩いて知林ヶ島へ

知林ヶ島は鹿児島湾に浮かぶ小さな無人島で、愛のシンボルとなっている。1年のうち4ヶ月間、この3キロの島は薩摩半島から800メートルの海を隔てている。しかし、条件が整えば、この小さな島と本土をつなぐ砂州が海から現れ、狭いながらも歩いて行ける地峡ができる。この砂州はちりりんロードと呼ばれている。

鹿児島湾は、海岸線から急に落ち込んだお椀のような深い形をしたカルデラである。知林ヶ島は湾口に位置し、水深は比較的浅い。3月から10月にかけて、黒潮が湾内に流れ込み、知林ヶ島と本土の間に砂を堆積させます。冬の間、黒潮の流れが弱まると、卓越する北風が砂を沖に押し戻し、砂州が消えて島と海岸が再び離れる。

この島のロマンチックなイメージの一因は、砂州沿いで見られる貝殻にある。モクハチアオイ (*Lunulicardia retusa*) の貝殻は、同じ大きさの貝殻を2つ合わせるとハートの形になる。地元の言い伝えによると、同じ大きさの貝殻を2つ見つけると恋が叶うと言われている。暖かい季節には、2枚の貝殻を見つけるためにチリリンロードを歩く姿が見られる。

038-002

The Sacred Trees and Ancient Art of Ibusuki Jinja Shrine

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 指宿神社/指宿神社

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

The Sacred Trees and Ancient Art of Ibusuki Jinja Shrine

Ibusuki Jinja is one of the oldest shrines in Ibusuki. The shrine was originally founded in 706, on the orders of Emperor Tenji (626–671). It is known for the grove of sacred trees that encircles the shrine grounds and for its collection of historic artworks, including fourteenth-century Noh masks. The current main hall and many of the surrounding structures date from 1847, when the lord of the powerful Shimazu family paid for a major reconstruction.

A footpath leads around the shrine’s central worship hall and up a small stone staircase. Beyond it is the shrine’s sacred grove, which is thought to be about 700 years old. Eight camphor trees, some more than 20 meters tall, tower among hackberry and ginkgo, and the twisting aerial roots of Japanese sea figs have wound themselves around their branches. Such dense, almost primordial growth is rare in Kagoshima, and the prefecture has declared the grove a Natural Monument.

Ibusuki Jinja is the starting point for a spring ritual that has taken place in Ibusuki since 1545. During the Hamakudari, or “Procession to the Sea,” local residents walk nearly 4 kilometers from the shrine to one of two local ports, carrying a 4-meter-tall float of the deity Sarutahiko.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

指宿神社のご神木と古代アート

指宿神社は指宿で最も古い神社のひとつである。この神社は天智天皇（626-671）の命により創建された。境内を囲む神木の木立、14世紀の能面を含む歴史的な美術品のコレクションで知られている。

現在の本殿と周囲の建造物の多くは、1847年に島津家の藩主によって建て替えられたものである。

参道は、拝殿を過ぎて左に進み、小さな石段を上ったところにある。その先には、樹齢約700年とされる神社の木立がある。20メートルを超える8本のクスノキがイチョウなどの木々の中にそびえ立っている。このような原始的な密生林は鹿児島では珍しく、県はこの社を天然記念物に指定している。

指宿神社は、1545年から指宿で行われている春の神事の出発点である。「浜下り」と呼ばれるこの神事は、高さ約4メートルの猿田彦大神の神輿を地元の住民が神社から4キロ近く離れた2つの港のうちの1つまで約4キロの道のりを歩く。

038-003

Ibusuki Sand Baths: Not Just Another Day at the Beach

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 砂むし温泉/砂むし温泉

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Ibusuki Sand Baths: Not Just Another Day at the Beach

Ibusuki is home to the world's only natural sand baths, called *sunamushi onsen*. Each year, approximately 250,000 people come to Ibusuki to be buried in the warm, wet sand. Therapeutic sand bathing has been practiced for at least 160 years and is purported to have a range of benefits, including improved circulation and pain relief.

The sauna-like sand is a rare natural phenomenon created by the area's unique geological features. Farther inland, geothermal pressure forces the water beneath the mountains up toward the surface at over 90 degrees Celsius. Some of the water bubbles up, forming natural springs, but the rest seeps downhill through the sandy soil. When the hot water reaches the shoreline, it hits colder, denser seawater and rises up into the sand along the beach—where it can be used for sand bathing.

The process of sand bathing is simple. Sand bath attendants first dig long, body-sized holes in the sand, each about 10 centimeters deep. Each hole is then occupied by a sand-bather wearing a robe, who lies face up. The bathers are then covered up to their necks with hot, wet sand and left to enjoy the heat and swaddling pressure. Sand-bathing has been shown to raise blood pressure and stimulate circulation, and the sound of the waves and the cool breeze off the ocean are deeply relaxing. Most bathers remain buried for around 10 minutes, but others linger and enjoy the sensation for a half hour or more.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

指宿砂むし温泉

指宿には世界で唯一の天然砂むし温泉がある。毎年25万人もの人々が指宿を訪れ、温かく湿った砂に埋もれる。砂風呂は少なくとも160年前から行われており、砂に埋まることで血行が良くなり、痛みが和らぐなど、さまざまな効果があるとされている。

サウナのような砂は、この地域の独特な地質学的特徴によって生み出される珍しい自然現象である。さらに内陸に行くと、地熱の圧力によって山の地下の水が90℃以上の高温で地表に押し上げられる。水の一部は湧き出して天然の温泉を形成するが、残りは砂地を伝って下に向かって浸透する。加熱された水が海岸線に達すると、より冷たく密度の高い海水にぶつかり、ビーチ沿いの砂に押し上げられる。

砂浴びのやり方は簡単だ。まず、係員が砂地に深さ10センチほどの穴を掘る。そして、ローブを着た入浴者がその穴に顔を上にして横たわり、頭だけを出して砂で覆われる。濡れた砂の熱と包み込むような圧力は、血圧を上昇させ血行を促進することがわかっており、波の音と海からの涼しい風は深いリラックス効果をもたらす。ほとんどの海水浴客は10分ほど砂に埋まったままだが、中には30分以上もその感覚を楽しんでいる人もいる。

【タイトル】 指宿 温泉の歴史/殿様の湯

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Ibusuki, a Land of Hot Springs

Ibusuki has one of the highest concentrations of hot springs in Japan, with over 1,000 known springs. These include various types of hot springs, as well as the globally unique sand baths (*sunamushi onsen*). It is no surprise that “Ibusuki” was once written with characters meaning “town of abundant springs.”

Ibusuki’s many natural hot springs are the result of its volcanic surroundings. Ibusuki sits within the Ata Caldera, the remnants of a massive volcanic eruption that occurred some 100,000 years ago. The caldera is pocked by several smaller craters from major eruptions, some occurring as recently as 6,300 years ago. Mt. Kaimondake, the city’s iconic cone-shaped mountain, is itself an active basalt stratovolcano. The same heat and pressure that have created so many volcanoes bring mineral-rich groundwater boiling to the surface. For centuries, people have used this abundant hot water for bathing and cooking.

Historical records indicate Ibusuki was a hot spring destination at least as far back as the early 1500s. The Portuguese merchant Jorge Álvares, one of the first Europeans to visit Japan, mentions Ibusuki’s hot springs in his 1546 *Report on Japanese Matters*. In the 1600s, the lords of the local Shimazu family built private villas in Ibusuki to take advantage of its numerous springs.

One such lord established bathing facilities that are known locally as Tonosama-yu, or “The Lord’s Bath.” Dating from 1831, the baths survive today in two incarnations. Although the villa that once surrounded the baths has been lost to time, the original

basins and some tilework remain as Cultural Properties of Ibusuki. An adjoining public bath welcomes bathers who come to soak in waters that were once enjoyed by samurai lords.

Ibusuki is the consummate hot spring haven. Whether you prefer historic baths, like Tonosama-yu, or brand-new facilities with saunas and pools, like Healthyland, whether you are seeking a wide oceanside view or a leafy mountain bower, a clear chloride spring or a pungent sulfur bath, Ibusuki has a hot spring to suit any soak.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

藩主の温泉であった指宿

指宿には、1,000を超える源泉があり、日本有数の温泉密集地である。指宿温泉には、さまざまな種類の温泉のほか、世界的にも珍しい砂蒸し風呂（砂むし温泉）がある。「指宿」という地名が、「泉質の豊富な町」を意味する古い地名に由来すると考えられているのも不思議ではない。

これほど多くの天然温泉が存在するのは、主に指宿が火山地帯であることに起因する。指宿は、約10万年前に起きた大噴火の名残である阿多カルデラの中にある。このカルデラには、6,300年前の大噴火でできた小さなクレーターがいくつも点在している。そして、街のシンボルである円錐形の開聞岳は、活動中の玄武岩成層火山である。複数の火山を生み出したのと同じ熱と圧力が、ミネラル豊富な地下水を地表に沸騰させ、何世紀もの間、人々はそれを入浴や料理にも使ってきた。

歴史的な記録によれば、指宿は少なくとも1500年代初頭には温泉地であった。日本を訪れた最初のヨーロッパ人の一人であるポルトガルの商人、ジョルジュ・アルヴァレス（1521年没）は、1546年の『日本事情報告』の中で指宿の温泉について言及している。1600年代には、島津家の領主が指宿に別荘を建て、指宿の温泉を利用した。

ある大名が、地元では殿様湯として知られる入浴施設を設立した。、1831年に建てられ、現在も2つの姿で残っている。殿様湯を囲んでいた別荘は失われてしまったが、当時の浴槽やタイル細工の一部は指宿市指定文化財として残されている。また、隣接する公衆浴場では、かつて殿様が楽しんだのと同じ湯に浸かろうと、多くの湯治客が訪れている。

指宿は温泉天国である。殿様湯のような歴史ある温泉も、ヘルシーランド玉手箱のようなサウナやプールを備えた新しい施設も、広い海辺の景色も、緑豊かな山間の東屋も、透明な塩化物泉も、刺激的な硫黄泉も、指宿にはどんな人でも浸かれる温泉がある。

038-005

A Prehistoric Pompeii: Hashimure-Gawa Archaeological Site

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 橋牟礼川遺跡/橋牟礼川遺跡

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

A Prehistoric Pompeii: Hashimure-Gawa Archaeological Site

At first glance, the Hashimure-gawa Archaeological Site appears to be little more than a public park. The lush green grass and relaxed atmosphere bely a discovery of immense importance to the study of Japan's ancient peoples.

In 1916, a high school boy found some shards of pottery while playing in the park. He brought the pieces to his teacher, who noticed that they seemed to be a mix of styles from the Jōmon and Yayoi, two of Japan's prehistoric peoples. Up to that point, their pottery had rarely been found in the same place, and it was believed that the Jōmon and Yayoi had inhabited different regions. That high schooler's discovery suggested otherwise. The teacher sent the shards to Professor Hamada Kōsaku (1881–1938) of Kyoto Imperial University, who saw an opportunity to clarify the timeline of Japanese prehistory.

Hamada excavated the site, uncovering more pottery, along with evidence of volcanic eruptions that clearly dated the soil strata. Using the eruptions as reference points, Hamada was able to prove that the Jōmon people existed long before the Yayoi, an important clarification to the history of civilization on the Japanese archipelago. Hashimure-gawa was designated a National Historic Site in 1924, and today, recreations of ancient pit dwellings are the main feature of the park.

Even today, the archaeological findings continue to provide new information. Similar to Italy's Pompeii, the volcanic ash from past eruptions entombed entire villages,

preserving them as records of ancient people's daily lives. Remnant piles of shell mounds (called middens) and shards of cookware reveal what they ate, and pollen trapped in the ash tells us what plants thrived at different points in history. Artifacts uncovered at the site are displayed at the neighboring Ibusuki Archaeological Museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

先史時代のポンペイ：橋牟礼川遺跡

橋牟礼川遺跡は、一見するとただの公園のように見える。しかし、青々とした芝生とリラックスした雰囲気は、日本の古代の人々を研究するうえでこの遺跡が持つ非常に重要な意味を覆い隠している。

1916年、公園で遊んでいた男子高校生が、古い土器の破片を見つけた。彼はその破片を先生のもとへ持って行った。先生は、それらが日本の先史時代の民族である縄文人と弥生人が混在しているように見えることに気づいた。それまで、縄文人と弥生人は別の地域に住んでいたと考えられていた。その高校生の発見は、そうではないことを示唆していた。先生はその破片を京都帝国大学の濱田耕作教授（1881-1938）に送った。濱田教授は日本先史時代の年代を解明する好機ととらえた。

濱田教授は橋牟礼川遺跡を発掘し、火山噴火の証拠とともに、地層年代を明確に示す噴火の痕跡を発見した。噴火を基準にして、縄文人が弥生人よりずっと前に存在していたことを証明することができた。この発見により、日本列島における文明の発展が明らかになった。橋牟礼川は1924年に国の史跡に指定され、現在は、古代の竪穴住居が再現されたものが公園のおもな見どころとなっている。

考古学的な発見は、新たな情報を提供し続けている。イタリアのポンペイのように、過去の噴火による火山灰は村全体を埋め尽くし、古代の人々の日常生活の青写真として保存されている。ゴミ塚や調理器具からは、彼らが何を食べていたかがわかり、火山灰に閉じ込められた花粉からは、歴史上のさまざまな時期にどのような植物が繁茂していたかがわかる。これらの遺物の一部は、隣接する指宿市考古博物館に展示されている。

【タイトル】 指宿の食文化① 魚/指宿の魚類

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Delicacies of Ibusuki: Seafood

Ibusuki is located on the southern coast of Kyushu, where the Kuroshio Current brings rich fish stocks up from the tropics. At the city's five fishing ports, fishermen use trawling, gill nets, and single-line methods to bring in about 100 species each year. In addition, an annual average of 70 metric tons of fish are farmed at deep, sheltered harbors like Yamagawa Bay. This combination of variety and abundance makes Ibusuki a seafood destination with two standout local specialties: *hongarebushi* and *nanohana kanpachi*.

Hongarebushi

Dried bonito, or *katsuobushi*, is an essential ingredient in Japanese cooking. The dried fish is used to make dashi stock, a core component of many Japanese dishes, and paper-thin flakes of it are added to everything from tofu to *takoyaki*.

The process of making *katsuobushi* is long and laborious. First, the bonito is cut into fillets and carefully arranged in a basket for stewing. The fillets are then simmered at over 90 degrees Celsius for several hours, toughening the meat and sealing in umami-rich components. Next, each fillet is manually deboned and then repeatedly smoked and cooled over several weeks. This process dries the fish out and prevents harmful bacteria from developing. When the process is complete, the once tender fillets of fish have become blackened, rock-hard sections called *arabushi*. These *arabushi* can then be shaved into bonito flakes.

The slightly acidic taste of *arabushi* is preferred in some regions of Japan, but an

additional step can be added to achieve a rounder, more complex flavor. Applying a beneficial fungus to *arabushi* and sun-drying it causes the outer layer to ferment, softening the aroma and bringing out its umami. This fermented fish is called *karebushi*.

Ibusuki produces an especially high-grade *karebushi* called *hongarebushi*, which is repeatedly fermented and dried up to four times for even more depth of flavor. *Arabushi* takes about 20 days to produce, and *karebushi* takes about two months. In contrast, making *hongarebushi* can take up to half a year. Around 70 percent of Japan's *hongarebushi* comes from Ibusuki.

Ibusuki Nanohana Kanpachi

Greater amberjack (*kanpachi*) is a firm whitefish commonly eaten as sushi or sashimi. Although wild-caught *kanpachi* is available, most of the *kanpachi* served in Japan is farmed. The country produces about 24,000 metric tons annually, and more than half of it comes from Kagoshima Prefecture.

The shape and characteristics of Yamagawa Bay create a natural harbor that is well suited to aquaculture. A long, curved promontory acts as a natural breakwater, and its nearly vertical banks leave no shallows in which steep waves can form. Unlike harbors that result from wave erosion or sediment deposition, Yamagawa Bay was formed when groundwater came into contact with a pocket of magma. The resulting explosion left a large crater that later collapsed and filled with seawater, forming a protected bay.

Nearly a hundred net cages occupy the bay's deep, calm waters, where about 370,000 *kanpachi* are raised. Each spring, wild fry are caught and moved to the enclosures to be raised until they reach the ideal weight of about 3.5 kilograms (a period of about two years). These fish are sold under the brand name "Ibusuki Nanohana Kanpachi."

Ibusuki Nanohana is distinguished by its ecologically friendly farming style. Typically, farm-raised fish are overfed to fatten them, and the resulting waste and uneaten food can pollute the ocean environment. The fisheries of Yamagawa Bay soften the ecological impact by adding microorganisms to the feed that help break it down. They

also feed their fish only three times a week to reduce the amount of uneaten food.
Kanpachi produced this way are said to taste fresher and less fishy.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

指宿の美味：海の幸

指宿市は九州の南岸に位置し、熱帯から黒潮が流れ込む豊かな漁場である。市内に5つある漁港では、底引き網、刺し網、一本釣りなどの漁法で、年間約100種類の魚が水揚げされている。さらに、山川湾のような水深の深い港では、年間平均70トンの魚が養殖されている。このような多様性と豊富さの組み合わせが指宿を魚介類の名産地にしているのだが、本枯節と菜の花カンパチという2つの特産品がある。

本枯節

鰹節は日本料理に欠かせない食材である。多くの日本料理の要となるだし汁を作るのに使用され、豆腐からたこ焼きまで、あらゆる料理に加えられる。

鰹節を作る工程は長く、手間がかかる。まずカツオを切り身にし、煮込み用のカゴに丁寧に並べる。その後、90度以上の温度で数時間煮込み、身を硬くし、うま味成分を閉じ込める。次に、それぞれの切り身を手作業で骨抜きし、数週間かけて燻製と冷却を繰り返す。この工程で魚は乾燥し、有害な細菌が繁殖するのを防ぐ。最初は柔らかい切り身だった魚は、荒節と呼ばれる黒ずんだ岩のように硬い切り身になり、フレーク状に削って調理する準備が整う。

日本では、荒節のやや酸味のある味が好まれる地域もあるが、さらにひと手間加えることで、まろやかで複雑な味わいになる。荒節に有益な菌をつけ、天日で干すと外側が発酵し、香りが和らぎ、うまみが増す。発酵後の魚は枯節と呼ばれる。

指宿では特に本枯節と呼ばれる高級な枯節を生産しており、この枯節は発酵と乾燥の工程を4回まで繰り返すことで、さらに味に深みが出る。荒節は約20日、枯節は約2ヶ月かかるが、本枯節は半年もかかる。日本で使われる本枯節の約7割は指宿産である。

いぶすき菜の花かんぱち

カンパチは身の締まった白身魚で、寿司や刺身でよく食べられる。天然物のカンパチもあるが、日本で食されるカンパチのほとんどは養殖物である。日本では年間約24,000トンが生産される。

湾の形と特徴が天然の港を作り出し、その穏やかな海は養殖に適している。長く湾曲した岬が天然の防波堤として機能し、ほぼ垂直の堤防は急な波が立つような浅瀬を残さない。波の浸食や土

砂の堆積によってできた港とは異なり、山川湾はマグマが地下水と接触した際に形成された。その結果大きなクレーターが形成され、後に崩壊して海水で満たされ、自然に保護された湾を形成した。

現在、深く穏やかな海には100近い網かごがあり、約37万匹のカンパチが養殖されている。春に捕獲された野生の稚魚は、理想的な体重である約3.5kgになるまで約2年間飼育される。これらのカンパチは、"いぶすき菜の花かんぱち"というブランド名で販売されている。

指宿菜の花は、環境に配慮した養殖方法で知られている。通常、養殖魚は太らせるために餌を与えすぎ、食べ残した餌（および食べ残し）が海洋環境を汚染する可能性がある。山川の養殖場では、飼料に分解を助ける微生物を加えることで、その影響を減らしている。魚に与える餌は週に3回だけである。こうして生産されたカンパチは、より新鮮で生臭くないと言われている。

【タイトル】 指宿の食文化② サツマイモ/指宿のサツマイモ

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Delicacies of Ibusuki: Sweet Potatoes

Sweet potatoes arrived in Japan about 400 years ago. They were brought to Kagoshima from the Ryukyu Kingdom (now Okinawa), where they had been imported from China. The high-calorie, mineral-rich root vegetables arrived by several different routes, but an Ibusuki sailor and fisherman named Maeda Riemon (d. 1719) is often credited with popularizing them in Japan. Japan endured several famines in the eighteenth and nineteenth centuries, but Kagoshima's sweet potatoes saved the local population from starvation, making Maeda a local hero. Today, several monuments and a shrine are dedicated to his memory.

The loose, volcanic soil of Kagoshima is ideal for growing sweet potatoes, which thrive with good drainage and warm weather. Today, the prefecture is the foremost producer of sweet potatoes in Japan, and many are grown in Ibusuki. The spuds are used in many traditional local dishes, such as sweet potato mochi (*karaimo nettabo*) and julienned sweet potatoes deep-fried in batter (*gane*). They are also used to make *shōchū*, a Japanese spirit. There are six *shōchū* distilleries in Ibusuki, and their products are served at restaurants all around town, where they are traditionally mixed with hot water to enhance the alcohol's natural aroma.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

指宿の美味：さつまいも

サツマイモが日本に伝来したのは約400年前。中国から輸入されたサツマイモは、琉球王国（現在の沖縄）から鹿児島に到着した。高カロリーでミネラル豊富な根菜であるサツマイモはいくつかの

ルートで伝わったが、指宿の船乗りであり漁師であった前田利右衛門（1,719年没）が、を広めたとされている。サツマイモは鹿児島の大飢饉に欠かせない作物であり、前田利右衛門は多くの記念碑や神社まである、地元で愛される人物となった。

鹿児島のゆるやかな火山性土壌はサツマイモの栽培に適しており、水はけと温暖な気候がサツマイモの生育に適している。現在、鹿児島県は日本一のサツマイモの産地であり、指宿でも多くのサツマイモが栽培されている。サツマイモは、千切りにしたサツマイモを衣で揚げたガネや、サツマイモ餅（からいもねたぼう）など、多くの伝統的な郷土料理に使われている。また、サツマイモは焼酎の主原料でもある。指宿には6つの焼酎蒸留所があり、焼酎は町中のレストランで提供されている。伝統的にお湯で割ってアルコールの自然な香りを引き立たせている。

【タイトル】 指宿の食文化③ その他

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Delicacies of Ibusuki: Okra

Ibusuki is Japan's largest producer of okra, which is grown at nearly 1,200 farms in the area. Okra is a relatively new crop, having been introduced to Japan at the end of the 1800s, when it arrived from Africa via China. Even then, it was not widely cultivated until after World War II (1939–1945). In 1946, a local sailor encountered okra in Sumatra and brought some home to Ibusuki, as did a trainee at the Kagoshima Agricultural Research Station. The two budding okra farmers subsequently exchanged seeds, developed hybrid cultivars, and promoted okra, firmly establishing Ibusuki as the okra capital of Japan.

Ibusuki okra farmers now use greenhouses to extend the growing season from February to October, producing more than 3,000 metric tons each year. The city promotes an eco-friendly farming practice in which insects are used to naturally manage crop-damaging aphids. Farmers plant sorghum alongside the okra to attract ladybugs, which eat the aphids. In this way, farmers can harness natural predation to reduce the presence of pests without relying on pesticides.

Okra is best enjoyed fresh. When in season, it is served throughout Ibusuki in sandwiches, on pizza, and in traditional Japanese cuisine, such as tempura.

Delicacies of Ibusuki: Yamagawa Pickles

Ibusuki's Yamagawa district is known for *yamagawa-zuke*, a variety of pickled daikon radish that has been made for hundreds of years. The exact origin of the dish is unknown, but it was first recorded in the cargo manifest of a Shimazu-family warship

that sailed in 1592.

Making *yamagawa-zuke* pickles can take as long as half a year. First, freshly harvested daikon radishes are hung to cure in the dry winter wind. After about a month, the long roots are flexible enough to tie in knots. The dried radishes are pounded with a wooden mortar and pestle, first with seawater and then with salt, and then left to ferment in large earthenware jars for several months. The final product is a salty-sweet pickle with a mild crunch that is often served in thin slices.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

指宿の美味：おくら

指宿では1,200軒近い農家でオクラが栽培されており、日本最大のオクラの産地である。オクラが日本に伝わったのは、アフリカから中国を経由して1800年代末のこと。それでも広く栽培されるようになったのは、第二次世界大戦後（1939～1945年）のことだ。1946年、スマトラ島でオクラを試した地元の漁師が指宿に持ち帰り、鹿児島県農業試験場の研修生も同様に、オクラを持ち帰った。その後、2人のオクラ農家は種子を交換し、交配品種を開発し、オクラの普及に努め、指宿は日本のオクラの主要産地として確固たる地位を築いた。

現在、同市では毎年3,000トン以上のオクラを生産しており、ハウスを利用して栽培期間を2月から10月まで延長している。同市はまた、作物に害を与えるアブラムシを昆虫で自然に駆除するという、環境に優しい農業も推進している。農家はオクラと一緒にソルガムを植え、アブラムシを食べてくれるテントウムシを呼び寄せる。こうすることで、農家は農薬を使わずに自然の捕食を利用して害虫の発生を抑えることができる。

オクラは新鮮なうちに食べるのが一番だ。旬の時期には、天ぷらなどの伝統的な日本料理にも、サンドイッチやピザにも、指宿のいたるところで提供される。

指宿の美味：山川漬

指宿の山川地区は、何百年も前から作られている独特の大根の漬物、山川漬で知られている。正確な起源は不明だが、1592年に出航した島津家の軍艦の積荷目録に初めて記録されている。

山川漬を作るには最大で半年もかかる。まず、収穫したての大根を吊るして冬の乾燥した風の中で熟成させる。約1ヵ月後、長い根は結び目ができるほどしなやかになる。干した大根を木製のすり鉢とすりこぎでたたき、まず海水で、次に塩で、叩く。叩いた大根は大きな陶器の壺に入れられ、数

ヶ月間発酵させられる。完成品は、塩辛い甘みがあり、まろやかな歯ごたえで、薄くスライスして提供されることが多い。

【タイトル】 長崎鼻/長崎鼻

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Cape Nagasakibana in Legend and Life

Cape Nagasakibana is a hook of land that reaches out into the Pacific Ocean at the southernmost end of the Satsuma Peninsula. The site is said to be the birthplace of Urashima Tarō, a character from Japanese folklore who travels to an undersea palace on the back of a sea turtle.

The cape's association with the turtle-riding hero Urashima Tarō is supported by the loggerhead sea turtles that gather to breed on the beaches at the western foot of the cape. Between May and August, the turtles come ashore to lay their eggs in the sand. The cape is also the location of Ryūgū Jinja Shrine, which resembles the undersea Ryūgū Palace from the legend.

The princess of Ryūgū Palace is Toyotama-hime, a sea goddess who is enshrined at Ryūgū Jinja Shrine. Urashima Tarō marries Toyotama-hime in some versions of the legend, and the shrine has become a popular place to pray for success in love. Visitors to the shrine write their wishes on seashells, and shells inscribed with hopeful prayers are piled around the main hall and a nearby statue of Urashima Tarō.

Cape Nagasaki is popular with nature lovers, who come to explore the tide pools that have formed in the lava flows at the southern reaches of the cape. The pools support several species of tropical fish and coral that were carried up from the southern hemisphere on the Kuroshio Current. The area is also home to plentiful sago palms, a living fossil largely unchanged since the Mesozoic Era (251.9 million to 66 million years ago).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

長崎鼻の伝説

薩摩半島の最南端、太平洋に突き出すように湾曲した岬が長崎鼻だ。ウミガメの背中に乗って海底宮殿に行くという日本民話の登場人物、浦島太郎が生まれた場所とされている。

浦島太郎と岬の関係は、岬の西麓の砂浜で繁殖するアカウミガメによって支えられている。ウミガメは5月から8月にかけて上陸し、砂浜に産卵する。岬には龍宮神社があり、伝説に登場する海底の龍宮を彷彿とさせる。

龍宮城の姫は龍宮神社に祀られている海の女神、豊玉姫である。浦島太郎が豊玉姫と結婚する伝説もあり、その後、龍宮神社は恋愛成就を祈願する人気のスポットとなった。この神社を訪れる参拝者は貝殻に願い事を書く。本殿の周りや近くの浦島太郎像の周りには、希望に満ちた祈りが刻まれた貝殻が積まれている。

長崎岬の南端にある溶岩流の中にできた潮だまりを探検しに、自然愛好家たちがやってくる。黒潮に乗って南半球から運ばれてきた熱帯魚やサンゴが生息している。また、中生代（2億5190万年前から6600万年前）からほとんど変わっていない生きた化石であるソテツの群生地でもある。

038-010

Living with Hot Springs Underfoot in Unagi Onsen

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 鰻温泉/鰻温泉

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Living with Hot Springs Underfoot in Unagi Onsen

The secluded mountain village of Unagi Onsen sits on the steep banks of Lake Unagi. The lake formed about 5,700 years ago, when a volcanic crater collapsed, and Unagi Onsen continues to be a literal hotbed of volcanic activity: Scalding steam rises from volcanic vents, its roads are hot enough to melt tires, and spring water bubbles to the surface at 88.8 degrees Celsius. A visit to Unagi Onsen is a unique experience of rural culture and the power of natural phenomena.

A small community has formed around this ever-present geothermal heat. Many homes have private steam vents, called *sume*, that residents use for cooking. Ingredients such as eggs, meat, and vegetables are placed in baskets over the scalding-hot steam, which cooks them in minutes. Visitors can cook their own food at a common-use *sume* in the town square.

Residents of Unagi Onsen make frequent use of the hot springs. Rather than bathe at home, many residents visit a public bath called Segodon Yukari no Yu, or “Segodon’s Spring.” The name refers to Saigō Takamori (1828–1877), a nineteenth-century samurai and folk hero who is affectionately known as “Segodon.” He stayed in Unagi Onsen in 1874 and reportedly loved his accommodations so much that he offered one of his 13 hunting dogs to the owner in gratitude. Stone statues representing the individual dogs dot the town at points of interest.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鰻温泉

人里離れた山間の村、鰻温泉は鰻池の急斜面に位置している。この湖は約5700年前に火山の噴火口が崩れてできたもので、うなぎ温泉は文字通り火山活動の温床であり続けている。火山の噴出口からは灼熱の蒸気が立ち上り、道路はタイヤが溶けるほど熱く、88.8℃の源泉が湧き出している。鰻温泉を訪れることは、田舎の文化と自然現象の力を感じるユニークな体験です。

この地熱を中心に小さなコミュニティが形成されている。多くの家には「スメ」と呼ばれる専用の蒸気口があり、住民はそれを調理に使っている。卵、肉、野菜などをかごに入れて灼熱の蒸気の上に置くと、数分で調理される。観光客も町の広場にある共用スメで調理をすることができる。

鰻温泉の住民は、温泉を頻繁に利用している。多くの住民は自宅で入浴するよりも、「せごどんの湯」と呼ばれる共同浴場を利用する。この名前は、「せごどん」の愛称で親しまれている西郷隆盛（1827-1877）にちなんでいる。彼は1874年にうなぎ温泉に滞在し、宿をととても気に入ったので、感謝の気持ちを込めて13匹の狩猟犬のうちの1匹を宿の主人に送ったと伝えられている。町の名所には、それぞれの犬をかたどった石像が点在している。

038-011

Ancient Stories in Modern Ibusuki (Part 1 of 2)

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 指宿の伝説①/浦島太郎、山幸彦・海幸彦

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Ancient Stories in Modern Ibusuki (Part 1 of 2)

In the Shinto tradition, Kyushu is the birthplace of Japan, a region where the divine touches the mundane. Many places on the island, including Ibusuki, appear in ancient legends and folktales that have been passed down for centuries. Here are a few of those popular tales.

Urashima Tarō

The tale of Urashima Tarō is a widely known children's story whose protagonist first appeared in writing in 720. Tarō stops a group of children from tormenting a sea turtle, and the grateful turtle takes Tarō to a palace under the sea, where he meets the princess Otohime. At first, Tarō enjoys life at the palace, but eventually he becomes homesick. A saddened Otohime agrees to let him return to land, giving him a treasure chest (*tamatebako*) to take with him. She warns Tarō that he must never open it. When Tarō returns to his village, he realizes that his few days beneath the waves had been hundreds of years on shore. Distressed, he opens the *tamatebako*, which releases a puff of smoke that transforms Tarō into an old man.

Ibusuki is said to be the birthplace of Urashima Tarō, and canny references to the tale are common. For example, the Ibusuki no Tamatebako sightseeing train, named after Tarō's treasure chest, is lavishly appointed with outward-facing chairs (and children's picture books). This reference to the legendary treasure chest is shared by Tamatebako Onsen, a seaside hot spring resort with views of Mt. Takayama.

Yamasachi-Hiko and Umisachi-Hiko

Another tale of undersea adventure is the story of the feuding brothers Yamasachi-hiko and Umisachi-hiko. The story was first recorded in the *Kojiki* (Record of Ancient Matters), a seminal collection of traditional legends and myths compiled in 712.

The tale concerns two brothers who each have a rare talent. Yamasachi-hiko is a great hunter, and his brother is a skilled fisherman. One day, Yamasachi-hiko suggests swapping tools, but he soon loses his brother's prized fishing hook. In search of the hook, he travels to the undersea palace of the sea god, where he falls in love with the god's daughter, Toyotama-hime. Yamasachi-hiko asks the sea god for help finding his brother's hook, and all the fish in the ocean are called to help with the search. Ultimately, the hook is discovered in the mouth of a sea bream. As a parting gift, the sea god bestows Yamasachi-hiko with orbs that control the tides, and he triumphantly heads back to land to return his brother's property. However, Umisachi-hiko is still angry. He refuses to accept the hook and starts a fight instead. Yamasachi-hiko uses the orbs to call the tide, nearly drowning his brother, who finally relents.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

現代の指宿に伝わる昔話 前編

神道の伝統では、九州は日本発祥の地であり、神の領域が俗世間に触れる場所である。指宿を含む島の多くの場所は、何世紀にもわたって語り継がれてきた古代の伝説や民話に登場する。ここでは、現代都市での生活に関連する人気の物語をいくつか紹介しよう。

浦島太郎

浦島太郎の物語は広く親しまれている童話で、その主人公が初めて文章に登場するのは720年のことである。一般的な現代版では、太郎がウミガメをいじめる子供たちを止め、感謝したウミガメは太郎を海底の宮殿に連れて行き、そこで乙姫と出会う。感謝したウミガメは太郎を海底の宮殿に連れて行き、そこで乙姫と出会う。最初は宮殿での生活を楽しんでいた太郎だったが、やがてホームシックにかかる。悲しんだ乙姫は、太郎を陸に帰すことに同意し、宝箱（玉手箱）を与える。しかし彼女は、決して開けてはならないと太郎に忠告する。太郎は波の下で数日過ごすつもりだったが、村に戻ると何百年もいなかったことに気づく。悩んで玉手箱を開けると、煙が立ちのぼり、太郎は老人に変身してしまう。

浦島太郎生誕の地といわれる指宿には、現在、この物語にまつわる資料が数多く残されている。指宿の観光列車「指宿の玉手箱」には、外向きの椅子（と絵本）が贅沢に置かれている。また、

高山を望む海辺の温泉地、玉手箱温泉にも、浦島太郎にまつわるものが数多くある。

山幸彦と海幸彦

もうひとつの海底冒険譚は、確執のあった山幸彦と海幸彦の兄弟の物語である。この物語は、712年に出版された伝統的な伝説や神話を集めた重要な文献である『古事記』に初めて記録されている。

この物語は、それぞれに稀有な才能を持つ二人の兄弟にまつわるものだ。山幸彦は優れた猟師であり、弟は腕利きの漁師である。ある日、山幸彦は道具の交換を提案し、弟の釣り針をなくしてしまふ。釣り針を探して、山幸彦は海神の海底宮殿に行き、そこで海神の娘、豊玉姫と恋に落ちる。彼は海神に弟の釣り針を探す助けを求め、海中のすべての魚が搜索に協力するよう呼びかけられる。最終的に、鯛の口に釣り針が刺さっているのが発見される。海神は山幸彦に餞別として潮を操る球を授け、山幸彦は弟の財産を返すために陸に戻る。しかし、海幸彦はまだ怒っている。彼は釣り針を受け取ることを拒否し、代わりに戦いを始めた。山幸彦は球を使って潮を呼び、弟を溺れさせそうになったが、最終的に弟があきらめた。

【タイトル】 指宿の伝説②/開聞岳と金峰山

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Ancient Stories in Modern Ibusuki (Part 2 of 2)

Many folktales seek to explain aspects of the natural world in familiar terms by giving human traits to mountains, lakes, and other natural landmarks. Ibusuki has many such stories, particularly relating to its tallest mountain, Mt. Kaimondake.

Feisty Mt. Kaimondake

As an active volcano, Mt. Kaimondake is often portrayed as a hothead. There are many tales of Mt. Kaimondake picking fights with other mountains.

One tale recounts a battle between Mt. Kaimondake and Mt. Kinpōzan (literally, “Golden Peak”), to the north. Mt. Kaimondake supposedly had gold on its slopes, for which it received the nickname “Gold-Covered Mountain” (Kinjōsan). Furious at no longer being the only “golden mountain,” Mt. Kinpōzan threw clods of silvergrass at Mt. Kaimondake, which retaliated by throwing a burning log at Mt. Kinpōzan. The resulting forest fire ended the fight in Mt. Kaimondake’s favor. However, silvergrass still grows on its peak.

Another tale describes the mountain’s brawl with the island of Satsuma Iwo Jima, to the south. The story does not record how the fight begins, but its outcome is the same: an exchange of missiles. A hammer lobbed by Iwo Jima is said to have raised a lump on Mt. Kaimondake’s seaward slope that is still there today. Meanwhile, Mt. Kaimondake hurled burning straw at Iwo Jima, starting fires that are said to explain the island’s volcanic smoke.

現代の指宿に伝わる昔話 後編

多くの民話は自然界の様相を身近な言葉で説明しようとしており、山や湖などの名所に人間のような動機があるように描写されることが多い。指宿にはそのような話が多く、特に最も高い山である開聞岳にまつわるものが多い。

気性の荒い開聞岳

開聞岳は活火山であり、気性の激しい山として描かれることが多い。開聞岳が他の山々とけんかをするという話は数多くある。

その一つに開聞岳とその北にある金峰山との戦いにまつわる話がある。開聞岳の斜面には金があり、「金城山」と呼ばれていた。唯一の「黄金の山」でなくなったことに激怒した金峰山は、ススキの塊を開聞岳に投げつけ、開聞岳は燃える丸太を投げ返した。その結果、山火事が起こり、開聞岳の勝利として戦いは終わった。しかし、その影響で開聞岳の山頂には今でもすすきが生えている。

別の言い伝えでは、南の硫黄島との山同士のけんかについて語られている。戦いがどのように始まったかはもう書かれていないが、その結果は同じで、ミサイルの応酬である。硫黄島が投げたハンマーが、開聞岳の海側の斜面にこぶを作ったと言われている。一方、開聞岳は燃える藁を硫黄島に投げつけ、火事を起こした。これが硫黄島の火山煙の正体であると言われている。

038-013

Yamagawa Port: Unassuming Center of Trade, Culture, and Politics

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 山川港/山川港

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Yamagawa Port: Unassuming Center of Trade, Culture, and Politics

Yamagawa Port is a small cove at the mouth of Kagoshima Bay, where local ferries dock and hundreds of metric tons of fish are farmed each year. Despite its modest size, the port's location on the southern tip of Kagoshima and its unique geology have made it an important site for trade, culture, and politics for centuries.

Yamagawa Bay is sheltered by a spit of sandy land that gently curves around the inlet like an arm. This sandbar prevents large waves from entering the harbor, ensuring calm waters even in stormy weather. The bay reaches about 2 kilometers inland, and its coast drops off sharply, allowing large ships to dock at the small port.

These fortuitous conditions were created by an underground explosion some 5,700 years ago. The explosion was caused when magma came into contact with groundwater, producing superheated steam and extreme pressure. The resulting blast left a broad crater. Such craters, called “maars,” usually fill with rain and groundwater to become lakes; here, however, the eastern wall collapsed, allowing seawater to rush in and form Yamagawa Bay.

Historically, this safe harbor has played a significant role in trade, culture, and politics, particularly during the Edo period (1603–1867). From the 1100s to 1868, Satsuma domain (now Kagoshima) was ruled by the Shimazu family. They established Yamagawa Bay as a port for sea trade with the Ryukyu Kingdom (now Okinawa), China, and beyond. These trade routes allowed them to import not only goods but also

medical, scientific, and technical knowledge.

In 1546, the Portuguese merchant Jorge Álvares landed at the port of Yamagawa. He was one of the first Europeans to visit Japan. Álvares spent half a year in the area, recording his observations in a log entitled *Report on Japanese Matters*, which was commissioned by the Jesuit missionary Francis Xavier (1506–1552). Encouraged by the report, Xavier led the first Christian mission to Japan in 1549.

By the 1630s, the ruling Tokugawa shogunate had grown wary of foreign influences, especially Christian missionaries. Over the following decade, shogun Tokugawa Iemitsu (1604–1651) expelled the missionaries and all other foreigners, closing the doors to trade and diplomacy. Yamagawa Port remained open to trade with the Ryukyu Islands, a rare liberty that further enriched and empowered the Shimazu family.

By the mid-1800s, Japan's isolationist policies had begun to erode as foreign powers pressured the country to reopen. Yamagawa Port shifted from trade to defense. Local officials monitored the entrance to Kagoshima Bay for foreign ships, using signal fires to alert the Shimazu in Kagoshima.

Japan was eventually forced to open its borders, kicking off a wave of Westernization in the final decades of the nineteenth century. In 1930, a shipyard was founded at Yamagawa Port, and cargo ships and ferries were built there for nearly 70 years.

At the same time, fishing was becoming the port's primary industry. The Kuroshio Current flows past the bay, carrying rich fish stocks with diverse species from the tropics. The bonito brought by these waters inspired a manufacturer of dried bonito flakes (an essential ingredient in Japanese cooking) to set up shop at Yamagawa Port in 1909. Today, Yamagawa Port is Japan's top producer of *hongarebushi*, a high-end variety of bonito flakes.

The port is also home to a thriving aquaculture industry. Each year, roughly 370,000 greater amberjack (*kanpachi*) are farmed in approximately 100 net cages. The fish are

farmed using eco-friendly practices to protect the environment at this historic port.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山川港：貿易と政治の中心地

山川港は鹿児島湾の入り江にある小さな港で、地元のフェリーが停泊し、毎年何百トンもの魚が養殖されている。規模は小さいが、鹿児島の南端に位置し、ユニークな地質であることから、何百年もの間、貿易、文化、政治にとって重要な場所となってきた。

鹿児島湾は、入り江を腕のように緩やかに湾曲する砂州によって守られている。この砂州は大きな波が港に入るのを防ぎ、荒天でも穏やかな海を確保する。湾は内陸約2キロにまで達しており、海岸は急激に落ち込んでいるため、その比較的小規模なサイズからは想像できないほど大型船の停泊が可能である。

このような好条件は、約5700年前の地下爆発によってもたらされた。地表の地下でマグマが地下水と接触し、過熱された蒸気と高圧が生じ、爆発が起こったのだ。その結果、広いクレーターを残した。このようにして形成されたクレーターは "マール" と呼ばれる。このようなクレーターは通常、雨や地下水で満たされて湖になるが、この場合は東側の壁が崩れ、海水が押し寄せて山川湾が形成された。

歴史上、この安全な港は、特に江戸時代（1603年～1867年）に、貿易、文化、政治において重要な役割を果たした。1100年代から1868年まで、薩摩藩（現在の鹿児島）は島津家によって統治されていた。山川湾は、琉球王国（現在の沖縄）や中国などの海上貿易のための港を彼らに与えた。これらの航路は、物資だけでなく、医学、科学、技術的知識も輸入することを可能にした。

1546年、ポルトガルの商人ジョルジェ・アルヴァレス（生没年不詳）が山川港に上陸した。彼は日本を訪れた最初のヨーロッパ人の一人である。アルヴァレスはこの地で半年を過ごし、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエル(1506-1552)の依頼で、『日本事情報告書』と題する航海日誌に観察結果を記録した。この報告書に勇気づけられたザビエルは、1549年に日本にキリスト教宣教師団を初めて派遣した。

1630年代には、徳川幕府は外国からの影響を警戒するようになっていた。将軍徳川家光（1604-1651）はその後10年間で、宣教師をはじめとするすべての外国人を追放し、貿易と外交の門戸を閉ざした。山川港は琉球諸島との貿易に開かれたままであり、その自由は島津家を豊かにし、権力を強めることになった。

1800年代半ばになると、外国からの圧力により、日本の鎖国政策は徐々に弱まっていった。山川港は貿易から防衛へとシフトした。地元の役人たちは、鹿児島湾の入り口に外国船が来ないか監視し、狼煙を使って島津家に知らせた。

やがて日本は開国を余儀なくされ、19世紀最後の数十年間、西洋化の波が押し寄せた。1930年、山川港に製鉄所と造船所が設立され、70年近くにわたって貨物船やフェリーが建造された。

同時に、漁業が港の主要産業となった。湾内を流れる黒潮は、熱帯から多様な魚種を運んでくる。1909年、山川港に鰹節メーカーが進出した。鰹節は日本料理に欠かせない食材である。現在、山川港は日本一の本枯節生産地である。鰹節の高級品である。

この港は活気ある水産養殖業の拠点でもある。毎年、約100の網かごで約37万尾のカンパチが養殖されている。この歴史的な港の環境を守るため、環境に配慮した方法で魚が養殖されている。

【タイトル】 指宿の歴史/宮ヶ浜

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Miyagahama: Origins of Modern Ibusuki

Humans have lived in the area around Ibusuki since at least the Jōmon period (10,000–300 BCE). Early inhabitants established both roaming hunter-gatherer societies and small villages. The modern city of Ibusuki itself, however, was the product of a natural catastrophe that occurred in 874.

That year, Mt. Kaimondake erupted calamitously, burying villages across the southern peninsula in ash and debris. Survivors gathered in the area around Miyagahama Beach, in northern Ibusuki, which remained relatively unscathed. Many of the refugees settled there, and a community developed.

From the 1100s to the late 1400s, the area was governed by the Ibusuki family, a branch of the powerful Satsuma family, which ruled much of Kyushu. The Ibusuki built their castle and seat of power near Miyagahama, turning it into a bustling port town.

The waters at Miyagahama are shallow, however, with no safe way to anchor close to shore. Larger ships were forced to anchor offshore and ferry goods to land in smaller boats. Without proper infrastructure, it was difficult to prevent smuggling. In 1833, the lord of Satsuma ordered the construction of a 230-meter-long, 5-meter-high breakwater, which was built of volcanic rock in a single year. The breakwater, called Gangishi, helped calm the waters of the bay and provided offshore mooring for larger boats. The structure has since been designated a Tangible Cultural Property of Japan.

With this infrastructure, the area remained a key trading port through the end of the Edo period (1603–1867). As Japan modernized, the evolving machinery of politics, education, and commerce was concentrated in the former castle town, and it remains a central part of modern-day Ibusuki. Many nineteenth- and twentieth-century structures still stand in the area, including several Tangible Cultural Properties of Japan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

宮ヶ浜：指宿発祥の地

少なくとも縄文時代（紀元前10,000年～紀元前300年）から、人類は現在の指宿市周辺に住んでいた。この地域の初期の住民は、歩き回る狩猟採集社会と小さな集落を築いていた。しかし、現在の指宿市そのものは、874年の大災害の産物である。

その年、半島南端の開聞岳が噴火し、半島全域の村々が火山灰と瓦礫に埋もれた。生存者は被害が少なかった指宿市北部の宮ヶ浜に集まり、やがて集落が形成された。

1100年代から1400年代後半まで、この地域は、かつて現在の九州の大部分を支配していた有力な薩摩家の分家である指宿家によって統治されていた。指宿氏は宮ヶ浜の近くに権力の座を築き、賑やかな港町に変えた。

しかし、宮ヶ浜の水深は浅く、岸近くに安全に停泊できる場所はない。大型船は沖合に停泊し、小さな船で陸まで物資を運ぶしかなかった。適切なインフラが整っていないため、密輸を防ぐことは困難だった。1833年、薩摩藩主は長さ230メートル、高さ5メートルの防波堤の建設を命じた。防波堤は火山岩で築かれ、1年で完成した。雁岸と呼ばれるこの防波堤は、湾の水を穏やかにし、大型船の沖合係留を可能にした。この建造物は現在も残っており、国の登録有形文化財に指定されている。

こうしたインフラを背景に、この地域は江戸時代(1603-1867)のおわりまで重要な貿易港であり続けた。日本の近代化とともに、政治、教育、経済の発展機構はかつての城下町に集約され、現代の指宿の中心的存在となっている。19世紀から20世紀にかけての建造物が数多く残っており、その中には国の登録有形文化財も含まれている。

【タイトル】 指宿の地形/-

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Living with Volcanoes

Volcanic activity has shaped the region of Southern Kyushu, creating both dangers and benefits for its people. Volcanic forces heat the area's many hot springs, enrich the soil, and create beautiful crater lakes and gemstone-speckled beaches. On the other hand, the area's residents must deal with occasional ashfall and the ever-present risk of a major eruption.

Ibusuki is located in one of the most volcanically active areas in the world. The island of Kyushu sits on a subduction zone where the Philippine Sea plate is being gradually pushed under the Eurasian plate. The resulting friction, together with heat from the Earth's core, melt the bedrock into magma. Magma is lighter than solid rock, so it rises, creating mountainous bulges in the Earth's crust and, occasionally, bursting through as a volcanic eruption.

Ibusuki sits largely within the Ata Caldera, a basin formed by one such eruption about 40,000 years ago. Since then, volcanic activity has continued to mold the landscape, pushing up smaller volcanoes that collapsed and formed caldera lakes, including Lake Ikeda. This caldera basin is dotted with a string of active volcanoes, the tallest of which is Mt. Kaimondake (924 m).

Mt. Kaimondake, a basalt stratovolcano capped by an andesite lava dome, was formed about 4,400 years ago. The soil record shows that it has erupted at least 12 times in the past, most recently in 885. Interestingly, each layer of ash laid down by its eruptions has a different hue, including yellow, blue, and purple, depending on the content of the

pyroclastic material. When considered together with historical records, the ash strata make it possible to date archaeological sites with extreme accuracy.

The eruptions of Mt. Kaimondake have left their mark on Ibusuki. In addition to altering the landscape, each volcanic event displaced people by burying settlements or driving their inhabitants away. This ultimately led to the development of a modern city on the opposite side of the peninsula. Other effects are more subtle: The sand of Kawashiri Beach, for example, contains the yellow-green crystals of olivine ejected from the volcano some 3,700 years ago.

Mt. Sakurajima, near the city of Kagoshima, is the most active volcano in the area. It regularly emits smoke and belches clouds of ash. Depending on the direction of the wind, this can bring ashfall all the way to Ibusuki, a distance of about 36 kilometers.

For Kagoshima's roughly 1.5 million residents, the double-edged sword of living and working within sight of an active volcano is a fact of life. Despite the dangers, the presence of a thriving urban community so close to Mt. Sakurajima is a testament to the benefits volcanoes can provide.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

火山との暮らし

火山活動は南九州地域を形成し、人々に危険と恩恵をもたらしてきた。火山の力は、この地域の多くの温泉を温め、土壌を豊かにし、美しい火口湖や宝石が散りばめられたビーチを作り出す。その一方で、この地域の住民は、時折降る火山灰や、常に存在する大噴火のリスクに対処しなければならない。

指宿は、世界で最も火山活動が活発な位置している。九州はフィリピンプレートがユーラシアプレートの下に押し込まれている沈み込み帯に位置している。プレートの摩擦と地球のコアからの熱によって、岩盤が溶けてマグマになる。マグマは固体の岩石よりも軽く、上昇し、地殻に山のようなふくらみを作り、時には火山噴火として地表に噴出する。

指宿は、その大部分が約4万年前の噴火によって形成された盆地、阿多カルデラの中にある。それ以来、火山活動は地形を形成し続け、小さな火山は押し上げられ、崩壊して池田湖やうなぎ湖

のようなカルデラ湖を形成した。カルデラ盆地には活火山が点在し、その中で最も高いのが開聞岳（924m）である。

開聞岳は約4,400年前に形成された玄武岩の成層火山で、頂上は安山岩の溶岩ドームに覆われている。土壌の記録によると、過去に少なくとも12回噴火しており、最も新しい噴火は885年である。興味深いことに、噴火によって敷き詰められた火山灰の層は、火砕物の含有量によって黄色、青色、紫色など、それぞれ異なる色をしている。火山灰の地層を歴史的な記録と併用することで、考古学的な遺跡の年代を極めて正確に測定することが可能になる。

開聞岳の噴火は、現代の指宿にもその痕跡を残している。地形が形成されただけでなく、火山の噴火のたびに集落が埋もれたり、住民が追い出されたりして、人々の移動に拍車がかかった。その結果、半島の対岸に近代都市が形成されたのである。また、よりわずかな影響もある。例えば、川尻海岸の砂には、約3700年前に火山から放出された黄緑色の結晶が含まれている。

鹿児島市の近くにある桜島は、この地域で最も活発な火山である。定期的に噴煙を上げ、火山灰を降らせる。風向きによっては、約36キロ離れた指宿市まで降灰することもある。

鹿児島市の人口約150万人にとって、活火山を目の前にして生活し、仕事をするという諸刃の剣は現実の生活の一部となっている。危険は伴うが、桜島火山の近くに活気のある都市が存在していることは、火山がもたらす豊かさの証でもある。

【タイトル】 西郷隆盛と指宿/西郷隆盛と指宿

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Saigō Takamori: Folk Hero of Kagoshima

Saigō Takamori (1828–1877) was one of the most influential samurai in Japanese history. He helped overthrow the Tokugawa shogunate and restore imperial rule, ushering in the Meiji Restoration of 1868. He is beloved across Japan as a symbol of samurai virtue and strength, particularly in his birthplace of Kagoshima, where he is affectionately known as “Segodon.”

Segodon spent a lot of time in Ibusuki, and connections to his life can be found throughout the area. He often stayed at Unagi Onsen, the hot spring village near Lake Unagi. A statue carved from local Yamagawa stone portraying Segodon and one of his many hunting dogs stands in the community. In central Ibusuki, a museum of local art and history called the Satsuma Denshōkan has many items connected to Segodon, including his watch and woodblock prints of his famous battles. Hikers on Mt. Kaimondake, his preferred hunting ground, can walk in the leader’s proverbial footsteps.

Visitors to Ibusuki are likely to see Segodon’s bushy eyebrows and brawny wrestler’s physique portrayed in everything from dignified bronzes to cartoonish keychains, evidence of Kagoshima’s pride in its hometown hero.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西郷隆盛：鹿児島英雄

西郷隆盛（1828-1877）は、日本史上最も影響力のある武士の1人である。彼は徳川幕府の転覆と皇室の復活を助け、1868年の明治維新の幕開けとなった。西郷隆盛は、武士の美德と強さの象徴として日本中で愛されており、特に生まれ故郷の鹿児島では「せごどん」の愛称で親しまれている。

せごどんは指宿で多くの時間を過ごした。せごどんは、うなぎ温泉（うなぎ池近くの温泉郷）によく滞在した。彼が好んだ宿の近くには、地元の山川石で彫られたせごどんと狩猟犬の像が立っている。指宿の中心部にある郷土資料館「薩摩伝承館」には、せごどんの腕時計や有名な合戦の錦絵など、せごどんゆかりの品が数多く展示されている。彼が好んだ狩猟地である開聞岳では、ハイキングを楽しむ人々が、かの有名な西郷の足跡をたどることができる。

指宿を訪れると、せごどんのふさふさした眉毛や屈強な力士の体格を、威厳のあるブロンズ像から漫画のようなキーホルダーまで、さまざまな形で目にすることができる。鹿児島の郷土愛と誇りの表れである。

038-017

Hirakiki Jinja Shrine

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 牧聞神社/牧聞神社

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Hirakiki Jinja Shrine

Hirakiki Jinja Shrine sits at the base of Mt. Kaimondake, sheltered under the sprawling arms of ancient camphor trees. It enshrines the deity of the mountain, and hikers often stop there to pray for safety before heading for the trailhead.

Records indicate the shrine was likely established by imperial decree in 708. In addition to its long history, the shrine is known for its brightly painted vermilion structures. In the Shinto tradition, red represents a burning force capable of warding off evil spirits and other calamities.

One unique feature of the shrine is the main hall's Dragon Pillar. This support column in the inner shrine is elaborately carved and painted to look like a dragon. It was commissioned by the head of the ruling Shimazu family in 1786 in preparation for his forty-second birthday. A man's forty-second year is thought to be unlucky in Japan, and his gift to the shrine was a way to avert disaster through a virtuous deed.

At the center of the grounds is another elaborately painted structure called the envoy hall (*chokushiden*), where imperial envoys made ritual offerings. Beneath the undulating gables of the roof, the eaves are painted with delicate chrysanthemums that indicate the shrine's connection to the imperial family. There are also paintings of elephants with golden tusks and fierce lion dogs (*shishi*), as well as less common images, such as daikon radishes, which are auspicious symbols in their own right.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

枚聞神社

開聞岳の麓、クスノキの古木が茂る中に鎮座する枚聞神社。山の神が祀られており、ハイカーたちは登山口に向かう前にしばしばここで安全を祈願する。

記録によれば、この神社は708年に勅願によって創建されたようだ。長い歴史に加えて、この神社は朱塗りの鮮やかな建造物で知られている。神道の伝統では、赤は邪気やその他の災難を払うことができる燃える力を表す。

この神社のひとつの特徴は、本殿の龍柱である。内拝殿にあるこの支柱には、精巧な彫刻が施され、龍に見立てた絵が描かれている。これは1786年、島津家の当主が四十二歳の誕生日を迎えるにあたって注文したものである。日本では四十二歳は不吉とされており、神社への寄進は徳を積むことで災難を避けるという意味があった。

境内の中心には、勅使殿と呼ばれる精巧な彩色を施した建物がある。勅使殿は、勅使が儀式の供物をささげる場所だった。屋根の波打つ破風の下、軒には繊細な菊の花が描かれている。また、金色の牙を持つ象や獰猛な獅子、大根などの縁起の良い絵も描かれている。

【タイトル】 第二次世界大戦関連の施設/第二次世界大戦関連の施設

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

World War II Sites in Ibusuki

As a major port in southern Japan, Ibusuki was the location of multiple military training facilities during World War II (1939–1945). Today, Ibusuki is connected to the wartime era by remnants of wartime infrastructure and memorials to the lives lost.

Former Ibusuki Naval Air Base and Monument of Grief

Following a devastating loss at the Battle of Midway in 1942, Japan began to use seaplanes to supplement its dwindling reserves of carrier-based aircraft. Most combat seaplanes were transferred to Ibusuki in 1943, with the construction of the Ibusuki Naval Air Base. In 1945, the units began kamikaze training. At the Battle of Okinawa, in March of that same year, 82 young men were sent on suicide missions in dilapidated training planes. None returned. The Naval Air Base itself was destroyed by an air raid in early May, less than two months later.

The former site of the base is now the Monument of Grief, a memorial to the lives of the pilots and other personnel killed in the kamikaze missions and air raid. Rows of stone lanterns lead through a grove of pine trees to a small hill that conceals the remnants of an air raid shelter. Atop the hill is a statue of Kannon, the Buddhist bodhisattva of compassion, and a monument listing the names of the dead. A nearby northbound road leads to Tara Beach, where joggers run laps along the water that once served as a runway for the base's seaplanes.

North of the beach, opposite Chiringashima's famous sandbar, is a concrete boat ramp that was used by the Imperial Navy's 106th Shinyō Attack Squadron. Shinyō were

small plywood motorboats packed with hundreds of kilograms of explosives. Like kamikaze planes, they were used in suicide attacks on enemy ships.

Hanazebōhi Memorial Park

Japan invaded the Philippines on December 8, 1941. Japanese forces occupied parts of the country until 1944, battling a coalition of Filipino and American soldiers and, later, against guerrilla resistance. More than 1,000,000 people are estimated to have died during those bloody years of conflict. This includes soldiers from Kagoshima, many of them conscripted youths, whose remains were never recovered.

In 1966, bereaved families and survivors founded Hanazebōhi Memorial Park. It is located on a promontory in Ibusuki that points toward the Philippines, some 1,900 kilometers away. A team of experts was dispatched to former battlefields in the Philippines to search for the bodies of Japanese soldiers. The remains of 4,147 individuals were repatriated and interred at Hanazebōhi, which has become the symbolic gravesite for the Japanese personnel who died in the conflict. Every March 27, a memorial service is held at the park.

The park's solemn atmosphere invites quiet contemplation about the cost of war and the value of peace. Its grassy grounds are dotted with 190 stone memorial lanterns, many of which are engraved with the names and hometowns of fallen soldiers. An evocative statue by sculptor Nakamura Shinya (b. 1926) depicts a woman and child gazing across the water, yearning for the return of a loved one who will never come home. A large bell hanging in a nearby pagoda was donated in the hope that its deep peal would echo across the ocean and bring comfort to all those who died in the conflict.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

第二次世界大戦関連の史跡

指宿は日本南部の主要な港として、第二次世界大戦（1939-1945）中には複数の軍事訓練施設が置かれていた。現在、指宿には戦時中のインフラの遺構や戦没者を追悼する記念碑が残されており、戦争の時代とのつながりを伝えている。

旧指宿海軍航空基地と慰霊碑

1942年のミッドウェー海戦で壊滅的な敗北を喫した後、日本は減少しつつあった空母艦載機の数を、水上機の使用を拡大することで補った。1943年には、戦闘水上機部隊のほとんどがそこに移送され、指宿海軍航空基地が建設された。。1945年には、部隊は特攻隊の訓練を開始した。同年3月の沖縄戦では、82人の若者が老朽化した練習機で特攻隊に送られた。帰ってきた者は一人もいなかった。その2ヵ月足らず後の5月初旬、この基地は空襲で破壊された。

現在、基地の跡地には、神風特攻隊や空襲で命を落としたパイロットや関係者の慰霊碑「悲嘆の碑」が建てられている。松林の中を石灯籠が並び、小さな丘への続いている。その丘には空襲避難壕の後が残っている。丘の上には慈悲の観音像と戦没者の名前を記した石碑がある。近くの北上道路はタラ・ビーチに通じており、かつては基地の水上飛行機の滑走路として使われていた海沿いを、今はジョギングをする人たちが何周も走っている。

ビーチの北側、知林ヶ島の有名な砂州の反対側には、帝国海軍第106震洋特攻隊が使用していたコンクリート製の船用スロープがある。震洋とは、数百キロの爆薬を詰めた小型の合板性モーターボートである。神風特攻隊と同様に、敵艦への体当たり攻撃に使用された。

花瀬望比公園

日本は1941年12月8日にフィリピンに侵攻した。日本軍は1944年までフィリピンの一部を占領し、フィピン兵とアメリカ兵の連合軍と、後にはゲリラの抵抗と絶えず戦った。その血なまぐさい数年間の紛争で、100万人以上が亡くなったと推定されている。その中には鹿児島出身の兵士も含まれており、その多くは徴兵された若者で、遺骨は回収されなかった。

1966年、遺族や生存者の協力によって花瀬望比公園が設立された。約1,900キロ離れたフィリピンを望む指宿の岬にある。日本兵の遺体を探すため、専門家チームがフィリピンの戦跡に派遣された。4,147人の遺骨が引き渡され、花瀬に埋葬された。花瀬望比公園は、紛争で亡くなった日本人兵士の象徴的な墓地となっている。毎年3月27日には慰霊祭が行われる。

公園の厳粛な雰囲気は、戦争の代償と平和の価値について考えられる。芝生の敷地内には190基の慰霊灯籠が点在し、その多くには犠牲者の名前と出身地が刻まれている。また、有名な彫刻家である中村晋也（1926年生まれ）による印象的な像は、水辺にたたずみ決して戻ってこない愛する人の帰還を待ち望む母子を描いている。近くの塔に吊るされた大きな鐘は、その深い音色が海を越えて響き渡り、紛争で亡くなったすべての人々に慰めをもたらすことを願って寄贈された。

【タイトル】 製塩/製塩

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

A History of Salt Making in Ibusuki

In an era of salt packets and low-sodium potato chips, it is easy to forget that salt is a vital nutrient and a staple ingredient in food cultures across the globe. In Japan, as in countless civilizations throughout history, salt has held huge economic, cultural, and historical importance.

Japan lacks the natural rock salt or salt flats that have provided salt in other regions of the world. Despite this, Japan has produced salt for about 3,000 years. The earliest method is thought to have used a simple cone-shaped earthenware vessel filled with a mixture of seawater and salt collected from seaweed fronds. The water would be boiled off, leaving the salt adhered to the inside of the vessel, which was easy to store and transport. Remnants of these vessels have been found at several archaeological sites in Kagoshima. Over time, superior methods of collecting salt were developed, enabling salt production on an ever-larger scale.

In Ibusuki, historical records indicate two villages with salt industries that date to the Edo period (1603–1867) or earlier. These villages used a salt pan method, in which buckets of seawater were poured onto stretches of sand. The seawater evaporated in the sun, becoming a highly concentrated salt brine that could be collected with large rakes. The brine was then boiled in an iron vat to cook off the remaining moisture, leaving the salt.

Prior to modern industrial salt production, salt commanded both economic and political power. To boost domestic salt production, additional salt fields were created

using reclaimed land. They took the form of large salt pans that would naturally flood at high tide, replenishing the stock of seawater. Three such large-scale land reclamation projects were carried out by 1830, indicating the sheer value of salt at the time.

With the outbreak of the Russo-Japanese War in 1904, the Japanese government established a monopoly on salt to fund the war effort, and private production was no longer allowed. To foster the newly state-run industry, the government promoted the development of more efficient salt production methods.

In Ibusuki, where abundant hot springs are a source of plentiful heat, a researcher named Kurokawa Eiji began to explore whether geothermal energy could be used for salt production. In 1922, he was able to establish a reliable method. During World War II (1939–1945), salt imports decreased, and the government monopoly was lifted in 1942. Small-scale production was again permitted, and the hot-spring-based method spread. A small factory built in Yamagawa, near Fushime Beach, operated until 1964. Its buildings no longer survive, but the salt fields have been preserved as a testament to this unconventional salt-making process.

By the 1960s, industrialization had reached the salt manufacturing industry. A new method took advantage of the relationship between air pressure and the boiling point by evaporating salt brine in a low-pressure vacuum tank. This was found to use far less energy than other industrial methods, and a factory modeled on this vacuum process was opened in 1959.

These rapid advances in salt production technology led to a nationwide surplus, and the government tightened its monopoly once again. Small-scale salt manufacturers were forced to close, including in Ibusuki, where salt factories were shuttered in 1964. The government monopoly on salt production was maintained until 1997, but salt producers in Ibusuki are bouncing back, once again harvesting the life-giving mineral from the abundant seas.

指宿 製塩の歴史

塩分控えめのポテトチップスや減塩の食卓塩が普及した現代では、塩が人間の生存に必要な重要な栄養素であることを忘れがちだ。日本にとっても、歴史上無数の文明がそうであったように、塩は経済的、文化的、歴史的に非常に重要なものであった。

日本には、他の地域で塩を供給してきた天然の岩塩や塩田がない。にもかかわらず、日本では約3000年前から塩が作られてきた。最も初期の方法は、海水と海藻の葉から採取した塩を混ぜたものを入れた円錐形のシンプルな土器に入れ、煮詰めていくというものであったと考えられている。土器の内側に潮が残るので、保存や運搬が容易だった。鹿児島へのいくつかの遺跡から、このような容器の名残が見つかる。やがて、より優れた塩の採取方法が開発され、塩の生産はますます大規模になっていった。

指宿には、少なくとも江戸時代（1603年～1867年）までさかのぼる塩業を営んでいた村が2つある。これらの村では、海水をバケツで運び、平らな砂の上に注ぐ塩田法が用いられていた。海水は天日で蒸発し、高濃度の塩水となる。それを大きな熊手で集める。塩水は鉄の桶で煮沸され、残った水分が飛ばされて塩が残る。

近代的な工業的製塩が導入される以前は、塩は経済的にも政治的にも大きな影響力を持っていた。国内の塩生産量を増やすため、埋め立て地を利用して新たな塩田が作られた。それらは満潮時に海水が自然に流入する大きな塩田の形をしており、海水のストックを補充していた。1830年までに3つの大規模な埋め立て事業が実施され、当時の塩の価値の高さを示している。

1904年に日露戦争が勃発すると、日本政府は戦費調達のために塩の専売制を敷き、民間の生産は認められなくなった。新たに国営となった塩業を育成するため、政府はより効率的な製塩法の開発を推進した。

豊富な温泉が豊富な熱源である指宿で、黒川英治(〇〇-〇〇)が地熱を製塩に利用できないかと研究を始めた。1922年、彼は確実な方法を確認することができた。第二次世界大戦中（1939年～1945年）、塩の輸入は減少し、日本は1942年に塩の専売制を廃止した。小規模生産が再び認められ、指宿でも温泉製塩法が広まった。山川に建てられた小さな工場は1964年まで操業していた。その建物はもう残っていないが、塩田はこの型破りな製塩法の証として保存されている。

1960年代には、製塩業界にも工業化の波が押し寄せてきた。新しい製法では、減圧した真空タンクで塩水を蒸発させることで、気圧と沸点の関係を利用した。この製法は他の工業的な方法よりもはるかに少ないエネルギーで済むことがわかり、1959年、この真空プロセスをモデルにした工場が

オープンした。

こうした製塩技術の急速な進歩は、全国的な余剰をもたらした。政府は再び独占を強化した。指宿を含む小規模の製塩会社は廃業に追い込まれ、1964年、指宿の工場は閉鎖された。

政府による塩の生産独占は1997年まで続いたが、指宿の塩生産者たちは盛り返し、再び豊かな海から生命を育むミネラルを採取している。

038-020

Tiny Tokara, Kagoshima's Native Horses

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】トカラ馬/トカラ馬

【想定媒体】アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Tiny Tokara, Kagoshima's Native Horses

Tokara horses are a rare and endangered breed of diminutive Japanese horses native to Kagoshima Prefecture, where they are designated a Natural Monument.

Japan has eight native horse breeds. All eight breeds originated with horses brought from the Asian mainland, possibly beginning as early as the fourth century. Each breed is associated with a particular region of the country, and the name “Tokara” comes from the Tokara Archipelago, a small, isolated group of islands about 300 kilometers off the Kagoshima coast. Horses were brought to the islands around 1900 and eventually developed into a distinct breed. Tokara horses are similar in size to prehistoric horses, averaging only 114.5 centimeters (or about 11.25 hands) in height and weighing an average of 198 kilograms. Their coats and manes are typically dark brown.

Tokara horses used to be numerous on the Tokara islands, where they were used as draft animals for hauling firewood and pressing sugarcane. They were nearly wiped out during World War II (1939–1945), and by the 1960s, only 32 horses remained. Several of them were relocated to sites on mainland Kagoshima for protection and breeding. Today, there are about 100 Tokara horses. A herd of them lives at Kaimon-Sanroku Nature Park, in Ibusuki, where they roam freely during the day and return to a paddock at night.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

トカラ馬

トカラ馬は鹿児島に生息する小型の日本馬で、絶滅の危機に瀕している希少種である。鹿児島県では天然記念物に指定されている。

日本には8種類の在来馬がいる。8つの品種はすべて、アジア大陸から持ち込まれた馬を起源としており、その歴史は古く、4世紀ごろから始まったと言われている。それぞれの品種は、日本の特定の地域に関連している。「トカラ」という名前は、鹿児島県沖約300キロに浮かぶトカラ列島に由来する。トカラ列島には1900年頃に馬が持ち込まれ、やがて独特の品種に発展した。トカラ馬の平均的な体高は114.5センチ、体重は198キロである。毛色は一般的に暗褐色である。

トカラ馬はかつて島々に数多く生息し、薪を運んだりサトウキビを搾ったりするための家畜として使われていた。しかし、第二次世界大戦（1939～1945年）でほぼ全滅した。1960年代までに島に残ったのはわずか32頭だった。数頭は保護と繁殖のために鹿児島本土に移された。現在、トカラ馬は約100頭いる。指宿市では、開聞山麓自然公園にトカラ馬の群れが住み、昼間は自由に歩き回り、夜は囲いの中に戻る。

038-021

Lake Ikeda's Cryptic Creatures and Colorful Cosmos

指宿市観光・経済戦略会議

【タイトル】 池田湖/池田湖

【想定媒体】 アプリ/QRコード

できあがった英語解説文

Lake Ikeda's Cryptic Creatures and Colorful Cosmos

Lake Ikeda is Kyushu's largest caldera lake. Its deep waters are inhabited by a protected species of giant eel and, according to legend, a giant monster named Issie.

The lake was formed by a series of volcanic eruptions about 5,700 years ago. These eruptions created a crater that filled with fresh water, eventually forming a lake about 15 kilometers in circumference with a maximum depth of 233 meters. According to local lore, these waters are home to mysterious creatures. Stories about a dragon god living in Lake Ikeda date to the early 1800s. In the mid-1900s, people began claiming to have witnessed a large, dark beast swim across the lake at high speed. The creature was given the name "Issie" as a nod to Loch Ness's famous cryptid, Nessie.

No dragons, serpents, nor any definitive proof of Issie has ever been found, but Lake Ikeda is undeniably home to one kind of monster: giant mottled eels (*Anguilla marmorata*). These tropical eels can reach 1.8 meters in length and weigh up to 20 kilograms. As the largest eel species in Japan, they have been designated a Natural Monument by the city of Ibusuki.

Lake Ikeda is a popular spot for outdoor activities, including watersports, jogging, cycling, and (for cryptid lovers) monster hunting. Colorful flowers, including cosmos, poppies, pansies, sunflowers, and begonias, grow year-round along the shore. In January, naturalists and photographers come to Ibusuki to see the fields of rapeseed flowers that create a yellow carpet around Lake Ikeda.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

池田湖

池田湖は九州最大のカルデラ湖である。その深海には天然記念物のオオウナギが生息し、伝説によればイッシーと呼ばれる巨大な怪物がいるという。

この湖は、約5700年前の一連の火山噴火によって形成された。この噴火によってできた深いクレーターは淡水で満たされ、やがて周囲約15キロ、最大水深233メートルの湖が形成された。地元の言い伝えによると、この水には不思議な生き物が住んでいるという。池田湖に住む龍神の話は1800年代初頭まで遡る。1900年代半ばになると、人々は黒くて大きな獣が高速で湖を泳いでいるのを目撃したと主張し始めた。その生き物は、ネス湖の有名な暗号生物ネッシーにちなんで「イッシー」と名付けられた。

池田湖では龍も蛇もイッシーの決定的な証拠も見つかっていないが、池田湖には紛れもなく生息しているモンスターがいる。それは巨大なうなぎである。この熱帯性のうなぎは体長1.8メートル、体重20キロにもなる。日本最大のウナギとして指宿市の天然記念物に指定されている。

池田湖は、ウォータースポーツ、ジョギング、サイクリング、そして怪獣狩り（怪獣好きにはたまらない）など、アウトドア・アクティビティに人気のスポットだ。湖畔にはコスモス、ポピー、パンジー、ひまわり、ベゴニアなど色とりどりの花が一年中咲いている。1月には、岸辺に黄色い絨毯を敷き詰めた菜の花畑を見るために、自然愛好家や写真家が指宿を訪れる。